

谷 村 城

— 甲府地方家庭裁判所都留支部新庁舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
第三二一集

谷
村
城

二
〇
一
七
・
三

東 山
京 梨
高 県
等 教
裁 育
判 委
員 裁
所 判
会 所
会

2017. 3

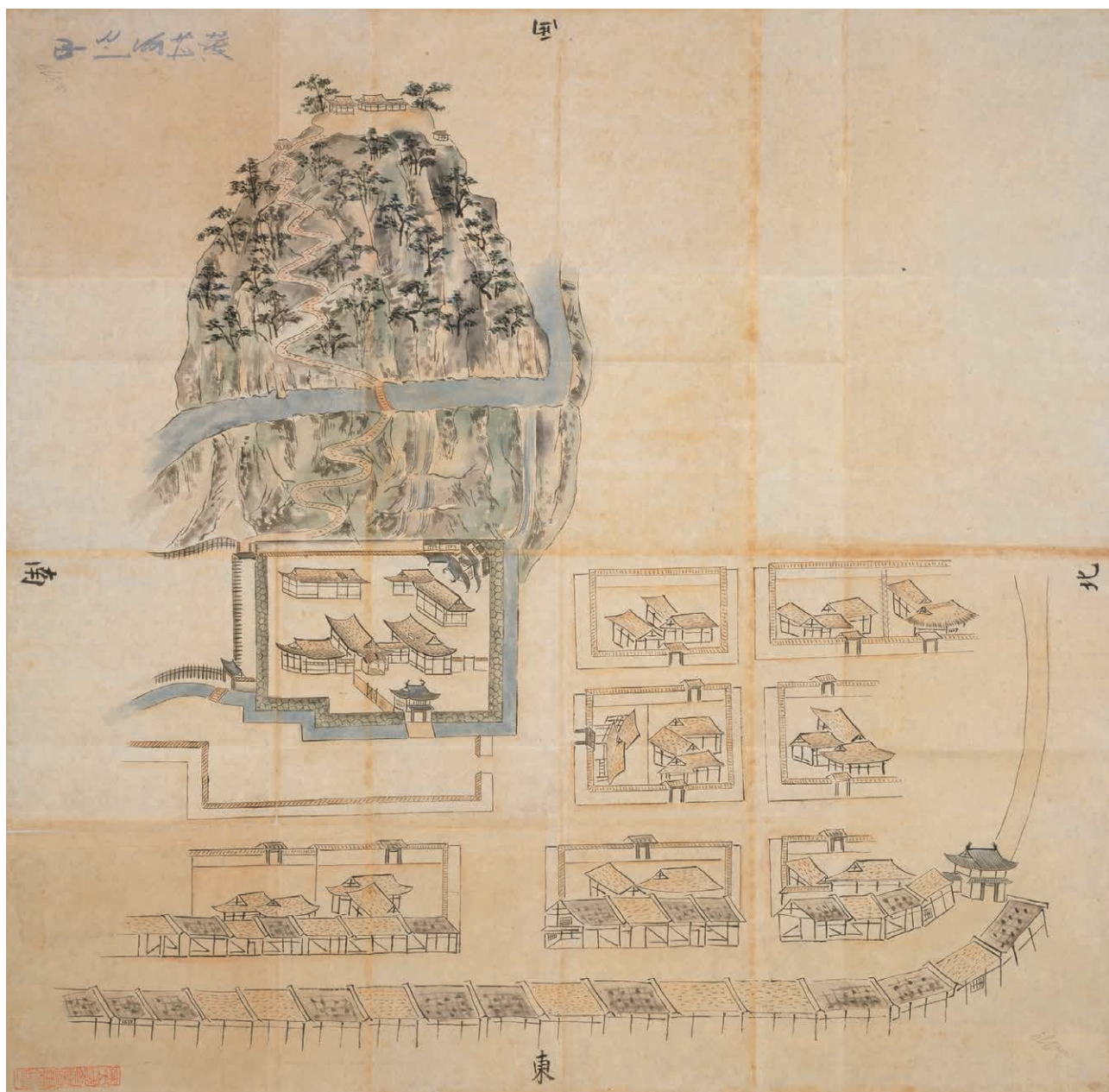
山梨県教育委員会
東京高等裁判所

谷 村 城

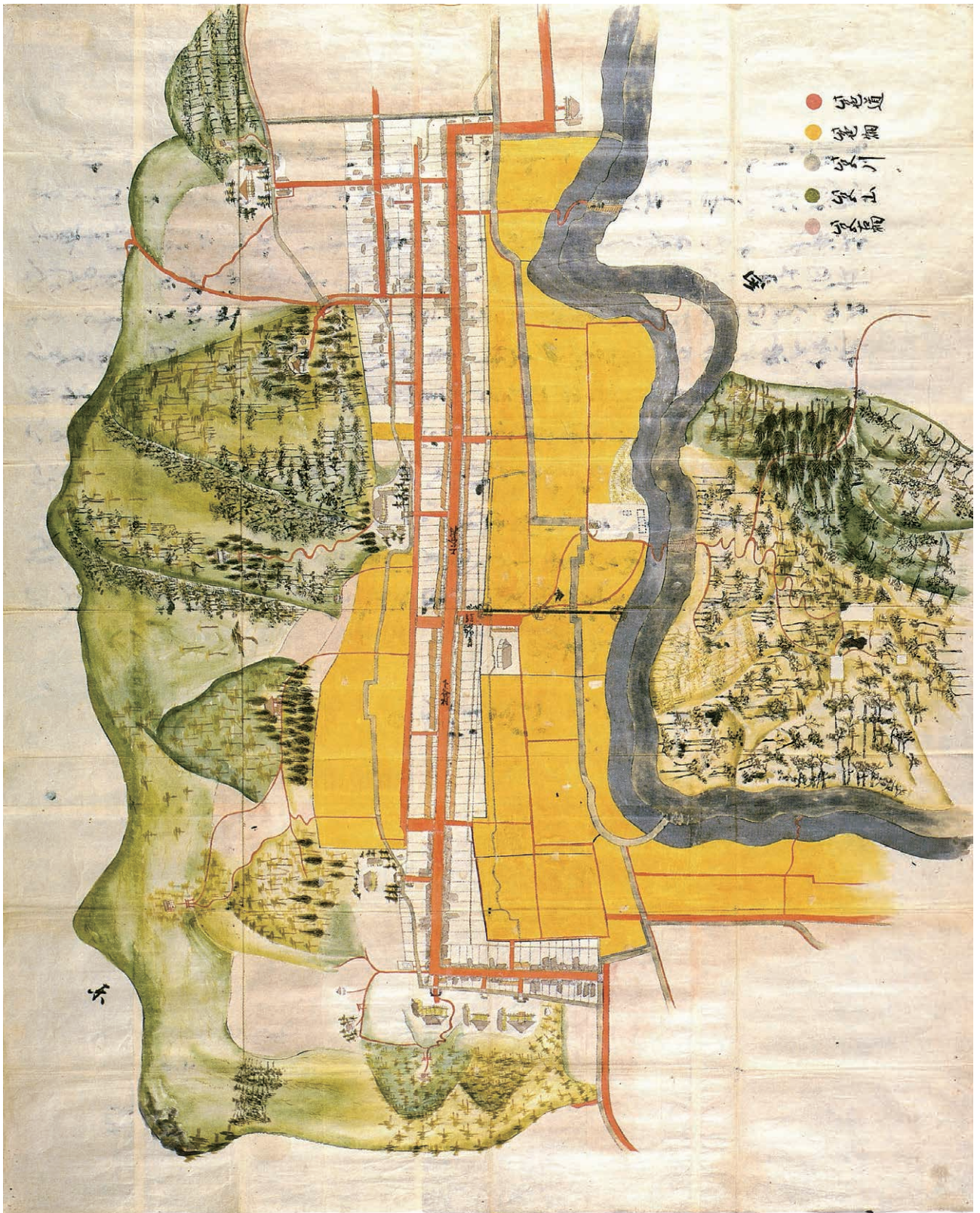
— 甲府地方家庭裁判所都留支部新庁舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2017. 3

山梨県教育委員会
東京高等裁判所



『甲州屋村城』(国立国会図書館蔵)



『城跡地割図』(小俣家蔵)



『下谷村屋敷割絵図』（ミュージアム都留蔵）



『谷村区裁判所』（ミュージアム都留・都留文科大学地域交流研究センター蔵）



谷村城の発掘調査成果

谷村城とは、鳥居氏・秋元氏が治めた谷村藩の居城であり、都留市役所や谷村第一小学校にあったのではないかと考えられています。発掘調査を行った場所は、谷村城下町にあたりますが、都留市役所周辺を中心市街地が「谷村城」と登録されています。

都留市中心市街地には谷村城下の土地区画が残されており、桂川の対岸には勝山城跡、街道沿いには寺院が点在しており、江戸時代の街並みを偲ぶことができます。

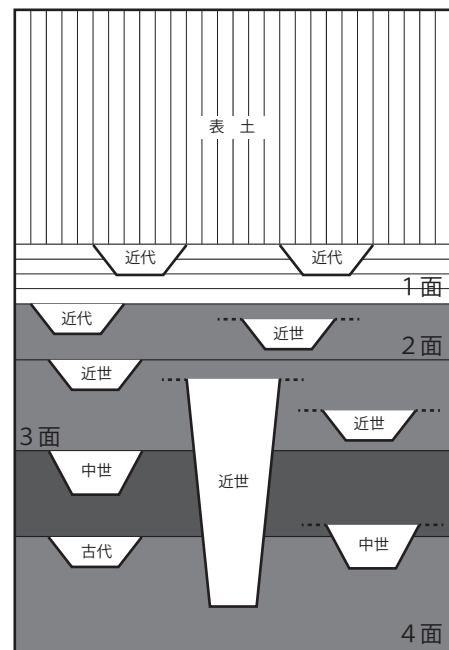
平成 26・27 年度に行われた発掘調査によって数多くの埋蔵文化財が出土しました。ここでは、その一端をご紹介します。





上の写真は、調査で出土した石畳状の遺構です。右隣の古写真は昭和初期に谷村区裁判所を撮影したのですが、裁判所の手前に石畳が写っています。石畳の遺構は現地表面から50cm掘り下げた位置で見つかりました。右の写真で分かるように、現在の生活面は大規模な盛土をした上にあるようです。

つまり、都留市の中心市街地には、江戸時代以前の生活面が残されているのです。



左上は、前の裁判所庁舎が建てられていた範囲を掘削し、昔の生活面を検討した際の写真です。中央には白い層が確認されますが、これは19世紀の谷村陣屋で使用されていた水路を埋めている土層です。この層の上下には黒い土層があり、黒色土層の上には黄褐色の土が観察されます。黄褐色土は、上段でご紹介した近代以降の埋土です。黒色土層からは、中世から近世までの多くの遺構が出土し、中世から近世に至るまで連続的に土地を利用したと考えられます。また、火山灰層を挟んだ下からは、古代と中世の遺構が発見されました。調査地点は長期間にわたり、人々が居住したと考えられます。

谷村城から出土した遺構・遺物

都留市には文献史料や絵図などが残されているため、様々な視点から考えることができます。考古・歴史資料の検討により12時期に変遷することが分かりました。

第1期 [縄文時代]

縄文時代中期の土器や石器が出土しました。

第2期 [奈良・平安時代]

奈良・平安時代の土師器や須恵器などが出土しました。また、柱穴の可能性のある遺構が見つっています。

第3期 [中世前期～中期]

遺物が出土しました。出土した和鏡はこの時期のものです。

第4期 [谷村館期]

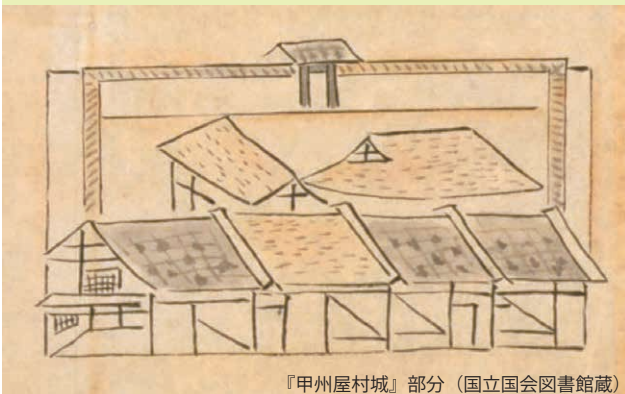
遺構や遺物が出土しました。谷村館が置かれていた時代に調査地にも居住していたと考えられます。

第5期 [初期城下期]

天正壬午の乱（徳川氏と後北条氏との争乱）から関が原の戦いまでの時期にあたります。

第6期 [谷村城下町期（鳥居氏段階）]

鳥居成次、成行が治めた谷村藩の時代にあたります。遺構や遺物が出土しています。

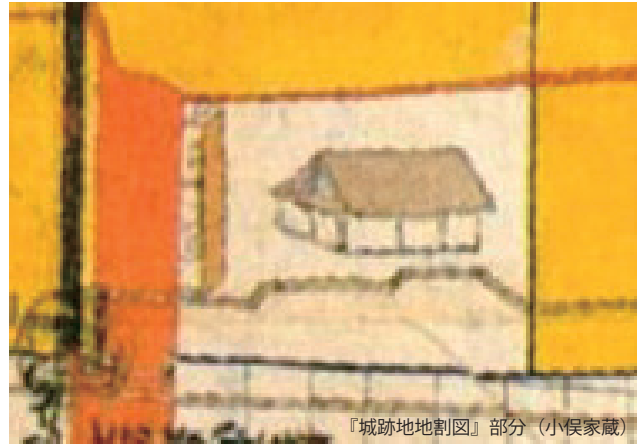


第7期 [谷村城下町期（秋元氏段階）]

秋元泰朝、富朝、喬知が治めた谷村藩の時代にあたります。秋元喬知の時代には、秋元氏家臣である高山甚五兵衛の屋敷として使われていました。この時代に用いられた水路が見つっています。

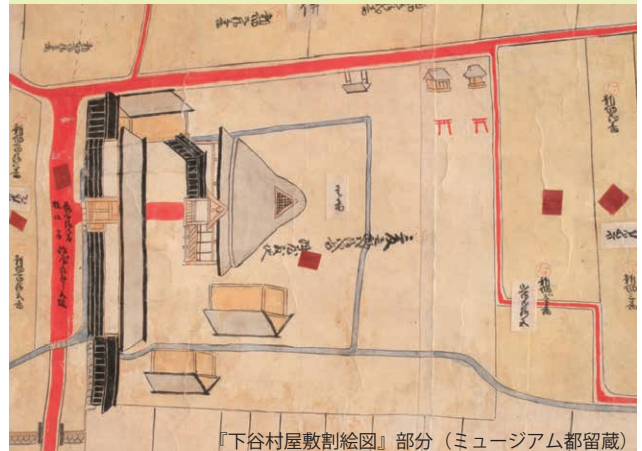
第8期 [谷村陣屋期（柳沢氏預地段階）]

柳沢氏家臣が年貢徴収を行った時代にあたります。この時期の遺物が出土しています。



第9期 [谷村陣屋期（18世紀段階）]

『城跡地割図（小俣家蔵）』には、折れ曲がった水路が描かれていますが、発掘調査でこの水路が見つかりました。他に建物の柱穴が見つっています。



第10期 [谷村陣屋期（19世紀段階）]

『下谷村屋敷割絵図』には、陣屋1軒・長屋3軒・祠2基・水路・西南門・北西門などが描かれていますが、地下室や水路、石組遺構など多くの遺構が出土しました。

第11期 [谷村出張所・裁判所期]

明治時代の遺構・遺物が出土しました。

第12期 [裁判所期]

大正時代以降の遺構・遺物が出土しました。瓦を大量に含む瓦溜は、関東大震災で破損した瓦を捨てたものと考えられます。



和鏡

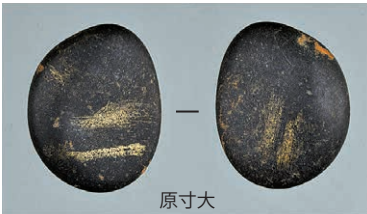
幕末から明治時代の生活面より出土しました。ただし、和鏡自体は室町時代に製作されたものと考えられます。2匹の鶴が描かれており、紐（ひもを通す部位）は亀の形をしております。調査地点周囲に伝えられたものかもしれません。

飾金具（武具）

棒状の武具の先端に取り付けられた金具です。武田菱が施されており、小山田氏に関連した資料である可能性があります。



原寸大



原寸大

金泥付碁石

長楕円形の石に金泥で漢数字「二」と書かれています。金泥の文字は表裏に確認できます。



原寸大

錘

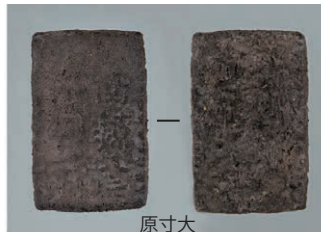
18世紀の谷村陣屋に設けられた水路から出土しました。棹秤の錘と考えられます。○に「信」という字が刻まれています。



原寸大

元文一分判金

元文元年（1736）に初鑄された金貨です。この金貨4枚で一両に該当します。



原寸大

文政南鐐二朱判銀

文政七年（1824）に初鑄された銀貨です。この銀貨8枚で一両に該当します。



鑄造関連資料

鉛のインゴットと共に、羽口・坩堝片・鑄型などが出土しました。この内の多くは谷村陣屋の時期に使用されたものです。



鉄砲弾

鉛製の銃弾で円形を呈するものが主ですが、椎の実形をしたルミエー銃の銃弾が出土しました。明治初期の銃兵が使用したものです。

序

本書は甲府地方家庭裁判所都留支部新庁舎建設に伴い実施した、都留市中央に位置する谷村城の調査成果をまとめた報告書です。都留市は長年にわたる発掘調査により、様々な時代の重要な遺構・遺物が発見されていますが、今回調査を行った都留市の中心市街地は大規模な発掘調査が行われたことはありませんでした。

今回、調査を行った場所は、裁判所の新庁舎が建設される範囲であり、4枚の遺構面が検出され、縄文時代から近代までの遺構・遺物が出土しました。その中でも、谷村館が置かれていた中世や鳥居氏・秋元氏が統治した近世の谷村城下町、幕府直轄領における谷村陣屋に係る様々な生活の痕跡が確認されたことは大きな成果と言えます。都留市には、様々な絵図が伝えられていますが、今回の調査によって絵図に描かれている遺構を見つけることができました。出土した遺物の中でも、金銀貨や錘は調査地点が山梨県東部地域の中心として、富が行き交う場所であったことを物語っており、室町時代の和鏡は長い歴史に育まれた「谷村」を証拠立てています。

調査の結果により、都留市の中心市街地にも貴重な歴史が埋蔵されていることが確認されました。今後、継続的な調査によって新たな歴史が明らかになることが期待されます。

最後に、調査にあたって御協力頂いた関係者、関係機関、調査・整理作業に従事された皆様方に厚く御礼を申し上げます。

2017年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 中山 誠二

例 言

1. 本書は、山梨県都留市二丁目1番1号他に所在する谷村城の発掘調査報告書である。
2. 調査は東京高等裁判所からの委託を山梨県教育委員会が受け、発掘調査・整理作業・報告書作成を山梨県埋蔵文化財センター（甲府市下曾根町所在）が担当した。
3. 発掘調査は平成26（2014）年8月4日から同年12月3日、平成27（2015）年4月24日から同年7月2日まで実施した。また、整理作業・報告書作成については、平成27（2015）年2月4日から平成28年（2016年）3月17日まで実施した。発掘調査・整理作業・報告書作成は、網倉邦生が担当した。
4. 本書の編集及び第I章から第IV章、第VI章の執筆は、網倉邦生が担当した。なお、第VII章において、平成28年10月10日に開催した第11回山梨県埋蔵文化財センターシンポジウム「甲斐の城下町を探る～谷村城、甲府城下町遺跡発掘調査を中心として～」の成果を基に検討を進めている。
5. 出土資料に係り、山梨県立博物館学芸員の植月学氏に動物遺体の同定、西願麻以氏に金属製品・ガラス製品の成分分析を依頼した。分析結果については、第V章に所収した。
6. 陶磁器の年代については、東京大学埋蔵文化財調査室の堀内秀樹氏に年代の比定を依頼した。
7. 本書に掲載した遺構写真及び作業風景写真は網倉邦生、熊谷晋祐、遺物写真は網倉邦生が撮影した。
8. 本書に掲載した空中写真撮影及び測量図化業務は株式会社テクノプランニングに委託し、撮影した。
9. 国土座標測量・グリッドポイント設定・基準標高測量は、株式会社ケイ・データエンジニアに委託した。
10. 出土遺構に係るデジタル写真トレース業務について、株式会社テクノプランニングに委託した。
11. 出土遺物（金属製品）の保存処理は帝京大学山梨文化財研究所に委託した。
12. 出土遺物（陶磁器ほか）の図化・トレースは株式会社テクノプランニング、出土遺物（金属製品）の図化・トレースは帝京大学山梨文化財研究所に委託した。
13. 本報告書に係る出土品及び記録図面・写真・出土遺物・デジタル化したデータ等は、一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
14. 調査にあたって、次の組織や方々にご指導及び協力を戴いた。記して謝意を表したい。
植月学（山梨県立博物館）、小俣聡、内川隆志（國學院大學博物館）、西願麻以（山梨県立博物館）、佐々木満（甲府市教育委員会）、鷹野義朗（甲府市教育委員会）、平野修（帝京大学山梨文化財研究所）、深澤太郎（國學院大學博物館）、堀内秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）、森屋雅幸（都留市教育委員会）、中野賢治（山梨県立博物館）、奈良泰史（健康科学大学特任教授）、都留市教育委員会、ミュージアム都留、山梨県立博物館
15. 調査体制は次の通りである。
調査主体 山梨県教育委員会
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
所 長 八巻與志夫（平成26年度） 出月洋文（平成27年度） 中山誠二（平成28年度）
次 長 出月洋文（平成26年度） 保坂康夫（平成27年度） 高野玄明（平成28年度）
調査課長 保坂康夫（平成26年度） 山本茂樹（平成27年度） 今福利恵（平成28年度）
発掘調査・整理報告担当 主査・文化財主事 網倉邦生、主幹・文化財主事 井上彰雄、
文化財主事 熊谷晋祐、非常勤嘱託 塩谷風季
作業員（五十音順）
発掘調査 雨宮信次、有賀国雄、上野美紀、大額照明、斧田文夫、小俣哲夫、小俣美明、小林重雄、
小林茂、清水信夫、下田亮子、鈴木英夫、高尾和美、高田悦三、田中奈津代、鶴巻典子、内藤敏夫、
二部奈々緒、渡辺崇、渡辺めぐみ、渡邊洋一
整理作業 新谷和美、石坂恵理、猪股順子、梶原初美、神田久美子、小池美保子、斉藤律子、阪本
國廣、佐藤あけみ、内藤敏夫、新津多恵、保坂理恵子

凡 例

1. 掲載した遺構図面の縮尺は原則として下記の通りである。

[遺構全体図] 遺跡位置図 1/10,000 1/25,000 立会調査地点位置図 1/500
グリッド設定図 1/500

[遺構微細図] 平面図 1/40 1/50 1/80 1/100 断面図・土層図 1/30 1/40 1/80

2. 遺構平面図の網目は次の通りである。

■ 焼土 ■ 炭化物 ■ 粘土

3. 土層注記にある「しまり」、「粘性」、「炭化物」について次の内容を記号で表記した。

・「しまり」 ◎ 堅くしまる ○ しまる △ しまりが弱い × しまりなし
・「粘性」 ◎ 粘性強 ○ 粘性あり △ 粘性弱 × 粘性なし
・「炭化物」 ◎ 多く含む ○ 含む △ わずかに含む × 含まない

4. 遺物分布図における遺物の表記は次の通りである。

○ 土器・陶磁器 ● 土製品 ▲ 金属製品 □ 石製品 ■ その他

5. 遺構図中の断面図脇にある数値は標高を示す。

6. 遺構一覧表では、遺構の長軸と短軸方向の大きさ及び深さを記載すると共に、遺構内から出土した遺物の年代をまとめた。なお、出土量の多寡に係らず、該当する年代の遺物が出土した場合にアミを施した。

7. 遺物実測図の縮尺は下記の通りである。

土器・陶磁器 1/3 土製品 1/2 1/3 瓦製品 1/3 石製品 1/2 1/3 1/6 1/10
1/15

金属製品 1/1 1/3 銭貨・金銀貨 1/2 ガラス製品 1/3 骨製品 1/3

8. 遺物実測図中の網目は次の通りである。

[平面図]

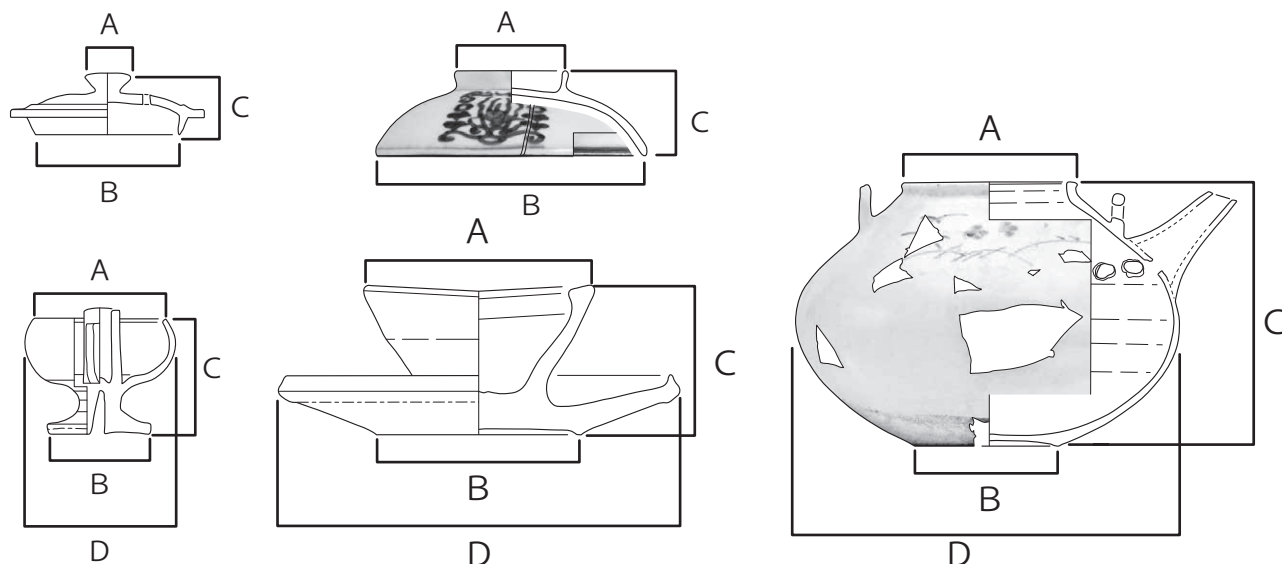
■ 煤範囲（土師質土器） ■ 鍍金範囲（金属製品）

[断面図]

■ 土器・陶磁器 ■ 須恵器

9. 遺構図・全体図などに示した方位(N)は国土座標による真北である。

10. 遺物観察表の作成にあたり、陶磁器についてはA(口径)・B(底径)・C(器高)、土製品・瓦製品・石製品・金属製品・銭貨・ガラス製品・骨製品などは最大長・最大幅・最大厚を計測した。ただし、陶磁器の内、蓋・土瓶・灯火具類については、次の位置を計測した。



本文目次

巻頭図版	第1節 調査の概要	18
谷村城の発掘調査成果	第2節 検出された遺構	18
序	1. 1面の遺構	18
例言	2. 2面の遺構	20
凡例	3. 3面の遺構	22
本文目次	4. 4面の遺構	30
図版目次・写真図版目次・表目次	第V章 理化学的分析	183
第I章 調査経緯と経過	第1節 谷村城から出土した動物遺体	183
第1節 調査に至る経緯	第2節 谷村城出土金属製品及び溶融資料の科学分析	202
第2節 調査経過	第3節 谷村城出土ガラス製ボトルの科学分析	206
1. 発掘調査の経過	第VI章 調査の成果と課題	208
2. 整理作業の経過	第1節 土地利用の変遷	208
3. 調査に係る事務手続き	1. 第1期 [縄文時代]	208
4. 立会調査の経過	2. 第2期 [奈良・平安時代]	208
第II章 地理的環境と歴史的環境	3. 第3期 [中世前期～中期]	209
第1節 地理的環境	4. 第4期 [谷村館期]	211
第2節 歴史的環境	5. 第5期 [初期城下期]	211
1. 埋蔵文化財包蔵地	6. 第6期 [谷村城下町期(鳥居氏段階)]	212
2. 調査地点周辺の中世史	7. 第7期 [谷村城下町期(秋元氏段階)]	213
3. 調査地点周辺の近世史	8. 第8期 [谷村陣屋期(柳沢氏預地段階)]	213
4. 調査地点周辺の近現代史	9. 第9期 [谷村陣屋期(18世紀段階)]	215
第III章 調査の方法と基本層位	10. 第10期 [谷村陣屋期(19世紀段階)]	216
第1節 発掘調査の方法	11. 第11期 [谷村出張所・裁判所期]	222
1. 調査区の規模	12. 第12期 [裁判所期]	223
2. 調査グリッドの設定	第2節 出土陶磁器・土器の編年	224
3. 表土層の除去	写真図版	239
4. 表土層除去後の調査	抄録	
第2節 基本層位		
第IV章 検出された遺構と遺物		

図版目次

巻頭図版1 参考資料『甲州屋村城』	第3図 調査区位置図	14
巻頭図版2 参考資料『城跡地割図』	第4図 グリッド設定図	15
巻頭図版3 参考資料『下谷村屋敷割絵図』	第5図 基本土層図(調査区東側)	17
巻頭図版4 参考資料『谷村区裁判所』	第6図 1面遺構図(1)	33
第1図 立会調査地点位置図	第7図 1面遺構図(2)	34
第2図 遺跡分布図	第8図 1面遺構図(3)	35

第9 図	1面遺構図(4)	36	第46 図	4面遺構図(9)	73
第10 図	1面遺構図(5)	37	第47 図	4面遺構図(10)	74
第11 図	1面遺構図(6)	38	第48 図	4面遺構図(11)	75
第12 図	2面遺構図(1)	39	第49 図	4面遺構図(12)	76
第13 図	2面遺構図(2)	40	第50 図	4面遺構図(13)	77
第14 図	2面遺構図(3)	41	第51 図	4面遺構図(14)	78
第15 図	2面遺構図(4)	42	第52 図	4面遺構図(15)	79
第16 図	2面遺構図(5)	43	第53 図	4面遺構図(16)	80
第17 図	2面遺構図(6)	44	第54 図	4面遺構図(17)	81
第18 図	2面遺構図(7)	45	第55 図	4面遺構図(18)	82
第19 図	3面遺構図(1)	46	第56 図	2面遺物分布図	83
第20 図	3面遺構図(2)	47	第57 図	3面遺物分布図(1)	84
第21 図	3面遺構図(3)	48	第58 図	3面遺物分布図(2)	85
第22 図	3面遺構図(4)	49	第59 図	3面遺物分布図(3)	86
第23 図	3面遺構図(5)	50	第60 図	3面遺物分布図(4)	87
第24 図	3面遺構図(6)	51	第61 図	3面遺物分布図(5)	88
第25 図	3面遺構図(7)	52	第62 図	3面遺物分布図(6)	89
第26 図	3面遺構図(8)	53	第63 図	4面遺物分布図(1)	90
第27 図	3面遺構図(9)	54	第64 図	4面遺物分布図(2)	91
第28 図	3面遺構図(10)	55	第65 図	時代別遺物分布図(1)	92
第29 図	3面遺構図(11)	56	第66 図	時代別遺物分布図(2)	93
第30 図	3面遺構図(12)	57	第67 図	遺構外重要遺物分布図	94
第31 図	3面遺構図(13)	58	第68 図	1面全体図	95
第32 図	3面遺構図(14)	59	第69 図	2面全体図	97
第33 図	3面遺構図(15)	60	第70 図	3面全体図	99
第34 図	3面遺構図(16)	61	第71 図	4面全体図	101
第35 図	3面遺構図(17)	62	第72 図	1面遺構出土陶磁器・土器(1)	114
第36 図	3面遺構図(18)	63	第73 図	1面遺構出土陶磁器・土器(2)	115
第37 図	3面遺構図(19)	64	第74 図	1・2面遺構出土陶磁器・土器	116
第38 図	4面遺構図(1)	65	第75 図	2面遺構出土陶磁器・土器(1)	117
第39 図	4面遺構図(2)	66	第76 図	2面遺構出土陶磁器・土器(2)	118
第40 図	4面遺構図(3)	67	第77 図	2面遺構出土陶磁器・土器(3)	119
第41 図	4面遺構図(4)	68	第78 図	3面遺構出土陶磁器・土器(1)	120
第42 図	4面遺構図(5)	69	第79 図	3面遺構出土陶磁器・土器(2)	121
第43 図	4面遺構図(6)	70	第80 図	3面遺構出土陶磁器・土器(3)	122
第44 図	4面遺構図(7)	71	第81 図	3面遺構出土陶磁器・土器(4)	123
第45 図	4面遺構図(8)	72	第82 図	3面遺構出土陶磁器・土器(5)	124

第 83 図	3 面遺構出土陶磁器・土器 (6) …… 125	第 114 図	遺構出土金属製品 (2) …… 156
第 84 図	3 面遺構出土陶磁器・土器 (7) …… 126	第 115 図	遺構、遺構外出土金属製品 …… 157
第 85 図	3 面遺構出土陶磁器・土器 (8) …… 127	第 116 図	遺構外出土金属製品 (1) …… 158
第 86 図	3 面遺構出土陶磁器・土器 (9) …… 128	第 117 図	遺構外出土金属製品 (2) …… 159
第 87 図	3 面遺構出土陶磁器・土器 (10) …… 129	第 118 図	遺構出土金銀銭貨 (1) …… 160
第 88 図	3 面遺構出土陶磁器・土器 (11) …… 130	第 119 図	遺構出土金銀銭貨 (2) …… 161
第 89 図	3 面遺構出土陶磁器・土器 (12) …… 131	第 120 図	遺構、遺構外出土金銀銭貨 …… 162
第 90 図	3 面遺構出土陶磁器・土器 (13) …… 132	第 121 図	遺構、遺構外等出土金銀銭貨 …… 163
第 91 図	3・4 面遺構出土陶磁器・土器 …… 133	第 122 図	遺構、遺構外出土ガラス製品、骨製品 …… 164
第 92 図	4 面遺構出土陶磁器・土器 (1) …… 134	第 123 図	縄文時代、奈良・平安時代遺物集成図 …… 209
第 93 図	4 面遺構出土陶磁器・土器 (2) …… 135	第 124 図	奈良・平安時代掘立柱建物跡配置図 …… 210
第 94 図	4 面遺構出土陶磁器・土器 (3) …… 136	第 125 図	谷村陣屋(18 世紀段階)水路配置図 …… 214
第 95 図	遺構外出土陶磁器・土器 (1) …… 137	第 126 図	谷村陣屋(19 世紀段階)建物配置図 …… 218
第 96 図	遺構外出土陶磁器・土器 (2) …… 138	第 127 図	1・2 号石組等配置図 …… 219
第 97 図	遺構外出土陶磁器・土器 (3) …… 139	第 128 図	絵図から見る調査区の位置比定(1) …… 220
第 98 図	遺構外出土陶磁器・土器 (4) …… 140	第 129 図	絵図から見る調査区の位置比定(2) …… 221
第 99 図	遺構外出土陶磁器・土器 (5) …… 141	第 130 図	出土陶磁器・土器の編年 (1) …… 228
第 100 図	遺構外出土陶磁器・土器 (6) …… 142	第 131 図	出土陶磁器・土器の編年 (2) …… 229
第 101 図	遺構外出土陶磁器・土器 (7) …… 143	第 132 図	出土陶磁器・土器の編年 (3) …… 230
第 102 図	遺構外等出土陶磁器・土器 …… 144	第 133 図	出土陶磁器・土器の編年 (4) …… 231
第 103 図	遺構出土土製品 (1) …… 145	第 134 図	出土陶磁器・土器の編年 (5) …… 232
第 104 図	遺構出土土製品 (2) …… 146	第 135 図	出土陶磁器・土器の編年 (6) …… 233
第 105 図	遺構、遺構外出土土製品 …… 147	第 136 図	出土陶磁器・土器の編年 (7) …… 234
第 106 図	遺構外等出土土製品 …… 148	第 137 図	出土陶磁器・土器の編年 (8) …… 235
第 107 図	遺構、遺構外等出土瓦製品 …… 149	第 138 図	出土陶磁器・土器の編年 (9) …… 236
第 108 図	遺構出土石製品 (1) …… 150	第 139 図	出土陶磁器・土器の編年 (10) …… 237
第 109 図	遺構出土石製品 (2) …… 151	第 V 章 第 1 節	
第 110 図	遺構、遺構外出土石製品 …… 152	第 1 図	動物遺体の時期別出土数 …… 184
第 111 図	遺構外出土石製品 …… 153	第 2 図	貝類組成 (第 10 期) …… 185
第 112 図	遺構外等出土石製品 …… 154	第 3 図	魚類組成 (第 10 期) …… 185
第 113 図	遺構出土金属製品 (1) …… 155	第 4 図	周辺遺跡との比較 …… 186

写真図版目次

図版 1	1 面調査 (1) …… 241	図版 5	2 面調査 (2) …… 245
図版 2	1 面調査 (2) …… 242	図版 6	2 面調査 (3) …… 246
図版 3	1 面調査 (3) …… 243	図版 7	3 面調査 (1) …… 247
図版 4	2 面調査 (1) …… 244	図版 8	3 面調査 (2) …… 248

図版 9	3面調査 (3) ……………	249	図版 36	出土瓦製品 ……………	276
図版 10	3面調査 (4) ……………	250	図版 37	出土石製品 (1) ……………	277
図版 11	3面調査 (5) ……………	251	図版 38	出土石製品 (2) ……………	278
図版 12	3面調査 (6) ……………	252	図版 39	出土石製品 (3) ……………	279
図版 13	3面調査 (7) ……………	253	図版 40	出土金属製品 (1) ……………	280
図版 14	3面調査 (8) ……………	254	図版 41	出土金属製品 (2) ……………	281
図版 15	3面調査 (9) ……………	255	図版 42	出土金属製品 (3) ……………	282
図版 16	3面調査 (10) ……………	256	図版 43	出土金属製品 (4) ……………	283
図版 17	3面調査 (11) ……………	257	図版 44	出土金属製品 (5) ……………	284
図版 18	3面調査 (12) ……………	258	図版 45	出土金銀銭貨 (1) ……………	285
図版 19	4面調査 (1) ……………	259	図版 46	出土金銀銭貨 (2) ……………	286
図版 20	4面調査 (2) ……………	260	図版 47	出土金銀銭貨 (3) ……………	287
図版 21	4面調査 (3) ……………	261	図版 48	出土金銀銭貨 (4) ……………	288
図版 22	4面調査 (4) ……………	262	図版 49	出土ガラス製品・骨製品 ……………	289
図版 23	出土陶磁器・土器 (1) ……………	263	第V章第1節		
図版 24	出土陶磁器・土器 (2) ……………	264	図版 1	貝類・魚類 (1) ……………	198
図版 25	出土陶磁器・土器 (3) ……………	265	図版 2	魚類 (2) ……………	199
図版 26	出土陶磁器・土器 (4) ……………	266	図版 3	鳥類・哺乳類 ……………	200
図版 27	出土陶磁器・土器 (5) ……………	267	第V章第2節		
図版 28	出土陶磁器・土器 (6) ……………	268	図版 1	資料画像 (分析番号No.1～22) ……………	204
図版 29	出土陶磁器・土器 (7) ……………	269	図版 2	資料画像 (分析番号No.23) ……………	204
図版 30	出土陶磁器・土器等 ……………	270	図版 3	資料画像 (分析番号No.24～28(右)と X線透過撮影画像(左)) ……………	204
図版 31	出土陶磁器・土器 (8) ……………	271	図版 4	資料画像 (分析番号No.24(左)と25(右)の 表面観察結果) ……………	204
図版 32	出土陶磁器・土器 (9) ……………	272	第V章第3節		
図版 33	出土陶磁器・土器 (10) ……………	273	図版 1	谷村城出土ガラス製ボトル ……………	207
図版 34	出土土製品 (1) ……………	274			
図版 35	出土土製品 (2) ……………	275			

表 目 次

第1表	遺跡一覧表 ……………	9	第3表	同定結果一覧 ……………	190
第2表	遺構一覧表 ……………	103	第V章第2節		
第3表	遺物一覧表 (陶磁器・土器) ……………	165	第1表	定性・定量分析結果 ……………	205
第4表	遺物一覧表 (土製品等) ……………	176	第2表	元文一分判金と金製品の組成 ……………	205
第V章第1節					
第1表	出土動物遺体一覧 ……………	185	第V章第3節		
第2表	動物遺体集計 ……………	189	第1表	ガラス製ボトルの定量分析結果 ……………	207

第 I 章 調査経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯

発掘調査を実施した地点は甲府地方家庭裁判所都留支部の敷地内にあるが、この範囲は周知の埋蔵文化財包蔵地「谷村城」の範囲内に位置している。今回の調査は、甲府地方家庭裁判所都留支部新庁舎建設に伴う発掘調査である。平成 21 年 5 月 18 日付けの文化財保護法第 94 条に基づく東京高等裁判所から提出された通知に係り、平成 21 年 6 月 11 日付けの通知（教学文第 741 号）に応じ、都留市教育委員会が平成 21 年 6 月 23 日から 6 月 25 日に試掘調査を行った。試掘調査ではトレンチを 2 箇所設けて調査を行ったところ、1 号トレンチにおいて、炭化物を含む土層（地表下 1.1 m から 1.2 m）から溝状のプランとともにかわらけや陶器片を検出した。この結果から建設工事に先立ち、記録保存措置を目的とした発掘調査を行うこととなった。

平成 26 年度調査に先立ち実施した平成 26 年 6 月 30 日の現地協議（東京高等裁判所、学術文化財課、埋蔵文化財センターが参加）により、庁舎建設範囲に基づく調査範囲などを相互に確認し、平成 26 年 8 月より約 4 ヶ月間、県埋蔵文化財センターの発掘調査を行った。調査終了後に、甲府地方家庭裁判所都留支部新庁舎建設工事に伴う立会調査を実施したところ、調査対象外を施工することが明らかになった。このため、東京高等裁判所、学術文化財課、埋蔵文化財センターで協議し、平成 27 年度に庁舎建設と平成 26 年度の段階で把握されている外構工事を対象とした本調査を実施することとなった。

平成 27 年度調査に先立ち実施した平成 26 年 4 月 16 日の現地協議（東京高等裁判所、学術文化財課、埋蔵文化財センターが参加）により、調査範囲などを相互に確認し、平成 26 年 4 月より約 2 ヶ月間、県埋蔵文化財センターの発掘調査を行った。

第 2 節 調査経過

1. 発掘調査の経過

[平成 26 年度]

プレハブと発掘調査用の機材は平成 26 年 8 月 7 日に搬入し、8 月 11 日に作業員雇用を開始した。プレハブの設置に先立ち、8 月 4 日から 7 日・11 日に 1 回目の表土剥ぎを行い、1 面（近代の遺構面）の検出に努めた。この際に、裁判所庁舎が建っていた範囲の埋土を除去したところ、4 つの遺構面が確認された。このため、調査工程を再検討して、4 つの遺構面を調査できるように計画を変更した。また、2 面と 3 面の検出にあたり、遺物が集中する範囲は人力で行い、散漫な範囲は重機を併用して掘り下げを行った。4 面までの堆積土層は厚いため、11 月 5 日から 6 日に 2 回目の表土剥ぎを行った。なお、調査を進行させる過程で、排土の場内処理が著しく困難になったため、9 月 18 日・19 日に排土を場外に搬出した。基準点測量・グリッド杭設置については、株式会社ケイ・データエンジニアに委託し、8 月 19 日（1 回目）と 11 月 10 日（2 回目）に行った。遺構面の調査については、9 月 25 日まで 1 面、10 月 16 日まで 2 面、11 月 11 日まで 3 面、11 月 21 日まで 4 面の調査を実施した。3 面と 4 面の調査完了に伴い、株式会社テクノプランニングによる航空写真測量を 10 月 28 日（3 面）、11 月 21 日（4 面）に行った。プレハブ・発掘調査用機材は、降雨により 12 月 3 日に撤去した。調査期間中の平成 26 年 10 月 19 日に遺跡見学会を開催し、123 名が参加した。また、平成 26 年 9 月 19 日に國學院大學博物館深澤太郎氏が来訪した。

[平成 27 年度]

発掘調査用の機材は平成 27 年 4 月 21 日に搬入し、4 月 24 日に作業員雇用を開始した。表土剥ぎについては、4 月 24 日・27 日に 1 回目、5 月 13 日・14 日に 2 回目、6 月 17 日・18 日に 3 回目を行い、それぞれの遺構面について検出に努めた。基準点測量については、株式会社ケイ・データエンジニアに委託し、4 月 27 日に行った。遺構面の調査については、5 月 12 日まで 1 面、5 月 26 日まで 2 面、6 月 16 日まで 3 面、6 月 29 日まで 4 面の調査を実施した。各遺構面の調査完了に伴い、株式会社テクノプランニングによる図化用の空中写真撮影を 5 月 11 日（1 回目）、5 月 26 日（2 回目）、6 月 15 日（3 回目）、6 月 26 日（4 回目）に行った。7 月 2 日にプレハブ・発掘調査用機材の借用期限を迎えたため、

これらを撤去した。調査期間中の平成 27 年 6 月 14 日に遺跡見学会を開催し、57 名が参加した。

2. 整理作業の経過

整理作業は、基礎的整理を平成 26 年度（平成 27 年 2 月 4 日～平成 27 年 3 月 23 日）、本格的整理を平成 27 年度（平成 27 年 5 月 13 日～平成 28 年 3 月 28 日）に実施した。作業の工程としては、平成 26 年度出土遺物の水洗・注記を平成 26 年 2 月から 3 月、平成 26・27 年度出土遺物の水洗・注記・接合を平成 27 年 5 月から 8 月、遺物実測・遺物トレースを平成 27 年 9 月から平成 28 年 1 月に行った。遺物図版作成は平成 28 年 1 月から 3 月、遺構図版作成は平成 27 年 8 月から平成 28 年 3 月及び平成 28 年 10 月から 11 月、写真図版作成は平成 28 年 3 月に実施した。また、平成 28 年度の立会調査で出土した遺物の整理作業や原稿執筆については、平成 28 年 5 月 8 日より開始し、12 月 27 日に終了した。報告書の入稿は平成 29 年 1 月 5 日であり、報告書は 3 月 17 日に刊行された。整理作業に係わる委託業務としては、陶磁器・土製品の実測・デジタルトレース委託、土製品・石製品・金属製品のデジタルトレース委託、金属製品の保存処理と図化委託を実施した。その他に山梨県立博物館に分析を依頼し、動物遺存体（骨・貝）の同定と分析や金属製品の成分分析、ガラスの成分分析などを行った。これらの分析結果については、第 V 章に収めた。

なお、平成 26・27 年度に実施した県埋蔵文化財センター主催の遺跡展に出土遺物を出展した。

3. 調査に係る事務手続き

発掘調査に際しては、文化財保護法に基づく手続きの他に、発掘調査の成果に係る報告を行った。それらの事務手続きは以下の通りである。なお、文化財保護法第 100 条第 2 項に基づく発見通知は山梨県教育委員会教育長に提出した後、学術文化財課から所轄の警察署に提出された。

[平成 26 年度]

平成 26 年 6 月 18 日 甲府地方家庭裁判所都留支部庁舎新営工事に係る埋蔵文化財の協定書及び平成 26 年度契約書を東京高等裁判所事務局長と山梨県教育委員会教育長で締結
平成 26 年 8 月 8 日 文化財保護法第 99 条第 2 項に基づく発掘通知（教埋文第 406 号）を山梨県教育委員会教育長に提出
平成 26 年 12 月 5 日 文化財保護法第 100 条第 2 項に基づく発見通知（教埋文第 643 号）を山梨県教育委員会教育長に提出
平成 26 年 12 月 9 日 発掘調査の完了報告（教埋文第 651 号）を山梨県教育委員会教育長に提出
平成 27 年 2 月 18 日 立会調査に伴い、文化財保護法第 100 条第 2 項に基づく発見通知（教埋文第 834 号）を山梨県教育委員会教育長に提出
平成 27 年 3 月 16 日 発掘調査・整理作業の実績報告（教埋文第 875 号）を山梨県教育委員会教育長に提出

[平成 27 年度]

平成 27 年 5 月 11 日 文化財保護法第 99 条第 2 項に基づく発掘通知（教埋文第 85 号）を山梨県教育委員会教育長に提出
平成 27 年 7 月 16 日 文化財保護法第 100 条第 2 項に基づく発見通知（教埋文第 278 号）を山梨県教育委員会教育長に提出
平成 27 年 7 月 17 日 立会調査に伴い、文化財保護法第 100 条第 2 項に基づく発見通知（教埋文第 282 号）を山梨県教育委員会教育長に提出
平成 27 年 7 月 15 日 発掘調査の完了報告（教埋文第 330 号）を山梨県教育委員会教育長に提出
平成 27 年 7 月 15 日 立会調査に伴い、文化財保護法第 100 条第 2 項に基づく発見通知（教埋文第 320 号）を山梨県教育委員会教育長に提出
平成 27 年 10 月 28 日 立会調査に伴い、文化財保護法第 100 条第 2 項に基づく発見通知（教埋文第 643 号）を山梨県教育委員会教育長に提出
平成 28 年 3 月 16 日 発掘調査・整理作業の実績報告（教埋文第 1031 号）を山梨県教育委員会教育長に提出

[平成 28 年度]

平成 28 年 9 月 23 日 立会調査に伴い、文化財保護法第 100 条第 2 項に基づく発見通知（教埋文第 526 号）を山梨県教育委員会教育長に提出

4. 立会調査の経過

甲府地方家庭裁判所都留支部新庁舎建設に伴い、平成 25 年度から平成 28 年度まで立会調査を行った。調査対象地点の位置は次の項目と第 1 図中の番号が対応している。

1 仮設給排水管理設掘削工事（平成 25 年 10 月 10 日）

平成 25 年度に仮庁舎建設に係わる給排水管理設掘削に伴い、立会調査を実施した。掘削地点は旧庁舎の西側で、長軸 12.8 m、短軸 0.6 m の範囲を地表下 0.9 m から 1.2 m 掘削した。この結果、明黄褐色土層や暗褐色土層などの複数の土層が検出し、掘削地点の北東側で地表下 0.7 m の位置から遺物包含層と考えられる暗褐色土層を確認した。

2 車両進入路造成工事（平成 25 年 11 月 21 日）

平成 25 年度に行われた、北側の県道から仮設庁舎へ入るための車両進入路を新設するための掘削工事に伴い、立会調査を実施した。掘削地点は旧庁舎の北西端で、長軸 7.8 m、短軸 2.2 m の範囲を地表下 0.8 m 掘削した。この結果、県道付近の掘削地点から地表下 0.15 m で明黄褐色ブロック混じりのにぶい黄褐色土層が検出された。

3 基礎撤去工事（平成 26 年 1 月 23・27・28 日）

平成 25 年度に行われた、旧庁舎の基礎撤去に伴う立会調査を行った。掘削地点は旧庁舎の中央（3-1）及び東側（3-2）で、3-1 を長軸 8 m、短軸 6.2 m、3-2 を長軸 6.8 m、短軸 5.2 m の範囲で地表下 1.3 m まで掘削した。この結果、地表下 0.65 m までの地中梁の下にベース（高さ 45cm）があり、その下のラップルコンクリート塊が確認された。工事では、ラップルコンクリートを残し、基礎を構成する地中梁やベースを撤去した。

4 石垣解体工事（平成 27 年 2 月 9 日）

敷地東側にある南北に主軸を有す 4 m の石垣と敷地東側にある南北に主軸を有す 12 m の石垣を対象に解体工事を行った。この結果、石垣の底面は道路より 0.1 m に位置し、近代の遺物包含層である明茶褐色土層に構築されており、石垣の内部から近代の陶磁器や瓦が出土した。このため、石垣の構築時期は近代以降と考えられる。

5 地盤改良工事（平成 27 年 2 月 13 日）

庁舎建設範囲内における地盤改良の必要性を判断するため、庁舎東側の掘削工事を行った。掘削地点は長軸 2 m、短軸 2 m の範囲で地表下 0.8 m 掘削し、3 面に比定される土層から近世の遺物が出土した。

6 樹木移植工事（平成 27 年 2 月 16 日）

敷地東側に植えられていた樹木を移植するために行われた。掘削地点は長軸 3 m、短軸 3 m の範囲で地表下 0.7 m 掘削した。樹木を植えた際に現地表面に盛土をしたため、遺構・遺物は出土しなかった。

7 樹木移植工事（平成 27 年 2 月 16 日）

敷地西南端に樹木を植えるために行われた。掘削地点は長軸 2 m、短軸 2 m の範囲で地表下 0.8 m 掘削した。掘削範囲の底面で黒褐色土層中に焼土粒子が散漫に分布する状況を確認した。

8 電柱移設工事（平成 27 年 7 月 1 日・3 日）

電柱を移設するための工事であり、掘削範囲はいずれも 1 m 以内である。8-1 は電柱を埋設するために人力で掘削をしたところ、地表下 2 m ほどで溶岩に当たったため、ドリルでの掘削に切り替え、地表下 3 m まで掘削した。8-2 は移設電柱の引っ張り線新設に伴う地点であり、地表下 1 m で石に当たったため、ドリルでの掘削に切り替え、地表下 2 m まで掘削した。8-3 は、既存の電柱に伴うアース線の撤去工事であり、地表下 0.75 m まで人力で掘削した。8-4 は、既存の引っ張り線撤去に伴う工事であり、0.4 m から 0.6 m まで掘削した。

9 仮囲い単管パイプの再設置及び地山掘削工事（平成 27 年 7 月 13 日）

庁舎東側の仮囲いを支える単管パイプを打ち直し、周囲の地山を掘削するための工事である。掘削地点は長軸 9.8 m、短軸 1.8 m から 1 m の範囲で地表下 0.8 m まで掘削した。この結果、断面にお

いて瓦の集積と、焼土の集中する地点を確認したが、平面的に明確ではなかったため、遺構番号は付していない。瓦は東側（市道側）において厚く堆積するものと考えられる。1面から3面の構成土壌より、近世・近代の瓦や陶磁器等が出土した。

10 設備配管工事（平成27年10月19日～21日）

庁舎北側に3基のハンドホールを埋設するため、掘削範囲の東端を長軸4m、短軸3.7mの範囲で地表下1.4mまで、庁舎北西端に2基のハンドホールを埋設するため、掘削範囲の西端を長軸3.4m、短軸3mの範囲で地表下1.3mまで掘り下げた。この結果、東端は旧庁舎の範囲内に位置することから、遺構・遺物は出土しなかったが、西端からは近世の遺物が出土した。また、ハンドホール間をつなぐ管路の造成のため、長軸10.4m、短軸1mの範囲で地表下0.6mまで掘削したところ、2面の構成土壌から焼土集中（14号焼土集中）が検出した。さらに、給水管の掘削工事において、長軸3.5m、短軸1mの範囲で地表下1.2mまで掘削したところ、1～4面の構成土壌が確認され、底面は炭化物粒子が広がっていた。掘削過程で石製鋳型や近世の陶磁器片が出土した。

11 管路掘削工事（平成27年10月20日）

庁舎西側に設置する電灯までの管路とハンドホールを造成するため、長軸3.6m、短軸0.9mの範囲で地表下1.2mまで掘削した。この結果、1面の構成土壌と瓦片が出土した。

12 電柱埋設工事（7月11日）

庁舎北西側に電柱を設置するための工事である。直径0.6mのドリル形アタッチメントにて地表下1.5m掘削したところ、本調査時に遺構が確認された土壌が確認され、特に2・3面に相当する土層から近世の陶磁器片が出土した。最終的には地表下2.3mまで掘り下げを実施した。電柱より3.2m北側の位置で、電柱引っ張り線埋設のため、長軸0.9m、短軸0.6mの範囲を地表下1.7mまで掘削したところ、近世から近代の磁器片が出土した。

13 電気設備工事（7月12日）

庁舎北西側で平成27年度の立会調査において埋設した2基のハンドホールから電柱までの管路を掘削した。北側の掘削範囲は長軸1.9m、短軸0.8m、地表下0.95m、南側の掘削範囲は長軸1.7m、短軸1.15m、地表下1mまで掘り下げた。掘り下げの過程において、近世から近代の磁器片が出土した。

14 水道管敷設工事（7月13日）

庁舎北西側で水道管の管路を掘削する工事で、長軸3.4m、短軸0.7mから0.9m、地表下1.6mまで掘削した。この結果、近世の磁器片が出土した。

15 石積撤去・鉄筋コンクリート造成工事（7月21日）

庁舎南西側において石垣を部分的に撤去し、鉄筋コンクリート壁を造成するために長軸0.7m、短軸0.4mの範囲を掘り下げた。現地表面より下に埋設されている石垣も撤去され、石垣の底面まで道路側で地表下0.55m、庁舎側で地表下0.85mであることが把握された。石垣の中から近代の磁器片が出土した。コンクリート床を敷設するのに先立ち、地表下0.7mまで掘削し、近世から近代の磁器片が発見された。

16 管路掘削工事（7月22日）

庁舎西側における集水管の埋設のための工事で、掘削範囲は長軸12m、短軸0.8m、地表下1mである。概ね既掘範囲であったが、掘削範囲の北東側で1面の地山を掘削し、近世の磁器が出土した。

17 管路掘削工事（7月27日）

庁舎南東端における集水管の埋設のための工事で、掘削範囲は長軸4.5m、短軸1m、地表下1.4mまで掘削した。掘削の過程で1面から3面を掘削し、近世から近代の磁器片が出土した。

18 管路掘削工事（7月27日）

庁舎南側における集水管の埋設のための工事で、掘削範囲は長軸4.2m、短軸0.8m、地表下1.1mまで掘削した。掘削の過程で2面を掘削し、近世から近代の磁器片が出土した。

19 管路掘削工事（7月28・29日）

庁舎南側における集水管の埋設のための工事で、掘削範囲は長軸4.3m、短軸0.8m、地表下1.15mである。掘り下げにより、近世から近代の磁器片が出土した。3面から土坑が1基（210号土坑）検出された。

- 20 管路掘削工事（7月28日）

庁舎南側における集水管の埋設のための工事で、掘削範囲は長軸4.45m、短軸0.8m、地表下1mである。掘り下げにより、近世から近代の磁器片が出土した。4面にあたる遺構面から土坑1基（211号土坑）が検出された。北西側の端部に石を数段積みあげた遺構が検出された。これは、平成27年度発掘調査時に確認された2号石組と判断される。
- 21 駐輪場造成工事（8月1日）

庁舎東南側における駐輪場基礎を造成するための工事で、3ヶ所（長軸1.7～2.3m、短軸1.2～1.7m）を地表下0.7mまで掘削したところ、近世から近代の磁器片が出土した。
- 22 縁石工事（8月1日）

庁舎東南側における縁石を造成するための工事で、長軸17m、短軸0.4m、地表下0.4mまで掘削した。また、電気設備・水道管を敷設するため、縁石工事の施工範囲内に管路を設け、幅0.3mから0.4mで地表下0.25mから0.35m掘削した。
- 23 電気設備工事（8月1日）

庁舎東南側における電気設備を造成するための工事で、長軸1.5m、短軸1m、地表下0.83mまで掘削したところ、2面が検出され、近世の磁器片が出土した。
- 24 電気設備工事（8月8日）

庁舎南側における鉄筋コンクリート造成工事で、長軸7m、短軸2.5m、地表下0.6mまで掘削し、近世の磁器片が出土した。掘削の過程で土坑（212号土坑）が検出され、覆土から近代の磁器片等が出土した。
- 25 縁石工事（8月8日）

庁舎西南側における縁石を造成するための工事で、長軸10m、短軸0.8m、地表下0.25mまで掘削し、近世の磁器片が出土した。
- 26 横断工事東側（8月23日）

庁舎東南側における埋設管等を造成するための工事で、長軸4m、短軸2.5m、地表下0.74mまで掘削した。掘り下げの過程において、コンクリートで造成された方形の基礎が2基検出された。谷村区裁判所の門柱基礎に比定される。
- 27 横断工事西側（8月23日）

庁舎西南側における埋設管等を造成するための工事で、短軸2.5m、地表下0.9mまで掘削した。掘削範囲からは覆土に多数の瓦が充填された土坑（213号土坑）が出土した。
- 28 管路掘削工事（8月23日）

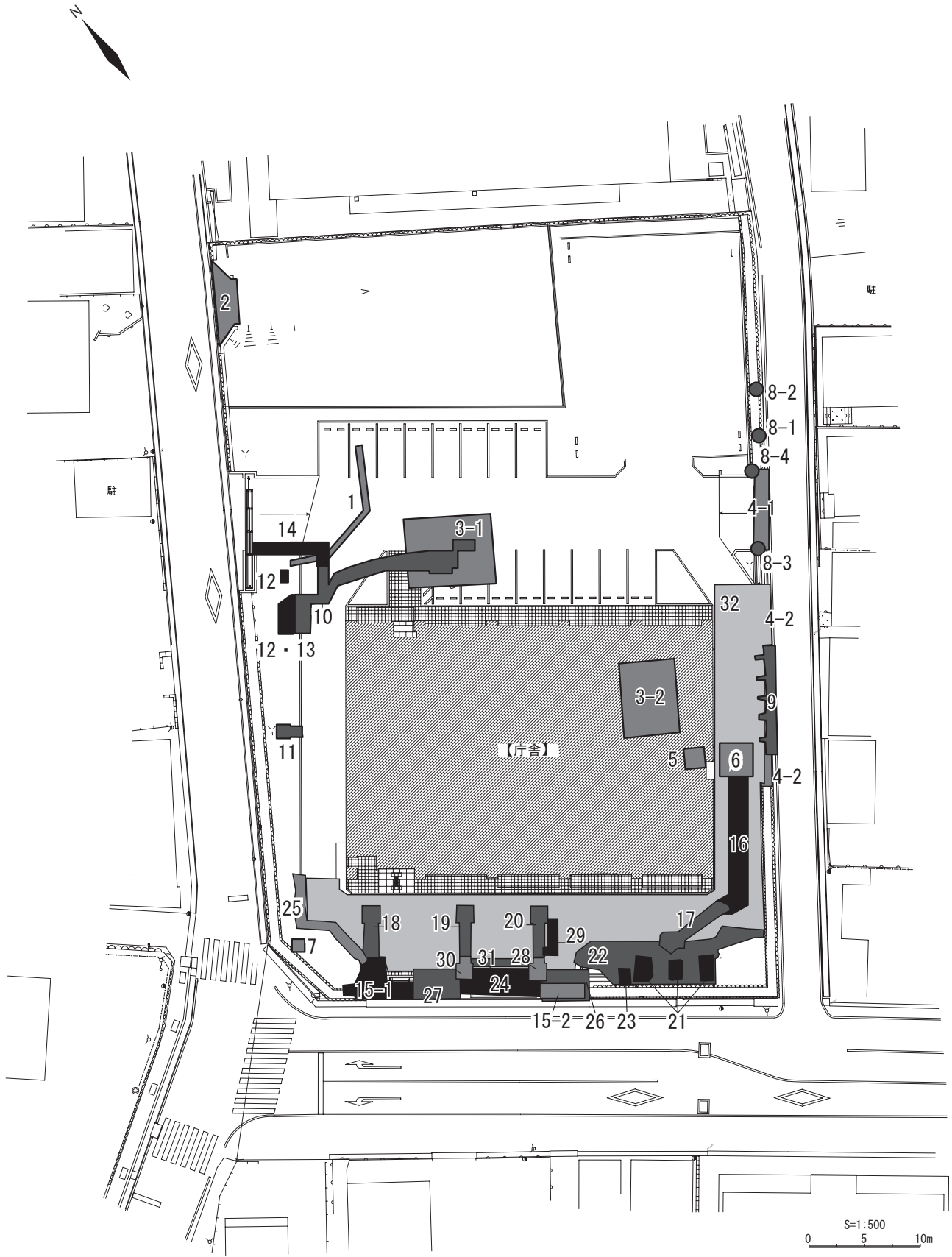
庁舎南側における集水管の埋設のための工事で、規模は長軸2m、短軸1.5m、地表下1.2mである。掘削の過程で2面から3面を掘り下げた。
- 29 管路掘削工事（8月23日）

庁舎南側における電気設備の埋設のための工事で、規模は長軸3m、短軸0.8m、地表下0.75mである。掘削の過程で1面から2面を掘り下げた。
- 30 管路掘削工事（8月23日）

庁舎南側における集水管の埋設のための工事で、規模は長軸2m、短軸1.5m、地表下1mである。掘削の過程で2面から3面を掘り下げた。
- 31 縁石工事（8月24日）

庁舎南側における縁石を造成するための工事で、長軸5.5m、短軸0.6m、深さ0.4mを掘削した。
- 32 輔装工事（8月23日）

工事9は庁舎南側の縁石から庁舎までの間を地表下0.1m掘削し、中世から近代までの磁器片が出土した。中世の磁器片は16世紀代の景德鎮窯に比定される。



第1図 立会調査地点位置図

第Ⅱ章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

谷村城は、都留市中央二丁目1番1号に位置している。山梨県は、甲府盆地を中心とした富士川水系が流下する中西部地域と、相模川、多摩川水系が流下する山梨県東部地域に大別され、関東山地から連なる御坂山地がこの二つの地域を隔てている。都留市は山梨県の東部地域に位置しており、地理的環境が中西部地域と大きく異なる。東部地域の地形を大別すると、山地と山の間を開析した河川が形成した平坦地に分けられる。都留市もこのような地形の例外ではなく、市域の大部分を山地が占め、中央北西寄りを桂川が流下している。桂川とその支流には河岸段丘が発達しており、河川流域の地形形成過程において、河川による削剥作用を受けている。また、東部地域の特徴として、富士山起源の火山灰が厚く堆積した場所という点が挙げられる。都留市における完新世以降の地形形成史では、火山灰の降下と河川による削剥が地形を変化させる大きな作用と言える。都留市の南側に立地する富士山からは、火山泥流や溶岩などが流出しており、噴出年代が特定された様々な溶岩流が確認されているが、都留市内においても約8,000～8,500年前に流出したとされる猿橋溶岩が確認されている。猿橋溶岩は桂川を流下し、大月市猿橋まで達しており、桂川流域に大きな影響を与えたと考えられる。更新世を含めてより巨視的に見ると、都留市は中央地溝帯の中に位置しており、隆起と沈降が繰り返されるなど、一連の地殻変動によって極めて急峻な溪谷と山地が形成されたと考えられる。(上杉1987)。

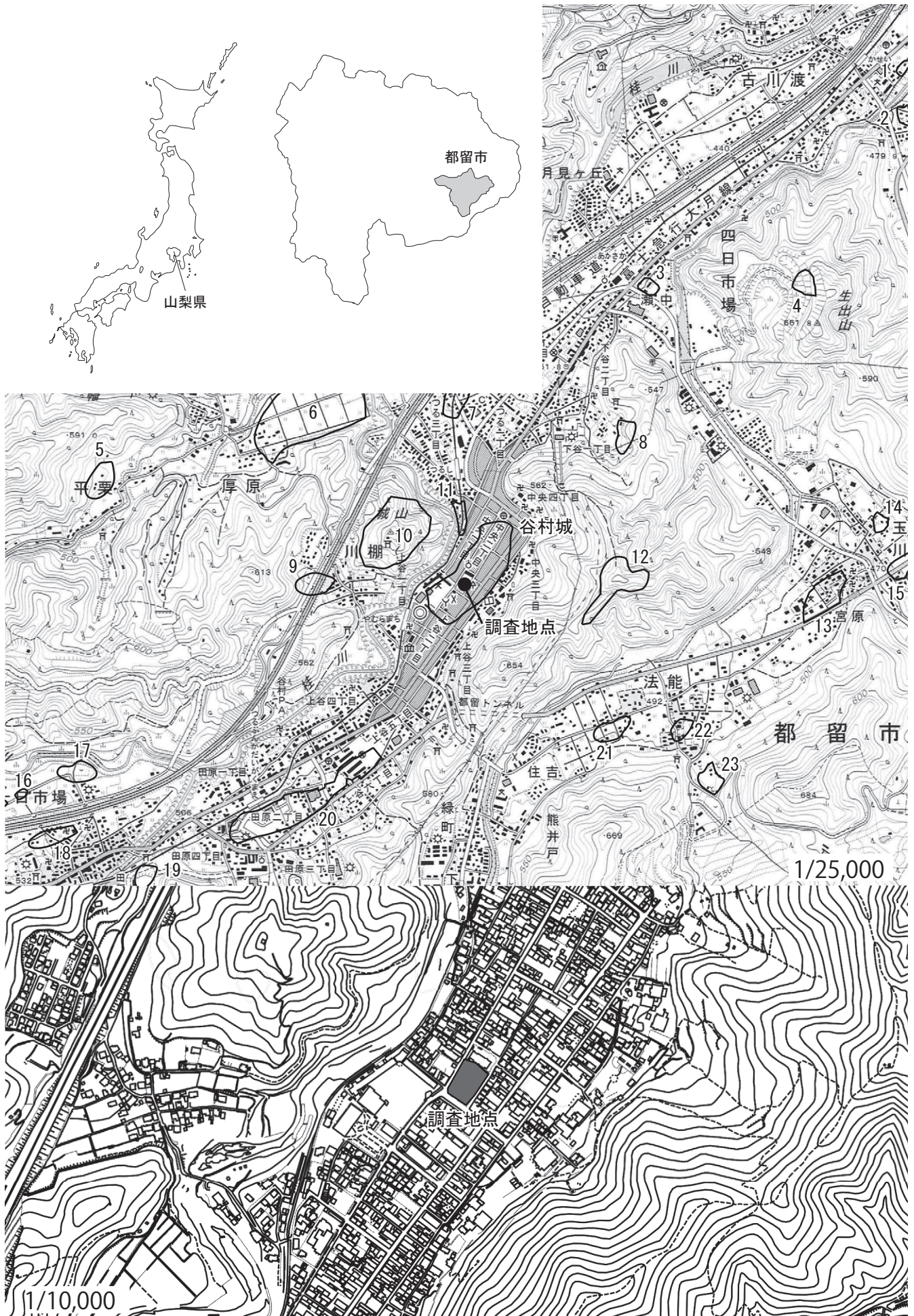
谷村城は、東側の城山と西側の蟻山に挟まれた桂川流域沿いの細長い段丘上の平坦地、標高490mの地点に位置している。谷村城の南西側には平坦地が続き、北東側において桂川が北流した後は大幡川と合流し、合流地点の東側では北東から南西方向に主軸を持つ段丘が広がっている。ただし、菅野川と桂川が合流する周辺では埋蔵文化財包蔵地は散漫であるのに対し、谷村城の南西側の平坦地には埋蔵文化財包蔵地がまとまって分布している。

第2節 歴史的環境

1. 埋蔵文化財包蔵地

都留市内の埋蔵文化財包蔵地は、山間部に立地する遺跡もあるが、全体として桂川とその支流（大幡川、鹿留川、柄杓流川、菅野川、戸沢川、朝日川、高川）の流域に立地する。この内、谷村城は桂川流域に位置するが、桂川流域は平坦地を多く含んでいるため都留市内で最も多くの埋蔵文化財包蔵地が確認される。桂川流域における時代ごとの埋蔵文化財包蔵地の変化としては、都留市全体の推移と同様な傾向を示しており、縄文時代中期において遺跡数が最も多くなり、縄文時代晩期と弥生時代に減少した後、平安時代に向けて増加する傾向を示す。以下に谷村城周辺の埋蔵文化財包蔵地で調査によって遺跡の内容が明らかになった事例等を記述する。

生出山山頂遺跡は標高701mの生出山山頂に位置しており、縄文時代早期の住居跡1軒・小竪穴3基や弥生時代中期、平安時代の遺物が出土した。玉川金山遺跡は生出山の南東側に広がる山塊と戸沢川・菅野川の合流地点に挟まれた緩斜面に立地しており、縄文時代早期の住居跡1軒・土坑179基・集石9基等が検出され、縄文時代早期後半の清水柳E式・鶴ヶ島台式期の土器・石器や奈良時代・中世・近世の遺構や遺物が出土した。牛石遺跡は桂川と大幡川が合流する地点の西南側に位置する河岸段丘にあり、縄文時代中期末葉の環状配石遺構や配石遺構、弥生時代中期の住居跡3軒、奈良・平安時代の掘立柱建物跡3棟を含む23基の遺構が出土した。三ノ側遺跡は桂川流域の河岸段丘に位置する。昭和56年(1981)の都留市教育委員会が実施した調査により竪穴建物跡5軒(内、3軒[8世紀前葉]・2軒[9世紀中葉～後葉])、平成13・14年(2001・2002)の都留市教育委員会が実施した調査で竪穴建物跡6軒(内、1軒[8世紀後半～9世紀初頭]・1軒[9世紀中葉]・2軒[9世紀後半]・2軒[10世紀前半])・竪穴状遺構2軒・掘立柱建物跡2棟・溝状遺構5条・土坑150基、平成23年(2012)の山梨県埋蔵文化財センターが実施した調査で竪穴建物跡13軒(内、10軒[8世紀後半]・3軒[9世紀前半])・掘立柱建物跡4棟・溝状遺構7条・土坑129基が検出されている。『和名類聚抄』によると、古代都留郡には相模・古郡・福地・多良・賀美・征茂・都留の7郷あり、都留市域は多良郷と賀美郷



第2図 遺跡分布図

の一部に位置していたと考えられる。多良郷は『和名類聚抄』高山寺本では「太波良」、名古屋市博本では「タハラ」の訓を付していることから、都留市谷村一帯を郷域として、田原をその遺称とみなすことで諸説一致している（平野 2011）。賀美郷についても現在の都留市南部から富士吉田市周辺を郷域とみなすのが通説となっている。昭和 56 年（1981）の三ノ側遺跡発掘調査により、「和銅開珎」などの皇朝十二銭が出土しており、多良郷の比定地を証拠立てている。

都留市内における考古学調査は戦前から行われており、埋蔵文化財包蔵地も報告されている。羽田一成・仁科義男氏は昭和 3 年（1928）に都留市内において 47 ヶ所の遺跡を確認し、仁科義男氏は昭和 10 年（1935）に 46 ヶ所の遺跡を報告している。行政が調査の主体となる時期において、都留市における埋蔵文化財包蔵地は段階的に増加していった。都留市の遺跡は昭和 37 年（1962）の山梨県教育委員会による「埋蔵文化財包含地調査」で 34 ヶ所の遺跡が報告され、昭和 46 年（1971）の「山梨県埋蔵文化財包含地分布調査」で 57 ヶ所、昭和 56 年（1981）『全国遺跡地図 山梨県』で 60 ヶ所、平成 11 年度に山梨県教育委員会がまとめた遺跡一覧によると、99 ヶ所の遺跡が登録されている。

2. 調査地点周辺の中世史

鎌倉時代初期に山梨県東部地域に入植した武士団として古郡氏が挙げられる。古郡氏は武蔵七党の一つである横山党の独立した武士団であった。『吾妻鏡』によると、建久元年（1190）と建久六年（1196）に行われた源頼朝の上洛の際に、随兵の中に「古郡次郎」の名が見える。謀反に加担したとして和田義盛の子である義直・義重、甥である胤長達が逮捕されたことを発端にした和田義盛の乱〔建暦三年（1213）〕において、和田方として参戦した古郡経忠、保忠兄弟は、鎌倉での敗戦後、波加利荘内で自害した。古郡氏は波加利本荘・波加利新荘・古郡・福地を所領としていたと考えられ、和田義盛の乱後における論功行賞によって「坂東田原」が志村次郎に与えられたことから、古郡氏が都留市も治めていたと考えられる。

『鎌倉大草紙』には「（中略）信満一男武田三郎信重、是ハ都留郡にて生る、母方ハ平氏小山田弥三郎女の腹也（下略）」と記載されている。甲斐国守護である武田信満の妻は小山田弥三郎の娘であるとの記載により、14 世紀後半代には守護家当主と姻戚関係を持てるほど、小山田氏が勢力を拡大したことが分かる。次いで、応永三三年（1426）に武田信長を追討するために派遣された一色持家が派遣されたが、追討軍に加わった江戸大炊助に対する感状に「於甲州田原陣致忠節之由」とあり、田原でも戦闘が行われたことが分かる。

『勝山記』大永元年（1521）に「（中略）永正十八年辛巳 此年ノ二月十八日、武田殿大原船津小林宮内丞殿へ御出有之、明ル日中津森へ御下候（下略）」とある。武田信虎が船津の小林宮内丞を訪ね、翌日中津森館に立ち寄ったとのことであり、中津森という語の初見となる。『勝山記』享禄三年（1530）に、「（中略）此年ノ同月、中津森ノ御所炎上、御前ノカウシモ焼ケ候、（下略）」、『勝山記』天文元年

第 1 表 遺跡一覧表

	遺跡名	種別	時期	調査年度		遺跡名	種別	時期	調査年度
1	前ヶ久保遺跡	散布地	縄文・奈良・平安		13	宮原遺跡	散布地	縄文	
2	美通遺跡	散布地	縄文・弥生・中世	H19～21・23	14	玉川遺跡	散布地	縄文・古墳	
3	山梨遺跡	散布地	縄文		15	玉川金山遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安・中世・近世	H16～H19
4	生出山山頂遺跡	集落跡	縄文・弥生・平安	1)S46、2)S52	16	馬々舟遺跡	散布地	縄文	
5	上ノ山遺跡	散布地	縄文		17	向原遺跡	散布地	縄文	
6	牛石遺跡	集落跡	縄文・奈良	1)S54～S56、2)S60～S61	18	下山梨遺跡	散布地	縄文	
7	徳重遺跡	散布地	縄文		19	大堰遺跡	散布地	縄文	
8	深田遺跡	散布地	縄文・古墳		20	三ノ側遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安・中世	1)S56、2)H13～H14、3)H23、4)H27、5)H27～28
9	正観寺遺跡	散布地	縄文		21	住吉遺跡	集落跡	縄文	
10	勝山城跡	城館跡	中世・近世	H18～20	22	海戸遺跡	散布地	縄文	
11	城の腰遺跡	散布地	弥生		23	天神山遺跡	散布地	古墳	
12	谷村の烽火台	城館跡	中世						

(1532)に「(中略)此ノ年小山田越中守殿上様御死去被食候、去間此年中、屋村へ御越候、新屋敷ヲ御立候、廳而成就被成候、御上意御ハタマシニ御越被食候、一家国人皆々御越候、(下略)」と記されている。享禄三年(1530)に中津森館が焼失したため、小山田越中守信有が天文元年(1532)に谷村館を完成させ、武田信虎や甲斐国内の有力氏族が館完成の祝儀に駆けつけたとのことである。小山田氏が谷村館に移ってから明治時代を迎えるまで、谷村が山梨県東部地域の中心地としての位置を占めることとなった。

中津森館は山梨県中西部地域と東部地域を結ぶ最短路である近ヶ坂峠を越える交通路や大幡川流域の水田地帯に近接しているために選ばれたと考えられており、中津森館の焼失を契機として谷村に館を移した背景には、武蔵方面から来る富士参詣の道者が使用する交通路の経済的な重要性が高まったためとされている。谷村館の位置については、谷村城と同じ位置に構築されたとする説、長安寺近辺とする説、円通院近辺とする説などがあるが、いずれも考古学的に検証されていない。

『勝山記』の永正七年(1510)に「(中略)此春、国中都留郡ト御和ホク落付(下略)」とあるが、武田信虎に小山田氏をはじめとする都留郡の勢力が従ったと解釈される。これ以降、小山田越中守信有、出羽守信有、出羽守信茂は武田氏の支配下のもと、山梨県東部地域を治めていくこととなった。

武田勝頼による領国支配は天正三年(1575)の長篠の戦い以降に暗転し、天正十年(1582)に天目山の戦いで自害した。この後、小山田左兵衛尉信茂は善光寺に在陣した織田信忠に出仕したが、一族と共に処刑された。

天正十年(1582)三月、織田信長の家臣である河尻秀隆が支配することとなったが、天正十年(1582)六月に生じた本能寺の変により織田信長が落命した後、河尻秀隆は一揆勢に襲撃され討ち取られた。後北条氏は旧谷村館を拠点に山梨県東部地域を制圧し、若神子城に本陣を置いた北条氏直と呼応して新府城に入った徳川家康を挟撃しようとしたが果たせず、天正十年(1582)十月に和睦を結んだ。これにより、山梨県東部地域は徳川方に引き渡され、鳥居元忠が配備された。

天正十八年(1590)に豊臣秀吉により徳川家康が関東に移封されたことにより、隣接している甲斐は徳川家康への備えのため、豊臣方が統治することとなった。天正十八年(1590)から天正十九年(1591)まで羽柴秀勝、天正十九年(1591)から文禄三年(1594)まで加藤光泰、文禄三年(1594)から慶長五年(1600)まで浅野長政・幸長である。浅野長政から山梨県東部地域の統治を任された浅野氏重に関わる文書(「浅野氏重夫人寄進状写」)で、「御城様」と呼ばれており、浅野氏重の代に勝山城が存在したことが分かる。また、この文書は浅野氏入国の半年後に発給されていることから、勝山城は浅野氏による支配以前に築城された可能性が高い。

3. 調査地点周辺の近世史

慶長五年(1600)、関ヶ原の役の後、甲斐は再び徳川氏が領有し、慶長七年(1602)に鳥居成次が郡内領を統治することとなった。この時代の谷村城下に関わる資料としては、『谷村城下絵図(浅野文庫・広島市立図書館蔵)』がある。絵図は広島藩浅野家に伝わった「諸国当城之図」[天和三年(1683)から元禄五年(1692)に成立した諸国の城郭を記録した絵図]の中の一枚であるが、大手門正面に位置する向御屋敷がなく、谷村城南西を区切る堀・石垣も表現されていない。秋元家の菩提寺である泰安寺が描かれていることから、秋元家が入部した初期に記録された可能性を有する。ただし、『谷村城下絵図』には、勝山城に岩殿城の縄張りが描かれており、史料的な問題も孕んでいる。

元和二年(1616)、鳥居成次は徳川忠長が甲斐国に封じられたのに伴い、忠長の附家老に任じられた。このため、甲府城代でありながら谷村に居住し、山梨県東部地域を治めることとなった。鳥居成次が寛永八年(1631)に死去すると、成次の子鳥居成行が谷村城主を継いだが、この時点で徳川忠長は甲府蟄居となっており、寛永九年(1632)に徳川秀忠が死去すると忠長は上野国高崎藩主安藤重長へお預けとされた。鳥居成行も改易となり、鳥居家による支配も終焉を迎えることとなった。

寛永十年(1633)、上州総社(群馬県)から秋元泰朝が移封されて谷村城に入り、富朝・喬知の三代にわたり72年間、山梨県東部地域が治めることとなった。秋元泰朝より秋元家歴代藩主は、十日市場における田原の滝上から桂川を堰き止め、谷村城下に引き入れる水路を始めとした堰の整備工事を実施し、年貢収量の増加を目指して積極的な開発を行った。ただし、『秋元家甲州郡内治績考』に「(中略)

谷村堰再興ヲ始メトシテ（下略）」とあるように、前代までの開削を元に発展させたものと考えられる。秋元富朝は富士山の雪代による災害を防ぐため富士浅間神社付近に松を植林した。秋元喬知は幕府内で要職を占め、宝永元年（1704）に五万石となって武蔵国川越に移封となった。秋元氏による谷村城下町を描いた絵図は複数確認されている。『谷村城下絵図（横山家蔵）』は、宝永元年（1704）に川越転封に際し、谷村城下町の記録を目的として作成されたものであり、この絵図を元に『穂元家三代居城御茶壺蔵図（甲州文庫・山梨県立博物館蔵）』、『谷村城（甲州文庫・山梨県立博物館蔵）』、『甲州谷村城絵図（ミュージアム都留蔵）』が描かれた。『谷村城下絵図（横山家蔵）』には、家臣屋敷地の各区画に秋元氏家臣90人の氏名が記入されている。『甲州屋村城（国立国会図書館蔵）』は谷村城内の建物や家臣屋敷、町屋を鳥瞰的・立体的に表現しており、向御屋敷の位置には堀や石垣で囲まれた曲輪状の空間のみ描かれている。調査地にあたる場所は家臣屋敷に該当すると考えられる。

宝永元年（1704）から宝永二年（1705）まで松平下総守が在藩した後、郡内領は幕府直轄領となった。『甲斐国志草稿』（森島家文書）には、「（中略）御料御代官清野与右衛門、町埜惣右衛門。宝永二年三月廿三日ヨリ御代官兩人ニテ支配ス。第宅ヲ毀テ田畠ヲ開キ城築ヲ崩シテ溝池ヲ埋ム。唯高山甚五兵衛ガ旧宅、追手ノ東北ノ側ニアリ。此宅ヲ残シテ陣屋也。一郡ノ政務ヲ行フ。（下略）」と記載されており、この時期に谷村城は破却され、家臣屋敷は畑となった。宝永元年（1704）に甲府徳川家の領地を拝領した柳沢吉保であったが、宝永二年（1705）には郡内領を大名預地として治めることとなった。柳沢氏による預地の期間は、宝永三年（1706）七月から正徳三年（1713）九月であり、年貢徴収事務は柳沢氏の家臣によって行われた。『甲斐国志草稿』（森島家文書）によると、「（中略）郡奉行三吉与左衛門、代官新発田丈左衛門、大谷宅右衛門、山下五郎左衛門、関沢徳左衛門、以上五人、下役四人、正徳三癸巳年9月ニ至ルマテ凡八年（下略）」と記されている。新井白石により正徳三年（1713）に大名預り地が廃止されると、山梨県東部地域は再び幕府直轄領となり、谷村陣屋は出張陣屋として用いられることとなった。この時期の谷村陣屋の様子を伝える資料として、享保十年（1725）に作成された『城跡地地割図（小俣家蔵）』がある。谷村城や谷村城下町の家臣屋敷範囲が畑として表記されている中、谷村陣屋には建物や水路が表現されている。享保五年（1720）以降においては、谷村陣屋は他地域の本陣屋を治める代官が兼務しており、伊豆国三島・韮山、甲斐国石和・甲府などの代官が任命されたが、化政期（1804～1830）以降になると石和の代官が谷村陣屋を治めることとなった。陣屋では、農民や町人から登用された手代が常駐して実務を担当していた。資料に記録されている手代の変遷は、寛政四年（1792）に手代3名、天保九年（1838）に手代4名、天保十四年（1843）に手代4名、嘉永七年（1854）に手代6名、文久元年（1861）に手代5名、慶応二年（1866）に手代5名である。

天保期における谷村陣屋の関連資料として、文献や絵図が挙げられる。天保九年（1838）の『御陣中先前仕来書上帳』には、「（中略）御本陣壺軒、御長屋四軒、御囲初蔵四戸、前同所番小屋壺ヶ所、板橋壺ヶ所、御陣屋内稻荷社之儀（下略）」、「（中略）御牢内之儀（下略）」など陣屋の施設が具体的に記されている。天保十五年（1844）の『下谷村屋敷割絵図（ミュージアム都留蔵）』には、陣屋1軒・長屋3軒・祠2基・水路・門、文久三年（1863）の絵図（平井家蔵）には、陣屋1軒・長屋2軒・祠2基・鳥居・水路・門などが表現されている。

天保七年（1836）8月17日、飢饉の中で穀物を買占めていた米穀商に対し、下谷村近郊の百姓が打ち壊しを行った。翌18日、石和代官所手代松岡啓次が打ち壊し鎮圧のため出張し、打ちこわしの頭取6人を捕縛、入牢とした。松岡は国中への帰路、駒飼宿にて天保騒動の頭取武七・兵助に遭遇し説諭したが、騒動勢が聞き入れることはなかった。天保騒動は郡内の飢饉という問題から離れ、国中における騒乱へと変化していくこととなった。天保騒動において、谷村陣屋が中心的な場所となることはなかった。これは、天保騒動の原因である天保四年（1833）から天保六年（1835）までの飢饉に対し、石和陣屋が対策を施した形跡がないことから、領民が事態の解決を谷村陣屋が果たすことはできないと考えたためであろう。また、郡内においては、武七・兵助の両頭取が百姓を統制していたため、米穀商以外へ暴力的な強借は行われなかったためとも考えられる。

慶応三年（1867）、徳川慶喜は朝廷に大政奉還を願い出たが、朝廷は徳川氏に行政を委任する方針を伝えた。このため、幕府直轄領である山梨県東部地域において谷村陣屋による支配が続くこととなった。ただし、官軍と幕府軍との戦乱の中で、慶応四年（1868）には谷村陣屋の統治機能は失われたため、

石和陣屋附にして欲しいとの願書が提出された。江戸幕府の崩壊が、陣屋の機能を失わせることとなった。

4. 調査地点周辺の近現代史

明治元年（1868）、明治政府は甲斐府を置き代官を知県事と変えて、江戸幕府における三分代官の制度をもって支配にあたった。明治二年（1869）には甲府県として三知県事を廃し、山梨県東部地域については谷村出張所を置いて、決済を甲府県の本庁に仰ぐこととした。谷村出張所は旧谷村陣屋の建物を用いており、明治三年（1870）には谷村支庁となった。明治四年（1871）、府県官制が制定され、同年11月27日に県治条例が發布され、県令は地方統治の権限を一手に掌握し、県内の裁判は聴訟課にて扱うこととなり、司法と行政が未分化の状態であった。明治五年（1872）9月1日に司法職務定制が施行されると、司法省が裁判を含む広義の司法事務を全国的に統一して担当する国家機関となり、同月19日に県内を管轄する山梨裁判所が設置された。明治五年（1872）に谷村区裁判所が設置され、明治六年（1873）に谷村支庁は廃止された。区裁判所とは府県裁判所に属し、地方の便宜により設け、地名を庁名の始めに付し、その区内の聴訟断獄（民事・刑事の審判）を取り扱う機関である。区裁判所においては、民事で元金百両を超えるもの、百円以下であっても裁決し難いものは府県裁判所に送致し、刑事の科刑は笞杖に止まり、審理して徒以上の罪と判断される場合は、府県裁判所に送致しなければならないなどの制限があった。谷村区裁判所は明治六年（1873）から明治九年（1876）年の間に廃止されたが、明治九年（1876）年3月27日に再び設置された。谷村区裁判所は、当初谷村陣屋の建物が用いられていたが、明治十四年（1881）6月に、延坪346.5㎡、木造瓦葺平屋建の庁舎を新築した。明治九年（1876）年9月13日太政官第114号布告をもって、府県裁判所の代わりに23庁の地方裁判所が置かれ、山梨県は静岡地方裁判所の管轄に属した支庁が設置されることとなった。明治十四年（1881）10月、各裁判所の位置及び管轄区画が改正され、静岡裁判所甲府支庁は甲府始審裁判所となり、谷村裁判所は甲府始審裁判所に属して谷村治安裁判所に改称された。明治二二年に明治憲法が公布されたが、憲法が起草された段階において、司法権と整合した裁判所構成法の制定が求められ、明治二三年（1890）11月に裁判所構成法が施行され、谷村区裁判所に改められた。明治二四年（1891）2月に、延坪967.1㎡、木造瓦葺2階建本館及び付属建物からなる庁舎新築工事を行った。この時期における谷村区裁判所は、『地圖第壱号原本（甲府地方裁判所蔵）』に記されている。大正十三年（1924）、前年に起こった関東大震災によって庁舎に被害が生じたため、6月に庁舎復旧工事を実施した。昭和二十年（1945）、太平洋戦争の敗戦により、日本は連合国軍の占領下におかれ、総司令部の指導により、昭和二一年（1946）に日本国憲法を公布した。憲法改正に伴い、司法関連の法令も検討され、昭和二二年（1947）に裁判所法が施行された。これに伴い、谷村区裁判所は廃止され、甲府地方裁判所谷村支部・谷村簡易裁判所が設置された。地方裁判所は、1）内乱罪、訴額5,000円を越えない請求、罰金以下の刑に係る訴訟以外の第一審、2）簡易裁判所の判決に対する控訴、3）簡易裁判所の決定に対する抗告について裁判権を持ち、簡易裁判所は小額・軽微な事件について第一審の裁判権を持つ裁判所である。昭和三十年（1955）、都留市制施行により、庁名が甲府地方裁判所都留支部・都留簡易裁判所に変更された。昭和三三年（1958）6月、庁舎の建築工事が着手され、昭和三四年（1959）3月に竣工した。庁舎は鉄筋コンクリート2階建であり、昭和五十年（1975）、庁舎の増築工事を行った。規模は、鉄筋コンクリート2階建であった。

第Ⅲ章 調査の方法と基本層位

第1節 発掘調査の方法

1. 調査区の規模

平成26年度の調査区は東西約38m、南北約28mの長方形に近い形状で、A区とした。平成27年度の調査区はA区の外周と南西側に広がる逆T字形の範囲であり、B区と呼称した。庁舎が建設される長方形の範囲は、1面から4面まで調査を行ったが、逆T字形の張り出し部は、外構工事の対象範囲であり、施工時の掘削深度に応じ、東南端は2面、それ以外の範囲は1面まで調査を実施した。

調査対象面積は平面的には、約1,178㎡であるが、遺構面が4面検出されたため、総面積は約3,517㎡であった。調査を行った面積は、1面が880㎡、2面が793㎡、3面が773㎡、4面が1,071㎡である。なお、年度ごとの調査面積については、次の通りである。

	H26	H27	合計
1面	527㎡	353㎡	880㎡
2面	527㎡	266㎡	793㎡
3面	527㎡	246㎡	773㎡
4面	825㎡	246㎡	1,071㎡
小計	2,406㎡	1,111㎡	3,517㎡

2. 調査グリッドの設定

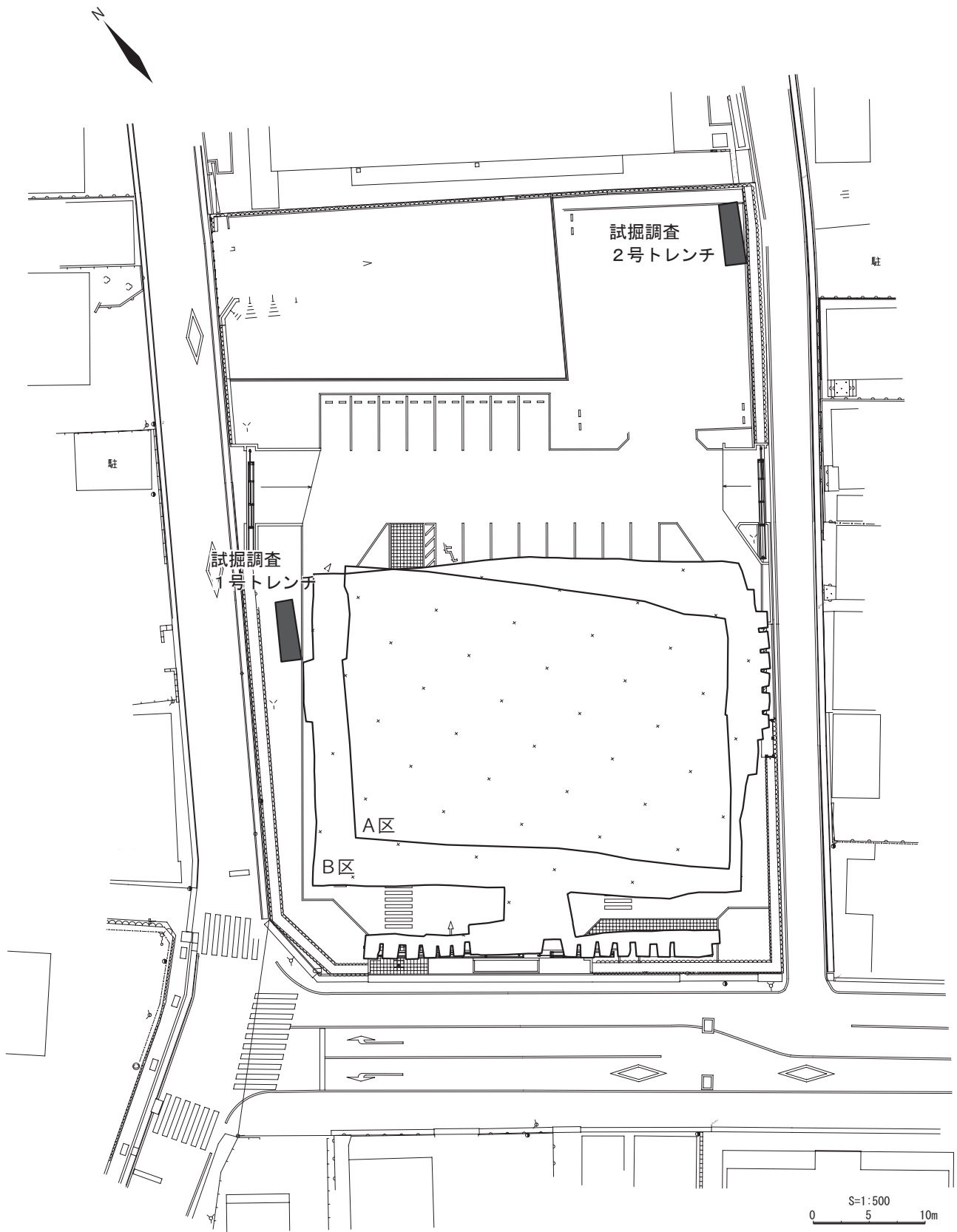
発掘調査の実施に際し、国土座標に基づく5mグリッドを設定した。方角杭については、南北ラインを西から東へアラビア数字で1・2・3の順に、東西ラインを南から北へアルファベット大文字でA・B・Cの順に記号を付し、ラインが交差してできる区画を、A-1・B-2の様と呼称した。

3. 表土層の除去

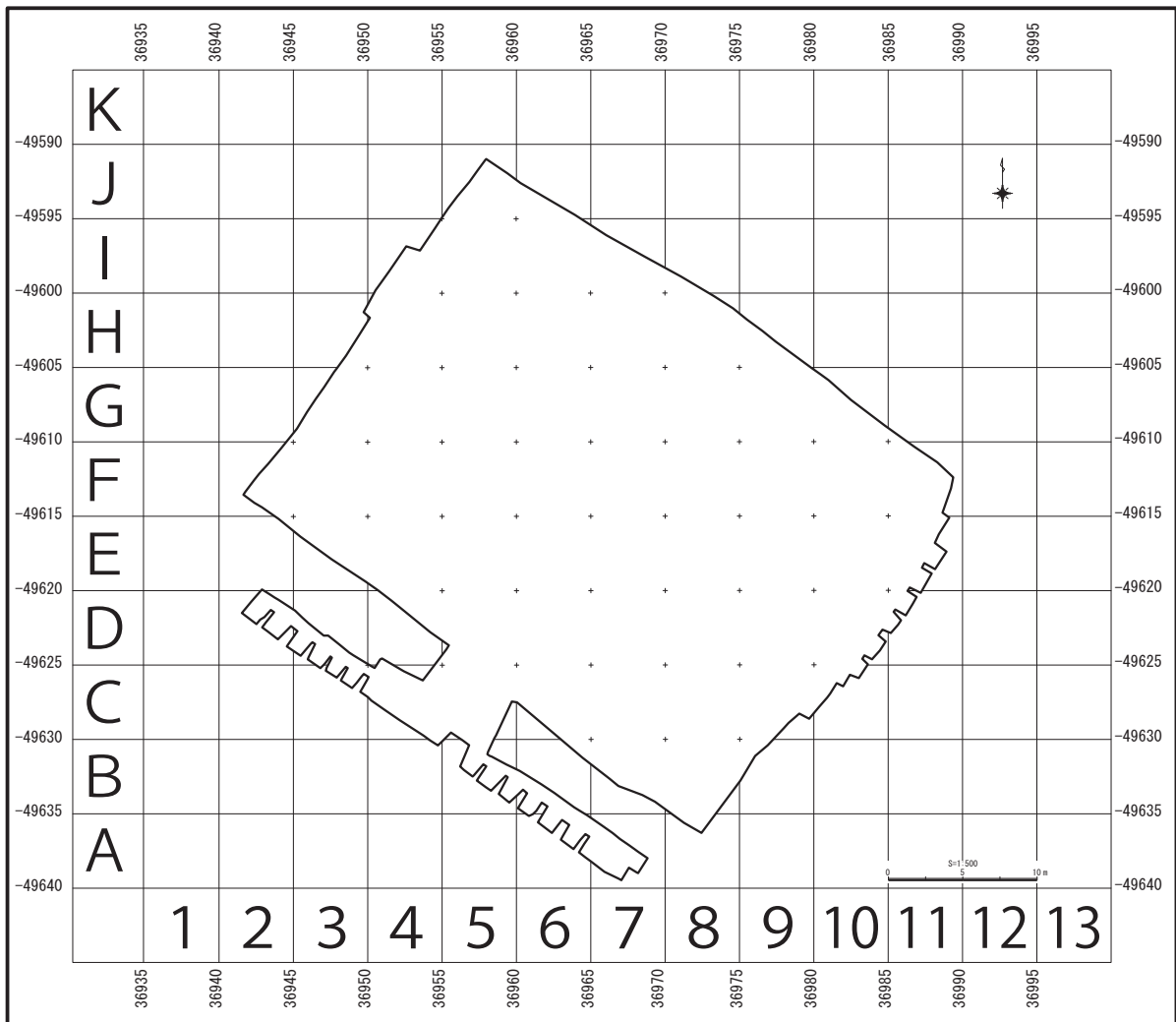
調査地点における土壌の堆積条件は近世以降とそれ以前では異なっている。古代・中世の遺構確認面を覆う土層は自然堆積と考えられる黒色土層であり、深掘りトレンチからは猿橋溶岩を含む土層の上に複数の火山灰層が堆積している。また、近世段階における造成土は、遺構面と同じく黒色土で構成されている。これに対し、近世以降の土層は黄褐色土層で構成されている。この土層は、調査地点の地山では確認されない土壌であり、客土と考えられる。この土層の層厚は複数の単位に分層され、近代において複数回にわたり、土地の土盛り造成を行ったと判断される。

遺構確認にあたっては、1回目の表土剥ぎの際に裁判所庁舎が建っていた範囲（以下、旧庁舎範囲と呼称。）の埋土を除去したところ、掘削された土層断面より、4つの遺構面が確認された。ただし、1面の構成土層であるにぶい黄褐色土層と覆土である黄褐色土層は類似性が強いため、1面の遺構検出にあたっては、1号石列遺構など、礫を用いた遺構の検出レベルから、0.4サイズの重機による掘り下げを進めた。掘り下げにより、調査区の西側は旧庁舎施工時に埋められたと考えられるコンクリート片が出土したのに対し、東側では遺物が発見されたことから、人力により掘り下げた。

2面を構成する土層は、黒褐色土であり、1面の土色と異なっていたため、比較的容易に掘り下げを行うことができた。1面から2面に掘削する際には、遺物が出土したため、人力による掘り下げを中心に行い、1面の遺構を構成する礫を除去する際に0.25サイズの重機にて作業を行った。一連の遺構検出作業により、2面の北東側からは、複数の焼土集中が見つかっており、廃絶した生活面にそのまま土盛りして、新しい段階の地盤を構築していたことや、2面の遺構覆土が黄褐色土であることも多いことから、2面の遺構埋没を待たずに、客土（黄褐色土）を土盛りし、新たな生活面が築かれたことが分かる。



第3図 調査区位置図



第4図 グリッド設定図

3面を構成する土壌は、2面と類似する黒褐色土であり、2面から3面までの土層に、遺物が包含されることから、2面から3面までの間は連続的に使用されたと考えられる。また、3面よりも下のレベルにて確認された遺構については、3面下と捉えたが、それ以外にも上下に先後関係を持つ遺構（2号石列遺構と7号溝状遺構など）も確認されており、土地を連続的に使用しながら遺構を構築していた様相が確認された。ただし、細かな先後関係を持つ遺構については、現場段階で細分すると、混乱する可能性があることから、一括して3面所属の遺構と捉えた。2面から3面に掘り下げる際には、遺物が出土したため、人力による掘り下げを行った。

4面を構成する土壌は、暗灰黄色土層であり、3面と4面の間には自然堆積層である黒色土層が堆積する。このため、0.4サイズの重機による掘り下げを実施した。

4. 表土層除去後の調査

遺構確認に際しては、旧庁舎範囲の土層断面観察で確認された土層を基準に掘り下げを行った。掘り下げを行う際には、ジョレンを用いてプラン確認を行った。平面プランが検出された遺構については、遺構の規模を勘案し、土層観察用のベルトを設け、半截した。記録図面については、遺構平面図・断面図・土層堆積状況図・遺物出土状況図などを調査の進捗に応じ、適宜作成した。測量方法については、平面図は空撮図化によるのと同時に光波測量機を用いて記録し、立面図は方眼紙への計測図化により作成した。立面図作成に伴うセクション・エレベーションポイントや出土遺物は光波測量機により原位置の記録に努め、微細図については対空標識を用いた写真図化を併用した。また、遺構・遺物の平

面図中に高さのデータを記入し、3次元データとしての記録に努めた。写真については、遺構検出・半截・完掘状況・遺物出土状況などを中心に撮影した。撮影機材は、小型一眼レフカメラによる35mmモノクロネガ・カラーポジを主体に使用し、デジタルカメラも用いて記録した。

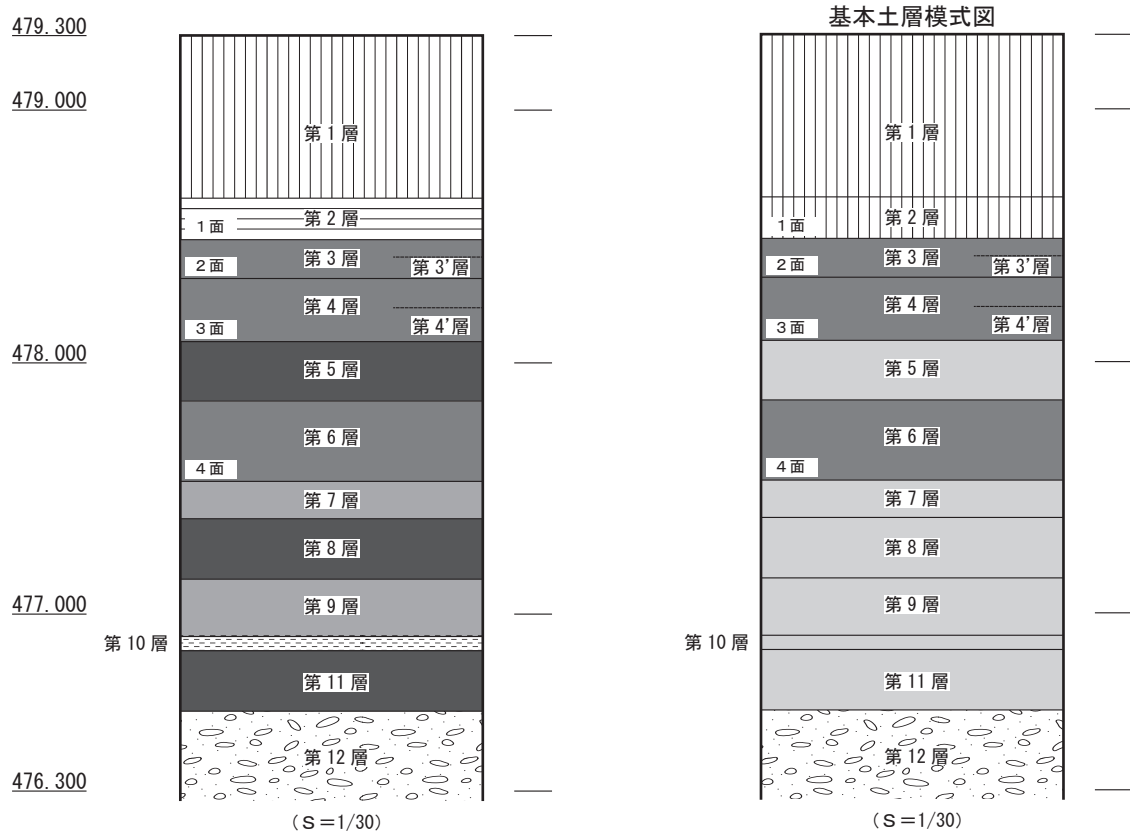
第2節 基本層位

今回の発掘調査によって、4つの遺構面が検出された。1面はにぶい黄褐色土層（調査区東側で地表下64cm）、2面は黒褐色土層（調査区東側で地表下80cm）、3面は黒褐色土層（調査区東側で地表下96cm）、4面は暗灰黄色土層（調査区東側で地表下144cm）である。1面については、前記した通り、その覆土と同じく土地の造成のために運び込まれたものと判断される。造成された単位としては、第1層と第2層（1面）の2単位が想定されるが、1面の遺構確認レベルが遺構ごとに異なる地盤高で検出されていることから、より細かな盛土の単位を想定することもできる。第3層（2面）は、自然堆積層を母材として土壌化した黒褐色土層である。機能していた生活面の上に客土である黄褐色土層が被覆している。遺構の掘り下げの段階で、第3層（2面）の検出面より下層において、遺構面が把握されたため、これを第3'層（2面下）と捉えた。また、第4層（3面）でも、検出面よりも下層において、遺構面が把握されたため、これを第4'層（3面下）とした。第4'層（3面下）からは、17世紀後葉から18世紀前葉の遺物を包含する溝状遺構等が検出されたが、溝状遺構は上部が削平された形状で確認されている。このため、近世前半段階まで機能していた生活面について、地盤高を下げるように改変した後、継続的に居住したと解釈される。第3層（2面）・第3'層（2面下）・第4層（3面）・第4'層（3面下）は、ほぼ同質な土壌であり、近世段階で堆積したものであるが、掘り下げの過程で多くの遺構が確認された面を第4層（3面）として捉えられる。4面の遺構は、古代・中世・近世など年代が異なるものが混在している。

旧庁舎施工範囲に深掘りトレンチを設定し、地表下3mまで掘り下げを行った。この結果、地表下177cmより下は火山灰などの自然堆積層であることが分かった。特に第10層の黒色土層は、第11層の凹部にスコリアが堆積したものである。この土層における構成土壌の粒子は、都留バイパス建設事業に伴う玉川金山遺跡発掘調査の2区東壁Ⅶ層とⅧ層の間に位置するスコリア層に形状が類似する。玉川金山遺跡Ⅶ層からⅨ層の年代的な根拠については、Ⅵ層とⅩ層を対象としてAMS年代測定分析を行った結果、Ⅵ層は $2,870 \pm 40$ 、Ⅹ層は $4,390 \pm 40$ の数値を得ている。従って、第10層の年代的な位置づけとしては、 $2,870 \pm 40$ から $4,390 \pm 40$ 、つまり縄文時代中期から後期の間に降灰した火山灰であると推定される。

深掘りトレンチの最下層においては、粘性を有するにぶい黄色土層が堆積するが、検出レベルに差異を有するものの、猿橋溶岩の岩体上に堆積し、層中に猿橋溶岩片を包含する。

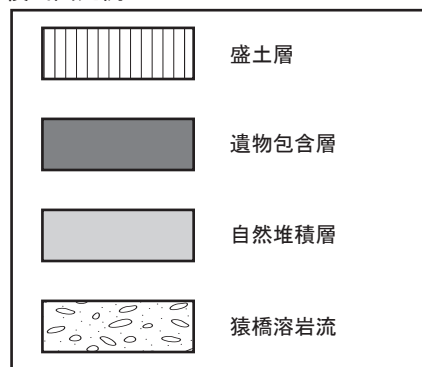
遺跡の断面観察から土層を分類すると、1面の構成土壌より上の黄褐色土層と猿橋溶岩混じり粘性を有するにぶい黄色土層、これらの土層の間にある複数の火山灰層という3つの土層に大別される。火山灰土層の中位において、古代・中世段階の土地利用が開始され、火山灰層上位にて谷村城下町から谷村区裁判所まで連続的に土地利用が行われたと位置づけることができる。



基本土層注記

第1層	表土層	裁判所を造成した際の盛土層
第2層	にぶい黄褐色土層 (第1面)	しまり◎・粘性× 礫(φ2~5mm)、明黄褐色土
第3層	黒褐色土層 (第2面)	しまり○・粘性× 褐色粒子(φ2~3mm)
第4層	黒褐色土層 (第3面)	しまり○・粘性× 褐色粒子(φ2~3mm)、粗砂層
第5層	黒色土層	しまり○・粘性× 褐色粒子(φ2~3mm)
第6層	暗灰黄色土層 (第4面)	しまり○・粘性× 褐色粒子(φ2~3mm)
第7層	黒褐色土層	しまり○・粘性× 褐色粒子(φ2~3mm)
第8層	黒色土層	しまり◎・粘性× 褐色粒子(φ2~3mm)
第9層	黒褐色土層	しまり△・粘性× 褐色粒子(φ2~3mm)
第10層	黒色土層	しまり×・粘性×
第11層	黒色土層	しまり○・粘性× 褐色粒子(φ2~3mm)
第12層	にぶい黄色土層	しまり○・粘性○ 褐色粒子(φ2~3mm)・溶岩

模式図凡例



第5図 基本土層図 (調査区東側)

第Ⅳ章 検出された遺構と遺物

第1節 調査の概要

今回の発掘調査によって、主に4つの遺構面があり、時代が異なる面の間を盛土や自然堆積土が覆っていることが明らかになった。なお、2面と3面の下には、検出レベルに差がある遺構面（2面下、3面下）が確認された。これらの面を1～4面と呼称する。以下に各遺構面の結果を記述する。なお、遺構・遺物データは一覧表として掲載し、遺構の総合的な検討については、第Ⅵ章の第2節に記載した。

第2節 検出された遺構

1. 1面の遺構

1面は、にぶい黄褐色土層で構成され、深さは地表下約0.2 mから0.6 mに位置する。1面では、石列遺構1基、敷石遺構2基、通路状遺構1基、水路2基、礫集中2基、土坑2基、溝状遺構2条、焼土集中2基、瓦溜3基が確認された。この面には1号石列遺構など谷村区裁判所に関連した遺構が検出されており、他の遺構も1号石列遺構と同じか、より上面に位置することから、1面の年代は明治時代以降に比定される。

1号石列遺構

位置 C・D・E - 5、D・E - 6グリッドに位置している。

形状 長軸10.46 m・短軸2.8 m、北東から南西方向に緑色凝灰岩の板状礫を7列並べ、両側に溶岩の切石を埋設している。石列は南西隅が欠落しており、右端列の緑色凝灰岩においては、石列の主軸と直交する方向に溶岩の切石が配されている。これは石列遺構を使用した過程で、埋設し直していることを示している。石列は使用時の経年劣化により、破碎している部位が観察されるが、コンクリートなどの充填材により補修されている。

時期 第11期（谷村出張所・裁判所期）から第12期（裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 同じ形状の石列が、大正時代初期や昭和二十年代の谷村区裁判所を撮影した写真で確認されるため、谷村区裁判所の正門から建物までの道を石で舗装した遺構と判断される。1号石列遺構の北東側には、石列遺構を構成したと考えられる石材などがランダムに積み上げられた1号礫集中が検出されたが、これは、谷村区裁判所の立て替えに伴い、工事施工範囲と重なる1号石列遺構を外して、1ヶ所にまとめて廃棄したものと考えられる。1号礫集中の礫上面はほぼ同じレベルであるが、後の土地造成を考慮して、埋設した礫の高さを揃えたと考えられる。1号石列遺構を被覆する明黄褐色土層は、0.2 mから0.5 mの層厚であり、土地を造成するための土壌と判断される。また、B - 5グリッドからは、2基の門柱基礎と考えられるコンクリが確認されたが、1号石列遺構東縁の延長線上に2号門柱基礎が位置しており、写真でみる位置関係と異なる。このため、門柱基礎は1面より新しい地盤に伴うものと考えられる。

1号敷石遺構

位置 C - 8、C・D - 9・10グリッドに位置している。

形状 長軸9.85 m・短軸6.2 m、径の異なる礫（主に溶岩）を北東から南西方向に主軸を有するように長方形に配しており、東南端より1.8 m北東の位置で北西から南東に走向する石列も確認された。溶岩はいずれも角礫であり、平坦面を意識して埋設されていなかった。

遺物 第72図1は19世紀中葉、第72図2は19世紀後葉から20世紀前葉に位置づけられる。東南端を中心として、近代に比定される棧瓦746点が出土した。

時期 第12期（裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 礫は長方形に配されており、礫の長軸を垂直方向においてランダムに重ねられているものもある。礫の集積は、地盤を強化するために埋設されたものと判断される。したがって、1号敷石遺構の外周を構成する長方形の礫の上に建物が建てられていた可能性が強い。1号敷石遺構の北東側に位置

する通路状遺構は、検出レベルが1号敷石遺構と同じであることから、同時期の遺構と判断され、1号通路状遺構が1号敷石遺構の上に建てられていた建物に向かう通路と仮定すると1号敷石遺構と1号通路状遺構の接する位置が建物の入り口に比定される。

2号敷石遺構

位置 G・H-8・9 F・G-10 F-11 グリッドに位置している。

形状 長軸17.5m・短軸6.95m、深さ0.8mの掘り込みに直径0.1mから0.4mの礫を2から3段積み上げ、礫の間に粗砂を充填している。溝状の掘り込みは北東から南西方向に走向するものを軸として北東側に4条の掘り込みが伸びている。

遺物 第72図3は19世紀中葉、第72図4は19世紀後葉に位置づけられる。

時期 第11期（谷村出張所・裁判所期）から第12期（裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 溝状の掘り込みの中から検出された礫について規則的に配置するような意図は見受けられず、地盤を強化するために埋設されたものと判断される。時期的には裁判所期に位置づけられることから、裁判所の庁舎を建設する際に地盤を強化するために掘り込まれた遺構と判断される。

1号通路状遺構

位置 D・E-8、D-9 グリッドに位置している。

形状 長軸4.64m・短軸2.04m、北西から南東方向に主軸を持ち、平坦面を外側に向けた礫が並べられている。礫の上部は周囲よりも高く、盛土と礫により通路状の遺構を造成したと考えられる。ただし、北側の礫の並びは限定的であり、遺構を用いなくなった後に、礫を外すなどして、地形を改変したと考えられる。

時期 第12期（裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 谷村区裁判所における庁舎と付属の建物（1号敷石遺構）を結ぶ、通路状の遺構である可能性を有す。池跡が1号通路状遺構の造成土を掘り込んでいることから、通路状遺構が構築された後に、池を造成したと考えられる。

1号水路

位置 B-8・9、C-8 グリッドに位置している。

形状 長軸5.85m・短軸2.0m、北西から南東方向に主軸を持ち、礫を2段に組み、平坦面を対向させる様に配して水路を構成する。水路を構成する礫の裏側には裏栗石が観察される。

遺物 第72図8は19世紀前葉から中葉、第72図9は20世紀前葉から20世紀中葉、第72図10は20世紀中葉に位置づけられる。なお、1号水路から出土した遺物の中で、2号礫集中と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第12期（裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 水路の北西端、池跡との接点において石積みが途切れているが、池の造成時に掘削したものと考えられる。本来は屈曲して2号水路に連続した可能性が高い。水路内には北西から南東方向に主軸を持つ土管があるが、水路が廃絶した後に水路に代わる機能を持たせるために埋設されたと考えられる。1号水路の6・7層は、自然堆積による土層であるが、2層から5層は埋め戻しに伴う土層と判断される。

2号水路

位置 A-7 グリッドに位置している。

形状 長軸2.4m・短軸2.2m、北東から南西方向に主軸を持ち、礫を3段に組み、平坦面を対向させる様に配して水路を構成する。

遺物 第73図12は見込み部に「米穀薪炭雑貨 西浦商店 電谷村七〇」、第73図16は蓋の裏側に「谷村町 つちや醤油店」と記されており、都留市内の店舗が発注した陶磁器と考えられる。第73図17は、陶器製卸皿であり、「会津天栄式 第一四一六六号」と記されている。第二次世界大戦中の金属製卸具

の代替物として生産されたものと考えられる。なお、2号水路から出土した遺物の中で、1号溝状遺構と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第12期（裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 水路内の上部には、水路と同じ主軸方向に塩化ビニールパイプが埋設されていた。パイプの埋設時に水路上部を大きく掘削したと考えられる。ただし、水路内の2・3層は、粗砂を伴っており、堆積土壌が水路内をほぼ充填するまで、水路が用いられていたことが分かる。1面の遺構面は、水路を構成する礫の上面と同じレベルに位置している。

2号礫集中

位置 A-8、B-7・8グリッドに位置している。

形状 長軸5.6m・短軸4.18m、長方形のプランで北東から南西方向に主軸を有する。

遺物 第73図21は第二次世界大戦中の蓋（統制磁器）、第74図29は占領期の皿である。

時期 第12期（裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 不連続に分布する礫の下には、厚さ2cmのコンクリ床があり、南側にはドラム管が埋設されていた。コンクリ床の上を黄褐色土層が覆っていることから、1号石列遺構と同じ時期の遺構であると考えられる。

2. 2面の遺構

2面は、黒褐色土層で構成され、深さは地表下約0.7mから1mに位置する。2面では、道路状遺構1基、礫集中1基、土坑16基、溝状遺構6条、焼土集中9基、瓦溜5基が確認された。やや検出レベルが下の遺構面である2面下からは、石組1基、焼土集中1基が検出された。2面には谷村区裁判所に葺かれたと考えられる棧瓦を伴う遺構と共に、江戸時代の遺物も遺構に伴って出土していることから、2面の年代は江戸時代後葉から明治時代に比定される。

1号道路状遺構

位置 D・E-5・6グリッドに位置している。

形状 長軸9.2m・短軸3.44m、北東から南西方向に主軸を有するように、幅1.4mから2.0mの平坦部を持つ道路状の遺構が確認された。遺構は、周囲の地盤より0.15mから0.3m高くなっている。

遺物 1号道路状遺構まで掘り下げる過程で、近世の遺物が出土した。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）から第11期（谷村出張所・裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 1面1号石列遺構と平面的な位置を比較すると、1号道路状遺構の中心が1面1号石列遺構より西側に位置しているが、ほぼ共通する範囲にある。このため、1面1号石列遺構は1号道路状遺構の機能を踏襲して構築された遺構と考えられる。1号道路状遺構も敷地入り口から建物までの道路と位置づけられる。1面1号石列遺構と1号道路状遺構の間には、暗灰黄色土層（5層）・明黄褐色土層（7層）・明黄褐色土層（9層）が観察され、色調や包含物での差異は認められるものの、ほぼ同質な土層と考えられる。このため、2面が使用されなくなってから、土を盛って1面を構築したと考えられる。

3号石組

位置 H・I-8グリッドに位置している。2面よりやや下位（2面下）において検出された。

形状 長軸1.52m・短軸1.38mの範囲に、東側から西側を主軸として礫の集中が見られ、礫の下位において、長軸1.26m・短軸0.94m、深さ0.17mの規模で土坑状の掘り込みが認められた。

遺物 第108図613は外周を方形、内部を円筒形に加工した石製品であるが、右側及び下端を欠損しているため、全体の形状は不明である。石製品に火熱を受けた痕跡が認められることから、竈の上部で羽釜等かける石材であった可能性を有する。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）から第11期（谷村出張所・裁判所期）における遺構と考

えられる。

性格 3号石組は、東側において礫を弧状に配している様に見られる点以外は意図性を感じさせない。ただし、遺構が廃絶された段階で、焼土の上に構築されていた礫を壊したためと考えられる。土坑状の掘り込みの断面を観察すると、土層の中位に炭化物層が確認され、その上下に焼土層が堆積している。焼土層の単位が複数にわたることから、繰り返し燃焼していることが分かる。また、3号石組の東側には、不連続ながらも北東から南西方向に続く礫が検出されたが、この石を境に西側の地盤はより高くなる。3号石組は、家屋内の土間にある竈跡である可能性が指摘できる。

7号土坑

位置 F-10グリッドに位置している。

形状 長軸0.76m・短軸0.7m、上場は円形、下場は長楕円形を呈する。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）から第11期（谷村出張所・裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 不整形な1号焼土集中と隣接するが、7号土坑の覆土に焼土は含まれないため、1号焼土集中、7号土坑の順で形成されたと考えられる。土坑覆土の上位は黄褐色土層であり、2面を覆っている土層と同質である。このため、開口した土坑を含めて、盛土が行われたと判断される。

9号土坑

位置 F-9グリッドに位置している。

形状 長軸2.1m・短軸0.91m、上場は不整形、下場は長楕円形を呈する。

遺物 「泉湊伊□」の刻印が施された焼塩壺片（第74図39）が出土した。また、遺構確認面において、9号土坑北東側から矢穴付きの礫（第110図653）が検出されている。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）から第11期（谷村出張所・裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 不整形な2・3号焼土集中と隣接するが、焼土集中の後に、9号土坑が形成されたと考えられる。遺構の底面においては、複数の土層が確認されるが、上位から中位は埋め戻した土層（1層）が充填されている。1層からは、礫や瓦片などが出土している。

22号溝状遺構

位置 E・F-3グリッドに位置している。

形状 長軸7.62m・短軸2.4m、南北方向に主軸を持ち、不連続ながらも平坦面を対向させる様に礫を配している。遺構覆土は粗砂・礫交じりの土層を主としており、層厚が薄いものの、礫の並びや上場を越えて東側に広がる。この土層に含まれる遺物は、22号溝状遺構出土の遺物と捉えた。

遺物 22号溝状遺構から出土した磁器製の碗類は、江戸時代後期から明治時代の移行期（19世紀中葉から後葉）に位置づけられるのに対し、他の器種では18世紀前葉から中葉の第75図55や18世紀後葉の第75図53などやや遡る資料も含む。ただし、遺物の年代を全体で捉えると、江戸時代後期から明治時代に比定される資料が組成の中心を占める。土製品としては、蛙・犬・魚を模した土製像（第103図503・504・505）や鳩笛（第103図502）、箱庭道具（第103図511・512・513）など多様な資料が出土した。第111図655は22号溝状遺構北東側で確認された円形礫であるが、形状から礎石であった可能性を有する。第113図704は、椎の実形の形状を呈しており、ルミエー銃の銃弾である。第122図1085・1086・1087はワインボトルであるが、底面の器厚が一定でない。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）から第11期（谷村出張所・裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 礫の平坦面を対向するように配し、内部に粗砂・礫交じりの土層が堆積していることから、水路として用いられた遺構と考えられる。ただし、対向した礫は不連続であり、水路としての機能が失われた段階で、礫の抜き取りを行った可能性がある。22号溝状遺構の北側は覆土と地山の差が明確でなかったため、遺構の形状が把握できなかった。遺構の廃絶後に土地の造成を行った可能性を有する。

4号瓦溜

位置 E-8グリッドに位置している。

形状 長軸1.2m・短軸1.0m、上・下場は不整形を呈する。

遺物 遺構内から、棧瓦972点が出土した。これらの瓦は、谷村区裁判所庁舎に葺かれていたと考えられる。

時期 第12期（裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 谷村区裁判所の瓦を廃棄する際に、掘り込まれた遺構である。

5号瓦溜

位置 D-7グリッドに位置している。

形状 長軸1.15m・短軸0.95m、上・下場は隅丸方形を呈する。

遺物 遺構内から、棧瓦459点が出土した。これらの瓦は、谷村区裁判所庁舎に葺かれていたと考えられる。瓦以外にもガラス瓶など近代に位置づけられる資料が伴出した。第77図91は明治期の肥前産中皿、第77図92は明治期の捏鉢である。第107図592の瓦には、「○に石」の刻印が施されている。第113図709は鉄砲玉と考えられる。

時期 第12期（裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 谷村区裁判所の瓦を廃棄する際に、掘り込まれた遺構である。2面を覆っていた、にぶい黄褐色土層を除去し、黒褐色土層中を遺構確認した過程で検出された。

8号瓦溜

位置 F・G-5グリッドに位置している。

形状 長軸1.58m・短軸1.56m、上場は隅丸方形、下場は長楕円形を呈する。

遺物 遺構内から、棧瓦2,296点が出土した。これらの瓦は、谷村区裁判所庁舎に葺かれていたと考えられる。第118図882から886は、全て渡来銭である。

時期 第12期（裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 谷村区裁判所の瓦を廃棄する際に、掘り込まれた遺構である。西側に6号瓦溜があるが、同時期の遺構として捉えられる。これらの遺構は、破損した瓦をさほど動かさずに投棄できる場所に構築したために、裁判所建物の外周部に掘り込まれたと考えられる。

3.3面の遺構

3面は、黒褐色土層で構成され、深さは地表下約100cmに位置する。3面では、石列遺構1基、石組5基、礫集中11基、土坑48基、溝状遺構20基、焼土集中2基、炭化物集中1基、瓦溜1基が確認された。やや検出レベルが下の遺構面である3面下からは、敷石遺構2基、礫集中1基、土坑12基、溝状遺構3基が検出された。3面には水路など絵図で確認できる遺構と共に、江戸時代の遺物が出土している。また、中世の遺物を包含する遺構も確認されていることから、3面の年代は中世、江戸時代に比定される。

2号石列遺構

位置 D・E-8グリッドに位置している。

形状 長軸2.38m・短軸0.5m、北西から南東方向に主軸を持つ。2号石列遺構より南東方向に5mほど離れた位置で礫が対向するように配されていた。両者の間は池が構築されたため、削平された可能性が高い。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 江戸時代においても近代以降とほぼ同じ敷地範囲を使用していたためか、敷地の長軸に平行する、ないしは直交する形状を示す遺構が多い。この点で、2号石列遺構は敷地範囲と全く異なる北西から南東方向の軸線であり、どのような背景で遺構が構築されたのか、検討を要する。2号石列遺構

の下位には、7号溝状遺構が確認されることから、7号溝状遺構が埋没し、土地造成を行った後に2号石列遺構が形成されたと判断される。

3号敷石遺構

位置 G-9グリッドに位置している。3面よりやや下位（3面下）において検出された。

形状 長軸 2.97 m・短軸 0.83 m、北西から南東方向に主軸を持つ。

遺物 第109図626は、敷石から検出された回転臼である。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 3号敷石遺構は、不連続ながらも平坦面を意識して礫を埋設している遺構である。建物の礎石列として構築された可能性を有している。

1号石組

位置 C・D-6グリッドに位置している。

形状 長軸 2.73 m・短軸 1.98 m、長楕円形のプラン内部に複数の礫で遺構を構築している。1号石組の南西側には地山である猿橋溶岩の上に礫で石垣を構築し、南東側には、半球形に礫を組み上げている。遺構西側の底面には、猿橋溶岩が広がり、溶岩の上には炭化物粒子の広がり認められる。遺構底面では、南東側の石組に向かって、南西から北東方向に主軸を持つ石列も確認される。南東側の石組底面には、30号溝状遺構の底面と同じく粘土が貼られている。

遺物 第78図93は17世紀後葉から18世紀前葉の清代、景德鎮窯の碗である。第78図94は18世紀後葉から19世紀前葉の小碗、第78図96は19世紀前葉の中鉢である。第113図710は南西側に位置する溶岩直上の炭化物範囲から出土した刀子片である。なお、1号石組から出土した遺物の中で、2号石組と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 1号石組は、30号溝状遺構を介して2号石組とつながっていることから、3つの遺構が併存することで機能を果たしていた同時期の遺構であると考えられる。1号石組の検出段階で北東側に大形の礫が平坦面を上にして並べるように配されていた。その下位においては、北側と南側に、大形礫を支えるように南西から北東方向に主軸を持つ石列が確認された。遺構覆土である暗灰黄色土層（2層）は60cmもの層厚であるのに対し、南西側の土層は複数の単位に分化する。

2号石組

位置 C・D-5グリッドに位置している。

形状 調査区外南西側に遺構が広がっているため、全体の形状は明らかではないが、確認される範囲で長軸 1.9 m・短軸 1.17 m、方形の土坑の壁面に礫を石垣状に積み上げている。その北側には、30号溝状遺構に連続する浅い掘り方がある。30号溝状遺構と接する位置において、溝状遺構を覆うように礫が配されている。遺構の平面的な単位としては、この地点において、石組と30号溝状遺構が機能的に分化していたのかもしれない。

遺物 第78図100は19世紀中葉の小碗、第78図101は18世紀後葉から19世紀前葉の中皿、第78図102・103・104は19世紀代の灯明皿である。鳩笛（第104図516）、ミニチュアの秉燭（第104図517）なども出土した。なお、2号石組から出土した遺物の中で、1号石組、34号溝状遺構と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 遺構の北側には、3面直上から約90cmの板材が炭化した状態で出土した。2号石組の底面には灰色粘土層（9層～11層）が貼られ、その上に炭化物粒子の集積層である黒色土層（6層）が堆積する。

5号石組遺構

位置 J-5グリッドに位置している。

形状 長軸 1.72 m・短軸 1.62 m、溶岩を主体とする礫により、小口の平坦面を内側に向け、2段から

4段積み上げて、正円形に構築している。

遺物 18世紀後葉までの陶磁器片が出土している。

時期 第9期（谷村陣屋期 [18世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 北東側において平坦面を上に向けた礫が北東から南西方向を主軸として認められた。これらの礫と5号石組遺構は同時期であり、関連する遺構と考えることができる。5号石組遺構は円形に石を組んでおり、井戸として用いられた可能性を有する。ただし、検出面から底面まで60cmほどであり、地下水脈から水を汲むような構造ではなく、水を溜めるために構築された可能性を有する。覆土上位において、礫が斜めに塞ぐ様な形状で検出された。礫より上はほぼ単層であるのに対し、礫の下位は複数の土層が確認される。このため、埋没していった井戸を廃絶するために、礫と埋土（2層）が施されたと考えられる。また、2面の段階において、1号井戸と重複する範囲に7号礫集中が確認されたが、1号井戸廃絶後に遺構確認面より上位にあった1号井戸関連の礫を取り壊したために、ランダムな礫の広がりとして検出されたのかもしれない。

6号石組遺構

位置 G・H - 3・4グリッドに位置している。

形状 長軸1.6m・短軸1.4m、礫を1段から2段積み上げて、長楕円形に構築している。

遺物 19世紀中葉までの陶磁器片が出土している。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 6号石組遺構は検出面から底面まで25cmほどであるが、地山層である暗灰黄色粗砂層に浸透した地下水を汲むために構築された可能性を有する。遺構の検出段階において、南側より内部を塞ぐような礫が検出された。

16号土坑

位置 E - 8・9グリッドに位置している。

形状 長軸2.76m・短軸2.12m、方形の掘り方の四方に石垣状に礫を積み上げて遺構を構築している。

遺物 第79図112・114・120・121は19世紀前葉、第79図115・122、第80図123は19世紀前葉から中葉に位置づけられる。第79図118は19世紀中葉から後葉、119は19世紀後葉、第79図116・117は明治期の資料であり、これらの時期は遺構の廃絶段階における年代を示していると考えられる。第104図520は浦島太郎を模した土製人形、第104図521は亀を模した泥面子である。なお、16号土坑から出土した遺物の中で、18・25号土坑、10号溝状遺構と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）における遺構で、19世紀前葉から中葉に使用され、19世紀後葉に埋没した遺構と考えられる。

性格 遺構確認面から底面まで1.43mほどの比高差を有していることから、使用時には地下構造を持つ遺構として用いられたと推察される。昭和三三年（1958）から三四年（1959）に鉄筋コンクリートの庁舎を造成した際に掘削され、遺構の北東側が削平されているため、昇降施設については明らかではない。ただし、北西壁において礫が抜けている箇所が確認され、その南側には、長方形の大形礫を縦位に組み上げていることから、北西壁に昇降施設があったものと考えられる。遺構底面付近では、炭化した穀物塊と考えられる資料が出土した。覆土下位では、礫が集積するように集められており、周囲からは焼土ブロックが確認された。この段階では遺構の本来の機能が失われたと言える。覆土上位から中位においては、明黄褐色土層と黄灰色土層が互層状に4単位程度確認された。明黄褐色土層においては、遺物はほとんど含まれないが、黄灰色土層は陶磁器片と共に、貝や骨などの動物遺体出土した。特に貝の出土量が著しく、居住者の食物残渣を投棄したと考えられる。また、明黄褐色土層は食物残渣を投棄した後に、悪臭などを防ぐため土質の異なる土壌を入れたのかもしれない。

19世紀段階の谷村陣屋に構築された地下室であり、遺構底面より炭化した穀物塊が見つかったことから、食物を備蓄していた機能を持っていた可能性を有する。江戸時代の地下室の類型から判断すると「石組み枱形穴蔵」に分類される。ただし、この分類では「開放性の掘り方の中に石組みの枱形の部屋を設置した地下室」と定義されるため、昇降施設を有する16号土坑は非典型的な事例なのかもしれ

れない。また、江戸城下町の事例を参照すると、大名藩邸や旗本屋敷に伴う地下室は建物外の空間に集中する傾向があるとのことであり、岐阜県高山陣屋跡の調査でも建物外から地下室が検出されている。このため、16号土坑の上に建物が存在したとは言えないが、食物残渣の投棄坑に転用していることから、建物の近くに構築された遺構であると考えることができる。

18号土坑

位置 D・E－8グリッドに位置している。

形状 長軸1.27m・短軸1.08m、隅丸方形のプランで東西方向に主軸を持つ。東側には22号土坑がある。

遺物 第80図131は19世紀前葉、第80図133は19世紀前葉から中葉、第80図127から130・135は19世紀中葉、第80図134・136、第81図137・138は19世紀後葉から20世紀前葉に位置づけられる。第80図126は見込み部に「名所佃島」の字と共に佃島の風景が描かれている。第80図127は表裏に盆栽と鶏が表現されている。なお、18号土坑から出土した遺物の中で、16号土坑、3・10号溝状遺構と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）における遺構で、19世紀前葉から中葉に使用され、19世紀後葉に埋没した遺構と考えられる。

性格 灰色粗砂層の中に陶磁器片や動物遺体を包含し、層中から切断痕を有すマダイ前頭骨が出土している。また、陶磁器において酒器が一定量組成しており、宴会の廃棄物である可能性を有する。

25号土坑

位置 C－7グリッドに位置している。

形状 長軸1.24m・短軸1.06m、長楕円形のプランで北西から南東方向に主軸を持つ。北西側で5号溝状遺構、南西側で28号溝状遺構と接している。

遺物 第81図143・150は18世紀後葉から19世紀前葉、第81図142・147・149は19世紀前葉から中葉、第81図144・145・146は19世紀前葉、第81図148は19世紀後葉に位置づけられる。なお、25号土坑から出土した遺物の中で、16・23号土坑と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 遺構内を充填している土層は、灰色粗砂層である。灰色粗砂層は、3・7号溝状遺構などの堆積土層と共通し、水路において粒径の粗い土砂が流下せずに堆積したものと考えられる。このため、溝状遺構内の堆積土砂の片付けのために土坑が構築され、土が捨てられた可能性を有する。ただし、25号土坑は遺構底面まで1.08mを測るため、かなり大規模な水路の浚渫が想定される。

59号土坑

位置 D－6・7グリッドに位置している。3面よりやや下位（3面下）において検出された。

形状 長軸1.16m・短軸0.67m、不整形のプランで南西から北東方向に主軸を有する。

遺物 第82図157は18世紀後葉から19世紀前葉の清代景德鎮窯で焼成された中鉢である。第82図164は18世紀後葉から19世紀中葉、第82図165は19世紀前葉、第82図155・156・158は19世紀中葉、第82図159から162・167、第83図169は19世紀中葉から後葉、第82図163・168、第83図170は19世紀後葉に位置づけられる。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）における遺構で、19世紀前葉から中葉に使用され、19世紀後葉に埋没した遺構と考えられる。

性格 陶磁器を含む廃棄物を捨てるために掘削された遺構と考えられる。第82図157、第83図169・170など良質な陶磁器が組成している点が注目される。

197号土坑

位置 D－5グリッドに位置している。3面よりやや下位（3面下）において検出された。

形状 長軸0.6m・短軸0.39m、長楕円形のプランで北東から南西方向に主軸を有する。

遺物 18世紀中葉から18世紀後葉の陶磁器片が出土した。

時期 第9期（谷村陣屋期 [18世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 長軸30cm・短軸20cmの平坦な礫が覆土下位に確認された。土層堆積状況から、礫の上面で分層でき、礎石として機能した可能性を有する。

198号土坑

位置 D-5グリッドに位置している。3面よりやや下位（3面下）において検出された。

形状 長軸0.6m・短軸0.47m、長楕円形のプランで北東から南西方向に主軸を有する。

性格 長・短軸40cmの平坦な礫が覆土下位に確認された。土層堆積状況から、礫の上面で分層でき、礎石として機能した可能性を有する。

3号溝状遺構

位置 B-8、C-8・9、D-9、E・F-10グリッドに位置している。

形状 長軸18.8m・短軸1.0m、隅丸長方形のプランで北東から南西方向に主軸を有し、非連続ながらも両側に対向する礫を伴う。

遺物 第84図191は19世紀中葉から後葉の小碗であるが、見込みには西洋建築の絵柄が認められ、ヨーロッパ産の磁器であると考えられる。第84図204は18世紀後葉、第84図192・197は18世紀後葉から19世紀前葉、第83図185は19世紀前葉から中葉、第83図183・186、第84図187・188・190・194は19世紀中葉、第83図182、第84図195・196・200・203は19世紀中葉から後葉、第83図184、第84図189・201・202は19世紀後葉、第84図193・198・199は19世紀後葉から20世紀前葉に位置づけられる。瓦製品として、左三つ巴が施された軒棧瓦（第107図593）が出土した。第107図593・594の特徴（胎土：白色、焼成：良好）は、谷村区裁判所に葺かれていた近代の棧瓦（胎土：灰色、焼成：非常に良好）と異なるため、近世の瓦と考えられる。金属製品の第114図735・736は近接して出土しているが、使用時においては736が円筒形の形状を持ち、735が蓋状に組み合わせる形状であったと考えられる。735には花卉状、736の側面には鳥の意匠が施されている。なお、3号溝状遺構から出土した遺物の中で、17・18・156号土坑、26・35号溝状遺構と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）における遺構で、19世紀前葉から中葉に使用され、19世紀後葉に埋没した遺構と考えられる。

性格 遺構覆土に砂層が大きく堆積していることから、水路として機能した遺構であると考えられる。昭和三三年（1958）から三四年（1959）における鉄筋コンクリートの庁舎造営工事の際に、遺構の北東側を大きく掘削したが、遺構の軸線上にあり、覆土に砂層を含む掘り込みも3号溝状遺構として認定した。

6号溝状遺構

位置 C-8・9、D-9グリッドに位置している。

形状 長軸1.84m・短軸0.56m、長楕円形のプランで南西から北東方向に主軸を有する。

遺物 第85図212は16世紀後葉から17世紀前葉の明末清初に漳州窯で焼成された皿である。第85図211・213は19世紀中葉に位置づけられる。

性格 遺構の平面形は長楕円形を呈し、遺構覆土に砂層が堆積しているが、遺構の広がりも部分的である。6号溝状遺構は、3・8号溝状遺構に近いので、水路から浚渫した土壌を埋設した遺構と考えられる。

7号溝状遺構

位置 D-8グリッドに位置している。

形状 長軸3.96m・短軸1.12m、不整形のプランで北東から南西方向に主軸を有し、南端が屈曲する。

遺物 第85図215は18世紀後葉の小碗、第85図216は19世紀前葉の灯明皿である。第85図218は底面に墨書を有する11世紀前半の皿である。なお、7号溝状遺構から出土した遺物の中で、30号土坑と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第9期（谷村陣屋期 [18世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 覆土が砂層であることから水路であると考えられるが、遺構確認面から底面まで非常に浅い。遺構の形成過程として、水路が機能した段階の生活面が廃絶した後に、旧生活面を削平して新たな地盤を造成したため、水路の上面は残されなかったものと考えられる。遺構の南側は池跡と重複していたために、池の造成時に削られたと考えられる。また、北東端には2号石列遺構が斜めに横切るように構築されており、谷村陣屋の段階において様々な土地利用が図られていたことが分かる。

8号溝状遺構

位置 C-8グリッドに位置している。

形状 長軸2.98m・短軸0.85m、不整形のプランで南北方向に主軸を有し、北端が東側、南端が西側に屈曲する。

遺物 第85図220から223は18世紀代の土師質土器である。

時期 第9期（谷村陣屋期 [18世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 覆土の基質は土であるが砂や礫を包含しており、砂層に近似する。また、プランの東側に沿って礫が配されており、水路として用いられていた可能性を有する。

10号溝状遺構

位置 G-7・8、H-8グリッドに位置している。

形状 長軸2.33m・短軸0.9m、長方形のプランで南西から北東方向に主軸を有し、北東端が攪乱、南西端が昭和三三年（1958）から三四年（1959）における鉄筋コンクリートの庁舎建設工事によって掘削されている。南西側の底面には礫が連続しているが、水路状としての機能を持たせるために配置されたのかもしれない。

遺物 第86図225・226・227は16世紀後葉から17世紀前葉の播鉢、第86図229・230は16世紀後葉の土師質土器である。なお、10号溝状遺構から出土した遺物で、16・18号土坑と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第5期 [初期城下期] または第6期 [谷村城下町期（鳥居氏段階）] における遺構と考えられる。

性格 谷村城下町の初期段階に構築された遺構である。水路として用いられた可能性も有するが、検出されたのが部分的であるため断定するのは難しい。

11号溝状遺構

位置 F・G-10・11グリッドに位置している。3面よりやや下位（3面下）において検出された。

形状 長軸5.35m・短軸1.1m、長方形のプランで北東から南西方向に主軸を有し、南西端が昭和三三年（1958）から昭和三四年（1959）の鉄筋コンクリートの庁舎によって削平されている。遺構の上には4・10・11号礫集中が構築され、北東から南西方向に主軸を持つ1面2号敷石遺構によって遺構の一部が掘り込まれている。

遺物 第86図233は18世紀中葉の中皿、第86図231は18世紀後葉の中碗、第86図235は18世紀代の土師質土器である。第86図232・234は19世紀前葉から中葉に位置づけられる。なお、11号溝状遺構から出土した遺物の中で、10号礫集中と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第9期（谷村陣屋期 [18世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 遺構の北東側において、17・36号溝状遺構と切り合っている。17号溝状遺構はほぼ同時期、36号溝状遺構はより古い遺構と判断される。覆土の基質は土であるが砂や礫を包含しており、砂層に近似する。このため、水路として用いられた遺構と考えられるが、遺構確認面から底面まで非常に浅い。11号溝状遺構の上には4・10・11号礫集中が確認されたが、遺構を構成する礫は平面・断面に構造を有さず、礫の検出レベルにおいて大きな高低差は認められなかった。上記の事項を総合して判断すると、水路や関連施設に伴っていた礫が新たな生活面を構築する際に邪魔になったため、礫を取り外してランダムに敷き、新たな地盤を造成したと考えられる。

17号溝状遺構

位置 F-9・10グリッドに位置している。3面よりやや下位（3面下）において検出された。

形状 長軸1.66m・短軸1.5m、不整形のプランで北東から南西方向に主軸を有し、西端が昭和三三年（1958）から昭和三四年（1959）の鉄筋コンクリートの庁舎によって削平されている。東側は東西方向に主軸を持つ37号溝状遺構に連続している。遺構の上には5号礫集中が確認される。

遺物 第86図236は18世紀前葉の焼塩壺蓋である。

時期 第9期（谷村陣屋期 [18世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 遺構の主軸方向は異なるものの、37号溝状遺構と平面的にはほぼ連続しており、同時期に使用された遺構であると考えられる。覆土の基質は土であるが砂や礫を包含しており、砂層に近似する。このため、水路として用いられた遺構と考えられるが、遺構確認面から底面まで非常に浅い。17号溝状遺構の上には5号礫集中が確認されたが、遺構を構成する礫は平面・断面に構造を有さず、礫の検出レベルにおいて大きな高低差は認められない。

26号溝状遺構

位置 D・E-10・11グリッドに位置している。

形状 長軸4.8m・短軸0.8m、長方形のプランで北西から南東方向に主軸を有し、北東端が昭和三三年（1958）から昭和三四年（1959）の鉄筋コンクリートの庁舎によって削平されている。平坦面を内側に向けた礫が両側に配されている。

遺物 第87図239・246は19世紀前葉から中葉、第87図237・238・240・241は19世紀中葉、第87図242・243・247は19世紀中葉から後葉に位置づけられる。瓦製品として、近世の資料と判断される左三つ巴が施された軒棧瓦（第107図595）が出土した。第114図766は鶴と亀や植物文が施された酒燗器、第115図767は匙である。なお、26号溝状遺構から出土した遺物の中で、3・32・34号溝状遺構と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 北東から南西方向に主軸を有する32・34号溝状遺構と切り合っており、26号溝状遺構の方がより新しい遺構である。覆土は主に砂層であり、水路として機能した遺構と考えられる。

28号溝状遺構

位置 B-6、C-6・7、D-7グリッドに位置している。

形状 長軸4.57m・短軸3.3m、不整形のプランで南西から北東方向に主軸を有する。

遺物 第88図253は18世紀前葉から中葉、第88図254・255は18世紀中葉、第88図252は18世紀後葉から19世紀前葉に位置づけられる。第115図772は不整形な形状を呈した金属塊である。

時期 第9期（谷村陣屋期 [18世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 北東端部において5号土坑や5号溝状遺構と切り合っているが、28号溝状遺構はこれらの遺構より古い遺構と考えられる。西側がやや高くテラス状に広がり、東側に東西方向に軸を持つ溝状の落ち込みが確認された。東側の底面には、粒子が粗い砂層が堆積しており、水路としての機能を有していたと考えられる。東側の覆土である10層から15層が埋没した後に、粒径の細かく、鉄分の集積層を含む砂層である9層が確認されるが、この段階においても水路として使用された可能性を有する。

29号溝状遺構

位置 B-7グリッドに位置している。

形状 長軸1.24m・短軸0.52m、不整形のプランで南西から北東方向に主軸を有する。

遺物 第115図776は正円形の金属塊である。

時期 第9期（谷村陣屋期 [18世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 遺構覆土が28号溝状遺構と類似しており、同時期の遺構である可能性が強い。

30号溝状遺構

位置 C-6、D-5・6グリッドに位置している。

形状 長軸 2.81 m・短軸 0.52 m、不整形のプランで北西から南東方向に主軸を有し、西側において南西方向に屈曲する。小さな礫を両側に2段積み上げて、底面には粘土を貼っている。

遺物 第110図643は樋受石であるが、溝状遺構の側面に配された礫として転用されていた。

時期 第10期（谷村陣屋期〔19世紀段階〕）における遺構と考えられる。

性格 南東端に1号石組、南西端に2号石組と連続する。機能した時期は1・2号石組と同じであったと考えられる。底面に粘土を貼っていることから、2号石組から1号石組に水を流すための遺構であると判断される。

31号溝状遺構

位置 F-3・4グリッドに位置している。

形状 長軸 5.5 m・短軸 1.92 m、不整形のプランで南北方向に主軸を有し、北側において北西方向に屈曲する。

遺物 第88図271は16世紀後葉から17世紀前葉の明末清初に漳州窯で焼成された皿である。第88図261・262は18世紀後葉から19世紀前葉、第88図263・264・267は19世紀前葉、第88図266は19世紀前葉から中葉、第88図265は19世紀中葉、第88図268、第89図272は19世紀中葉から後葉に位置づけられる。第107図597は瓦当部に花卉状の意匠を有する小菊瓦である。第89図は板状の瓦質陶器に「天神」との刻書が施されている。

時期 第10期（谷村陣屋期〔19世紀段階〕）における遺構と考えられる。

性格 覆土に砂層を有し、部分的に石列を伴うことから、水路として用いられた遺構と考えられる。

32号溝状遺構

位置 E-10・11、F-11グリッドに位置している。

形状 長軸 7.4 m・短軸 0.75 m、長方形のプランで北東から南西方向に主軸を有する。

遺物 第89図274は17世紀後葉、第89図275・276は17世紀後葉から18世紀前葉、第89図277は18世紀後葉から19世紀前葉に位置づけられる。第115図780は鳥の意匠が施された銅碗である。なお、32号溝状遺構から出土した遺物の中で、26号溝状遺構と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第7期〔谷村城下町期（秋元氏段階）〕における遺構で、17世紀後葉まで使用され、18世紀前葉に廃絶した遺構と考えられる。

性格 覆土の砂層を含んでいることから、水路として機能した遺構と判断される。北西から南東方向に主軸を持つ26号溝状遺構に切られており、南西側の同軸上に34号溝状遺構が伸びている。遺構認定の段階でプランの単位でナンバリングしたが、32号と34号溝状遺構は確認面から底面までほぼ同じ深さであることから、一連の水路として認定できる。また、南東側を35号溝状遺構に切られている。遺構に包含される遺物の年代から谷村城下町段階で秋元氏が治めていた時代の遺構に比定される。

34号溝状遺構

位置 B-9、C・D-9・10、E-10グリッドに位置している。

形状 長軸 13.2 m・短軸 1.0 m、長方形のプランで北東から南西方向に主軸を有する。

遺物 第89図279から282は17世紀後葉、第89図283は19世紀中葉に位置づけられる。なお、34号溝状遺構から出土した遺物の中で、26号溝状遺構と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第7期〔谷村城下町期（秋元氏段階）〕における遺構で、32号溝状遺構と同じく17世紀後葉まで使用され、18世紀前葉に廃絶した遺構と考えられる。

性格 覆土の砂層を含んでいることから、水路として機能した遺構と判断される。北西から南東方向に主軸を持つ26号溝状遺構に切られており、北東側の同軸上に32号溝状遺構が伸びている。また、北東側を156号土坑に切られている。

36号溝状遺構

位置 F・G - 10 グリッドに位置している。

形状 長軸 1.5 m・短軸 0.49 m、不整形のプランで南北方向に主軸を有する。

遺物 第90図295は18世紀後葉から19世紀前葉、第90図296は19世紀前葉から中葉に位置づけられる。なお、36号溝状遺構から出土した遺物の中で、35号溝状遺構と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 遺構の南側において、11号溝状遺構と切りあっている。覆土の基質は土であるが砂や礫を包含しており、砂層に近似する。このため、水路として用いられた遺構と考えられる。北側にある礫は不連続ながらも水路のために構築された可能性を有する。

37号溝状遺構

位置 F - 10 グリッドに位置している。3面よりやや下位（3面下）において検出された。

形状 長軸 2.56 m・短軸 0.65 m、不整形のプランで東西方向に主軸を有する。遺構の上には10号礫集中が構築され、北東から南西方向に主軸を持つ1面2号敷石遺構によって遺構の一部が掘り込まれている。

時期 第9期（谷村陣屋期 [18世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 東端で11号溝状遺構、西端で17号溝状遺構に連続する。10号溝状遺構は平面・断面においてランダムな礫の集合であるが、遺構の中央で溝状遺構の上場ラインと平坦面の並びが同軸になっている礫が確認された。礫集中は、水路等を構成した礫を外して整地したために生じた遺構と考えられるが、水路に伴った礫の原位置を保っていた事例が遺構中央で確認された礫と考えることができる。

4. 4面の遺構

4面は、暗灰黄色土層で構成され、深さは地表下約145cmに位置する。4面では、土坑134基、溝状遺構12基、炭化物集中1基が確認された。4面からは奈良・平安時代や中世に比定される土坑群を中心とした遺構が検出された。また、近世や近代における掘削深度が深い遺構も確認された。

78号土坑

位置 D - 8・9 グリッドに位置している。

形状 長軸 2.2 m・短軸 1.5 m、長楕円形のプランで北西から南東方向に主軸を有する。

遺物 第92図309は18世紀前葉から中葉、第91図303・308は18世紀後葉から19世紀前葉、第91図302・305・306・307は19世紀前葉から中葉、第91図304は19世紀中葉、第92図310は19世紀中葉から後葉に位置づけられる。第115図792は鉄製の鎌である。

時期 第10期（谷村陣屋期 [19世紀段階]）における遺構と考えられる。

性格 下位の覆土を除き、上位から中位の堆積土層は細粒から粗粒の砂層であることから、開口していた窪地が埋没したと考えられる。

115号土坑

位置 E - 8 グリッドに位置している。

形状 長軸 0.87 m・短軸 0.57 m、不整形のプランで南北方向に主軸を有する。

遺物 奈良・平安時代における堀之内原型の甕片1点と駿東型甕片1点が出土した。

時期 奈良・平安時代である可能性を有する。

性格 土坑の底に長軸 35cm・短軸 23cm・厚さ 8cmの礫が埋設されていた。覆土は単層である。

119号土坑

位置 E - 7・8 グリッドに位置している。

形状 長軸 1.26 m・短軸 0.67 m、不整形のプランで北西から南東方向に主軸を有する。

遺物 奈良・平安時代における堀之内原型の甕片1点が出土した。

時期 奈良・平安時代である可能性を有する。

性格 土坑の底に長軸32cm・短軸30cmの礫が埋設されていた。遺構は複数の土層堆積を経て埋没したと考えられる。

122号土坑

位置 D・E-7グリッドに位置している。

形状 長軸3.1m・短軸1.68m、長楕円形のプランで南北方向に主軸を有する。

遺物 第92図315は18世紀後葉から19世紀前葉、第92図316・317は19世紀前葉から19世紀中葉、第92図314は19世紀中葉、第92図321は19世紀中葉から後葉、第92図320、第93図322・323は19世紀後葉、第92図318・319は19世紀後葉から20世紀前葉、第93図325・326・327は縄文時代中期に位置づけられる。第110図648は両面に刻字が施された硯であるが、裏面には「中村氏 安□」と刻まれている。なお、122号土坑から出土した遺物の中で、124号土坑と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第12期（裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 遺構確認面より40cmから90cmより下位で、長軸30cmから40cmの礫が出土する。下場は上場よりも南側に位置するため、南壁がオーバーハングしている。縄文土器も出土しているが、埋め戻した土壌に含まれたものであり、遺構に伴うものではないと考えられる。

124号土坑

位置 D・E-6・7グリッドに位置している。

形状 長軸1.64m・短軸1.1m、半円形のプランで北東から南西方向に主軸を有する。

遺物 第93図330・333は18世紀後葉、第93図329・331は18世紀後葉から19世紀前葉、第93図328・332は19世紀中葉から19世紀後葉に位置づけられる。なお、124号土坑から出土した遺物の中で、122号土坑と接合関係を有する資料が確認された。

時期 第12期（裁判所期）における遺構と考えられる。

性格 猿橋溶岩と接しており、東側を掘削して土坑を構築している。遺構底面には粘性を有する土層が確認され、その上位には炭化物・焼土粒子を含む土壌がある。覆土上位から中位には長軸20cmから40cmの礫が検出される。大きな溶岩を利用して遺構を構築している点や底面に粘性を有する土層がある点などは1号石組に類似している。

125号土坑

位置 E-7グリッドに位置している。

形状 長軸0.6m・短軸0.6m、楕円形のプランで北西から南東方向に主軸を有する。

遺物 奈良・平安時代における駿東型甕片1点が出土した。

時期 奈良・平安時代である可能性を有する。

性格 土坑の底に長軸40cm・短軸32cm・厚さ10cmの礫が埋設されていた。遺構は複数の土層堆積を経て埋没したと考えられる。

205号土坑

位置 F-8グリッドに位置している。

形状 長軸2.28m・短軸1.61m、不整形のプランで北東から南西方向に主軸を有する。

遺物 奈良・平安時代における坏・皿3点、灰釉陶器1点、駿東型甕片3点が出土した。

時期 奈良・平安時代である可能性を有する。

性格 遺構の中央、底面において、溶岩が検出された。

4号溝状遺構

位置 H-5、I-5・6グリッドに位置している。

形状 長軸 5.68 m・短軸 4.77 m、不整形のプランで南北方向に主軸を有する。

遺物 第94図338は17世紀の土師質土器である。第94図339は埴埦であり、口縁には溶融した金属が付着している。他に、16世紀後葉から17世紀前葉の輸入陶磁である染付1点、青磁1点、白磁1点が出土している。

時期 第5期〔初期城下期〕または第6期〔谷村城下町期（鳥居氏段階）〕の遺構であると考えられる。

性格 平成26年度の調査区北西端において溝状のプランが検出されたため遺構認定したが、平成27年度の調査によって、より西側に広がることが把握された。覆土下位においては、粘性を有する土層が確認され、その上に炭化物粒子を含む土壌が堆積している。遺構の上部は、鉄筋コンクリートの庁舎建築工事により削平された。

42号溝状遺構

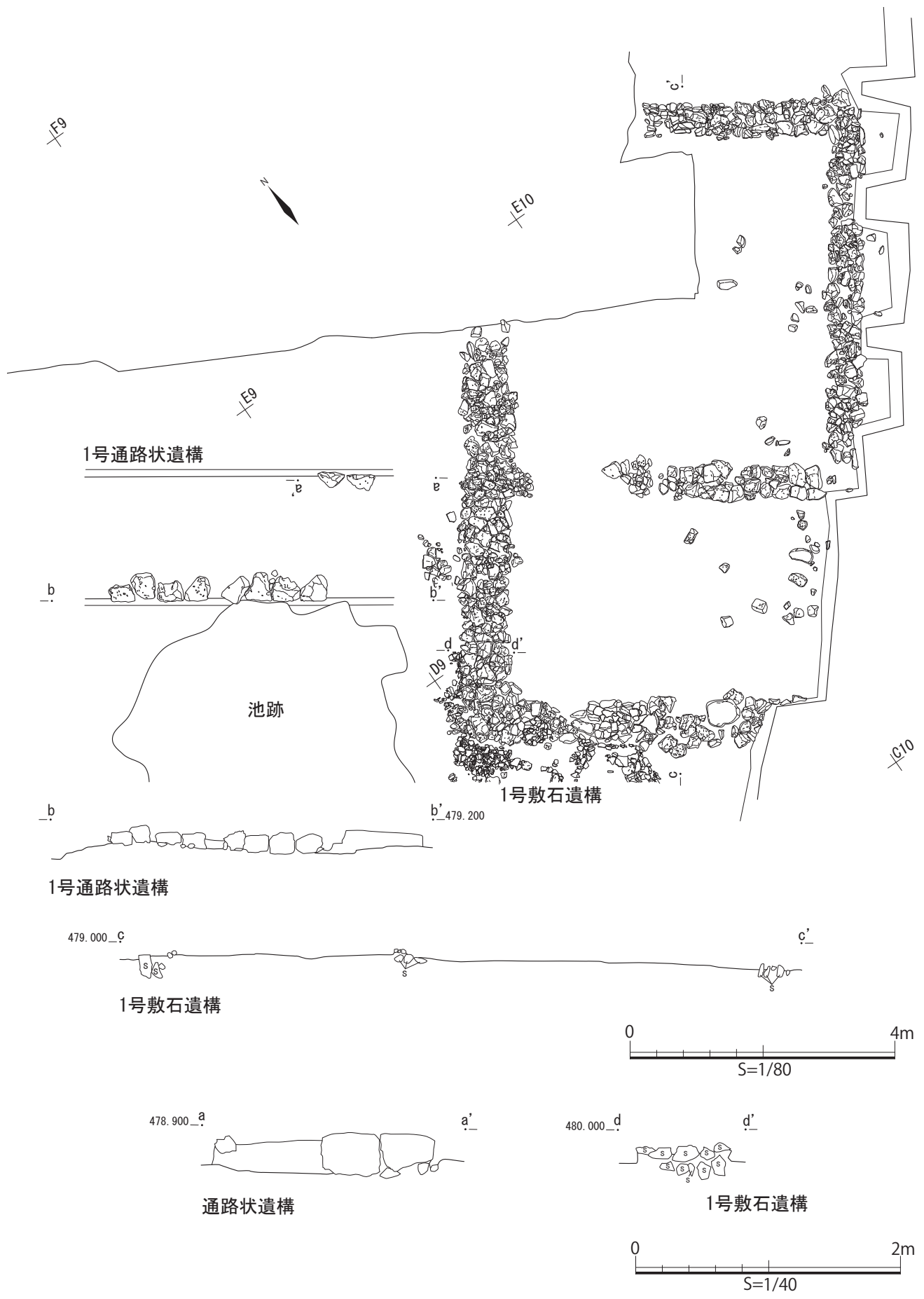
位置 G-9・10グリッドに位置している。

形状 長軸 2.84 m・短軸 0.8 m、不整形のプランで北東から南西方向に主軸を有する。

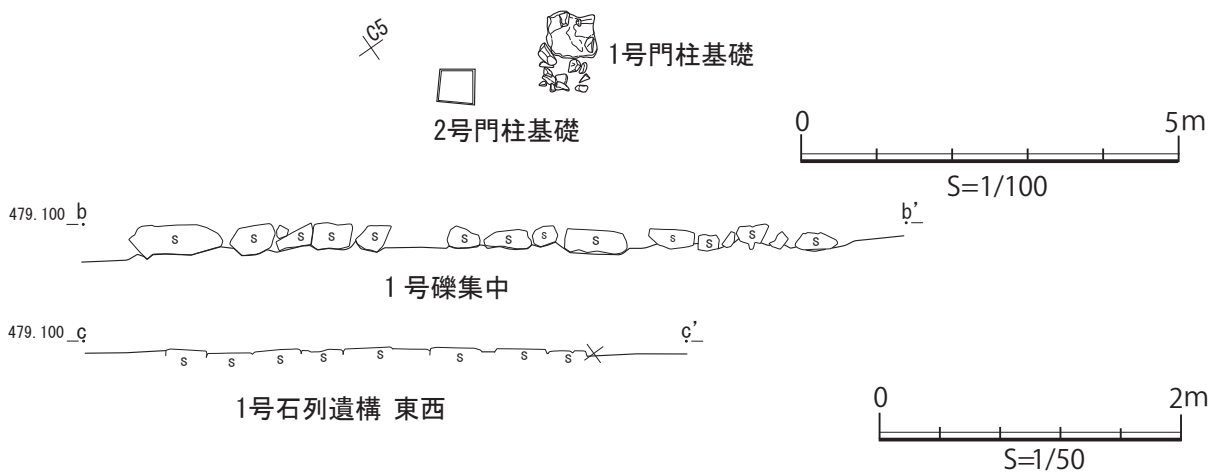
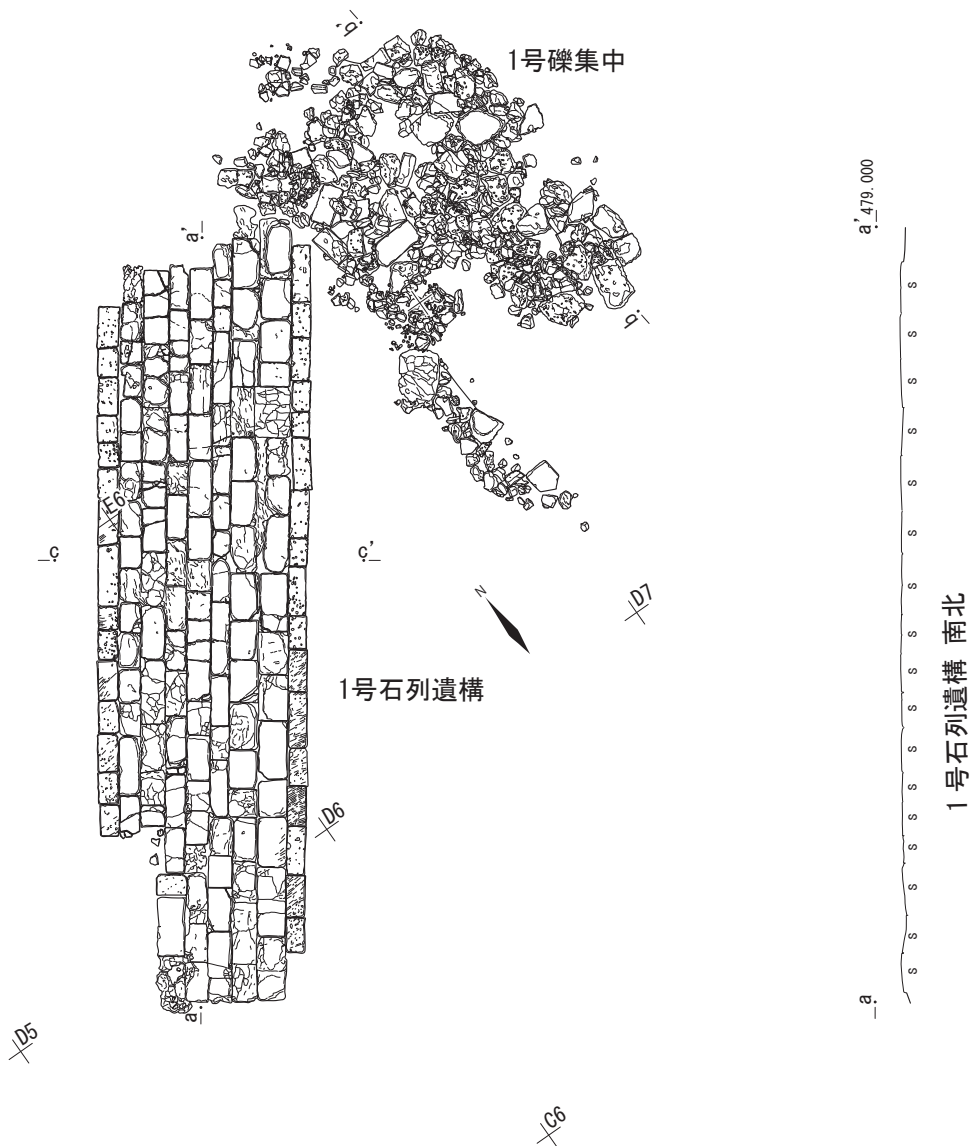
遺物 第94図340・341は16世紀後葉の大窯製の皿、第94図342は16世紀後葉の土師質香炉である。

時期 16世紀後葉に構築された遺構である。

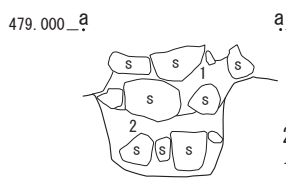
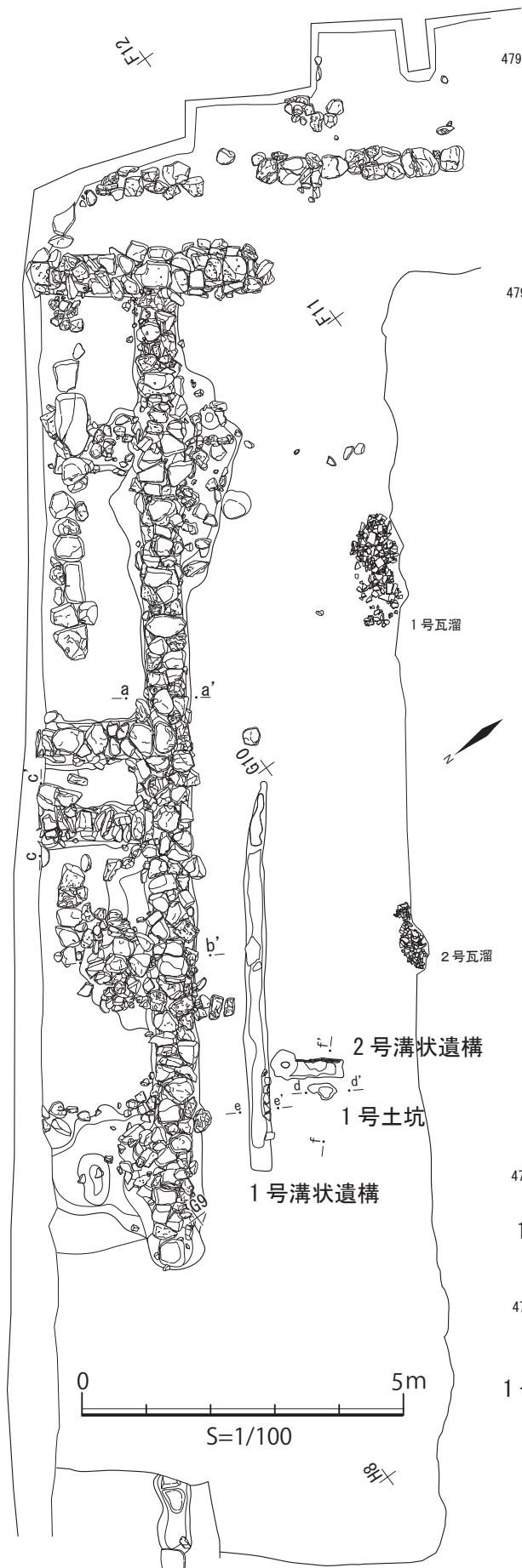
性格 谷村館城下の段階に位置づけられる。



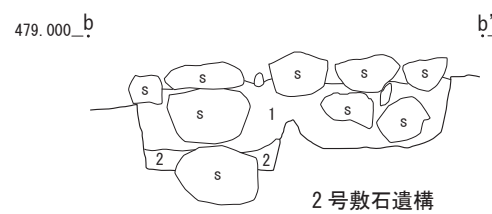
第6図 1面遺構図(1)



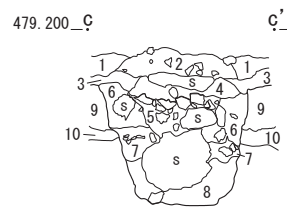
第7图 1面遺構図(2)



2号敷石遺構
 1 にぶい黄色粗砂層 しまり×・粘性×
 礫(φ5~15mm)
 2 粗砂層 しまり×・粘性×

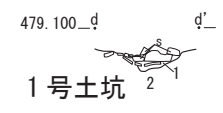


2号敷石遺構
 1 にぶい黄色粗砂層 しまり×・粘性×
 礫(φ5~15mm)
 2 粗砂層 しまり×・粘性×

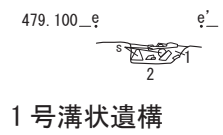


2号敷石遺構

1 黄褐色土層	しまり○・粘性×
	白色・褐色粒子(φ2~3mm)
2 暗褐色土層	しまり○・粘性×
	礫(φ2~50mm)、粗砂
3 暗灰褐色土層	しまり○・粘性×
	褐色粒子(φ2~3mm)
4 にぶい黄褐色土層	しまり×・粘性×
	黒色・橙色ブロック(φ10~30mm)
5 黒褐色土層	しまり×・粘性×
	粗砂、礫(φ2~20mm)
6 黒褐色土層	しまり×・粘性×
	粗砂、礫(φ2~10mm)
7 黒褐色土層	しまり×・粘性×
	粗砂、礫(φ2~10mm)
8 暗褐色土層	しまり×・粘性×
	細砂
9 明黄褐色土層	しまり○・粘性×
	明茶褐色ブロック(φ20~50mm)
10 褐色土層	しまり○・粘性×
	炭化物 ○



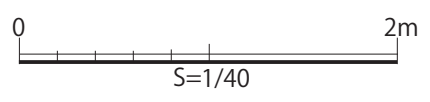
1号土坑
 1 灰褐色粗砂層 しまり×・粘性×



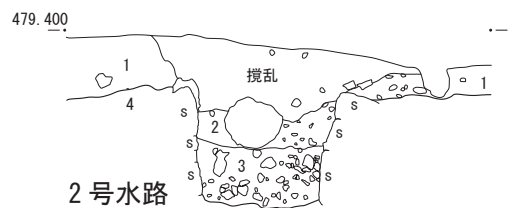
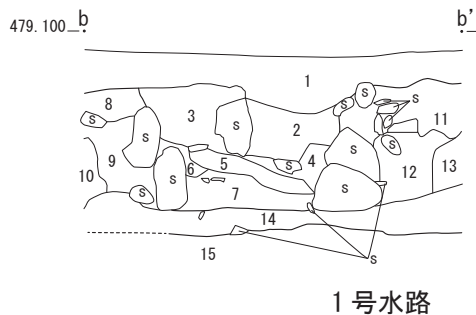
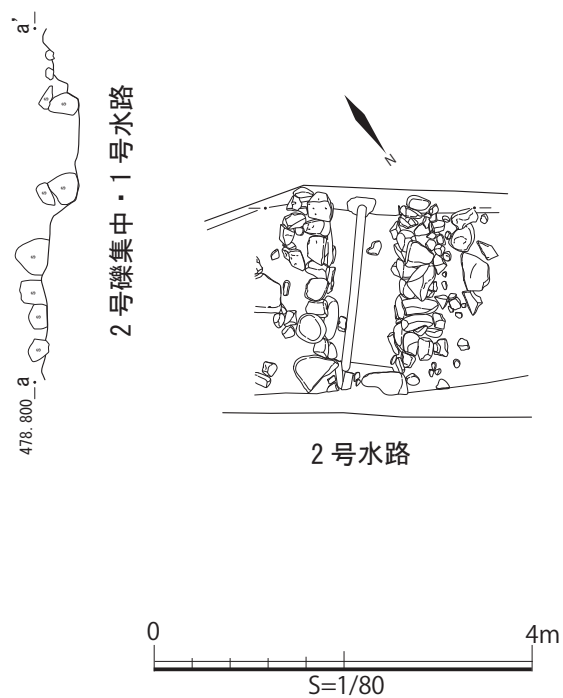
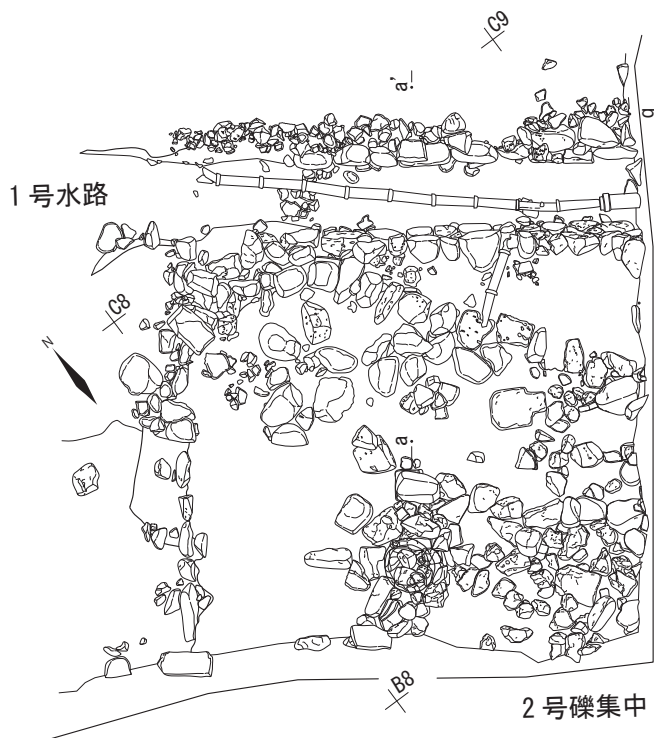
1号溝状遺構
 1 灰褐色粗砂層 しまり×・粘性×



1号土坑 2号溝状遺構

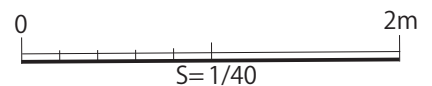


第8図 1面遺構図(3)

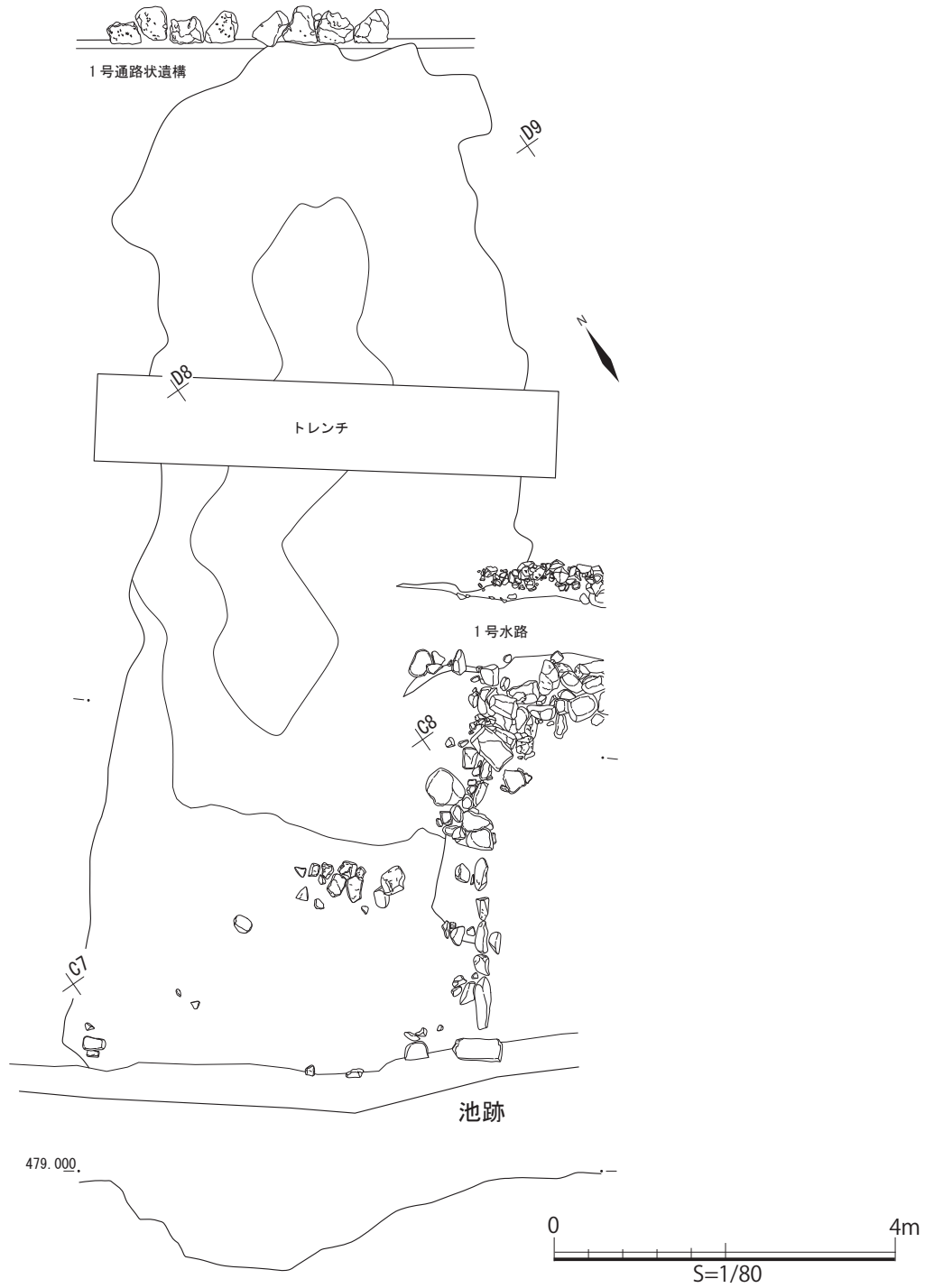
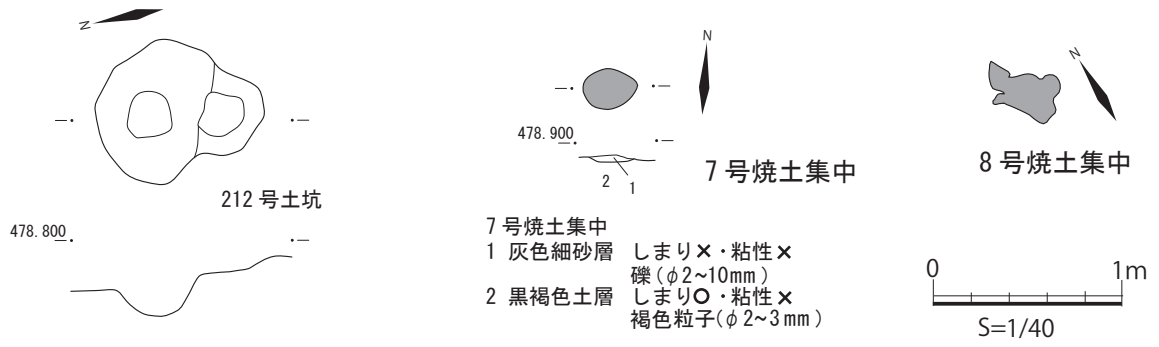


- 1号水路
- 1 表土層
 - 2 にぶい黄褐色土層 しまり○・粘性×、礫(φ10~20mm) 褐色粒子(φ2~3mm)
 - 3 にぶい黄褐色土層 しまり○・粘性× 粗砂、礫(φ10~20mm)
 - 4 黄褐色土層 しまり○・粘性× 褐色粒子(φ2~3mm)
 - 5 明黄褐色土層 しまり○・粘性× 黄色粒子(φ10~15mm)
 - 6 黄灰色土層 しまり○・粘性×、炭化物△ 鉄分、礫(φ10~20mm)
 - 7 黄灰色土層 しまり×・粘性× 礫(φ5~60mm)
 - 8 にぶい黄褐色土層 しまり○・粘性× 褐色粒子(φ2~3mm)

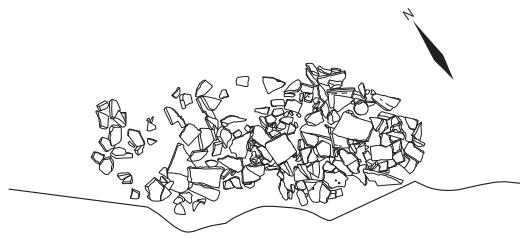
- 2号水路
- 1 表土層
 - 2 暗灰黄色土層 しまり×・粘性× 粗砂
 - 3 灰白色粗砂層 しまり×・粘性× 礫(φ2~10mm)
 - 4 暗灰黄色土層 しまり○・粘性× 褐色粒子(φ2~3mm)、粗砂
 - 9 にぶい黄褐色土層 しまり△・粘性× 粗砂、礫(φ10~90mm)
 - 10 明黄褐色土層 しまり○・粘性○ 褐色・白色粒子(φ2~3mm)
 - 11 にぶい黄褐色土層 しまり○・粘性× 礫(φ10~150mm) 褐色粒子(φ2~3mm)
 - 12 にぶい黄褐色土層 しまり△・粘性× 粗砂、礫(φ10~90mm)
 - 13 明黄褐色土層 しまり○・粘性○ 褐色・白色粒子(φ2~3mm)
 - 14 黄灰色土層 しまり×・粘性× 礫(φ10~100mm)
 - 15 黒褐色土層 しまり○・粘性× 褐色粒子(φ2~3mm)



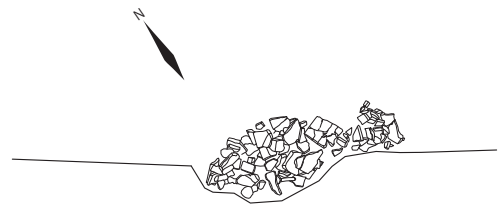
第9図 1面遺構図(4)



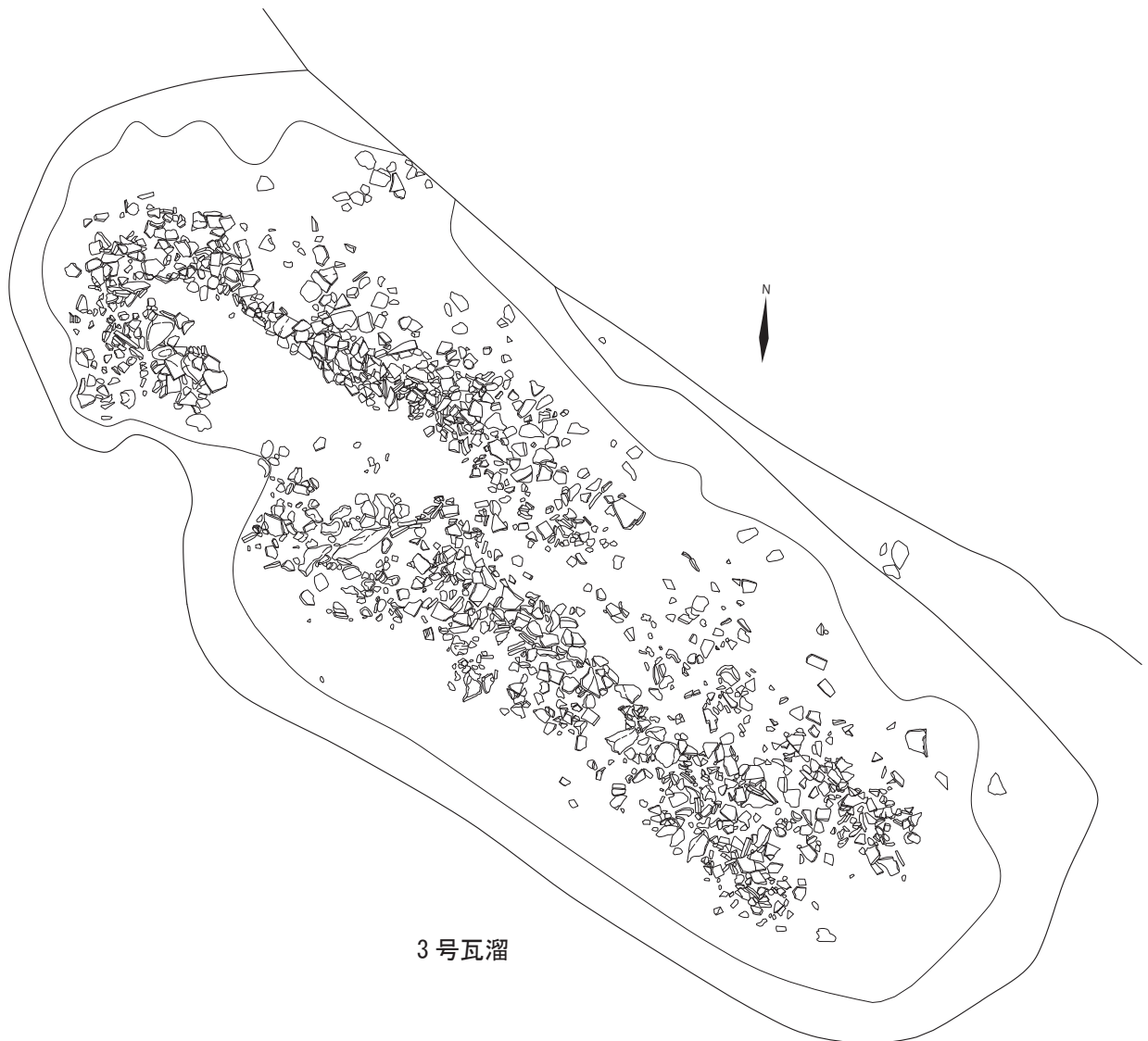
第10図 1面遺構図(5)



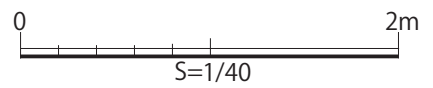
1号瓦溜



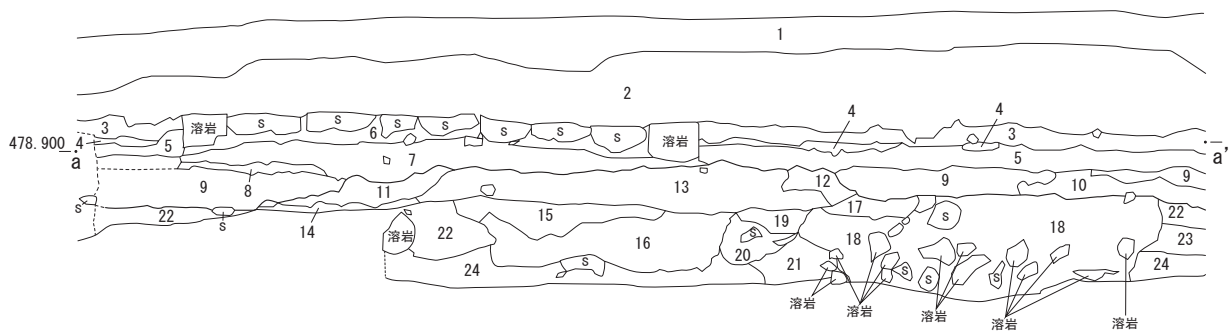
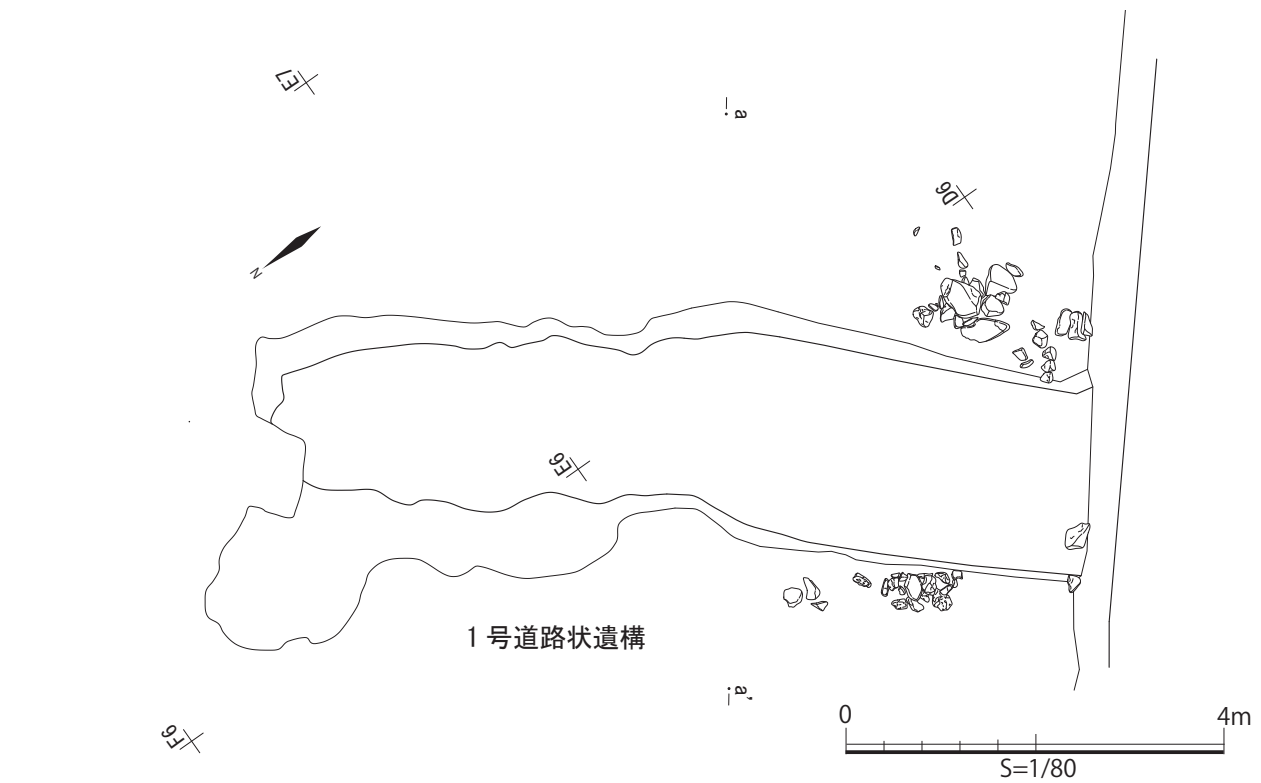
2号瓦溜



3号瓦溜



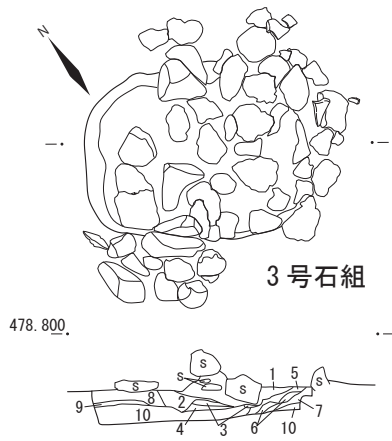
第11图 1面遺構図(6)



調査区南壁

- | | | | |
|------------|--|-----------|--|
| 1 表土層 | | 14 明黄褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 2 明黄褐色土層 | しまり◎・粘性△
灰黄褐色土 | 15 暗灰黄色土層 | しまり○・粘性×
炭化物○、礫(φ5~10mm) |
| 3 にぶい黄褐色土層 | しまり◎・粘性×
礫(φ2~5mm)、明黄褐色土 | 16 明黄褐色土層 | しまり△・粘性△
橙色土、礫(φ5~10mm) |
| 4 黄灰色土層 | しまり○・粘性◎
鉄分の集積 | 17 暗灰黄色土層 | しまり○・粘性×
礫(φ5~20mm) |
| 5 暗灰黄色土層 | しまり◎・粘性×
炭化物△、褐色粒子(φ2~3mm) | 18 黄褐色土層 | しまり○・粘性×
溶岩主体の礫(φ100~200mm) |
| 6 灰黄褐色土層 | しまり○・粘性×
粗砂、礫(φ2~5mm) | 19 暗灰黄色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 7 明黄褐色土層 | しまり◎・粘性×
褐色・白色粒子(φ2~3mm) | 20 黄褐色土層 | しまり○・粘性×
礫(φ20~100mm) |
| 8 黄灰色土層 | しまり○・粘性×
炭化物△、礫(φ10~20mm) | 21 暗灰黄色土層 | しまり○・粘性×
白色粒子(φ2~20mm) |
| 9 明黄褐色土層 | しまり○・粘性×
白色・褐色粒子(φ2~3mm) | 22 暗灰黄色土層 | 褐色粒子(φ2~3mm)
しまり○・粘性×
褐色・白色粒子(φ2~3mm)
礫(φ5mm) |
| 10 暗灰黄色土層 | しまり○・粘性×
褐色・白色粒子(φ2~3mm)
礫(φ5mm) | 23 明黄褐色土層 | しまり○・粘性△
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 11 黄褐色土層 | しまり○・粘性×
炭化物○、明黄褐色土 | 24 暗灰黄色土層 | しまり○・粘性×
白色粒子(φ20~30mm) |
| 12 にぶい黄色土層 | しまり○・粘性×・炭化物○
褐色・白色粒子(φ2~3mm)
明黄褐色土 | | |
| 13 暗灰黄色土層 | しまり◎・粘性×・炭化物○
褐色・白色粒子(φ2~3mm)
礫(φ5~20mm) | | |

第12図 2面遺構図(1)



3号石組

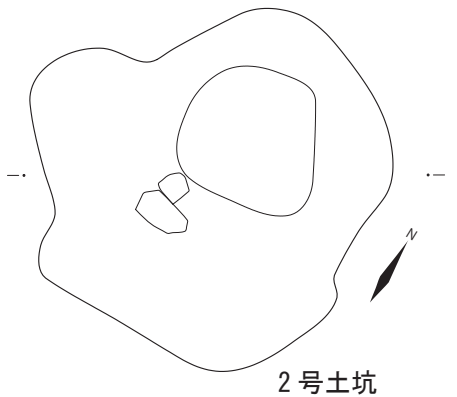
478. 800.

3号石組

- | | | |
|------------|----------|--------------|
| 1 暗灰黄色土層 | しまり○・粘性× | 焼土粒子(φ2~3mm) |
| 2 黄灰色土層 | しまり△・粘性× | 炭化物◎ |
| | | 焼土粒子(φ2~3mm) |
| 3 炭化物層 | しまり× | 粘性× |
| | | 炭化物◎ |
| 4 焼土層 | しまり× | 粘性× |
| | | 炭化物△ |
| 5 焼土層 | しまり× | 粘性× |
| | | 炭化物△ |
| 6 炭化物層 | しまり× | 粘性× |
| | | 炭化物◎ |
| 7 にぶい赤褐色土層 | しまり× | 粘性× |
| | | 焼土粒子(φ2~3mm) |
| 8 暗灰褐色土層 | しまり× | 粘性× |
| | | 焼土粒子(φ2~3mm) |
| 9 黒色土層 | しまり× | 粘性× |
| | | 炭化物○ |
| 10 灰褐色土層 | しまり△・粘性× | 焼土粒子(φ2~3mm) |



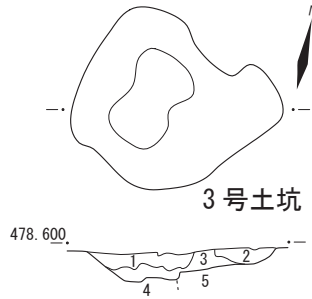
7号礫集中



2号土坑

478. 700.

- 2号土坑
- | | | |
|-----------|----------|--------------|
| 1 にぶい黄色土層 | しまり○・粘性× | 褐色粒子(φ2~3mm) |
| 2 黒褐色土層 | しまり○・粘性× | 褐色粒子(φ2~3mm) |



3号土坑

478. 600.

3号土坑

- | | | |
|----------|----------|--------------|
| 1 黄灰色土層 | しまり○・粘性× | 褐色粒子(φ2~3mm) |
| 2 灰褐色土層 | しまり○・粘性× | 褐色粒子(φ2~3mm) |
| 3 灰褐色土層 | しまり○・粘性× | 褐色粒子(φ2~3mm) |
| | しまり× | 粘性× |
| | | 褐色粒子(φ2~3mm) |
| 4 黒褐色粗砂層 | しまり× | 粘性× |
| | | 礫(φ20~30mm) |
| 5 黄灰黄色土層 | しまり○・粘性× | 褐色粒子(φ2~3mm) |

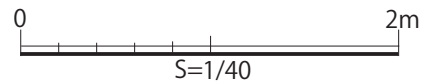


4号土坑

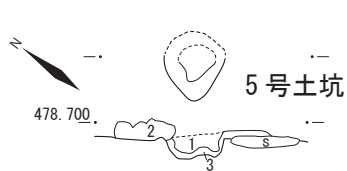
478. 600.

4号土坑

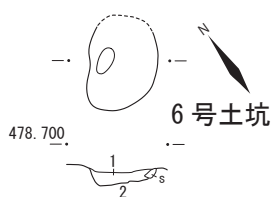
- | | | |
|---------|----------|--------------|
| 1 黄褐色土層 | しまり× | 粘性× |
| | | 礫(φ20~30mm) |
| 2 黒褐色土層 | しまり○・粘性× | 褐色粒子(φ2~3mm) |



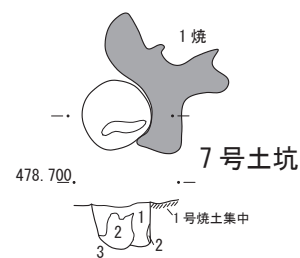
第13図 2面遺構図(2)



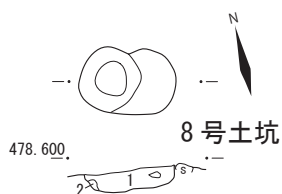
- 5号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり×・粘性×
黒褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり×・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 3 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



- 6号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり×・粘性×
灰白色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



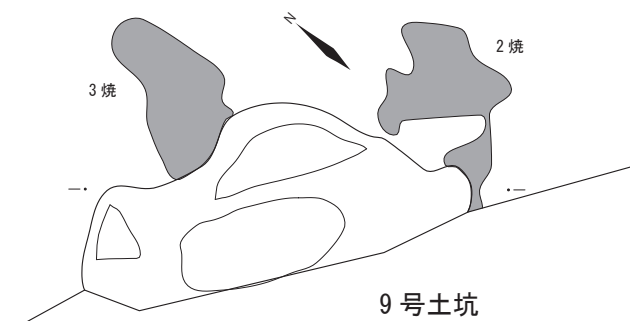
- 7号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり×・粘性×
白色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり×・粘性×
黄褐色土ブロック(φ20~30mm)
 - 3 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



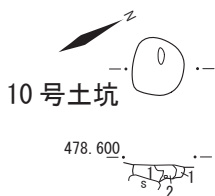
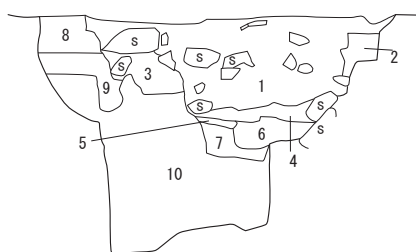
- 8号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり×・粘性×
黒褐色土
白色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)

9号土坑

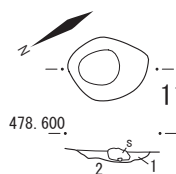
- 1 にぶい黄色土層 しまり○・粘性×・炭化物○
浅黄色土ブロック(φ10~120mm)
- 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
礫(φ10~40mm)
- 3 黒褐色土層 しまり×・粘性×・炭化物△
浅黄色土ブロック(φ20~30mm)
- 4 黒色土層 しまり×・粘性×
浅黄色土ブロック(φ10~20mm)
- 5 にぶい黄色土層 しまり×・粘性×・炭化物○
粗砂
- 6 黄褐色土層 しまり×・粘性×
浅黄色土ブロック(φ10~120mm)
- 7 黒色土層 しまり×・粘性×
浅黄色土ブロック(φ10~30mm)
- 8 黒褐色土層 しまり○・粘性×・炭化物△
褐色粒子(φ2~3mm)
- 9 黒褐色土層 しまり×・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)、細砂
- 10 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



478.700.



- 10号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり×・粘性×
白色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり×・粘性×
黄褐色土



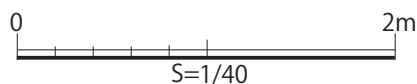
- 11号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり×・粘性×
礫(φ20~30mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



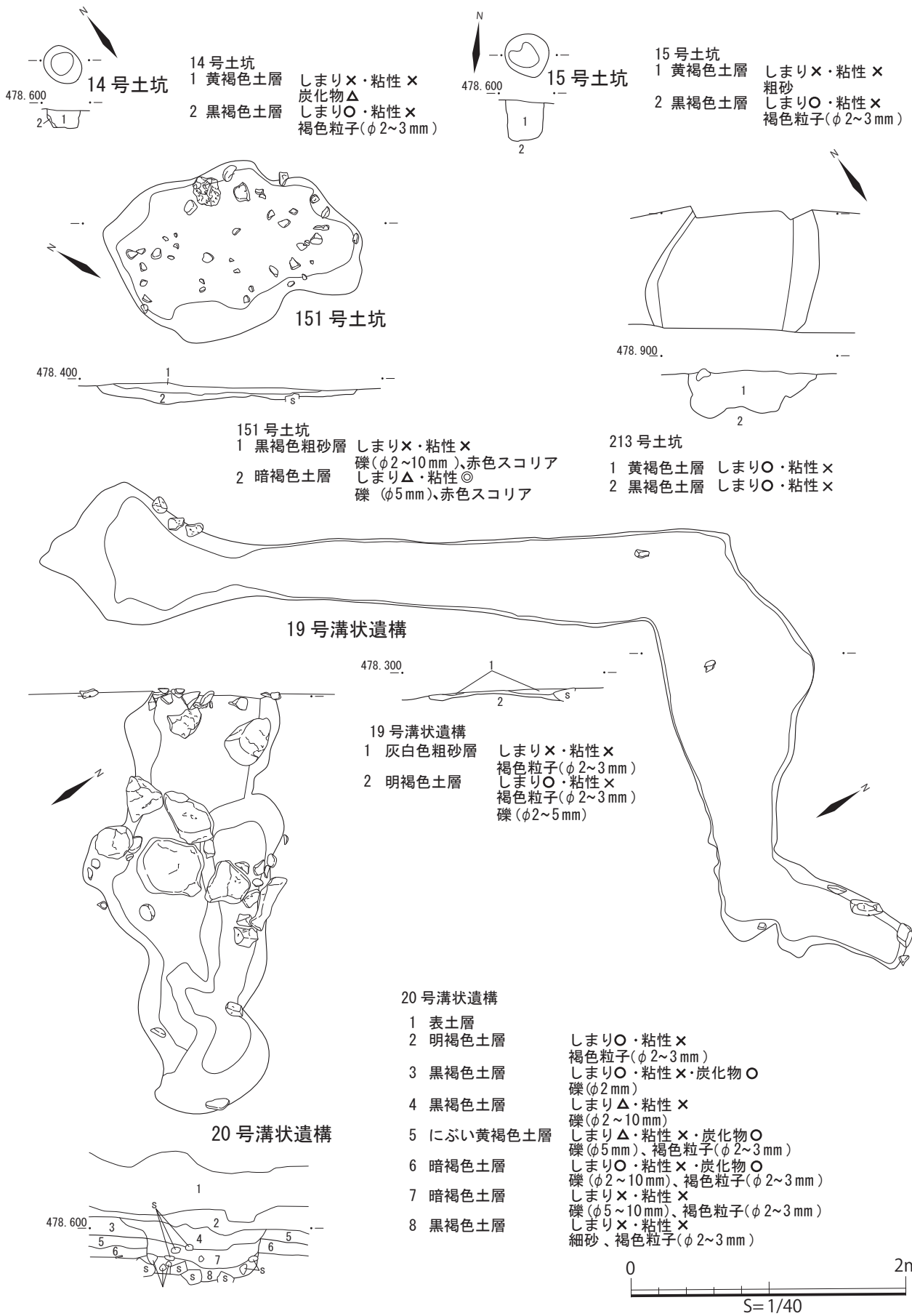
- 12号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり×・粘性×
礫(φ10mm)、粗砂
 - 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



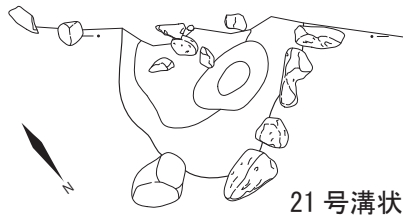
- 13号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり×・粘性×
礫(φ10mm)
 - 2 灰白色粗砂層 しまり×・粘性×
炭化物△
 - 3 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



第14図 2面遺構図(3)

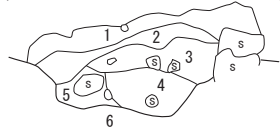


第15図 2面遺構図(4)



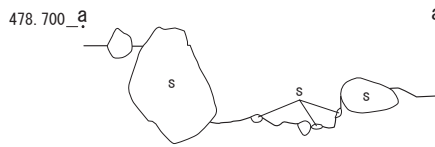
21号溝状遺構

478.800



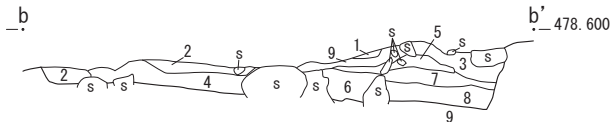
21号溝状遺構

- | | |
|----------|--------------|
| 1 灰白色細砂層 | しまり×・粘性× |
| | 礫(φ5~10mm) |
| 2 黄褐色土層 | しまり○・粘性× |
| | 褐色粒子(φ2~3mm) |
| 3 灰白色粗砂層 | しまり×・粘性× |
| | 礫(φ5~10mm) |
| 4 灰白色粗砂層 | しまり×・粘性× |
| | 暗灰黄色土 |
| 5 暗灰黄色土層 | しまり○・粘性× |
| | 細砂 |
| 6 暗灰黄色土層 | しまり○・粘性× |
| | 褐色粒子(φ2~3mm) |



478.700_a

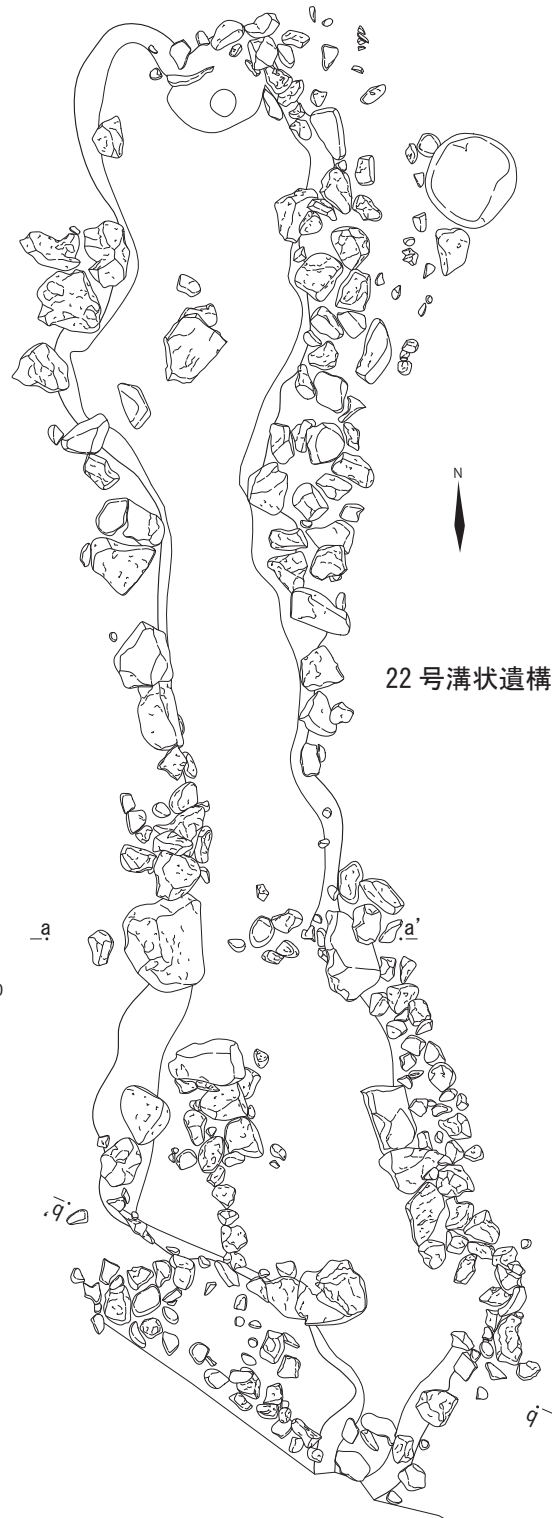
a'



b'-478.600

22号溝状遺構

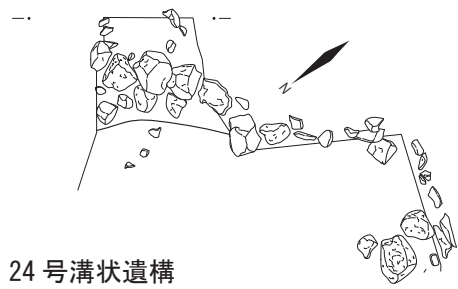
- | | |
|---------|-------------------------|
| 1 褐色土層 | しまり△・粘性× |
| | 礫(φ5~10mm) |
| 2 黒褐色土層 | しまり△・粘性○ |
| | 礫(φ5mm) |
| 3 暗褐色土層 | しまり◎・粘性× |
| | 礫(φ2~20mm)、褐色粒子(φ2~3mm) |
| 4 褐灰色土層 | しまり×・粘性× |
| | 礫(φ2~5mm)、褐色粒子(φ2~3mm) |
| 5 暗褐色土層 | しまり×・粘性× |
| | 粗砂 |
| 6 黒褐色土層 | しまり×・粘性○ |
| | 粗砂、礫(φ2~10mm) |
| 7 黒褐色土層 | しまり◎・粘性× |
| | 褐色粒子(φ2~3mm) |
| 8 黒褐色土層 | しまり◎・粘性× |
| | 褐色粒子(φ2~3mm) |
| 9 暗褐色土層 | しまり×・粘性× |
| | 礫(φ2~20mm) |



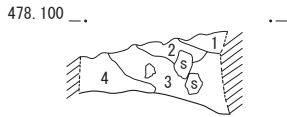
22号溝状遺構

0 2m
S=1/40

第16図 2面遺構図(5)

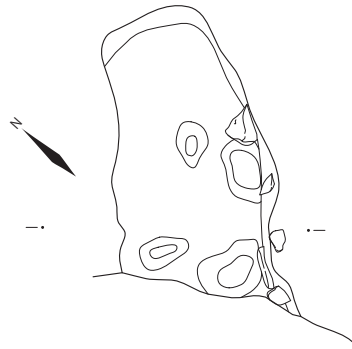


24号溝状遺構

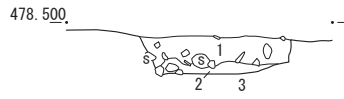


24号溝状遺構

- 1 暗灰黄色細砂層 しまり×・粘性×
- 2 暗灰黄色細砂層 しまり×・粘性×
- 3 黄褐色土層 しまり○・粘性×
- 4 黄褐色土層 しまり○・粘性×

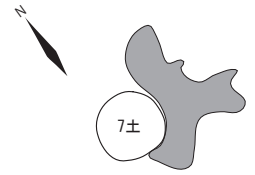


25号溝状遺構

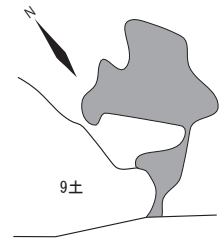


25号溝状遺構

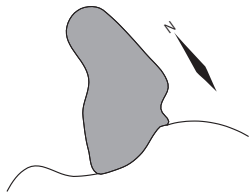
- 1 灰白色粗砂層 しまり×・粘性×
- 2 黄褐色土層 しまり○・粘性×
- 3 オリーブ褐色土層 しまり○・粘性×



1号焼土集中



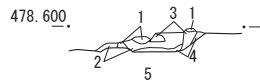
2号焼土集中



3号焼土集中



4号焼土集中



4号焼土集中

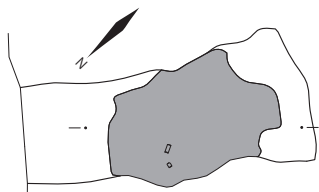
- 1 焼土層 しまり×・粘性×
- 2 灰層 灰 しまり△・粘性×
- 3 暗灰黄色土層 焼土粒子(φ2~3mm) しまり○・粘性×
- 4 焼土層 しまり×・粘性×
- 5 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×



5号焼土集中



9号焼土集中

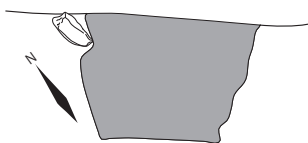


10号焼土集中

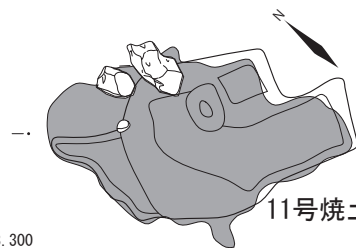


10号焼土集中

- 1 褐灰色土層 しまり×・粘性×
- 2 橙色土層 炭化物○、細砂 しまり×・粘性×
- 3 暗褐色土層 焼土・炭化物粒子(φ2~10mm) しまり○・粘性×



12号焼土集中

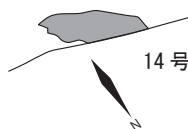


11号焼土集中

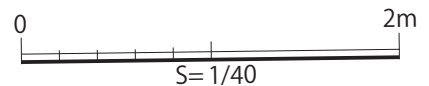


11号焼土集中

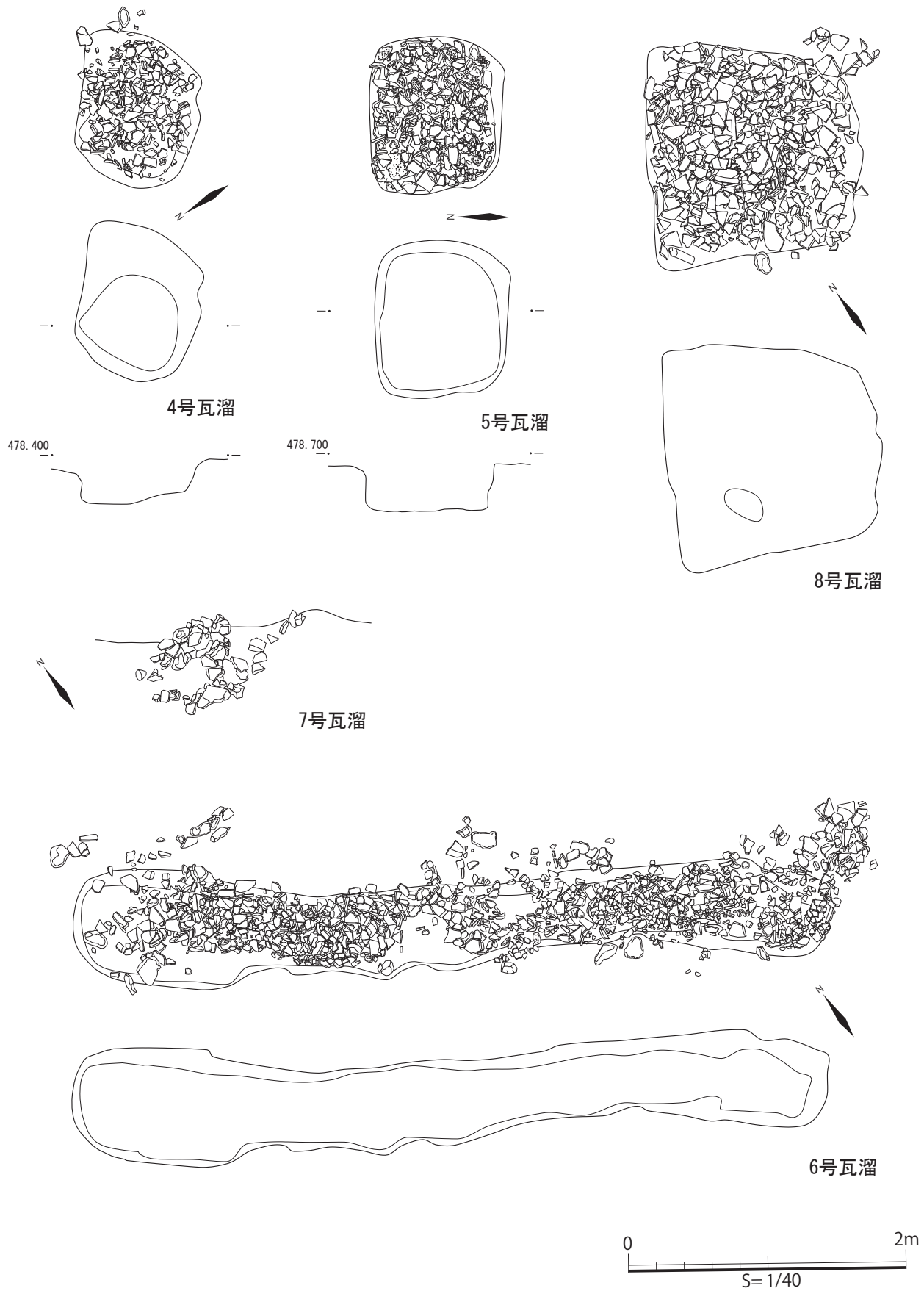
- 1 にぶい黄褐色土層 しまり△・粘性×
- 2 焼土層 焼土粒子(φ2~5mm) しまり△・粘性×
- 3 灰黄褐色土層 黄灰色土 しまり○・粘性×
- 4 焼土層 焼土粒子(φ2~3mm) しまり○・粘性×
- 5 黄灰色土層 黄灰色土 しまり○・粘性×
- 6 焼土層 焼土粒子(φ2~3mm) しまり○・粘性×



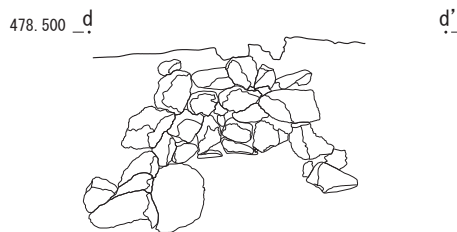
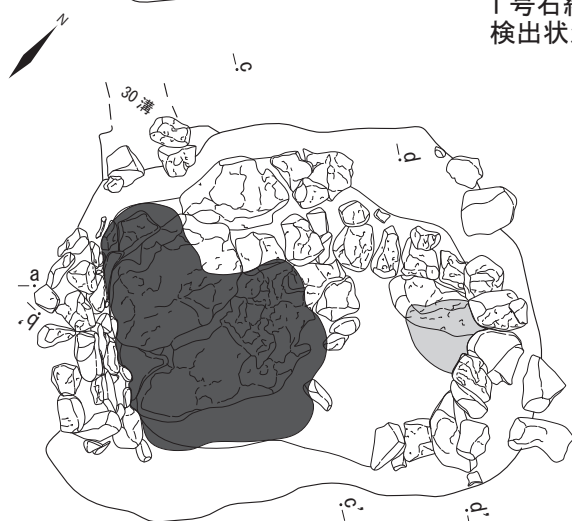
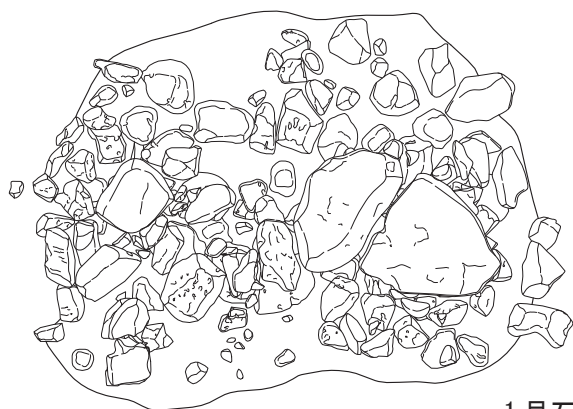
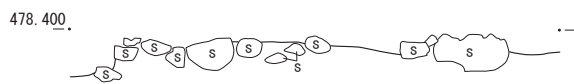
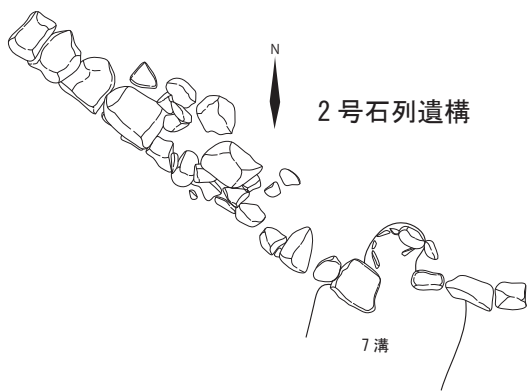
14号焼土集中



第17図 2面遺構図(6)

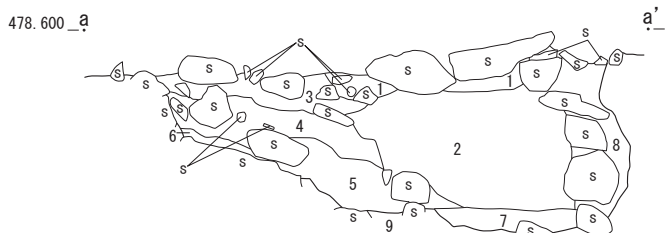


第18图 2面遺構図(7)



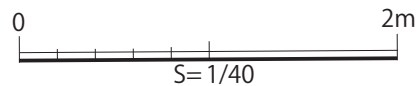
1号石組遺構
検出状況

1号石組遺構
完掘状況

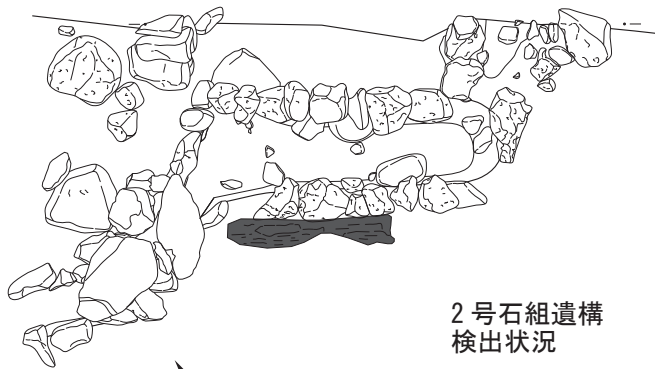


1号石組遺構

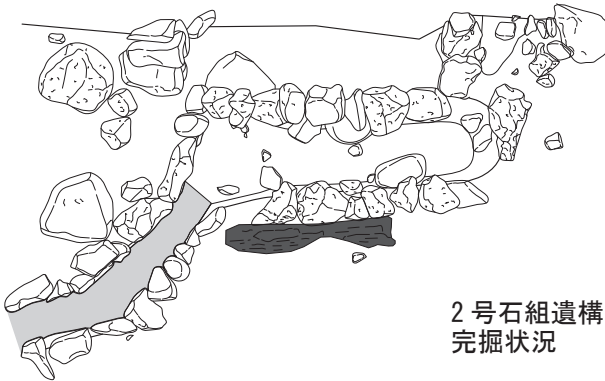
- 1 明赤褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 暗灰黄色土層 しまり△・粘性×
炭化物△
- 3 灰黄褐色土層 しまり○・粘性×
炭化物○・粗砂
- 4 にぶい黄褐色土層 しまり○・粘性×
炭化物○・粗砂
- 5 褐灰色土層 しまり×・粘性×
褐色粒子(φ2~5mm)
- 6 黒色土層 しまり×・粘性×
炭化物◎
- 7 灰色土層 しまり○・粘性○
炭化物○・黒褐色土
- 8 にぶい黄褐色土層 しまり○・粘性○
黒褐色土
- 9 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



第19図 3面遺構図(1)

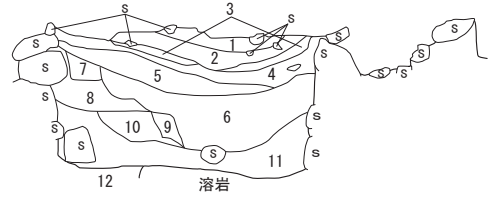


2号石組遺構
検出状況



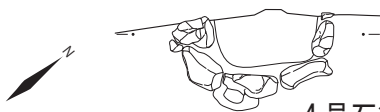
2号石組遺構
完掘状況

478.900.



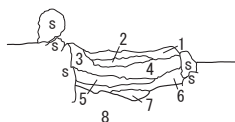
2号石組遺構

- | | |
|------------|--------------------------------|
| 1 明黄褐色土層 | しまり◎・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 2 灰黄褐色土層 | しまり○・粘性×・粗砂△
赤褐色粒子(φ2~3mm) |
| 3 にぶい黄褐色土層 | しまり△・粘性×・炭化物○
赤褐色粒子(φ2~3mm) |
| 4 灰黄褐色土層 | しまり○・粘性×・炭化物○
赤褐色粒子(φ2~3mm) |
| 5 黄褐色土層 | しまり△・粘性×
炭化物△、橙色土 |
| 6 黒色土層 | しまり×・粘性△
炭化物◎ |
| 7 灰色土層 | しまり×・粘性×
炭化物○、赤色粒子(φ2~3mm) |
| 8 灰色土層 | しまり×・粘性×
炭化物○ |
| 9 灰色粘土層 | しまり×・粘性○
炭化物○ |
| 10 灰色粘土層 | しまり×・粘性○
炭化物○ |
| 11 灰色粘土層 | しまり×・粘性○
炭化物△ |
| 12 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |



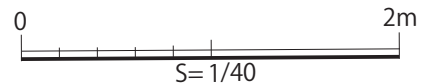
4号石組遺構

478.400.

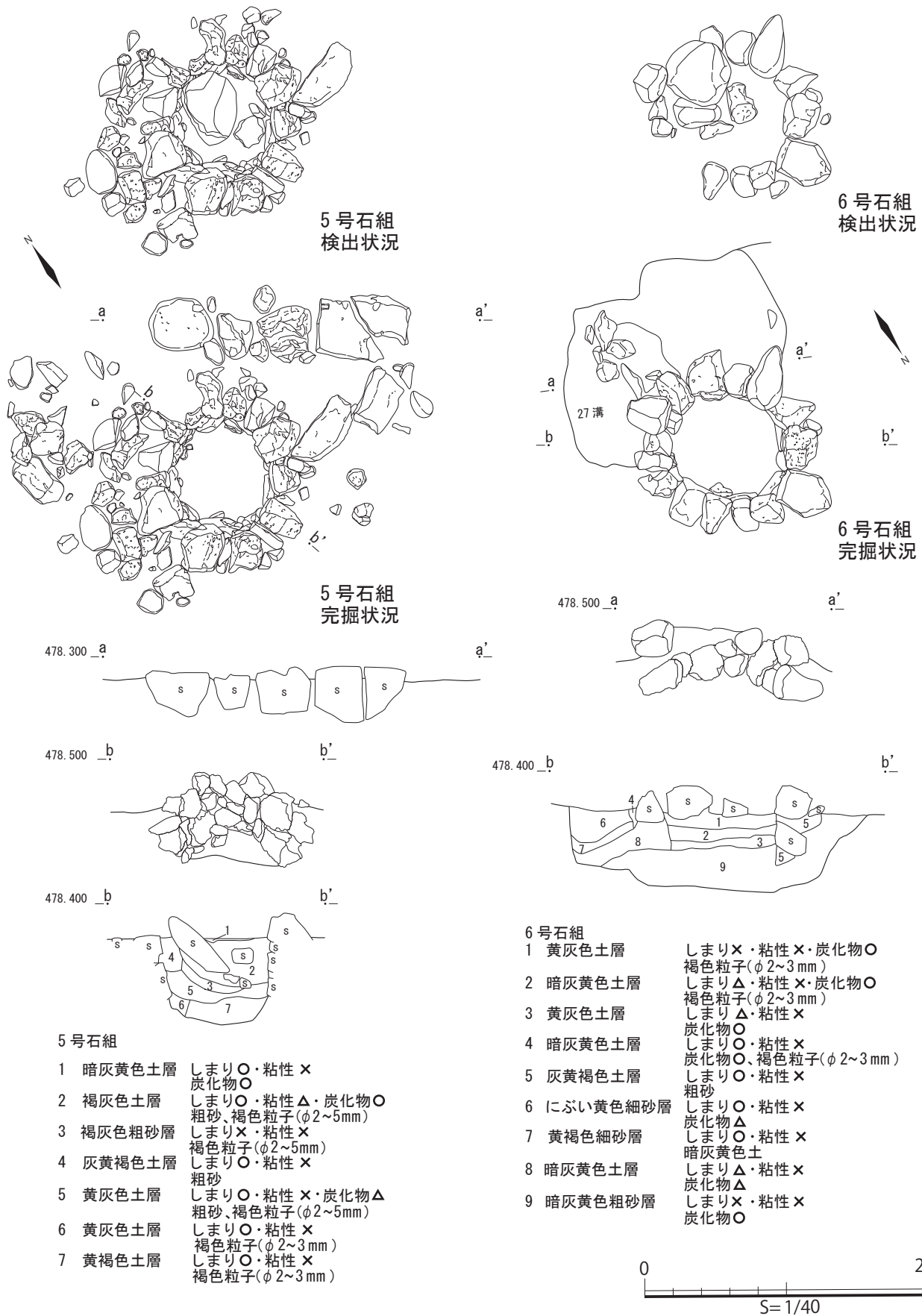


4号石組遺構

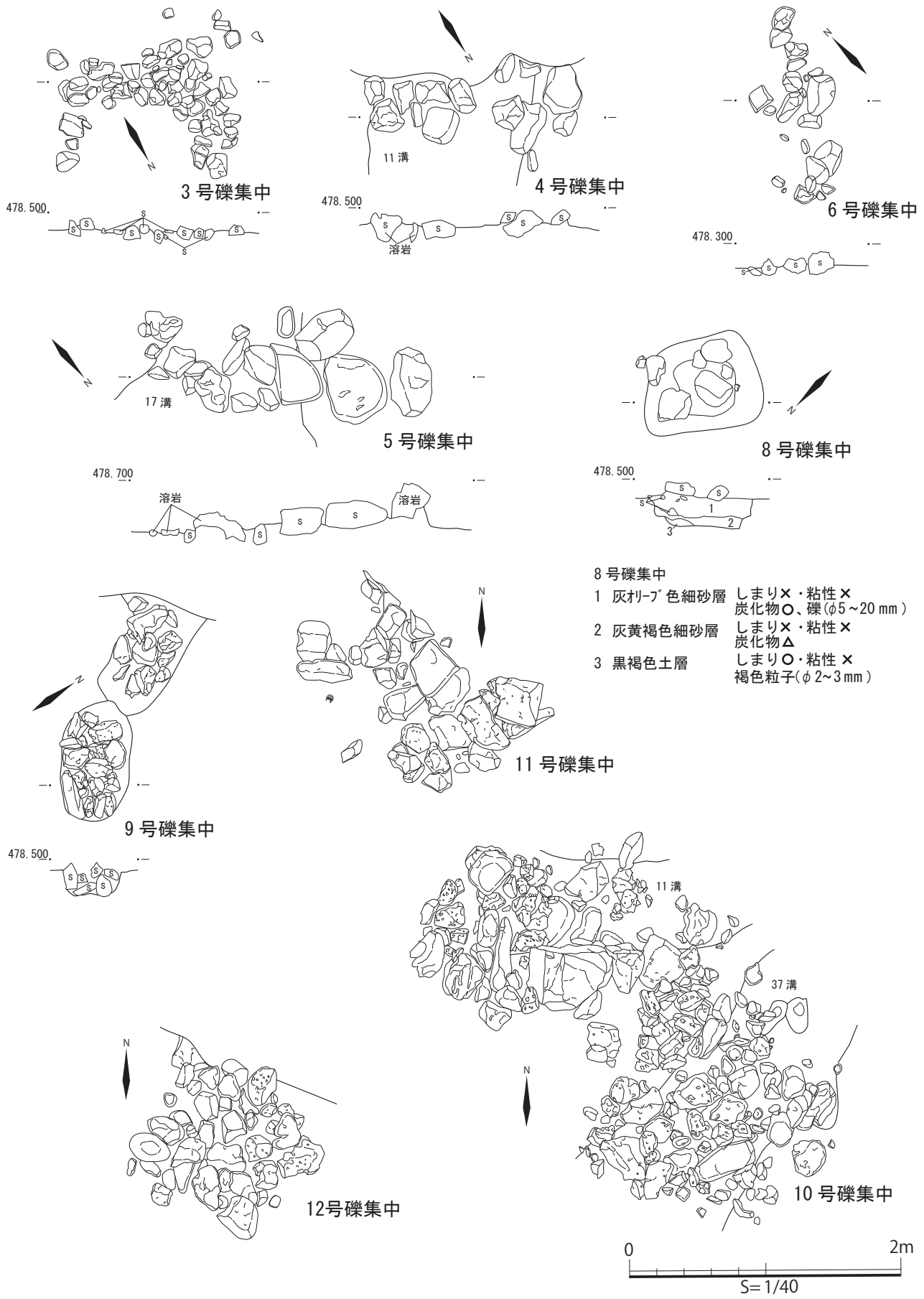
- | | |
|-----------|---|
| 1 灰黄色土層 | しまり○・粘性×
粗砂
しまり○・粘性×
炭化物集積層、灰黄色土 |
| 3 暗灰黄色土層 | しまり○・粘性×
炭化物○ |
| 4 にぶい黄色土層 | しまり○・粘性○
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 5 黒色土層 | しまり×・粘性×
炭化物集積層、にぶい黄色土 |
| 6 にぶい黄色土層 | しまり○・粘性○
赤褐色粒子(φ2~5mm) |
| 7 黒色土層 | しまり○・粘性×
炭化物集積層、にぶい黄色土 |
| 8 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |



第20図 3面遺構図(2)



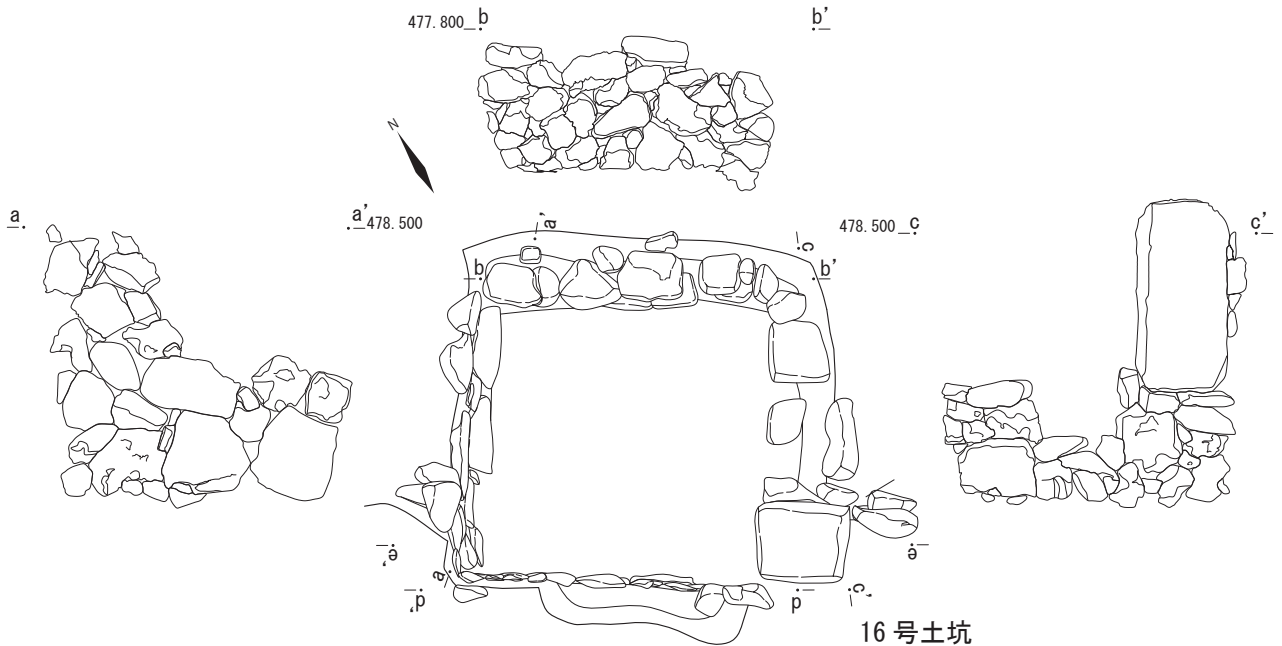
第21図 3面遺構図(3)



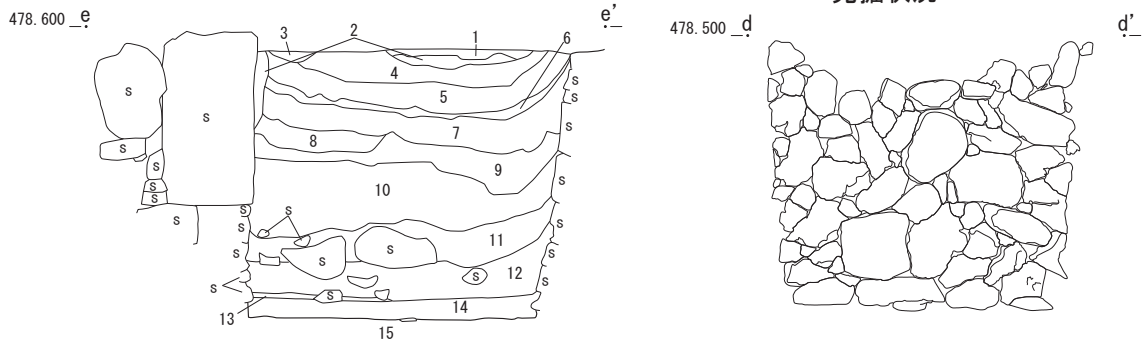
第22図 3面遺構図(4)



16号土坑
礫出土状況

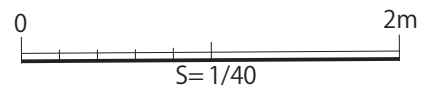


16号土坑
完掘状況

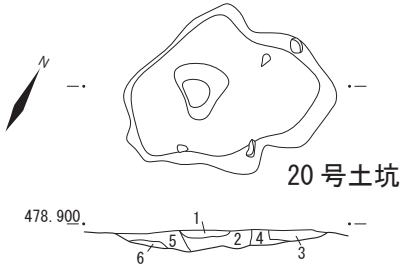
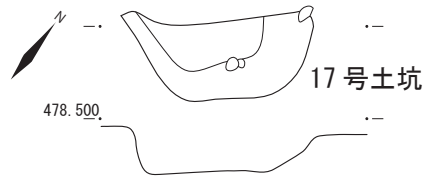


16号土坑

- | | | | | | |
|----------|--------------------------------|-----------|-----------------------|----------|-------------------------------|
| 1 黄灰色土層 | しまり○・粘性×
炭化物△、褐色粒子(φ1~2mm) | 6 灰黄色土層 | しまり△・粘性×
炭化物○ | 11 灰黄色土層 | しまり×・粘性×
炭化物○ |
| 2 灰黄色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) | 7 にぶい黄色土層 | しまり×・粘性×
炭化物○、灰黄色土 | 12 黄灰色土層 | しまり○・粘性×・炭化物○
焼土(φ20~30mm) |
| 3 明黄褐色土層 | しまり○・粘性×
白色粒子(φ1~2mm) | 8 明黄褐色土層 | しまり×・粘性×
粗砂 | 13 黑色土層 | しまり×・粘性×
炭化物○、灰黄色土 |
| 4 黄灰色土層 | しまり△・粘性×
炭化物○、細砂 | 9 黄灰色土層 | しまり×・粘性×
炭化物○、動物遺体 | 14 黄褐色土層 | しまり○・粘性×・炭化物○
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 5 黄灰色土層 | しまり○・粘性×
明黄褐色土、粗砂、礫(φ2~3mm) | 10 明黄褐色土層 | しまり×・粘性×
炭化物△、粗砂 | 15 黑色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |

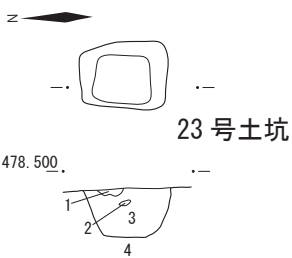


第23図 3面遺構図(5)



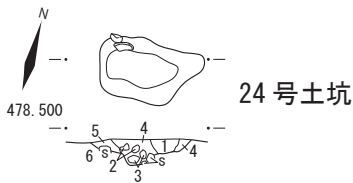
20号土坑

- 1 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黄褐色土層 しまり○・粘性×
黒褐色土
- 3 黄褐色土層 しまり○・粘性×
浅黄色粒子(φ20mm)
- 4 黄褐色土層 しまり○・粘性×
浅黄色粒子・黒褐色土(φ10mm)
- 5 黄褐色土層 しまり○・粘性×
黒褐色粒子(φ5mm)
- 6 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



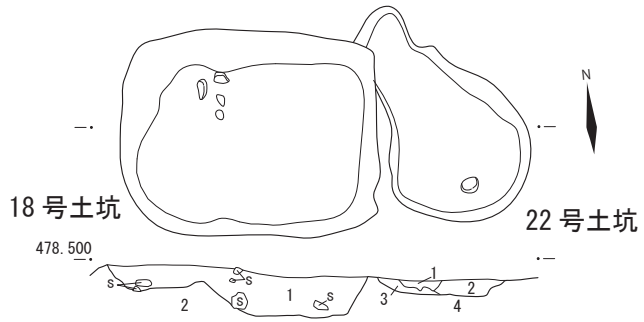
23号土坑

- 1 黄灰色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黄灰色土層 しまり○・粘性×
- 3 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
黒褐色土
- 4 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



24号土坑

- 1 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
白色粒子(φ2~3mm)
- 2 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
白色粒子(φ2~3mm)
- 3 浅黄色土層 しまり○・粘性×
白色粒子(φ1~2mm)
- 4 黒褐色土層 しまり○・粘性×
明黄褐色土
- 5 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
白色粒子(φ2~3mm)
- 6 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)

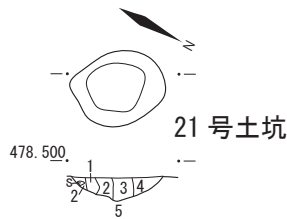


18号土坑

- 1 灰色粗砂層 しまり×・粘性×
礫(φ2~5mm)、動物遺体
- 2 にぶい黄褐色土層 しまり○・粘性×
細砂

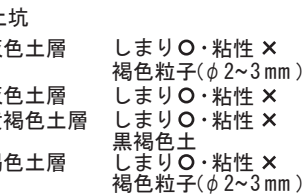
22号土坑

- 1 にぶい黄色土層 しまり○・粘性×
炭化物○、褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
黒褐色土
- 3 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
明黄褐色土
- 4 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



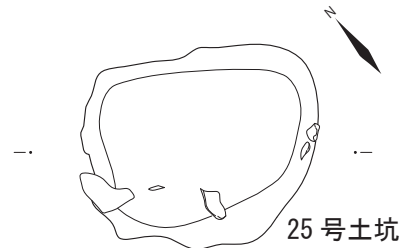
21号土坑

- 1 黄灰色土層 しまり○・粘性×
明黄褐色ブロック
- 2 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 3 暗灰黄色土層 しまり×・粘性×
黒褐色土
- 4 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
黒褐色土
- 5 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



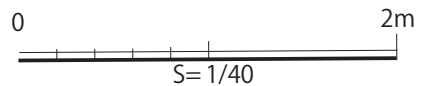
26号土坑

- 1 灰色細砂層 しまり×・粘性×
礫(φ2~5mm)
- 2 にぶい黄褐色土層 しまり×・粘性×
細砂

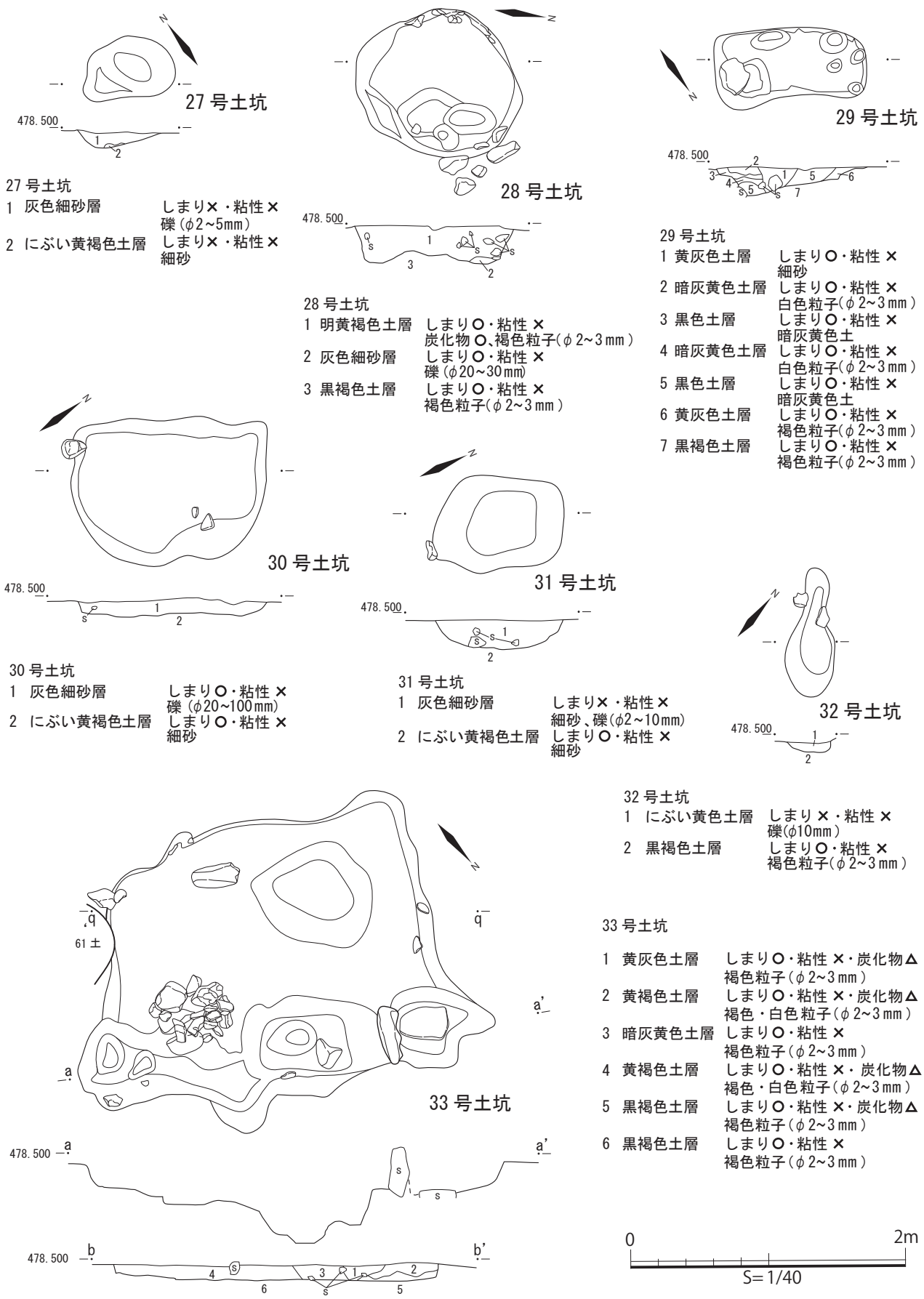


25号土坑

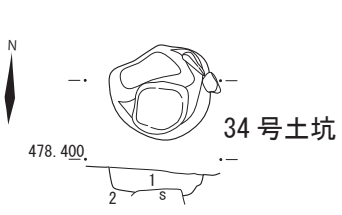
478.600



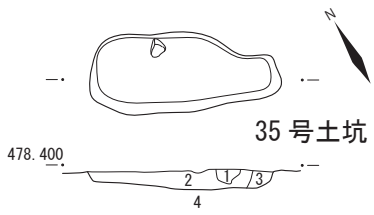
第24図 3面遺構図(6)



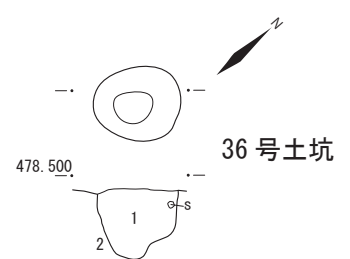
第25図 3面遺構図(7)



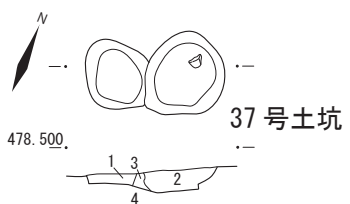
- 34号土坑
- 1 粘-フ黄色土層 しまり○・粘性×
白色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



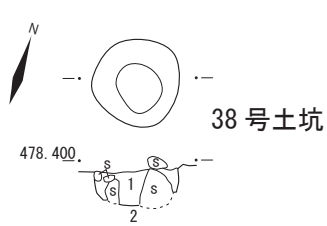
- 35号土坑
- 1 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黄灰色土層 しまり○・粘性×
明黄褐色土
 - 3 明赤褐色土層 しまり○・粘性×
黄灰色土
 - 4 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



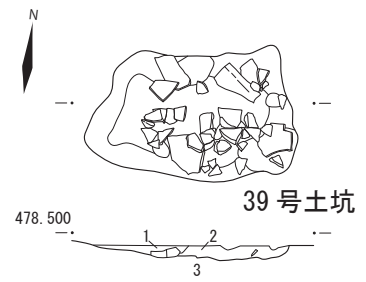
- 36号土坑
- 1 黒色土層 しまり○・粘性×
黄褐色土
 - 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



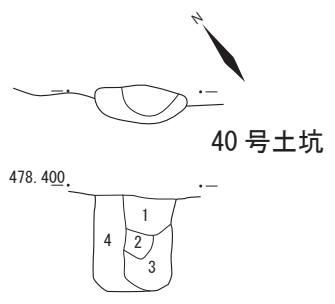
- 37号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×・炭化物△
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 3 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 4 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



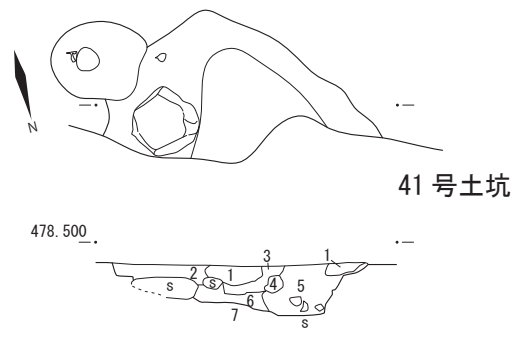
- 38号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり△・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



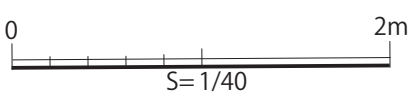
- 39号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×
黒褐色土
 - 2 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
漆喰含む
 - 3 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



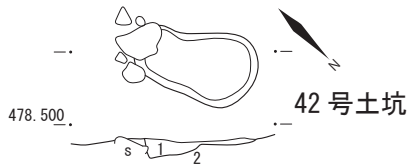
- 40号土坑
- 1 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
礫(φ10mm)
 - 2 黄灰色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 3 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
黄灰色土、褐色粒子(φ2~3mm)
 - 4 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



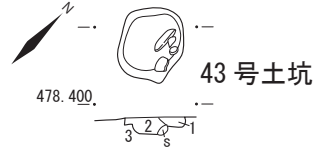
- 41号土坑
- 1 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
 - 2 灰黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)、明黄褐色土
 - 3 褐灰色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 4 黄褐色土層 しまり○・粘性×
にぶい黄褐色土
 - 5 にぶい黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)、明黄褐色土
 - 6 黄灰色細砂層 しまり○・粘性×
礫(φ20~50mm)
 - 7 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



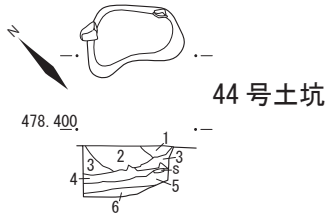
第26図 3面遺構図(8)



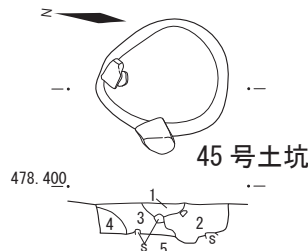
- 42号土坑
- | | |
|------------|--------------------------|
| 1 灰色細砂層 | しまり×・粘性×
細砂、礫(φ2~5mm) |
| 2 にぶい黄褐色土層 | しまり○・粘性×
細砂 |



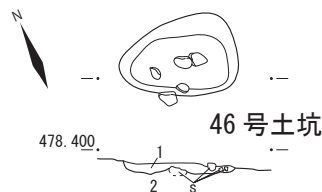
- 43号土坑
- | | |
|-----------|--------------------------|
| 1 にぶい黄色土層 | しまり○・粘性×
黄灰色土 |
| 2 黄灰色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 3 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |



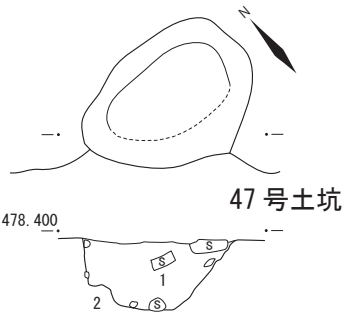
- 44号土坑
- | | |
|------------|--------------------------|
| 1 にぶい黄褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 2 黄灰色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 3 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 4 褐色土層 | しまり○・粘性×
粗砂 |
| 5 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
炭化物◎ |
| 6 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |



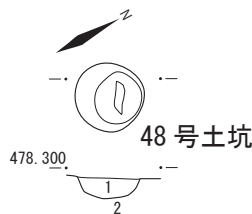
- 45号土坑
- | | |
|----------|--------------------------|
| 1 暗灰黄色土層 | しまり○・粘性×
明黄褐色土 |
| 2 黄灰色土層 | しまり○・粘性×
炭化物○ |
| 3 黄灰色土層 | しまり○・粘性×
にぶい黄色土 |
| 4 黄灰色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 5 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |



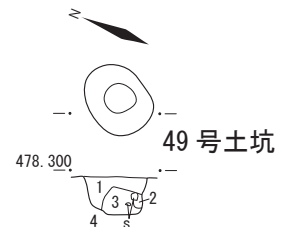
- 46号土坑
- | | |
|---------|-----------------------------|
| 1 灰色細砂層 | しまり○・粘性×
礫(φ20~30mm) |
| 2 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
細砂、褐色粒子(φ2~3mm) |



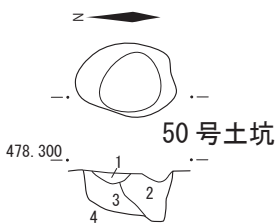
- 47号土坑
- | | |
|---------|--------------------------|
| 1 灰色細砂層 | しまり×・粘性×
礫(φ20~30mm) |
| 2 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |



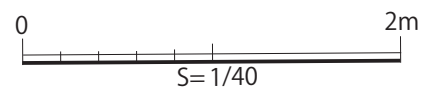
- 48号土坑
- | | |
|---------|--------------------------|
| 1 黄褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 2 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |



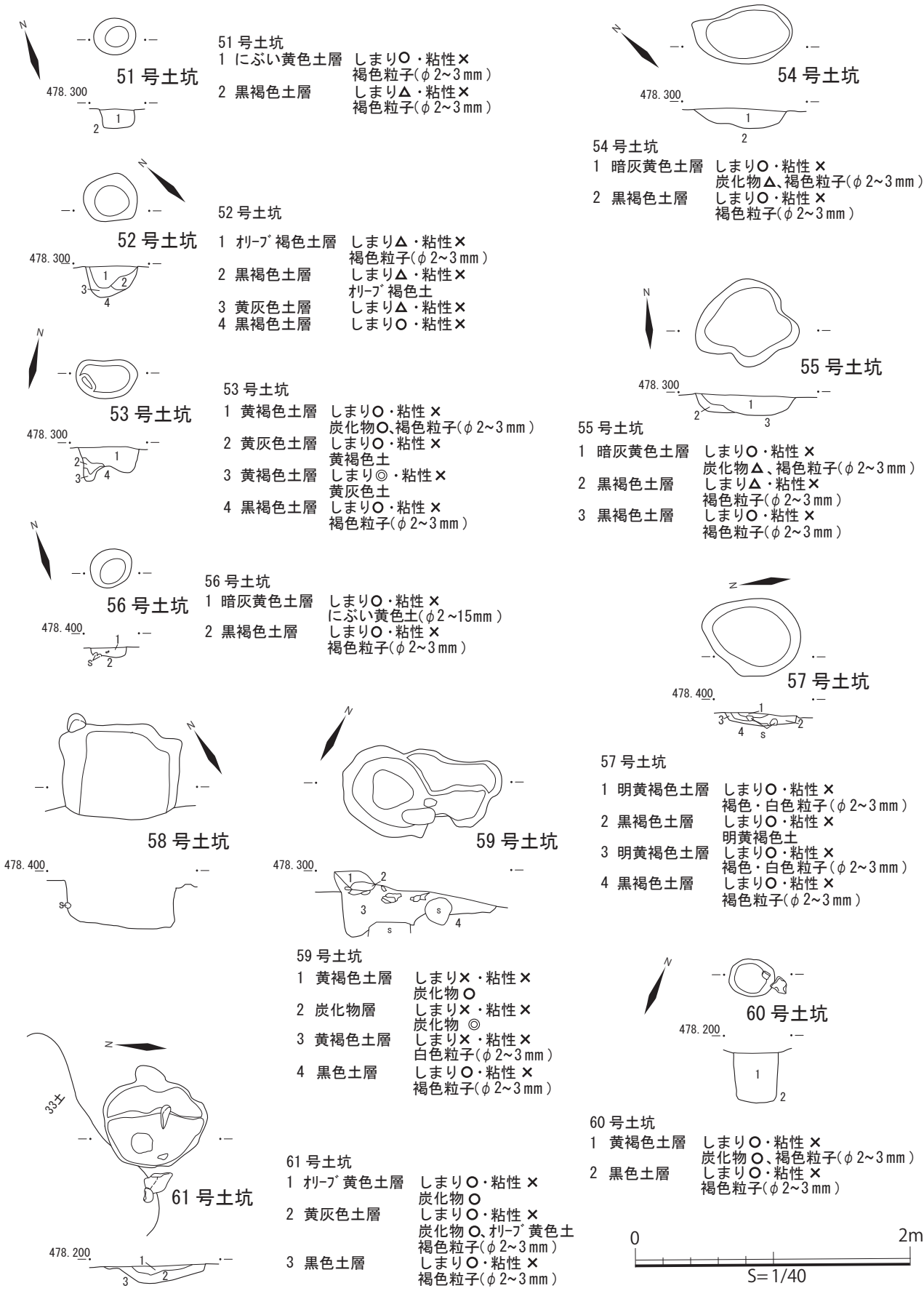
- 49号土坑
- | | |
|------------|--------------------------|
| 1 オリーブ褐色土層 | しまり○・粘性×
焼土粒子(φ2~3mm) |
| 2 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
焼土粒子(φ2~3mm) |
| 3 黄灰色土層 | しまり△・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 4 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |



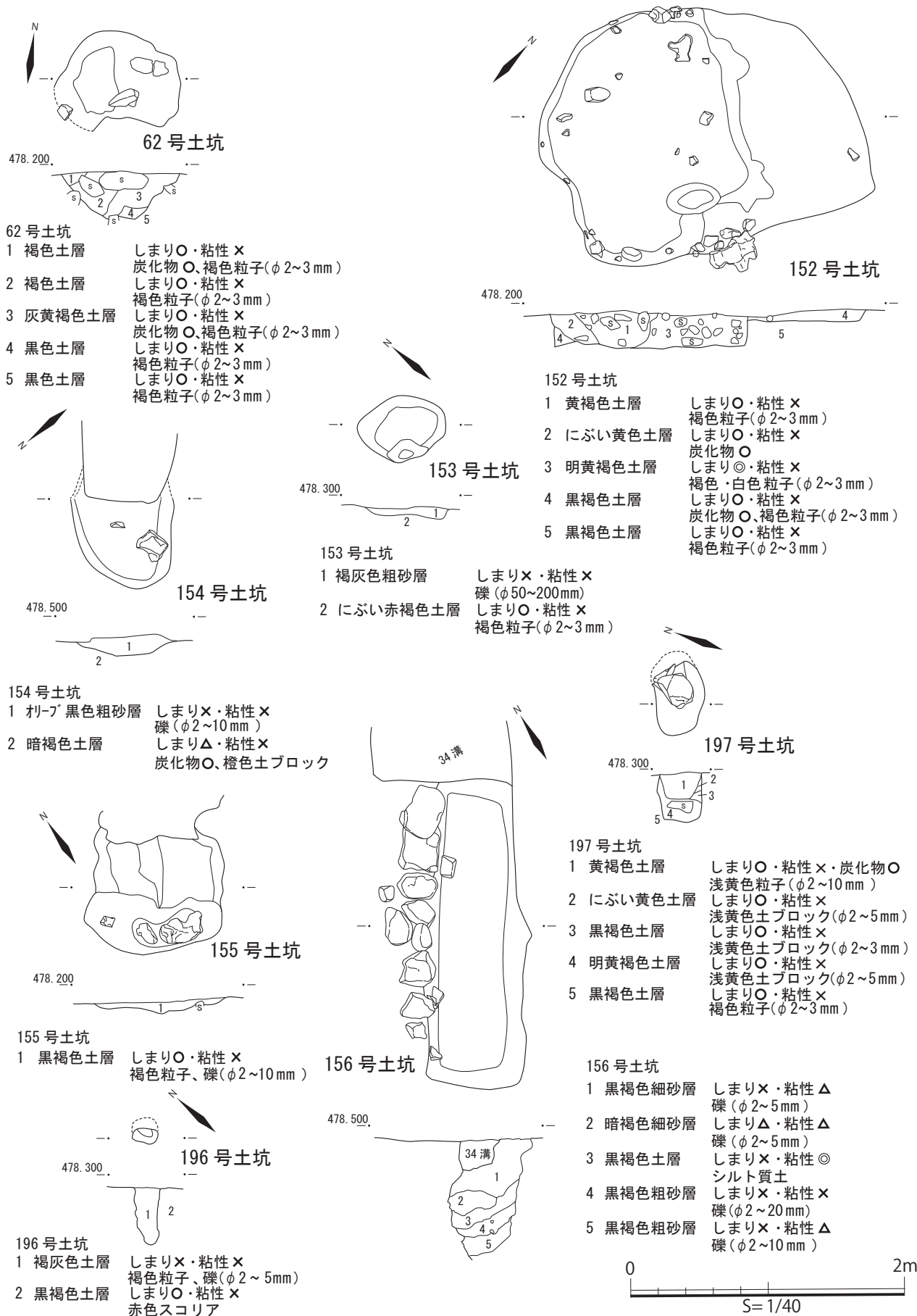
- 50号土坑
- | | |
|------------|--------------------------|
| 1 にぶい黄色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 2 黄灰色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 3 オリーブ褐色土層 | しまり○・粘性×
にぶい黄色土 |
| 4 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |



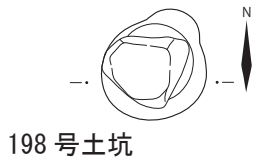
第27図 3面遺構図(9)



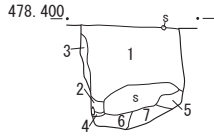
第28図 3面遺構図(10)



第29図 3面遺構図(11)



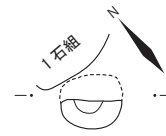
198号土坑



198号土坑

- 1 黄褐色土層
- 2 暗灰黄色土層
- 3 黒褐色土層
- 4 にぶい褐色土層
- 5 黄灰色土層
- 6 暗灰黄色土層
- 7 にぶい褐色土層

しまり○・粘性×
浅黄色ブロック(φ5~20mm)
しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
しまり○・粘性○
褐色粒子(φ2~3mm)
しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
しまり○・粘性×
明黄褐色土(φ5~20mm)
しまり○・粘性○



478.400.

199号土坑



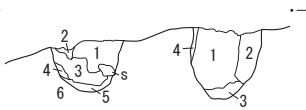
199号土坑

- 1 暗灰黄色土層
- 2 黄褐色土層
- 3 黄灰色土層
- 4 黄褐色土層
- 5 黒褐色土層

しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~5mm)
しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~5mm)
しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~5mm)
しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~5mm)
しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~5mm)

200号土坑

478.400



200号土坑

- 1 黄褐色土層
- 2 明黄褐色土層
- 3 明黄褐色土層
- 4 黄褐色土層
- 5 暗灰黄色土層
- 6 黒褐色土層

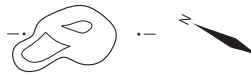
しまり○・粘性×・炭化物△
黄色・褐色粒子(φ2~5mm)
しまり○・粘性×
黄色粒子(φ2~3mm)
しまり○・粘性×
黄色・褐色粒子(φ2~3mm)
しまり○・粘性×
明黄褐色土ブロック(φ2~3mm)
しまり○・粘性×・炭化物△
明黄褐色土ブロック(φ2~5mm)
しまり○・粘性×
赤色粒子(φ2~3mm)

202号土坑

202号土坑

- 1 黄褐色土層
- 2 黄褐色土層
- 3 黄灰色土層
- 4 黒褐色土層

しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~5mm)
しまり○・粘性×
炭化物○、黄色・褐色粒子(φ2~5mm)
しまり△
褐色粒子(φ2~3mm)
しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



201号土坑

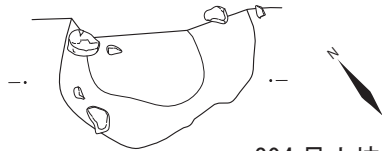
478.300.



201号土坑

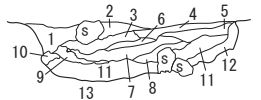
- 1 浅黄色土層
- 2 黒褐色土層

しまり○・粘性×
炭化物○、褐色粒子(φ2~5mm)
しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



204号土坑

478.100



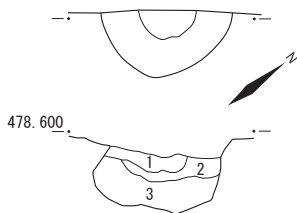
204号土坑

- 1 黄灰色粗砂層
- 2 黒褐色土層
- 3 褐灰色粗砂層

しまり×・粘性×
礫(φ2~5mm)
しまり○・粘性×
シルト質土、礫(φ2~5mm)
しまり○・粘性×
赤色粒子

- 4 灰黄褐色粗砂層
- 5 にぶい赤褐色粗砂層
- 6 褐色粗砂層
- 7 にぶい赤褐色細砂層
- 8 褐灰色粗砂層
- 9 暗赤褐色細砂層
- 10 暗赤褐色粗砂層
- 11 極暗赤褐色細砂層
- 12 暗灰黄色土層
- 13 黒褐色土層

しまり○・粘性×
礫(φ2~15mm)
しまり×・粘性×
しまり×・粘性×
赤色スコリア
しまり×・粘性×
炭化物○
しまり×・粘性×
炭化物○、赤色粒子
しまり×・粘性×
しまり○・粘性×
赤色スコリア(φ2~10mm)
しまり×・粘性×
粗砂、赤色粒子(φ2~10mm)
しまり○・粘性×
粗砂
しまり○・粘性○
灰色シルトブロック(φ5~50mm)
赤色粒子



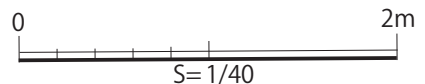
210号土坑

478.600

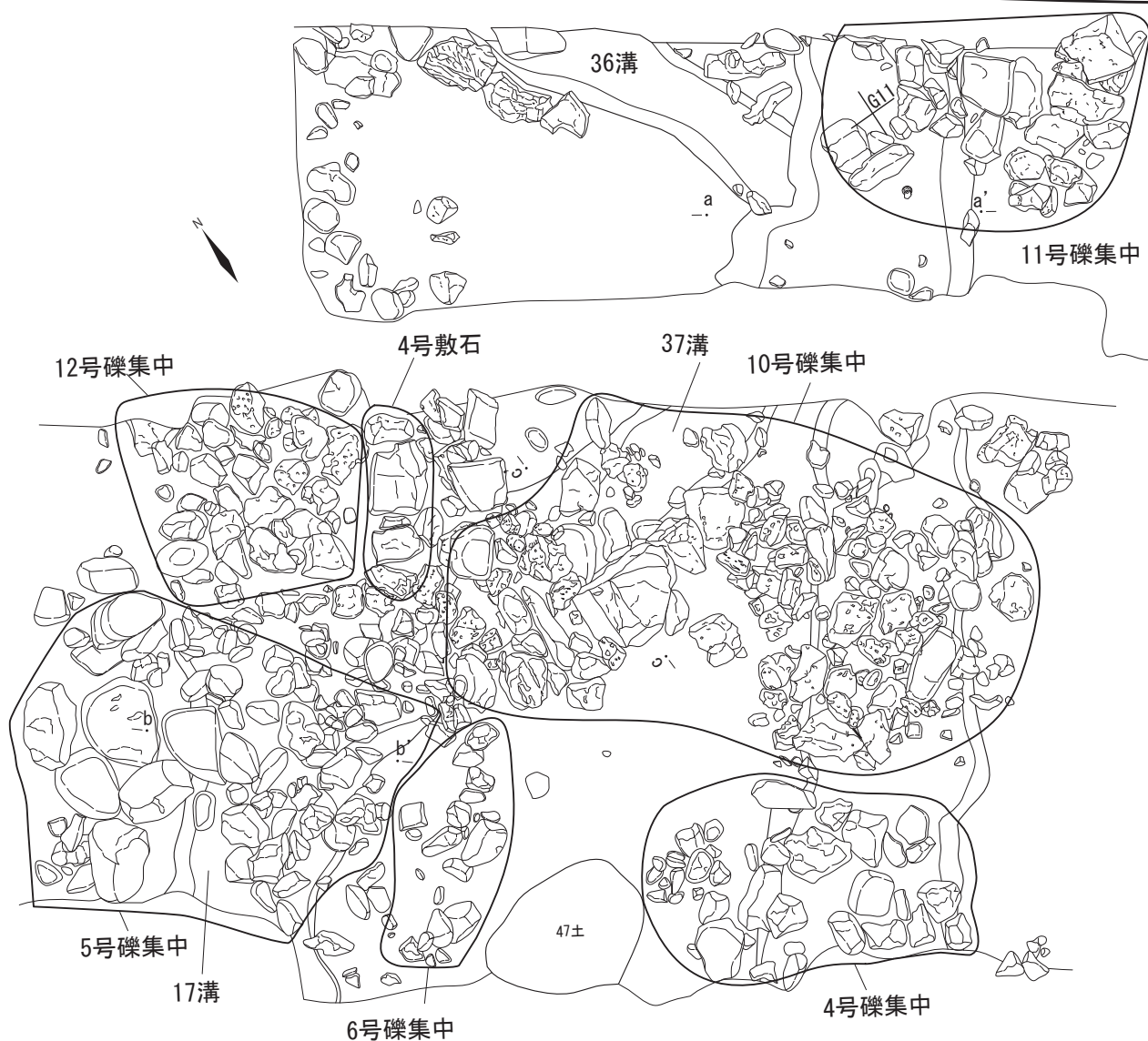


- 1 にぶい黄色土層
- 2 黄褐色土層
- 3 黄褐色土層

しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
しまり○・粘性×
黄色ブロック土(φ10~20mm)
しまり○・粘性×
細砂・粗砂



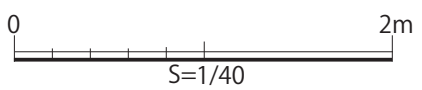
第30図 3面遺構図(12)



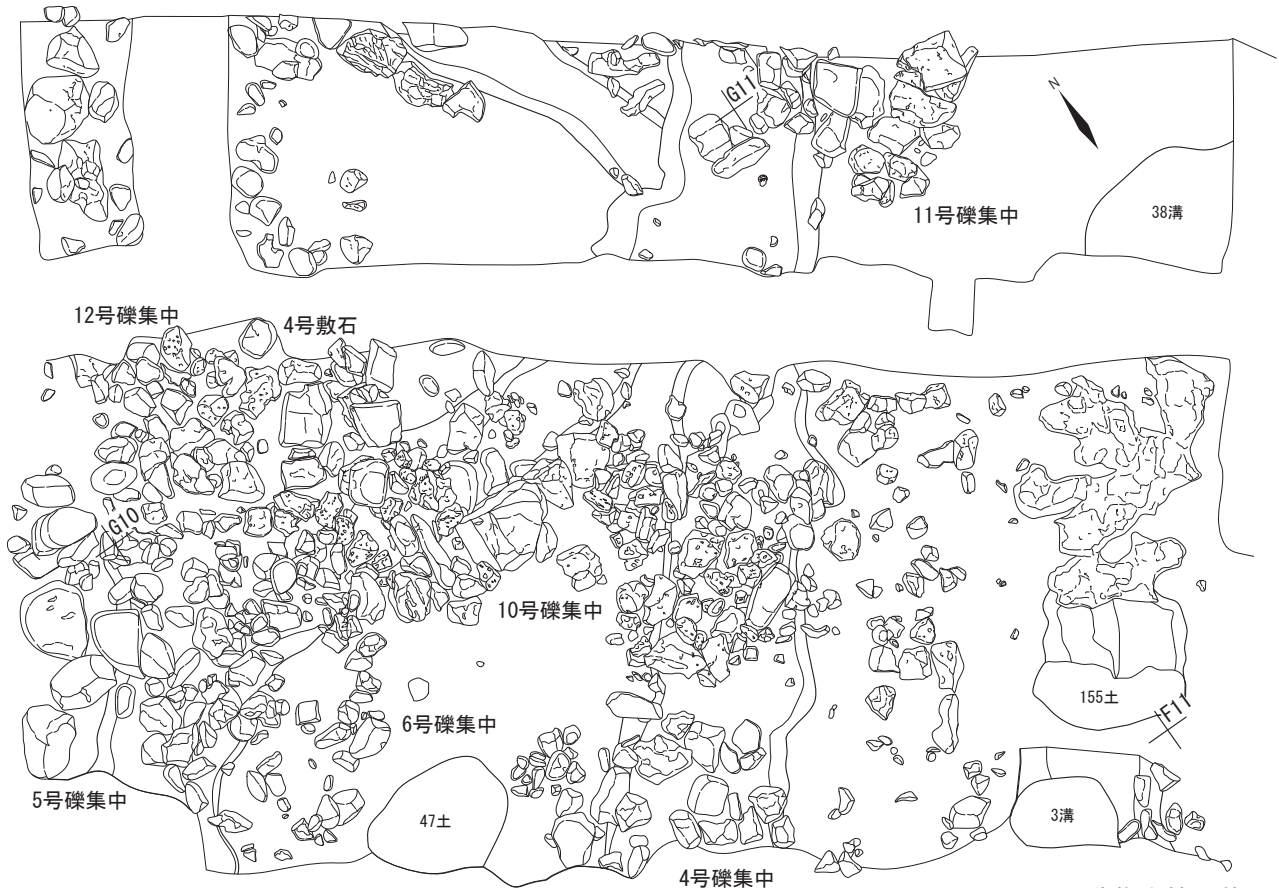
- 36号溝状遺構
- 11号溝状遺構
- 36・11号溝状遺構
- 1 暗褐色土層
しまり×・粘性×、粗砂
礫(φ2~20mm)
 - 2 にぶい黄褐色土層
しまり△・粘性×、粗砂
礫(φ2~20mm)
 - 3 黒褐色土層
しまり×・粘性×
細砂、礫(φ10mm)
 - 4 黒褐色土層
しまり◎・粘性×
粗砂、礫(φ2~20mm)
 - 5 極暗赤褐色土層
しまり◎・粘性×
粗砂(φ2~20mm)
 - 6 暗褐色土層
しまり×・粘性×
粗砂、礫(φ2~5mm)

- 17号溝状遺構
- 17号溝状遺構
- 1 灰白色土層
しまり○・粘性×
礫(φ2~20mm)
 - 2 黄褐色土層
しまり○・粘性×
粗砂、褐色粒子(φ2~3mm)

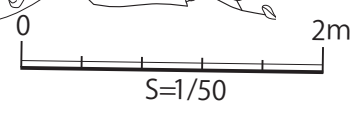
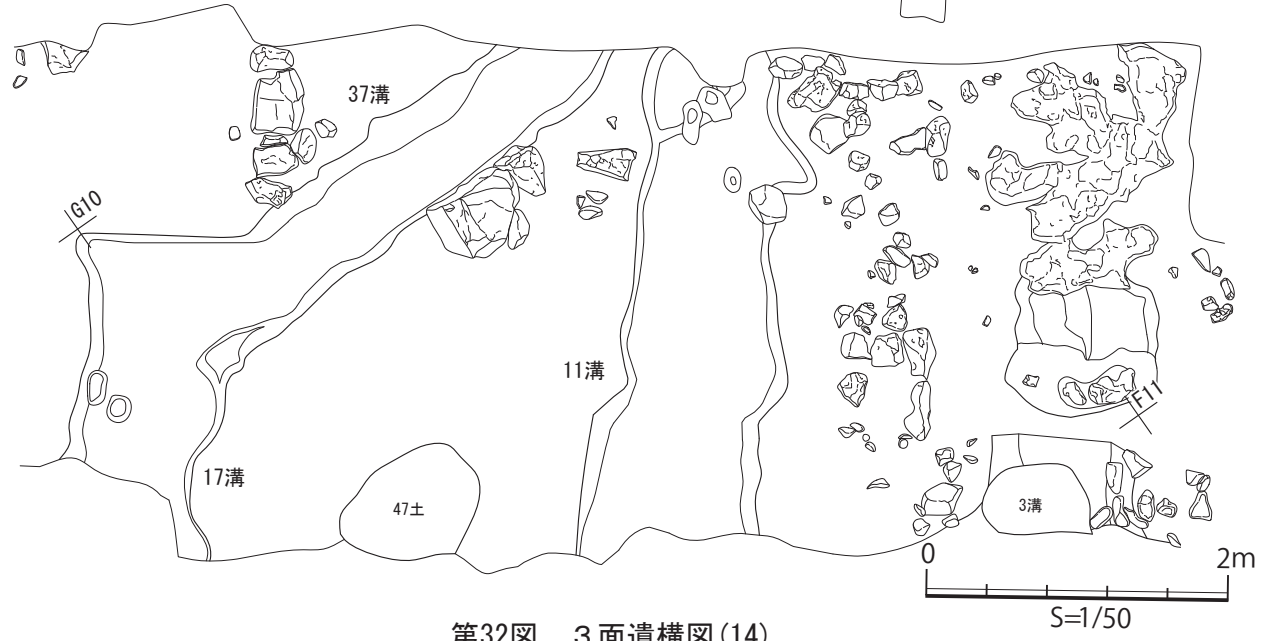
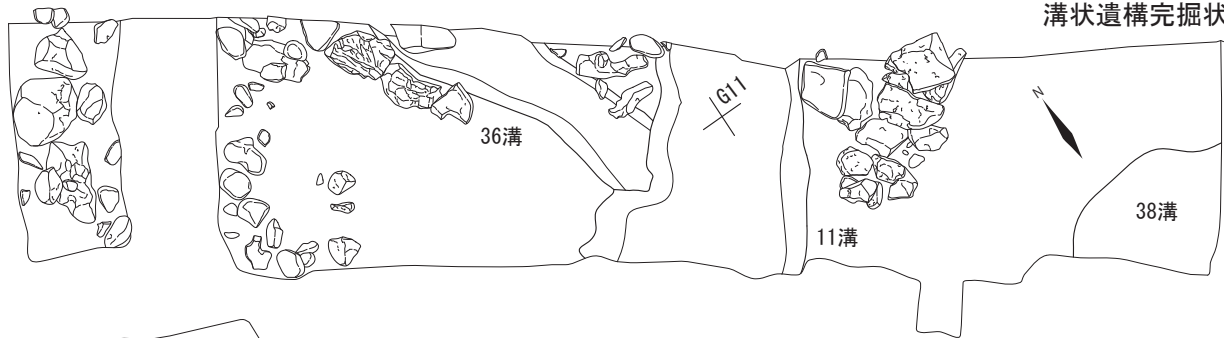
- 37号溝状遺構
- 37号溝状遺構
- 1 褐色土層
しまり○・粘性×
礫(φ10~50mm)
 - 2 黒褐色土層
しまり×・粘性×
礫(φ2~30mm)



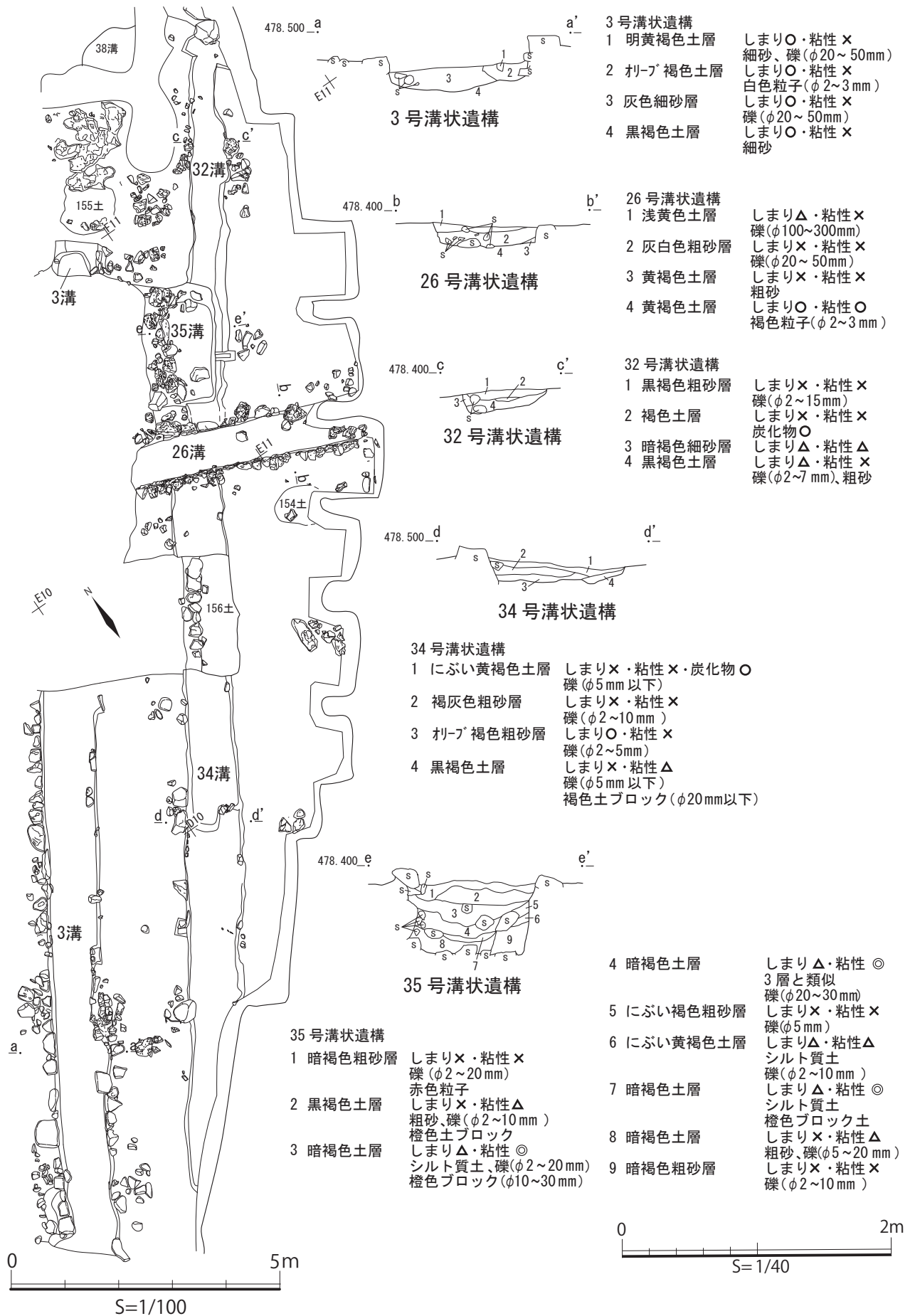
第31図 3面遺構図(13)



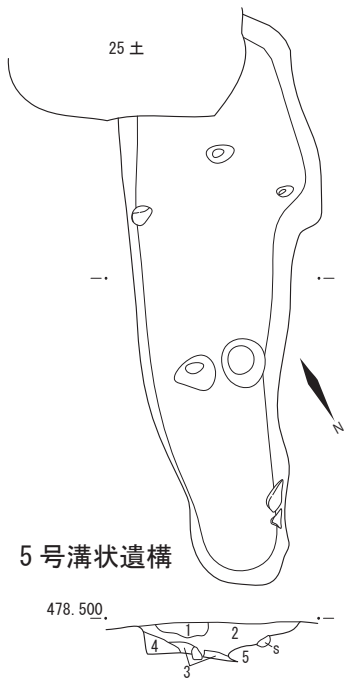
礫集中検出状況
溝状遺構完掘状況



第32図 3面遺構図(14)



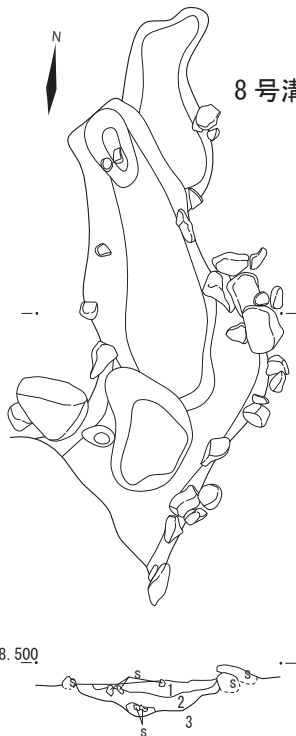
第33図 3面遺構図(15)



5号溝状遺構

478.500.

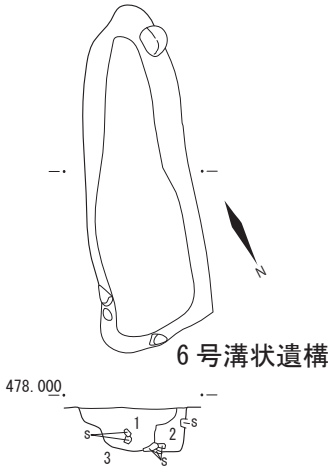
- 5号溝状遺構
- 1 暗灰褐色土層 しまり○・粘性×
 - 2 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
 - 3 黄灰色土層 しまり○・粘性×
 - 4 暗灰黄色土層 しまり○・粘性△
 - 5 黒褐色土層 しまり○・粘性×
- 褐色粒子(φ2~3mm)



8号溝状遺構

478.500

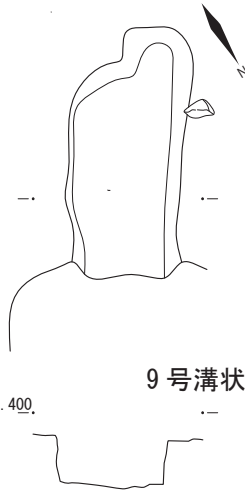
- 8号溝状遺構
- 1 灰色土層 しまり×・粘性×
 - 2 黄褐色土層 しまり△・粘性×
 - 3 黒褐色土層 しまり○・粘性×
- 褐色粒子(φ2~3mm)



6号溝状遺構

478.000.

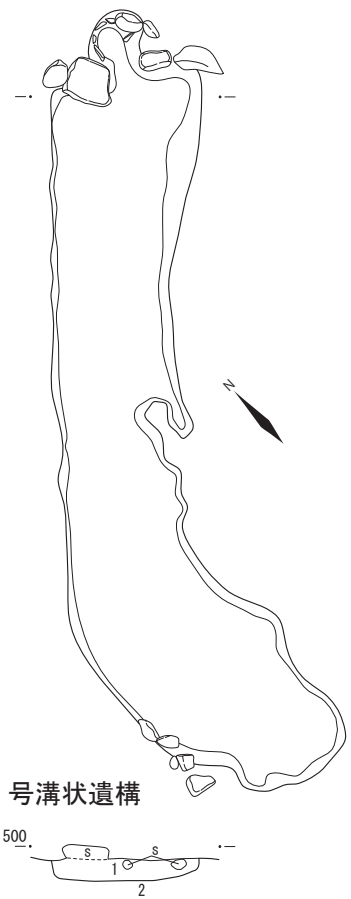
- 6号溝状遺構
- 1 灰色細砂層 しまり×・粘性×
 - 2 黄灰色土層 しまり○・粘性×
 - 3 にぶい黄褐色土層 しまり○・粘性×
- 礫(φ20~30mm)
細砂



9号溝状遺構

478.400.

- 10号溝状遺構
- 1 刈-ブ 褐色土層 しまり○・粘性×
 - 2 黄灰色土層 しまり×・粘性×
 - 3 黒色土層 しまり○・粘性×
- 褐色粒子(φ2~3mm)
礫(φ10~20mm)
細砂層



7号溝状遺構

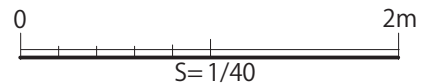
478.500.

- 7号溝状遺構
- 1 灰色細砂層 しまり×・粘性×
 - 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
- 礫(φ20~100mm)
褐色粒子(φ2~3mm)

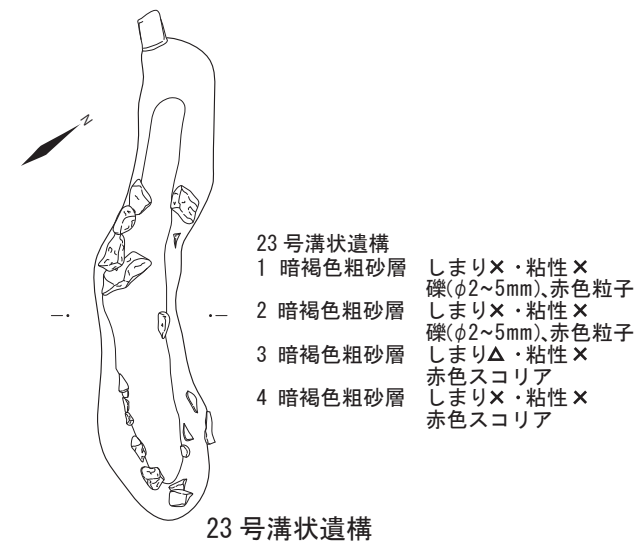


10号溝状遺構

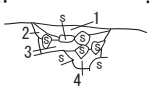
478.400.



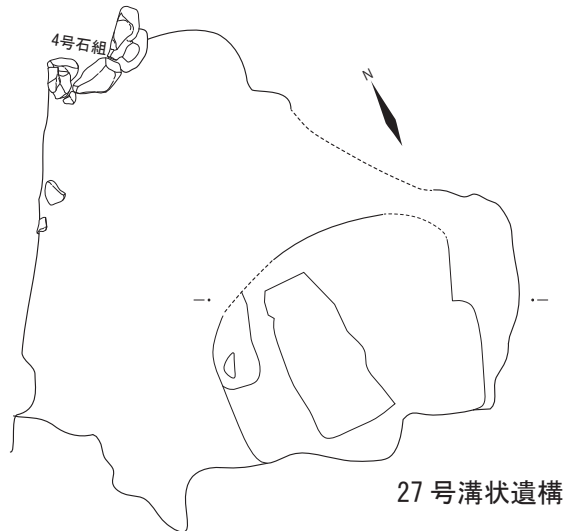
第34図 3面遺構図(16)



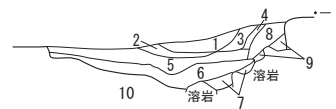
478.500



23号溝状遺構

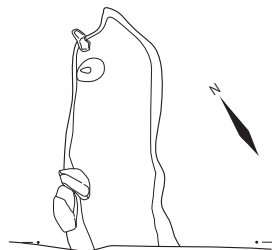


477.600

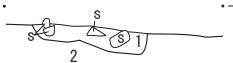


27号溝状遺構

- | | |
|------------|--|
| 1 暗褐色土層 | しまり×・粘性×
炭化物○、礫・赤色粒子(φ2~5mm) |
| 2 褐灰色粗砂層 | しまり×・粘性×
赤色粒子 |
| 3 黄灰色細砂層 | しまり×・粘性×・炭化物○
礫・赤色粒子(φ2~5mm) |
| 4 黄灰色土層 | しまり×・粘性×・炭化物○ |
| 5 褐灰色土層 | しまり×・粘性○・炭化物○
褐色土、粗砂 |
| 6 黒褐色極細砂層 | 礫・赤色粒子(φ2mm以下)
しまり○・粘性○・炭化物○
シルト質土、黒色土ブロック |
| 7 暗褐色土層 | しまり×・粘性×
シルト質土 |
| 8 黒褐色土層 | しまり○・粘性○
シルト質土、赤色粒子 |
| 9 にぶい黄褐色土層 | しまり○・粘性○
橙色粒子 |
| 10 暗黄褐色土層 | しまり○・粘性×・炭化物○
赤色粒子 |

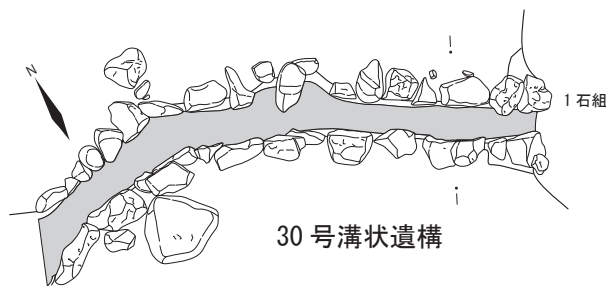


478.500



29号溝状遺構

- | | |
|-----------|--|
| 1 にぶい黄色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)、粗砂
赤褐色粒子(φ2~5mm) |
| 2 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |

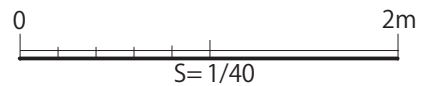


478.500

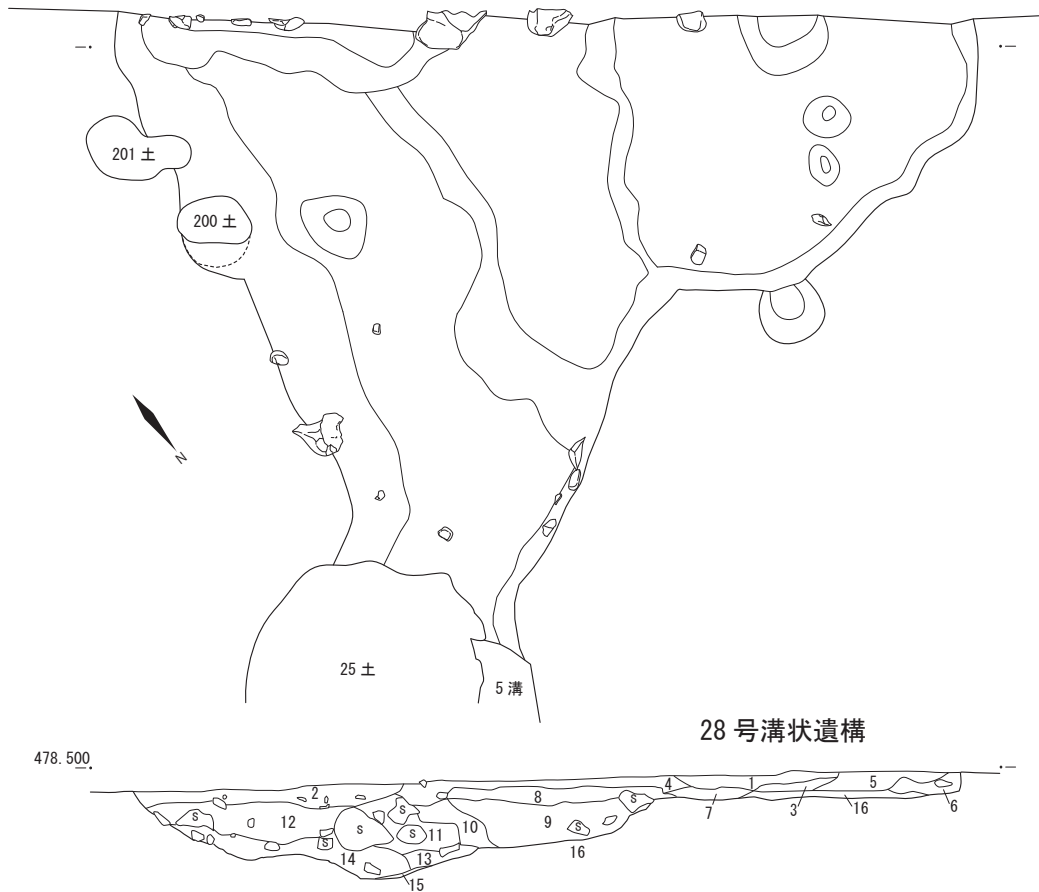


30号溝状遺構

- | | |
|----------|--------------------------|
| 1 暗灰黄色土層 | 褐色粒子(φ2~3mm)
礫(φ10mm) |
| 2 灰色粘土層 | しまり×・粘性×
炭化物○ |
| 3 灰色粘土層 | しまり×・粘性×
暗灰黄色土 |
| 4 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |



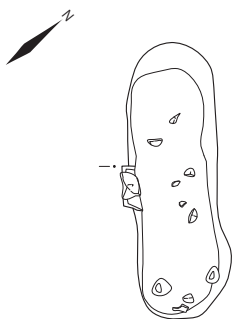
第35図 3面遺構図(17)



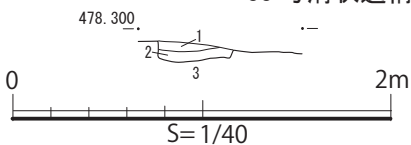
28号溝状遺構

28号溝状遺構

- | | | | |
|-----------|---|------------|--------------------------------|
| 1 暗灰黄色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)、細砂 | 9 黄灰色極細砂層 | しまり○・粘性×
鉄分集積層、細砂 |
| 2 にぶい黄色土層 | しまり○・粘性×、粗砂
礫(φ10~50mm)、褐色粒子(φ2~3mm) | 10 明赤褐色土層 | しまり○・粘性×・炭化物○
赤褐色粒子(φ2~5mm) |
| 3 暗灰黄色土層 | しまり×・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) | 11 黄灰色土層 | しまり◎・粘性×
赤褐色粒子(φ2~5mm) |
| 4 黄灰色土層 | しまり△・粘性×
炭化物△、褐色粒子(φ2~3mm) | 12 黄灰色土層 | しまり△・粘性×
赤褐色粒子(φ2~3mm) |
| 5 黄灰色土層 | しまり○・粘性×・炭化物△
にぶい黄色土、褐色粒子(φ2~3mm) | 13 明赤褐色粗砂層 | しまり○・粘性×
礫(φ5~10mm) |
| 6 黄灰色土層 | しまり△・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) | 14 灰黄色土層 | しまり◎・粘性×
粗砂、褐色粒子(φ2~3mm) |
| 7 浅黄色土層 | しまり×・粘性×
粗砂、浅黄色粒子(φ2~3mm) | 15 明赤褐色粗砂層 | しまり◎・粘性×
赤褐色粒子(φ2~5mm) |
| 8 灰黄色土層 | しまり○・粘性×
粗砂、褐色粒子(φ2~3mm) | 16 黒褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |

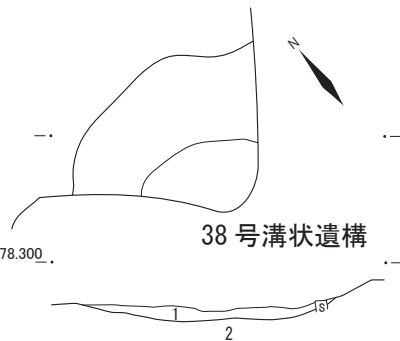


33号溝状遺構



33号溝状遺構

- | | |
|-------------|--------------------------|
| 1 橙色細砂層 | しまり×・粘性×
粗砂 |
| 2 にぶい橙色極細砂層 | しまり×・粘性×
炭化物○ |
| 3 にぶい赤褐色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |

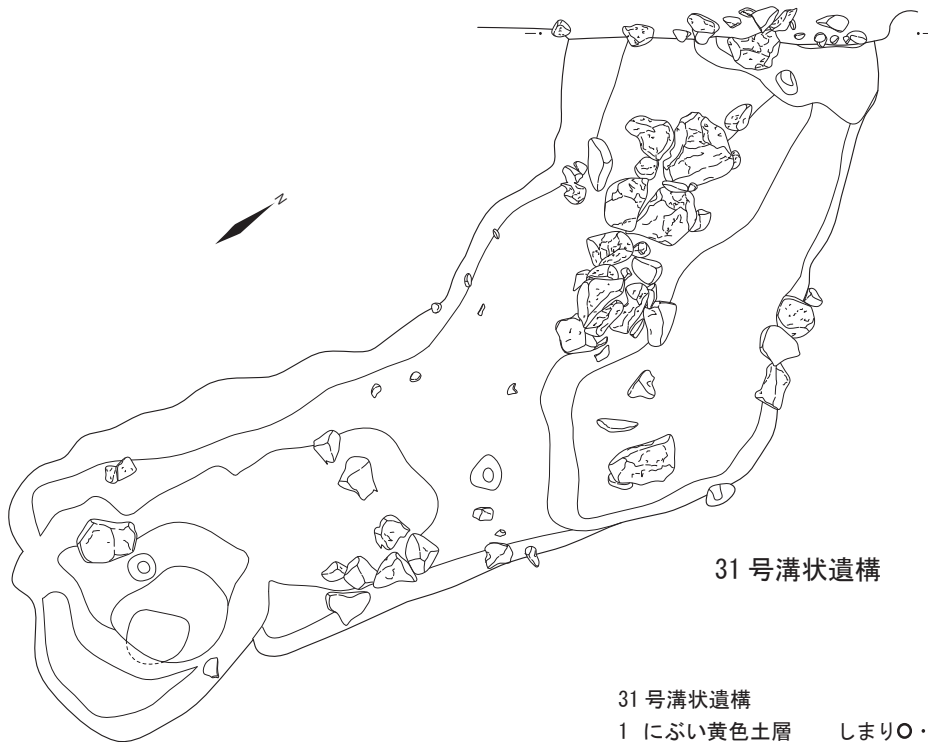


38号溝状遺構

38号溝状遺構

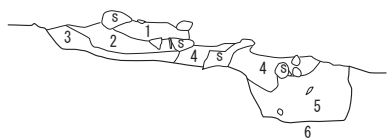
- | | |
|----------|-----------------------------|
| 1 黒褐色粗砂層 | しまり×・粘性×・炭化物○
礫(φ2~10mm) |
| 2 暗褐色粗砂層 | しまり△・粘性×・炭化物○
礫(φ2~5mm) |

第36図 3面遺構図(18)



31号溝状遺構

478.500

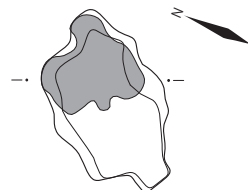


31号溝状遺構

- | | | |
|------------|----------|-------------------|
| 1 にぶい黄色土層 | しまり○・粘性× | 褐色粒子(φ2~3mm) |
| 2 灰色粗砂層 | しまり○・粘性× | 礫(φ50~200mm) |
| 3 灰褐色土層 | しまり○・粘性× | 炭化物○、褐色粒子(φ2~3mm) |
| 4 灰褐色土層 | しまり×・粘性× | 炭化物○ |
| 5 灰色粗砂層 | しまり×・粘性× | 礫(φ5~20mm) |
| 6 にぶい赤褐色土層 | しまり○・粘性× | 褐色粒子(φ2~3mm) |

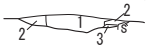


6号焼土集中



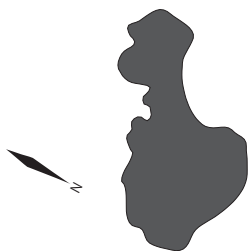
13号焼土集中

478.400



13号焼土集中

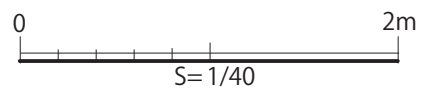
- | | | |
|----------|----------|--------------|
| 1 暗灰黄色土層 | しまり○・粘性× | 炭化物○ |
| 2 焼土層 | しまり○・粘性× | |
| 3 黒褐色土層 | しまり○・粘性× | 褐色粒子(φ2~3mm) |



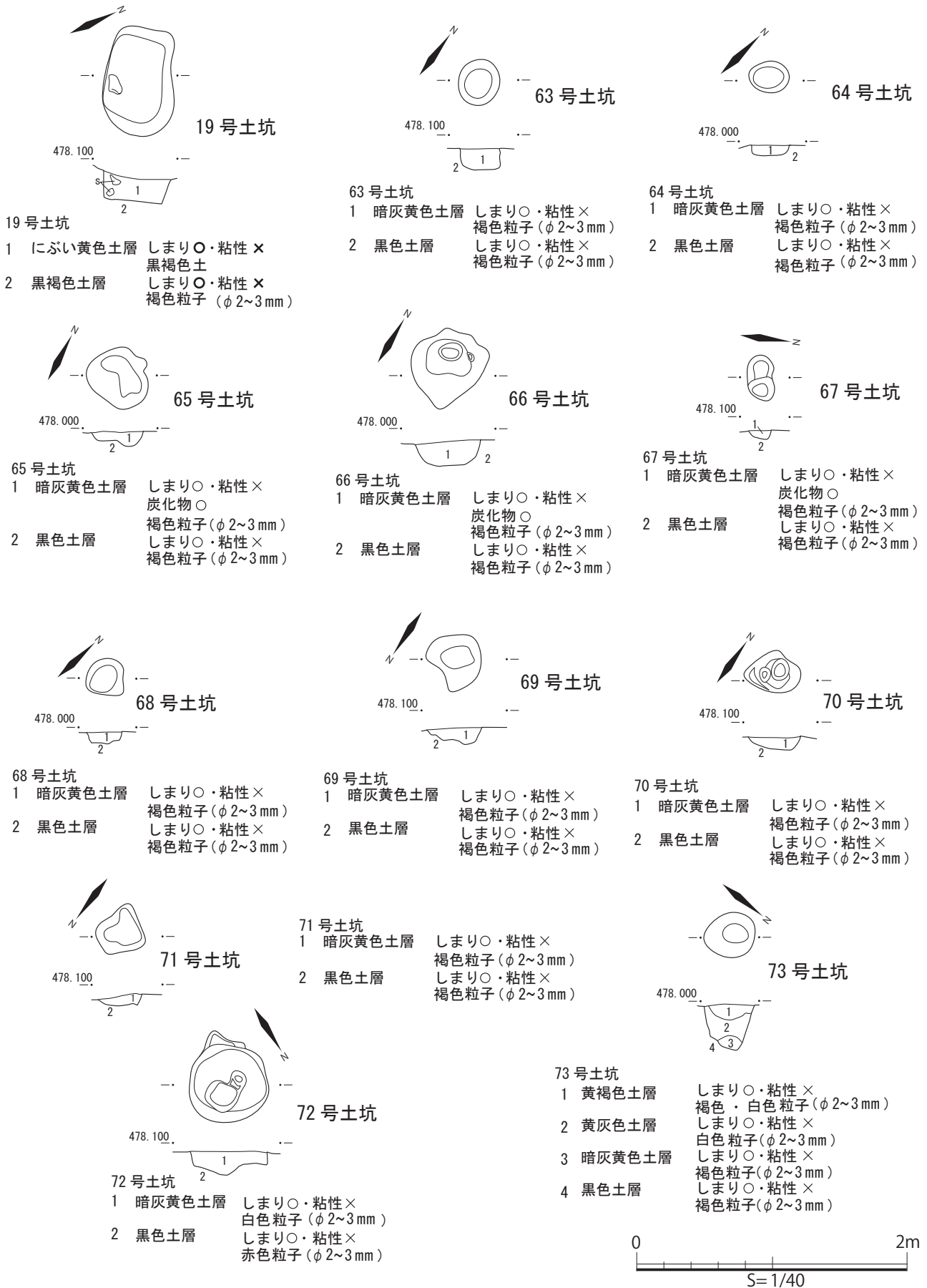
1号炭化物集中



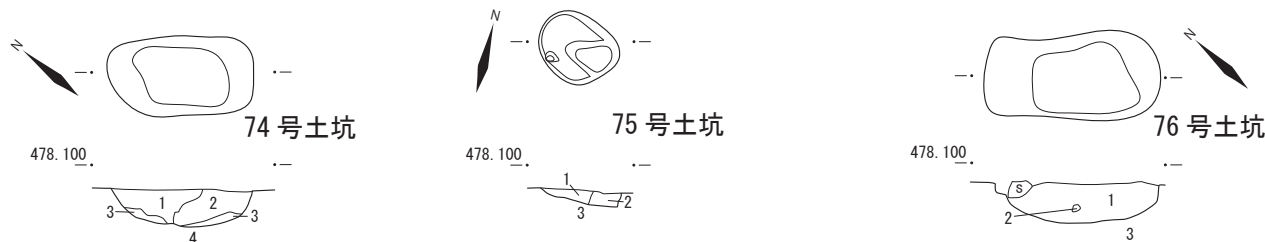
9号瓦溜



第37図 3面遺構図(19)



第38図 4面遺構図(1)



74号土坑

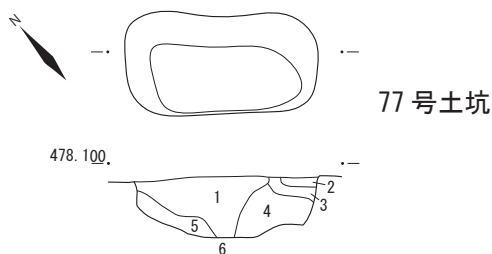
- 1 黄灰色土層 しまり◎・粘性×
黒色土
- 2 黄褐色土層 しまり○・粘性×
白色粒子(φ2~3mm)
礫(φ10~20mm)
- 3 にぶい黄色土層 しまり△・粘性×
粗砂
- 4 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)

75号土坑

- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黒褐色粒子 しまり△・粘性×
黄褐色土
- 3 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)

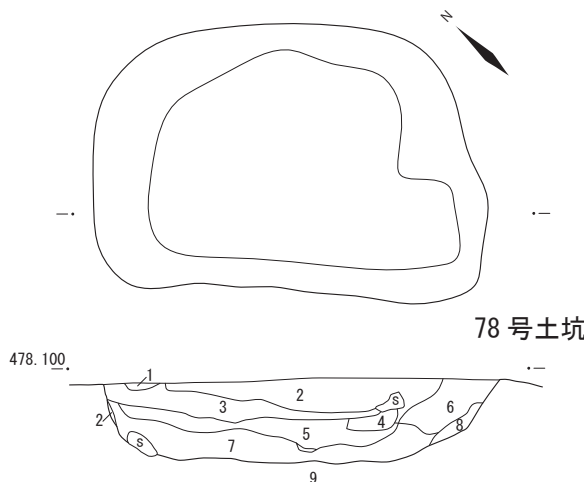
76号土坑

- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色・白色粒子(φ2~3mm)
- 2 黒色土層 しまり○・粘性×
- 3 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



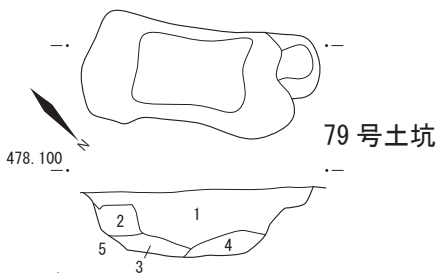
77号土坑

- 1 暗灰黄色土層 しまり△・粘性×・炭化物○
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 3 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
黄褐色土
- 4 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 5 黄褐色土層 しまり○・粘性×・炭化物○
褐色粒子(φ2~3mm)
- 6 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



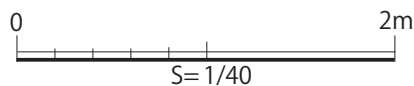
78号土坑

- 78号土坑
- 1 にぶい黄色極細砂層 しまり×・粘性×
- 2 明黄褐色極細砂層 しまり×・粘性×
炭化物○
- 3 黒褐色粗砂層 しまり×・粘性×
礫(φ2~5mm)
- 4 黒褐色粗砂層 しまり×・粘性×
礫(φ2~5mm)
- 5 明黄褐色極細砂層 しまり×・粘性×
炭化物○
- 6 灰褐色極細砂層 しまり×・粘性×
礫(φ2~5mm)
- 7 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
炭化物○
礫(φ2~5mm)
- 8 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 9 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)

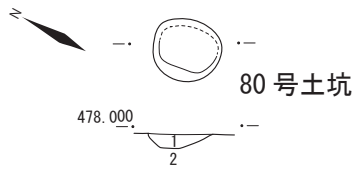


79号土坑

- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×・炭化物○
褐色・白色粒子(φ2~3mm)
- 2 黒色土層 しまり○・粘性×
白色粒子(φ2~3mm)
- 3 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
黄褐色土、白色粒子(φ2~3mm)
- 4 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 5 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



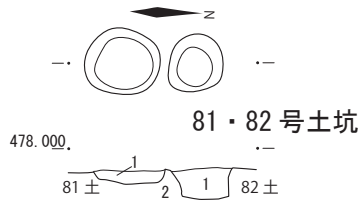
第39図 4面遺構図(2)



80号土坑

80号土坑

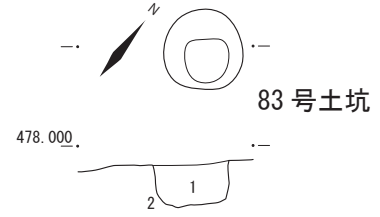
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黑色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



81・82号土坑

81・82号土坑

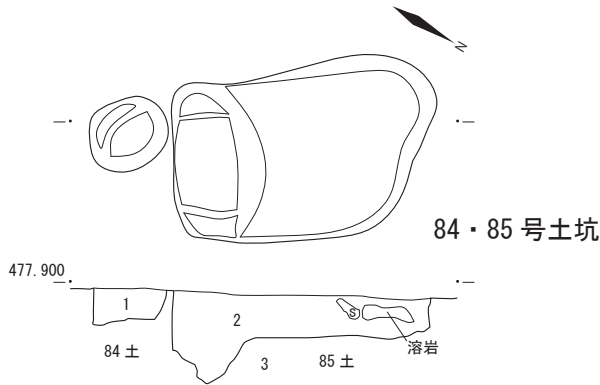
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黑色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



83号土坑

83号土坑

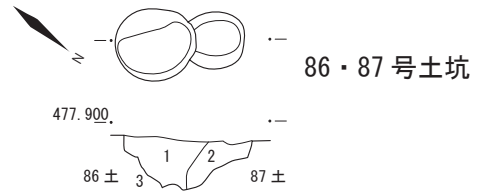
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
白色粒子(φ2~3mm)
- 2 黑色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



84・85号土坑

84・85号土坑

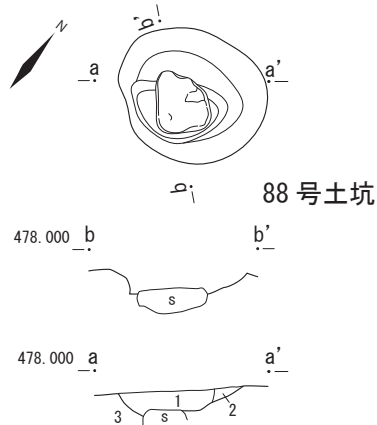
- 1 黑色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×・炭化物△
褐色粒子(φ2~3mm)
- 3 黑色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



86・87号土坑

86・87号土坑

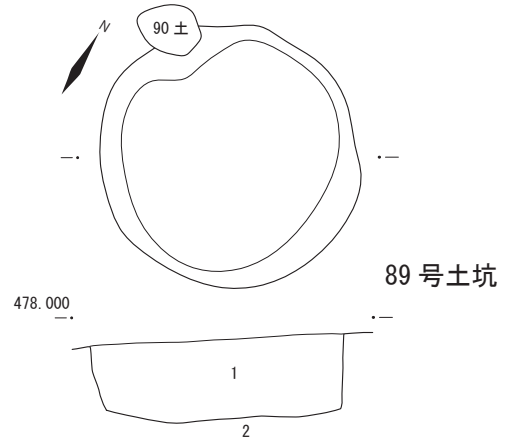
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
炭化物△
- 2 黄灰色土層 しまり○・粘性×
暗灰黄色土含む
- 3 黑色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



88号土坑

88号土坑

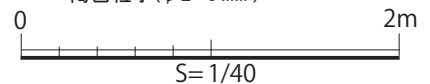
- 1 刈-ブ褐色土層 しまり○・粘性×・炭化物○
白色粒子(φ2~5mm)
- 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
白色粒子(φ2~3mm)
- 3 黑色土層 しまり○・粘性×



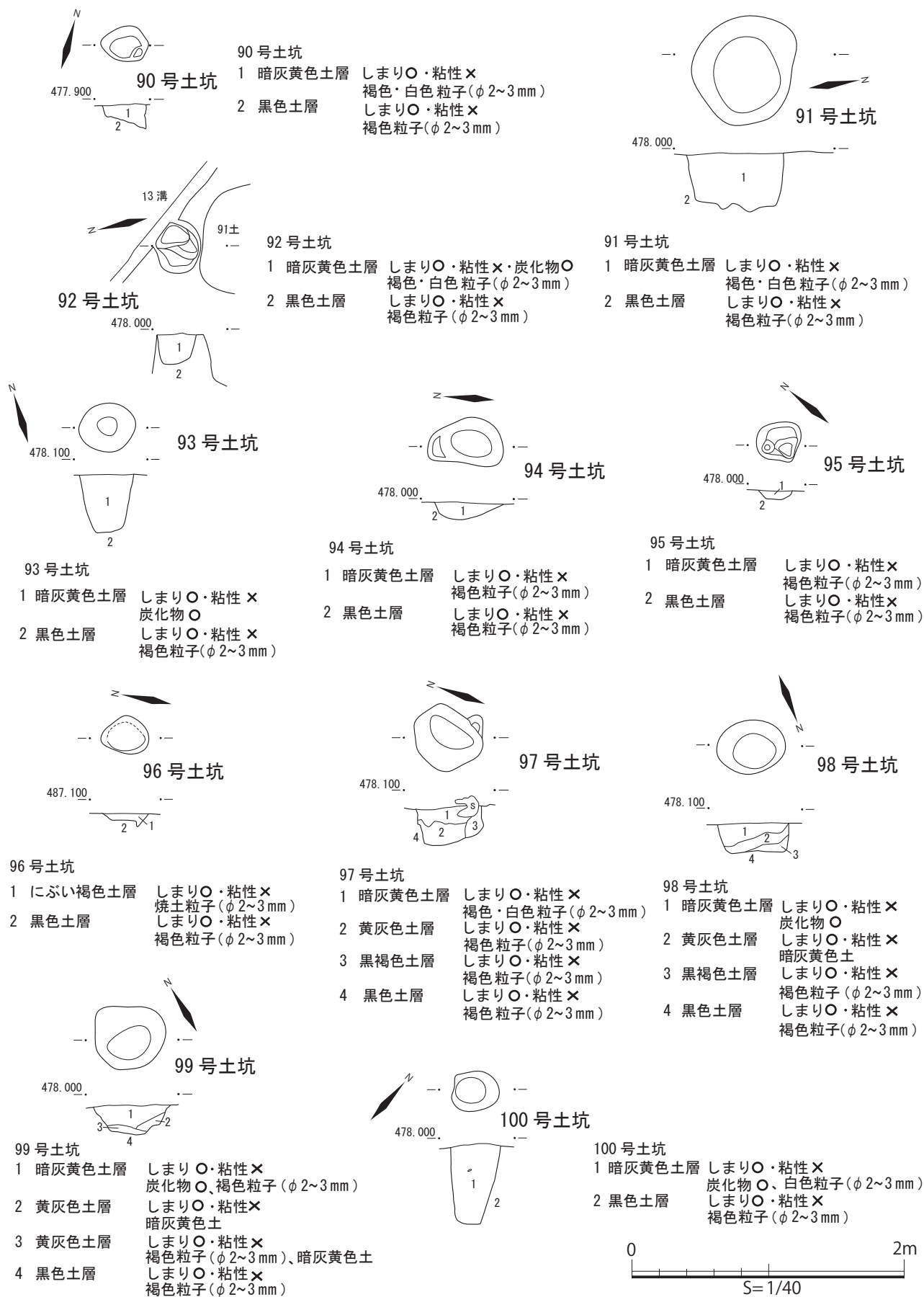
89号土坑

89号土坑

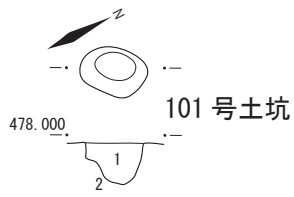
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×・炭化物○
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黑色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



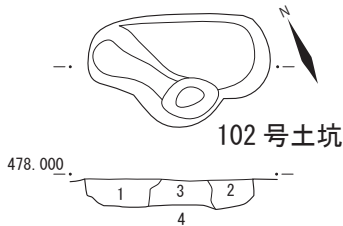
第40図 4面遺構図(3)



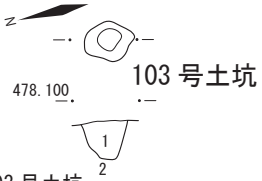
第41図 4面遺構図(4)



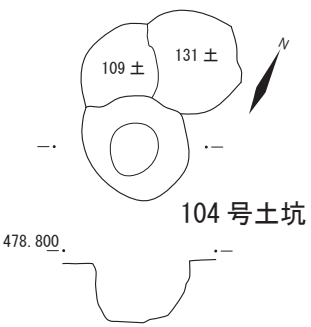
101号土坑
 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×・炭化物○
 褐色・白色粒子(φ2~3mm)
 2 黑色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)



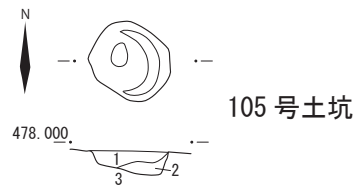
102号土坑
 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×・炭化物△
 褐色粒子(φ2~3mm)
 2 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
 褐色・白色粒子(φ2~3mm)
 3 黄灰色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)
 4 黑色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)



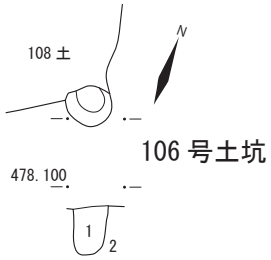
103号土坑
 1 黄褐色土層 しまり○・粘性△
 炭化物△、褐色粒子(φ2~3mm)
 2 黑色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)



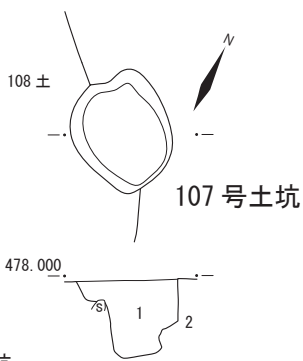
104号土坑



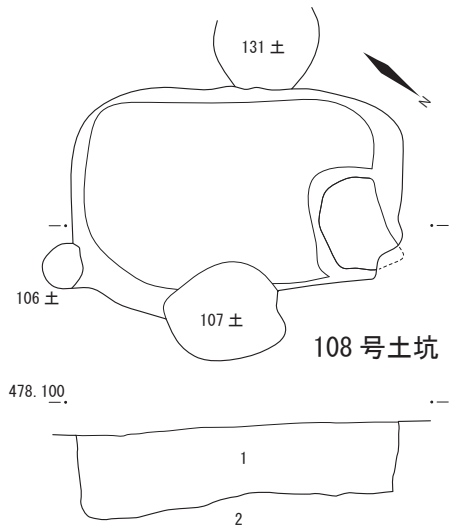
105号土坑
 1 にぶい黄色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)
 2 黄灰色土層 しまり○・粘性×
 にぶい黄色土
 3 黑色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)



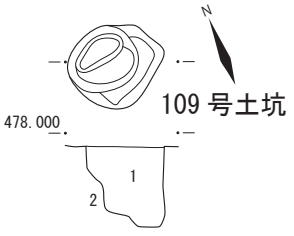
106号土坑
 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)
 2 黑色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)



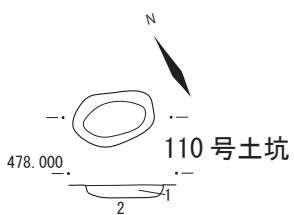
107号土坑
 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
 炭化物△、褐色粒子
 (φ2~3mm)
 2 黑色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)



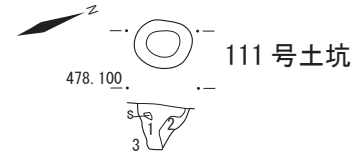
108号土坑
 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×
 炭化物△、褐色粒子(φ2~3mm)
 2 黑色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)



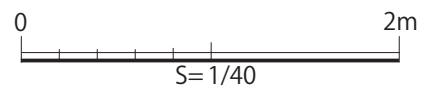
109号土坑
 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)
 2 黑色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)



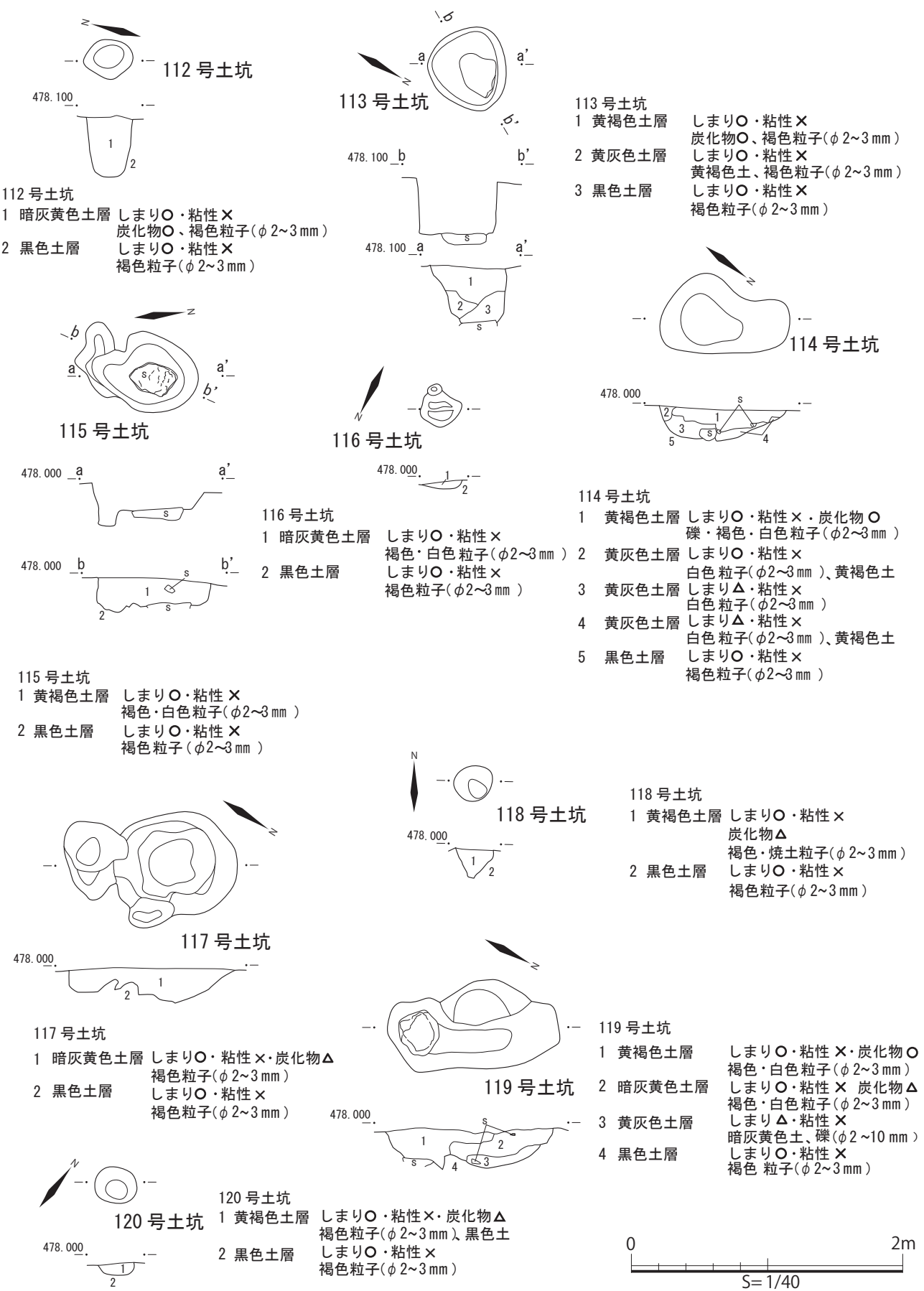
110号土坑
 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)
 2 黑色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)



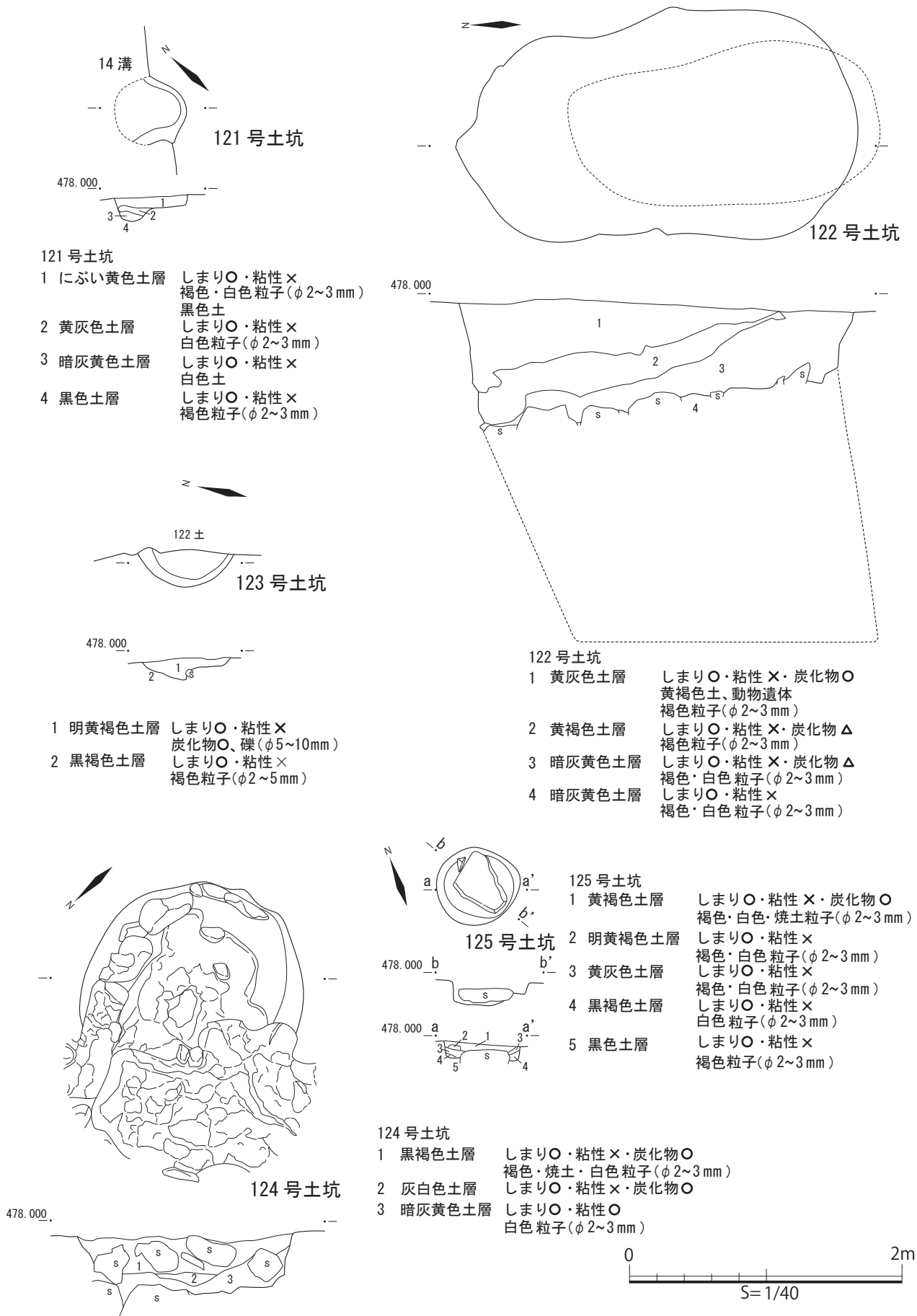
111号土坑
 1 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
 炭化物○、褐色・白色粒子(φ2~3mm)
 2 黄灰色土層 しまり×・粘性×
 暗灰黄色土
 3 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
 褐色粒子(φ2~3mm)



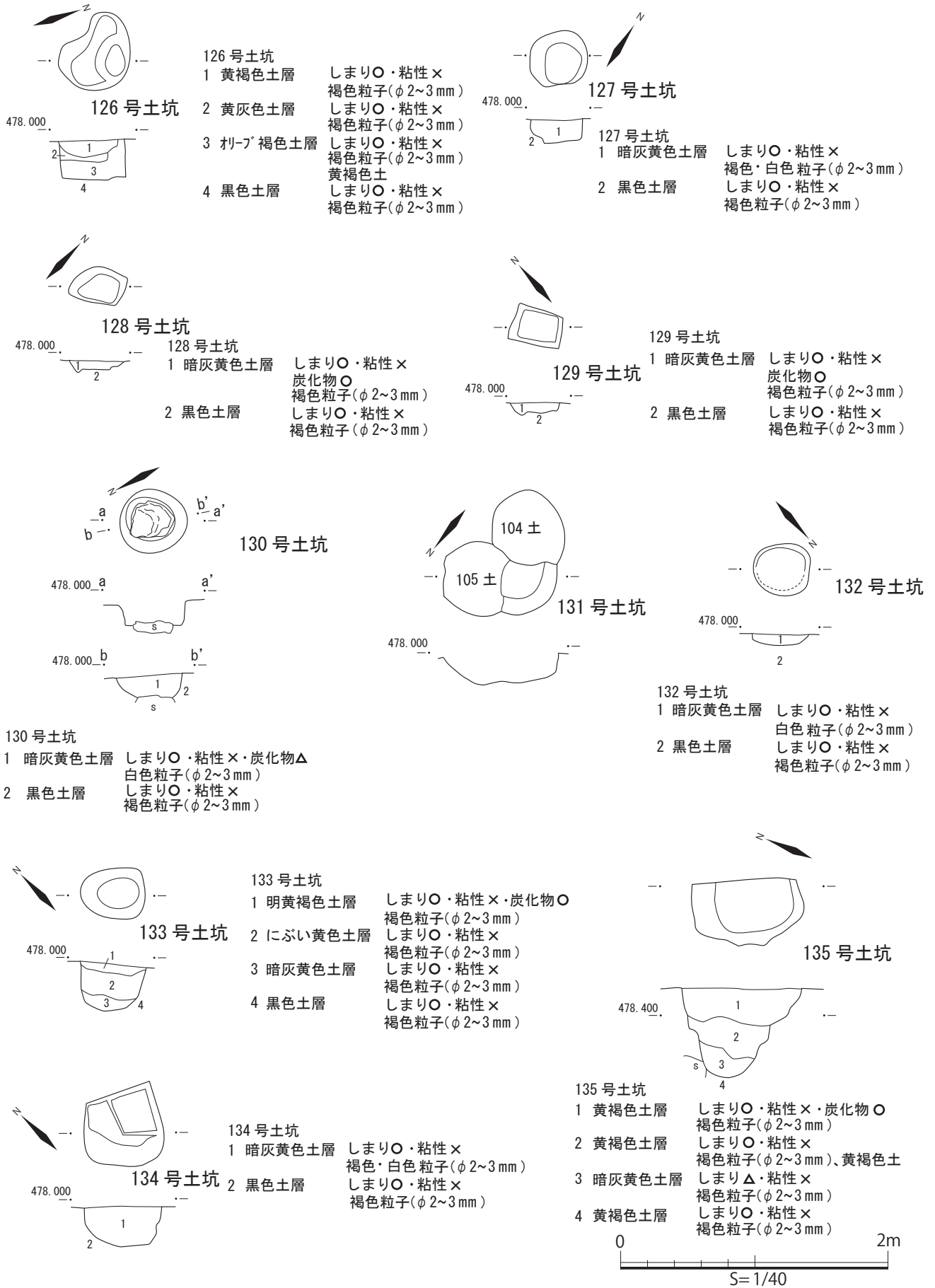
第42図 4面遺構図(5)



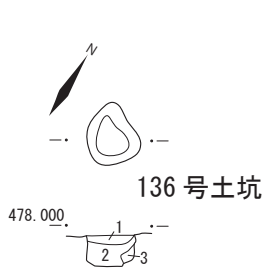
第43図 4面遺構図(6)



第44図 4面遺構図(7)



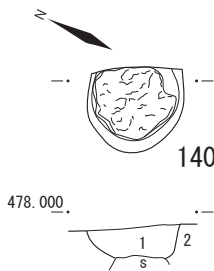
第45図 4面遺構図(8)



136号土坑

136号土坑

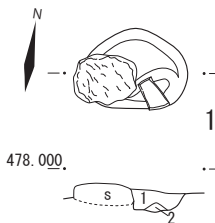
- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×・炭化物△
白色・褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
黄褐色土
- 3 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



140号土坑

140号土坑

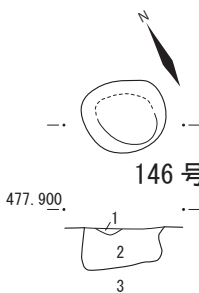
- 1 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黄灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



143号土坑

143号土坑

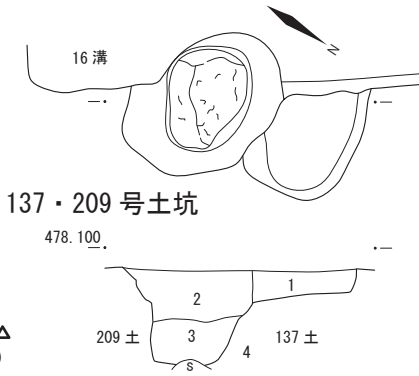
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色・白色粒子(φ2~3mm)
- 2 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



146号土坑

146号土坑

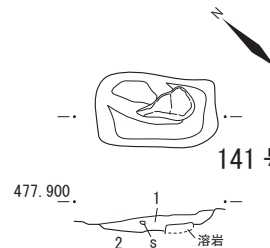
- 1 にぶい黄色土層 しまり○・粘性×
焼土粒子(φ2~20mm)
- 2 黄灰色土層 しまり△・粘性×
にぶい黄色土
- 3 暗灰褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



137・209号土坑

137・209号土坑

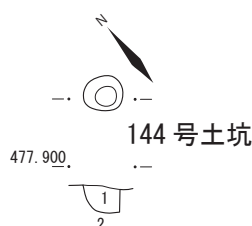
- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 3 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 4 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



141号土坑

141号土坑

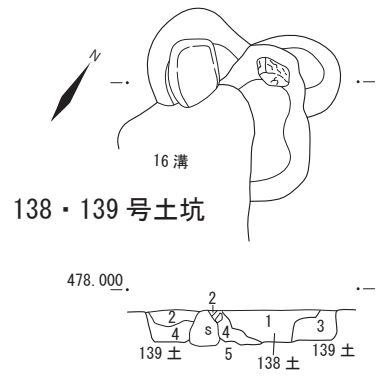
- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×・炭化物○
褐色・白色粒子(φ2~3mm)
- 2 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



144号土坑

144号土坑

- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



138・139号土坑

138・139号土坑

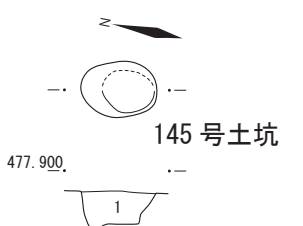
- 1 黄灰色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黄灰色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 3 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 4 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 5 黄灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



142号土坑

142号土坑

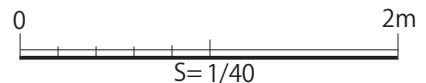
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



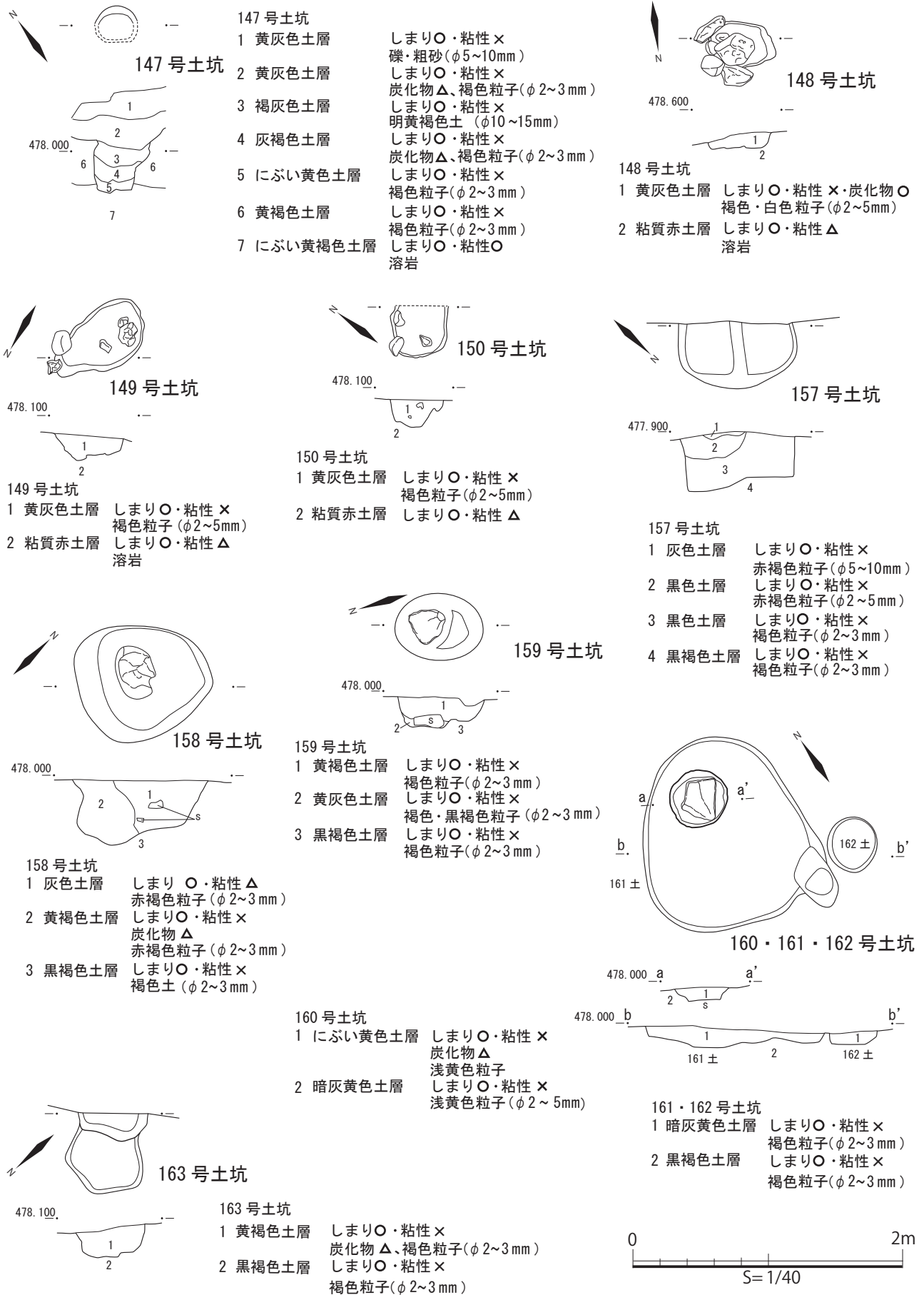
145号土坑

145号土坑

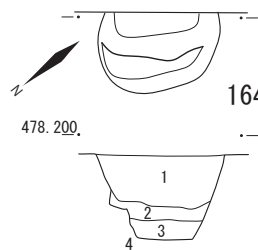
- 1 黄灰色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 暗灰褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



第46図 4面遺構図(9)



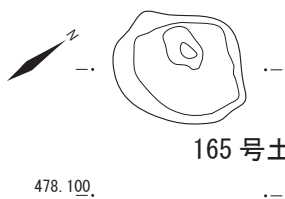
第47図 4面遺構図(10)



164号土坑

164号土坑

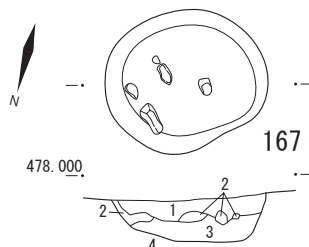
- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 3 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
粗砂、褐色粒子(φ2~3mm)
- 4 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



165号土坑

165号土坑

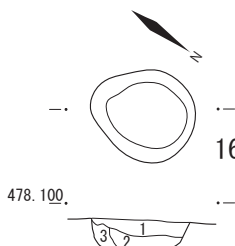
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
炭化物△、褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 にぶい黄色土層 しまり○・粘性×
褐色・黄褐色粒子(φ2~3mm)
- 3 黄灰色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)、暗灰黄色土
- 4 黄灰色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)、暗灰黄色土
- 5 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



167号土坑

167号土坑

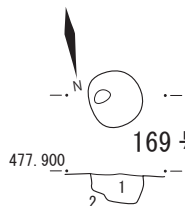
- 1 にぶい黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黄灰色土層 しまり○・粘性×
白色粒子(φ2~3mm)
- 3 灰黄褐色土層 しまり○・粘性×
粗砂
- 4 にぶい褐色土層 しまり○・粘性△
溶岩



166号土坑

166号土坑

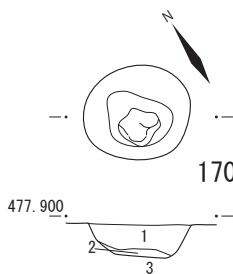
- 1 にぶい黄褐色土層 しまり○・粘性×
赤褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 灰黄褐色土層 しまり△・粘性×
赤褐色粒子(φ2~3mm)
- 3 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



169号土坑

169号土坑

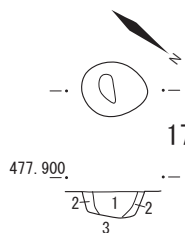
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



170号土坑

170号土坑

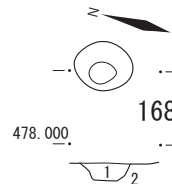
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
赤褐色粒子(φ2~5mm)
- 2 にぶい黄色土層 しまり×・粘性×
粗砂
- 3 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



172号土坑

172号土坑

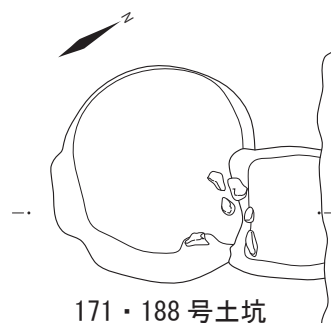
- 1 黄灰色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黄褐色土層 しまり○・粘性×
黄灰色土
- 3 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



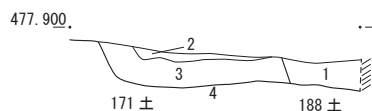
168号土坑

168号土坑

- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
赤褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)

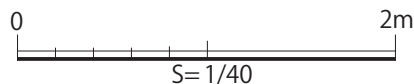


171・188号土坑

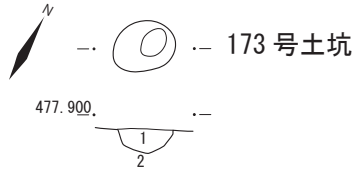


171・188号土坑

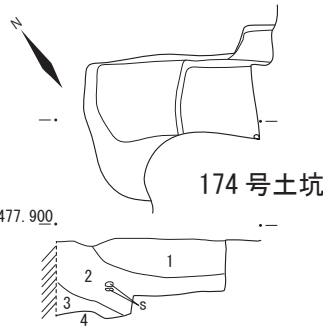
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 3 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 4 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



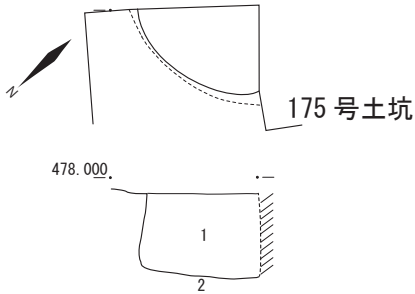
第48図 4面遺構図(11)



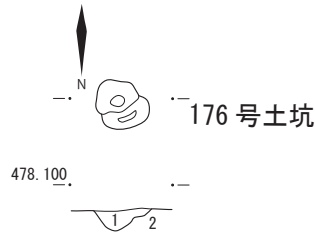
- 173号土坑
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
黄褐色土
 - 2 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



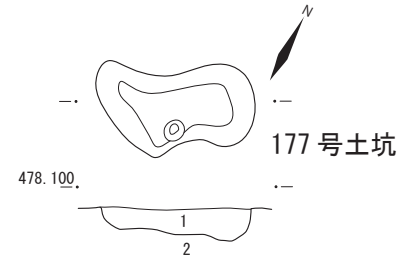
- 174号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黄灰黄色土層 しまり○・粘性×
炭化物△、細砂
 - 3 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 4 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



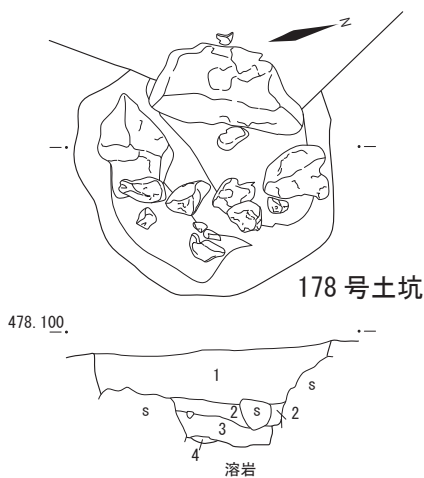
- 175号土坑
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



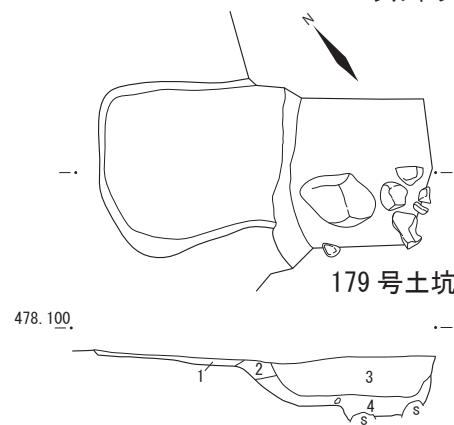
- 176号土坑
- 1 黒褐色土層 しまり×・粘性○
褐色土(φ20~30mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり×・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



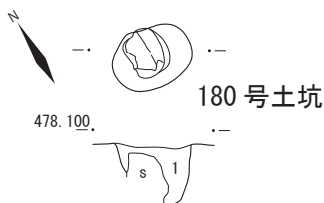
- 177号土坑
- 1 黒褐色土層 しまり×・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
礫(φ2~5mm)
 - 2 暗灰黄色土層 しまり×・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
礫(φ0.5mm)
シルトブロック



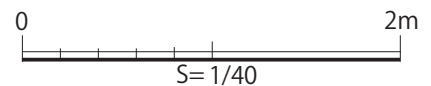
- 178号土坑
- 1 黒褐色土層 しまり×・粘性○・炭化物○
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 褐灰色土層 しまり×・粘性×、粗砂
礫(φ10mm以下)、黄褐色土(φ20mm)
 - 3 黄灰色土層 しまり×・粘性○
粗砂、礫(φ2~5mm)
 - 4 黒色土層 しまり×・粘性×
粗砂、黄褐色土(φ20mm)



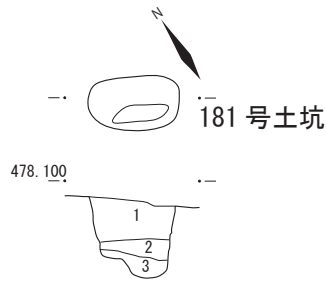
- 179号土坑
- 1 黒褐色土層 しまり×・粘性○
褐色粒子(φ2~3mm)
シルトブロック
 - 2 黒褐色土層 しまり×・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 3 黒褐色土層 しまり×・粘性○・炭化物○
灰土ブロック(φ5mm)
 - 4 灰黄褐色土層 しまり×・粘性○
褐色粒子(φ2~3mm)



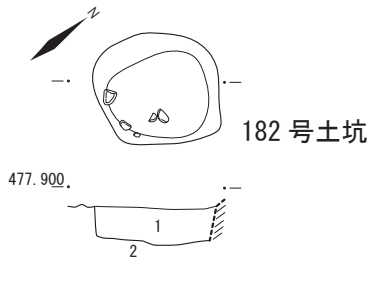
- 180号土坑
- 1 にぶい黄褐色土層 しまり×・粘性×
粗砂、礫(φ2~8mm)



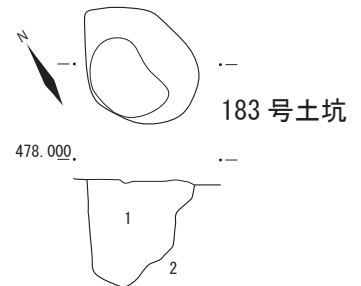
第49図 4面遺構図(12)



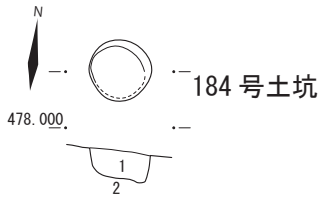
- 181号土坑
- 1 黒褐色土層 しまり×・粘性×
粗砂、礫(φ2~5mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり×・粘性△
礫(φ2~20mm)
 - 3 極暗褐色土層 しまり×・粘性◎
礫(φ2~5mm)



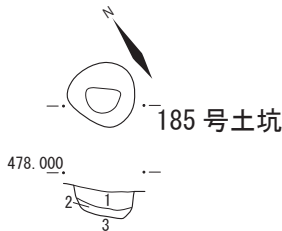
- 182号土坑
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 にぶい褐色土層 しまり○・粘性△
溶岩



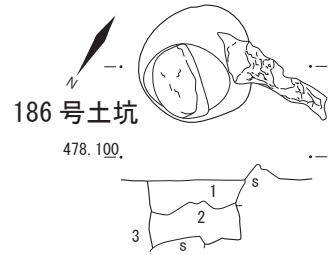
- 183号土坑
- 1 黒褐色土層 しまり×・粘性○
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒色土層 しまり○・粘性△
褐色粒子(φ2~3mm)
シルトブロック



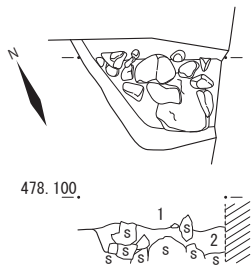
- 184号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



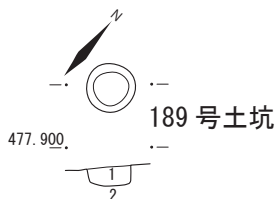
- 185号土坑
- 1 褐灰色土層 しまり×・粘性○
炭化物○、褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり×・粘性×
 - 3 黒色土層 しまり○・粘性△
シルトブロック
褐色粒子(φ2~3mm)



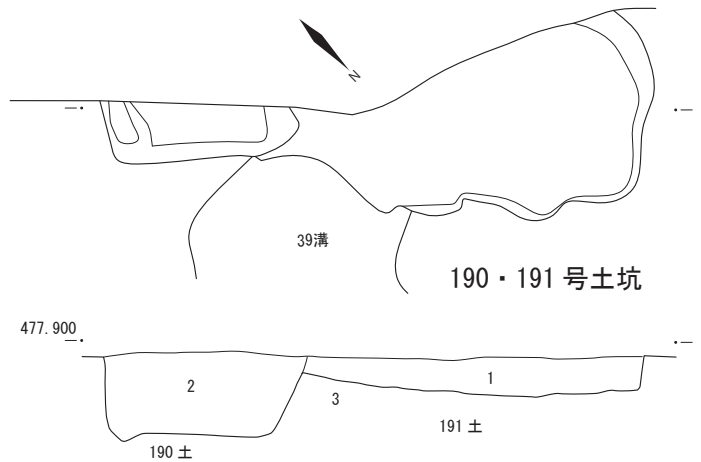
- 186号土坑
- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×
黄褐色土
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 3 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



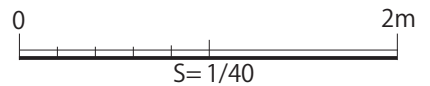
- 187号土坑
- 1 暗褐色土層 しまり○・粘性×
黒色ブロック
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



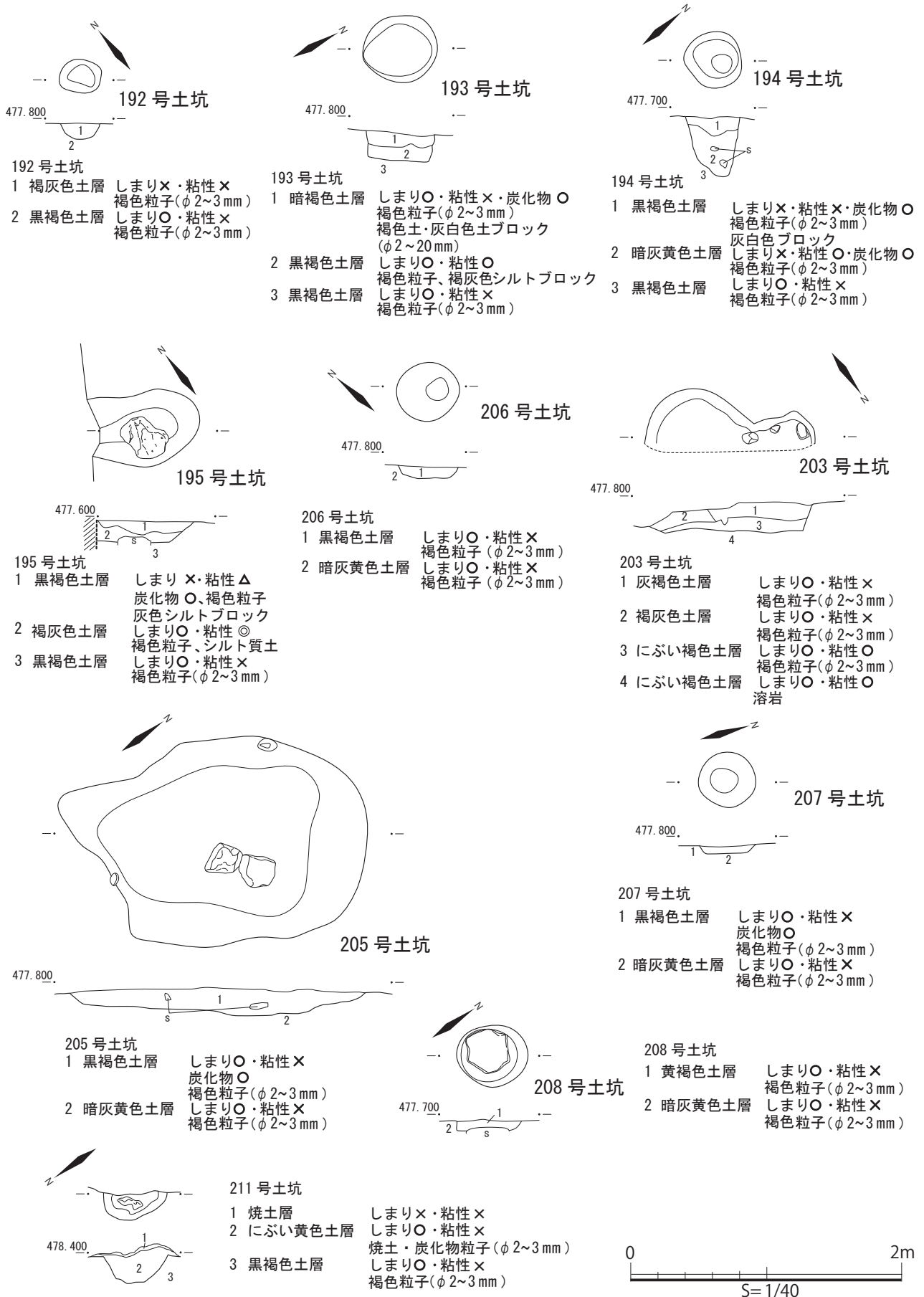
- 189号土坑
- 1 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



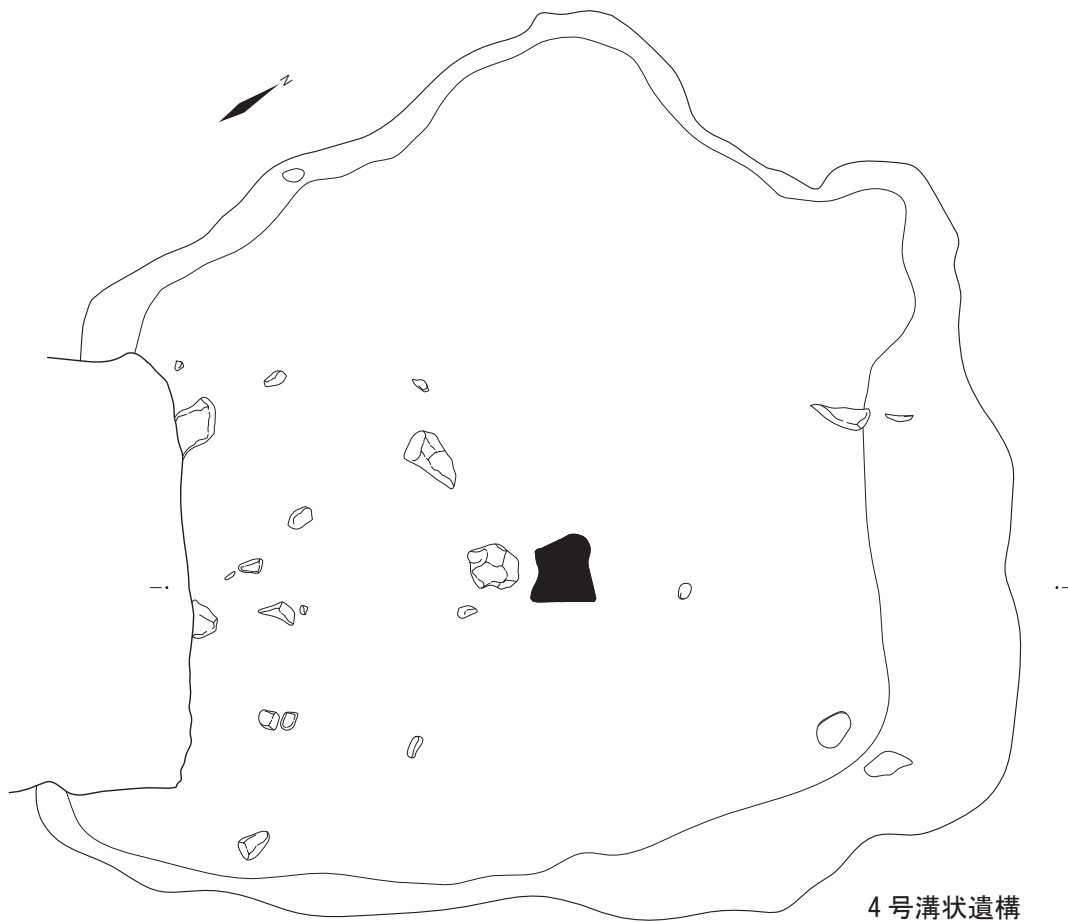
- 190・191号土坑
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 3 黒褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



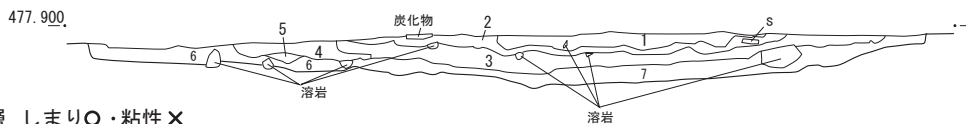
第50図 4面遺構図(13)



第51図 4面遺構図(14)

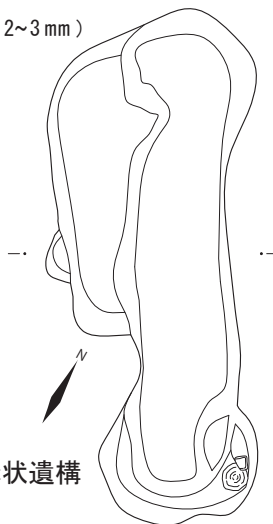


4号溝状遺構



4号溝状遺構

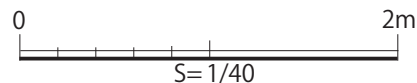
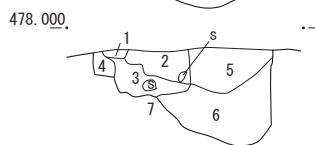
- 1 にぶい黄橙色土層 しまり○・粘性×
炭化物○、褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黒色土層 しまり△・粘性×
炭化物◎、にぶい黄褐色土
- 3 黄灰色土層 しまり○・粘性×
炭化物○、褐色粒子(φ2~3mm)
- 4 黄灰色土層 しまり○・粘性△
礫(φ5mm)
- 5 黄灰色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 6 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
- 7 青灰色土層 しまり○・粘性△
鉄分集積層



12号溝状遺構

12号溝状遺構

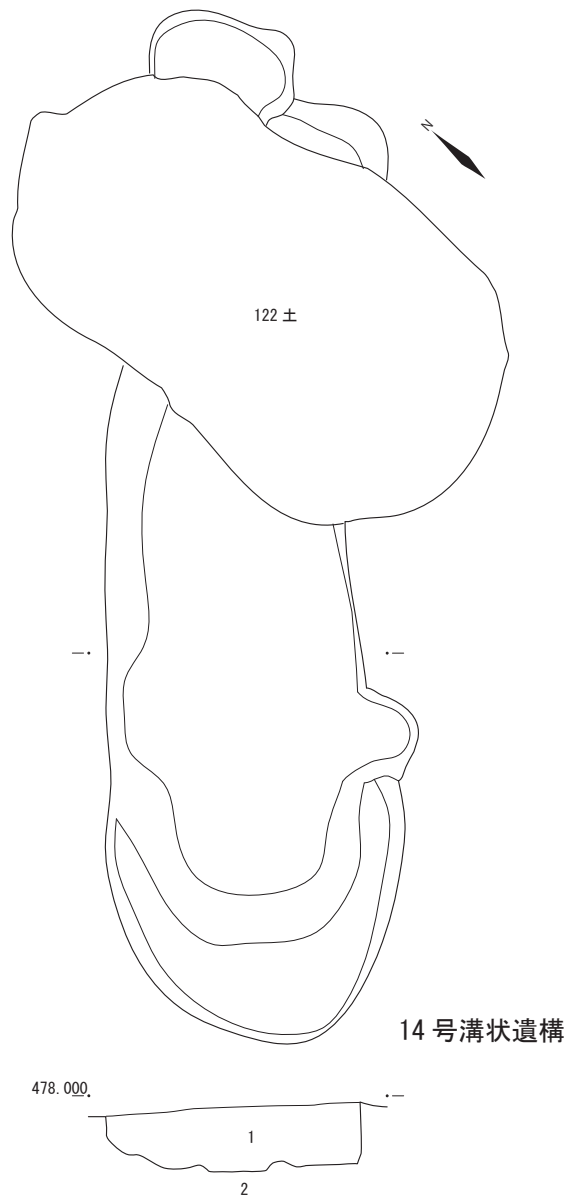
- 1 黄灰色土層 しまり○・粘性×・炭化物○
褐色粒子(φ2~3mm)
- 2 黄灰色土層 しまり○・粘性×
礫(φ2~10mm)、褐色粒子(φ2~3mm)
- 3 暗灰黄色粗砂層 しまり×・粘性×
礫(φ5~50mm)、動物遺体
- 4 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色・白色粒子(φ2~3mm)
- 5 黄褐色土層 しまり○・粘性×・炭化物○
褐色・白色粒子(φ2~3mm)
- 6 黄灰色土層 しまり○・粘性×・炭化物○
白色粒子(φ2~3mm)
- 7 黒色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



第52図 4面遺構図(15)



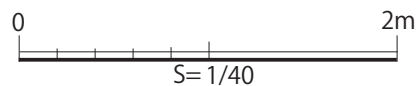
- 13号溝状遺構
- 1 暗灰黄色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黑色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



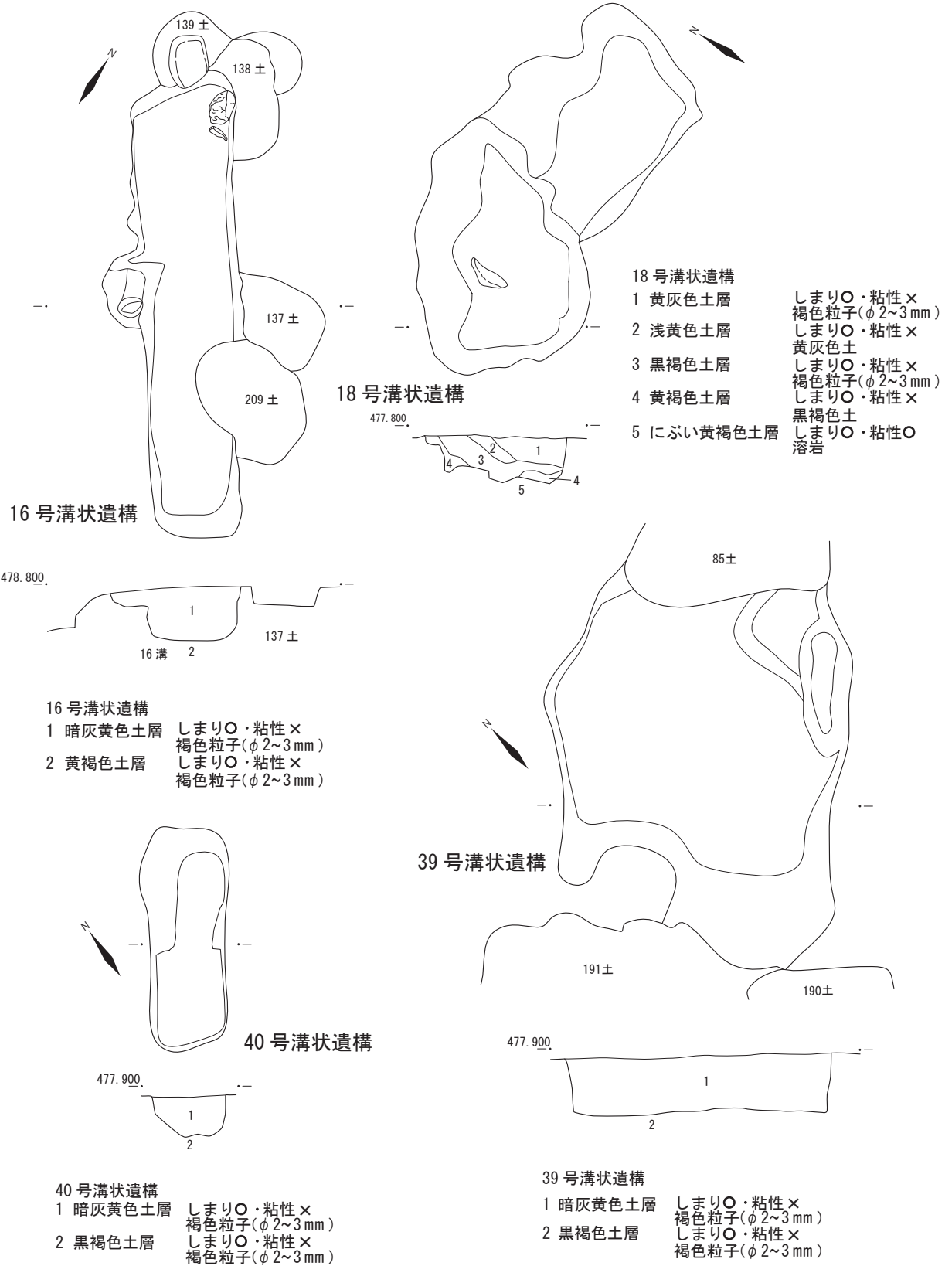
- 14号溝状遺構
- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×
炭化物○・褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



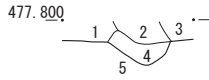
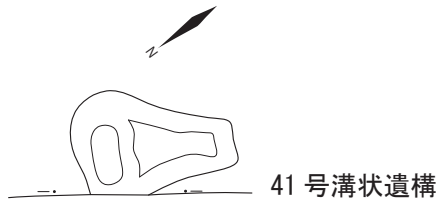
- 15号溝状遺構
- 1 黄褐色土層 しまり○・粘性×・炭化物○
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 2 明黄褐色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 3 黄灰色土層 しまり○・粘性×・炭化物○
褐色粒子(φ2~3mm)
 - 4 黑色土層 しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm)



第53図 4面遺構図(16)

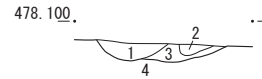
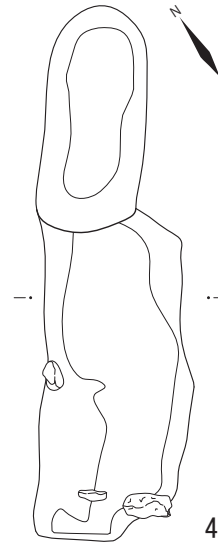


第54図 4面遺構図(17)



41号溝状遺構

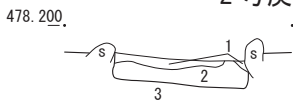
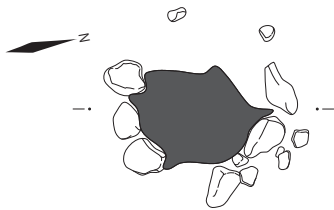
- | | |
|----------|--|
| 1 黒褐色土層 | しまり○・粘性○
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 2 暗黄灰色土層 | しまり○・粘性×
炭化物○ |
| 3 褐灰色土層 | 褐色粒子(φ2~3mm)
しまり○・粘性×
炭化物○ |
| 4 黒褐色土層 | 褐色粒子(φ2~3mm)
しまり×・粘性○
炭化物○ |
| 5 暗赤灰色土層 | 褐色粒子(φ2~3mm)
しまり○・粘性○
灰褐色シルトブロック |



42号溝状遺構

42号溝状遺構

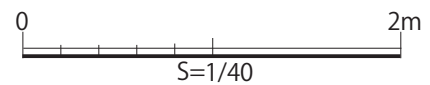
- | | |
|---------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色土層 | しまり○・粘性△
炭化物○ |
| 2 黒褐色土層 | しまり×・粘性×
粗砂 |
| 3 黒褐色土層 | しまり×・粘性×
粗砂、礫(φ1.5mm以下) |
| 4 黒色土層 | しまり○・粘性△
シルトブロック
褐色粒子(φ2~3mm) |



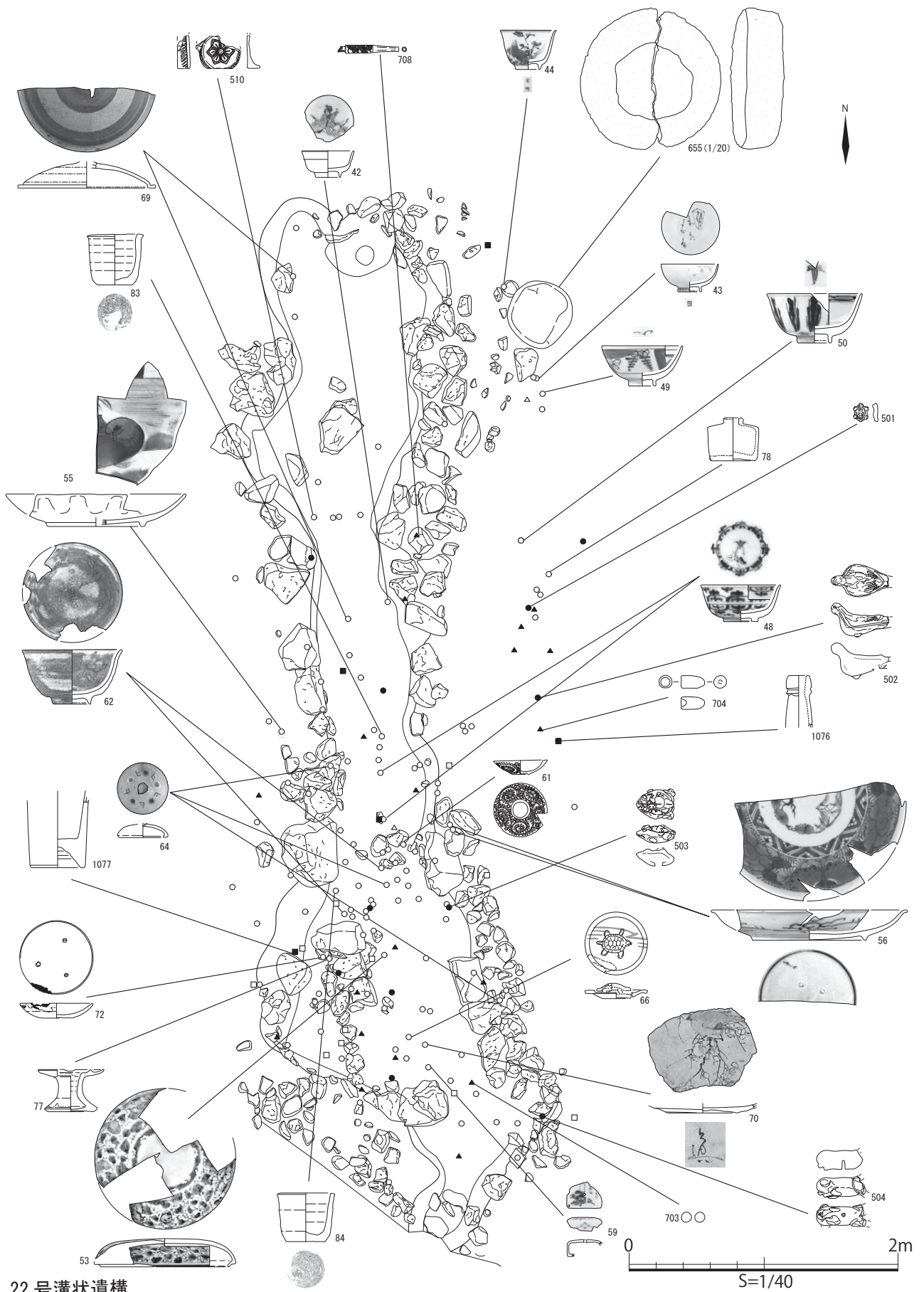
2号炭化物集中

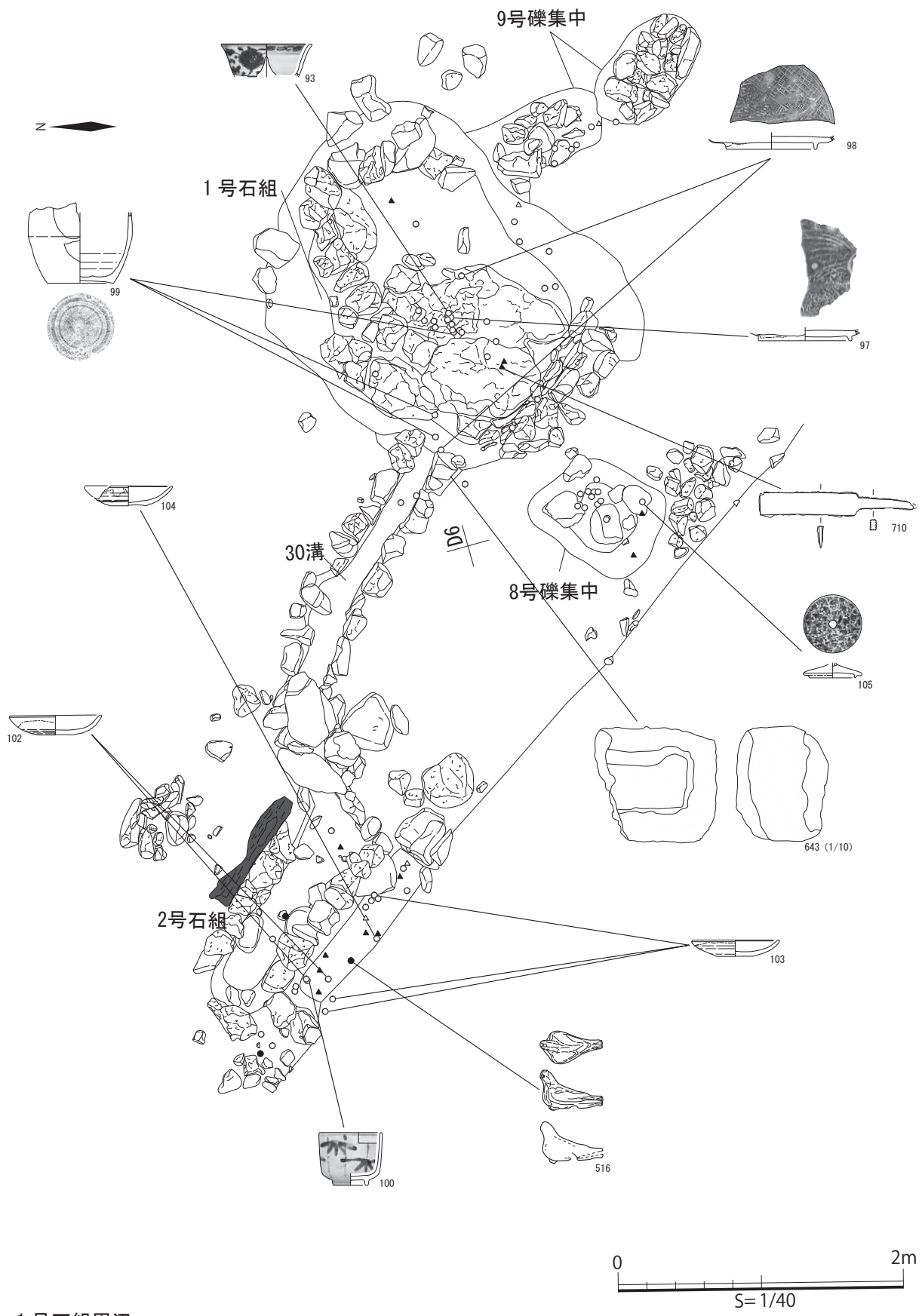
2号炭化物集中

- | | |
|---------|-----------------------------|
| 1 黒色土層 | しまり×・粘性×
炭化物◎、粗砂
黄灰色土 |
| 2 黄灰色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |
| 3 黒色土層 | しまり○・粘性×
褐色粒子(φ2~3mm) |



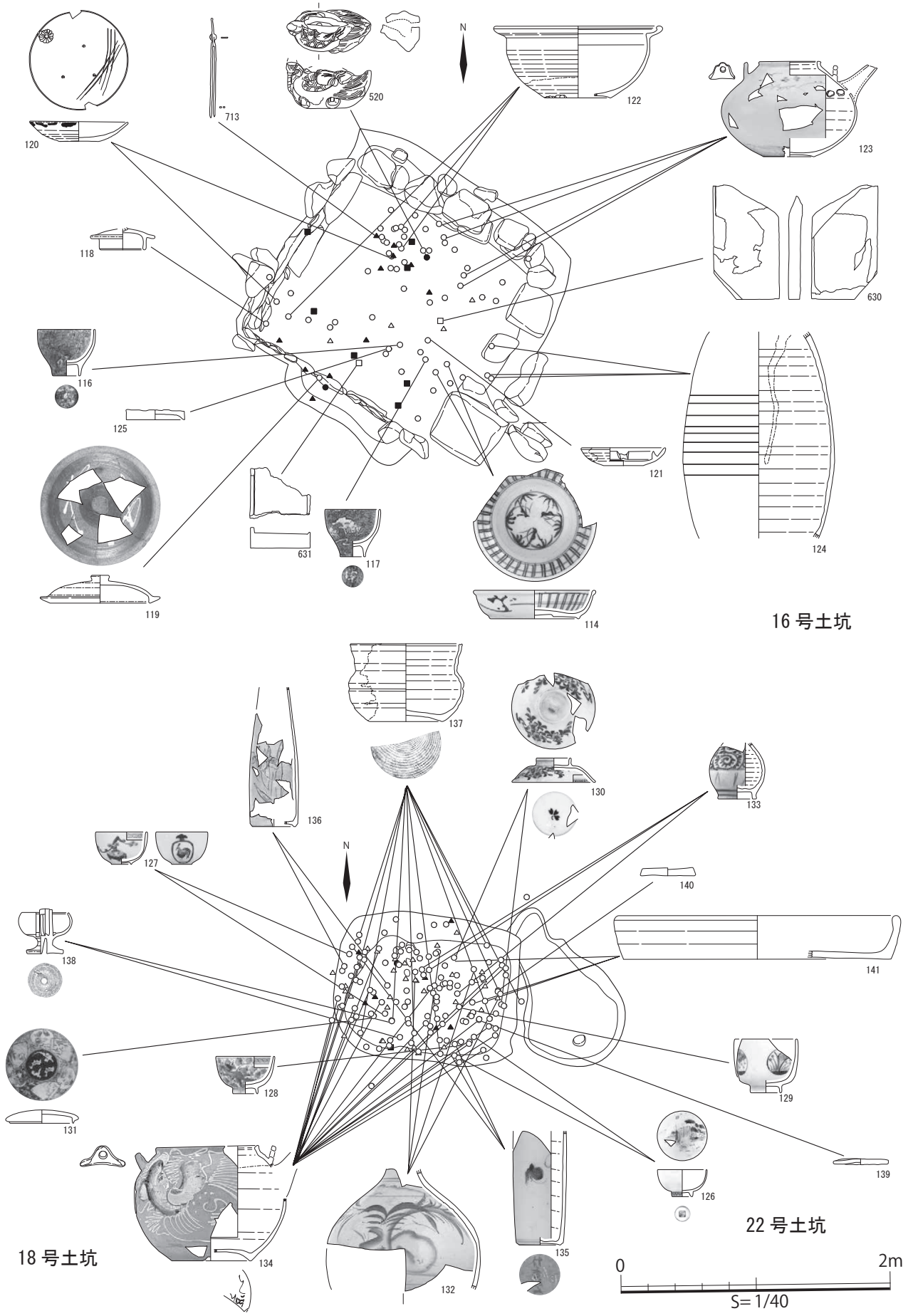
第55図 4面遺構図(18)



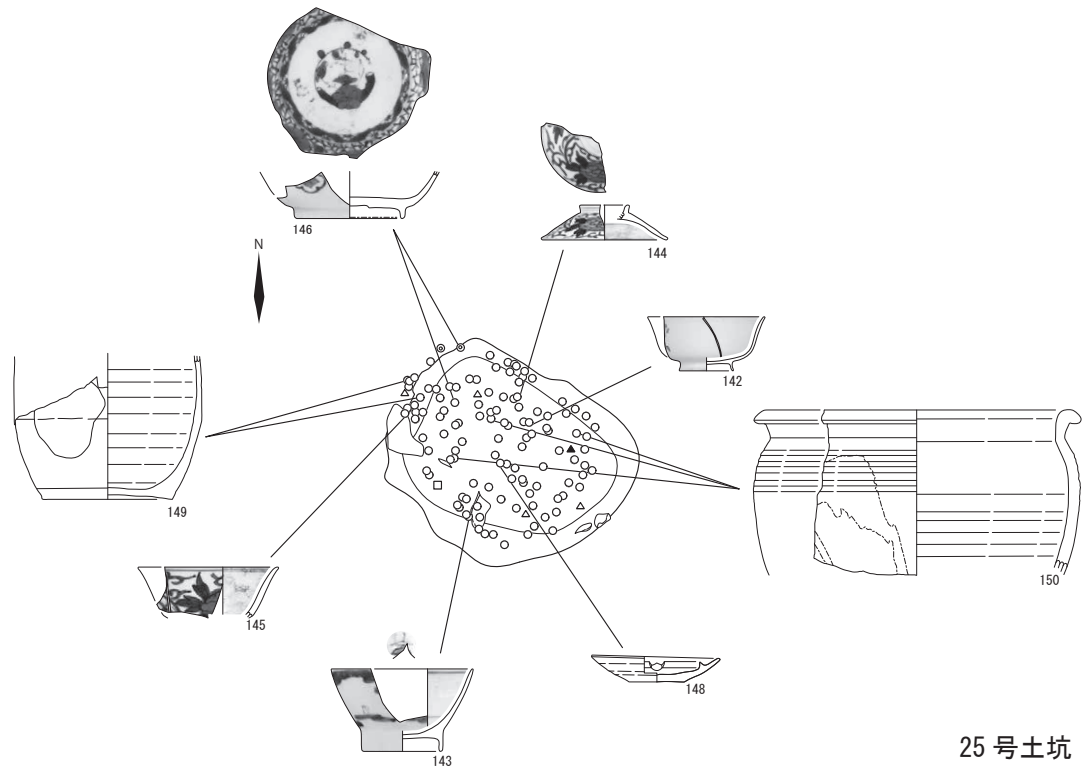


1号石組周辺

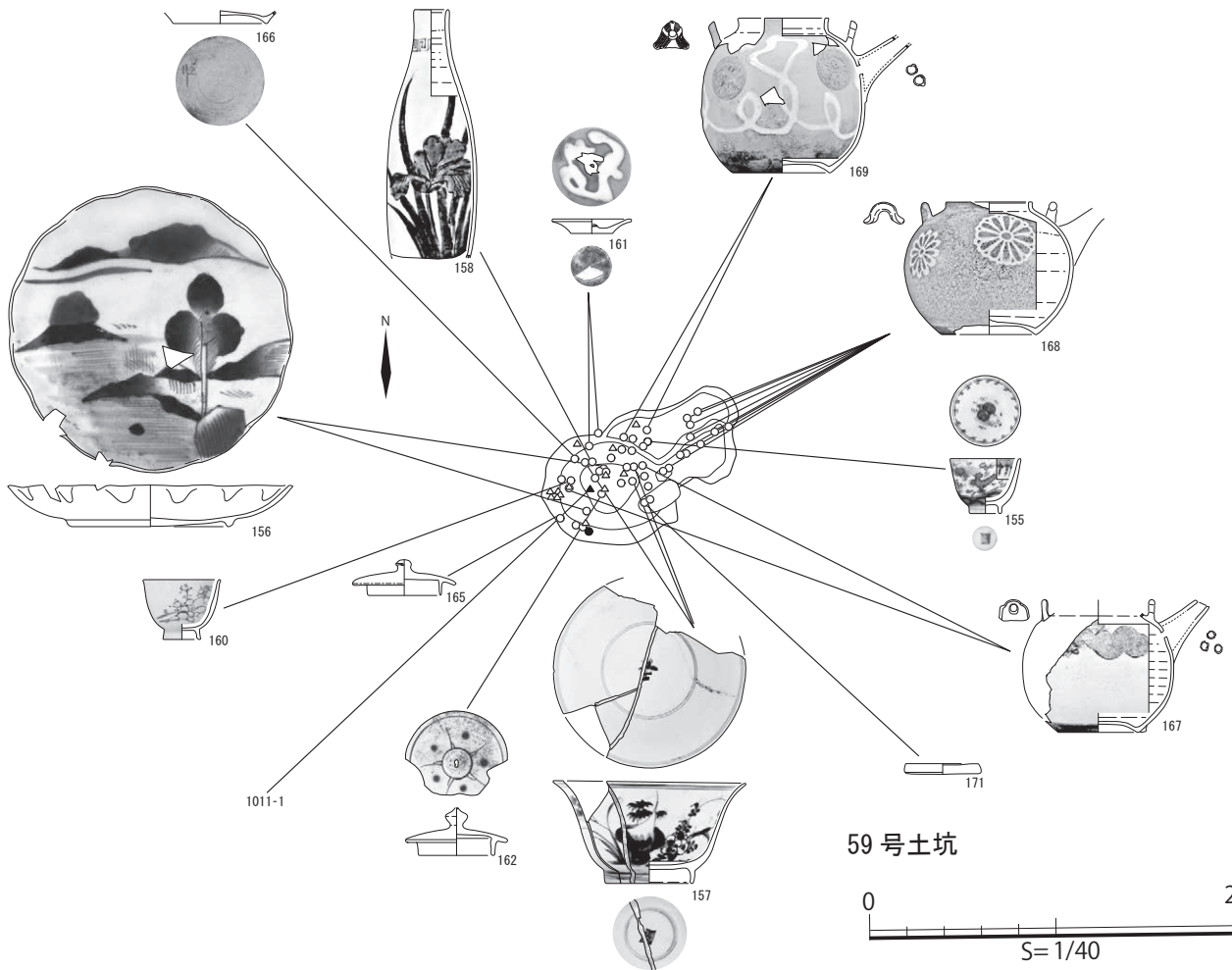
第57図 3面遺物分布図(1)



第58图 3面遺物分布图(2)

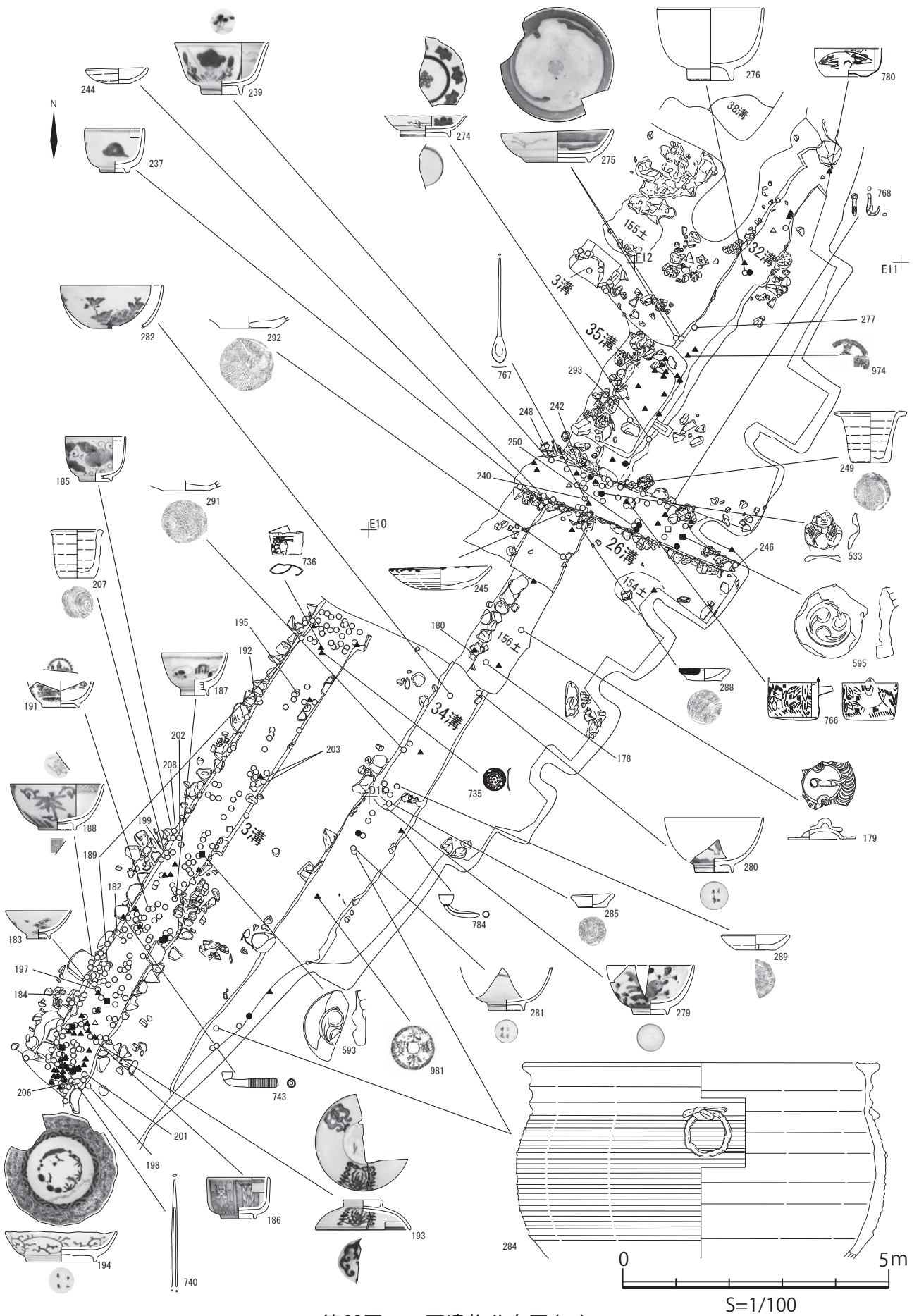


25号土坑

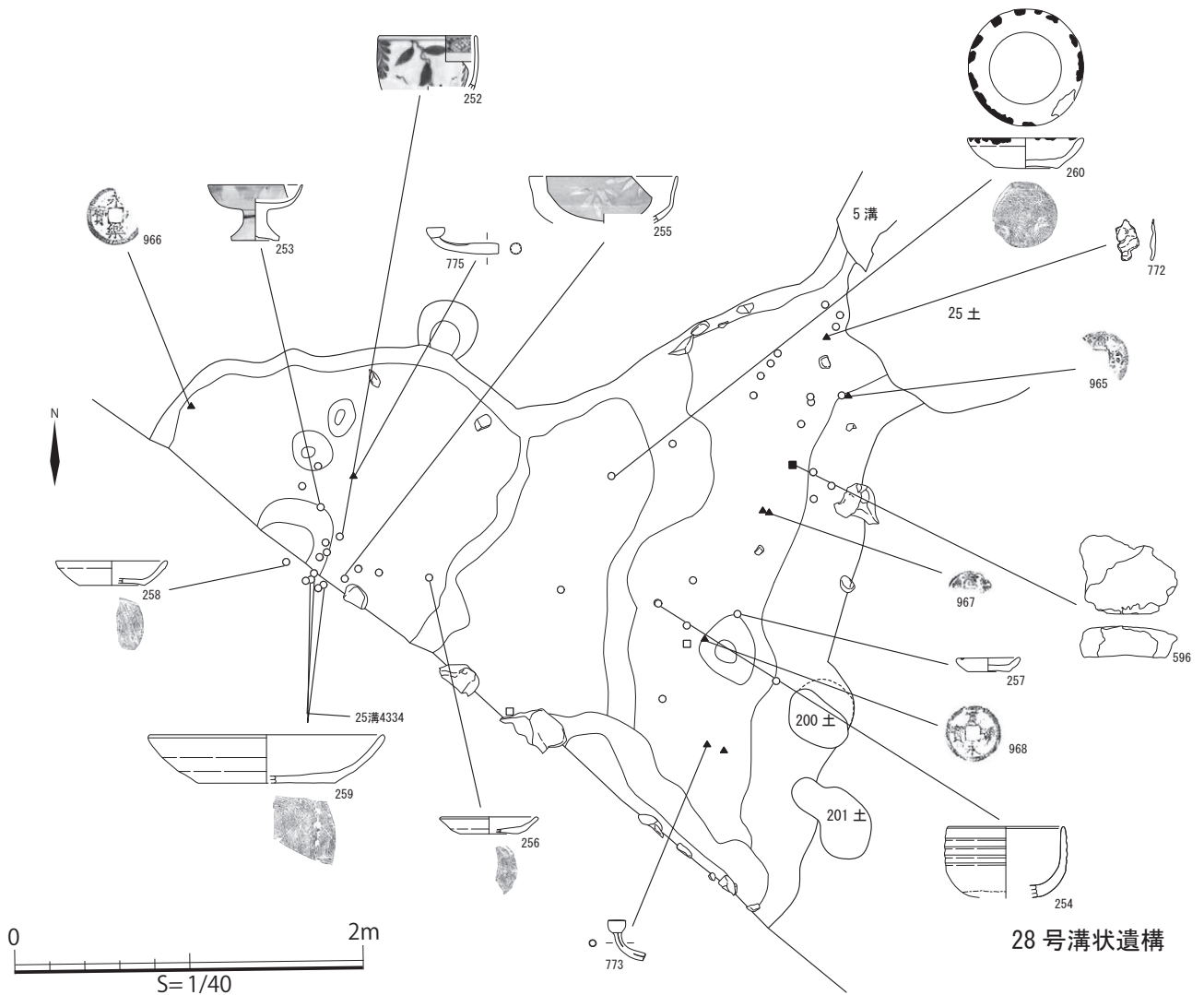
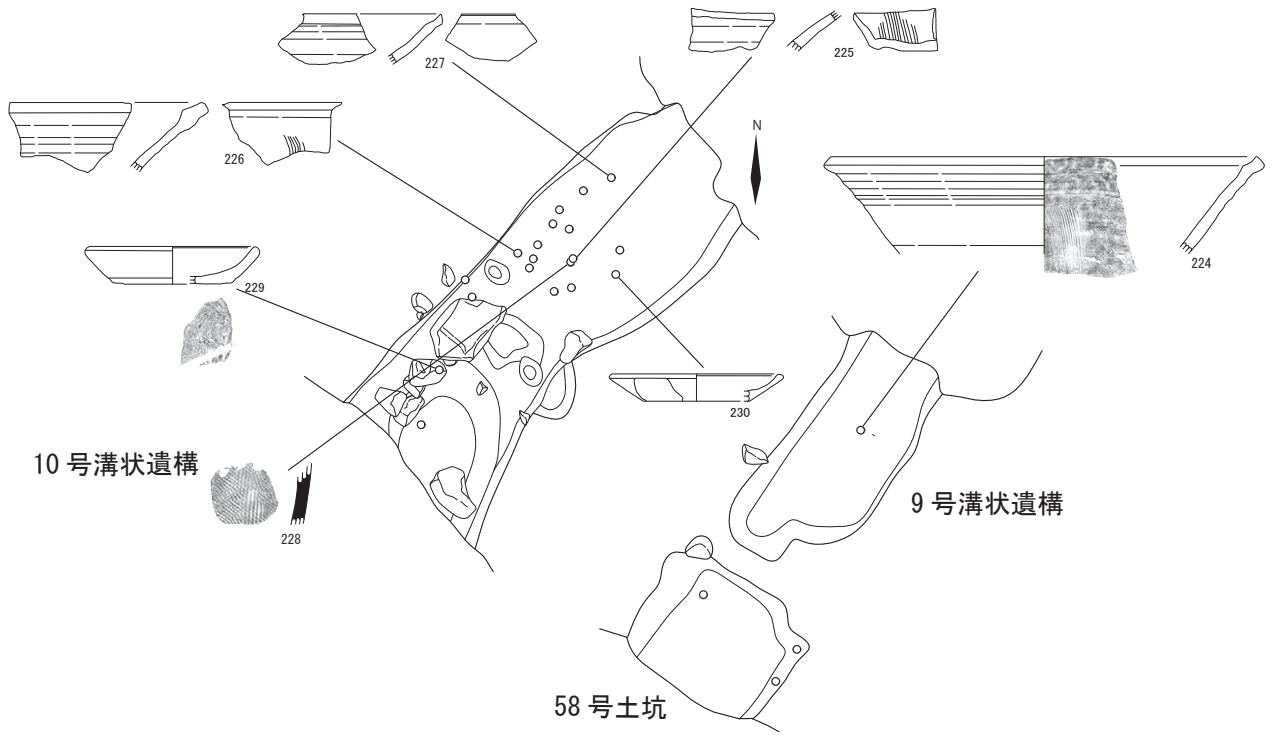


59号土坑

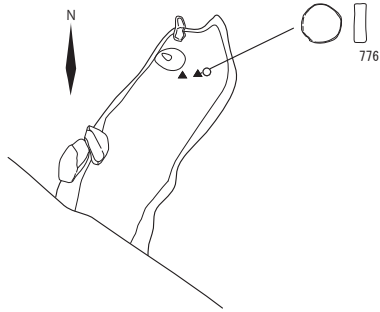
第59图 3面遺物分布图(3)



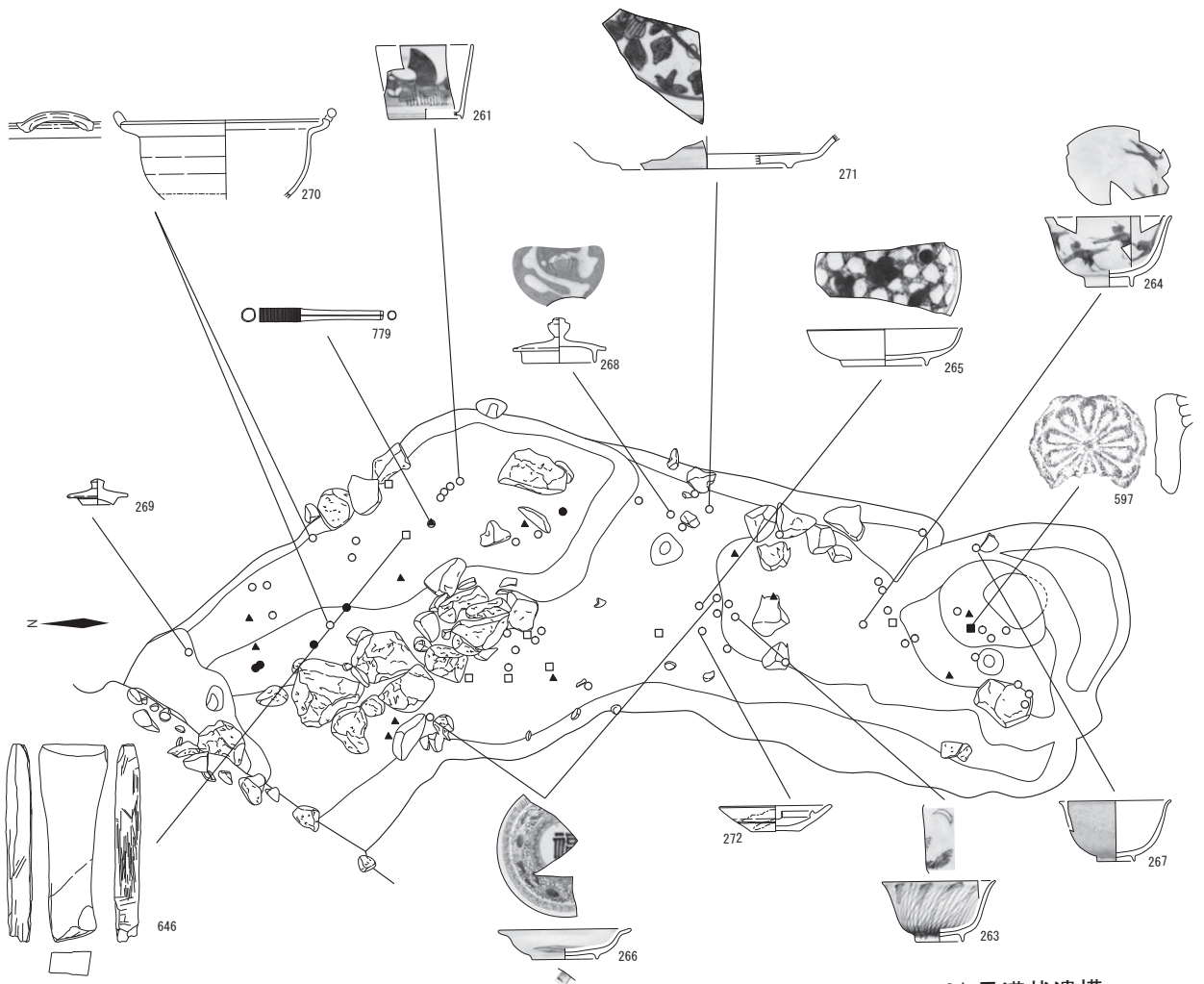
第60图 3面遺物分布图(4)



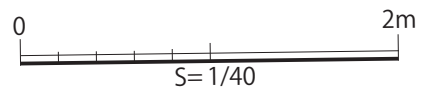
第61图 3面遺物分布图(5)



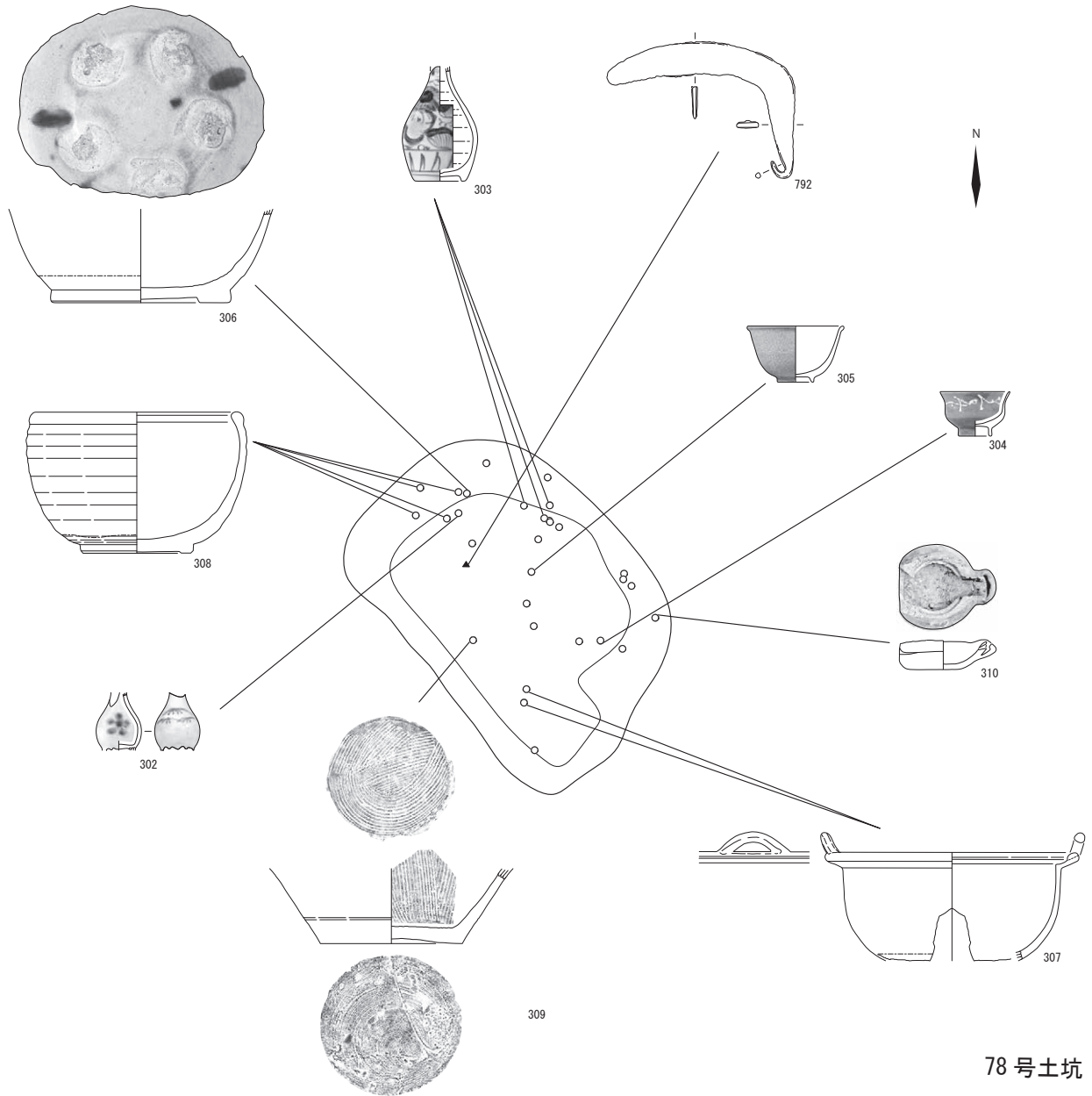
29号溝状遺構



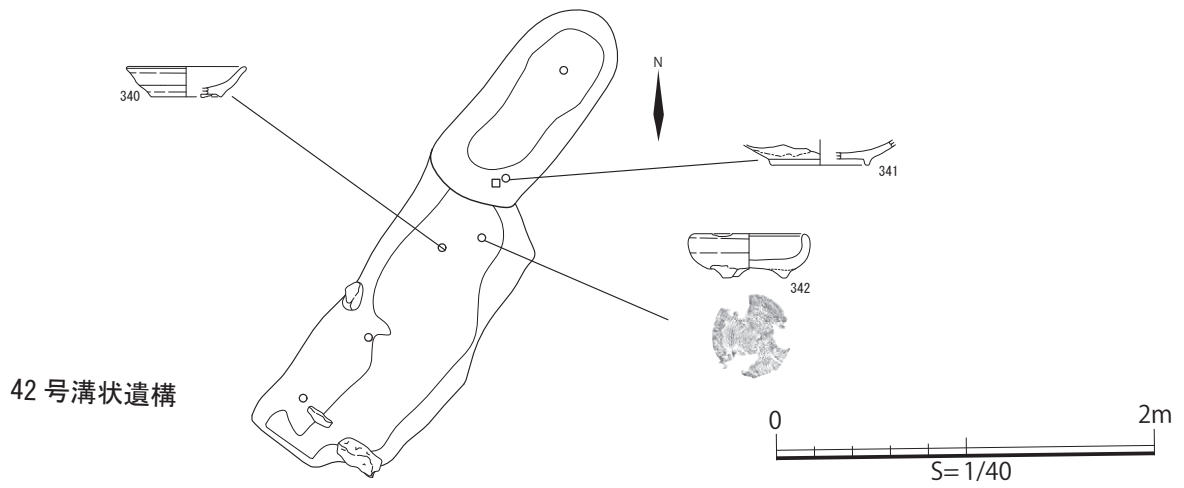
31号溝状遺構



第62図 3面遺物分布図(6)

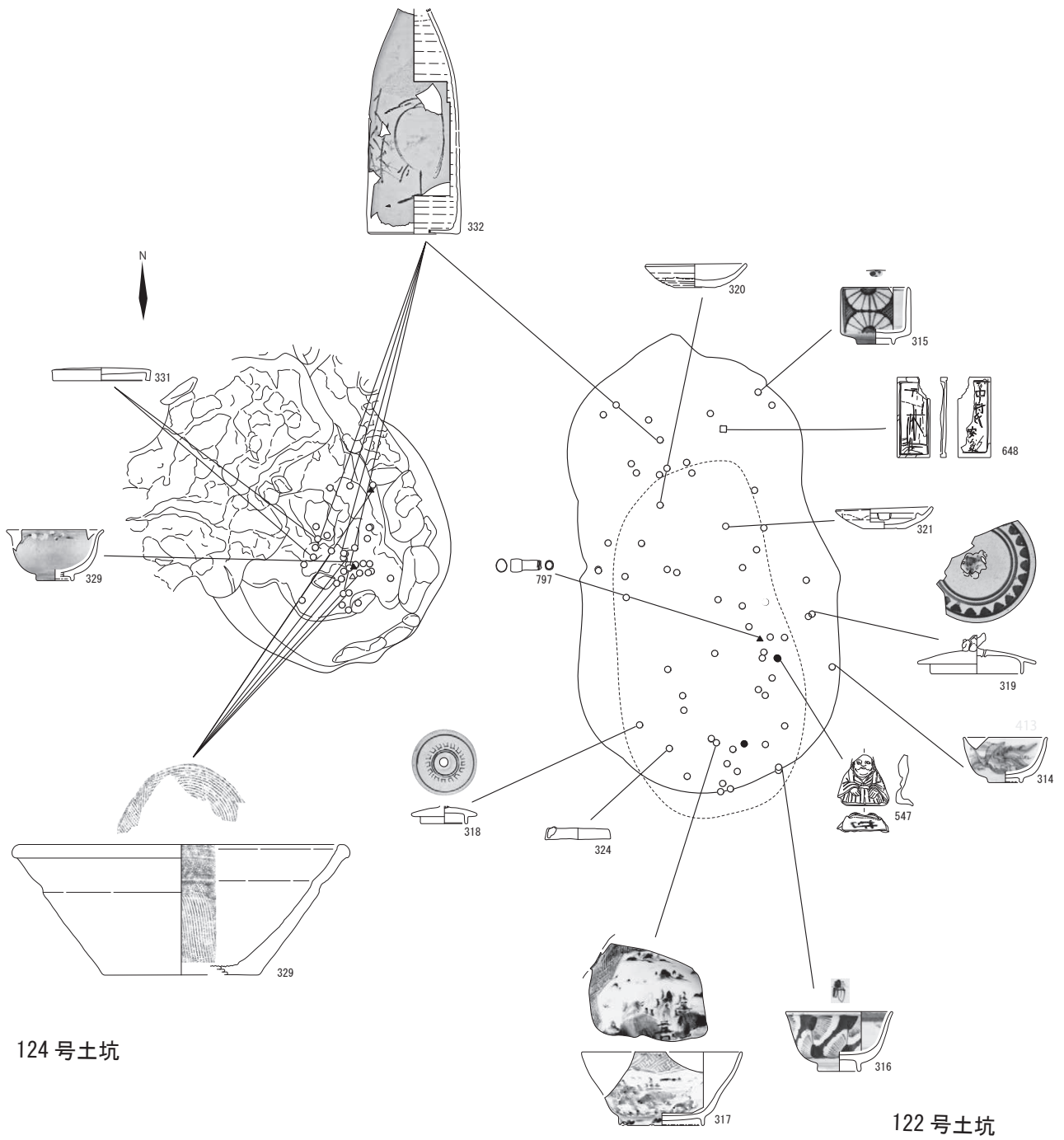


78号土坑

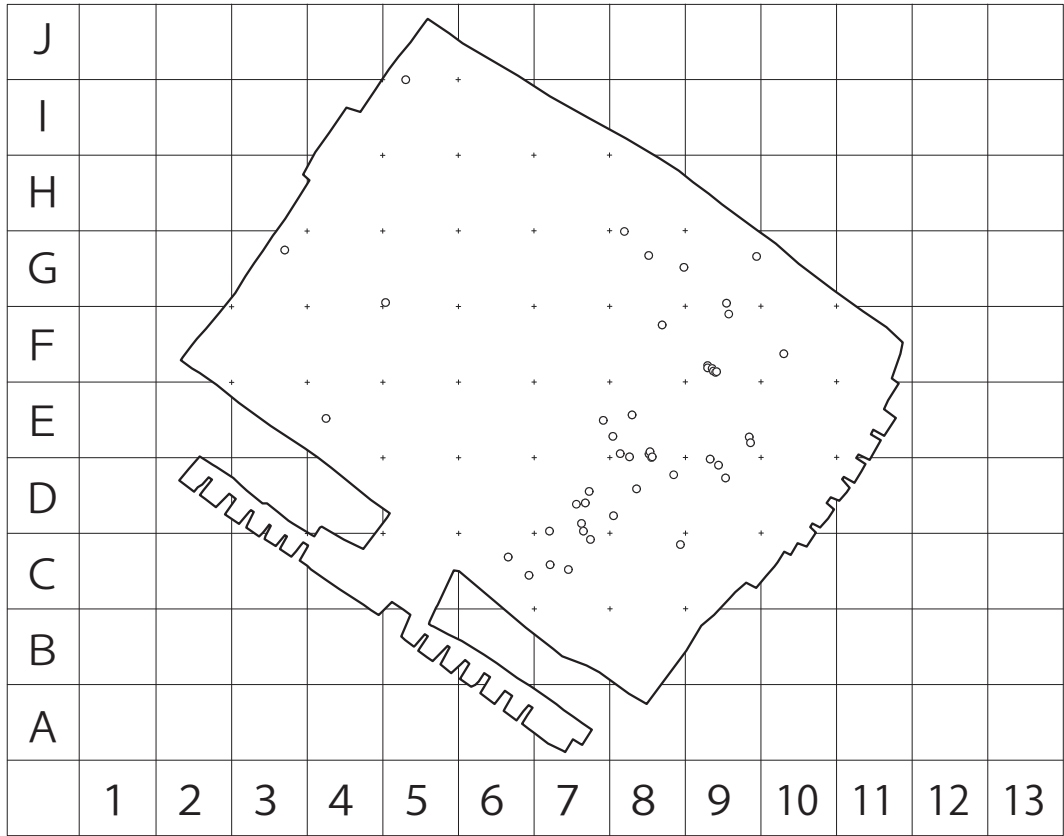


42号沟状遗构

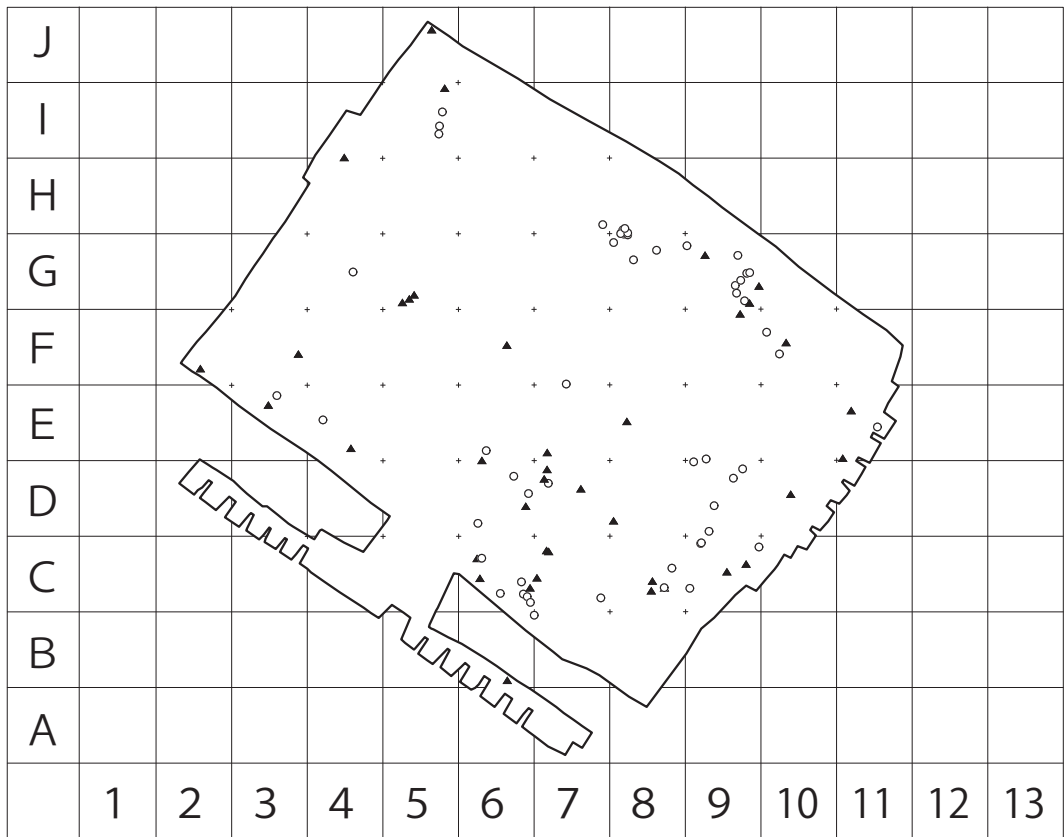
第63图 4面遺物分布图(1)



第64图 4面遺物分布图(2)

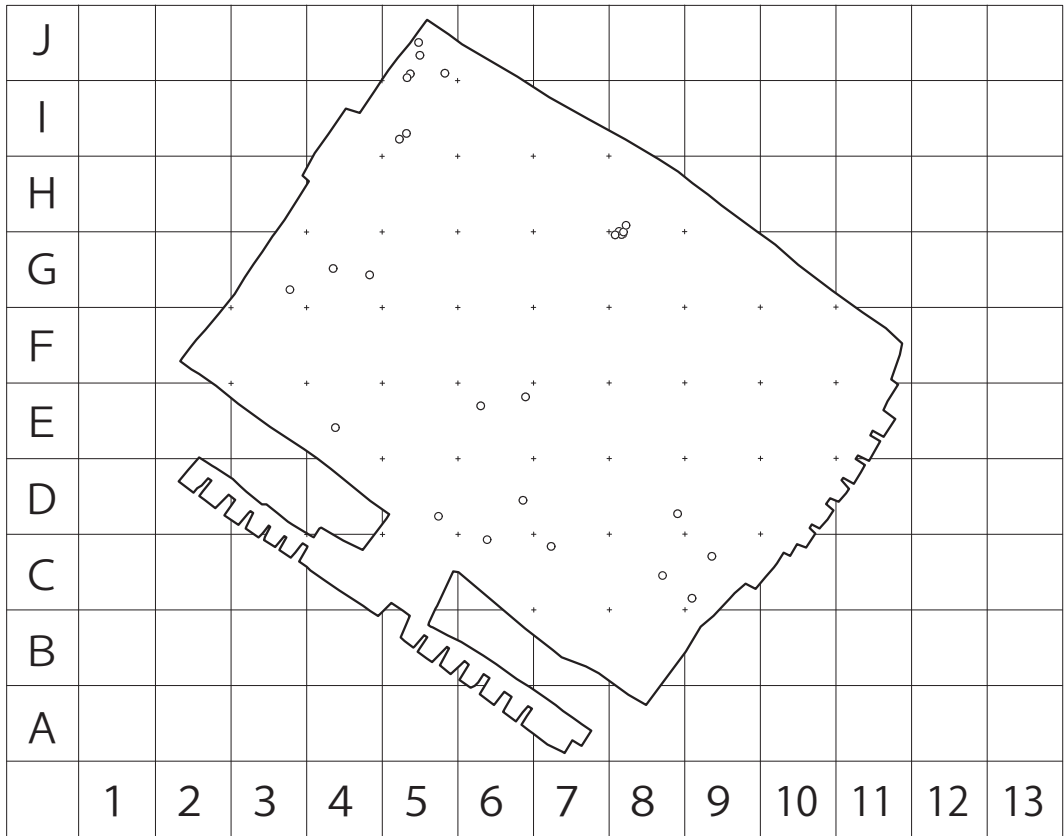


奈良・平安時代

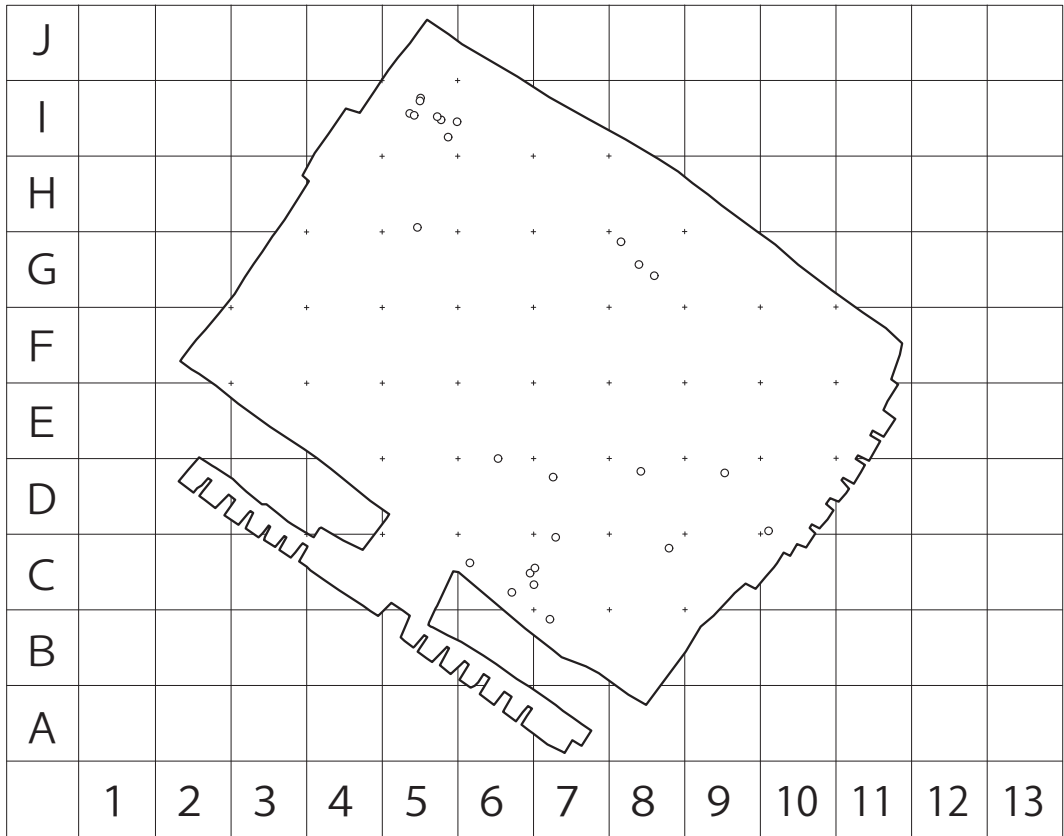


中世

第65図 時代別遺物分布図(1)

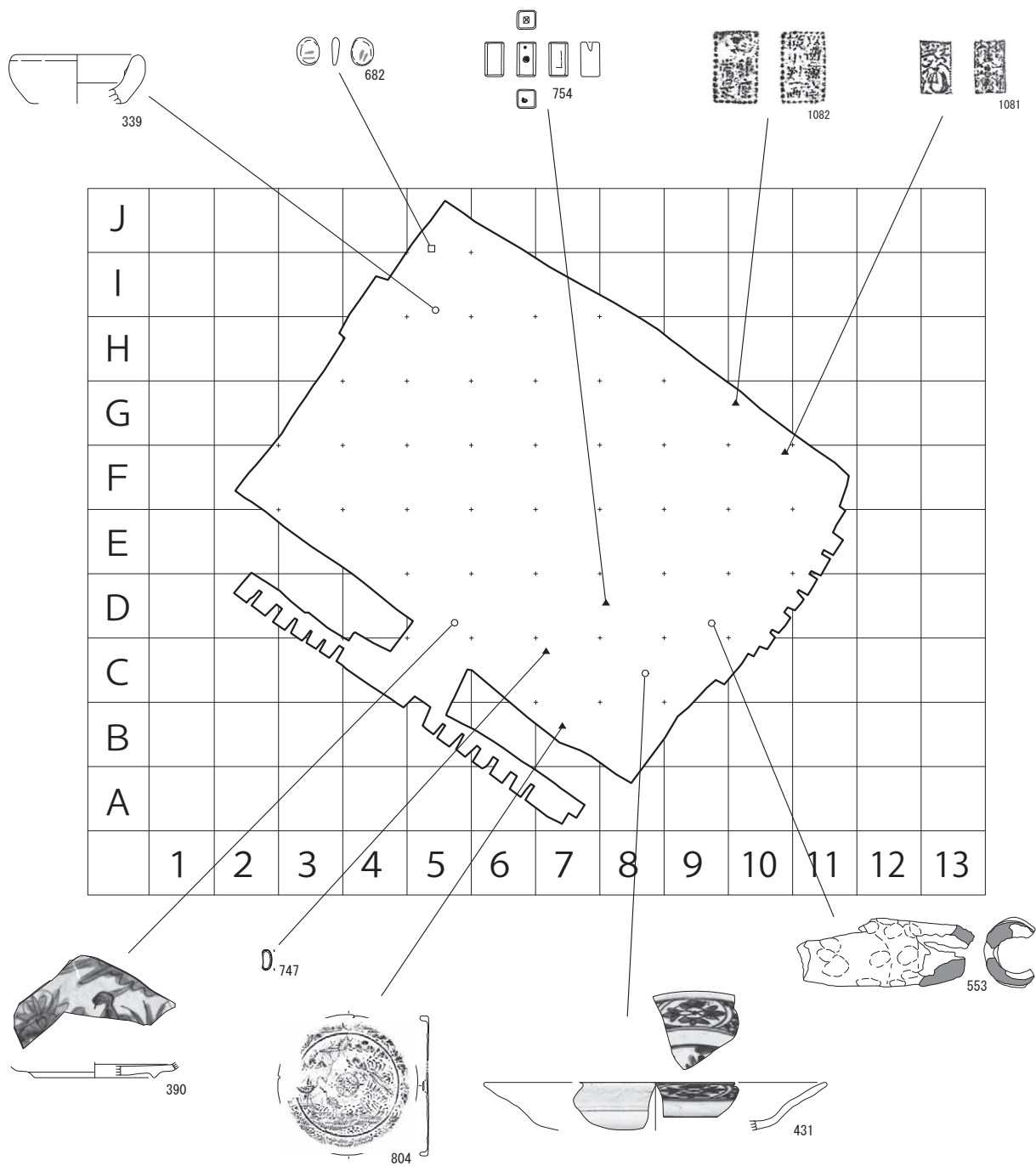


中世末～近世初頭

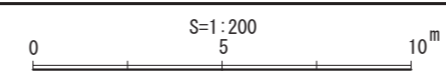
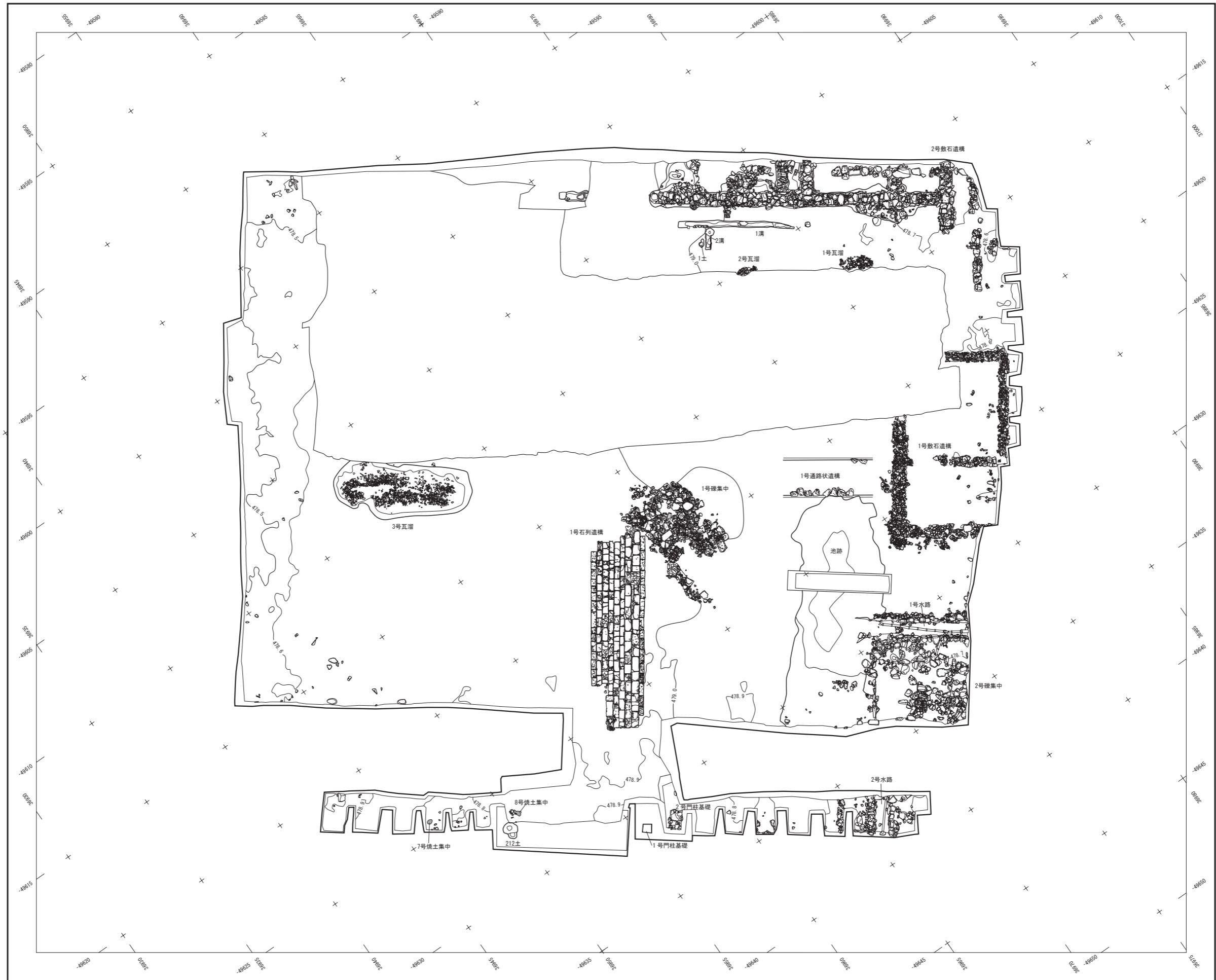


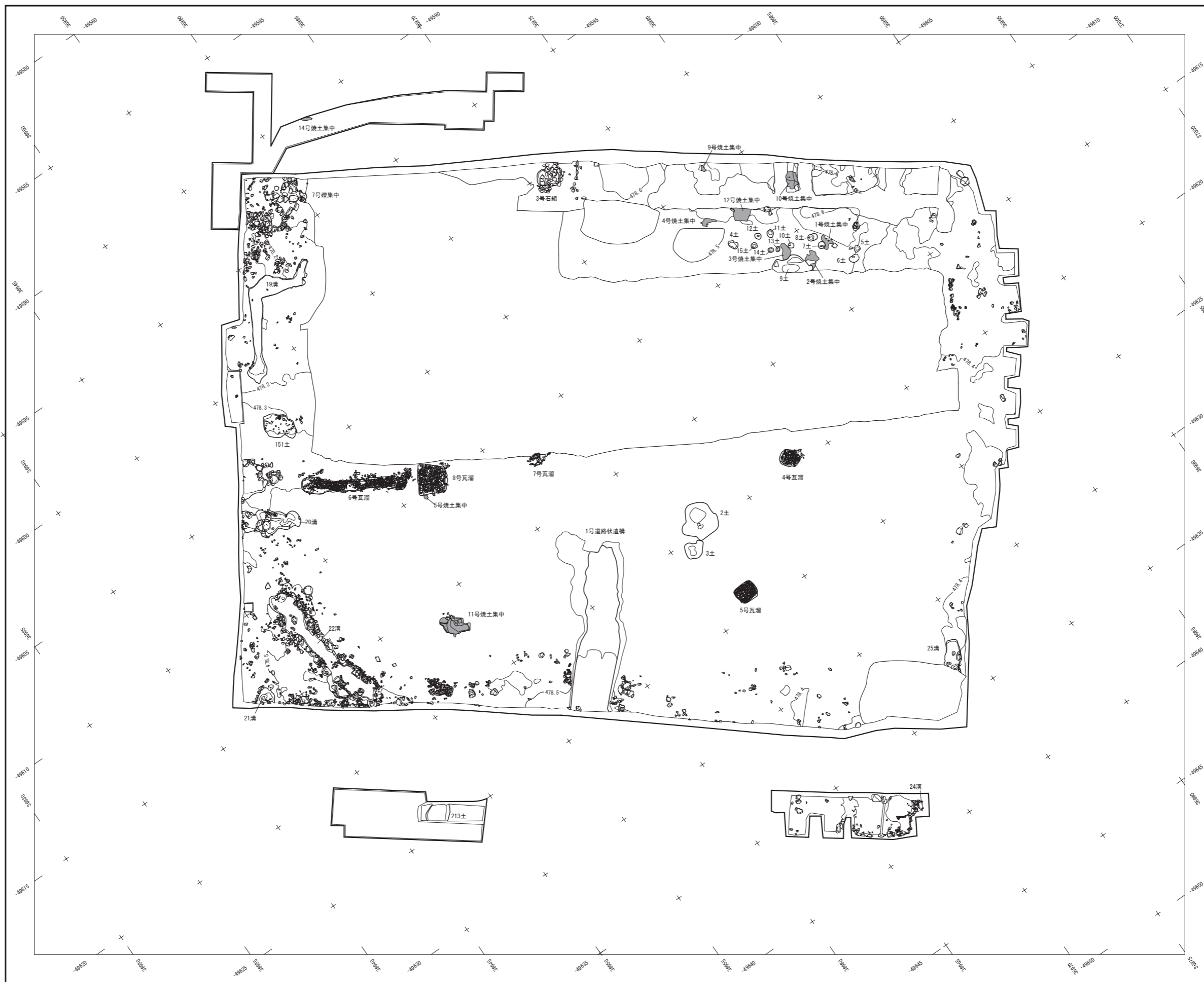
近世前葉

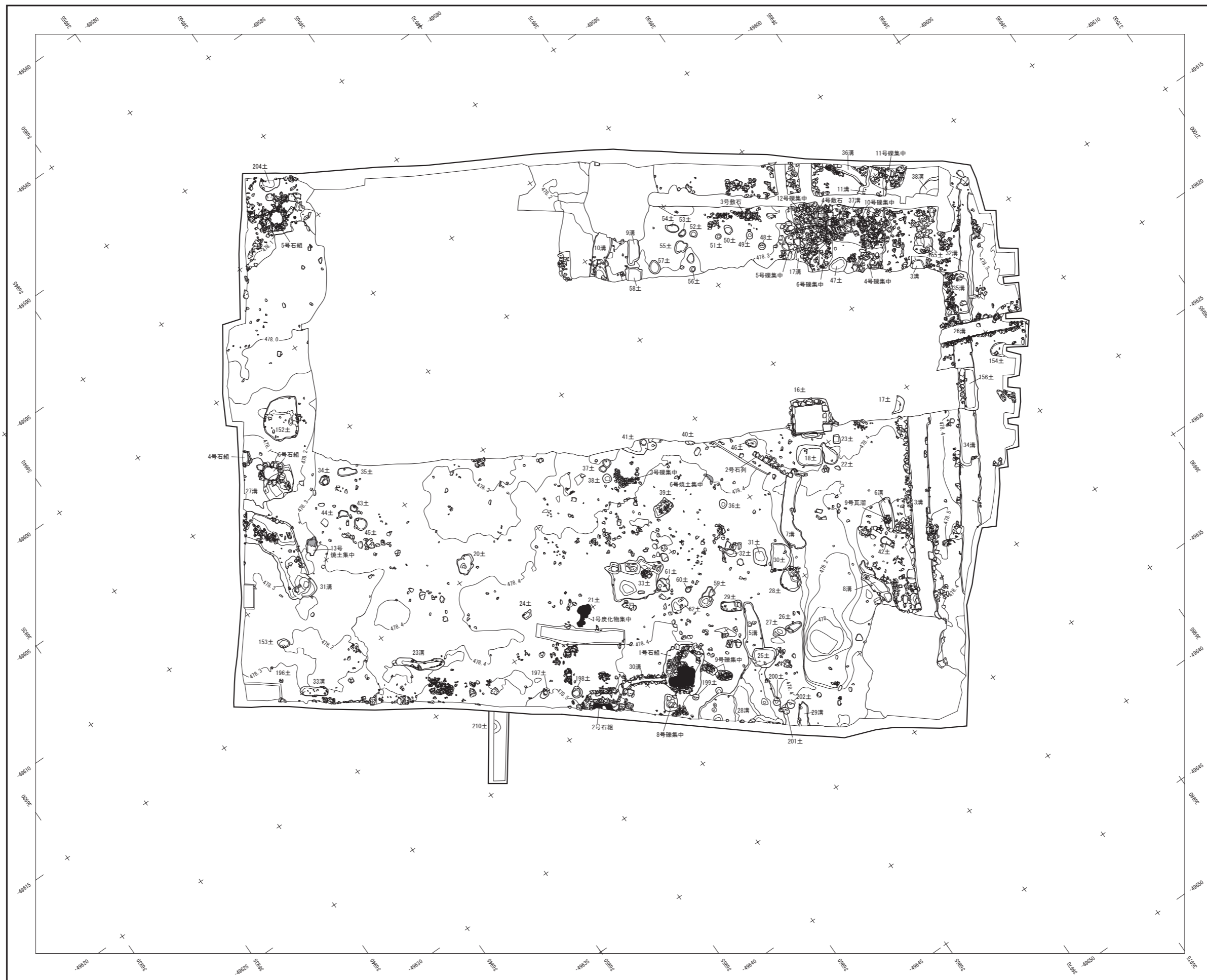
第66図 時代別遺物分布図(2)

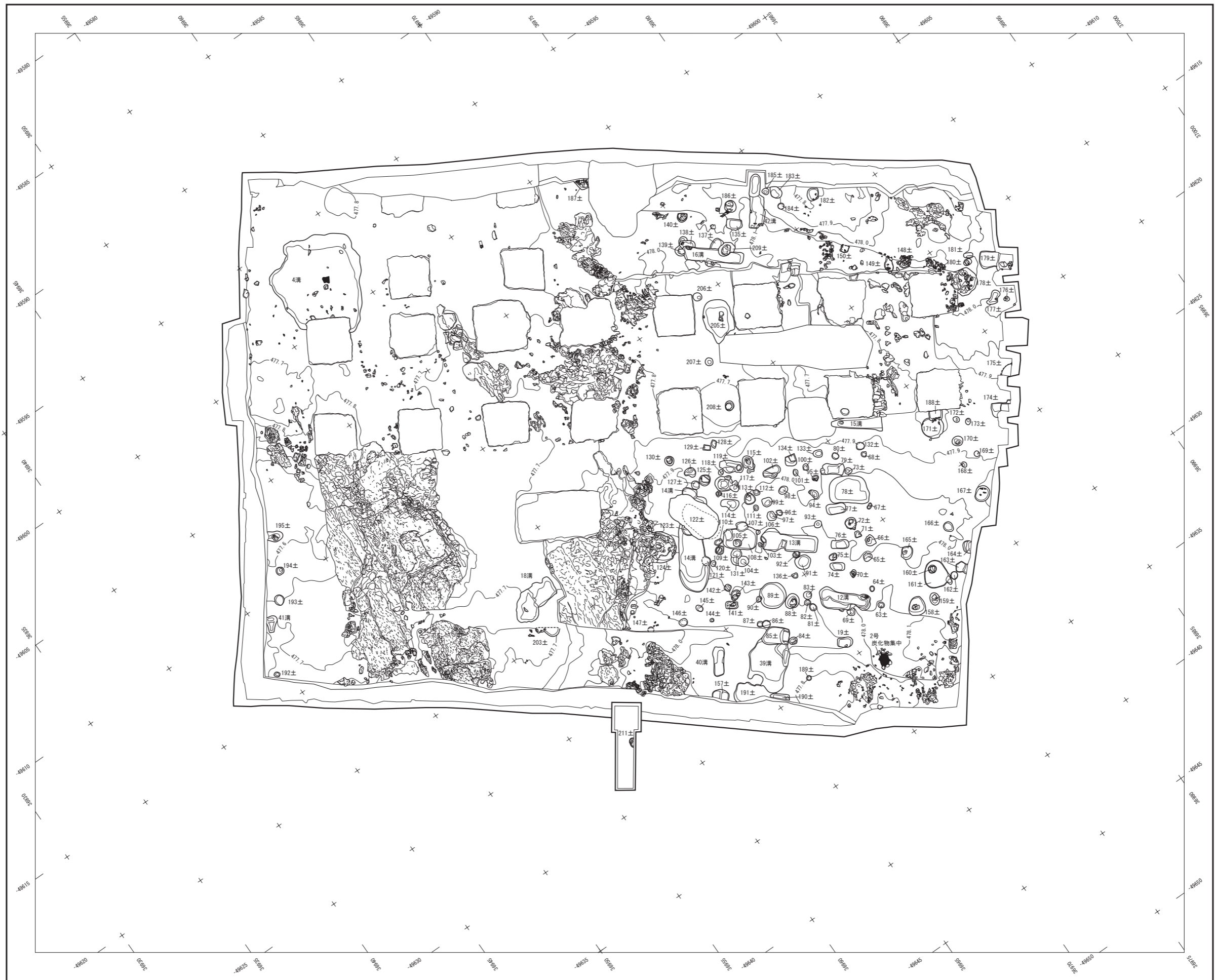


第67图 遺構外重要遺物分布图









第2表 遺構一覽表

調査区	面数	遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	時期										
							縄文時代 紀元前6世紀	奈良・平安時代 8世紀～ 10世紀	中世		近世				近現代		
							12世紀～ 16世紀前半	16世紀中葉～ 16世紀後半	16世紀後半	17世紀前半 17世紀中葉	17世紀後半～ 18世紀前半	18世紀後半～ 19世紀前半	18世紀後半～ 19世紀後半	19世紀後半～ 19世紀末葉	第二次世界 大戦中	占領期	戦後
1	A・B	第1面	1号石列遺構	C・D・E-5 D・E-6	(10.46)	2.80											
2	A	第1面	1号敷石遺構	C-8 C・D-9・10	9.85	6.20											
3	B	第1面	2号敷石遺構	G・H-8・9 F・G-10 F-11	17.50	(6.95)	0.80										
4	A	第1面	1号通路状遺構	D・E-8 D-9	(4.64)	2.04											
5	A・B	第1面	1号水路	B-8・9 C-8	(5.85)	2.00	0.95										
6	B	第1面	2号水路	A-7	(2.40)	2.20	0.86										
7	立会	第1面	1号門柱基礎	B-5	0.65	0.60	0.40										
8	立会	第1面	2号門柱基礎	B-5	0.50	0.45	0.40										
9	A	第1面	1号礫集中	D・E-6・7	6.66	3.82											
10	A・B	第1面	2号礫集中	A-8 B-7・8	(5.60)	(4.18)											
11	A	第1面	1号土坑	G-9	0.40	0.25	0.12										
12	立会	第1面	212号土坑	C-3・4	0.90	0.78	0.18										
13	立会	第1面	213号土坑	D-3	1.22	(0.87)	0.34										
14	A	第1面	1号溝状遺構	G-9	6.10	0.40	0.10										
15	A	第1面	2号溝状遺構	G-9	1.15	0.45	0.50										
16	A	第1面	1号瓦溜	F-10	(1.79)	(0.72)											
17	A	第1面	2号瓦溜	F-9	(1.04)	(0.40)											
18	A	第1面	3号瓦溜	F・G-4・5	7.20	(2.80)											
19	B	第1面	7号焼土集中	D-3	0.30	0.20	0.02										
20	B	第1面	8号焼土集中	C-4	0.42	0.25											
21	A	第2面	1号道路状遺構	D・E-5・6	(9.20)	3.44	3.05										
22	B	第2面	7号礫集中	J-5	(3.20)	(3.08)											
23	A	第2面	2号土坑	D・E-7	1.88	1.84	0.30										
24	A	第2面	3号土坑	D-7	1.12	0.96	0.14										
25	A	第2面	4号土坑	G-9	0.52	0.35	0.10										
26	A	第2面	5号土坑	F-10	0.37	0.32	0.24										
27	A	第2面	6号土坑	F-10	0.50	0.38	0.15										
28	A	第2面	7号土坑	F-10	0.76	0.70	0.44										

調査区	面数	遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	時期																				
							縄文時代			中世			近世			近現代											
							紀元前6世紀	8世紀～10世紀	奈良・平安時代	12世紀～16世紀前葉	16世紀中葉～16世紀後葉	16世紀後葉	17世紀前葉～17世紀中葉	17世紀後葉～18世紀前葉	18世紀中葉～18世紀後葉	18世紀末葉～19世紀中葉	19世紀中葉～19世紀末葉	第二次世界大戦中	占領期	戦後							
29	A	第2面	8号土坑	F-10	1.00	0.70	0.20																				
30	A	第2面	9号土坑	F-9	(2.10)	(0.91)	1.25																				
31	A	第2面	10号土坑	F-9	0.28	0.30	0.09																				
32	A	第2面	11号土坑	G-9	0.41	0.33	0.05																				
33	A	第2面	12号土坑	G-9	0.35	0.30	0.10																				
34	A	第2面	13号土坑	F-9	0.30	0.18	0.10																				
35	A	第2面	14号土坑	F・G-9	0.28	0.24	0.12																				
36	A	第2面	15号土坑	G-9	0.32	0.31	0.29																				
37	B	第2面	151号土坑	H-4	1.88	1.26	0.16																				
38	B	第2面	19号溝状遺構	H-4 1-4・5	5.08	2.84	0.06																				
39	B	第2面	20号溝状遺構	G-3・4	(3.08)	1.50	0.92																				
40	B	第2面	21号溝状遺構	F-2	1.18	(0.80)	0.55																				
41	B	第2面	22号溝状遺構	E・F-3	(7.62)	2.40	0.39																				
42	B	第2面	24号溝状遺構	A-7	0.48	(0.40)	0.43																				
43	B	第2面	25号溝状遺構	B-8	(1.46)	0.90	0.20																				
44	A	第2面	1号焼土集中	F-10	0.78	(0.44)																					
45	A	第2面	2号焼土集中	F-9・10	(10.50)	0.72																					
46	A	第2面	3号焼土集中	F-9	(0.89)	0.44																					
47	A	第2面	4号焼土集中	G-9	0.68	0.42																					
48	A	第2面	5号焼土集中	F-5	0.22	0.20																					
49	B	第2面	9号焼土集中	H-9	0.34	0.18	0.03																				
50	B	第2面	10号焼土集中	G-10	0.91	(0.62)																					
51	B	第2面	11号焼土集中	E-4	1.63	1.00	0.12																				
52	立会	第2面	14号焼土集中	J-6	(0.58)	(0.18)																					
53	A	第2面	4号瓦溜	E-8	1.20	1.00	0.25																				
54	A	第2面	5号瓦溜	D-7	1.15	0.95	0.33																				
55	A	第2面	6号瓦溜	G-4・5	5.44	(0.84)																					
56	A	第2面	7号瓦溜	F-6	1.25	(0.64)																					
57	A	第2面	8号瓦溜	F・G-5	1.58	1.56																					

調査区	面数	遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	時期									
							縄文時代 紀元前6世紀	奈良・平安時代 8世紀～ 10世紀	中世		近世			近現代		
							12世紀～ 16世紀前葉	16世紀中葉～ 16世紀後葉	17世紀前葉～ 17世紀中葉	17世紀後葉～ 18世紀前葉	18世紀中葉～ 18世紀後葉	19世紀前葉～ 19世紀中葉	19世紀中葉～ 19世紀後葉	第二次世界 大戦中	占領期	戦後
58	B	第2面下	3号石組遺構	H-I-8	1.52	1.38	0.17									
59	B	第2面下	12号焼土集中	G-9	0.89	(0.63)										
60	A	第3面	2号石列遺構	D-E-8	(2.38)	0.50										
61	B	第3面	1号石組遺構	C-D-6	2.73	1.98	0.92									
62	B	第3面	2号石組遺構	C-D-5	(1.90)	(1.17)	0.76									
63	B	第3面	4号石組遺構	H-3	0.87	(0.50)	0.32									
64	B	第3面	5号石組遺構	J-5	1.72	1.62	0.62									
65	B	第3面	6号石組遺構	G-H-3・4	1.60	1.40	0.55									
66	A	第3面	3号礫集中	E-6・7 F-6・7	1.32	1.23										
67	A	第3面	4号礫集中	F-10	1.52	(0.72)										
68	A	第3面	5号礫集中	F-G-9	2.08	0.80										
69	B	第3面	8号礫集中	C-6	0.95	0.85	0.23									
70	B	第3面	9号礫集中	C-6	1.70	0.58	0.18									
71	B	第3面	10号礫集中	F-10	3.43	2.00										
72	B	第3面	11号礫集中	F-10・11 G-10・11	1.73	0.22										
73	B	第3面	12号礫集中	G-10	1.60	1.30										
74	A	第3面	16号土坑	E-8・9	2.76	2.12	1.43									
75	A	第3面	17号土坑	D-9	0.98	(0.41)	0.23									
76	A	第3面	18号土坑	D-E-8	1.27	1.08	0.21									
77	A	第3面	20号土坑	F-5	1.11	0.88	0.11									
78	A	第3面	21号土坑	D-E-5	0.50	0.40	0.12									
79	A	第3面	22号土坑	D-E-8	1.23	0.77	0.08									
80	A	第3面	23号土坑	D-E-9	0.44	0.35	0.25									
81	A	第3面	24号土坑	E-5	0.56	0.30	0.12									
82	A	第3面	25号土坑	C-7	1.24	1.06	1.08									
83	A	第3面	26号土坑	C-7	0.88	0.41	0.08									
84	A	第3面	27号土坑	C-7	0.69	0.49	0.11									
85	A	第3面	28号土坑	C-7・8	1.20	1.10	0.28									
86	A	第3面	29号土坑	D-7	1.11	0.56	0.21									

調査区	面数	遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	時期											
							縄文時代 紀元前6世紀	奈良・平安時代 8世紀～ 10世紀	中世		近世			近現代				
								12世紀～ 16世紀前期	16世紀中葉～ 16世紀後葉	16世紀後葉	17世紀初葉～ 17世紀中葉	17世紀後葉～ 18世紀前期	18世紀中葉～ 18世紀後葉	18世紀末葉～ 19世紀中葉	19世紀中葉～ 19世紀末葉	第二次世界 大戦中	占領期	戦後
87	A	第3面	30号土坑	D-7	1.50	1.20	0.05											
88	A	第3面	31号土坑	D-7	1.07	0.74	0.21											
89	A	第3面	32号土坑	D-7	0.94	0.36	0.06											
90	A	第3面	33号土坑	D・E-6	3.05	2.22	0.58											
91	A	第3面	34号土坑	G-4	0.58	0.50	0.12											
92	A	第3面	35号土坑	G-4	1.02	0.42	0.10											
93	A	第3面	36号土坑	E-7	0.46	0.40	0.38											
94	A	第3面	37号土坑	F-6・7	0.74	0.44	0.12											
95	A	第3面	38号土坑	F-6	0.48	0.48	0.18											
96	A	第3面	39号土坑	E-7	1.14	1.68	0.08											
97	A	第3面	40号土坑	E-7	(0.90)	(0.20)	0.52											
98	A	第3面	41号土坑	E・F-7	(1.80)	(0.80)	0.26											
99	A	第3面	42号土坑	C-8	0.80	0.42	0.10											
100	A	第3面	43号土坑	G-4	0.40	0.36	0.10											
101	A	第3面	44号土坑	G-4	0.51	0.38	0.28											
102	A	第3面	45号土坑	G-4	0.71	0.71	0.22											
103	A	第3面	46号土坑	E-8	0.64	0.43	0.06											
104	A	第3面	47号土坑	F-10	(0.98)	(0.74)	0.36											
105	A	第3面	48号土坑	G-9	0.37	0.37	0.11											
106	A	第3面	49号土坑	G-9	0.40	0.31	0.20											
107	A	第3面	50号土坑	G-9	0.42	0.40	0.22											
108	A	第3面	51号土坑	G-9	0.31	0.27	0.14											
109	A	第3面	52号土坑	G-9	0.40	0.34	0.22											
110	A	第3面	53号土坑	G-8・9	0.45	0.28	0.24											
111	A	第3面	54号土坑	G-8・9	0.73	0.44	0.14											
112	A	第3面	55号土坑	G-8	0.76	0.65	0.14											
113	A	第3面	56号土坑	G-8	0.33	0.28	0.07											
114	A	第3面	57号土坑	G-8	0.73	0.57	0.10											
115	A	第3面	58号土坑	G-8	0.90	(0.70)	0.34											

調査区	面数	遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	時期										
							縄文時代 紀元前6世紀	奈良・平安時代 6世紀～ 10世紀	中世		近世			近現代			
							16世紀～ 16世紀前葉	16世紀中葉～ 16世紀後葉	16世紀後葉	17世紀初葉～ 17世紀中葉	17世紀後葉～ 18世紀前葉	18世紀中葉～ 18世紀後葉	18世紀中葉～ 19世紀前葉	19世紀中葉～ 19世紀末葉	第二次世界 大戦中	占領期	戦後
116	B	第3面	152号土坑	H-4	2.42	1.84	0.26										
117	B	第3面	153号土坑	F-3	0.65	0.47	0.07										
118	B	第3面	154号土坑	D-10・11	(0.65)	0.75	0.12										
119	B	第3面	156号土坑	D-10	(2.28)	(1.40)	0.83										
120	立会	第3面	210号土坑	D-4	0.69	(0.36)	0.32										
121	A	第3面	3号溝状遺構	B-8 C-8・9 D-9 E・F-10	(18.80)	1.00	0.28										
122	A	第3面	5号溝状遺構	C-D-7	3.00	(1.04)	0.20										
123	A	第3面	6号溝状遺構	C-8・9 D-9	1.84	0.56	0.22										
124	A	第3面	7号溝状遺構	D-8	3.96	1.12	0.12										
125	A	第3面	8号溝状遺構	C-8	(2.98)	0.85	0.18										
126	A	第3面	9号溝状遺構	G-8	(1.33)	0.60	0.26										
127	A	第3面	10号溝状遺構	G-7・8 H-8	(2.33)	0.90	0.14										
128	B	第3面	23号溝状遺構	E-3・4	2.54	0.58	0.13										
129	B	第3面	26号溝状遺構	D・E-10・11	(4.80)	0.80	0.14										
130	B	第3面	27号溝状遺構	B-6 C-6・7 D-7	26.60	(26.00)	0.25										
131	B	第3面	28号溝状遺構	B-6 C-6・7 D-7	(4.57)	(3.30)	0.50										
132	B	第3面	29号溝状遺構	B-7	(1.24)	0.52	0.12										
133	B	第3面	30号溝状遺構	O-6 D-5・6	2.81	0.52	0.14										
134	B	第3面	31号溝状遺構	F-3・4	(5.50)	1.92	0.33										
135	B	第3面	32号溝状遺構	E-10・11 F-11	(7.40)	0.75	0.16										
136	B	第3面	33号溝状遺構	E・F-2・3	1.45	0.47	0.09										
137	B	第3面	34号溝状遺構	B-9 C・D-9・10 E-10	(13.20)	1.00	0.14										
138	B	第3面	35号溝状遺構	E-10・11	2.40	(1.20)	0.53										
139	A	第3面	6号焼土集中	E-7	0.52	0.17											
140	B	第3面	13号焼土集中	G-3・4	0.10	0.60	0.08										
141	A	第3面	1号炭化物集中	D・E-5	1.26	0.67											
142	A	第3面	9号瓦溜	C・D-9	0.47	0.42											
143	B	第3面下	3号敷石遺構	G-9	2.97	0.83											
144	B	第3面下	4号敷石遺構	F-10	1.04	0.32											

調査区	面数	遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	時期									
							縄文時代 紀元前6世紀	奈良・平安時代 8世紀～ 10世紀	中世		近世			近現代		
							12世紀～ 16世紀前半葉	16世紀中葉～ 16世紀後半葉	17世紀前半葉～ 17世紀中葉	17世紀後半葉～ 18世紀前半葉	18世紀中葉～ 18世紀後半葉	19世紀前半葉～ 19世紀中葉	19世紀後半葉～ 19世紀末葉	第二次世界 大戦中	占領期	戦後
145	A	第3面下 6号礫集中	F-9・10	1.46	0.62											
146	A	第3面下 59号土坑	D-6・7	1.16	0.67	0.48										
147	A	第3面下 60号土坑	D-6	0.44	0.28	0.36										
148	A	第3面下 61号土坑	D-6	0.77	0.76	0.12										
149	A	第3面下 62号土坑	F-2	0.92	0.64	0.34										
150	B	第3面下 155号土坑	F-10・11	(1.00)	0.84	0.08										
151	B	第3面下 196号土坑	F-2	0.18	(0.11)	0.41										
152	B	第3面下 197号土坑	D-5	(0.60)	0.39	0.37										
153	B	第3面下 198号土坑	D-5	0.60	0.47	0.53										
154	B	第3面下 199号土坑	C-6	(0.33)	(0.15)	0.35										
155	B	第3面下 200号土坑	C-6・7	0.40	(0.24)	0.25										
156	B	第3面下 201号土坑	B-6・7 C-6	0.50	0.33	0.17										
157	B	第3面下 202号土坑	B・C-7	0.44	(0.28)	0.36										
158	B	第3面下 204号土坑	J-5	(1.08)	(0.75)	0.32										
159	A・B	第3面下 11号溝状遺構	F・G-10・11	(5.35)	(1.10)	0.25										
160	A	第3面下 17号溝状遺構	F-9・10	(1.66)	1.10	0.10										
161	B	第3面下 36号溝状遺構	F・G-10	(1.50)	(0.49)	0.12										
162	B	第3面下 37号溝状遺構	F-10	(2.56)	0.65	0.16										
163	B	第3面下 38号溝状遺構	F-11	(0.90)	(0.84)	0.08										
164	A	第4面 19号土坑	C-7・8	0.83	0.53	0.20										
165	A	第4面 63号土坑	C-8	0.33	0.30	0.15										
166	A	第4面 64号土坑	C-8	0.30	0.24	0.07										
167	A	第4面 65号土坑	C-8	0.45	0.45	0.10										
168	A	第4面 66号土坑	C-8	0.60	0.58	0.17										
169	A	第4面 67号土坑	D-8	0.33	0.20	0.05										
170	A	第4面 68号土坑	D-9	0.30	0.30	0.07										
171	A	第4面 69号土坑	C-8	0.41	0.41	0.12										
172	A	第4面 70号土坑	C-8	0.42	0.30	0.08										
173	A	第4面 71号土坑	C-D-8	0.36	0.35	0.07										

調査区	面数	遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	時期									
							縄文時代 紀元前6世紀	奈良・平安時代 8世紀～ 10世紀	中世		近世			近現代		
							12世紀～ 16世紀前期	16世紀中葉～ 16世紀後葉	17世紀初葉～ 17世紀中葉	17世紀後葉～ 18世紀前期	18世紀中葉～ 18世紀後葉	18世紀末葉～ 19世紀中葉	19世紀中葉～ 19世紀末葉	第二次世界 大戦中	占領期	戦後
174	A	第4面	72号土坑	D-8	0.66	0.60	0.16									
175	A	第4面	73号土坑	D-8-9	0.38	0.31	0.33									
176	A	第4面	74号土坑	C-8	0.78	0.40	0.20									
177	A	第4面	75号土坑	C・D-8	0.41	0.38	0.07									
178	A	第4面	76号土坑	C・D-8	0.94	0.48	0.19									
179	A	第4面	77号土坑	D-8	0.12	0.53	0.22									
180	A	第4面	78号土坑	D-8・9	2.20	1.50	0.43									
181	A	第4面	79号土坑	D-8	1.26	0.60	0.34									
182	A	第4面	80号土坑	D-8・9	0.38	0.30	0.07									
183	A	第4面	81号土坑	C-7	0.40	0.33	0.06									
184	A	第4面	82号土坑	C-7	0.30	0.29	0.15									
185	A	第4面	83号土坑	C-7	0.42	0.41	0.12									
186	A	第4面	84号土坑	C-7	0.42	0.40	0.20									
187	A	第4面	85号土坑	C-7	1.52	1.00	0.48									
188	A	第4面	86号土坑	C-7	0.44	0.38	0.24									
189	A	第4面	87号土坑	C-7	0.26	0.30	0.24									
190	A	第4面	88号土坑	C-7	0.79	0.70	0.12									
191	A	第4面	89号土坑	C・D-7	1.40	1.34	0.42									
192	A	第4面	90号土坑	D-7	0.34	0.26	0.18									
193	A	第4面	91号土坑	D-7・8	0.82	0.74	0.44									
194	A	第4面	92号土坑	D-8	0.38	(0.35)	0.32									
195	A	第4面	93号土坑	D-8	0.40	0.36	0.43									
196	A	第4面	94号土坑	D-8	0.57	0.35	0.13									
197	A	第4面	95号土坑	D-8	0.30	0.30	0.05									
198	A	第4面	96号土坑	D-8	0.36	0.26	0.09									
199	A	第4面	97号土坑	D-8	0.50	0.48	0.27									
200	A	第4面	98号土坑	D-8	0.50	0.39	0.21									
201	A	第4面	99号土坑	D-8	0.54	0.51	0.22									
202	A	第4面	100号土坑	D-8	0.35	0.28	0.59									

調査区	面数	遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	時期													
							縄文時代 紀元前6世紀	中世			近世			近現代						
								奈良・平安時代 8世紀~ 10世紀	12世紀~ 16世紀前半	16世紀中葉~ 19世紀後半	16世紀後半 17世紀初葉	17世紀中葉~ 18世紀前半	18世紀後半~ 19世紀初葉	18世紀中葉~ 19世紀後半	19世紀中葉~ 19世紀後半	第二次世界 大戦中	戦後			
203	A	第4面	101号土坑	D-8	0.37	0.25	0.21													
204	A	第4面	102号土坑	E-8	0.97	0.59	0.15													
205	A	第4面	103号土坑	D-7	0.28	0.21	0.20													
206	A	第4面	104号土坑	D-7	0.56	0.55	0.31													
207	A	第4面	105号土坑	D-7	0.43	0.40	0.13													
208	A	第4面	106号土坑	D-7	(0.44)	0.22	0.24													
209	A	第4面	107号土坑	D-7	0.66	0.54	0.40													
210	A	第4面	108号土坑	D-7	1.75	1.20	0.44													
211	A	第4面	109号土坑	D-7	0.52	0.46	0.42													
212	A	第4面	110号土坑	D-7	0.43	0.28	0.06													
213	A	第4面	111号土坑	D-7・8	0.32	0.26	0.24													
214	A	第4面	112号土坑	D・E-8	0.36	0.28	0.44													
215	A	第4面	113号土坑	D・E-7・8	0.61	0.57	0.41													
216	A	第4面	114号土坑	D・E-7	0.95	0.59	0.23													
217	A	第4面	115号土坑	E-8	0.87	0.57	0.30													
218	A	第4面	116号土坑	E-7	0.30	0.30	0.06													
219	A	第4面	117号土坑	E-7	1.30	0.90	0.23													
220	A	第4面	118号土坑	E-7	0.28	0.25	0.20													
221	A	第4面	119号土坑	E-7・8	1.26	0.67	0.30													
222	A	第4面	120号土坑	D-7	0.30	0.26	0.10													
223	A	第4面	121号土坑	D-7	(0.53)	0.50	0.18													
224	A	第4面	122号土坑	D・E-7	3.10	1.68	(2.50)													
225	A	第4面	123号土坑	E-7	(0.70)	(0.28)	0.15													
226	A	第4面	124号土坑	D・E-6・7	1.64	1.10	0.50													
227	A	第4面	125号土坑	E-7	0.60	0.60	0.18													
228	A	第4面	126号土坑	E-7	0.58	0.54	0.30													
229	A	第4面	127号土坑	E-7	0.43	0.40	0.18													
230	A	第4面	128号土坑	E-7・8	0.42	0.27	0.09													
231	A	第4面	129号土坑	E-7	0.40	0.27	0.10													

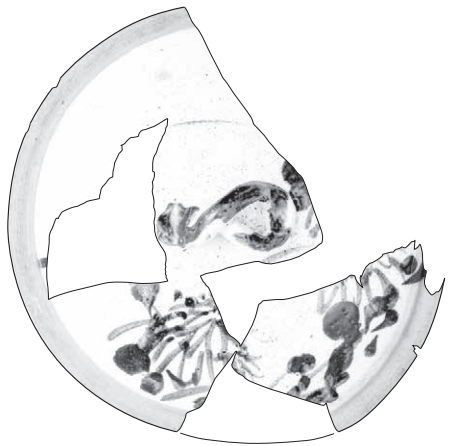
調査区	面数	遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	時期									
							縄文時代 紀元前6世紀	奈良・平安時代 8世紀～ 10世紀	中世		近世			近現代		
							12世紀～ 16世紀前葉	16世紀中葉～ 16世紀後葉	17世紀前葉～ 17世紀中葉	17世紀後葉～ 18世紀前葉	18世紀中葉～ 18世紀後葉	19世紀中葉～ 19世紀後葉	第二次世界 大戦中	占領期	戦後	
232	A	第4面	130号土坑	E-7	0.50	0.48	0.18									
233	A	第4面	131号土坑	D-7	(0.54)	(0.42)	0.21									
234	A	第4面	132号土坑	D-9	0.42	0.40	0.08									
235	A	第4面	133号土坑	D-8	0.49	0.39	0.35									
236	A	第4面	134号土坑	E-8	0.70	0.67	0.30									
237	A	第4面	135号土坑	G-9	0.86	0.52	0.67									
238	A	第4面	136号土坑	D-7	0.33	0.30	0.16									
239	A	第4面	137号土坑	G-9	(0.80)	(0.53)	0.17									
240	A	第4面	138号土坑	G-8・9	(0.83)	(0.46)	0.17									
241	A	第4面	139号土坑	G-8	(1.00)	(0.52)	0.18									
242	A	第4面	140号土坑	G-9	0.56	0.50	0.18									
243	A	第4面	141号土坑	D-7	0.64	0.39	0.08									
244	A	第4面	142号土坑	D-7	0.38	0.37	0.12									
245	A	第4面	143号土坑	D-7	0.60	0.44	0.13									
246	A	第4面	144号土坑	D-6	0.20	0.19	0.14									
247	A	第4面	145号土坑	D-6	0.40	0.30	0.20									
248	A	第4面	146号土坑	D-6	0.44	0.44	0.23									
249	A	第4面	147号土坑	D-6	(0.32)	(0.27)	0.74									
250	A	第4面	148号土坑	F-10	0.58	0.48	0.13									
251	A	第4面	149号土坑	F-10	0.80	0.46	0.20									
252	A	第4面	150号土坑	F-10	(0.50)	(0.47)	0.20									
253	B	第4面	157号土坑	C-6	(0.90)	(0.50)	0.43									
254	B	第4面	158号土坑	B・C-8	1.00	0.87	0.48									
255	B	第4面	159号土坑	B・C-8・9	0.66	0.50	0.16									
256	B	第4面	160号土坑	C-9	0.42	0.42	0.10									
257	B	第4面	161号土坑	C-8・9	1.12	1.37	0.16									
258	B	第4面	162号土坑	C-9	0.42	0.38	0.10									
259	B	第4面	163号土坑	C-9	(0.73)	(0.60)	0.22									
260	B	第4面	164号土坑	C-9	(0.64)	(0.43)	0.44									

調査区	面数	遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	時期									
							縄文時代 紀元前6世紀	奈良・平安時代 8世紀～ 10世紀	中世		近世			近現代		
							12世紀～ 16世紀前期	16世紀中葉～ 16世紀後葉	17世紀初葉～ 17世紀中葉	17世紀後葉～ 18世紀初葉	18世紀中葉～ 19世紀中葉	19世紀中葉～ 19世紀末葉	第二次世界 大戦中	占領期	戦後	
261	B	第4面	165号土坑	C-8-9	0.68	0.58	0.35									
262	B	第4面	166号土坑	C-9	0.56	0.50	0.18									
263	B	第4面	167号土坑	C-9-10	0.86	0.77	0.23									
264	B	第4面	168号土坑	C-D-10	0.30	0.26	0.10									
265	B	第4面	169号土坑	C-D-10	0.29	0.28	0.15									
266	B	第4面	170号土坑	D-10	0.56	0.50	0.17									
267	B	第4面	171号土坑	D-9-10	1.15	1.00	0.20									
268	B	第4面	172号土坑	D-10	0.36	0.30	0.15									
269	B	第4面	173号土坑	D-10	0.34	0.28	0.12									
270	B	第4面	174号土坑	D-10	(0.92)	(0.76)	0.43									
271	B	第4面	175号土坑	D-10・11	(0.88)	(0.52)	0.45									
272	B	第4面	176号土坑	E-11	0.28	0.26	0.10									
273	B	第4面	177号土坑	E-11	0.86	0.54	0.18									
274	B	第4面	178号土坑	E-11	1.50	(1.22)	0.52									
275	B	第4面	179号土坑	E-11	(1.76)	(0.93)	0.34									
276	B	第4面	180号土坑	E-11	0.44	0.34	0.30									
277	B	第4面	181号土坑	E-11	0.48	0.29	0.40									
278	B	第4面	182号土坑	G-10	0.72	0.67	0.19									
279	B	第4面	183号土坑	G-9-10	0.74	0.56	0.57									
280	B	第4面	184号土坑	G-9-10	0.34	0.33	0.16									
281	B	第4面	185号土坑	G-9	0.35	0.34	0.14									
282	B	第4面	186号土坑	G-9	0.64	0.61	0.34									
283	B	第4面	187号土坑	H-8	(0.94)	(0.70)	0.13									
284	B	第4面	188号土坑	D-10	0.70	(0.52)	0.15									
285	B	第4面	189号土坑	C-7	0.26	0.26	0.10									
286	B	第4面	190号土坑	C-6・7	(1.03)	(0.32)	0.47									
287	B	第4面	191号土坑	C-6・7	(2.14)	(0.96)	0.21									
288	B	第4面	192号土坑	F-2	0.30	0.24	0.12									
289	B	第4面	193号土坑	F-3	0.56	0.50	0.21									

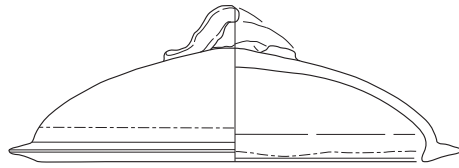
調査区	面数	遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	時期									
							縄文時代 紀元前6世紀	奈良・平安時代 8世紀～ 10世紀	中世		近世			近現代		
							12世紀～ 16世紀前葉	16世紀中葉～ 16世紀後葉	17世紀前葉～ 17世紀中葉	17世紀後葉～ 18世紀前葉	18世紀中葉～ 18世紀後葉	18世紀末葉～ 19世紀中葉	19世紀中葉～ 19世紀末葉	第二次世界 大戦中	占領期	戦後
290	B	第4面	194号土坑	G-3	0.43	0.41	0.44									
291	B	第4面	195号土坑	G-3	(0.84)	0.58	0.15									
292	B	第4面	203号土坑	D・E-5	(1.26)	(0.47)	0.22									
293	A	第4面	205号土坑	F-8	2.28	1.61	0.10									
294	A	第4面	206号土坑	F・G-8	0.47	0.44	0.09									
295	A	第4面	207号土坑	F-8	0.42	0.41	0.06									
296	A	第4面	208号土坑	E-8	0.54	0.46	0.08									
297	A	第4面	209号土坑	G-9	(0.91)	(0.60)	0.49									
298	立会	第4面	211号土坑	C-5	0.47	(0.20)	0.26									
299	A・B	第4面	4号溝状遺構	H-5 1-5・6	5.68	4.77	0.28									
300	A	第4面	12号溝状遺構	C-7・8	2.74	1.01	0.51									
301	A	第4面	13号溝状遺構	D-7・8	3.00	1.15	0.30									
302	A	第4面	14号溝状遺構	D-6・7 E-7	5.43	1.65	0.34									
303	A	第4面	15号溝状遺構	D・E-9	2.63	0.76	0.46									
304	A	第4面	16号溝状遺構	G-8・9	3.20	0.97	0.37									
305	A	第4面	18号溝状遺構	E-5	2.70	1.32	0.31									
306	A	第4面	39号溝状遺構	C-6・7	(2.62)	1.84	0.41									
307	A	第4面	40号溝状遺構	C-6	1.54	0.62	0.28									
308	A	第4面	41号溝状遺構	F-3	0.90	(0.56)	0.24									
309	A	第4面	42号溝状遺構	G-9・10	2.84	0.80	0.10									
310	A	第4面	2号炭化物集中	B-8	0.77	0.52	0.14									



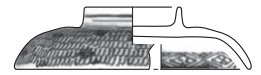
1



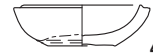
2



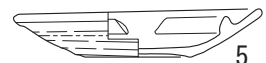
1号敷石遺構



3



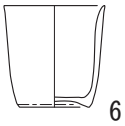
4



5

2号敷石遺構

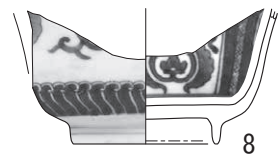
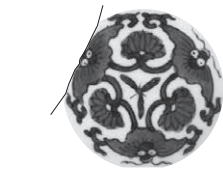
1号水路



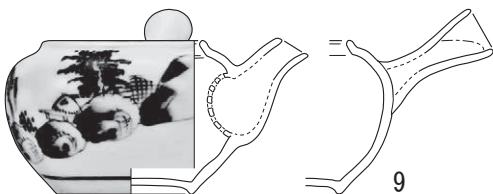
6



7



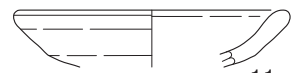
8



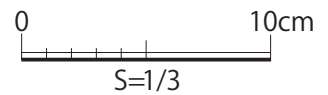
9



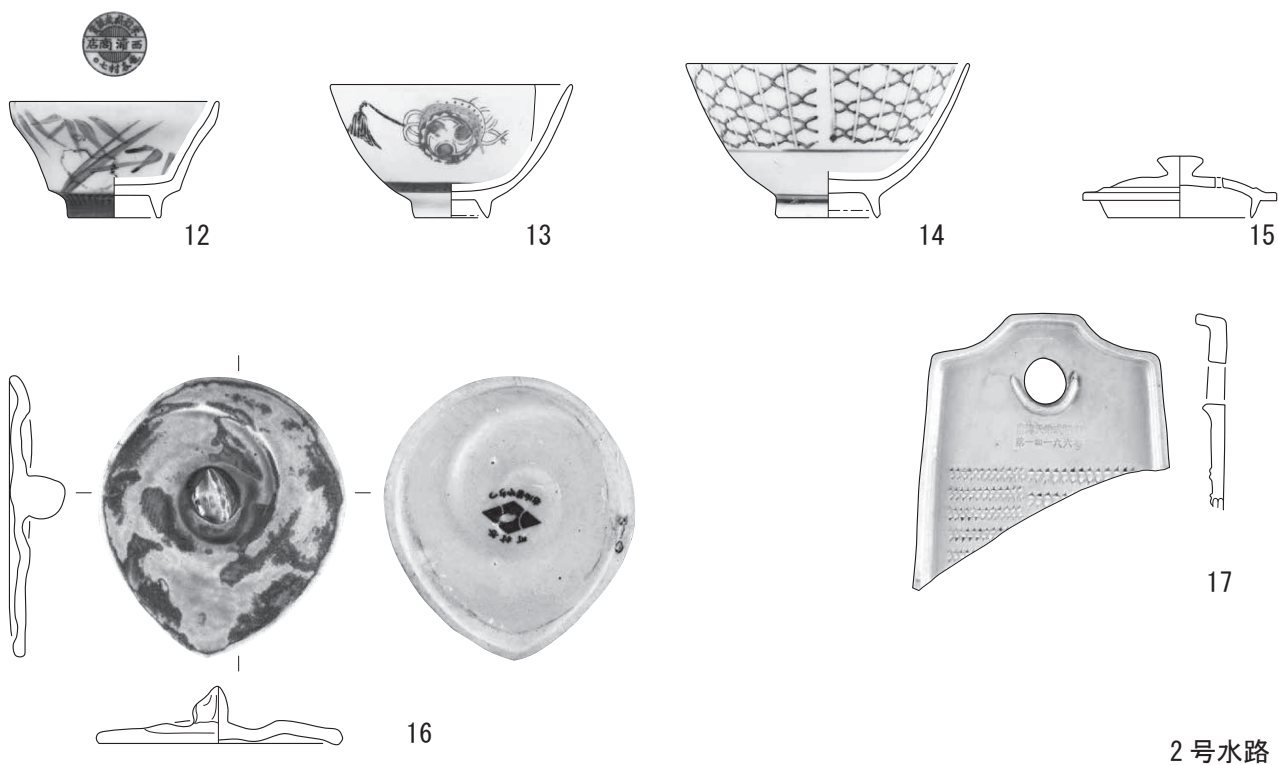
10



11

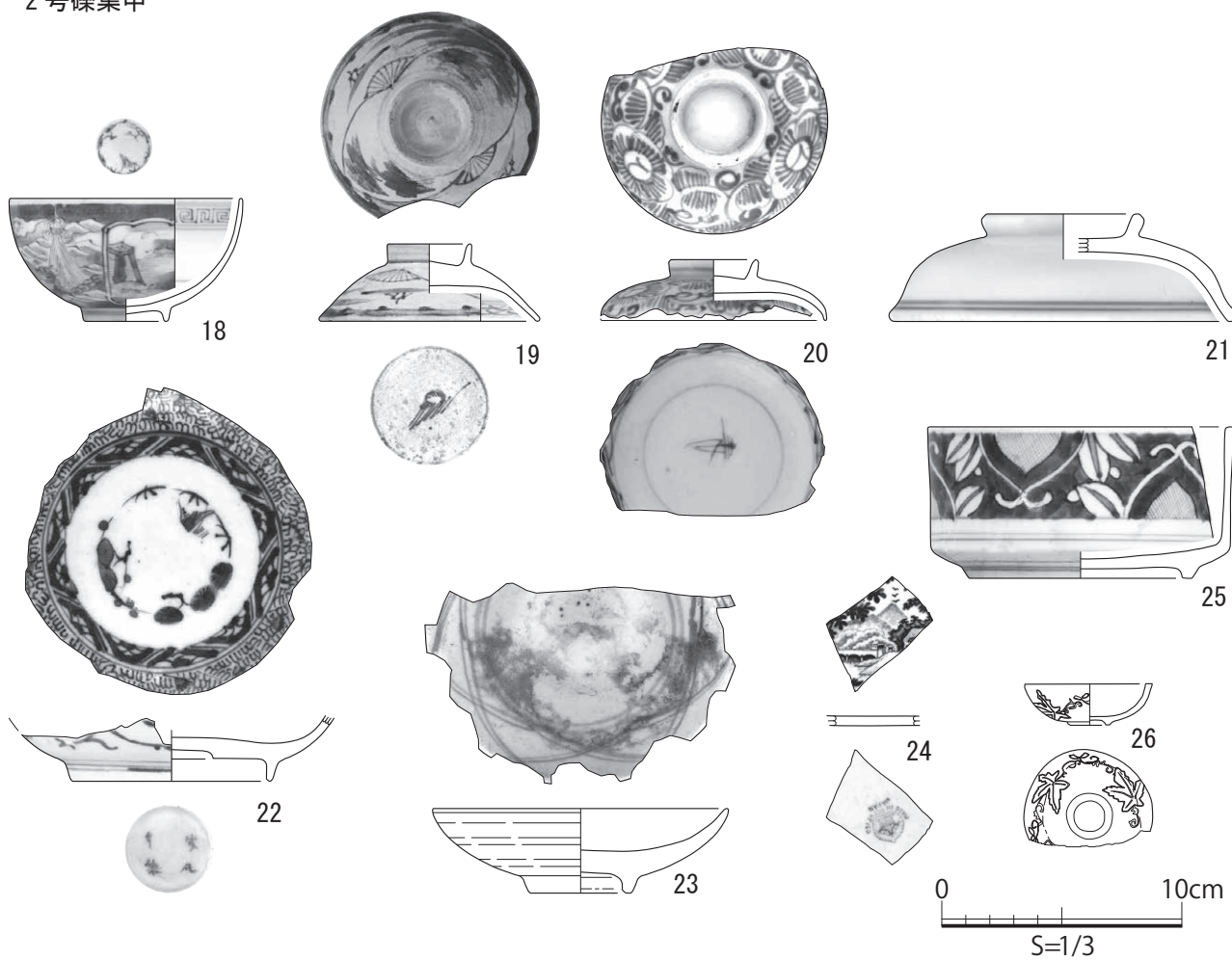


第72图 1面遺構出土陶磁器・土器(1)

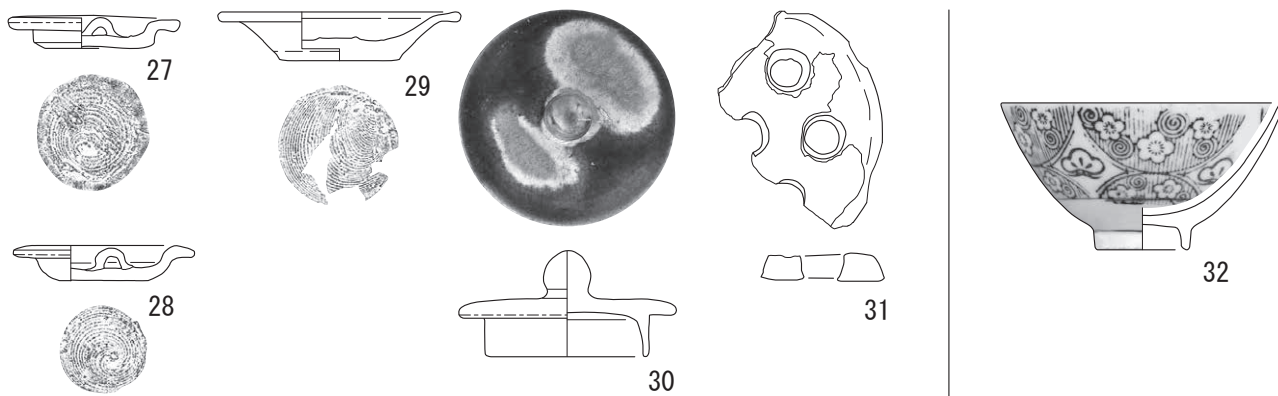


2号水路

2号磁集中

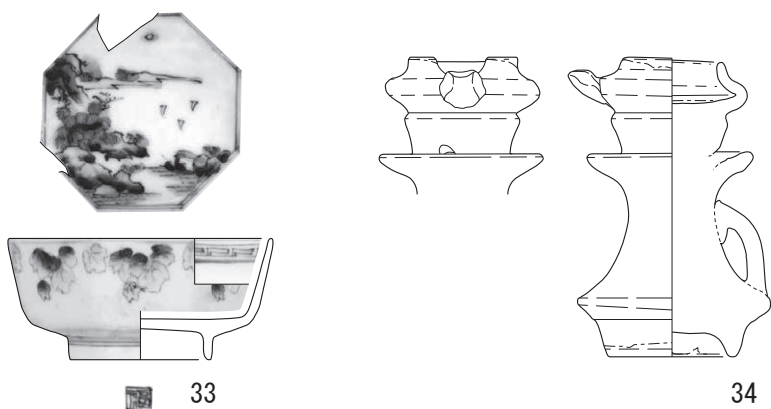


第73图 1面遺構出土陶磁器・土器(2)

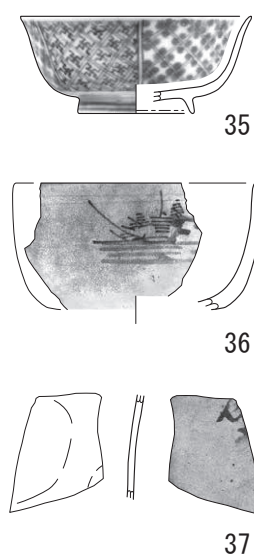


2号碟集中

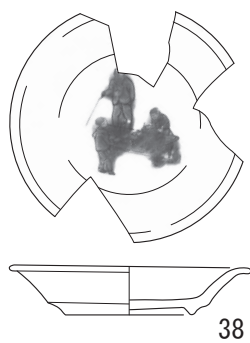
1号溝状遺構



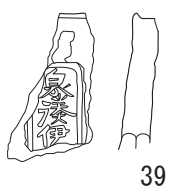
池跡



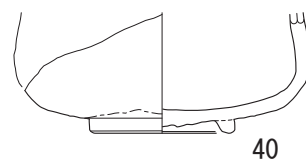
7号碟集中



4号土坑

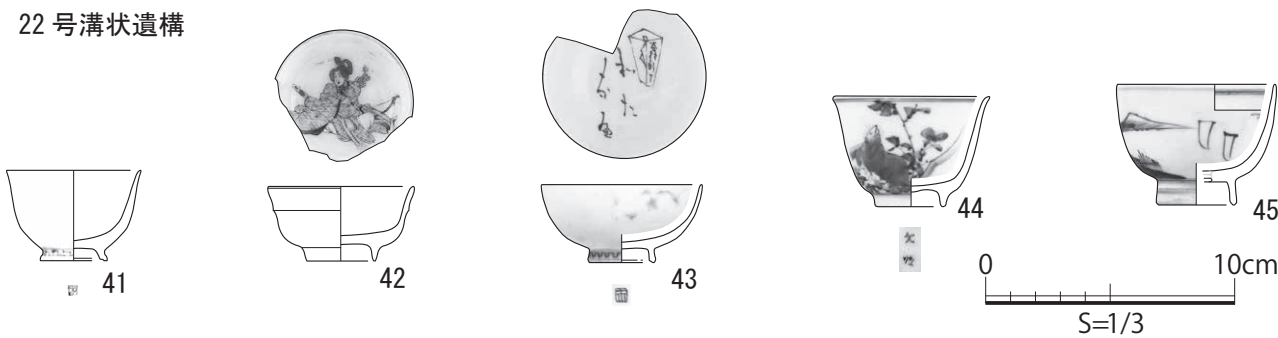


9号土坑



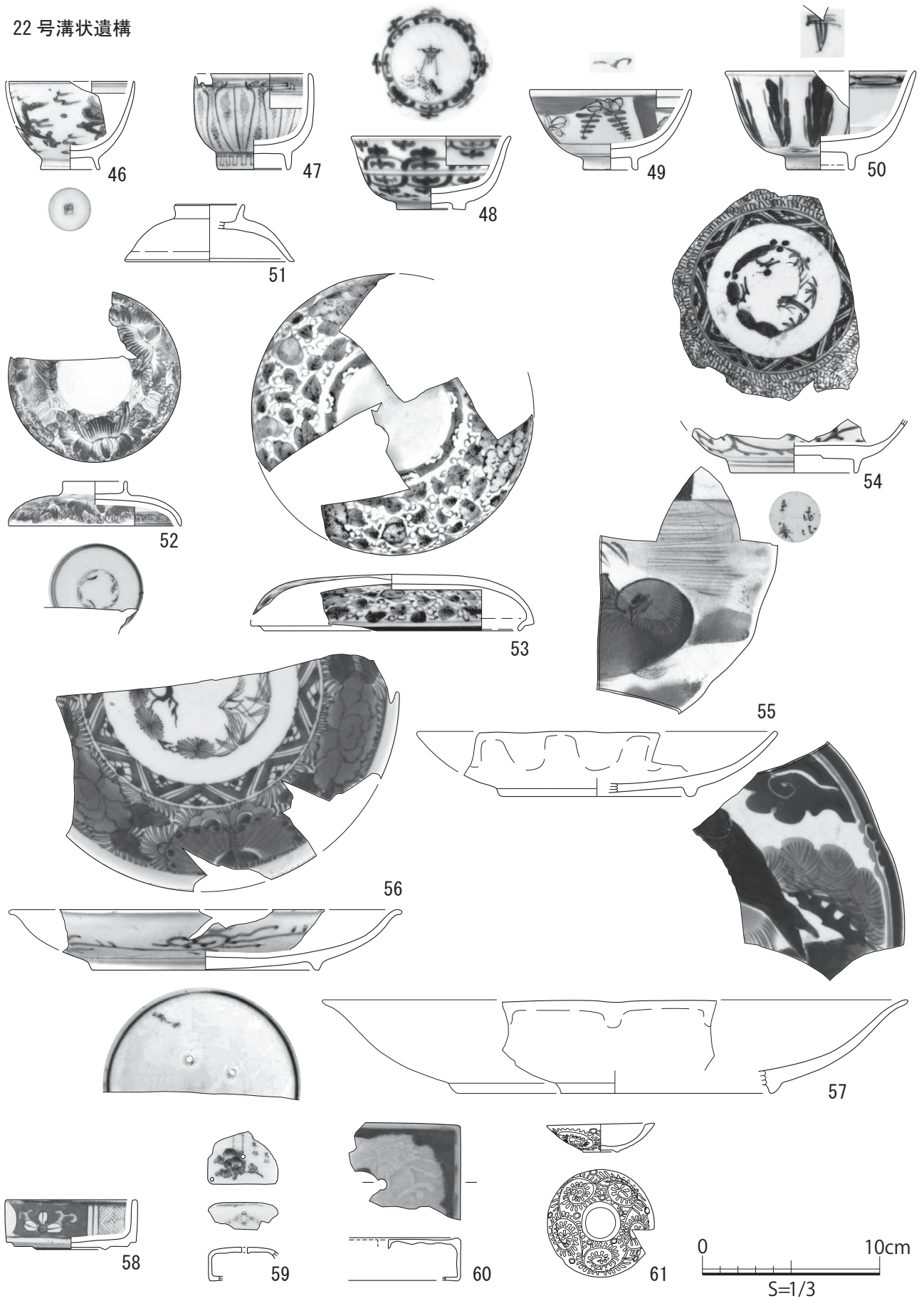
21号溝状遺構

22号溝状遺構

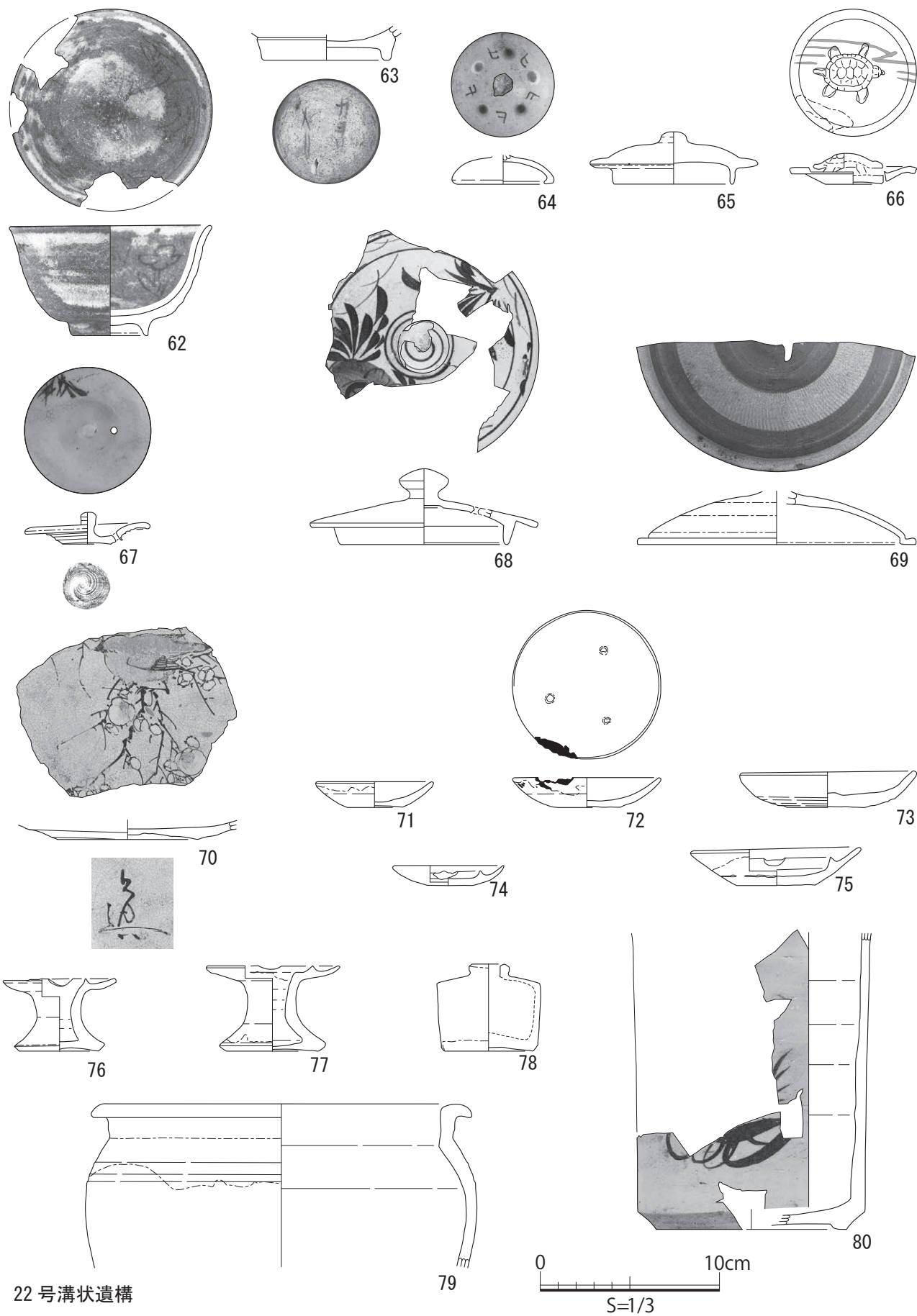


第74图 1・2面遺構出土陶磁器・土器

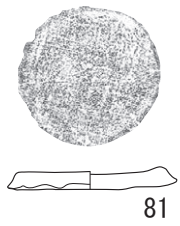
22号溝状遺構



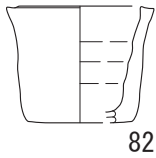
第75图 2面遺構出土陶磁器・土器(1)



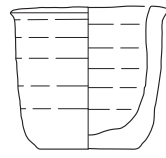
第76图 2面遺構出土陶磁器・土器(2)



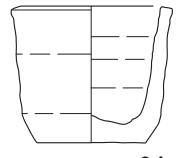
81



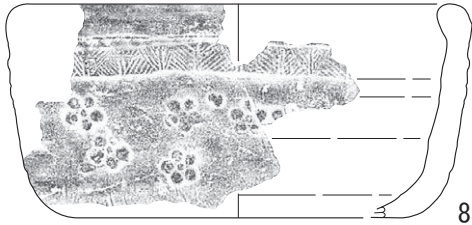
82



83

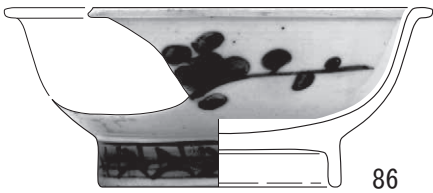


84

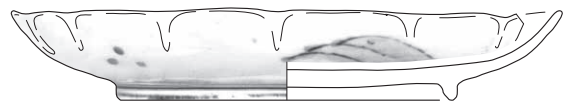


85

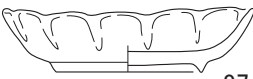
22号溝状遺構



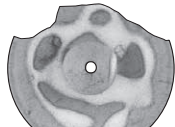
86



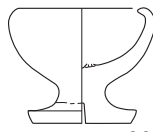
91



87



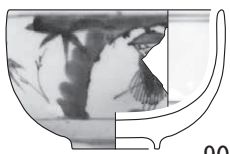
88



89

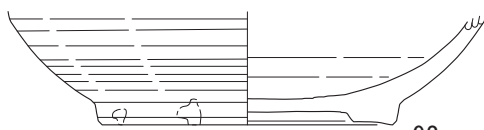
25号溝状遺構

4号瓦溜

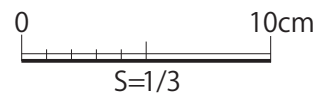


90

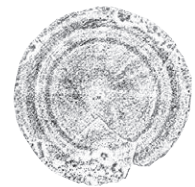
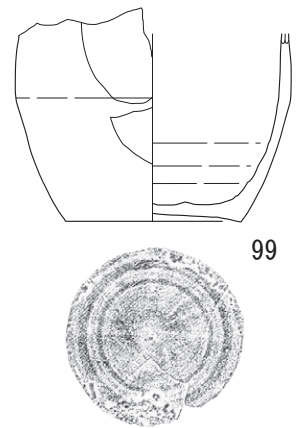
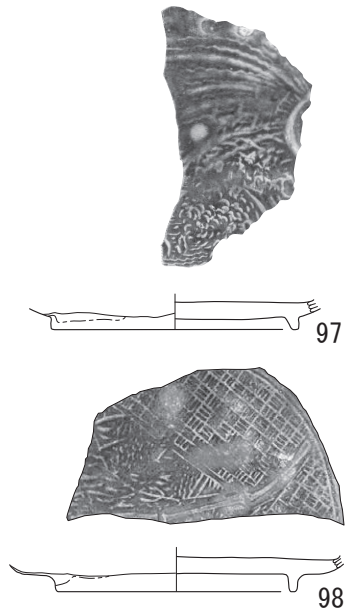
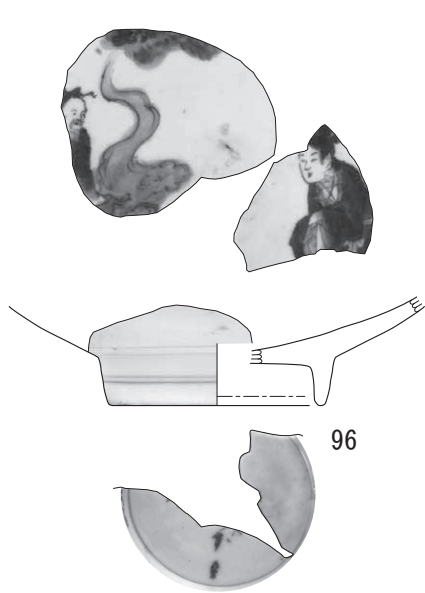
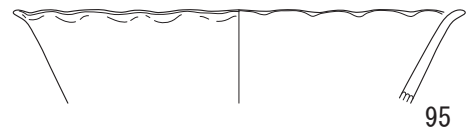
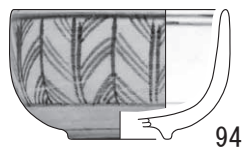
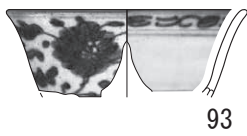
5号瓦溜



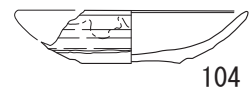
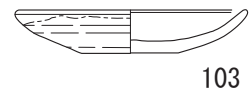
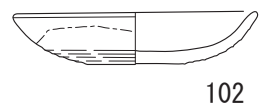
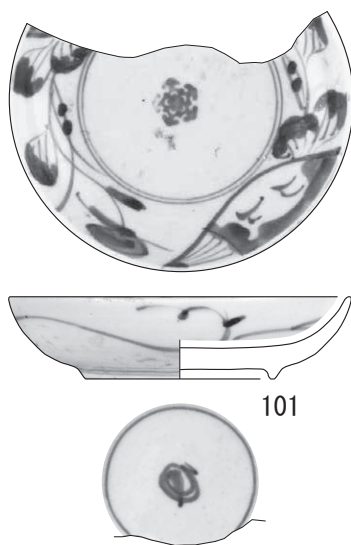
92



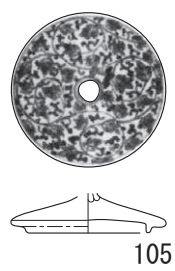
第77图 2面遺構出土陶磁器・土器(3)



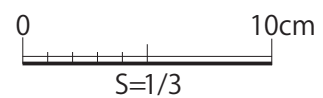
1号石組



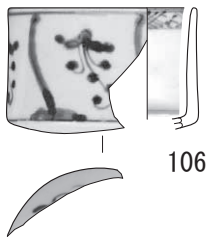
2号石組



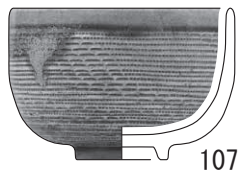
8号碟集中



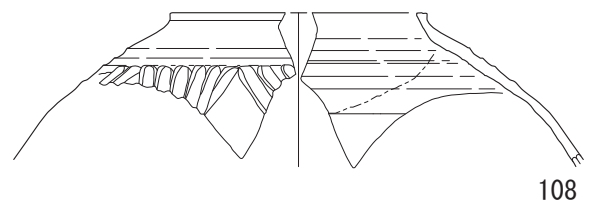
第78図 3面遺構出土陶磁器・土器(1)



106



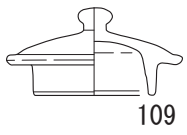
107



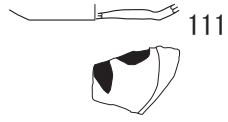
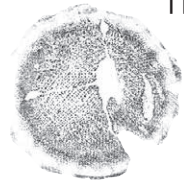
108



110



109



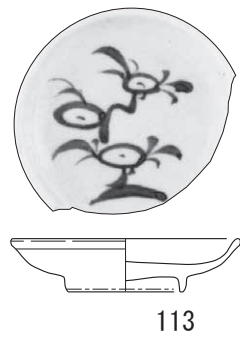
111

10号礫集中

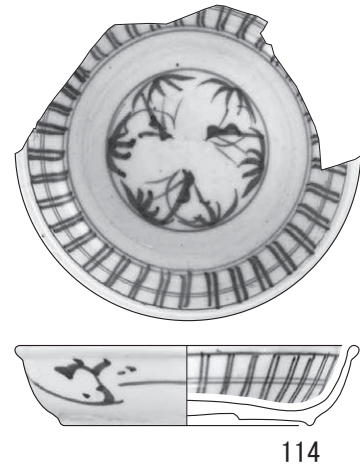
16号土坑



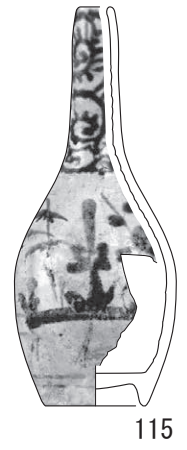
112



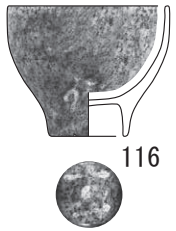
113



114



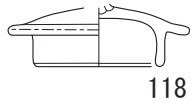
115



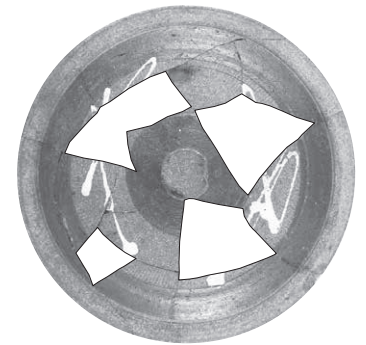
116



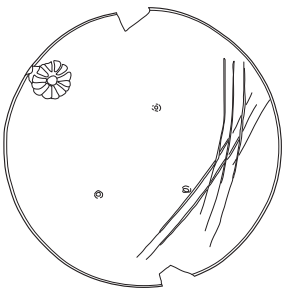
117



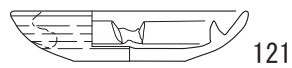
118



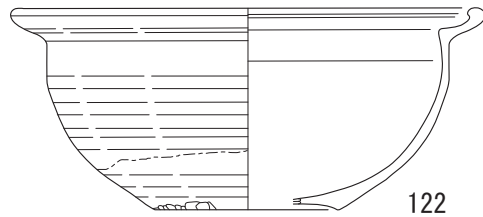
119



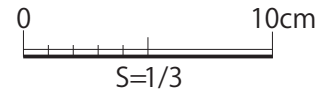
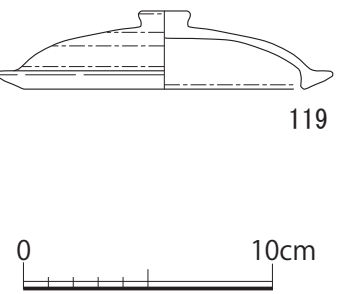
120



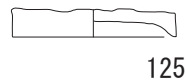
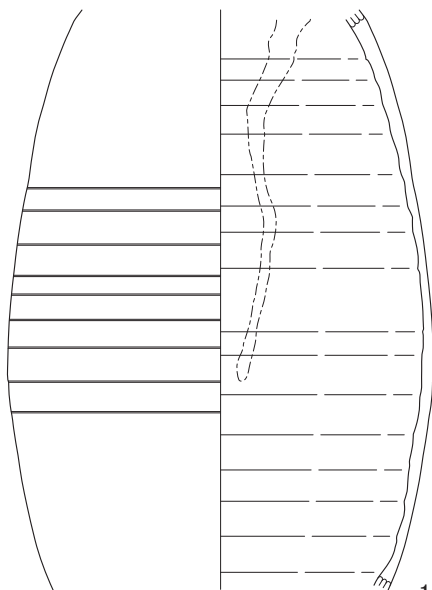
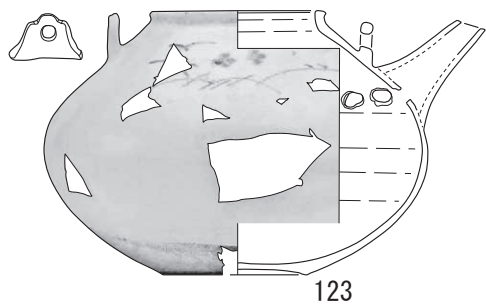
121



122

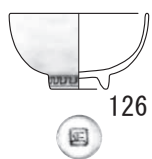
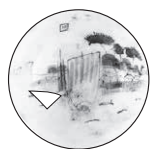


第79图 3面遺構出土陶磁器・土器(2)



16号土坑

124



126



127



128

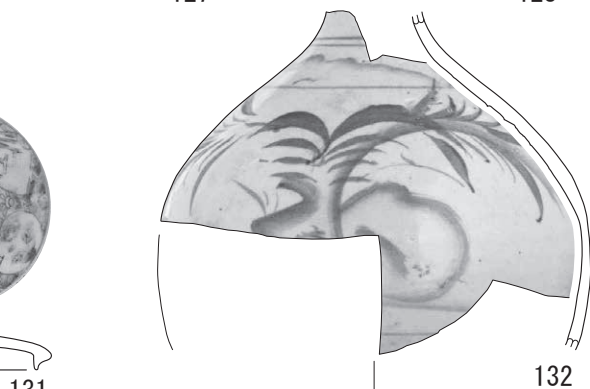
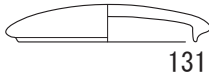
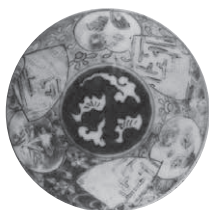


129

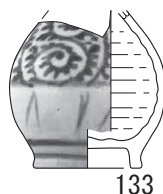


18号土坑

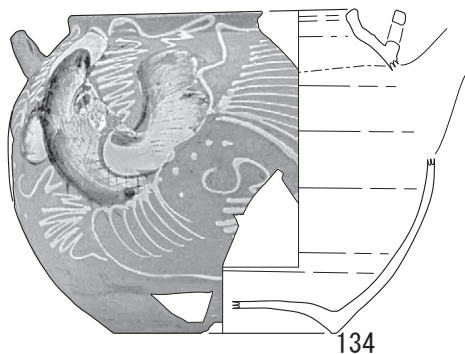
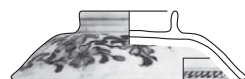
130



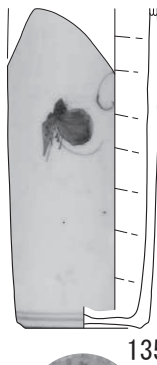
132



133



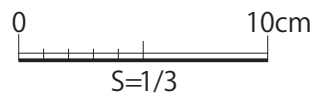
134



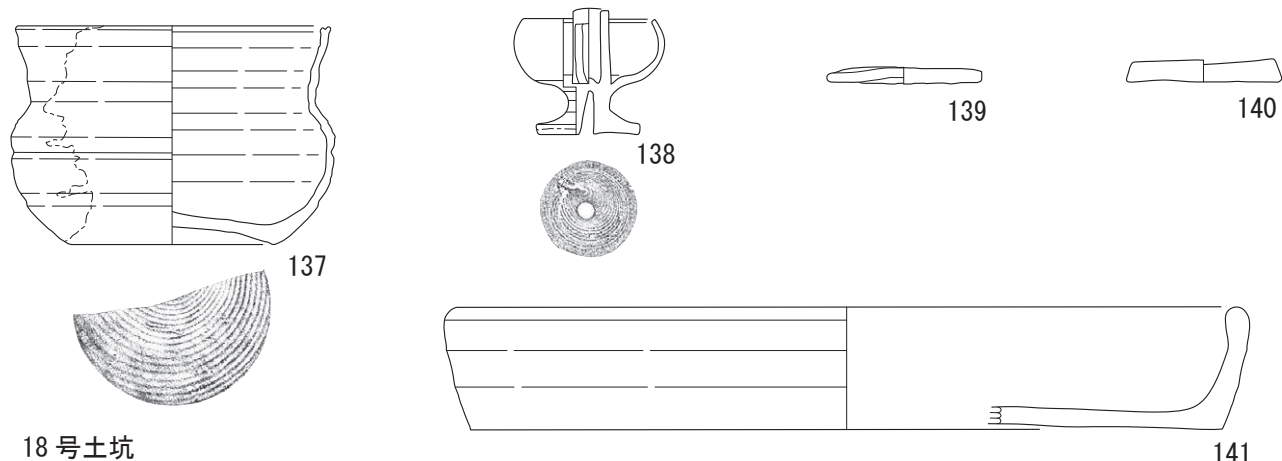
135



136



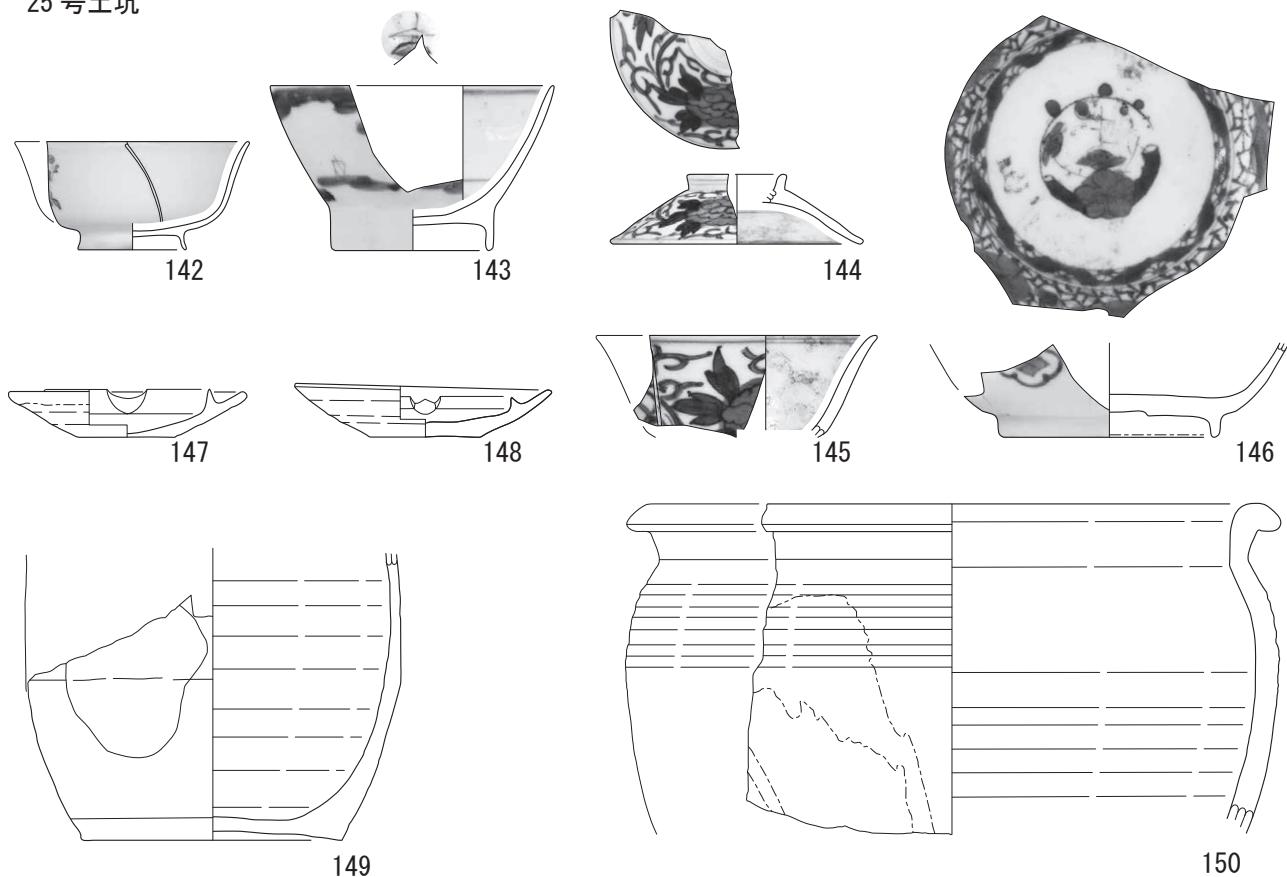
第80图 3面遺構出土陶磁器・土器(3)



18 号土坑

141

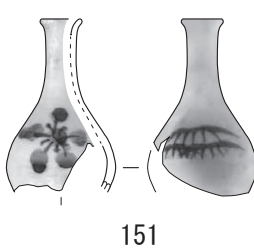
25 号土坑



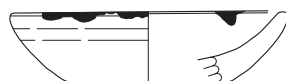
28 号土坑

41 号土坑

42 号土坑



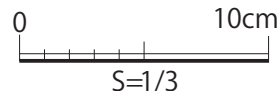
151



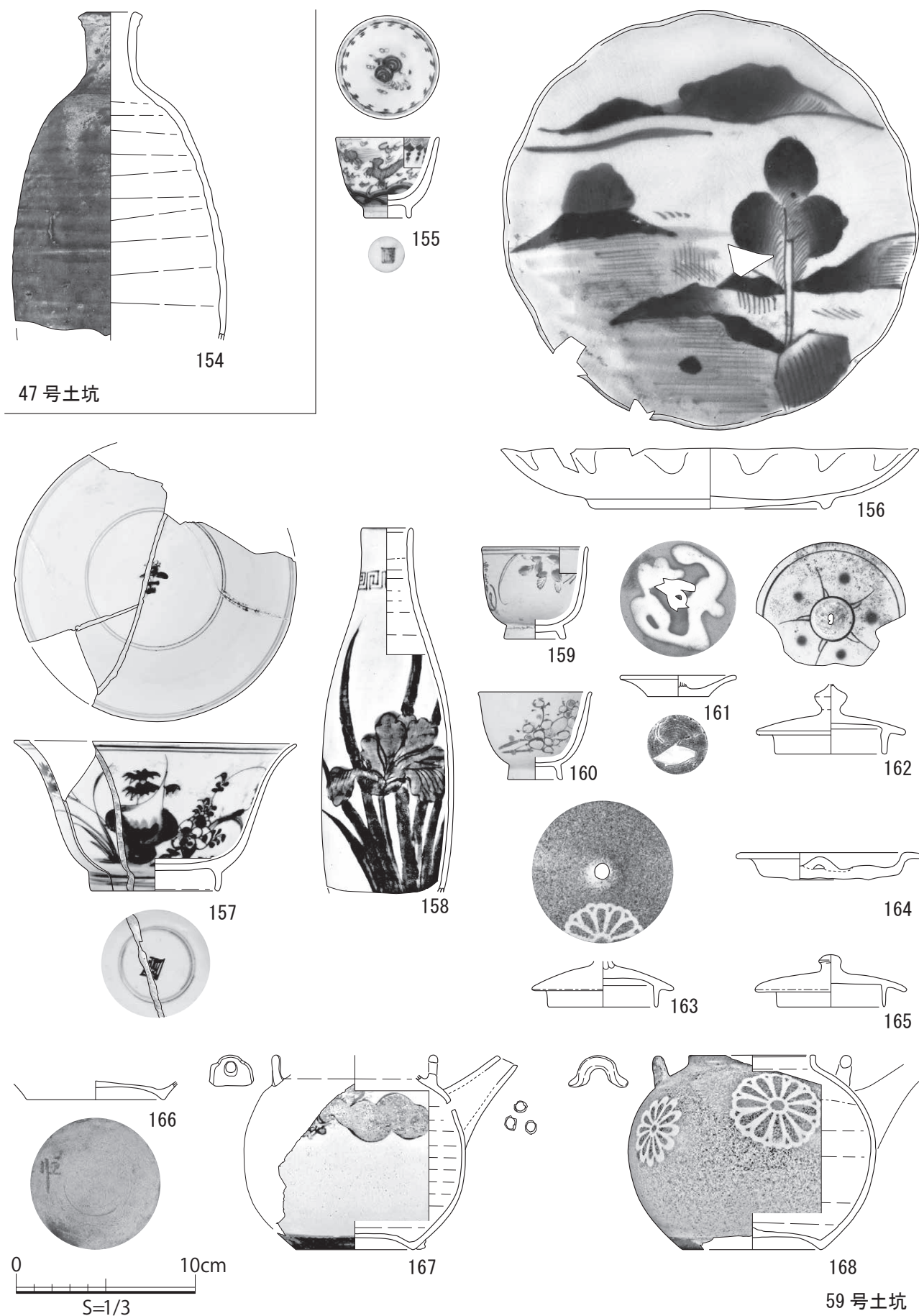
152



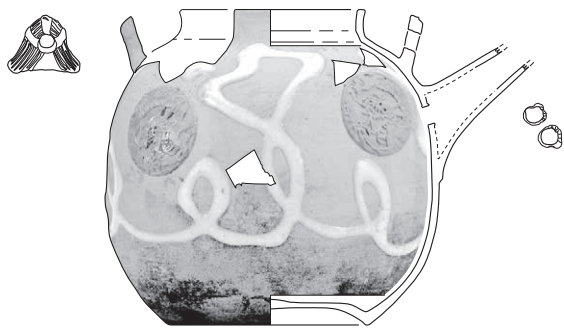
153



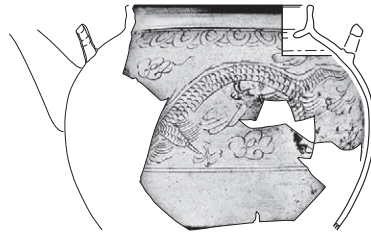
第81图 3面遺構出土陶磁器・土器(4)



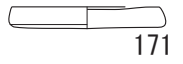
第82图 3面遺構出土陶磁器・土器(5)



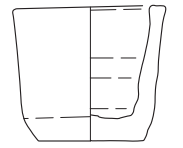
169



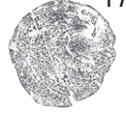
170



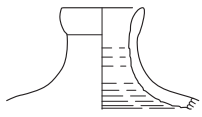
171



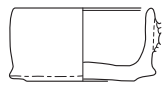
172



59号土坑

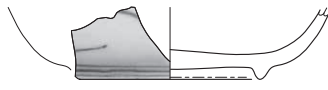
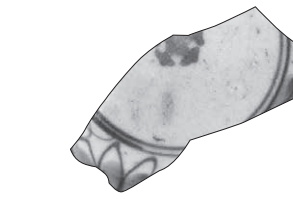


173

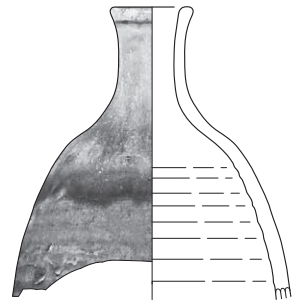


174

60号土坑

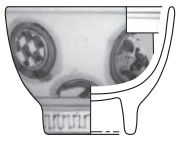


175



176

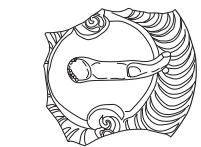
152号土坑



177

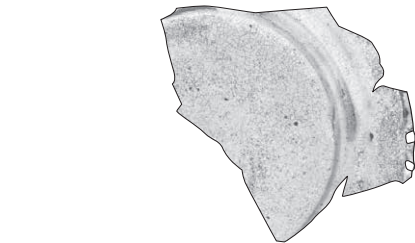


178

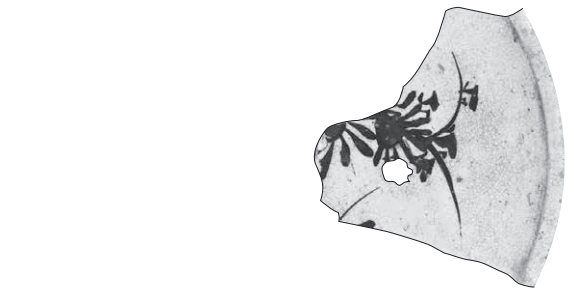


179

156号土坑



180



181

3号沟状遺構



182



183



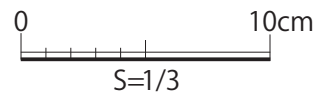
184



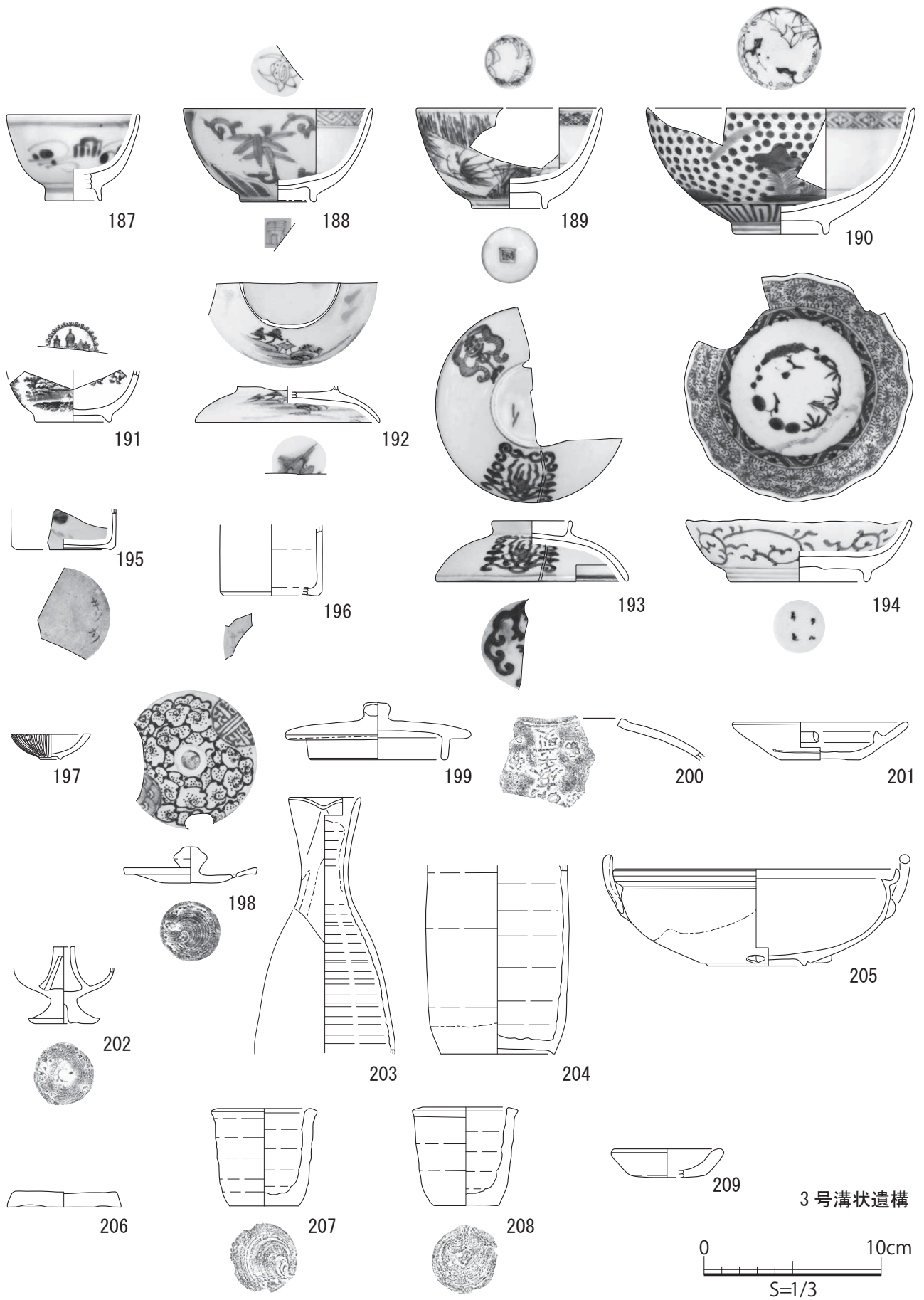
185



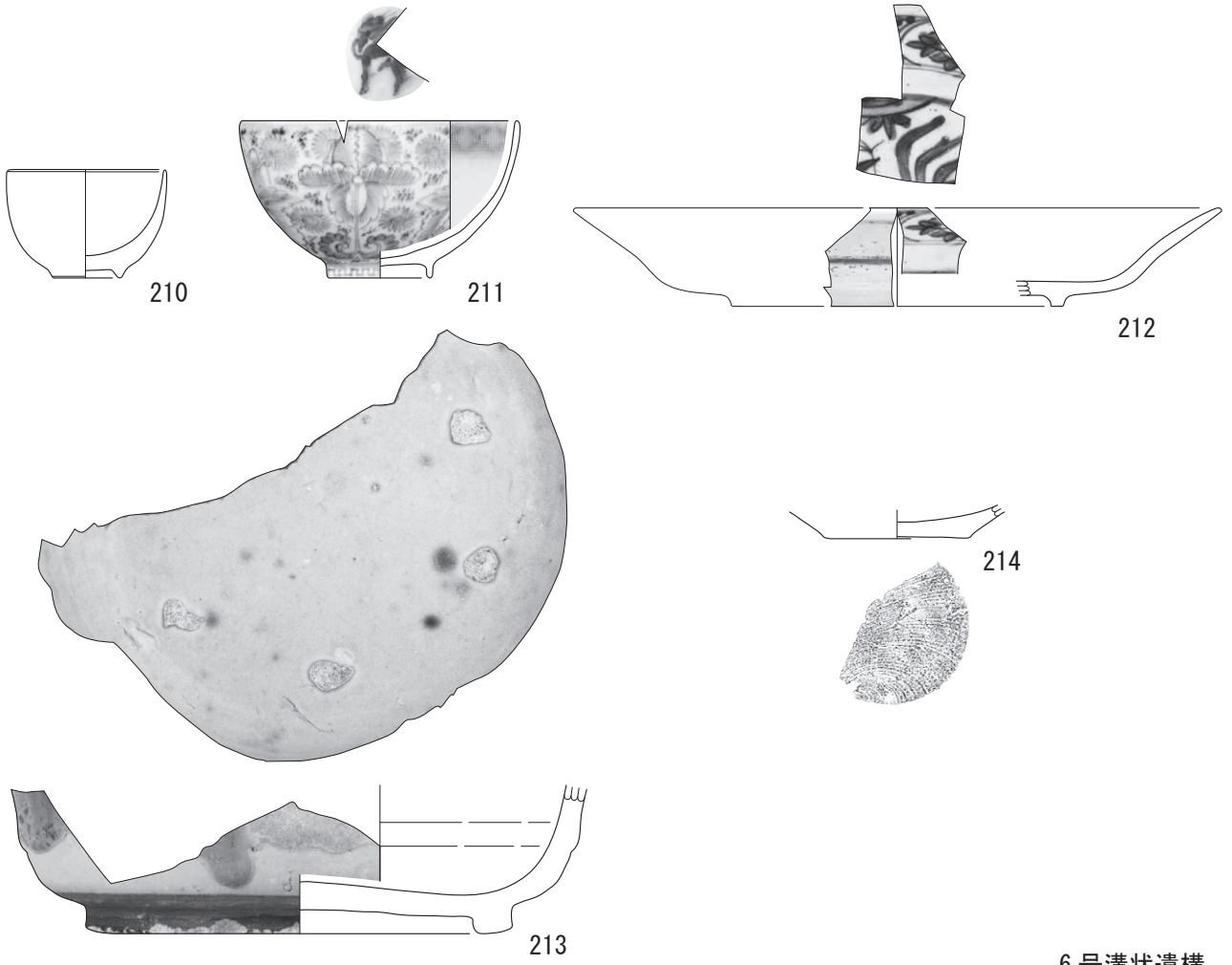
186



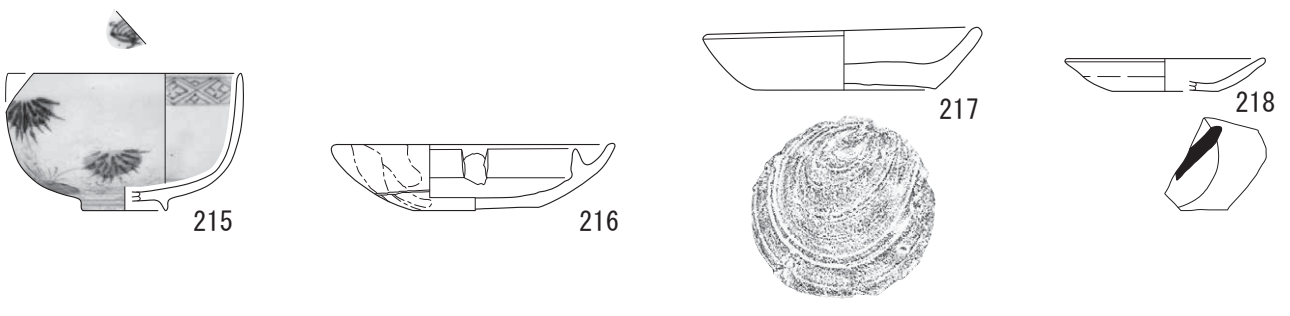
第83图 3面遺構出土陶磁器・土器(6)



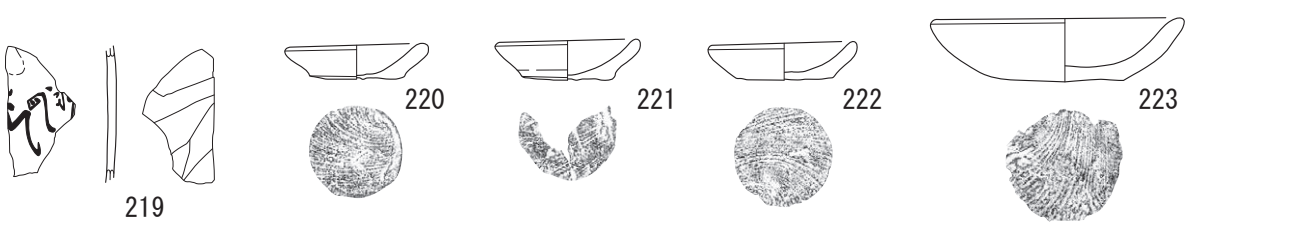
第84图 3面遺構出土陶磁器・土器(7)



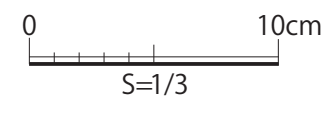
6号溝状遺構



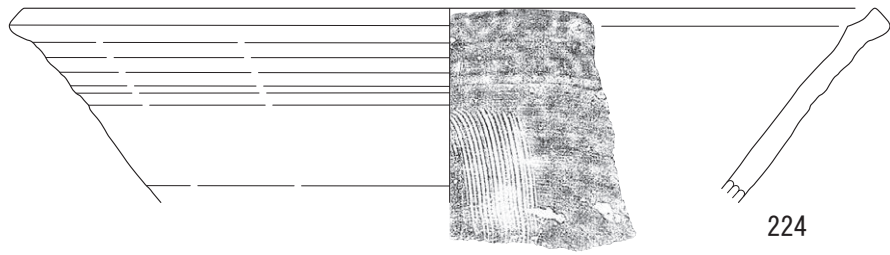
7号溝状遺構



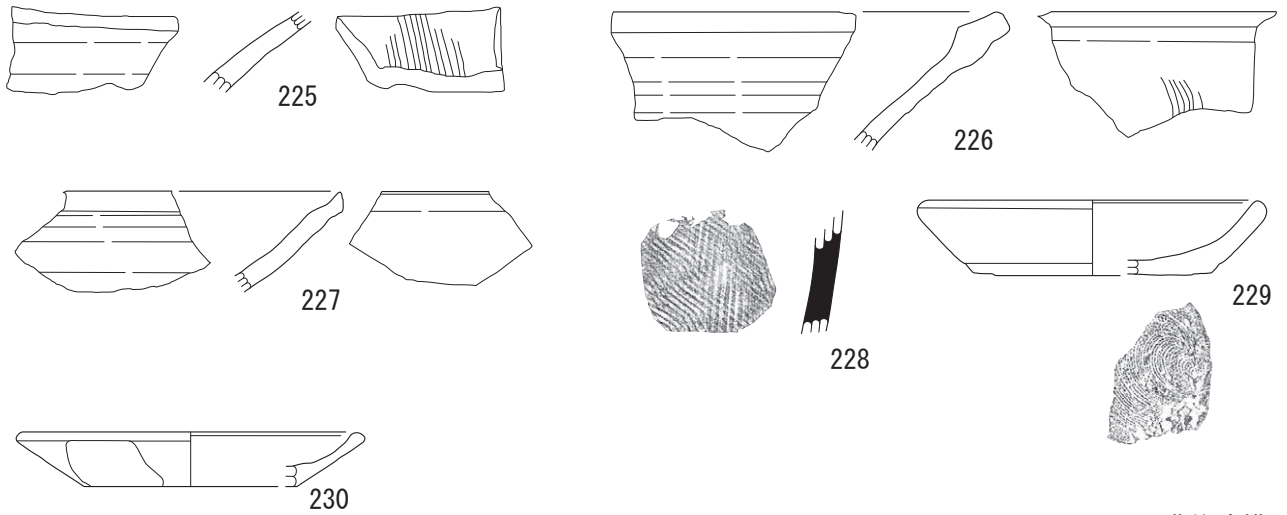
8号溝状遺構



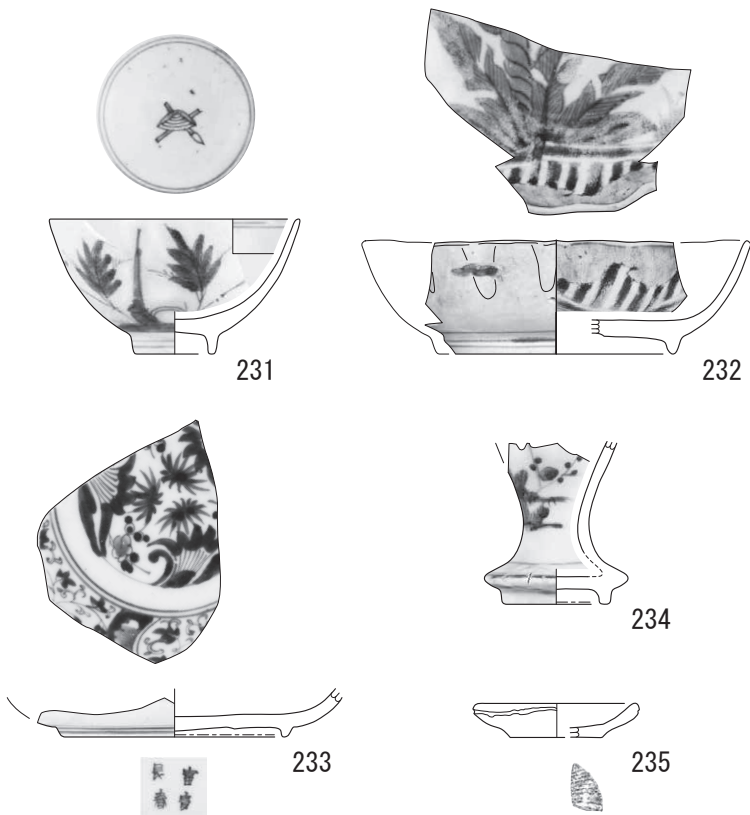
第85図 3面遺構出土陶磁器・土器(8)



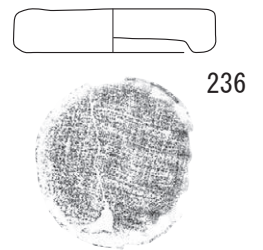
9号溝状遺構



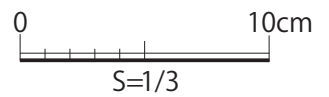
10号溝状遺構



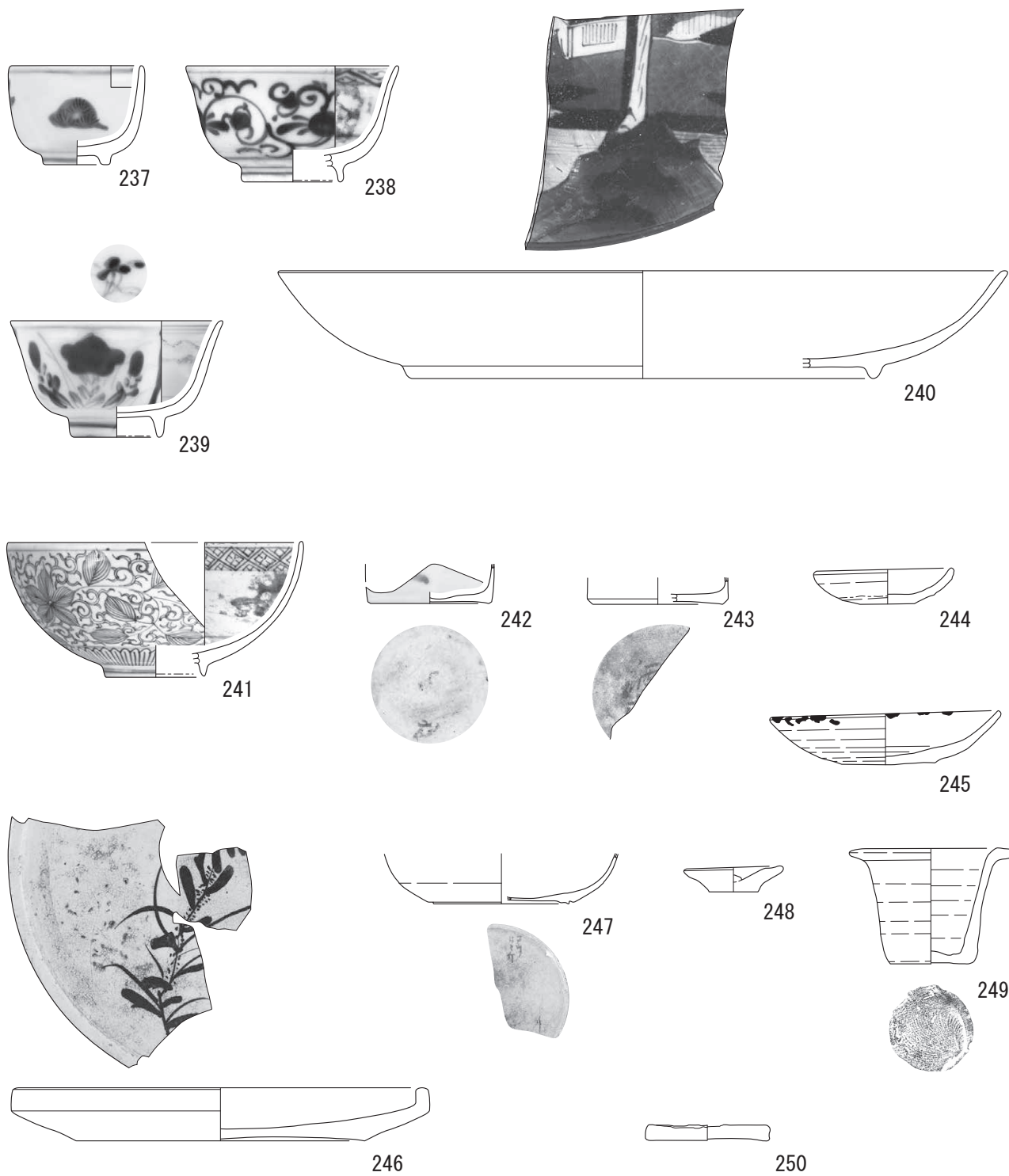
11号溝状遺構



17号溝状遺構

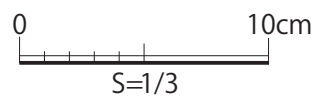


第86图 3面遺構出土陶磁器・土器(9)

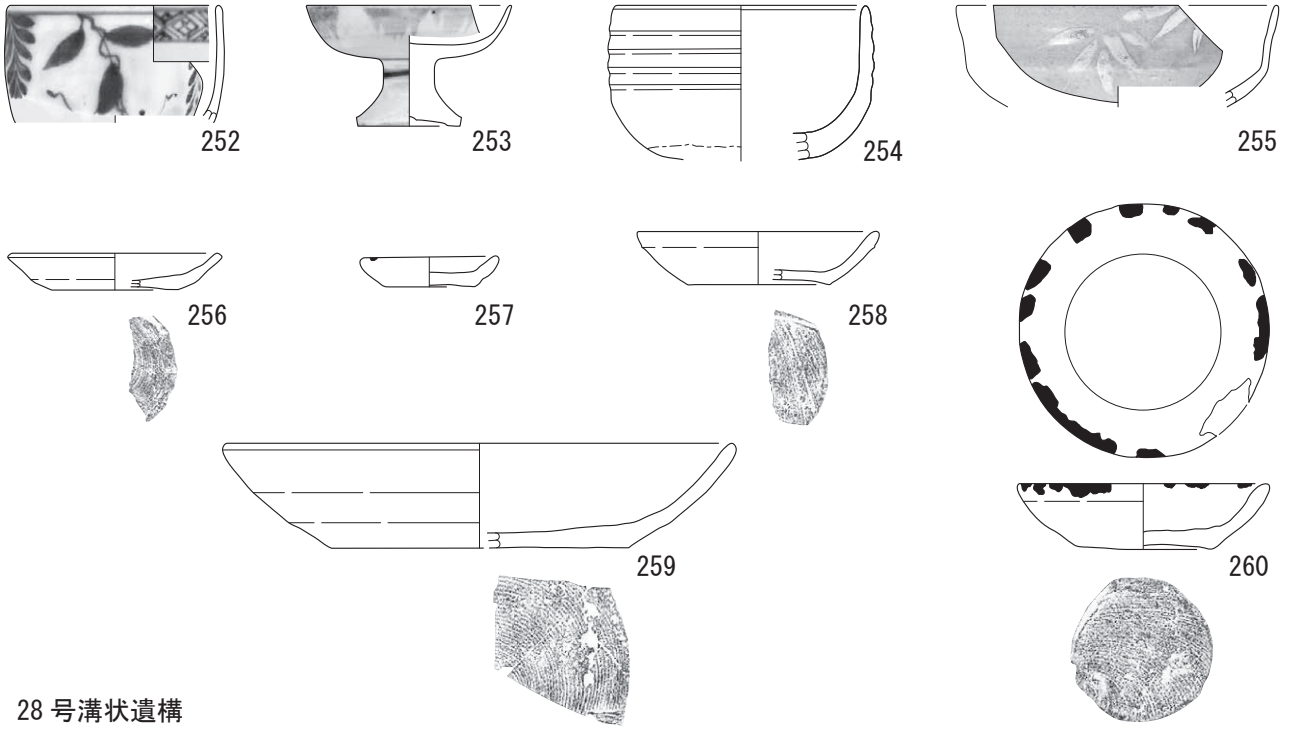


26号沟状遺構

27号沟状遺構

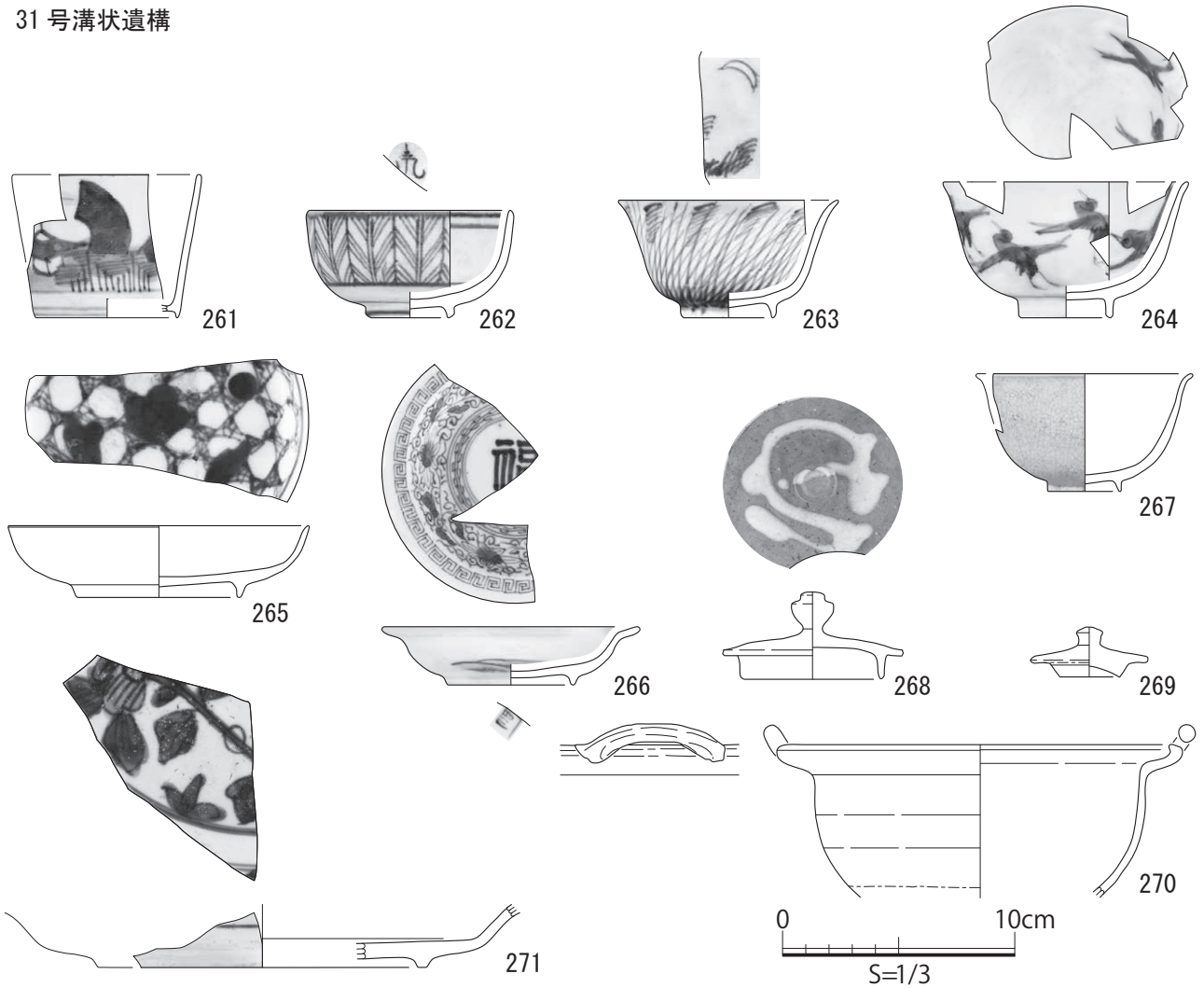


第87图 3面遺構出土陶磁器・土器 (10)

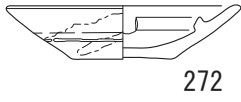


28号溝状遺構

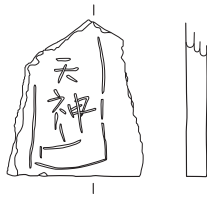
31号溝状遺構



第88図 3面遺構出土陶磁器・土器 (11)

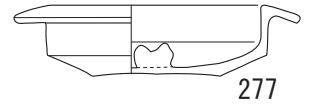
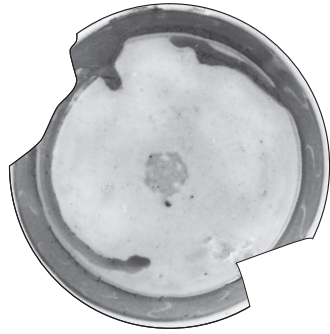


272

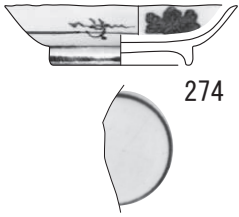


273

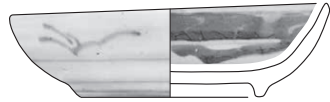
31号溝状遺構



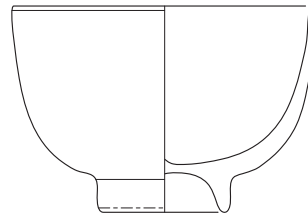
277



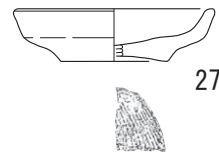
274



275

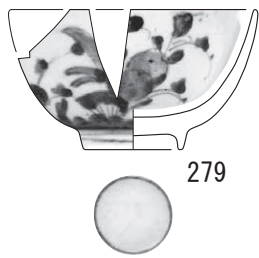


276

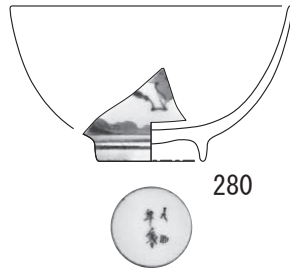


278

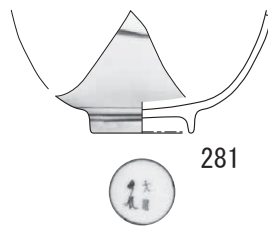
32号溝状遺構



279



280



281

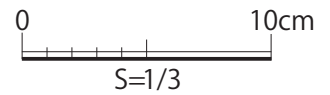


282

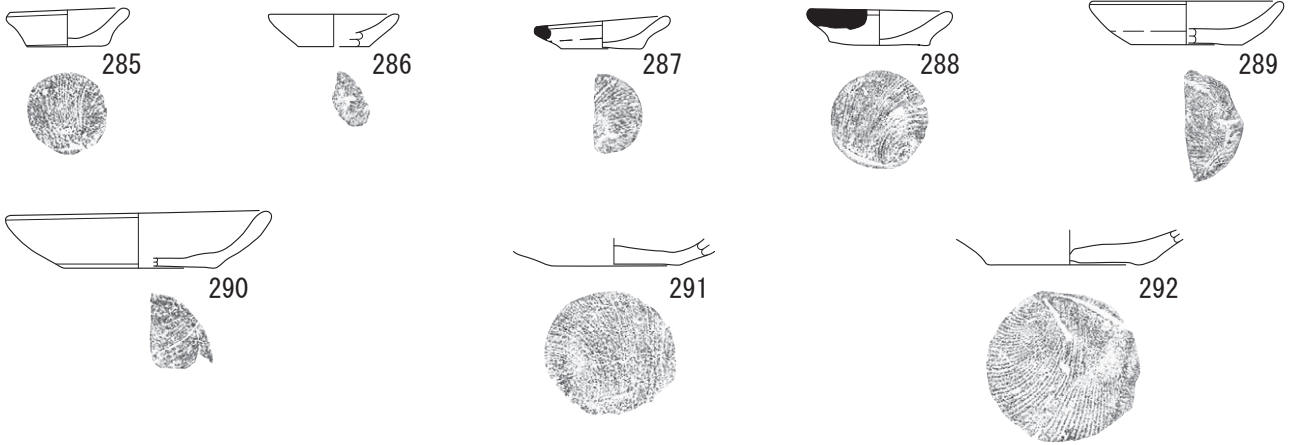
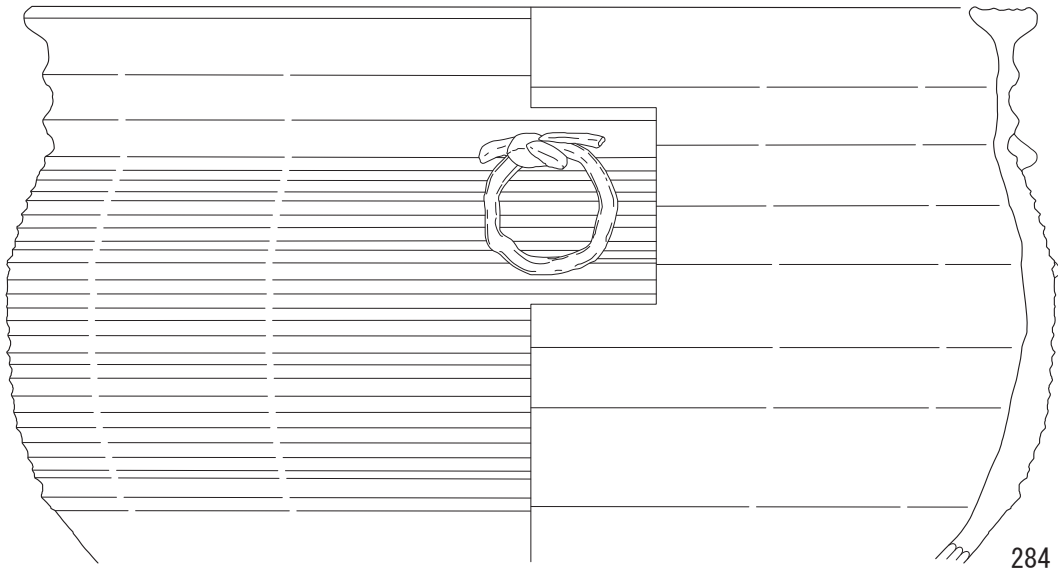
34号溝状遺構



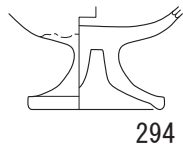
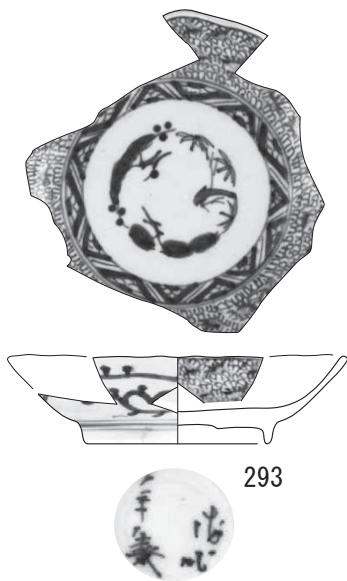
283



第89图 3面遺構出土陶磁器・土器 (12)



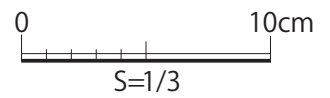
34号溝状遺構



35号溝状遺構



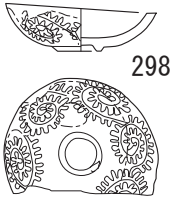
36号溝状遺構



第90图 3面遺構出土陶磁器・土器 (13)



297

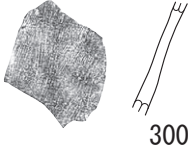


298



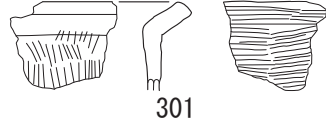
299

38号溝状遺構



300

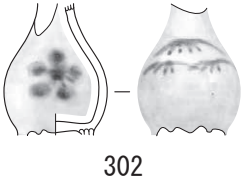
72号土坑



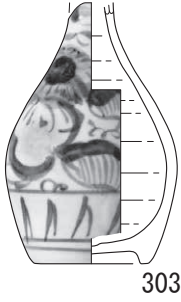
301

74号土坑

78号土坑



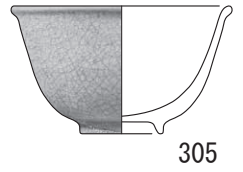
302



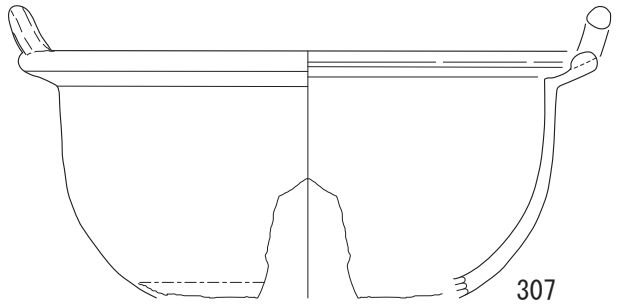
303



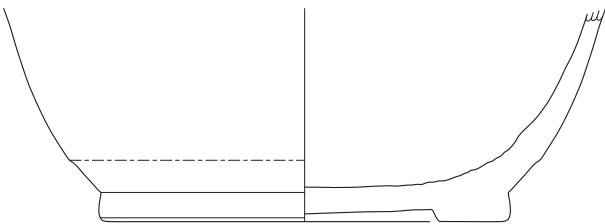
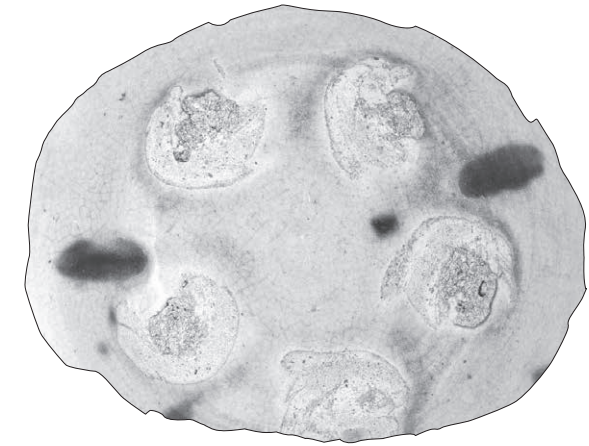
304



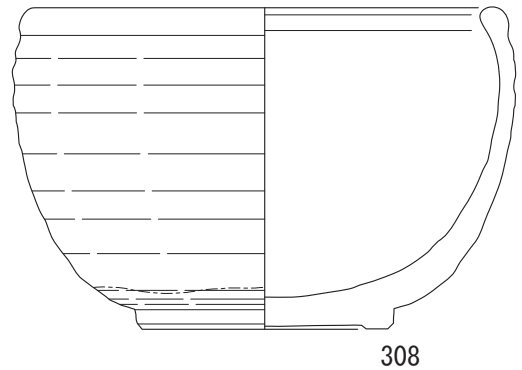
305



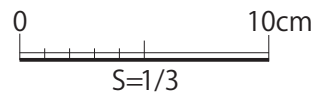
307



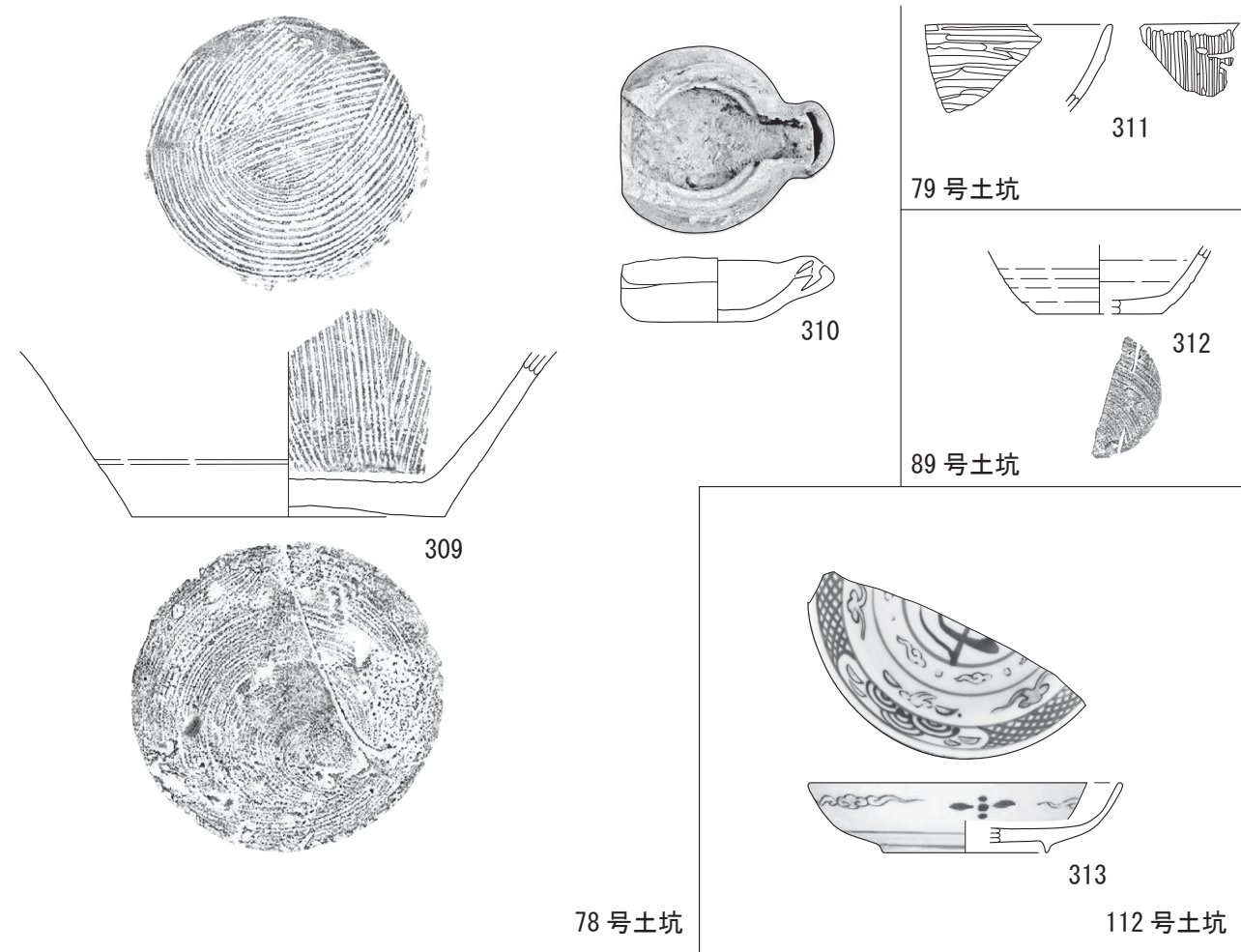
306



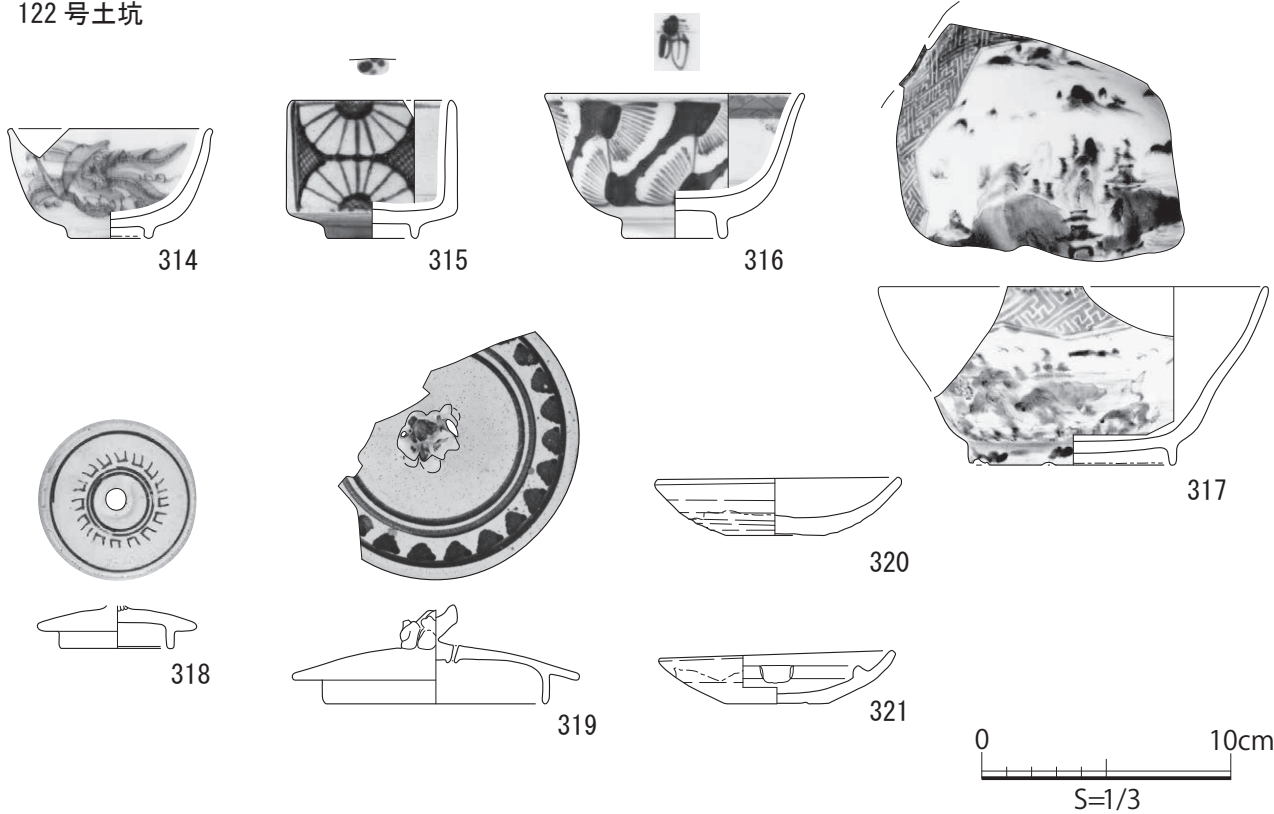
308



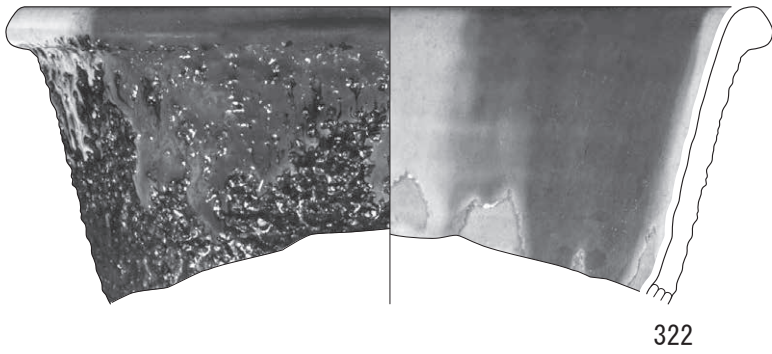
第91图 3·4面遺構出土陶磁器・土器



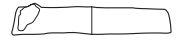
122号土坑



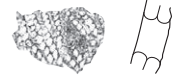
第92图 4面遺構出土陶磁器・土器(1)



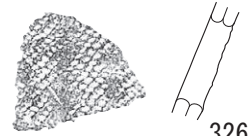
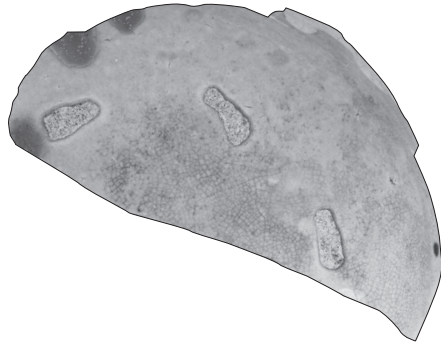
322



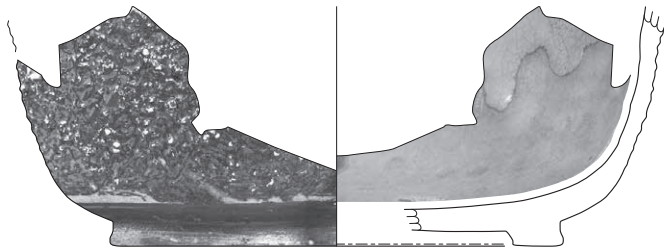
324



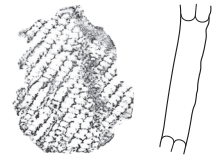
325



326

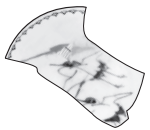


323

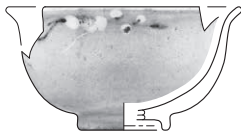


327

122 号土坑



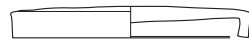
328



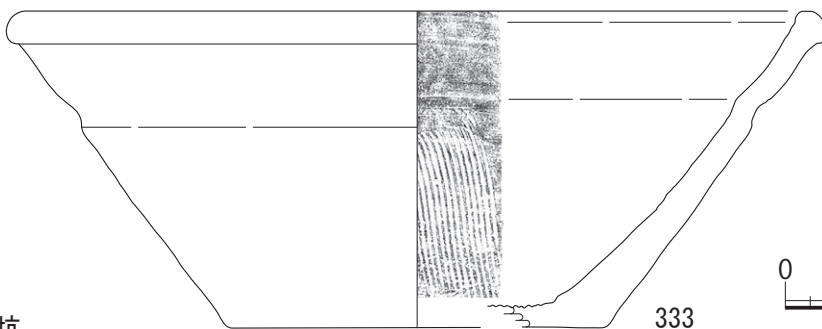
329



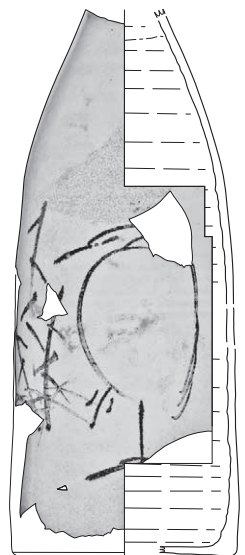
330



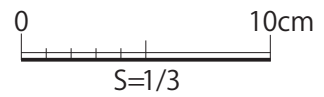
331



333

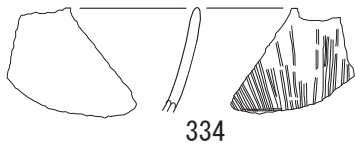


332

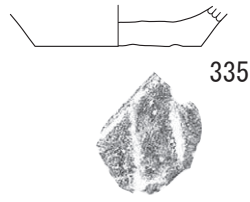


124 号土坑

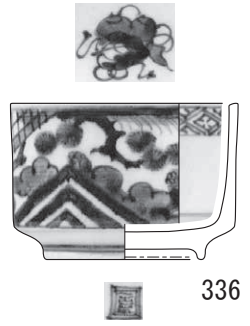
第93图 4面遺構出土陶磁器・土器(2)



334



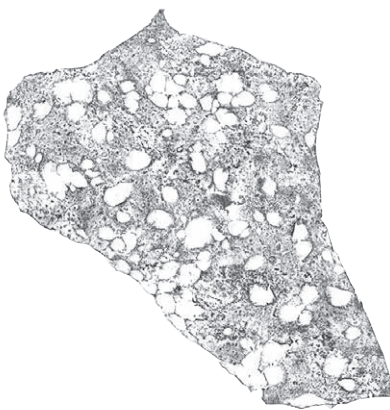
335



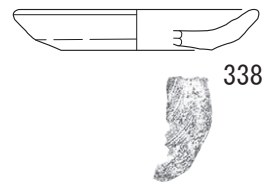
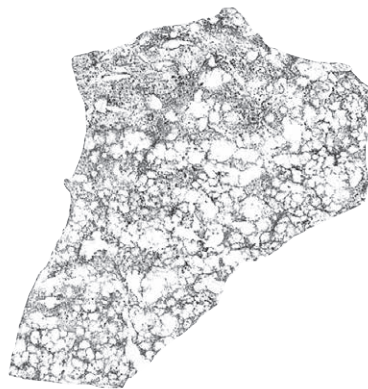
336

134号土坑

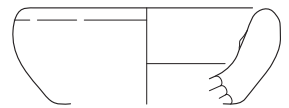
179号土坑



337



338



339

4号溝状遺構

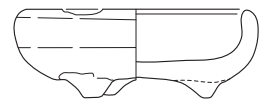
42号溝状遺構



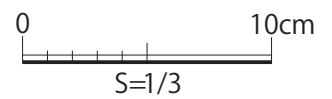
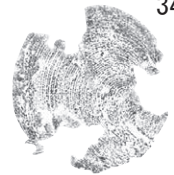
340



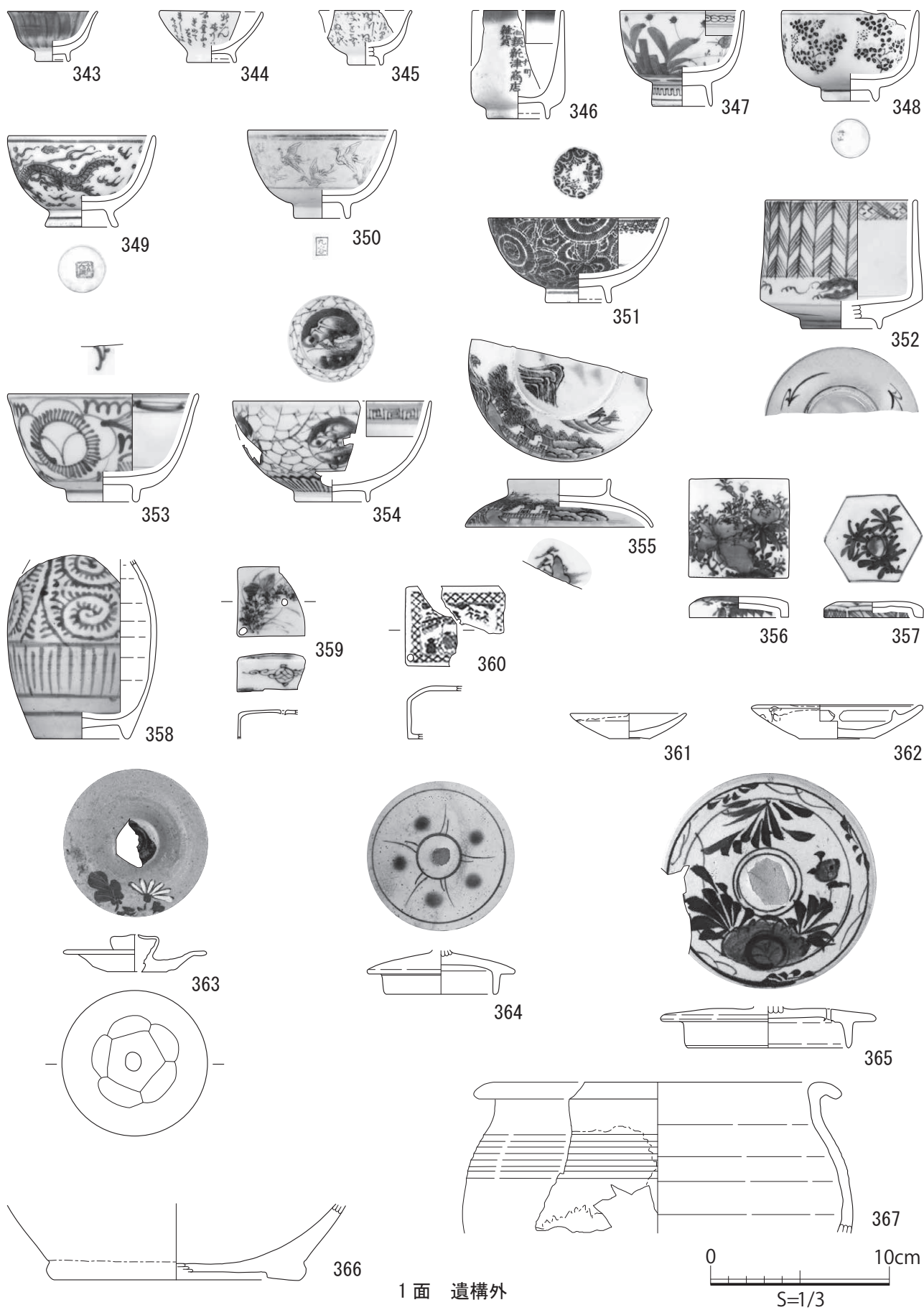
341



342



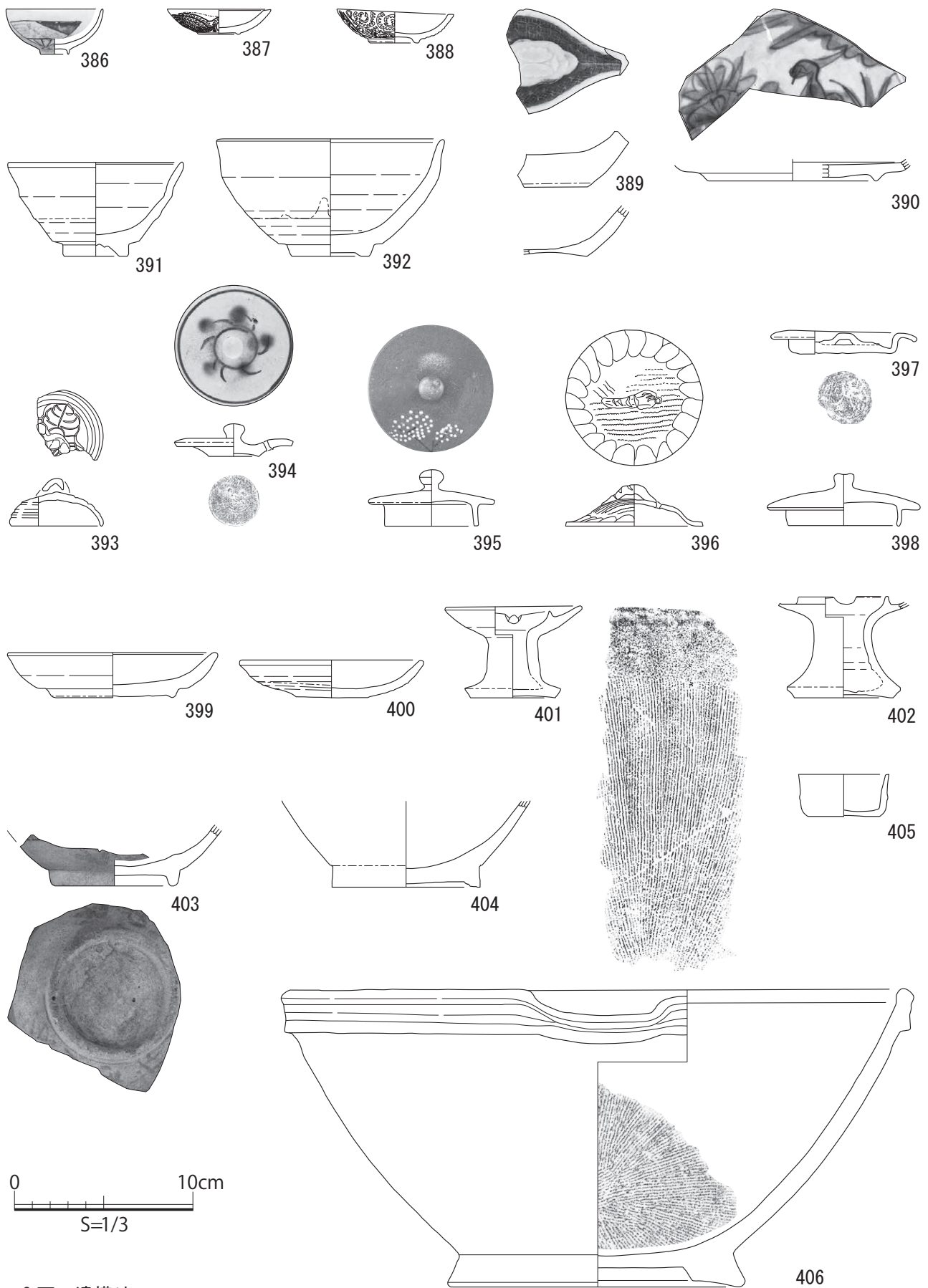
第94图 4面遺構出土陶磁器・土器(3)



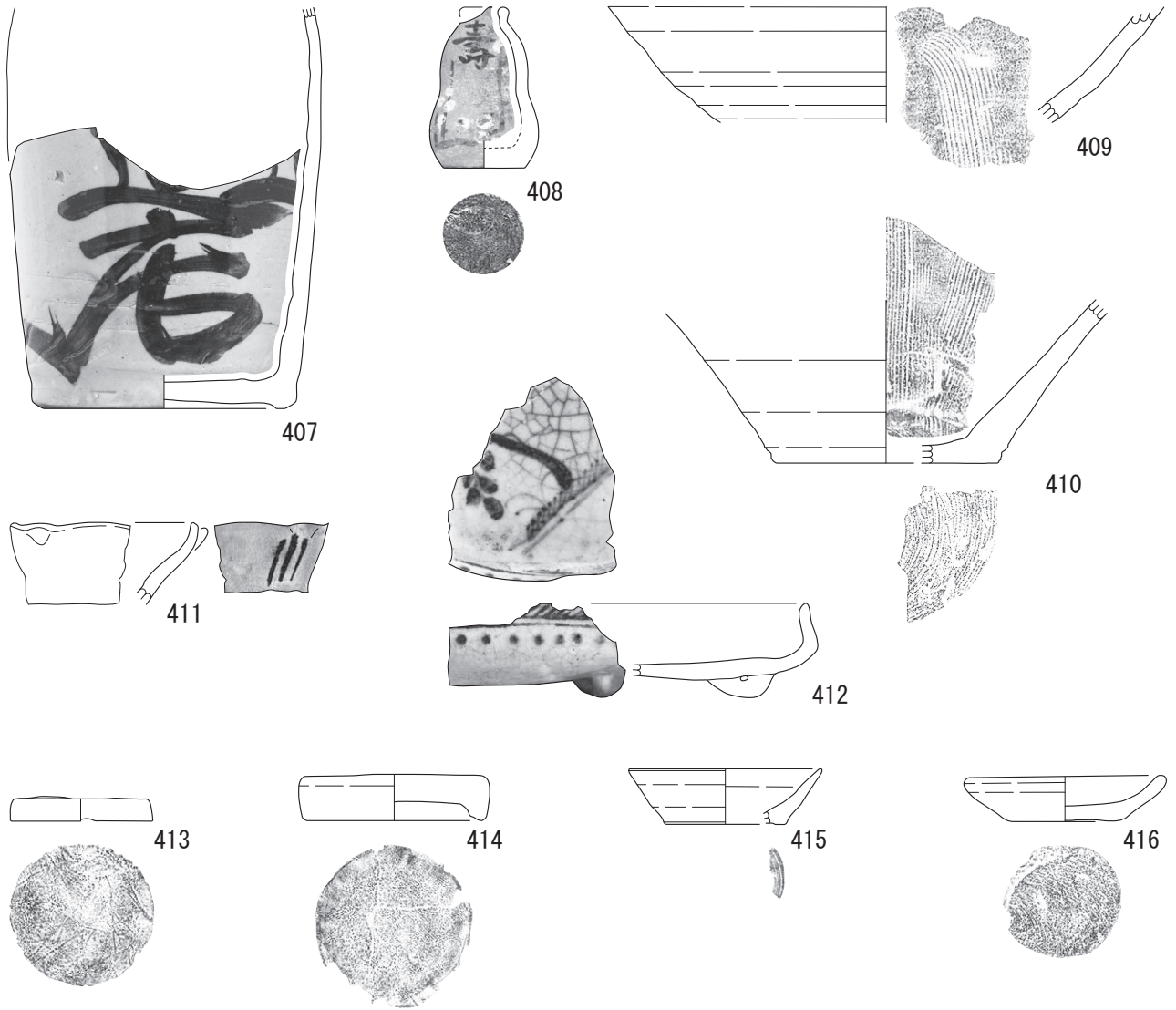
第95圖 遺構外出土陶磁器・土器（1）



第96図 遺構外出土陶磁器・土器（2）

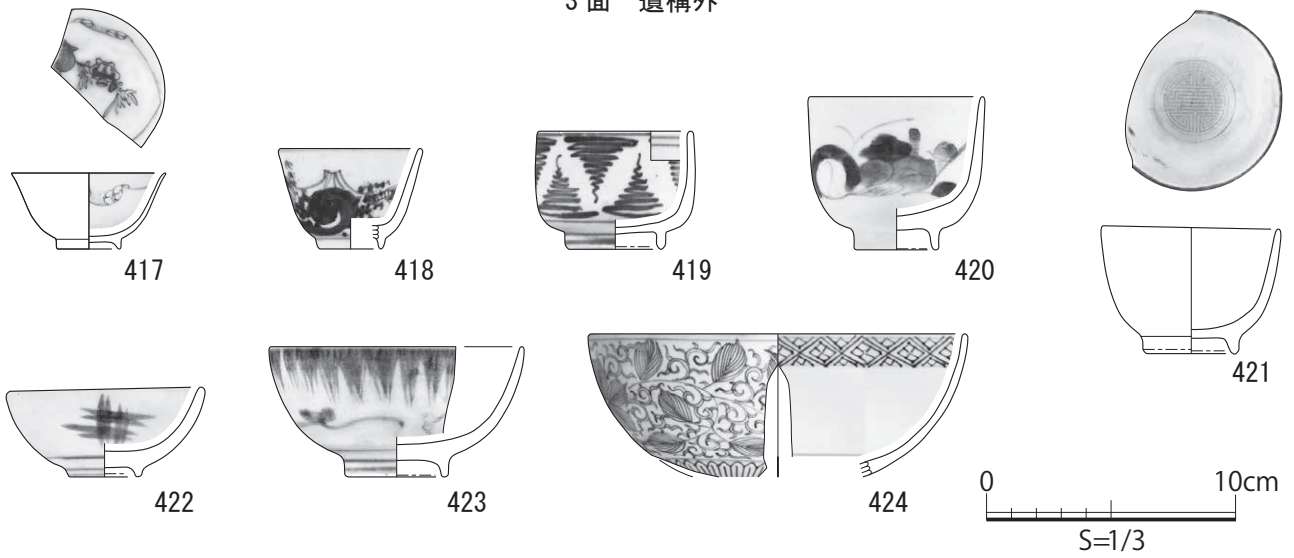


第97図 遺構外出土陶磁器・土器 (3)

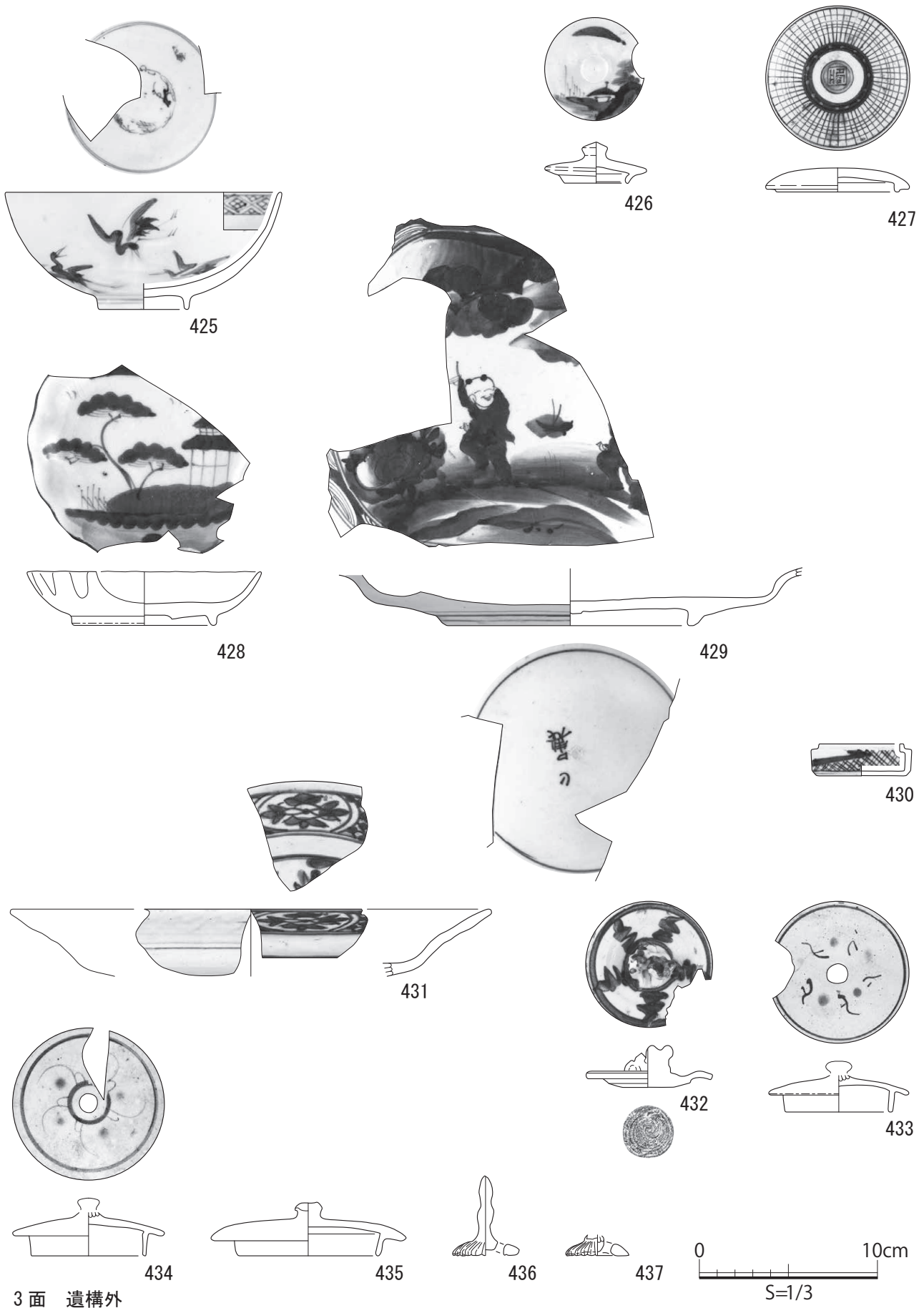


2面 遺構外

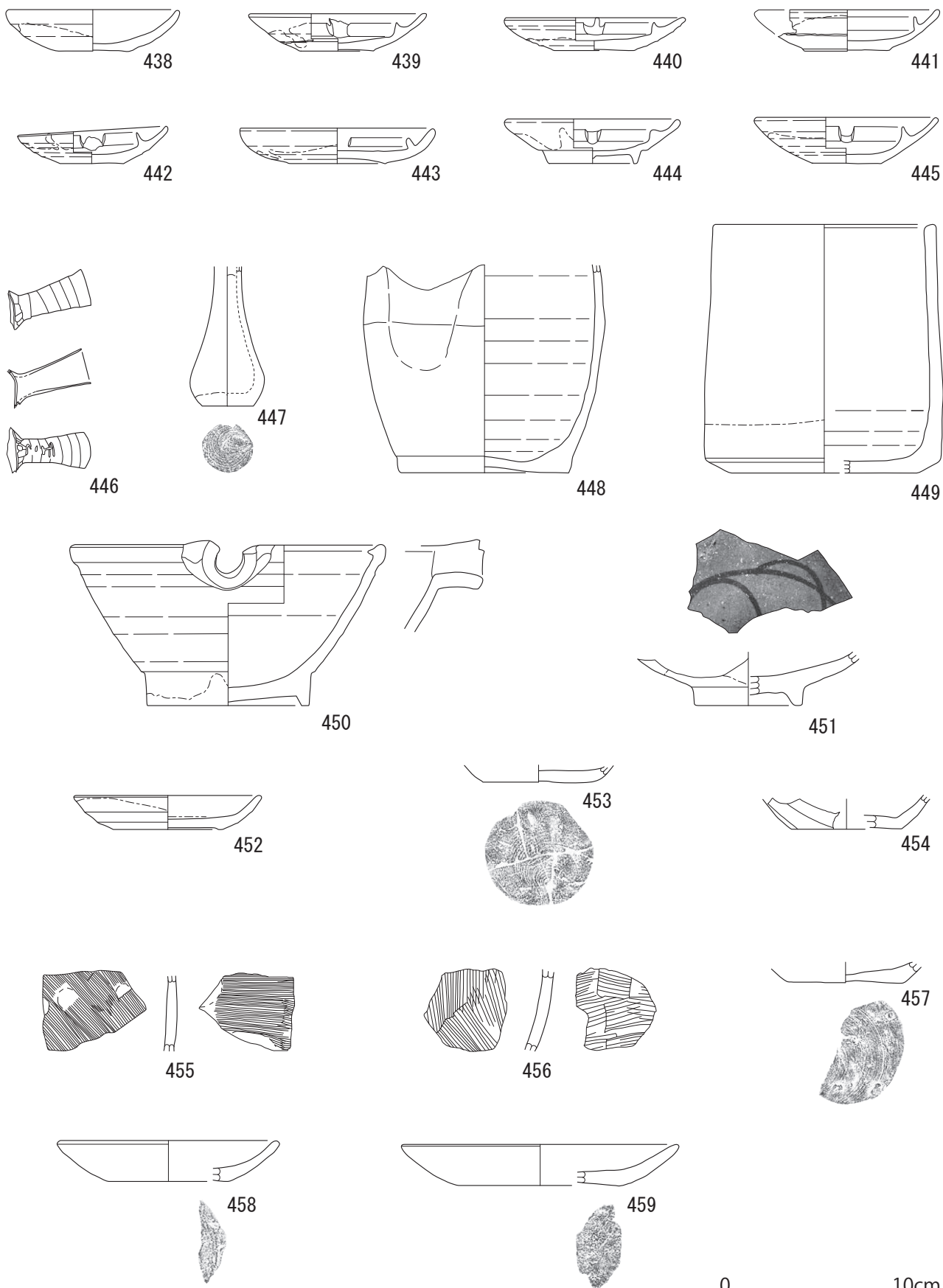
3面 遺構外



第98図 遺構外出土陶磁器・土器（4）

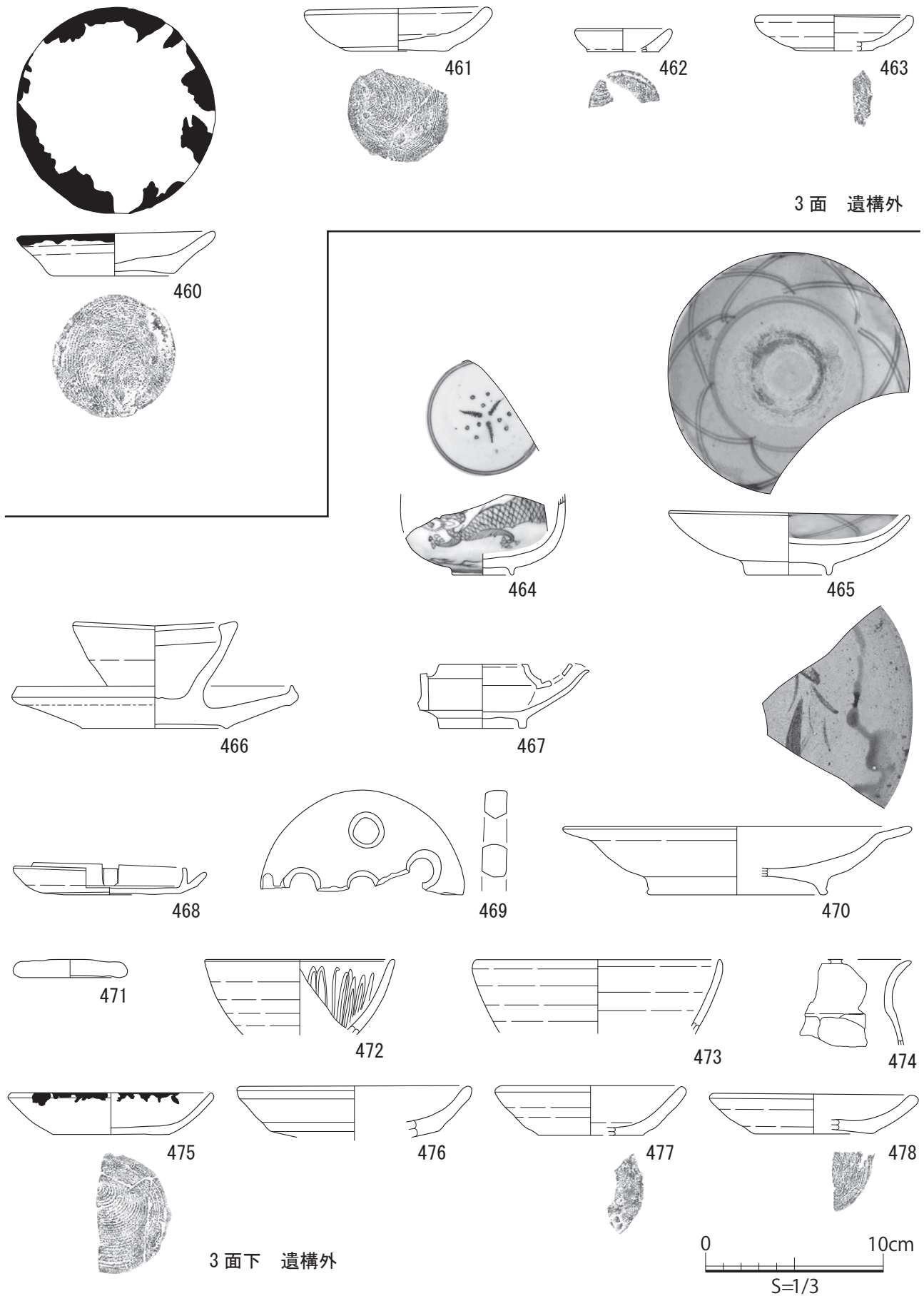


第99図 遺構外出土陶磁器・土器（5）



3面 遺構外

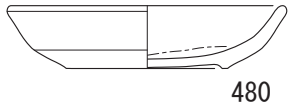
第100図 遺構外出土陶磁器・土器 (6)



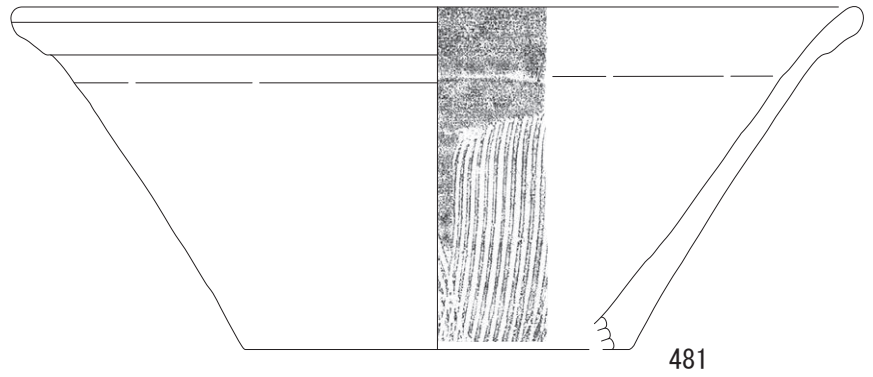
第101図 遺構外出土陶磁器・土器（7）



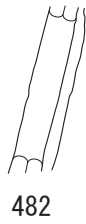
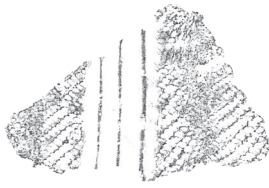
479



480



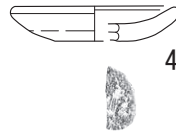
481



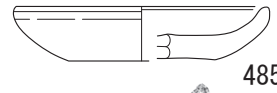
482



483



484



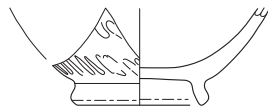
485



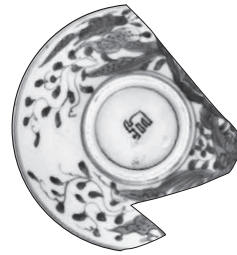
4面 遺構外



486



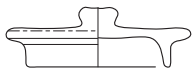
487



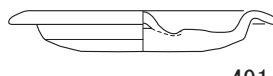
488



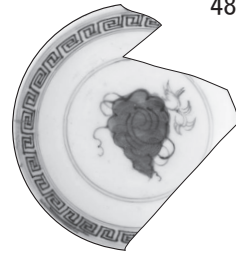
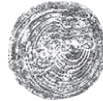
489



490



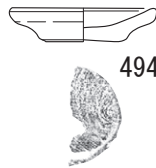
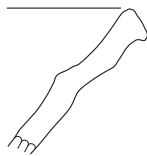
491



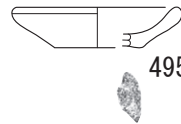
492



493

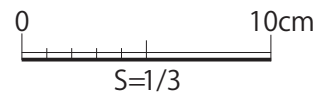


494

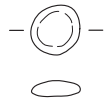


495

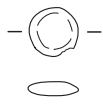
調査区一括



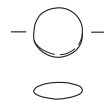
第102図 遺構外等出土陶磁器・土器



496 (1/3)



497 (1/3)

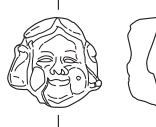


498 (1/3)

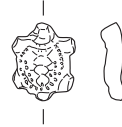
20号溝状遺構



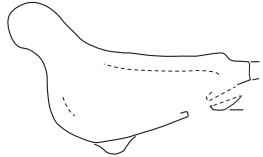
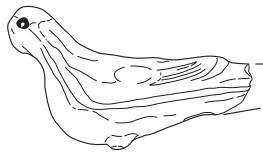
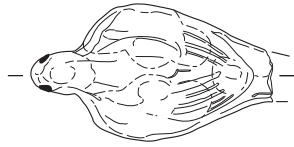
499 (1/2)



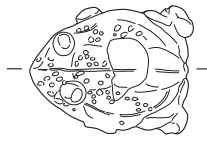
500 (1/2)



501 (1/2)



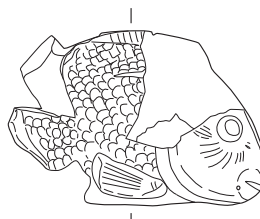
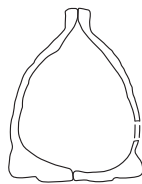
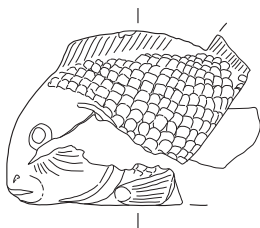
502 (1/2)



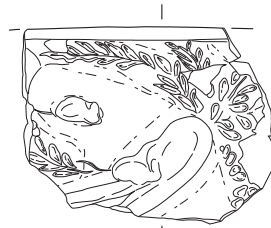
503 (1/2)



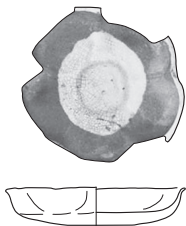
504 (1/2)



505 (1/2)



506 (1/2)



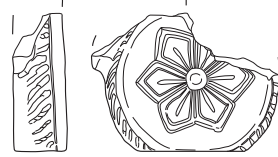
507 (1/2)



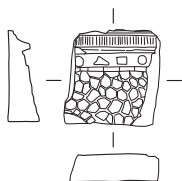
508 (1/2)



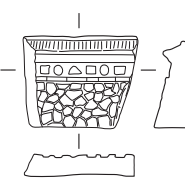
509 (1/2)



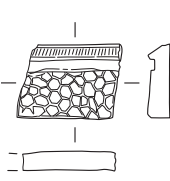
510 (1/2)



511 (1/2)



512 (1/2)



513 (1/2)



514 (1/3)



515 (1/3)



22号溝状遺構

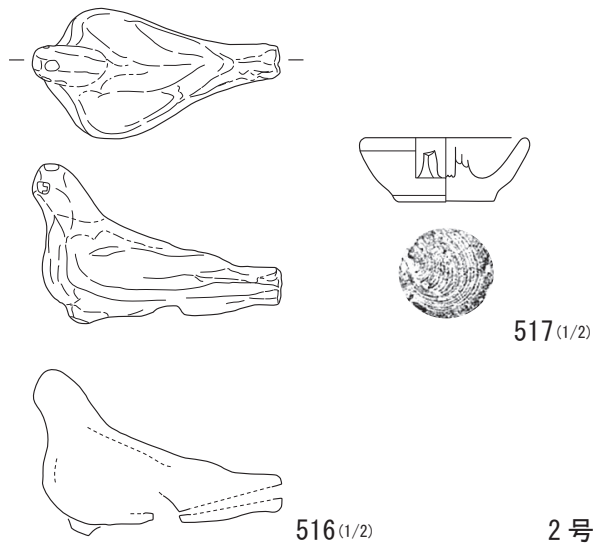


S=1/3

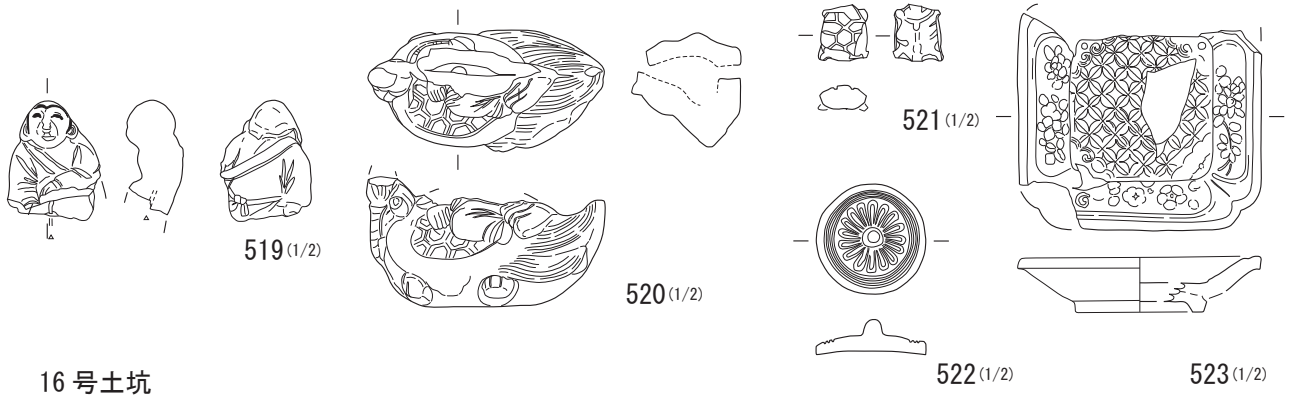
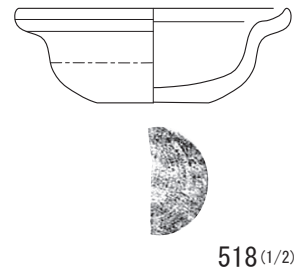


S=1/2

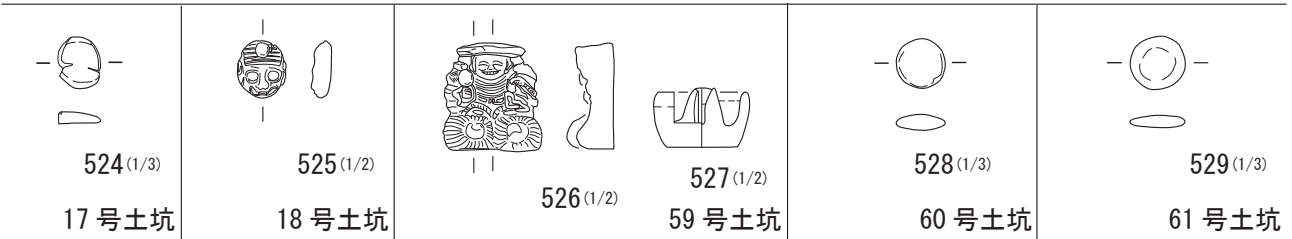
第103図 遺構出土土製品 (1)



2号石組



16号土坑



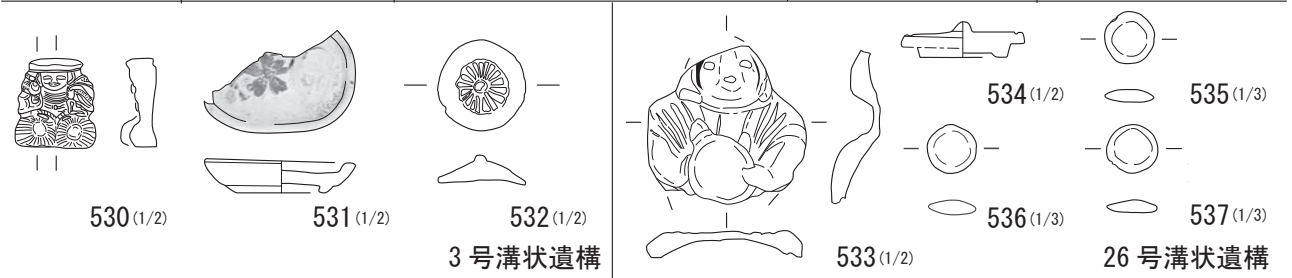
17号土坑

18号土坑

59号土坑

60号土坑

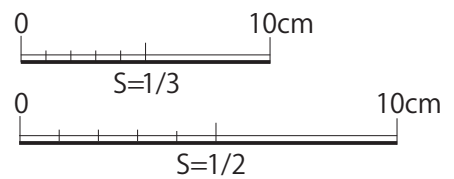
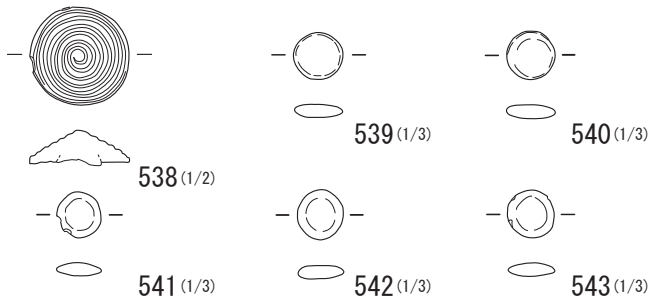
61号土坑



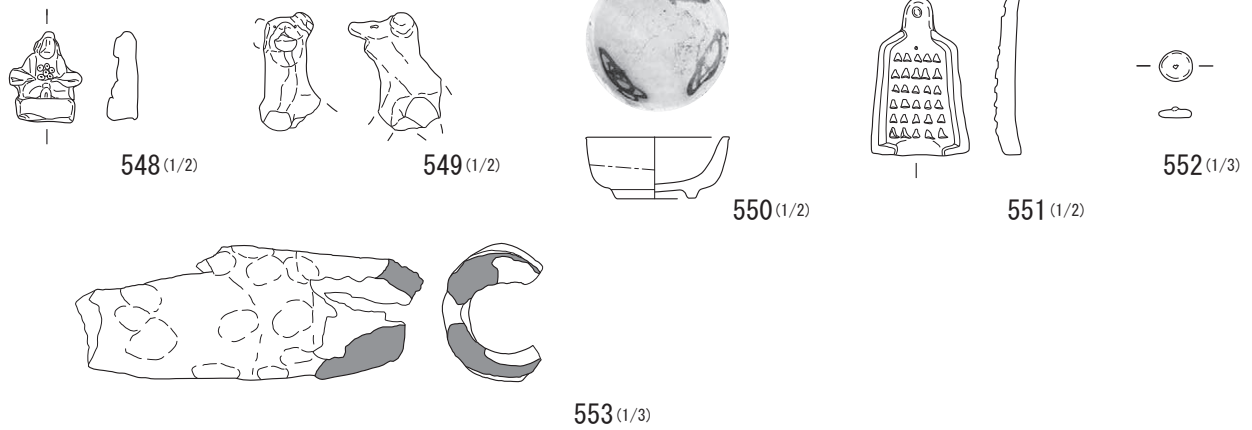
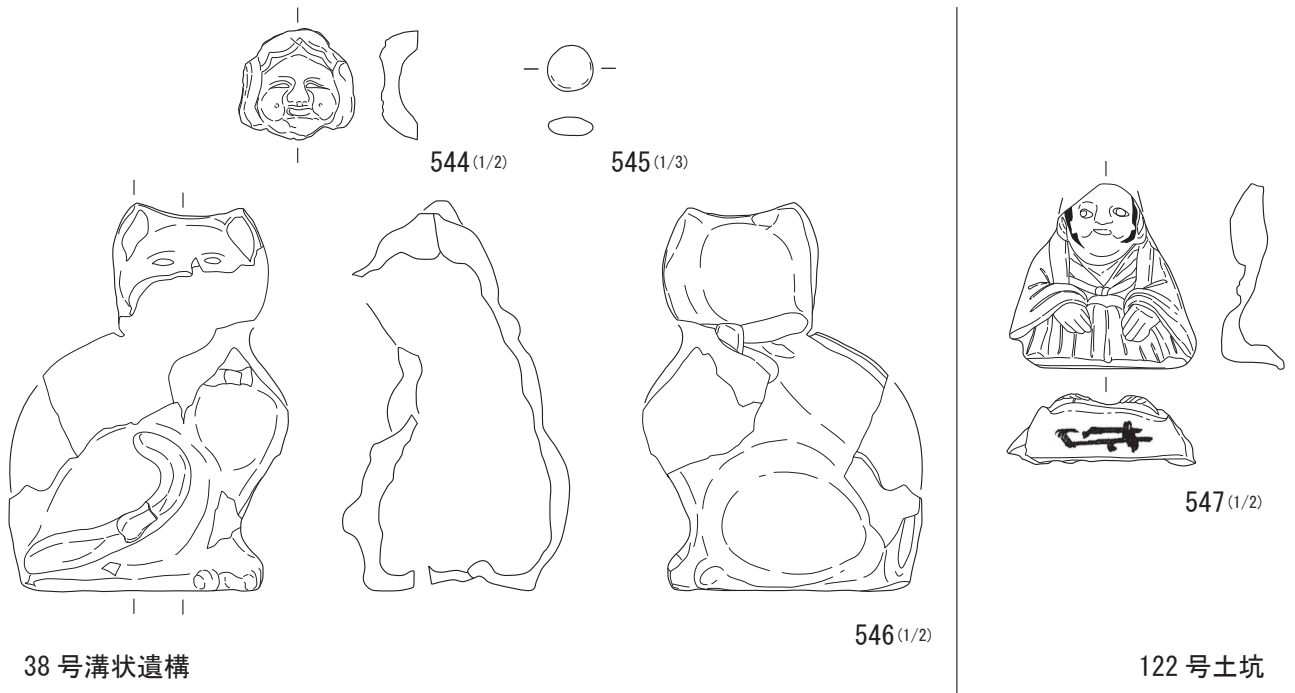
3号溝状遺構

26号溝状遺構

31号溝状遺構

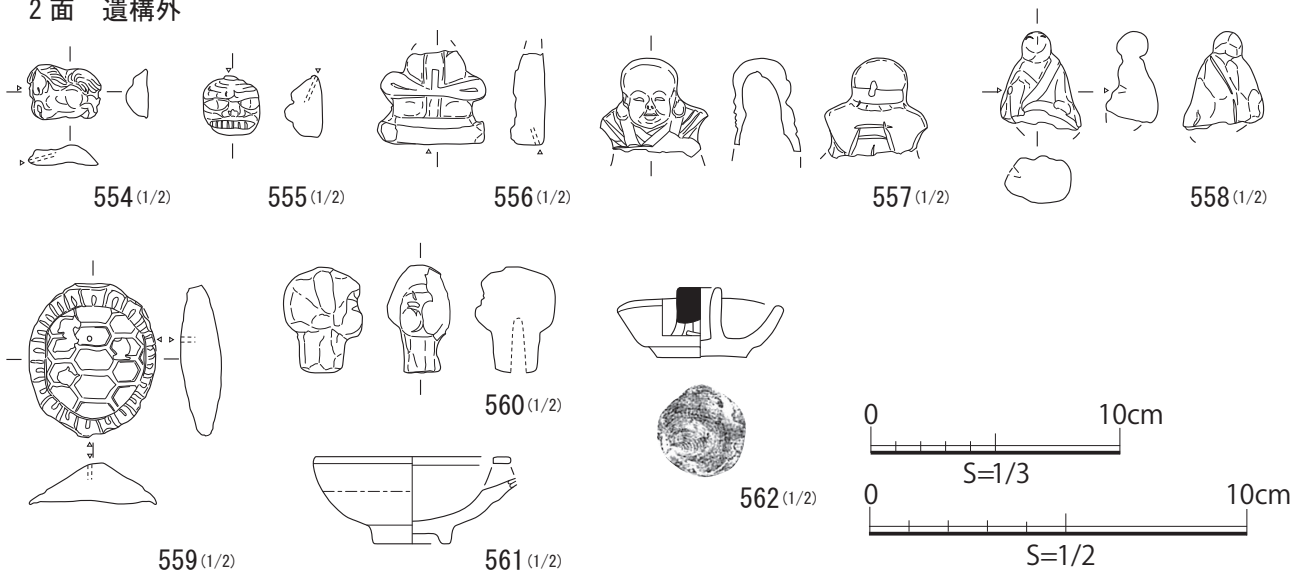


第104图 遺構出土土製品 (2)

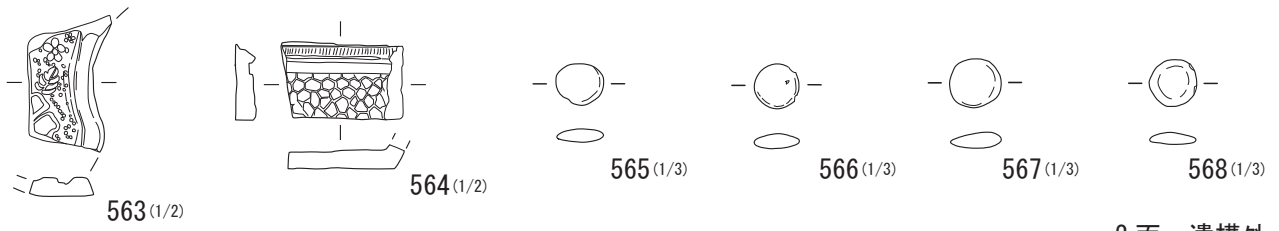


1面 遺構外

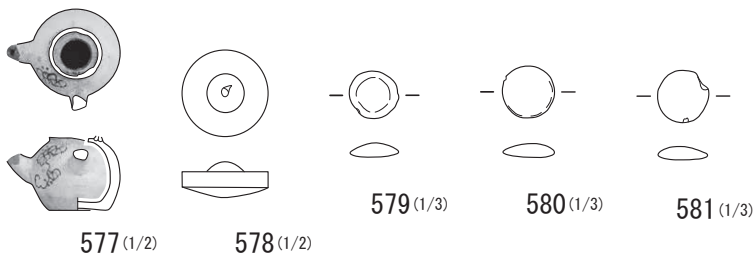
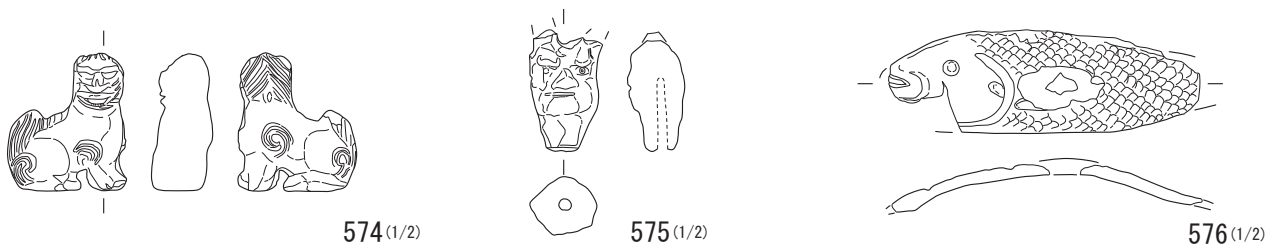
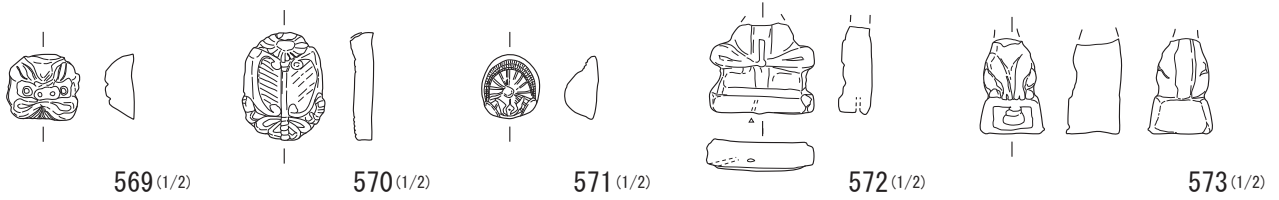
2面 遺構外



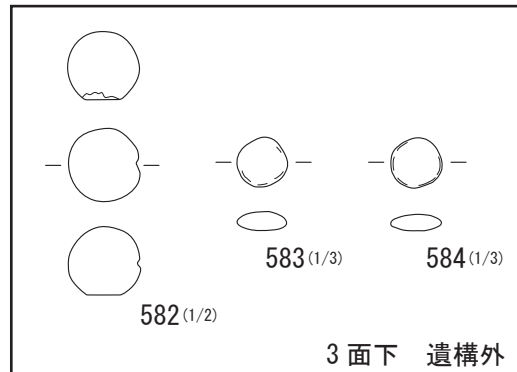
第105図 遺構、遺構外出土土製品



2面 遺構外

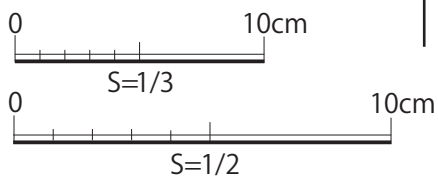
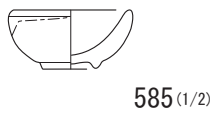


3面 遺構外

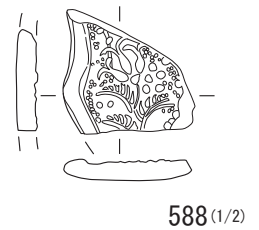
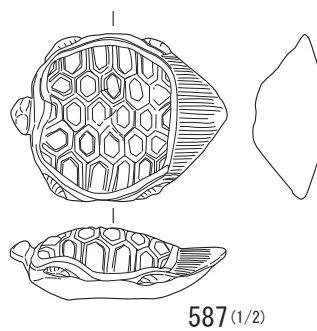


3面下 遺構外

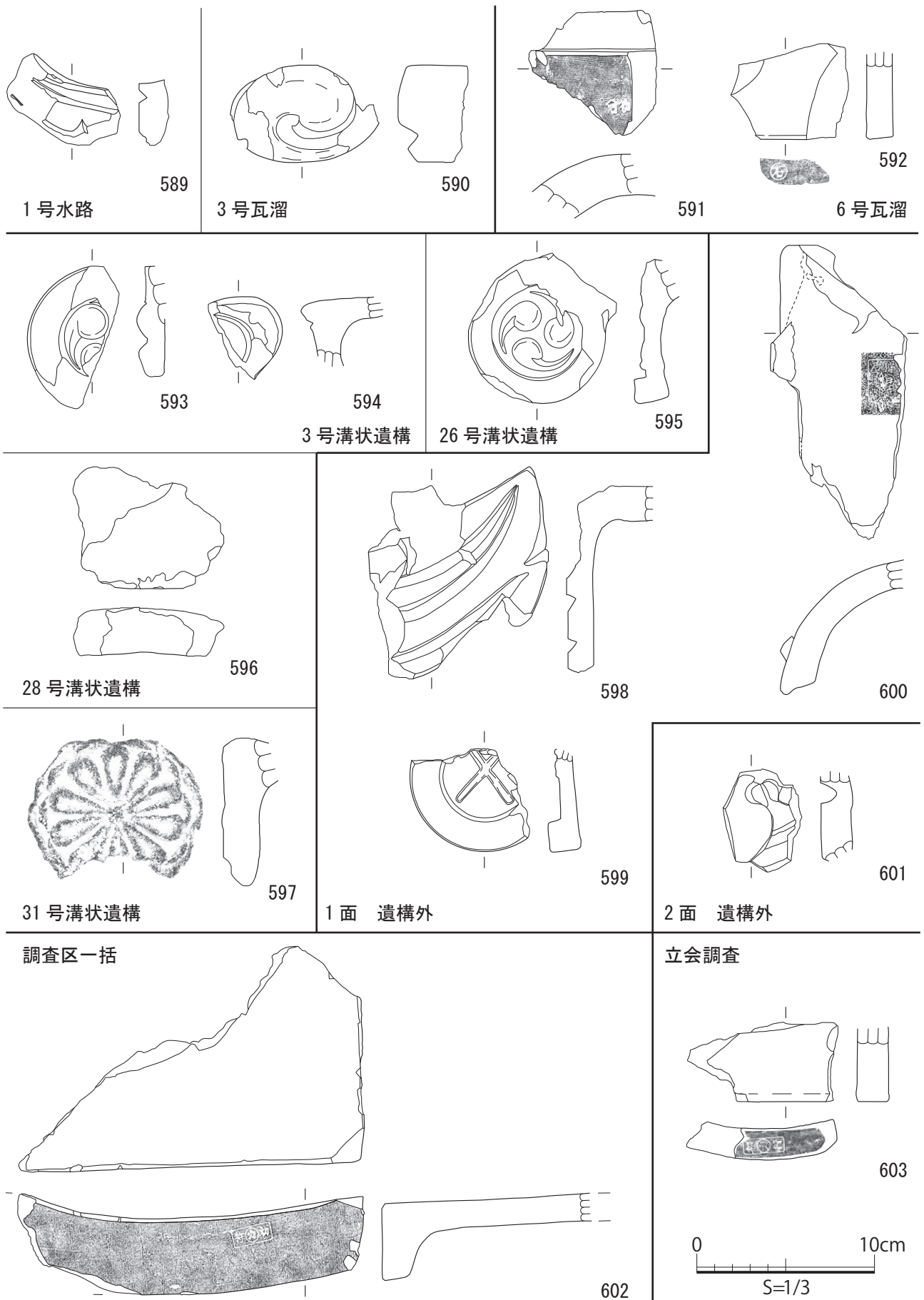
4面 遺構外



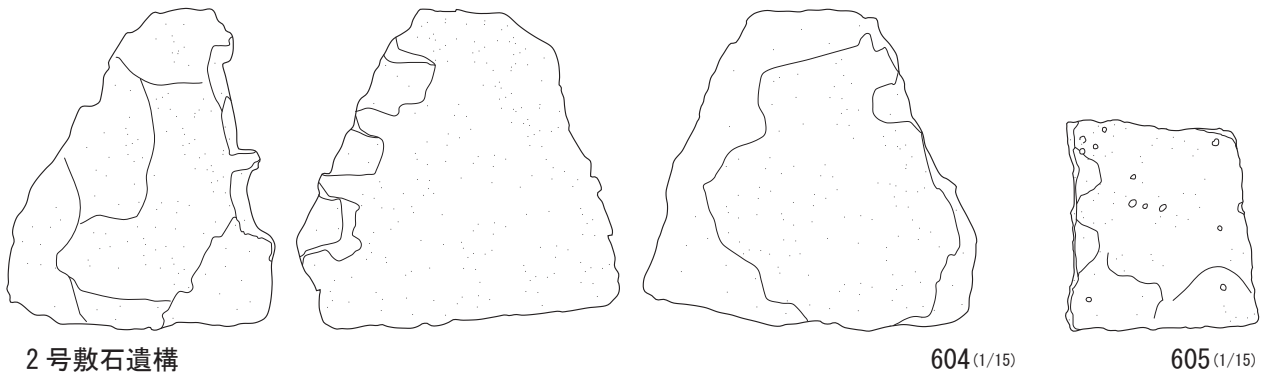
調査区一括



第106図 遺構外等出土土製品



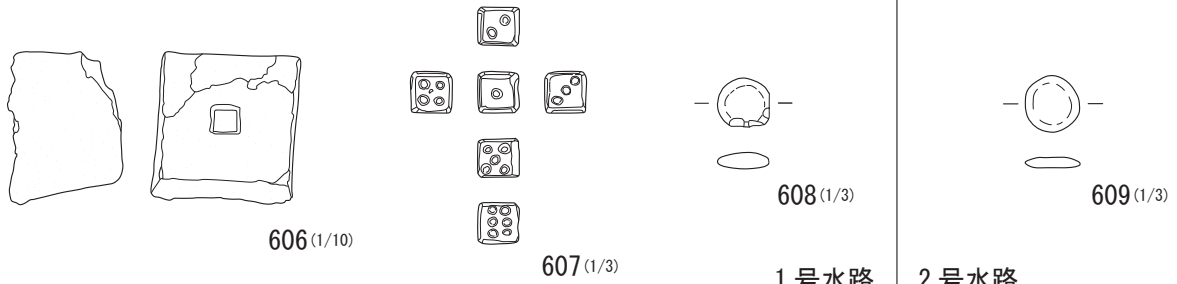
第107図 遺構、遺構外等出土瓦製品



2号敷石遺構

604 (1/15)

605 (1/15)



606 (1/10)

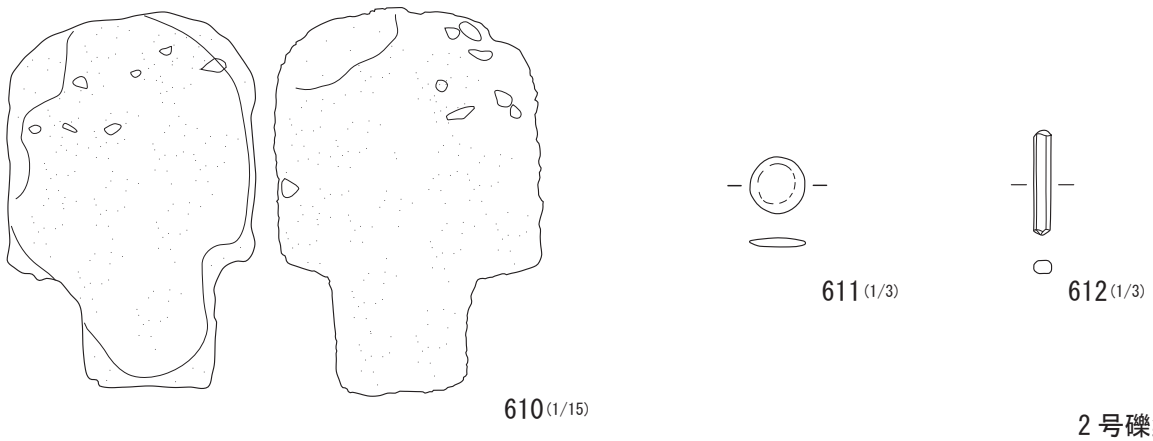
607 (1/3)

608 (1/3)

609 (1/3)

1号水路

2号水路

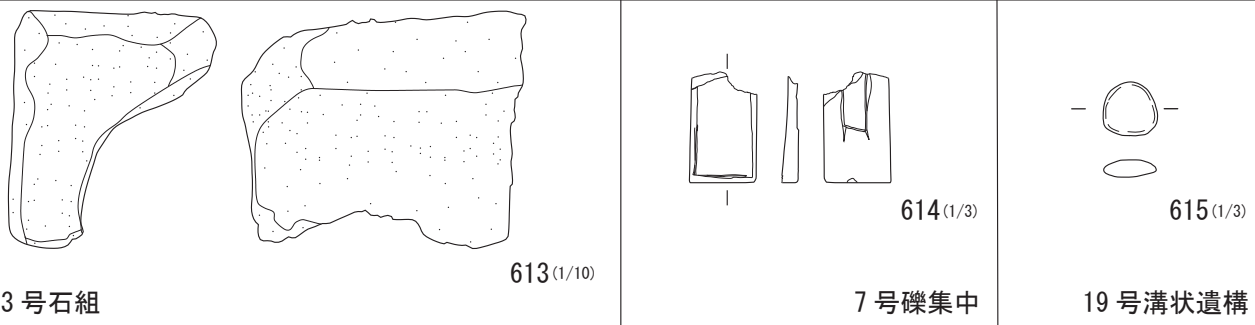


610 (1/15)

611 (1/3)

612 (1/3)

2号礫集中



3号石組

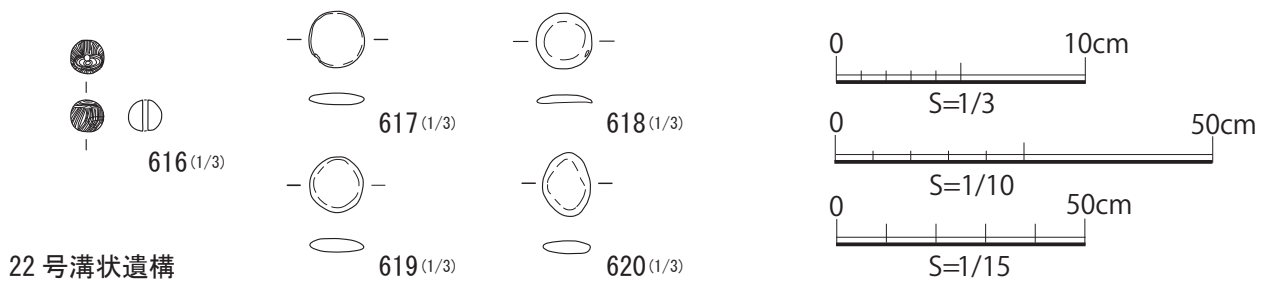
613 (1/10)

614 (1/3)

615 (1/3)

7号礫集中

19号溝状遺構



22号溝状遺構

616 (1/3)

617 (1/3)

618 (1/3)

619 (1/3)

620 (1/3)

0 10cm

S=1/3

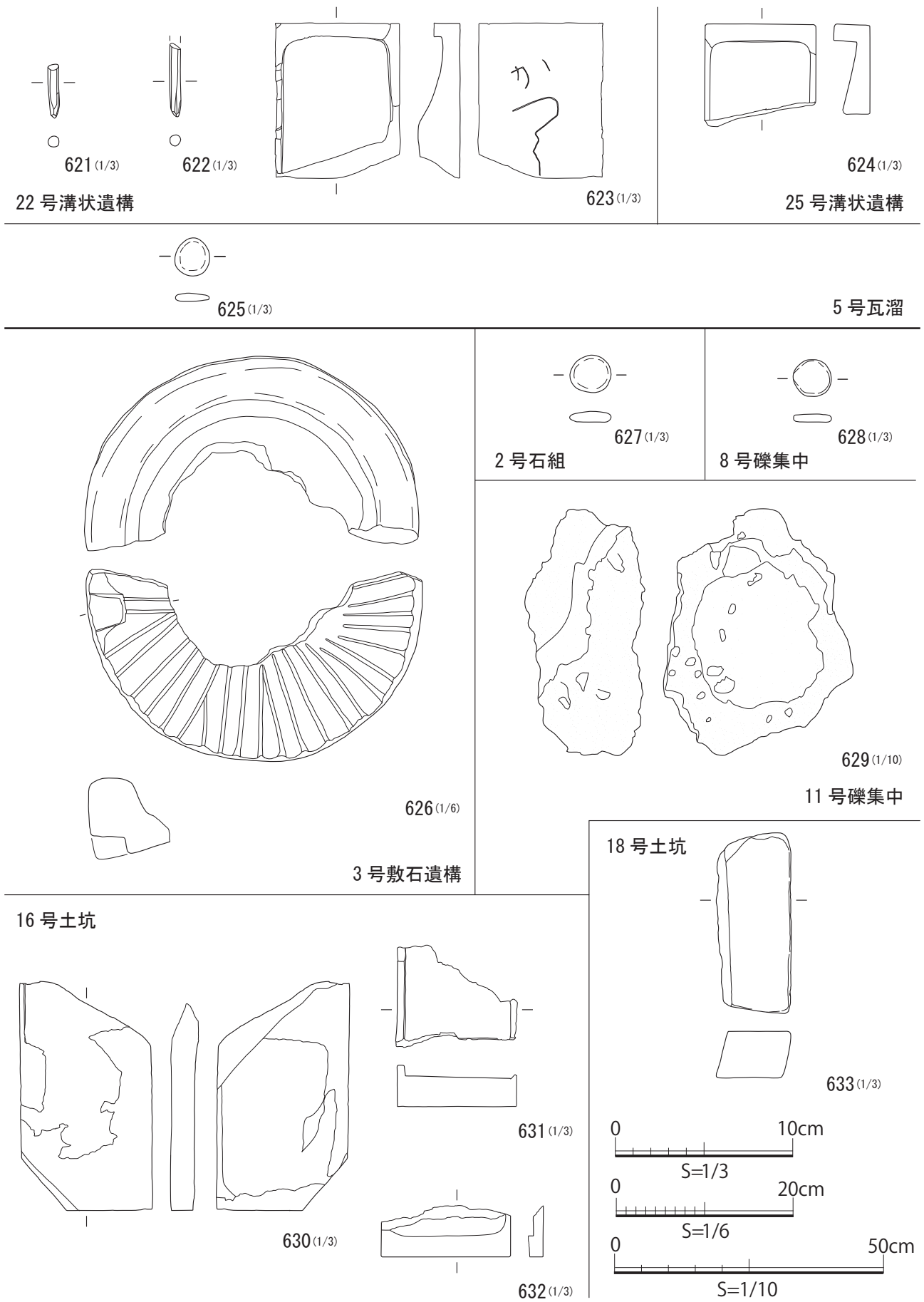
0 50cm

S=1/10

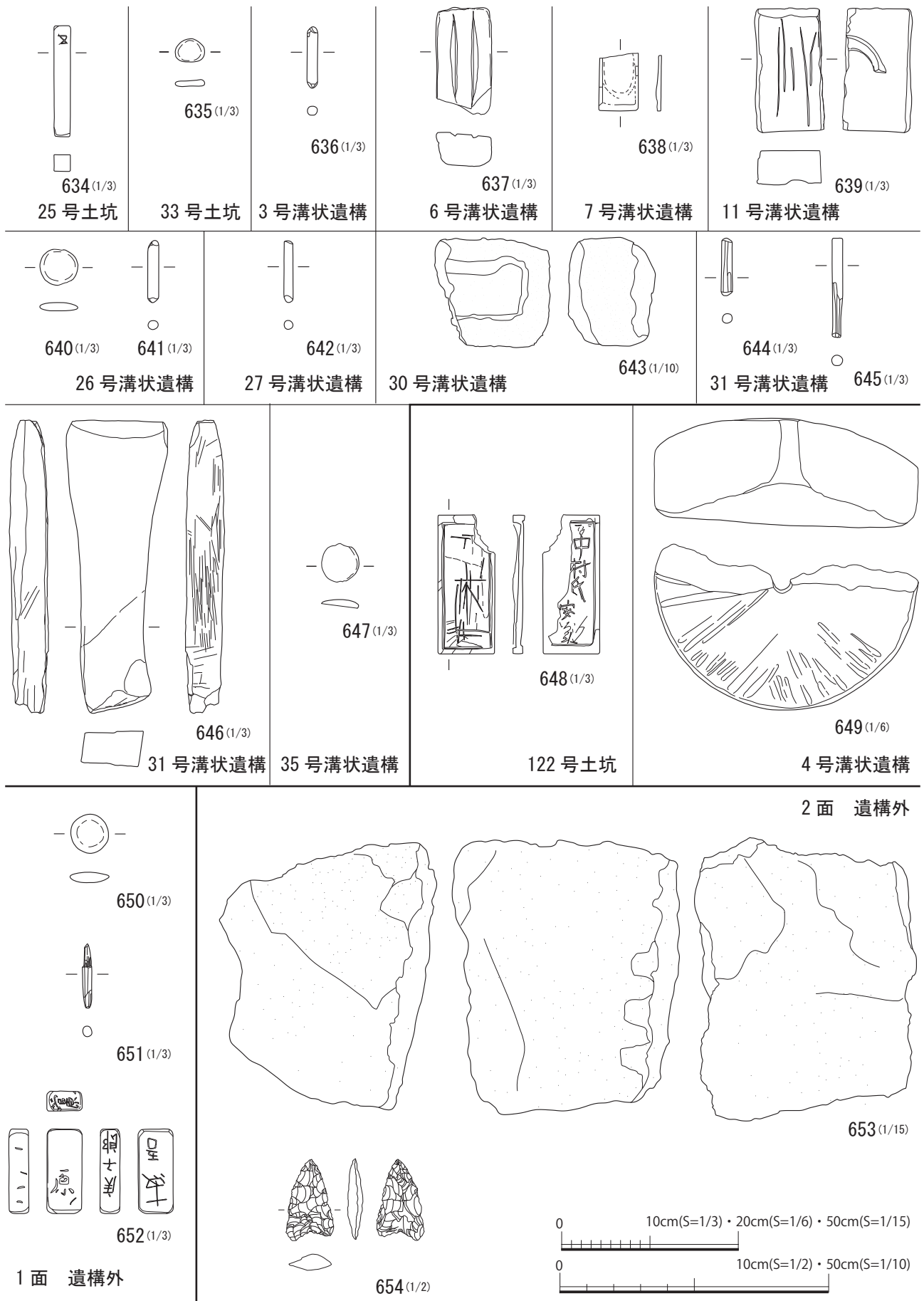
0 50cm

S=1/15

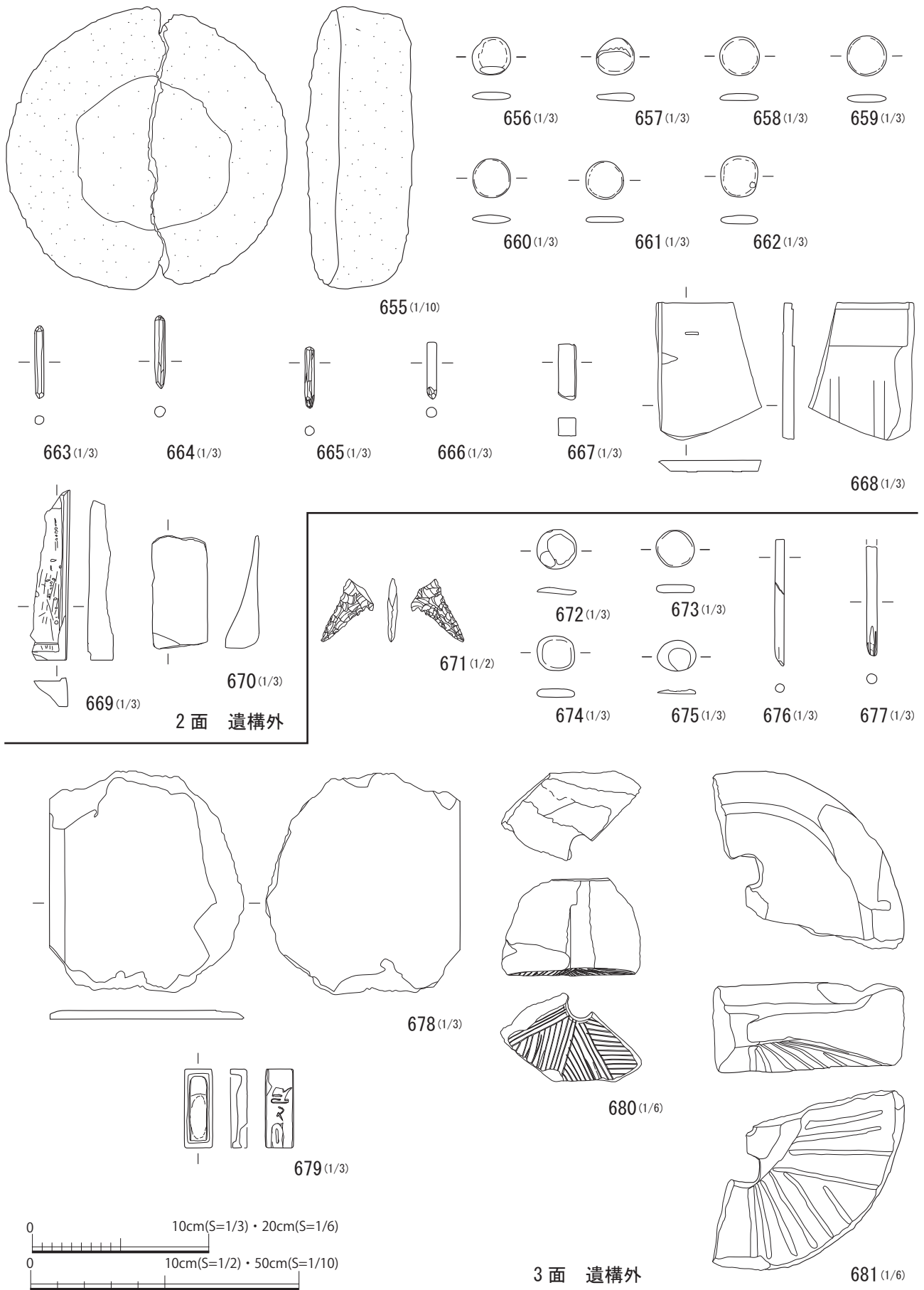
第108図 遺構出土石製品 (1)



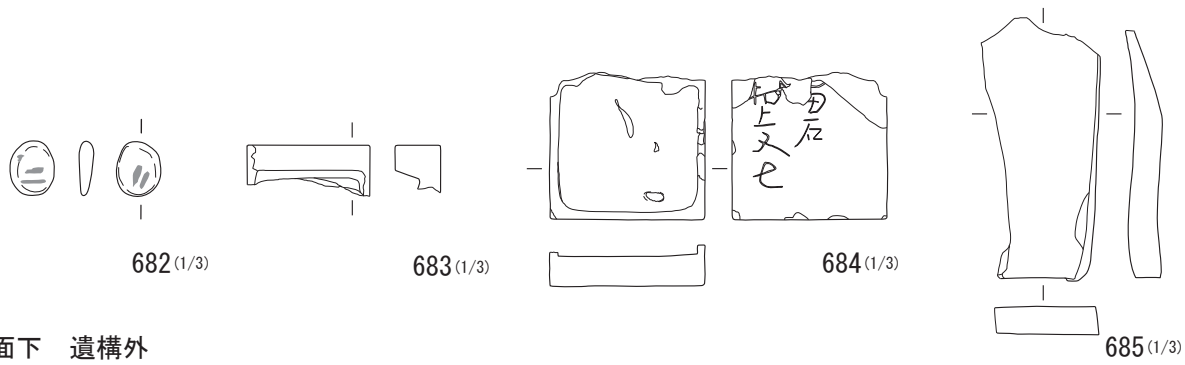
第109図 遺構出土石製品 (2)



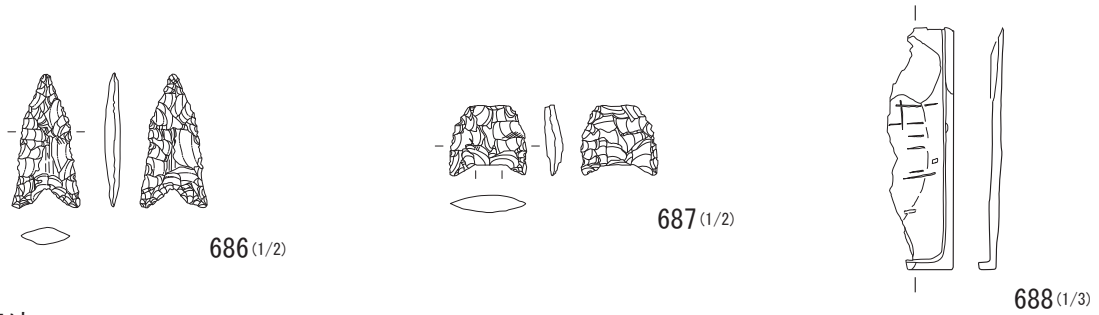
第110图 遗构、遗构外出土石製品



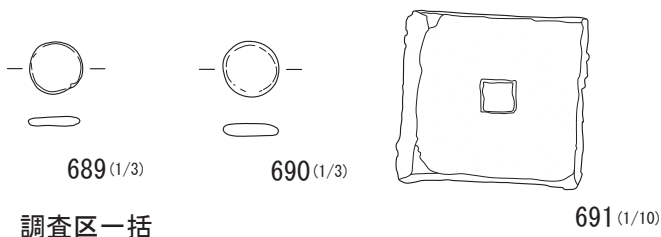
第111図 遺構外出土石製品



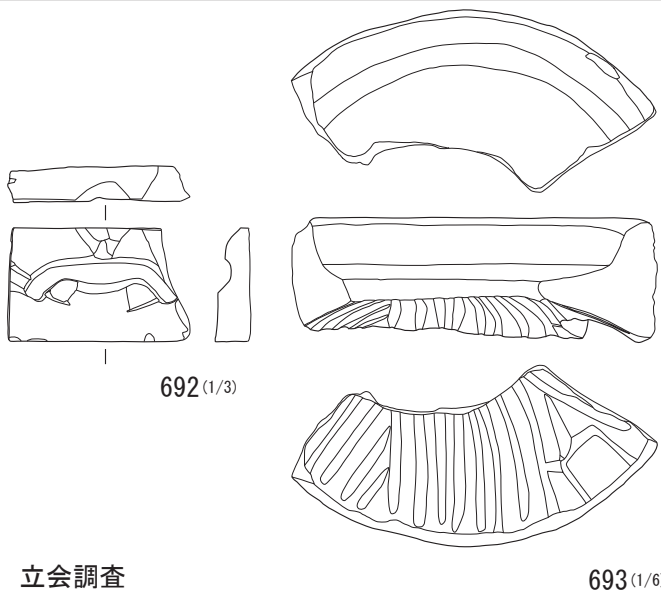
3 面下 遺構外



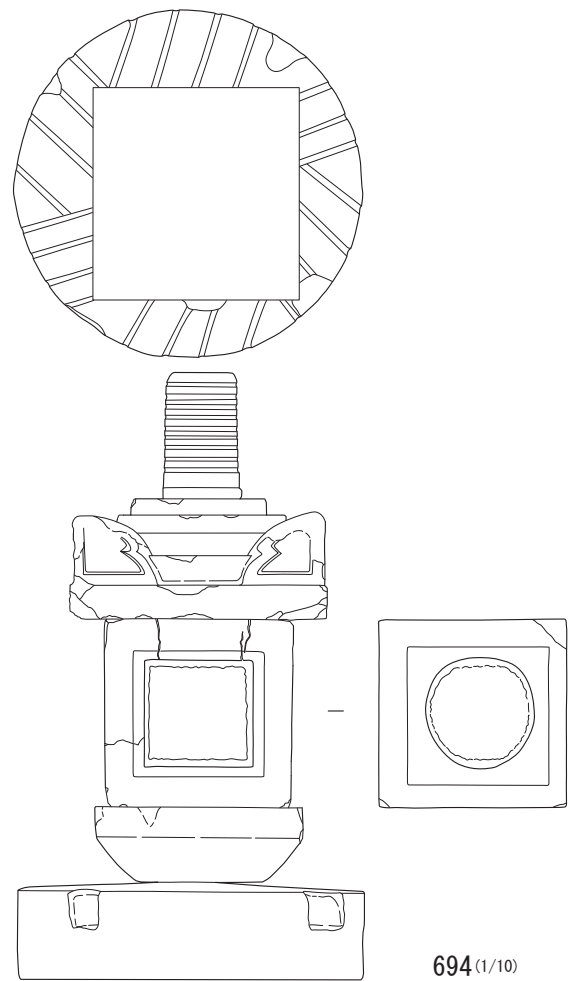
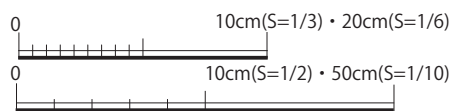
4 面 遺構外



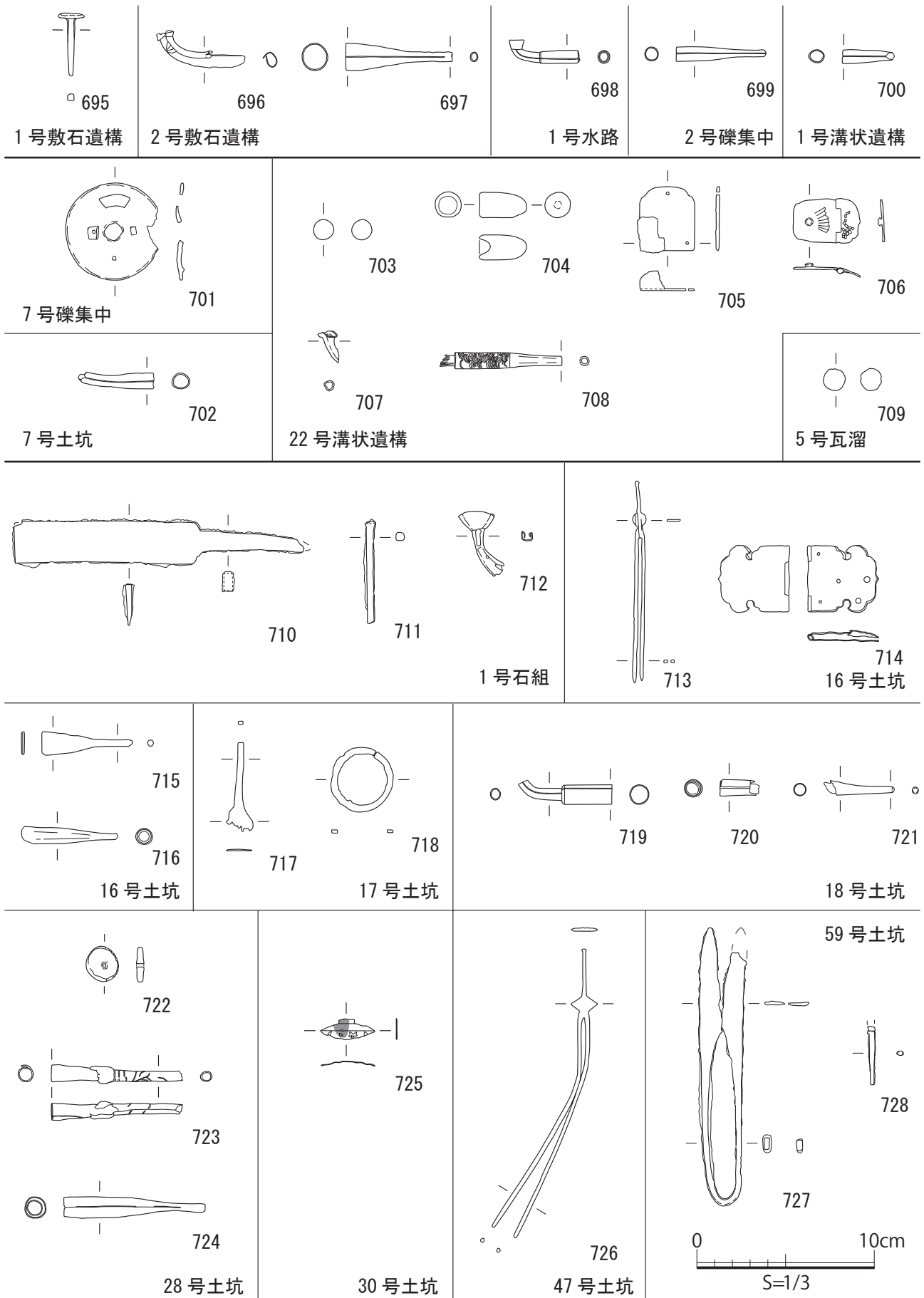
調査区一括



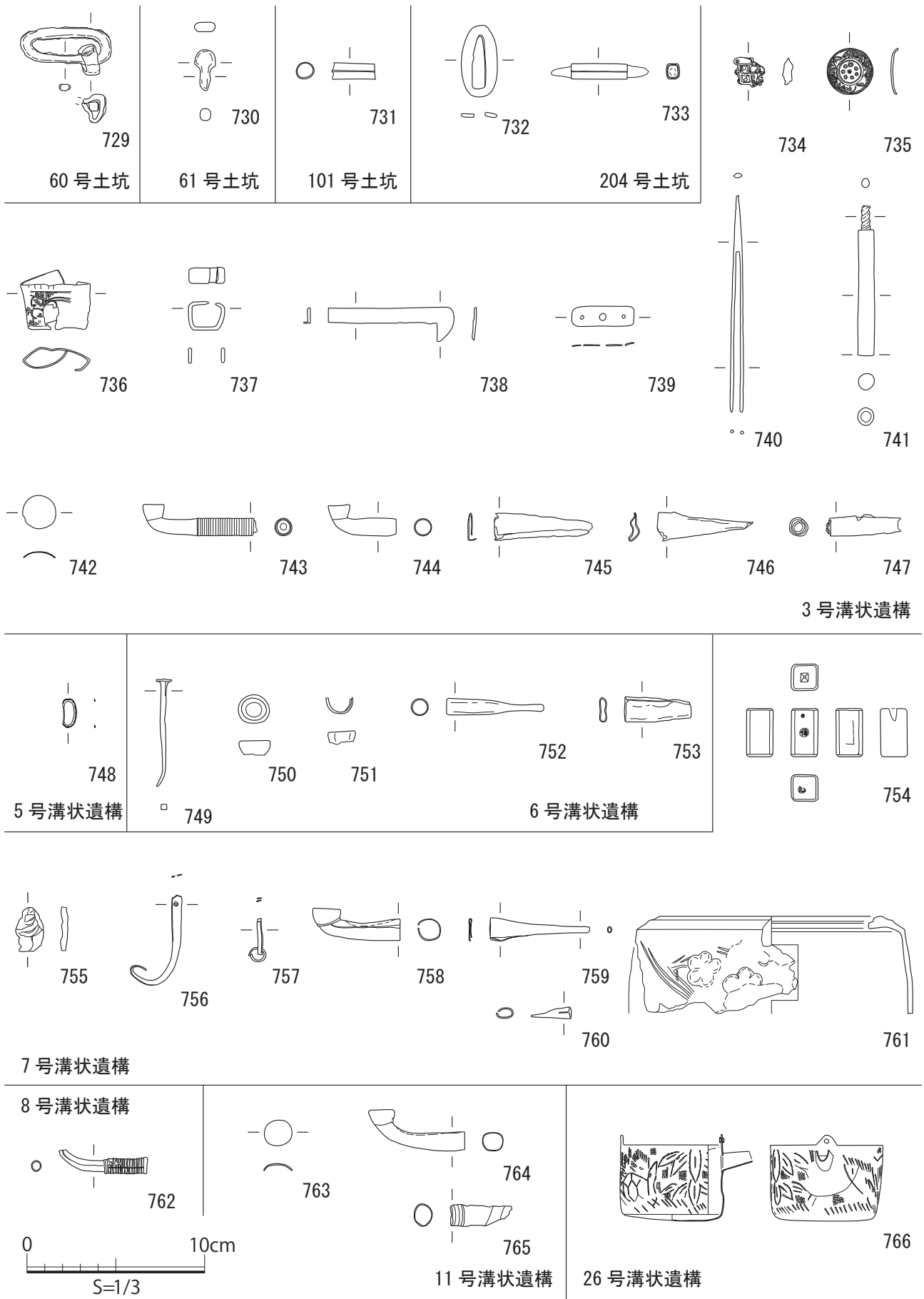
立会調査



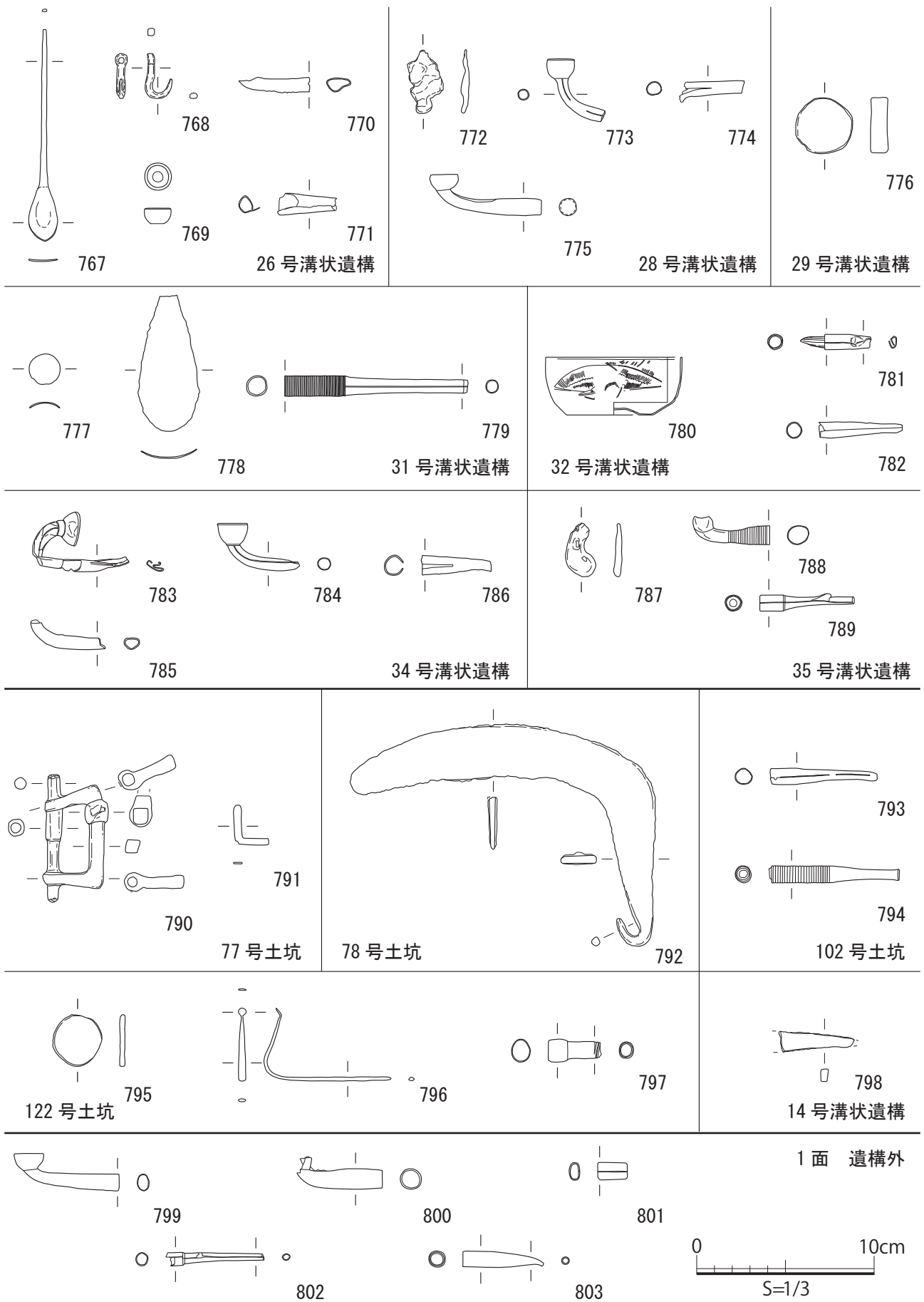
第112図 遺構外等出土石製品



第113図 遺構出土金属製品（1）

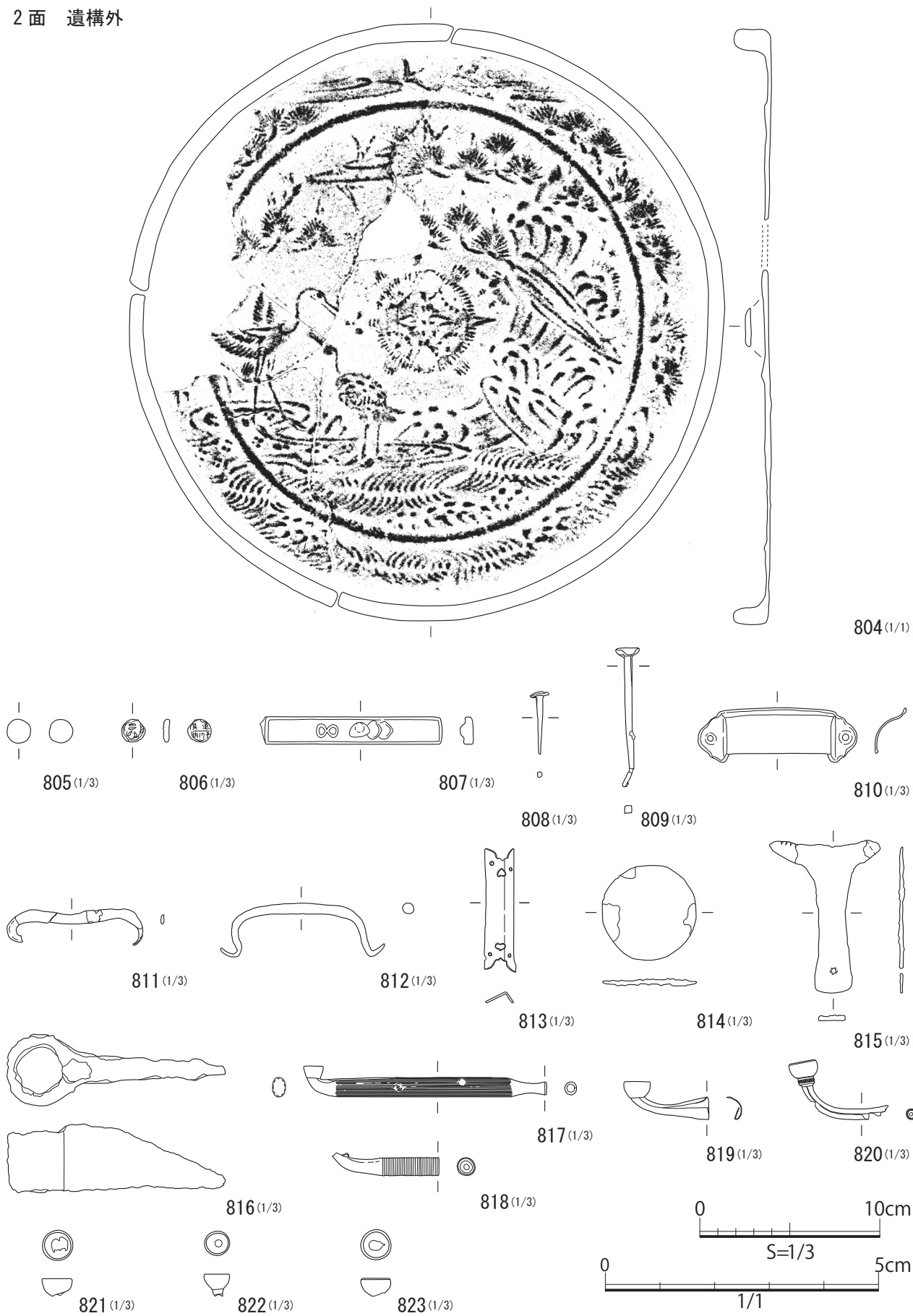


第114图 遗构出土金属制品(2)

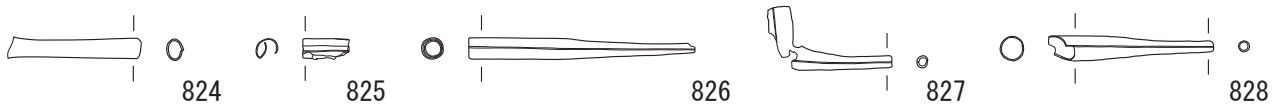


第115図 遺構、遺構外出土金属製品

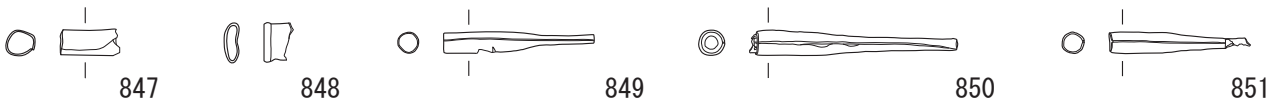
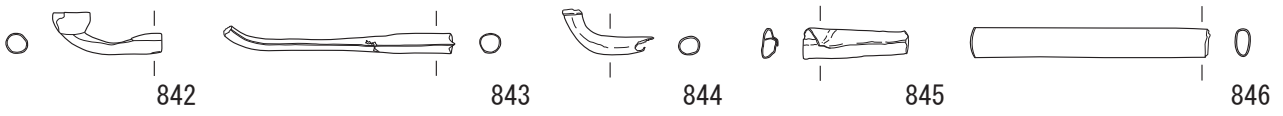
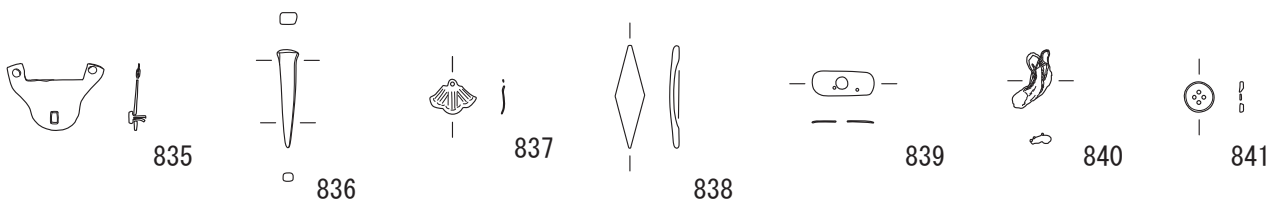
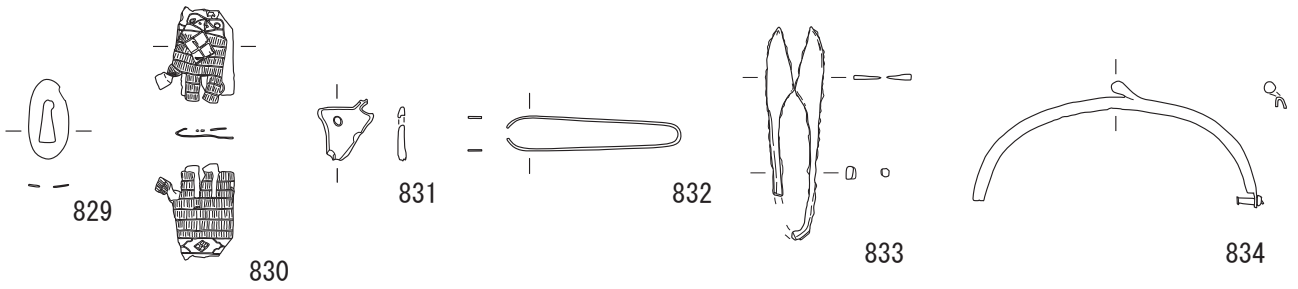
2面 遺構外



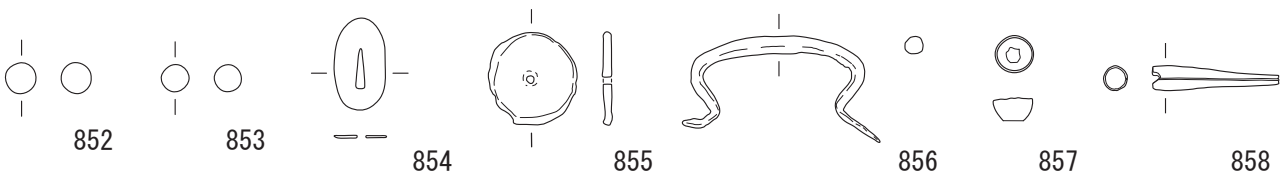
第116図 遺構外出土金属製品（1）



2面 遺構外

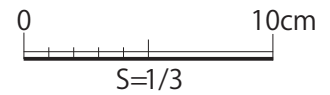
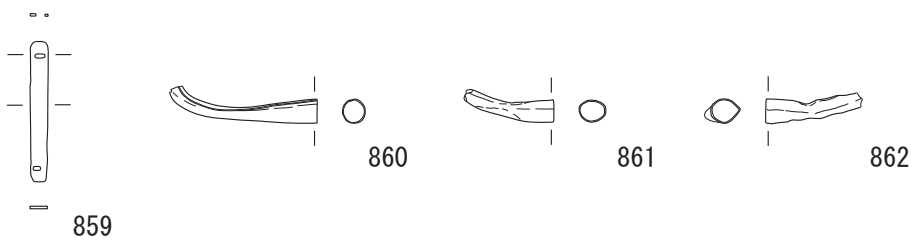


3面 遺構外

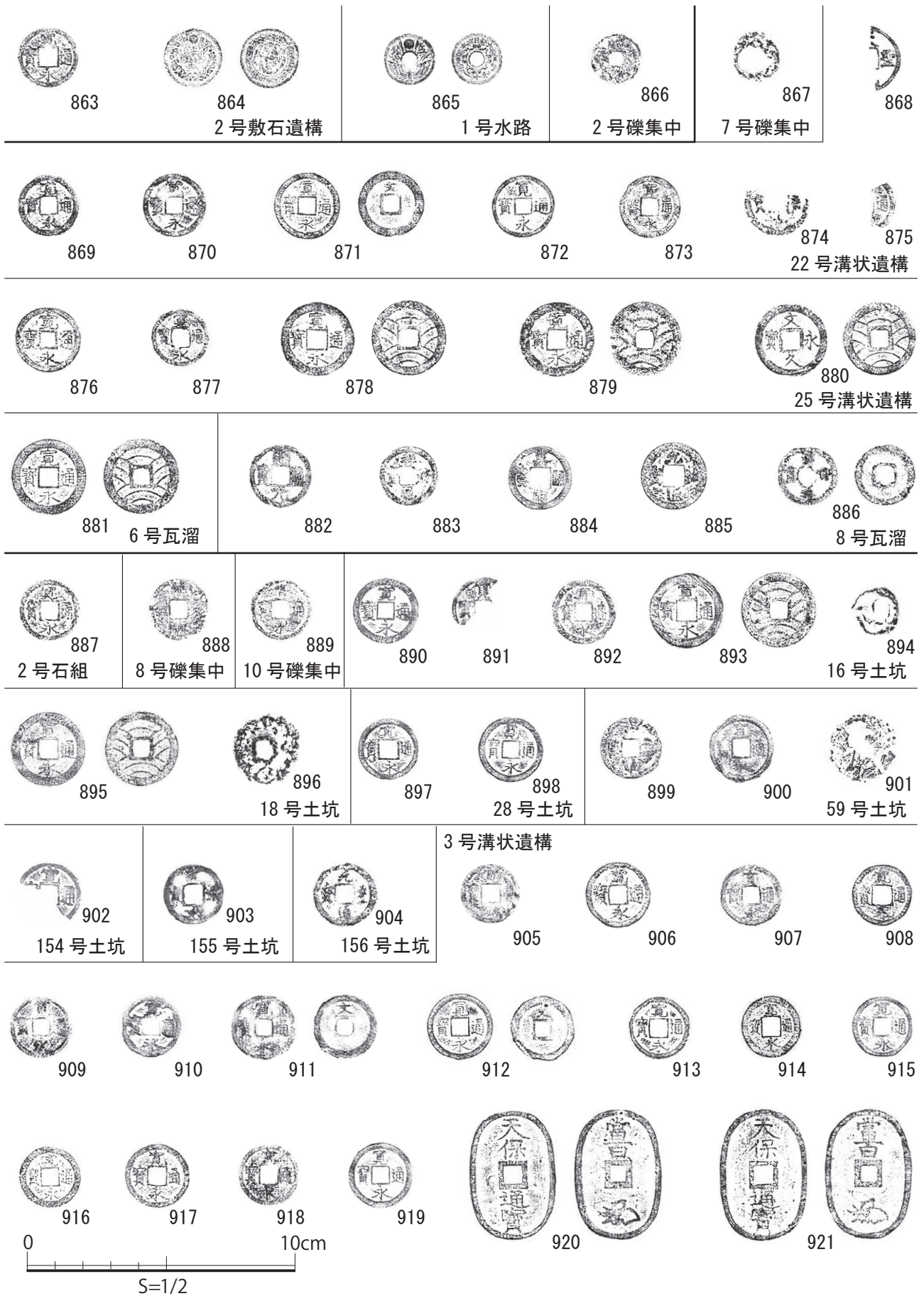


3面下 遺構外

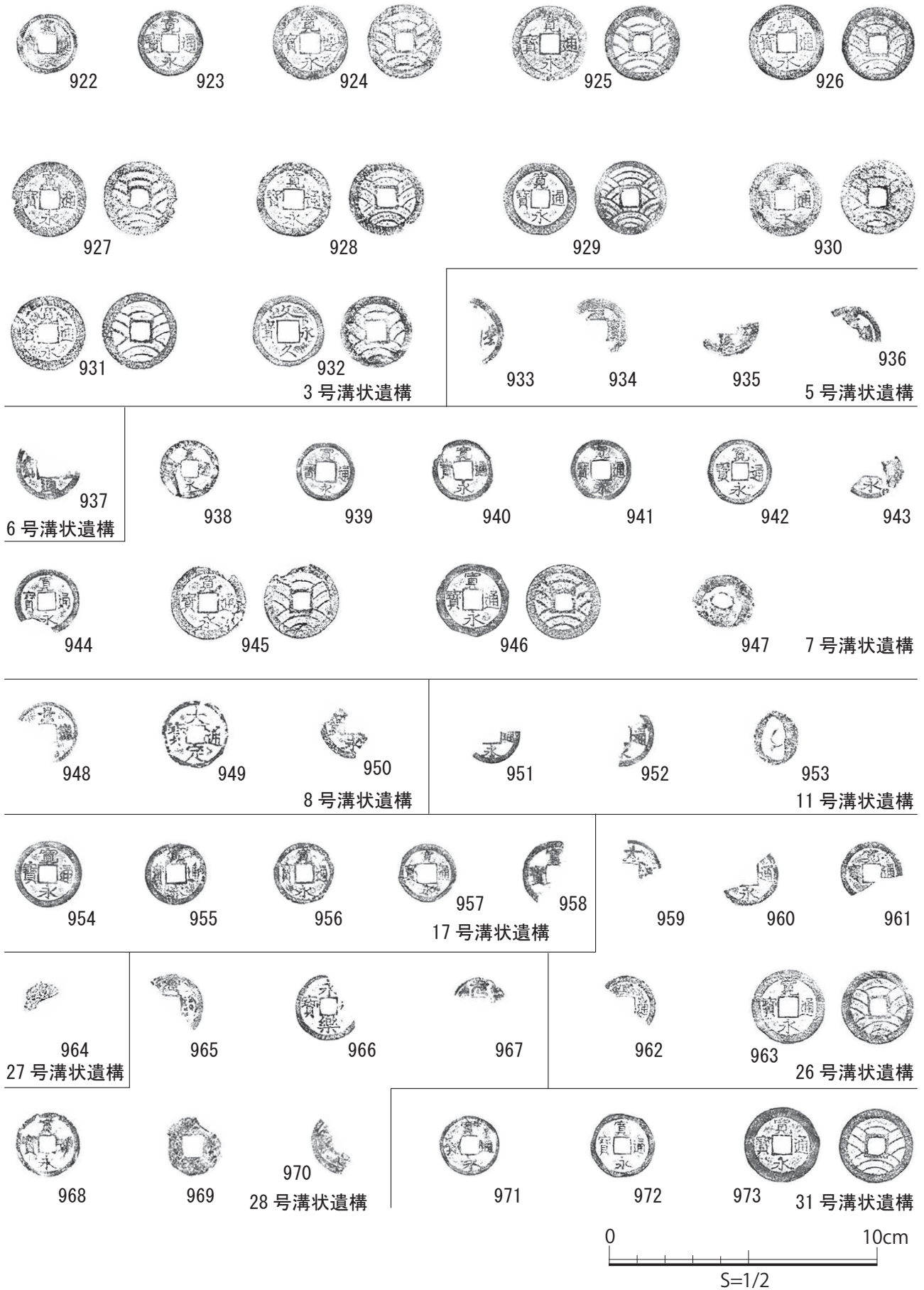
4面 遺構外



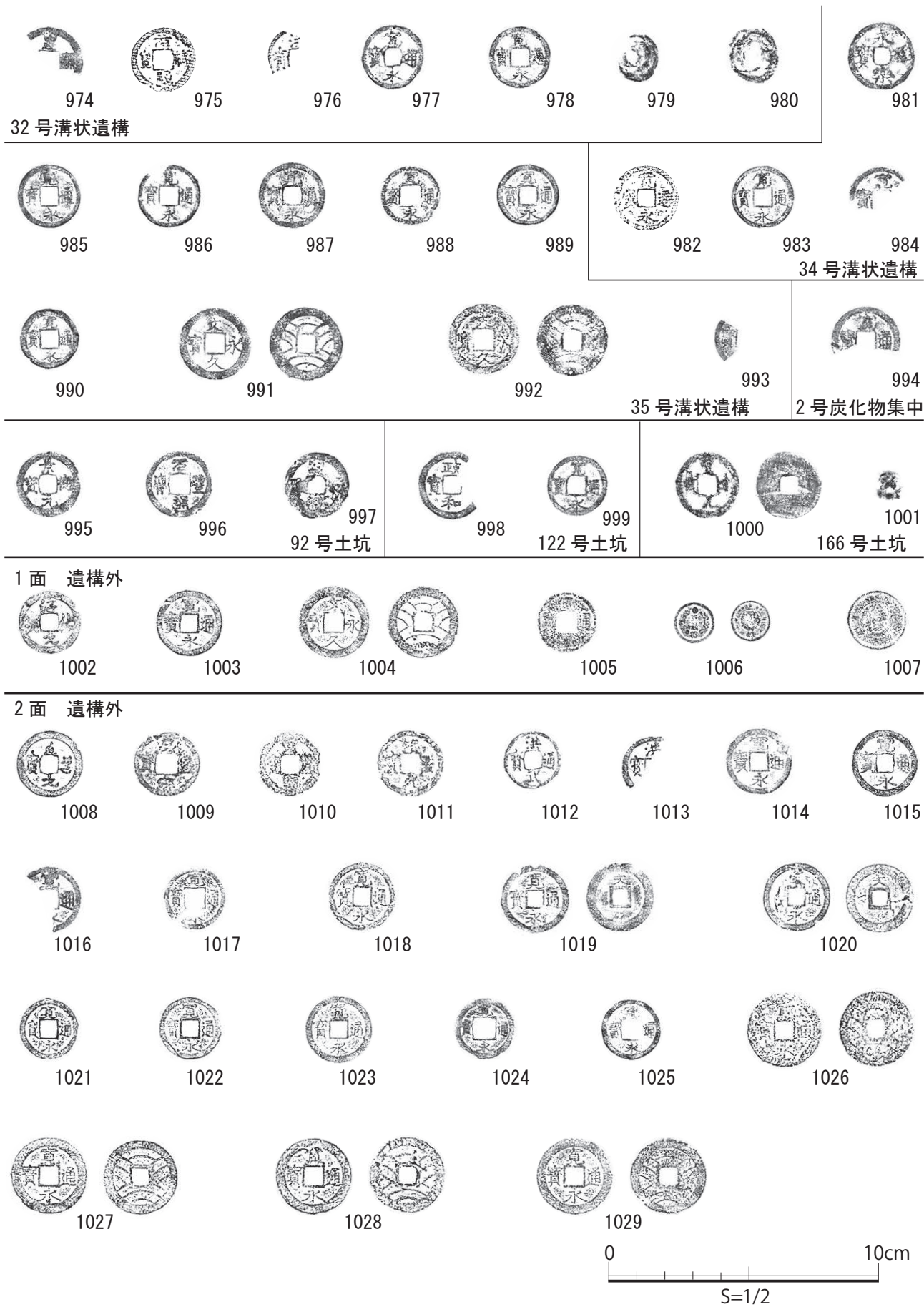
第117図 遺構外出土金属製品（2）



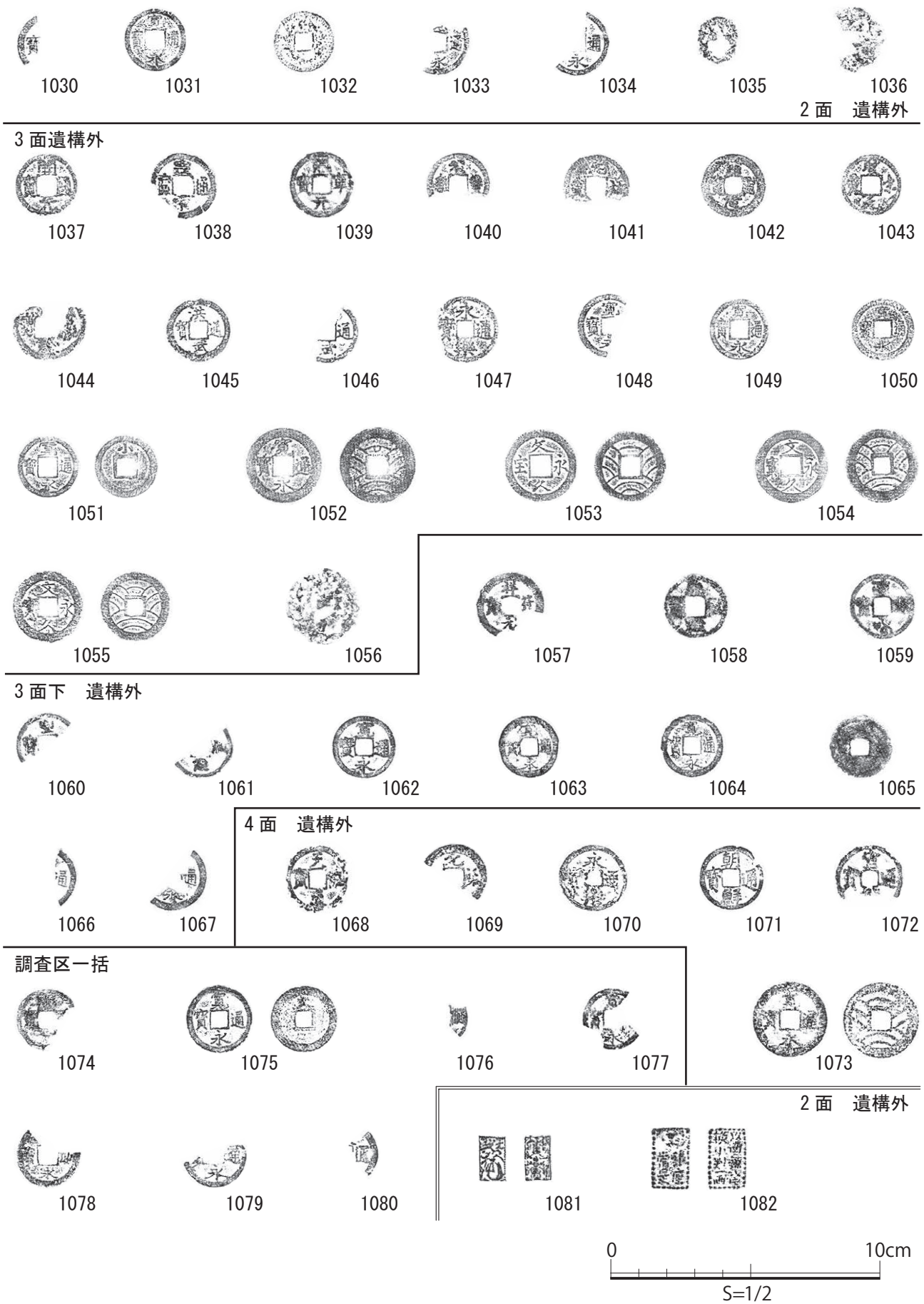
第118図 遺構出土金銀錢貨 (1)



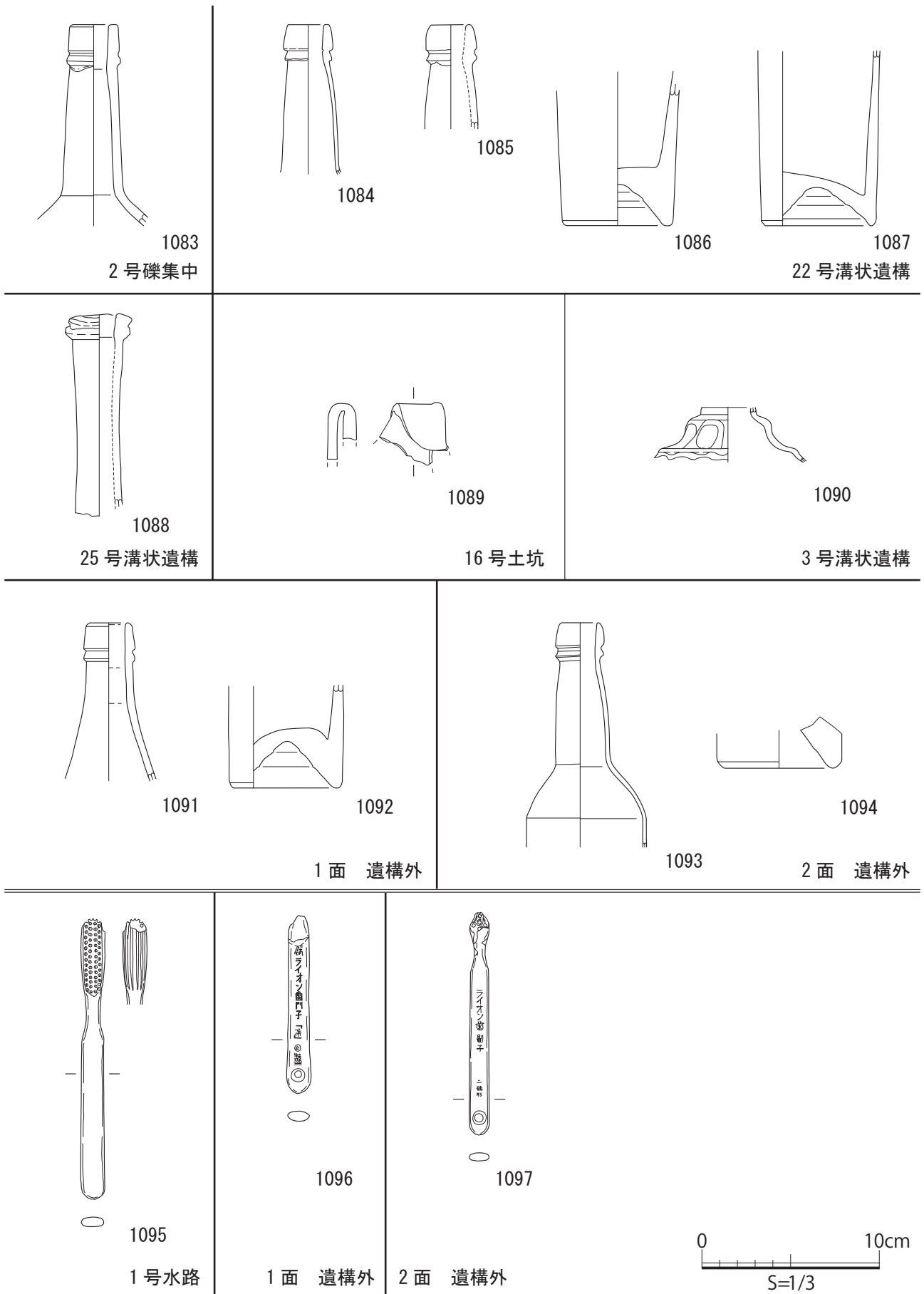
第119図 遺構出土金銀銭貨（2）



第120図 遺構、遺構外出土金銀錢貨



第121図 遺構、遺構外等出土金銀錢貨



第122図 遺構、遺構外出土ガラス製品、骨製品

第3表 遺物一覽表 (陶磁器・土器)

遺物番号	実測番号	図版番号	写真図版番号	注記名	種別	器種名	形状等	A(口徑)	B(底徑)	C(器高)	D	産地	時期	銘	備考
1	2	72	23	B11 敷一拵、B2一拵	磁器	小碗	丸形	66.0	33.0	49.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉	高台内角粉銘	口縁内に文様
2	60	72	23	B11 敷一拵、A2 P594、1661、A1 P1049	磁器	土鍋蓋	-	150.2	62.0	62.0		益子	19世紀後～20世紀前葉		
3	3	72	23	B12 敷一拵	磁器	中碗蓋	-	36.0	94.0	24.0		肥前	19世紀中葉		内面に文様
4	4	72	23	B12 敷一拵	磁器	合子	浅丸形口縁蓋受	46.0	26.0	16.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		
5	5	72	23	B12 敷P4029	陶器	灯明受皿	-	96.0	42.0	19.0		瀬戸・美濃	19世紀前～中葉		
6	7	72	23	B11 水一拵	磁器	小杯	-	39.0	27.0	40.5		瀬戸・美濃	近代		
7	6	72	23	A11 水P1348	磁器	中碗	平形	115.0	38.0	50.0		瀬戸・美濃	20世紀前～中葉		見込み部に文様
8	8	72	23	B11 水一拵、B3 26 溝一拵、B3 35 溝一拵	磁器	小鉢	-	56.0	(53.0)			肥前	19世紀前～中葉		
9	15	72	23	B12 水P4022	磁器	急須	横手形	65.0	53.0	73.0	85.0	瀬戸・美濃	20世紀前～中葉		
10	10	72	23	A11 水P1315	陶器	小杯	-	49.0	38.0	24.5		不明	近代		
11	11	72	23	A11 水一拵	土器	土師瓦土器	-	106.0		(22.0)			18世紀		
12	14	73	23	B12 水P4018	磁器	小碗	-	82.0	33.0	46.0		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉	内面「米穀薪炭雜貨 西清商店 電台村七〇」	
13	13	73	23	B12 水一拵	磁器	中碗	平形	96.0	30.0	52.0		瀬戸・美濃	20世紀前～中葉		
14	12	73	23	B12 水一拵	磁器	中碗	平形	112.0	37.0	61.0		瀬戸・美濃	20世紀前～中葉		
15	17	73	23	B12 水P4020	陶器	急須蓋	-	77.0	57.0	24.5	18.0	常滑	19世紀後～20世紀中葉		
16	16	73	23	B12 水P4021	磁器	蓋	-	17.0	111.5	22.0	98.0	瀬戸・美濃	20世紀前～中葉	底面「谷村町つちや醤油店」 表面「會津天栄式特許第一四一六六号」	
17	18	73	23	B12 水一拵	磁器	卸皿	-	101.0	14.0	(111.0)		肥前	20世紀中葉		
18	19	73	23	A12 礫一拵	磁器	小碗	-	94.5	32.5	50.0		肥前	19世紀中葉		見込み部に文様
19	23	73	23	B12 礫P4013	磁器	小碗蓋	小碗蓋	33.0	89.0	31.5		肥前	19世紀中葉		内面に文様
20	24	73	23	A12 礫一拵	磁器	小碗蓋	-	35.0	92.0	25.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		内面に文様
21	25	73	23	A12 礫P1094	磁器	中碗蓋	-	61.0	139.0	44.0		瀬戸・美濃	20世紀前～中葉		見込み部粉糲
22	20	73	23	A12 礫一拵	磁器	中皿	-	81.0	81.0	27.0		肥前	19世紀中葉	高台内「成化年製」	
23	21	73	23	B12 礫P4012	磁器	中皿	丸形	122.0	42.0	35.0		肥前	18世紀中葉		
24	29	73	23	A12 礫P859	磁器	小皿	-			(4.0)		瀬戸・美濃	20世紀中葉	底面「MADE IN OCCUPIED JAPAN」	
25	26	73	23	B12 礫一拵、A2 P667	磁器	段重	腰部無加工	124.0	91.0	62.0		肥前	19世紀前～中葉		
26	27	73	23	A12 礫一拵	磁器	紅堵口	-	53.0	15.0	17.0		瀬戸・美濃	19世紀前～中葉		
27	31	74	23	A12 礫一拵	陶器	中壺蓋	-	68.0	38.0	13.0		瀬戸・美濃	18世紀		底面糸切り
28	30	74	23	A12 礫一拵	陶器	中壺蓋	-	72.0	34.0	14.0		瀬戸・美濃	18世紀		底面糸切り
29	33	74	23	A12 礫一拵、A3一拵	陶器	小壺蓋	-	96.0	48.0	19.0		瀬戸・美濃	18世紀		底面糸切り
30	32	74	23	A12 礫P21	陶器	土瓶蓋	-	18.0	62.0	42.0		瀬戸・美濃	19世紀中～後葉		
31	34	74	23	A12 礫P793	土器	七厘(さな)	-	(66.0)	(86.0)	11.0		不明	19世紀後～20世紀中葉		
32	35	74	23	A11 薄P505、507、543	磁器	中碗	平形	111.0	35.5	58.0		瀬戸・美濃	20世紀前～中葉		
33	36	74	23	A1 池一拵	磁器	小鉢	腰折形	103.0	54.0	48.0		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉	高台内「福」	口縁内に文様 見込み部に文様
34	37	74	23	A1 池一拵	陶器	秉燭	手付瓶形	43.0	52.0	120.0	77.0	志戸呂	18世紀後～20世紀前葉		
35	66	74	23	B27 礫P4168、B3 P4650	磁器	小碗	端反形	92.0	44.0	39.0		肥前	19世紀前葉		
36	67	74	23	B27 礫P4395	陶器	小碗	丸形	95.0		(50.0)		肥前	19世紀前葉		
37	179	74	23	B27 礫一拵	陶器	瓶	「へこかん」形			(41.0)		瀬戸・美濃	19世紀前葉	内面蓋書「七〇」	
38	386	74	23	A24 土P1507	磁器	小皿	稜皿形	93.0	50.0	20.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		
39	495	74	23	A29 土一拵	土器	漆盞蓋	漆精形			(59.0)		堺	18世紀前～中葉		
40	68	74	23	B221 溝P4115	陶器	中碗	泰舟形		54.0	(48.0)		不明	近代		
41	78	74	23	B22 溝P4275、B22 溝一拵	磁器	薄手酒杯	端反形	54.0	23.0	35.5		瀬戸・美濃	19世紀中～後葉		
42	77	74	23	B22 溝P4256	磁器	薄手酒杯	胴細形	57.0	27.0	29.5		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉		
43	76	74	23	B22 溝P4465、B22 溝一拵	磁器	薄手酒杯	丸形	63.0	25.0	31.0		瀬戸・美濃	19世紀中～後葉	内面「わたなべ」、「谷村新町」、高台内「角粉銘」 高台内「文明」 外面「天津 橋下 祥春 水」	見込み部に文様 見込み部に文様
44	75	74	23	B22 溝P4452	磁器	小碗	端反形	63.0	25.0	44.0		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉		口縁内に文様
45	73	74	23	B22 溝P4079	磁器	小碗	丸形	63.0	30.0	48.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		口縁内に文様
46	74	75	23	B22 溝一拵、B一拵	磁器	小碗	丸形	71.0	32.0	49.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		口縁内に文様
47	72	75	23	B22 溝P4440、B22 溝一拵	磁器	小碗	腰張形	64.0	40.0	54.0		肥前	19世紀中葉		口縁内に文様

遺物番号	実測番号	図版番号	写真版番号	注記名	種別	器種名	形状等	A(口径)	B(底径)	C(器高)	D	産地	時期	銘	備考
97	167	78	24	B31石P4677、B31石一括	陶器	中皿	-		94.0	(12.0)		京・信楽?	不明		
98	166	78	24	B31石P4678、B31P4344	陶器	中皿	-		94.0	(14.0)		京・信楽?	不明		
99	168	78	24	B31石P4671、4672、4676、B31石一括、B2一括	陶器	中瓶	「へこかん」形		70.0	(75.0)		瀬戸・美濃	19世紀前葉		
100	169	78	24	B32石P4401	磁器	小碗	腰張形	67.0	36.0	55.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		口縁内に文様
101	170	78	24	B22石P4737	磁器	中皿	丸形	134.0	74.0	33.0		肥前	19世紀後～19世紀前葉	高台内「禍福」	
102	171	78	24	B32石P4730、4731	陶器	灯明皿	平形	94.0	38.0	21.0		瀬戸・美濃	19世紀		
103	172	78	24	B32石P4403、4732、4733、B32石一括、B2一括	陶器	灯明皿	平形	92.0	38.0	17.0		瀬戸・美濃	19世紀		
104	173	78	24	B32石P4780	陶器	灯明皿	平形	92.0	39.0	21.0		瀬戸・美濃	19世紀		
105	174	78	24	B38礫P4596	磁器	蓋物蓋	-	47.0	(16.0)			肥前	18世紀後～19世紀前葉		
106	175	79	24	B310礫一括	磁器	小碗	半筒形	73.0		(48.0)		肥前	18世紀後～19世紀前葉		口縁内に文様
107	176	79	24	B310礫P4663	陶器	小碗	腰張形	88.0	36.0	60.0		瀬戸・美濃	18世紀後～19世紀前葉		
108	178	79	24	B310礫一括	陶器	土瓶	-	100.0		(61.0)		京・信楽	18世紀後～19世紀前葉		
109	177	79	24	B310礫P4552	陶器	土瓶蓋	-	14.0	48.0	35.0		京・信楽	19世紀中～後葉		
110	180	79	24	B310礫一括	土器	燒盃蓋	-	81.0	79.0	28.0		泉州	18世紀前葉		底面布目痕
111	486	79	24	B310礫一括	土師器	杯	-	52.0	(6.0)			平安時代			底部墨書
112	181	79	24	A316土一括	磁器	中碗	端反形	96.0	44.0	51.0		瀬戸・美濃	19世紀前葉		口縁内に文様 見込み部に文様
113	183	79	24	A316土一括	磁器	小皿	丸形	90.0	44.0	21.0		肥前	18世紀後～19世紀前葉		
114	182	79	24	A316土P2299、2300	磁器	中皿	丸形	134.0	98.0	32.0		肥前	19世紀前葉		
115	184	79	24	A316土P2997、58土P2946、A316土一括	磁器	小瓶	頸錐形	12.0	39.0	158.0		肥前	19世紀前～中葉		
116	186	79	24	A316土P2298、A316土一括	陶器	小杯	-	62.0	30.0	52.0		相馬	19世紀後～20世紀前葉	高台内変形字銘	
117	187	79	24	A316土P2305、A316土一括	陶器	小杯	-	62.0	28.0	53.0		相馬	19世紀後～20世紀前葉	高台内変形字銘	
118	190	79	24	A316土P2888	陶器	土瓶蓋	-	48.0	(25.0)			京・信楽	19世紀中～後葉		
119	189	79	24	A316土P2884、A316土一括	陶器	土鍋蓋	-	18.0	110.0	31.0		不明	19世紀後葉		口唇部スス付着 見込三足ハマ跡 クシ目あり
120	188	79	24	A316土P256、2447	陶器	灯明皿	平形	108.0	42.0	23.0		京・信楽	19世紀前葉		
121	195	79	24	A316土P2998	陶器	灯明盃皿	-	94.0	45.0	20.0		瀬戸・美濃	19世紀前葉		
122	191	79	24	A316土P253、255、2582、A316土一括	陶器	土鍋	-	182.0	72.0	80.0		京・信楽	19世紀前～中葉		
123	193	80	24	A316土P2599、1907、1913、1914	陶器	土瓶	算盤玉形	69.0	57.0	105.0	152.0	京焼	19世紀前～中葉		
124	196	80	24	A316土P2448、2449、2940、A3一括、	陶器	大瓶	-			(230.0)		瀬戸・美濃	19世紀前～中葉		
125	197	80	24	A316土P2306	土器	燒盃蓋	-	65.0	64.0	11.0		江戸	19世紀		
126	201	80	25	A318土P2249、2384、A318土一括	磁器	小碗	丸形	54.0	22.0	30.0		瀬戸・美濃	19世紀中～後葉	内面「谷川 佃 薦 川」 高台「正」	見込み部に文様
127	200	80	25	A318土P2291、2683、A2P783 A318土一括、A3一括	磁器	小碗	丸形	56.0	22.0	36.0		肥前	19世紀中葉		口縁内に文様
128	199	80	25	A318土P2192、3溝一括	磁器	小碗	丸形	64.0	27.0	41.5		瀬戸・美濃	19世紀中葉		口縁内に文様
129	198	80	25	A318土P2302	磁器	小碗	筒丸形	66.0	34.0	60.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		
130	202	80	25	A318土P2387、2771、A318土一括	磁器	中碗蓋	-	36.0	93.0	27.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		内面に文様
131	203	80	25	A318土P2256	磁器	段重蓋	-	82.0	70.0	15.0		肥前	19世紀前葉		
132	185	80	25	A318土P2104、2462、2657、2712、A316土一括、A3一括、A2一括、A一括	磁器	大瓶	-			(134.0)		肥前	19世紀後葉		
133	205	80	25	A318土P1513、2460、2659、2726	磁器	小瓶	-		42.0	(64.0)		肥前	19世紀前～中葉		
134	192	80	25	A318土P2073、2079、2100、2105、2161、2193～2195、2210、2213、2240、2292、2293、2376、2377、2379、2643、2662、2725、A318土一括、A316土一括、10溝一括、A3一括、B2一括	陶器	土瓶	丸形	113.0	88.0	129.0	169.0	京・信楽?	19世紀後～20世紀前葉	底部墨書「と口」	
135	204	80	25	A318土P2212、2235、2684、2770	磁器	爛徳利	-	47.0	(127.0)			瀬戸・美濃	19世紀中葉	底部墨書「代口慶」 焼線印「△三二」	
136	194	80	25	A318土P2378、2663、A316土一括、18土一括	磁器	爛徳利	-	48.0	(155.0)			京・信楽	19世紀後～20世紀前葉		
137	206	81	25	A318土P1408、2075、2160、2202、2239、2274、2391、2698、2727、2871、一括	陶器	小盥	-	122.0	80.0	87.0		常滑	19世紀後葉		

遺物番号	実測番号	図版番号	写真図版番号	注記名	種別	器種名	形状等	A(口径)	B(底径)	C(器高)	D	産地	時期	銘	備考
138	207	81	25	A3 18 土 P2207、2272、A3 18 土一括	陶器	乗燭	台付たんころ形	52.0	40.0	46.0	60.0	益子	19 世紀後葉		底面糸切り 底面軸孔あり
139	208	81	25	A3 18 土 P2382	土器	焼塩壺蓋	-	62.0		7.0		江戸	19 世紀		
140	209	81	25	A3 18 土 P2386	土器	焼塩壺蓋	-	62.0		9.5		江戸	19 世紀		
141	210	81	25	A3 18 土 P2385、2392、2713、A3 18 土一括	土器	焙烙	-	311.0	298.0	48.5		不明	不明		
142	211	81	25	A3 25 土 P2185	磁器	中碗	端反形	92.0	93.0	43.0		肥前	19 世紀前～中葉		姉継あり
143	212	81	25	A3 25 土 P2230、A2 P1017	磁器	中碗	広葉形	110.0	60.0	66.0		肥前	18 世紀後～19 世紀前葉		口縁内に文様 見込み部に文様
144	471	81	25	A3 25 土 P2284	磁器	蓋	-	40.0	100.0	22.0		肥前	19 世紀中葉		内面被熱
145	470	81	25	A3 25 土 P2620	磁器	碗	端反形	110.0		(41.0)		肥前	19 世紀中葉		姉継あり 口縁内に文様 見込み部被熱
146	213	81	25	A3 25 土 P2155、2200、A2 P1011、1012	磁器	中皿	丸形		84.0	(37.0)		肥前	19 世紀中葉		
147	216	81	25	A3 25 土一括	陶器	灯明受皿	-	92.0	38.0	19.0		京・信楽	19 世紀前～中葉		
148	215	81	25	A3 25 土 P2494	陶器	灯明受皿	-	100.0	43.5	21.0		瀬戸・美濃	19 世紀後葉		
149	214	81	25	A3 25 土 P2500、2565、A3 一括 P1766	陶器	中瓶	「へこかん」形	104.0	104.0	(113.0)		瀬戸・美濃	19 世紀前～中葉		
150	217	81	25	A3 25 土 P2186、2198、2229、A2 P901、902	陶器	中甕	-	260.0		(131.0)		瀬戸・美濃	18 世紀後～19 世紀前葉		
151	28	81	25	A3 28 土 P2801、A1 2 襷一括	磁器	小瓶	端反辣形	16.0		(69.0)		肥前	19 世紀前～中葉		
152	218	81	25	A3 41 土 P2619	土器	土師質土器	-	110.0	66.0	(28.0)			16 世紀後葉		口唇部又付着
153	219	81	25	A3 42 土 P2747、A3 一括	磁器	小皿	丸形	97.0	55.0	26.5		瀬戸・美濃	19 世紀中葉		
154	220	82	25	A3 47 土 P2950	陶器	中瓶	-	26.0		(181.0)		瀬戸・美濃	18 世紀前葉		
155	361	82	25	A3 下 59 土 P3450	磁器	小杯	丸形	59.0	27.0	44.5		瀬戸・美濃 系	19 世紀中葉	高台内角片銘	口縁内に文様 見込み部に文様
156	362	82	25	A3 下 59 土 P3249、3254、3321、3452、3457、A3 P1812、1831	磁器	中皿	丸形	228.0	126.0	33.0		肥前	19 世紀中葉		
157	363	82	25	A3 下 59 土 P3247、3319、3458、A3 一括	磁器	中鉢	丸形	156.0	70.0	83.0		景德鎮	18 世紀後～19 世紀前葉	高台内角片銘	姉継あり 見込み部に文様 見込み部被熱
158	364	82	25	A3 下 59 土 P3456	磁器	燗德利	口縁無裝飾	29.5		(201.0)		肥前	19 世紀中葉		
159	365	82	25	A3 下 59 土一括	磁器	小碗	丸形	57.0	33.0	51.0		京焼	19 世紀中～後葉		口縁内に文様
160	366	82	25	A3 下 59 土 P3444、A3 下 59 土一括	磁器	小碗	端反形	60.0	28.0	48.0		京焼	19 世紀中～後葉		
161	371	82	25	A3 下 59 土 P3454、3455	陶器	土瓶蓋	-	64.0	34.0	12.0		京焼	19 世紀中～後葉		底面糸切り
162	372	82	25	A3 下 59 土 P3252	陶器	土瓶蓋	-	17.0	60.0	39.0		京・信楽	19 世紀中～後葉		
163	373	82	25	A3 下 59 土一括	陶器	土瓶蓋	-	59.0	25.0	(25.0)		不明	19 世紀後葉		
164	374	82	25	A3 下 59 土一括	陶器	中壺蓋	-	105.0	44.0	16.0		瀬戸・美濃	18 世紀後～19 世紀中葉		
165	393	82	25	A3 下 59 土 P3255	陶器	土瓶蓋	-	13.0	59.0	29.0		京・信楽	19 世紀前葉		
166	375	82	25	A3 下 59 土 P3453	陶器	土瓶底部	-	76.0	(10.0)			不明	19 世紀後～20 世紀前葉	底部墨書「コエリ」	
167	369	82	25	A3 下 59 土 P3368、3446、3461、A3 下 59 土一括	陶器	土瓶	丸形		66.0	(107.0)	(122.0)	京焼?	19 世紀中～後葉		
168	367	82	25	A3 下 59 土 P3243～3245、3257、3363～3366、A3 下 59 土一括、A3 一括、A4 一括、A3 下 59 土 P3248、3445、A3 下 59 土一括、A3 下 一括	陶器	土瓶	丸形	(70.0)	77.0	(107.0)	137.0	京・信楽?	19 世紀後～20 世紀前葉		
169	368	83	25	A3 下 一括	陶器	土瓶	丸形	73.0	79.0	125.0	132.0	京焼	19 世紀中～後葉		
170	370	83	25	A3 下 59 土一括、A3 下 一括	陶器	土瓶	丸形	74.0		(89.0)	(122.0)	京焼	19 世紀後葉		
171	378	83	25	A3 下 59 土 P3250	土器	焼塩壺蓋	-	59.0	62.0	8.5		江戸	19 世紀		
172	377	83	25	A3 下 59 土一括、A4 下 一括	土器	焼塩壺	浅桶形	58.0	42.0	54.0		江戸	19 世紀		底面糸切り
173	376	83	25	A3 下 60 土一括	陶器	大瓶	-	32.0		(40.0)		瀬戸・美濃	19 世紀前～中葉		
174	379	83	25	A3 下 60 土一括	陶器	瓶頸口	-	54.0	57.0	29.0		瀬戸・美濃	19 世紀前～中葉		
175	221	83	25	B3 152 土 P4642	磁器	中皿	丸形		72.0	(29.0)		肥前	18 世紀後葉		
176	222	83	25	B3 152 土 P4644、4645、4646	陶器	中皿	-	29.0		(116.0)		瀬戸・美濃	18 世紀前葉		
177	223	83	25	B3 156 土一括	磁器	小碗	丸形	64.0	34.0	51.0		瀬戸・美濃系	19 世紀中葉		口縁内に文様
178	225	83	25	B3 156 土 P4801	陶器	土瓶蓋	-	19.0	67.0	(20.0)		不明	19 世紀後葉		
179	226	83	25	B3 156 土 P4804	陶器	土瓶蓋	-	(41.0)	76.0	24.0		方古	19 世紀後葉		
180	314	83	25	B3 34 溝 P4758、B3 34 溝一括	陶器	五寸皿	-	152.0	70.0	35.0		京焼?	19 世紀後～20 世紀前葉		
181	224	83	25	B3 156 土一括、B2 一括	陶器	中皿	-	216.0	150.0	25.0		瀬戸・美濃	19 世紀前～中葉		
182	235	83	26	A3 3 溝 P2511	磁器	極小皿	-	44.0	20.0	8.0		瀬戸・美濃系	19 世紀中～後葉		

遺物番号	実測番号	図版番号	写真版番号	注記名	種別	器種名	形状等	A(口径)	B(底径)	C(器高)	D	産地	時期	銘	備考
183	232	83	26	A3 3 溝 P2551	磁器	小碗	平形	73.0	26.0	32.0		瀬戸・美濃系	19世紀中葉		
184	231	83	26	A3 3 溝 P2604	磁器	小碗	杉形	64.0	26.0	47.5		瀬戸・美濃	19世紀後葉	外面「茶者 風雅 栗」 高台内変形字銘	
185	228	83	26	A3 3 溝 P3348	磁器	小碗	腰張形	66.0	35.0	50.5		肥前	19世紀前～中葉		口縁内に文様
186	229	83	26	A3 3 溝 P2323	磁器	小碗	腰張形	68.0	38.0	46.5		瀬戸・美濃	19世紀中葉		
187	230	84	26	A3 3 溝 P2327	磁器	小碗	丸形	72.0	30.0	48.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		
188	227	84	26	A3 3 溝 P2515	磁器	中碗	丸形	104.0	40.0	52.5		瀬戸・美濃系	19世紀中葉	高台内変形字銘	口縁内に文様 見込み部に文様
189	1	84	26	A3 3 溝 P2484、2670	磁器	中碗	丸形	105.0	39.0	56.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉	高台内角碎銘	口縁内に文様 見込み部に文様
190	324	84	26	A3 3 溝一括、A2 P3203、A3 P1895、B3 35 溝一括	磁器	大碗	浅半球形	149.0	60.0	71.0		肥前	19世紀中葉		口縁内に文様
191	233	84	26	A3 3 溝 P2850、A3 3 溝一括	磁器	小碗	-	77.0	42.0	(29.0)		オランダ、イギリス	19世紀中～後葉		見込み部に文様
192	237	84	26	A3 3 溝 P3290	磁器	中碗蓋	-	102.0	(21.0)		肥前	18世紀後～19世紀前葉		口縁内に文様 見込み部に文様	
193	236	84	26	A3 3 溝 P2475、B 一括	磁器	中碗蓋	-	42.0	106.0	23.0		肥前	19世紀後～20世紀前葉	外面焼継印「イ」 内面焼継	内面に文様 見込み部に文様
194	234	84	26	A3 3 溝 P2465	磁器	小皿	丸形	126.0	75.0	34.0		肥前	19世紀中葉	高台内「口化年製」	見込み部被熱
195	239	84	26	A3 3 溝 P3332	磁器	柳徳利	-	52.0	(23.0)		瀬戸・美濃	19世紀中～後葉	底部墨書「キリメリ」		
196	240	84	26	A3 3 溝一括	磁器	柳徳利	-	52.0	(40.0)		瀬戸・美濃	19世紀中～後葉	底部墨書「サロ サメ」		
197	238	84	26	A3 3 溝 P2606	磁器	紅塔口	-	34.0	12.0	14.0		肥前	18世紀後～19世紀前葉		
198	243	84	26	A3 3 溝 P2546	陶器	土瓶蓋	-	18.0	33.0	20.0		京・信楽	19世紀後～20世紀前葉		
199	241	84	26	A3 3 溝 P3309	陶器	土瓶蓋	-	15.5	74.0	32.0		益子	18世紀後～19世紀前葉		
200	248	84	26	A3 3 溝一括	陶器	土瓶？	-			(23.0)		不明	不明	外面「口摩煎」	
201	246	84	26	A3 3 溝 P2547	陶器	灯明受皿	-	96.0	44.0	21.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		底部糸切り
202	247	84	26	A3 3 溝 P3305	陶器	兼燗	台付たんころ形		34.0			京・信楽	19世紀後葉		底部糸切り
203	245	84	26	A3 3 溝 P3389、3401	陶器	柳徳利	霽口形	49.0		(142.0)		京・信楽	19世紀中～後葉		底部糸切り
204	443	84	26	A3 3 溝 P3159、A3 一括、A3 P1433	陶器	中瓶	-	64.0	(105.0)		瀬戸・美濃	18世紀後葉			
205	244	84	26	A3 3 溝 P2341、2343、2344、2543	陶器	土鍋	-	156.0	56.0	62.0	172.0	在地？	20世紀前～中葉		
206	252	84	26	A3 3 溝 P2545	土器	焼壺蓋	-	57.0	64.0	8.5		江戸	19世紀		底部糸切り
207	251	84	26	A3 3 溝 P3379	土器	焼壺蓋	浅桶形	48.0	38.0	54.0		江戸	19世紀		底部糸切り
208	250	84	26	A3 3 溝 P3349	土器	焼壺蓋	浅桶形	48.0	36.0	55.0		江戸	19世紀		底部糸切り
209	249	84	26	A3 3 溝一括	土器	土師質土器	-	59.0	41.0	(16.0)		肥前	18世紀		
210	113	85	26	A3 6 溝 P2563、B2 25 溝 P4228	磁器	小碗	-	66.0	28.0	45.0		肥前	19世紀後葉		口縁内に文様 見込み部に文様
211	254	85	26	A3 6 溝 P2169、P2757、A3 6 溝一括、B 一括	磁器	中碗	丸形	114.0	42.0	66.0		肥前	19世紀中葉		
212	472	85	26	A3 6 溝一括、A 一括	磁器	皿	-	268.0	158.0	40.0		濱州窯	16世紀後～17世紀前葉		
213	255	85	26	A3 6 溝 P2772、A3 P2044	陶器	甕	-	320.0	(62.0)		瀬戸・美濃	19世紀中葉			
214	256	85	26	A3 6 溝 P2818	土器	土師質土器	-	60.0	(14.0)			18世紀			底部墨書
215	257	85	26	A3 7 溝 P2814	陶器	小碗	腰張形	92.0	32.0	54.5		肥前	18世紀後葉		口縁内に文様 見込み部に文様
216	259	85	26	A3 7 溝 P2835	陶器	灯明受皿	-	112.0	50.0	26.0		瀬戸・美濃	19世紀前葉		
217	260	85	26	A3 7 溝 P2806	土器	土師質土器	-	107.0	73.0	25.0			平安時代		底部糸切り
218	485	85	26	A3 7 溝一括	土師器	杯	-	77.0	42.0	(13.0)					底部墨書
219	496	85	26	A3 8 溝一括	陶器	-	-			(54.0)		不明	19世紀	外面墨書「二口 四口 口口」	
220	263	85	26	A3 8 溝 P2867	土器	土師質土器	-	53.0	38.0	14.0			18世紀		底部糸切り
221	264	85	26	A3 8 溝一括	土器	土師質土器	-	54.0	36.0	16.5			18世紀		底部糸切り
222	262	85	26	A3 8 溝 P2852	土器	土師質土器	-	57.0	40.0	15.5			18世紀		底部糸切り
223	261	85	26	A3 8 溝一括	土器	土師質土器	-	97.0	47.0	25.5			18世紀		底部糸切り
224	265	86	26	A3 9 溝 P2926	陶器	搦鉢	-	358.0		(77.0)		瀬戸・美濃	17世紀前葉		
225	152	86	26	A3 10 溝 P2930	陶器	搦鉢	-	64.0	(32.0)			瀬戸・美濃	16世紀後～17世紀前葉		
226	266	86	26	A3 10 溝 P2327	陶器	搦鉢	-		(55.0)			瀬戸・美濃	16世紀後～17世紀前葉		
227	267	86	26	A3 10 溝 P2933	陶器	搦鉢	-		(40.0)			瀬戸・美濃	16世紀後～17世紀前葉		
228	268	86	26	A3 10 溝 P2913	須恵器	甕	-		(49.0)				奈良・平安時代		

遺物番号	実測番号	図版番号	写真図版番号	注記名	種別	器種名	形状等	A(口径)	B(底径)	C(器高)	D	産地	時期	銘	備考
229	269	86	26	A3 10 溝 P2943	土器	土師質土器	-	132.0	94.0	30.0			16世紀後葉		底面糸切り
230	270	86	26	A3 10 溝 P2914	土器	土師質土器	-	140.0	84.0	21.5			16世紀後葉		
231	380	86	26	B3 下 11 溝一拵	磁器	中碗	丸形	100.0	34.0	54.0		肥前	18世紀後葉		口縁内に文様 見込み部に文様
232	381	86	26	B3 下 11 溝 P4699、B3 一拵	磁器	五寸皿	丸形	105.0	92.0	45.0		肥前	19世紀前~中葉		見込み部に文様
233	382	86	26	B3 下 11 溝 P3069	磁器	仏花瓶	-	88.0	(20.0)			肥前	19世紀中葉		見込み部に文様
234	383	86	26	B3 下 11 溝 P4700	磁器	中皿	-	40.0	(65.0)			肥前	19世紀前~中葉		高台内「富貴長春」
235	384	86	26	B3 下 11 溝一拵	土器	土師質土器	-	62.0	35.0	13.0		泉州	18世紀		底面布目痕
236	385	86	26	A3 下 17 溝 P3581	土器	焼壺蓋	-	78.0	73.0	18.0		瀬戸・美濃	18世紀前葉		見込み部に文様
237	274	87	26	B3 26 溝 P4323	磁器	小碗	腰張形	67.0	32.0	50.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		見込み部に文様 内面被熱
238	273	87	26	B3 26 溝一拵	磁器	小碗	端反形	55.0	48.0	58.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		口縁内に文様 見込み部に文様
239	271	87	26	B3 26 溝 P4313	磁器	中碗	端反形	106.0	42.0	59.0		瀬戸・美濃	19世紀前~中葉		口縁内に文様
240	275	87	26	B3 26 溝 P4315、B3 26 溝一拵	磁器	大皿	丸形	364.0	230.0	54.0		肥前	19世紀中葉		口縁内に文様 内面被熱
241	272	87	26	B3 26 溝一拵、A3 P1960、2029	磁器	大碗	浅半球形	146.0	48.0	67.5		肥前	19世紀中葉		口縁内に文様
242	277	87	26	B3 26 溝 P4348	磁器	燗德利	-	58.5	(13.0)			瀬戸・美濃	19世紀中~後葉		底部墨書「酒」
243	280	87	26	B3 26 溝一拵	陶器	燗德利	-	64.0	(13.0)			京・信楽	19世紀中~後葉		底部墨書「酒」
244	282	87	26	B3 26 溝 P4321	陶器	灯明皿	平形	67.0	27.5	18.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		
245	281	87	26	B3 26 溝 P4317	陶器	灯明皿	平形	113.0	44.0	27.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		口唇部スス付着
246	278	87	26	B3 26 溝 P4925	陶器	中皿	-	204.0	154.0	27.0		瀬戸・美濃	19世紀前~中葉		
247	279	87	26	B3 26 溝一拵	陶器	土瓶	-	68.0	(25.5)			京・信楽	19世紀中~後葉		底部墨書「コウ □□斤」
248	284	87	26	B3 26 溝 P4477	土器	蓋物蓋	-	48.0	24.0	13.0		不明	不明		
249	283	87	26	B3 26 溝 P4312	土器	榎木鉢	-	68.0	42.0	58.0		在地?	19世紀		底面糸切り
250	285	87	26	B3 26 溝 P4309	土器	焼壺蓋	-	60.0	61.0	9.0		江戸	19世紀		
251	286	87	26	B3 27 溝 P4904	陶器	小碗	-	70.0	34.0	37.0		不明	近代		
252	287	88	27	B3 28 溝 P4392	磁器	小碗	-	83.0	(46.0)			肥前	18世紀後~19世紀前葉		口縁内に文様
253	288	88	27	B3 28 溝 P4285	磁器	仏磁器	-	80.0	40.0	48.0		肥前	18世紀前~中葉		
254	290	88	27	B3 28 溝 P4617	陶器	中碗	-	100.0	(61.0)			瀬戸・美濃	18世紀中葉		
255	289	88	27	B3 28 溝 P4359	陶器	中碗	腰折形	126.0		(40.0)		京・信楽	18世紀中葉		底面糸切り
256	295	88	27	B3 28 溝 P4391	土器	土師質土器	-	81.0	50.0	14.5			中世前葉		
257	293	88	27	B3 28 溝 P4616	土器	土師質土器	-	53.0	36.0	12.0			16世紀後葉		
258	294	88	27	B3 28 溝 P4283	土器	土師質土器	-	94.0	56.0	21.0			18世紀		底面糸切り
259	291	88	27	B3 28 溝 P4282、25 溝 P4334、4337、4338	土器	土師質土器	-	200.0	118.0	41.5		江戸	18世紀後~19世紀中葉		底面糸切り
260	292	88	27	B3 28 溝 P4600	土器	土師質土器	-	98.0	55.0	26.0			18世紀		底面糸切り
261	299	88	27	B3 31 溝 P4525、B3 31 溝一拵	磁器	猪口	桶形	78.0	60.0	61.0		肥前	18世紀後~19世紀前葉		
262	298	88	27	B3 31 溝一拵	磁器	小碗	腰張形	86.0	33.0	46.0		肥前	18世紀後~19世紀前葉		口縁内に文様 見込み部に文様
263	297	88	27	B3 31 溝 P4510、B2 P4384	磁器	中碗	端反形	93.0	37.5	50.0		瀬戸・美濃	19世紀前葉		見込み部に文様
264	296	88	27	B3 31 溝 P4507、B3 一拵	磁器	中碗	端反形	102.0	38.0	58.0		肥前	19世紀前葉		見込み部に文様
265	300	88	27	B3 31 溝 P4512、B 一拵	磁器	小皿	丸形	127.0	58.0	30.5		瀬戸・美濃	19世紀中葉		見込み部に文様
266	301	88	27	B3 31 溝 P4511、4529	磁器	小皿	折縁形	108.0	54.0	25.0		肥前	19世紀前~中葉		
267	302	88	27	B3 31 溝 P4498、B3 31 溝一拵、B2 一拵	陶器	土師質土器	端反形	90.0	30.0	50.0		京・信楽	19世紀前葉		
268	303	88	27	B3 31 溝 P4516	陶器	土瓶蓋	-	18.0	58.0	37.0		京焼	19世紀中~後葉		
269	304	88	27	B3 31 溝 P4530	陶器	乘燗蓋	-	11.0	25.0	21.0		志戸呂	不明		
270	305	88	27	B3 31 溝 P4581、4583	陶器	土鍋	-	170.0	(65.0)			京・信楽	19世紀		
271	473	88	27	B3 31 溝 P4584	磁器	皿	-	140.0	(27.0)			漳州窯	16世紀後~17世紀前葉		
272	306	89	27	B3 31 溝 P4574	陶器	灯明受皿	-	92.0	40.0	21.0		瀬戸・美濃	19世紀中~後葉		
273	307	89	27	B3 31 溝一拵	瓦甕器	中皿?	-	57.0	9.0	61.0		不明	不明		刻書「天神上」
274	308	89	27	B3 32 溝 P4798	陶器	中皿	端反形	92.0	55.0	23.5		肥前	17世紀後葉		
275	309	89	27	B3 32 溝 P4713、4722、B3 32 溝一拵	磁器	丸形	丸形	125.0	70.0	37.0		肥前	17世紀後~18世紀前葉		
276	310	89	27	B3 32 溝 P4767、B3 32 溝一拵	陶器	中碗	呉器形	118.0	47.0	82.0		肥前	17世紀後~18世紀前葉		
277	311	89	27	B3 32 溝 P4712	陶器	土瓶蓋	-	114.0	50.0	28.0		京・信楽	18世紀後~19世紀前葉		
278	22	89	27	B3 32 溝一拵	土器	土師質土器	-	(77.0)	(42.0)	21.0			18世紀		底面糸切り

遺物番号	実測番号	図版番号	写真版番号	注記名	種別	器種名	形状等	A(口径)	B(底径)	C(器高)	D	産地	時期	銘	備考
279	312	89	27	B334溝 P4756	磁器	中碗	丸形	96.0	38.0	54.5		肥前	17世紀後葉		
280	995	89	27	B334溝 P4757	磁器	中碗	丸形	111.0	41.0	62.0		肥前	17世紀後葉	高台内「大明年製」	
281	996	89	27	B334溝 P4752	磁器	中碗	丸形	400	(49.0)			肥前	17世紀後葉	高台内「大明年製」	
282	997	89	27	B334溝 P4719	磁器	中碗	丸形	114.0	(49.0)			肥前	17世紀後葉		
283	313	89	27	B334溝一拵、A2 P943、954、963	磁器	中鉢	-		95.0	(73.0)		肥前	19世紀中葉		見込み部に文様
284	315	90	27	B334溝 P4718、4750、B334溝一拵、B32石 P4788、B1 1敷一拵、B2一拵	陶器	中甕	-	396.0	(220.0)			丹波?	17世紀後葉		
285	317	90	27	B334溝 P4776	土器	土師質土器	-	45.0	32.0	16.5			18世紀		底面糸切り
286	321	90	27	B334溝一拵	土器	土師質土器	-	50.0	30.0	13.0			18世紀		底面糸切り
287	320	90	27	B334溝一拵	土器	土師質土器	-	52.0	32.0	13.0			18世紀		底面糸切り 口唇部又入付着
288	316	90	27	B334溝 P4721	土器	土師質土器	-	55.0	40.0	14.5			18世紀		底面糸切り 口唇部又入付着
289	318	90	27	B334溝 P4789	土器	土師質土器	-	75.0	45.0	17.5			17世紀後葉		底面糸切り
290	319	90	27	B334溝一拵	土器	土師質土器	-	102.0	60.0	23.0			18世紀		底面糸切り
291	322	90	27	B334溝 P4710	土器	土師質土器	-		52.0	(11.0)			18世紀		底面糸切り
292	323	90	27	B334溝 P4720	土器	土師質土器	-		65.0	(14.0)			18世紀		底面糸切り
293	325	90	27	B335溝 P4657	磁器	中皿	丸形	132.0	70.0	35.0		肥前	19世紀中葉	高台内「成化年製」	
294	326	90	27	B335溝一拵	陶器	仏飯器	-		50.0	(41.0)		瀬戸・美濃	19世紀		
295	327	90	27	B336溝一拵	磁器	中碗	-	92.0	32.5	60.0		肥前	18世紀後～19世紀前葉		口縁内に文様 見込み部に文様 見込み部襷
296	328	90	27	B336溝一拵	陶器	灯明受皿	-	102.0	48.0	21.0		瀬戸・美濃	19世紀前～中葉		
297	387	91	27	B338溝 P4704	磁器	薄手酒杯	丸形	53.0	22.0	26.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		
298	388	91	27	B338溝一拵	磁器	紅猪口	-	60.0	17.0	18.0		瀬戸・美濃	19世紀中～後葉		
299	389	91	27	B338溝一拵	陶器	急須蓋	-	15.0	72.0	16.5		不明	19世紀後～20世紀前葉		
300	399	91	27	A472土一拵	土師器	甕	-		(44.5)				奈良・平安時代		駿東型甕
301	400	91	27	A474土一拵	土師器	甕	-		(35.0)				平安時代		甲斐型甕
302	402	91	27	A478土 P3326	磁器	小瓶	-		45.0	(105.0)		瀬戸・美濃	19世紀前～中葉		
303	401	91	27	A478土 P3327、3328、3329	磁器	小瓶	-		30.0	40.0		肥前	18世紀後～19世紀前葉		
304	404	91	27	A478土 P3280	陶器	小杯	端反形	64.0	85.0	51.0		京焼	19世紀中葉		
305	403	91	27	A478土 P3276	陶器	小碗	端反形	85.0	32.0	51.0		京・信楽	19世紀前～中葉		
306	406	91	27	A478土 P3285	陶器	捏鉢	-		158.0	(88.0)		瀬戸・美濃	19世紀前～中葉		
307	408	91	27	A478土 P3492、3495	陶器	土鍋	-	208.0	98.0	128.0	239.0	京・信楽	19世紀前～中葉		
308	407	91	27	A478土 P3270、3271、3272、3273	陶器	片口	-	188.0	128.0	(67.5)		瀬戸・美濃	18世紀後～19世紀前葉		
309	405	92	27	A478土 P3494	陶器	搥鉢	-		50.0	46.0	26.0	瀬戸・美濃	18世紀前～中葉		底面糸切り
310	409	92	27	A478土 P3282	陶器	兼燗	雀形			(33.0)		江戸	19世紀中～後葉		内・外面ミカキ
311	481	92	28	A4 P3289	土師器	杯	-		52.0	(28.0)			奈良・平安時代		底面糸切り
312	410	92	28	A489土 P3388	土師器	杯	-	127.0	66.0	28.5		瀬戸・美濃	19世紀中～後葉		
313	411	92	28	A4112土 P3556	磁器	小皿	丸形	80.0	32.0	44.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		
314	413	92	28	A4122土 P3434、A2 P1385	磁器	小碗	端反形	64.0	35.0	55.0		瀬戸・美濃	18世紀後～19世紀前葉		口縁内に文様 見込み部に文様 見込み部襷
315	414	92	28	A4122土 P3412	磁器	小碗	半筒形	103.0	42.0	58.0		瀬戸・美濃	19世紀前～中葉		
316	412	92	28	A4122土 P3558、A4122土一拵	磁器	中碗	端反形	(155.0)	82.0	71.0		肥前	19世紀前～中葉		
317	415	92	28	A4122土 P3359	磁器	中鉢	-	63.0	46.0	17.0		京・信楽	19世紀後～20世紀前葉		
318	418	92	28	A4122土 P3578	陶器	土瓶蓋	-	23.0	86.0	39.0		益子	19世紀後～20世紀前葉		
319	417	92	28	A4122土 P3437	陶器	土瓶蓋	-	95.0	39.0	23.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		
320	420	92	28	A4122土 P3560	陶器	灯明皿	平形	91.0	40.0	21.0		瀬戸・美濃	19世紀中～後葉		
321	419	92	28	A4122土 P3577	陶器	灯明受皿	-	290.0		(118.0)		瀬戸・美濃	19世紀後葉		
322	422	93	28	A4122土一拵	陶器	中甕	-	170.0	(95.0)			瀬戸・美濃	19世紀後葉		
323	421	93	28	A4122土一拵	陶器	中甕	-	60.0	63.0	11.0		江戸	19世紀		
324	423	93	28	A4122土 P3561	土器	焼場蓋	-		(30.0)				縄文時代中期		
325	490	93	28	A4122土一拵	土器	深鉢	-		(46.0)				縄文時代中期		
326	488	93	28	A4122土一拵	土器	深鉢	-		(60.0)				縄文時代中期		
327	489	93	28	A4122土一拵	土器	深鉢	-								

遺物番号	実測番号	図版番号	写真版番号	注記名	種別	器種名	形状等	A(口径)	B(底径)	C(器高)	D	産地	時期	銘	備考
328	493	93	28	A4 124 土一拵	磁器	薄手酒杯	端反形	70.0	27.0	28.0		瀬戸・美濃	19世紀中～後葉		見込み部に文様
329	424	93	28	A4 124 土 P3478、3521、A4 124 土一拵	陶器	中碗	端反形	92.0	34.0	49.0		瀬戸・美濃	18世紀後～19世紀前葉		
330	426	93	28	A4 124 土一拵	陶器	合子蓋	-	54.0	60.0	11.5		京・信楽	18世紀後葉		
331	425	93	28	A4 124 土 P3443、3476、A4 124 土一拵	陶器	合子蓋	-	95.0	94.0	12.5		瀬戸・美濃	18世紀後～19世紀前葉		
332	427	93	28	A4 124 土 P3406、3441、3499、3529、3572、A4 124 土一拵、A4 P3189、A3 一拵	陶器	爛徳利	-	(90.0)		(217.0)		京・信楽	19世紀中～後葉		外面被熱
333	428	93	28	A4 124 土 P3407、3442、3475、3524、3528、3530、A4 124 土一拵	陶器	擂鉢	-	310.0	150.0	136.0		瀬戸・美濃	18世紀後葉		
334	430	94	28	A4 134 土 P3422	土師器	坏	-			(44.0)			平安時代		見込み部略文あり 甲斐型 木葉痕あり
335	429	94	28	A4 134 土 P3505	土師器	甕	-	66.0	(16.0)			肥前	奈良・平安時代	高台内「筒江」	堀之内原 type
336	431	94	28	B4 179 土 P4915、4916	磁器	小碗	半筒形	90.0	62.0	62.0			18世紀中葉		
337	432	94	28	A4 4 溝 P2923	陶器	甕	-			(147.0)					
338	434	94	28	A4 4 溝 P2855	土器	土師質土器	-	94.0	60.0	16.0			17世紀後葉		
339	433	94	28	A4 4 溝 P1828	土器	拍毬	-	88.0		(38.0)					金属溶融物が付着
340	466	94	28	B4 42 溝 P4919、B4 一拵	陶器	灰釉皿	-	92.0	55.0	(25.0)		瀬戸・美濃	16世紀後葉		大窯
341	435	94	28	B4 42 溝 P4921	陶器	灰釉皿	-	76.0	(20.0)			瀬戸・美濃	16世紀後葉		大窯
342	329	94	28	B4 42 溝 P4920	土器	香炉	-	88.0	63.0	35.0			16世紀後葉		底面糸切り
343	47	95	28	A1 P42	磁器	小坏	端反形	49.0	18.0	28.0		瀬戸・美濃	20世紀前～中葉		
344	48	95	28	A1 一拵	磁器	小坏	平形	56.0	26.0	29.0		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉	外面「新こん旅行ハ不二 登山ときめてをきましよ そのうち」	
345	49	95	28	B1 一拵	磁器	小坏	端反形	50.0	18.0	30.5		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉	外面「□治まる時つ風 杖をならさぬ御代□」	
346	46	95	28	A1 P89	磁器	小碗	-	49.0	32.0	60.0		瀬戸・美濃	20世紀前葉	外面「□村町 酒肆新津商店 雑貨」	
347	42	95	28	A1 P417	磁器	小碗	腰折形	66.5	32.0	53.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		
348	45	95	28	B1 一拵	磁器	小碗	腰折形	74.0	29.0	49.0		瀬戸・美濃	20世紀前～中葉	高台内「丹山」	
349	43	95	28	B1 P4014	磁器	小碗	丸形	80.0	38.0	50.5		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉	角料銘	
350	44	95	28	B1 P4017	磁器	小碗	丸形	81.0	28.5	49.0		九谷	19世紀後～20世紀前葉	高台内「九谷」	
351	40	95	28	B1 P4031	磁器	中碗	丸形	100.0	36.0	48.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		口縁内に文様 見込み部に文様
352	41	95	28	B1 一拵	磁器	小碗	半筒形	84.0	44.0	71.0		肥前	18世紀後葉		口縁内に文様
353	39	95	28	B1 一拵	磁器	中碗	腰折形	105.0	36.0	59.5		瀬戸・美濃	19世紀中葉		口縁内に文様 見込み部に文様
354	38	95	28	A1 P132、A3 P1652、A1 一拵、A2 一拵、A3 一拵	磁器	中碗	丸形	109.0	39.0	55.5		肥前	19世紀中葉		口縁内に文様 見込み部に文様 内面に文様
355	51	95	28	A1 P3163	磁器	中碗蓋	-	56.0	102.0	27.0		肥前	18世紀後～19世紀前葉		
356	52	95	28	A1 P3117、A2 P1477	磁器	合子蓋	-	55.0	47.0	11.5		瀬戸・美濃	18世紀後～19世紀前葉		
357	53	95	28	B1 一拵	磁器	合子蓋	-	55.0	44.0	9.0		瀬戸・美濃	18世紀後～19世紀前葉		
358	54	95	28	A1 一拵、B1 一拵	磁器	小瓶	-	48.0	(9.0)			肥前	19世紀前～中葉		
359	55	95	28	A1 一拵	磁器	水滴	-	幅365	長390	19.0		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉		
360	56	95	28	A1 一拵、A 一拵	磁器	水滴	-	幅310	高480	29.0		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉		
361	61	95	28	A1 P348	陶器	灯明皿	平形	66.0	22.0	14.0		京・信楽	19世紀前～中葉		
362	62	95	28	A1 一拵	陶器	灯明受皿	-	94.0	42.0	19.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		
363	57	95	28	B1 一拵	陶器	土瓶蓋	-	27.0	32.0	20.5		京・信楽	近代		
364	58	95	28	B1 一拵	陶器	土瓶蓋	-	60.0	(24.0)			益子	19世紀後～20世紀前葉		
365	59	95	28	A1 一拵	陶器	土瓶蓋	-	88.0	(22.0)			不明	19世紀後～20世紀前葉		
366	64	95	28	A1 P820	陶器	中甕	-	(137.0)	(42.0)			益子?	19世紀後～20世紀前葉		
367	63	95	28	A1 P3111、A3 一拵	陶器	中甕	-	(180.0)		(83.0)		瀬戸・美濃	18世紀後～19世紀		
368	130	96	28	B2 P4295	磁器	小碗	杉形	67.0	25.0	42.0		肥前	19世紀後葉	高台内「□造」	口縁内に文様
369	129	96	28	A2 P1438	磁器	小碗	杉形	67.0	34.0	46.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉	角料銘	口縁内に文様
370	127	96	28	B2 P4369	磁器	小碗	腰折形	78.0	30.0	47.0		肥前	18世紀後～19世紀前葉		口縁内に文様
371	128	96	28	A2 P1469	磁器	小碗	腰折形	87.0	44.0	47.0		肥前	19世紀前～中葉		見込み部に文様
372	125	96	28	A2 P801、A3 一拵	磁器	小碗	端反形	93.0	38.0	47.0		瀬戸・美濃	19世紀前葉		口縁内に文様 見込み部に文様

遺物番号	実測番号	図版番号	写真図版番号	注記名	種別	器種名	形状等	A(口径)	B(底径)	C(器高)	D	産地	時期	銘	備考
373	122	96	28	B2 P4243	磁器	中碗	丸形	93.0	38.0	53.0		肥前	18世紀中～後葉		
374	121	96	28	B2一拵	磁器	中碗	腰折形	96.0	38.0	55.0		肥前	19世紀前～中葉		口縁内に文様 見込み部に文様
375	123	96	28	A2 P1024、1057、A3一拵	磁器	中碗	丸形	108.0	34.0	54.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉	角持銘	口縁内に文様
376	126	96	28	B2 P4055	磁器	中碗	平形	108.0	34.0	42.0		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉	変形字銘	口縁内に文様
377	124	96	28	A2 P1013	磁器	小碗	端反形	92.0		(31.5)		肥前	19世紀前～中葉		
378	138	96	28	A2 P1387	磁器	蓋物蓋	-	18.0	104.0	30.0		肥前	18世紀		
379	140	96	28	B2 P4174、B2一拵	磁器	中碗蓋	-	59.0	108.0	25.0		肥前	18世紀後葉		内面に文様
380	137	96	28	A2 P462	磁器	種小皿	-	74.0	38.0	12.0		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉		
381	135	96	28	B2一拵、A3一拵	磁器	小皿	丸形	93.0	48.0	24.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		
382	136	96	28	B2一拵	磁器	小皿	-	94.0	46.0	18.0		肥前	19世紀前～中葉		
383	132	96	28	B2 P4217	磁器	小皿	端反形	102.0	55.0	21.0		肥前	18世紀後葉		
384	133	96	28	A2 P1371	磁器	小皿	丸形	108.0	66.0	25.0		肥前	19世紀前葉		
385	134	96	28	A2 P3198、A3 P2117、A2一拵	磁器	小皿	丸形	106.0	58.0	25.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		見込み部襷縁
386	131	97	29	A2 P1485、A3一拵	磁器	紅猪口	-	53.0	15.0	25.0		肥前	19世紀前～中葉		
387	142	97	29	B2 P4059	磁器	紅猪口	-	58.0	24.0	14.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		
388	141	97	29	B2 P4294	磁器	紅猪口	-	(65.0)	28.0	19.0		瀬戸・美濃	19世紀		
389	143	97	29	B2 P4219	磁器	散蓮華	-			(28.0)		瀬戸・美濃	19世紀中葉		
390	474	97	29	B2 P4370、B2一拵	磁器	皿	-	94.0		(12.0)		澁州窯	16世紀後～17世紀前葉		
391	492	97	29	A2一拵	陶器	中碗	轉輪形	96.0	35.0	96.0		萩	18世紀後～19世紀前葉		
392	144	97	29	A2 P1360	陶器	中碗	天目形	124.0	44.0	65.0		瀬戸・美濃	17世紀前葉		
393	150	97	29	B2一拵	陶器	合子蓋	-	22.5	50.0	27.0		不明	不明		
394	145	97	29	A2 P1726	陶器	急須蓋	-	11.0	28.0	18.0		益子	19世紀後～20世紀前葉		底面糸切り
395	148	97	29	B2一拵	陶器	土瓶蓋	-	14.0	50.0	31.0		京・信楽	19世紀中～後葉		
396	149	97	29	A2一拵	陶器	急須蓋	-	29.5	76.0	23.0		方古	19世紀後～20世紀前葉		
397	147	97	29	B2 P4046	陶器	中壺蓋	-	81.0	50.0	13.0		瀬戸・美濃	18世紀後～19世紀中葉		底面糸切り
398	146	97	29	A2 P3355	陶器	土瓶蓋	-	11.0	60.5	28.5		京・信楽	19世紀前～中葉		
399	463	97	29	A2一拵	陶器	皿	-	114.0	65.0	25.0		瀬戸・美濃	17世紀前葉		
400	158	97	29	A2 P1061	陶器	灯明皿	平形	(98.0)	40.0	21.0		瀬戸・美濃	19世紀前～中葉		
401	159	97	29	A2 P687	陶器	灯明受皿	-	74.0	48.0	51.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		
402	160	97	29	B2一拵	陶器	灯明受皿	-	50.0	55.0	56.0		京・信楽	19世紀前～中葉		外面墨書「との」 「井御□□代」
403	156	97	29	B2一拵	陶器	鉢	-		7.00	(33.5)		京・信楽?	不明		
404	155	97	29	A2 P1541	陶器	片口	-	82.0	47.5			瀬戸・美濃	18世紀後～19世紀前葉		
405	161	97	29	A2一拵	陶器	小杯	-	50.0	40.0	23.5		不明	近代		
406	151	97	29	A2 P1108、1109、B2一拵	陶器	種鉢	-	340.0	160.0	165.0		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉		
407	157	98	29	A2 P1394	陶器	瓶	-	102.0		(175.0)		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉	外面「□店」 外面「寿」	底面糸切り
408	494	98	29	B2 P4202	土器	小壺	-	20.0	35.0	70.0		京都	19世紀		
409	153	98	29	B2 P4365	陶器	種鉢	-			(51.0)		瀬戸・美濃	17世紀前葉		底面糸切り
410	154	98	29	B2一拵	陶器	種鉢	-		98.0	(71.0)		瀬戸・美濃	16世紀後～17世紀前葉		底面糸切り
411	467	98	29	A2一拵、A3一拵	陶器	皿	-			(34.0)		唐津	17世紀前葉		
412	468	98	29	A2 P2833	陶器	鉢	-		41.0			美濃	16世紀後～17世紀前葉		見込み部に文様
413	163	98	29	A2 P1364	土器	埴輪蓋	-	60.0	63.0	11.0		江戸	19世紀		底面布目痕
414	162	98	29	A2 P717、A2一拵	土器	燒壺蓋	-	80.0	76.5	20.0		泉州	18世紀前葉		底面布目痕
415	447	98	29	B2一拵	土器	土師蓋	-	83.0	52.0	(24.5)		中世前葉	中世前葉		底面糸切り
416	446	98	29	B2 P4044	土器	土師質土器	-	90.0	52.0	20.0			18世紀		底面糸切り
417	338	98	29	A3 P1750	磁器	薄手酒杯	端反形	60.0	25.0	30.1		瀬戸・美濃	19世紀中～後葉		見込み部に文様
418	339	98	29	A3 P1888	磁器	小碗	杉形	56.0	24.0	40.0		瀬戸・美濃	19世紀後～20世紀前葉		
419	335	98	29	B3一拵	磁器	小碗	腰折形	60.0	36.0	47.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		口縁内に文様
420	334	98	29	A3 P1571	磁器	小碗	筒丸形	68.0	52.0	61.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		
421	333	98	29	B3 P4372	磁器	小碗	筒丸形	69.0	34.0	51.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		
422	332	98	29	A3 P1784	磁器	小碗	丸形	76.0	28.0	36.0		肥前	18世紀中～後葉		
423	331	98	29	B3 P4647	磁器	中碗	丸形	100.0	40.0	52.0		肥前	18世紀前葉		口縁内に文様
424	336	98	29	A3 P1925	磁器	大碗	淺半球形	150.0		(57.0)		肥前	19世紀中葉		

遺物番号	実測番号	図版番号	写真図版番号	注記名	種別	器種名	形状等	A(口径)	B(底径)	C(器高)	D	産地	時期	銘	備考
425	330	99	29	A3 P2048、2053、2071、立会調査地点2	磁器	大碗	浅半球形	152.0	48.0	65.0		肥前	19世紀中葉		口縁内に文様 見込み部に文様
426	340	99	29	A3 P1570	陶器	蓋物蓋	-	14.0	35.0	22.0		肥前	19世紀前~中葉		
427	341	99	29	A3 P1252	磁器	段重蓋	-	80.0	67.0	13.0		肥前	19世紀前葉		
428	337	99	29	A3一拵	磁器	中皿	丸形	128.0	76.0	(31.0)		肥前	19世紀前~中葉		
429	50	99	29	A3 P1942、B1一拵、B一拵	磁器	大皿	-	138.0	(32.0)			肥前	19世紀後~20世紀前葉	高台内変形字銘	
430	342	99	29	A3一拵	磁器	合子	-	46.0	49.0	18.0		瀬戸・美濃	19世紀後~20世紀前葉		
431	475	99	29	A3 P1611、A2一拵	磁器	皿	-	268.0		(37.0)		津州窯	16世紀後~17世紀前葉		
432	346	99	29	B3一拵	陶器	土瓶蓋	-	27.0	28.0	23.0		不明	19世紀後葉		底面糸切り
433	344	99	29	B3 P4298	陶器	土瓶蓋	-		58.0	(20.0)		京・信楽?	19世紀中~後葉		
434	345	99	29	A3 P1435	陶器	土瓶蓋	-		62.5	(25.0)		京・信楽?	19世紀中葉		
435	347	99	29	A3 P2040、B一拵	陶器	土瓶蓋	-	14.5	76.0	30.0		京・信楽	19世紀中葉		
436	348	99	29	A3 P2035	陶器	蓋	-	37.0	47.0			京焼?	不明		
437	349	99	29	A3 P1622	陶器	蓋	-	35.0	(12.0)			不明	不明		
438	360	100	29	A3 P1941、2041	陶器	灯明皿	平形	92.0	39.0	22.0		瀬戸・美濃	19世紀		
439	358	100	29	A3一拵	陶器	灯明受皿	-	95.0	40.0	20.0		瀬戸・美濃	19世紀前~中葉		
440	355	100	29	A3 P2789	陶器	灯明受皿	-	95.0	43.0	18.0		瀬戸・美濃	19世紀前~中葉		
441	359	100	29	A3 P1645、1734	陶器	灯明受皿	-	100.0	45.0	22.0		瀬戸・美濃	19世紀前~中葉		
442	357	100	29	A3 P2147	陶器	灯明受皿	-	79.0	34.0	20.0		瀬戸・美濃	19世紀中~後葉		
443	356	100	29	A3一拵	陶器	灯明受皿	-	105.0	51.0	19.0		瀬戸・美濃	19世紀中~後葉		
444	354	100	29	B3 P4371	陶器	灯明受皿	-	92.0	48.0	24.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		
445	353	100	29	B3 P4564	陶器	灯明受皿	-	96.0	36.0	25.0		瀬戸・美濃	19世紀後葉		
446	343	100	29	B3一拵	陶器	急須	-	41.0	14.0			常滑	19世紀後葉	取手「壬三」	
447	352	100	29	A3 P2892	陶器	小瓶	-	28.0	(75.0)			不明	近代		底面糸切り
448	350	100	29	A3 P2030	陶器	中瓶	「ぺこかん」形	90.0	(112.0)			瀬戸・美濃	19世紀前~中葉		
449	351	100	29	A3 P1689、1690、1745	陶器	鉢	-	120.0	100.0	134.0		不明	近代		
450	258	100	29	A3 P1936、1937、1975、2006、2973	陶器	片口	-	164.0	87.0	89.0		瀬戸・美濃	19世紀前葉		
451	465	100	30	A3 P2063	陶器	鉢	-	56.0	(29.0)			唐津	17世紀前葉		見込み部に文様
452	981	100	30	A3 P1924	陶器	鉄軸皿	-	99.0	55.0	18.5		初山	16世紀中~後葉		
453	480	100	30	A3一拵	土師器	杯	-	60.0				平安時代			底面糸切り
454	478	100	30	A3 P1940	土師器	杯	-	66.0	(18.0)			平安時代			甲斐型坏
455	484	100	30	A3一拵	土師器	甕	-		(40.0)			奈良・平安時代			駿東型甕
456	483	100	30	A3一拵	土師器	甕	-		(44.0)			奈良・平安時代			駿東型甕
457	454	100	30	B3 P4566	土器	土師質土器	-	62.0	(11.0)			16世紀中葉			底面糸切り
458	450	100	30	B3 P4399	土器	土師質土器	-	116.0	62.0	22.0		16世紀後葉			底面糸切り
459	453	100	30	A3一拵	土器	土師質土器	-	146.0	88.0	(22.0)		16世紀後葉			底面糸切り
460	448	101	30	A3 P2976	土器	土師質土器	-	111.0	66.0	25.0		17世紀前葉			底面糸切り 口唇部又付着
461	449	101	30	A3 P2397	土器	土師質土器	-	100.0	56.0	24.5		17世紀後葉			底面糸切り
462	455	101	30	A3一拵	土器	土師質土器	-	54.0	40.0	13.0		18世紀			底面糸切り
463	451	101	30	B3一拵	土器	土師質土器	-	72.0	42.0	(20.0)		18世紀			底面糸切り
464	390	101	30	A3下P3019	磁器	小碗	半球形	34.0	(45.0)			肥前	18世紀後葉		見込み部に文様
465	391	101	30	A3下P3066	磁器	中皿	丸形	136.0	46.0	33.0		肥前	18世紀中葉		
466	395	101	30	A4一拵	陶器	灯明皿台	-	88.0	80.0	55.0	160.0	瀬戸・美濃	18世紀前葉		
467	396	101	30	A4一拵	陶器	カンテラ	-	50.0	48.0	36.0	96.0	京・信楽	19世紀前~中葉		
468	394	101	30	A3下P3048	陶器	灯明受皿	-	108.0	50.0	18.0		瀬戸・美濃	18世紀後葉		
469	398	101	30	A3下P3021	土器	七厘(さな)	-	104.0	104.0	14.0		不明	19世紀中~後葉		
470	392	101	30	A3下P3072	陶器	中皿	-	196.0	100.0	38.0		瀬戸・美濃	17世紀前葉		
471	397	101	30	A4 P4845	土器	焼塩蓋	-	62.0	64.0	10.0		江戸	19世紀		
472	477	101	30	A3下P3091	土師器	坏	-	106.0		(42.0)		平安時代			甲斐型坏
473	479	101	30	A3下一拵	土師器	坏	-	134.0		(41.0)		平安時代			甲斐型坏
474	482	101	30	A3下一拵	土師器	坏	-			(47.0)		奈良・平安時代			武蔵型甕
475	456	101	30	A3下P2977	土器	土師質土器	-	110.0	63.0	23.0		中世前葉			底面糸切り
476	452	101	30	A4一拵	土器	土師質土器	-	126.0	94.0	(30.0)		16世紀中葉			口唇部又付着

遺物番号	実測番号	図版番号	写真図版番号	注記名	種別	器種名	形状等	A(口径)	B(底径)	C(器高)	D	産地	時期	銘	備考
477	457	101	30	A3 下P3039	土器	土師質土器	-	100.0	58.0	27.0			17世紀後葉		底面糸切り
478	458	101	30	A4 P4802	土器	土師質土器	-	110.0	66.0	(22.5)			17世紀後葉		底面糸切り
479	437	102	30	B4 P4908	陶器	中碗	腰張形	106.0	46.0	73.0		肥前	18世紀前葉		
480	982	102	30	A4一括	陶器	鉄袖皿	-	108.0	64.0	25.0		瀬戸・美濃	16世紀後葉		大窯
481	438	102	30	A4一括	陶器	槽鉢	-	329.0	154.0	136.0		瀬戸・美濃	18世紀前葉		
482	491	102	30	A4一括	土器	深鉢	-			(65.0)			縄文時代中期		
483	487	102	30	A4 P3589	須恵器	蓋	-		166.0	(21.0)			奈良・平安時代		
484	460	102	30	A4一括	土器	土師質土器	-	64.0	30.0	14.0			16世紀後葉		底面糸切り
485	459	102	30	B4 P4901	土器	土師質土器	-	100.0	56.0	21.5			17世紀後葉		底面糸切り
486	436	102	30	A4一括	磁器	小碗	半筒形	89.0	44.0	73.0		瀬戸・美濃	19世紀中葉		口縁内に文様
487	445	102	30	立倉調査地点2	磁器	中碗	-	50.0	50.0	(39.0)		瀬戸・美濃	20世紀中葉		高台内「瀬496」
488	439	102	30	A一括	磁器	中碗蓋	-	36.0	93.0	28.0		肥前	19世紀前～中葉		内面に文様
489	442	102	30	A一括	陶器	土瓶蓋	-		44.0	44.0		松岡	19世紀中葉		
490	441	102	30	A一括	陶器	土瓶蓋	-	16.5	56.0	24.0		京・信楽	19世紀中～後葉		
491	440	102	30	A一括	陶器	中蓋	-	107.0	78.0	16.5		瀬戸・美濃	18世紀後～19世紀前葉		底面糸切り
492	464	102	30	B一括	陶器	碗	-		50.0	(27.5)		唐津	17世紀前葉		見込み部に文様
493	444	102	30	A一括	陶器	槽鉢	-			(58.0)		瀬戸・美濃	18世紀後葉		内面「大」
494	461	102	30	A一括	土器	土師質土器	-	56.0	30.0	13.0			18世紀		底面糸切り
495	462	102	30	A一括	土器	土師質土器	-	64.0	36.0	(16.0)			18世紀		底面糸切り
1098	1100		31	-	陶器	鉢	-						12～14世紀		
1101			31	-	陶器	甕	-						12～14世紀		
1102	1117		31	-	陶器	灰袖皿	-					瀬戸・美濃	16世紀		
1118	1126		31	-	陶器	甕	-					常滑	16世紀		
1127	1128		31	-	土器	槽鉢	-						16世紀		
1129	1130		31	-	土器	土師質土器	-						16世紀		
1131	1143		32	-	陶器	碗・鉢等	-					美濃	16世紀後～17世紀前葉		
1144	1146		32	-	陶器	碗	-					唐津	17世紀前葉		沓茶碗
1147	1159		32	-	陶器	碗・鉢等	-					唐津	17世紀前葉		
1160	1162		32	-	陶器	手鉢等	-					御茶井	17世紀		
1163	1166		32	-	陶器	甕	-					信楽	17世紀前葉		
1167			33	-	磁器	盤	-					龍泉窯	15世紀		
1168			33	-	磁器	碗	-					龍泉窯	15世紀		
1169			33	-	磁器	碗	-					景德鎮窯	16世紀		
1170			33	-	磁器	碗	-					景德鎮窯	16世紀		
1171			33	-	磁器	碗	-					景德鎮窯	16世紀		
1172	1173		33	-	磁器	碗・皿	-					龍泉窯	15～16世紀		
1174	1175		33	-	磁器	皿	-					景德鎮窯	13世紀後葉		
1176			33	-	磁器	碗	-					景德鎮窯	14世紀後葉		
1177	1181		33	-	磁器	皿	-					景德鎮窯	15世紀後葉		
1182	1191		33	-	磁器	碗・皿	-					景德鎮窯	16世紀後葉		
1192	1195		33	-	磁器	皿	-					漳州窯	16世紀後～17世紀前葉		
1196	1203		33	-	磁器	皿	-					漳州窯	16世紀後～17世紀前葉		
1204	1207		33	-	磁器	皿	-					漳州窯	16世紀後～17世紀前葉		
1208	1210		33	-	磁器	皿	-					漳州窯	16世紀後～17世紀前葉		
1211	1213		33	-	磁器	皿	-					漳州窯	16世紀後～17世紀前葉		
1214	1215		33	-	磁器	碗	-					漳州窯	16世紀後～17世紀前葉		
1216	1218		33	-	磁器	碗	-					景德鎮窯	16世紀後～17世紀前葉		
1219			33	-	磁器	碗	-					景德鎮窯	16世紀後～17世紀前葉		
1220			33	-	磁器	碗	-					景德鎮窯	16世紀後～17世紀前葉		
1221			33	-	磁器	碗	-					景德鎮窯	16世紀後～17世紀前葉		
1222			33	-	磁器	碗	-					景德鎮窯	16世紀後～17世紀前葉		
1223			33	-	磁器	芙蓉手鉢	-					景德鎮窯	17世紀前葉		
1224	1229		33	-	磁器	碗	-					景德鎮窯	17世紀後～18世紀前葉		
1230			33	-	磁器	碗	-					景德鎮窯	17世紀後～18世紀前葉		

第V章 理化学的分析

第1節 谷村城から出土した動物遺体

植月 学（山梨県立博物館）

はじめに

本稿では谷村城の平成26～27年度調査地点において出土した動物遺体について報告する。調査では近世前期から近代に属する土坑や溝などの遺構より貝類を主体とする動物遺体が出土している。動物遺体が多く出土したのは19世紀の谷村陣屋段階の遺構であり、その他の時期は少ない。

1. 資料と分析方法

資料はほとんどが発掘調査時に肉眼観察により採取された標本（以下、現場採取資料）である。一部の遺構（16号土坑、18号土坑、59号土坑）では水洗選別用サンプルが採取された。サンプルは16号土坑では骨類の目立つ土壌の一部を、残り2遺構では全量を採取し、自然乾燥後、第一合成社製のウォーターセパレーション（5、2.5、1mmメッシュ）により水洗選別をおこなった。

同定は基本的に現生標本との比較によりおこなった。アワビ類は殻頂部、その他巻貝類は殻軸、二枚貝類は殻頂部をとどめる標本により同定し、最小個体数を求めた（サザエは殻軸と蓋のうち多い方を採用）。二枚貝についてはシジミ属で左右の区別が困難な標本があったため、左右を合算し、その半数を最小個体数とみなした。

魚類は主上顎骨、前上顎骨、口蓋骨、歯骨、角骨、方骨、前鰓蓋骨、主鰓蓋骨、椎骨の全標本を同定対象とした（これらについては未同定標本も結果に示した）。その他部位でも種によって特徴的な部位は適宜同定対象とした。鳥類・哺乳類については同定可能な全部位を対象とした。四肢骨は骨端およびその付近を残す標本はすべて対象とし、骨幹部破片については全周するものを対象とした。いずれも計数点を定め、集計の際に重複のないよう留意した。ナンバリングは取り上げの袋ごとに通番（整理番号）を振り、中に複数の種・部位が存在する場合はさらに枝番をふった。

貝類、脊椎動物遺体ともに同定可能だが計数点をとどめない標本は「破片」として記録したが、これらは集計には含めなかった。集計の時期区分は本報告の時期区分に従い、第1期～12期を用いた。なお、第6期より古い標本としては、第2期（古代）の土坑より種不明の獣骨片、第5・6期の溝より二枚貝破片が各1点出土したのみである。

貝類では二枚貝の完存標本について殻長の計測をおこなった。哺乳類の計測位置はDriesch（1976）に従い、計測可能なすべての部位を計測した。いずれもデジタルノギスにより0.1mm単位まで計測した。

2. 分析結果

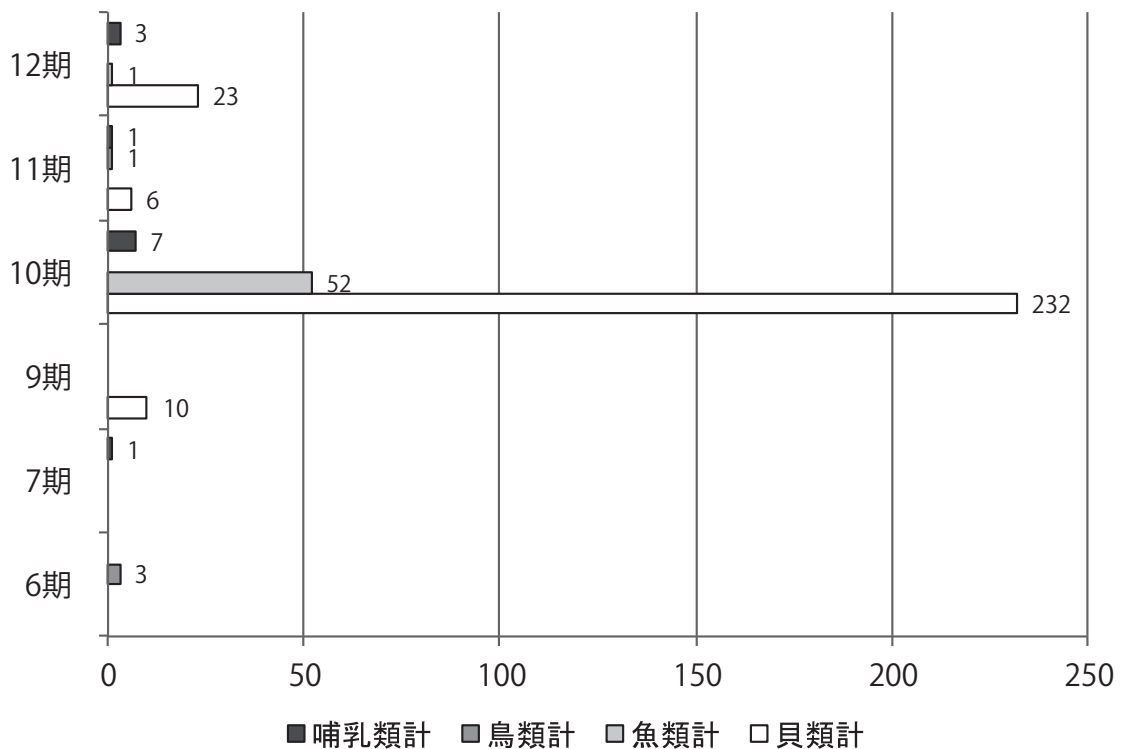
（1）動物遺体の出土傾向（第1図）

検出遺構の数とも関わるので、単純には比較できないが、時期別に見ると第10期が圧倒的に多く、他の時期は少ない。第10期は貝類が突出するが、魚類、哺乳類も他の時期に比較して多い。第12期がこれに次ぐが、やはり貝類主体で他の動物は少ない。

遺構別に見ると、18号土坑、16号土坑、30号土坑、59号土坑などでまとまった出土が見られた。いずれも第10期に属する。もっとも多く出土した18号土坑とそれに次ぐ16号土坑を比較すると、前者では魚類、ノウサギも見られたのに対し、後者では貝類とシカ1点のみであった。また、貝類の組成も前者では相対的にハマグリが目立つのに対し、後者ではシジミ属、サザエが目立つなど差が見られる。こうした違いはそれぞれの廃棄物がごく少数回の消費に由来することによる可能性もある。

（2）貝類

腹足綱3、二枚貝綱7、計10分類群が同定された（第1表）。



第1図 動物遺体の時期別出土数

第10期以外は少量のため、第10期に絞って組成を示した(第2図、第2表)。第10期ではサザエが主体で、シジミ属、ハマグリが次ぐ。カワニナ、アワビ属もやや目立つ。アワビ属は破片が多く、種の同定はできていない。シジミ属は甲府城下町遺跡の例ではヤマトシジミ、マシジミ共に報告例があるが、本遺跡では全体に風化が進み、同定が困難であったので、属までの同定にとどめた。アカガイ属も破片が主体だが、完存に近い標本ではサトウガイとサルボウが確認された。

大きさはアワビ属は完存標本で殻長13cm程度が見られたが、破片ではさらに大形の標本も存在した。サザエは完存で殻高10cm程度があった。ハマグリは殻長3cm~4cm前後の小形が主体だが、中には6cmを超える大形のものも見られた。シジミ属は大形のものは3cmを超えるが、2cm前後の小形がまとまる16号土坑のような例もあった。

(3) 魚類

硬骨魚綱11分類群が同定された(第1表)。

サケ科は尾椎1点が見られた。サケに類似するが、非常に小形のため別種と推測される。アジ科はマアジなど小型の種に類似するものと、ブリに類似する大型の椎骨がある。後者はブリと一致しないので同科他属と推定される。ホウボウ科はホウボウと一致する前鰓蓋骨が存在するが、同科他属との比較が行えていない。ベラ科はイラ、コブダイに類似する方骨標本が得られているが、完全には一致しないので、同科他属と推定される。共に咽頭骨破片が出土しているが、やはり上記2種とは一致しない。他にも未同定標本が複数種分残されている。これらは第3表および、写真図版に掲載した。

やはり数のまとまっている第10期に限って組成を示した(第3図、第2表)。マダイとタイ科で3割以上を占める。マグロ属がこれに次ぎ、他にブリ属、ソウダガツオ属、ヒラメ科、カレイ科などが見られた。タイ科ではマダイ以外が確認されていないことから、タイ科と同定した標本もマダイの可能性が高い。マグロ属はほとんどが18号土坑から出土した椎骨で、同一個体の可能性もある。椎体長10mm程度の小形のマグロで、尾叉長約50cmの標本とほぼ同大であった。59号土坑出土の歯骨(No.81。以下、番号は通番)はこれよりやや大形であった。

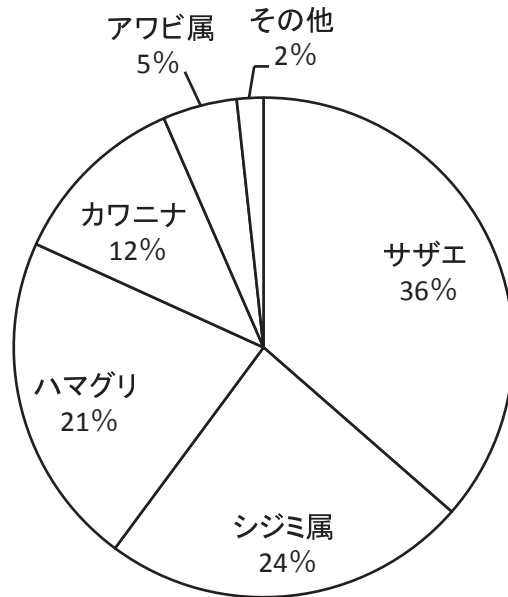
マダイの前頭骨と上後頭骨に切痕が確認された。前頭骨は18号土坑出土で大、小2点の標本がある。いずれも中心よりやや右寄りで前後方向に切断されている(No.199)。上後頭骨は遺構外より出土した2点で(No.020、391)、上下方向に刃物を入れた痕や、そぎ落とされたような痕がある。他に18号土坑出土のタイ科尾椎(No.217)にも横方向に切断された痕跡が認められた。

第1表 出土動物遺体一覧

腹足綱	GASTROPODA
アワビ	Haliotis sp.
サザエ	Turbo (Batillus) cornutus
カワニナ	Semisulcospira libertina
二枚貝綱	BIVALVIA
サトウガイ	Scapharca satowi
サルボウガイ	Scapharca kagoshimensis
イタヤガイ科	Pectinidae
マガキ	Crassostrea gigas
シジミ属	Cobicula sp.
アサリ	Ruditapes philippinarum
ハマグリ	Meretrix lusoria
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES
コイ科	Cyprinidae
サケ科	Salmonidae
サヨリ属	Hyporhamphus sp.
ホウボウ科	Triglidae
ブリ属	Seriola sp.
マダイ	Pagrus major
ベラ科	Labridae
ソウダガツオ属	Auxis sp.
マグロ属	Thunnus sp.
ヒラメ	Paralichthys olivaceus
カレイ科	Pleuronectidae
鳥綱	AVES
キジ科	Phasianidae
哺乳綱	MAMMALIA
ヒト	Homo sapiens
ウマ	Equus caballus
イノシシ	Sus scrofa
ニホンジカ	Cervus nippon
ウシ	Bos taurus
ノウサギ	Lepus brachyurus

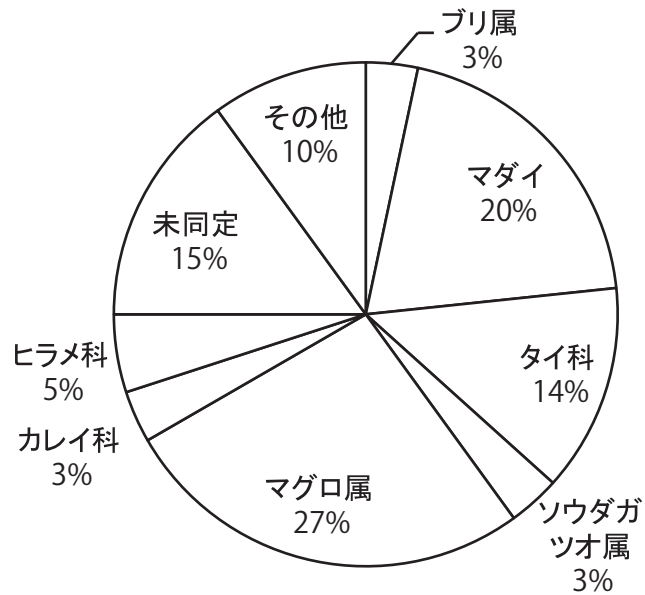
学名・配列は以下の文献による。
 貝類：奥谷喬司 編 2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会（海産）、奥谷喬司 編 1986『決定版 生物大図鑑 貝類』世界文化社（淡水産）
 魚類：中坊徹次 編 2013『日本産魚類検索 全種の同定 第三版』東海大学出版会
 鳥類：黒田長久 編 1984『決定版 生物大図鑑 鳥類』世界文化社
 哺乳類：安部 永ほか 1994『日本の哺乳類』東海大学出版会

最小個体数 (N=145.5)



第2図 貝類組成 (第10期)

同定標本数 (N=60)



第3図 魚類組成 (第10期)

(4) 鳥類

量は少なく、キジ科のみが確認された。第6期の4号溝より3点出土しており、いずれも焼けて白色化している。これは本地点で科位下まで同定できた標本としてはもっとも古い。11期の9号土坑でも1点出土した。

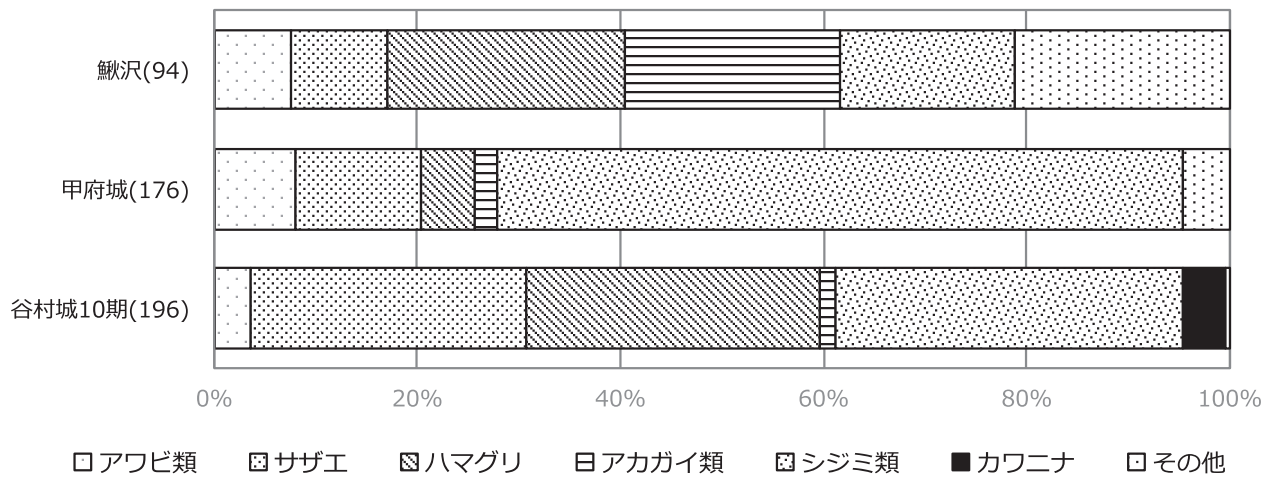
(5) 哺乳類

6分類群が同定された (第1表)。

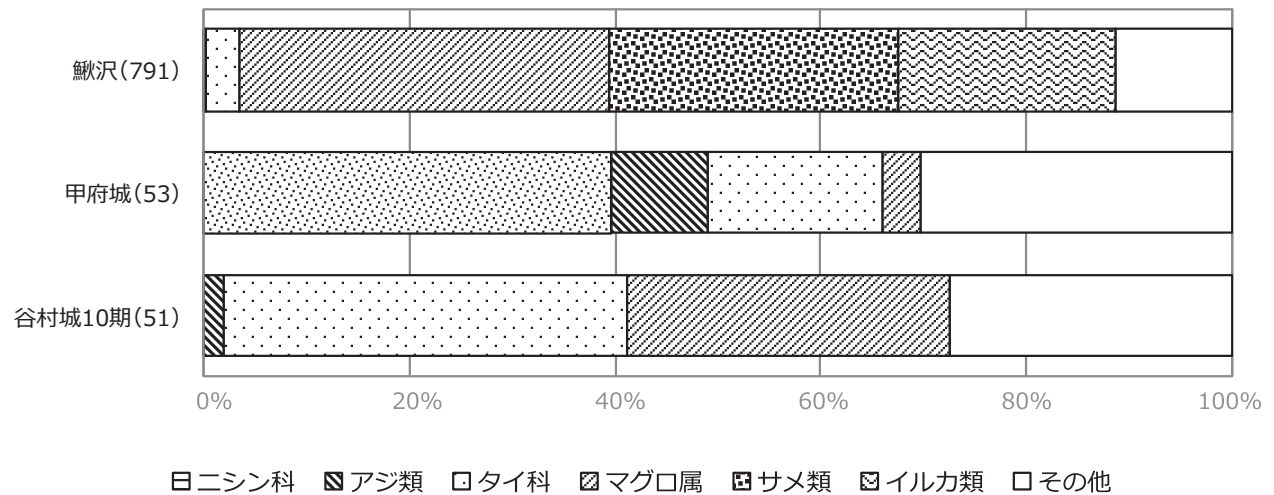
出土量は少ない (第2表)。時期的には第10期にややまとまっている。ノウサギは18号土坑からのみ出土した。部位の重複はなく、1個体分の可能性もある。イノシシは第10期の3号溝から出土した1点のみである。シカは第7期、10期、12期の各時期から出土しているが、各遺構1点程度の少数の出土である。ウマは遺構外、ウシは近代の12期と遺構外からのみの出土で、近世の確実な例はない。

加工痕をとどめる標本として、第12期の6号瓦溜 (No.106) と、遺構外 (No.029) 出土のシカ中手/中足骨の遠位端がある。いずれも前・後面双方から擦切り、最後に骨幹部から折り取った痕が認められた。また、やはり6号瓦溜出土のウシ胸椎 (No.112) に中心で背腹方向に切断した痕が認められた。未癒合の骨端部分のみ残存する。

貝類組成



魚類組成



第4図 周辺遺跡との比較

3. 考察

(1) 貝類

第4図に県内の甲府城下町遺跡、鰍沢河岸跡の組成（過去の調査地点の合算）との比較を示す。組成は3遺跡共に共通する傾向があり、シジミ類、サザエ、ハマグリ、アワビ類が基本的なセットとなる。鰍沢河岸ではアカガイ類もやや目立つ。

本遺跡では第7期の34号溝から貝類が出現するが、少数の破片のみである。第9期には複数遺構で出土が見られ、確実に貝類の利用があったと考えられる。カワニナやシジミ属（マシジミであった場合）は淡水でも入手できた可能性があるが、その他はいずれも駿河湾など沿岸部からの搬入品である。

(2) 魚類

貝類より遅れ、第10期から出現する。第10期でも出土遺構は限られる。第9期以前は動物遺体を出土した遺構自体が少なく、保存の問題も考慮すれば、第9期以前に利用がなかったかは断定できない。今回の調査からは第10期には確実に一定量の消費があったことが確認できた。

鰍沢河岸跡、甲府城下町と比較すると（第4図）、本遺跡ではマダイ（タイ科）の多さが特徴的である。鰍沢河岸跡のサメ類のような大型魚は見られず、マグロ属も小形であった。一方で、甲府城下町で出土しているニシン科（マイワシなど）、アジ、ウナギ、アユなどの小形魚はまれであった。

大型魚の欠落については、富士川沿いで輸送条件に恵まれた鯀沢と本遺跡の立地条件の違いや、町屋と陣屋という性格の差による解体、搬入様式の差などが原因として考えられる。また、鯀沢では近代に属する資料の分離が困難で一括されているため、輸送事情の向上が反映されている可能性も排除できない。今後、より年代を絞った比較をおこなっていく必要がある。小形魚の欠落については、甲府城下町遺跡では井戸、便槽などの土壌水洗選別がおこなわれている効果が大きく、本遺跡でこれらの利用がなかったかは今後の調査における検討課題である。現に水洗選別が行われた59号土坑では、未同定ながら小形種の標本が複数種分含まれていた。

マダイ頭骨に見られた切痕、切断痕は陣屋内や近辺での調理を物語っている。前頭骨の切断は梨割(岡嶋2004)の結果と推定される。タイの多産は本遺跡における魚類の消費が宴席のような非日常の場面を中心としていたことを示しているのかもしれない。

今回確認された貝類や魚類などの多様な海産物は近隣の駿河湾や相模湾方面からもたらされた可能性が高い。筆者は甲州への近世の海産物流通事情についてかつてまとめたことがある(植月・宮澤2011)。その際に、文献記録をもとに江戸時代中期から幕末にかけての海産物の輸送条件の向上を指摘した。具体的には18世紀前半成立の『甲州噺』では10～3月の冷涼期における生魚の運搬、19世紀中頃の『甲斐廻手振』では夏向の塩物の多さが記録されているのに対し、幕末の『甲州道中記』では「夏にても生肴あり」と述べられている。ごく限られた文献記録による推測だが、考古学的にもこうした事情を裏付けるデータが得られている。甲府城下町遺跡では19世紀以降には複数地点で海産魚類の出土が確認されるのに対し、18世紀以前では貝類のみの出土が多い(植月2016の表1など)。このことも海産魚類の流通量の増加を示している可能性がある。なお、上記の『甲斐廻手振』では三坂(御坂)峠越え、『甲州道中記』では籠坂峠越えとあり、鎌倉往還が海産物の運搬に利用されていた。谷村への海産物運搬にも鎌倉往還が主要な役割を果たしたと推測される。

谷村、都留市域に関わる文献の探索が十分でないが、『都留市史 資料編』で魚が記載された資料を拾い出すと、以下のような例がある(いずれも『資料編 近世Ⅱ』より。数字は史料番号。カッコ内は筆者注)。

- ・66 天保8年(1837) 請求証文 さば、にさかな、まくろ(マグロ)
- ・68 天保11年(1840) 請求証文 差み(刺身)、塩やキ、あゆぬた
- ・78 年不詳 12月 請取証文 生鯛、ほうぼふ、こつ(コチ?)、さより、友し(不詳)

下線が今回の調査で検出された種で、かなりの一致がみられた。このように、文献、考古資料の両面から江戸時代後期における海産魚類の消費が裏付けられた点は注目される。なお、貝類については史料を見出せなかった。

(3) 哺乳類

哺乳類の出土は少なく、利用実態を議論することは難しいが、近世と近代で利用された種の時期差を指摘しておきたい。牛馬遺体は近代と遺構外でのみ見られ、近世遺構からは出土していない。近世遺構から出土したのはノウサギ、シカ、イノシシの野生獣のみである。特に18号土坑のノウサギは貝類や魚類と共に出土しており、食用とされたものと考えられる。

松井(2004)は畿内の近世においては斃牛馬処理のシステムが確立し、特定の集団により独占されることで、遺跡内から牛馬埋納土坑が消滅したことを指摘した。筆者もその成果を援用し、高知城下町の中世から近世にかけての牛馬の欠落を解釈したことがある(植月2014)。地域的には隔たりがあるが、本遺跡における近世の牛馬の欠落も同様に処理システムの存在による可能性があり、今後文献記録の検討も含めて追究すべき課題である。

本遺跡では近代以降になると少数のウシ遺体が確認される。甲州においても明治時代中頃には甲府に牛肉料理屋が登場しており、甲府盆地西部の蘭方医の記録でも明治末期に牛肉消費の活発化が確認されている(植月・宮澤2011)。近世に存在した牛馬の処理システムや忌避意識が近代の食習慣の変化とともに薄れたことを示すのか、興味深い問題を提起する。

また、2点のみの出土だが、骨細工の証拠である擦切り痕のあるシカ中手/中足骨も近代遺構と遺構外からの出土である。こうした活動の証拠も谷村陣屋という近世後半における本地点の性格とはそぐわない。近代以降の場の性格の変化に伴う活動と関わる遺物とも考えられる。

おわりに

今回の報告は郡内地方の近世遺跡としては初めてのまとまった動物遺体報告事例となった。まだ確証を持って述べられるだけの材料に乏しいが、上記のように動物遺体の様相からも流通事情の変化、動物に対する意識の変化、場の性格の変化といった様々な問題を議論できる可能性があり、周辺地域における今後の調査の進展と資料の蓄積に期待したい。末筆ながら貴重な資料を分析する機会を与えていただき、調査について種々ご教示いただいた網倉邦生氏（山梨県埋蔵文化財センター）および山梨県埋蔵文化財センターに深く感謝申し上げます。

引用文献

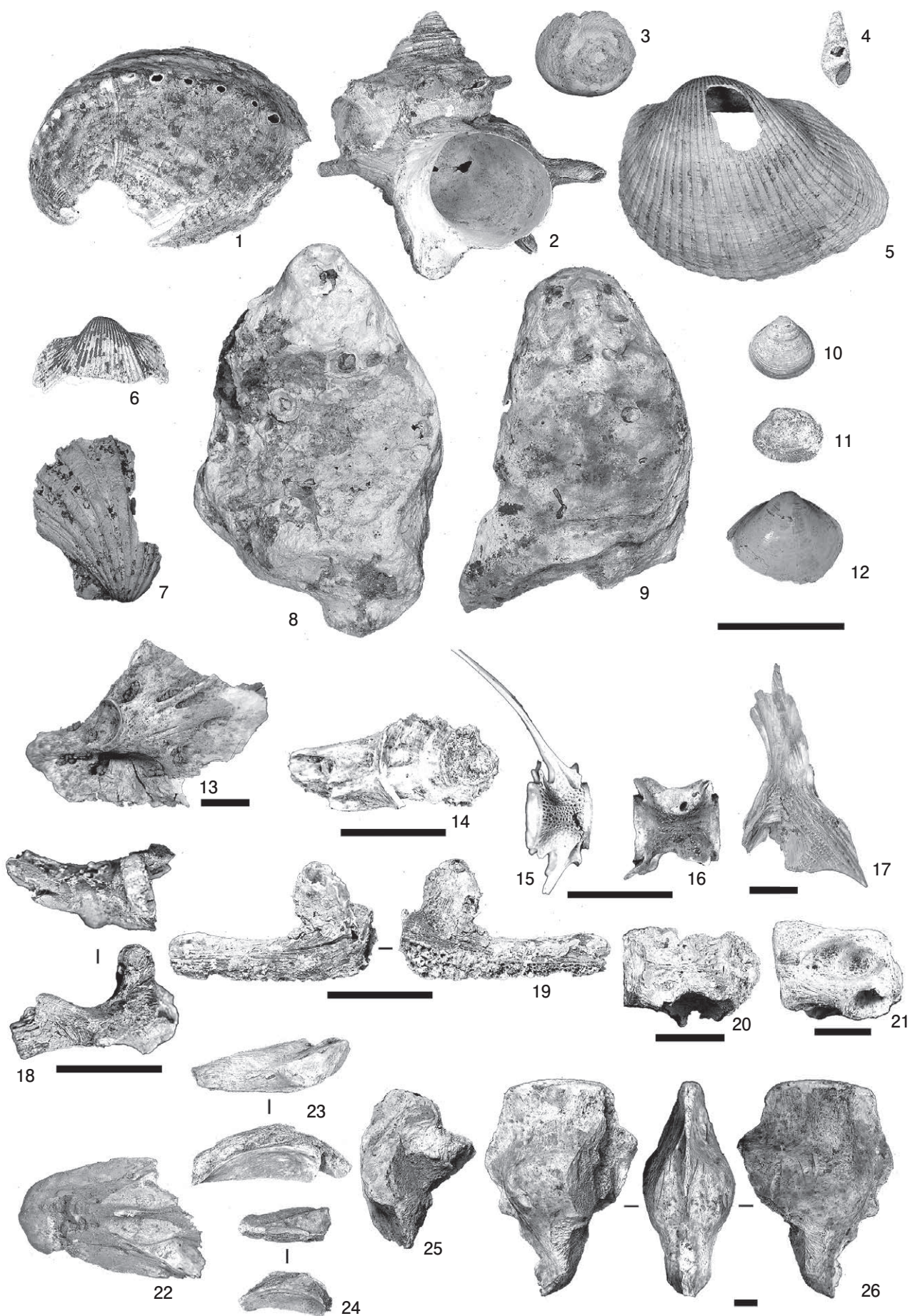
- 植月 学 2014「弘人屋敷跡出土動物遺体について」『弘人屋敷跡 新資料館整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第140集 275-290頁
- 植月 学 2016「甲府城下町遺跡（中央4丁目地点）より出土した動物遺体」『甲府市内遺跡 XII』甲府市教育委員会 64-67頁
- 植月 学・宮澤富美恵 2011「甲州における幕末・明治期の海産物消費動向—大久保黄齋『世事記』の分析から—」『山梨県立博物館研究紀要』5 17-38頁
- 岡嶋隆司 2004「真鯛頭部の解体法について—解体手順と料理法の推定—」『動物考古学』21 91-97頁
- 都留市 1994『都留市史』資料編 近世Ⅱ
- 松井 章 2004「近世初期における斃牛馬処理・流通システムの変容」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会 407-416頁
- Dreisch, A. von den. 1976 *A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites*. Bulletin No.1. Peabody Museum, Harvard University, Massachusetts.

時期	遺構	種	部位	位置	左右	数	備考	計測 (mm)	通番	枝番	面	上下	No.	日付	遺構外注記				
第 10 期	18 号土坑	ハマグリ				1	合併	SL:40.6 ±、SH:35.1 ±	222		-	-	2393	141020					
						1	合併、他に小破片 1		225		-	-	2303	141020					
						1			233		-	-	2729	-					
						1	合併		234		3	-	2688	141023					
						1	合併		235		3	-	2696	141023					
						1			236		3	-	2697	141023					
						11			247	6	3	-	-	-					
						2			002	2	3	-	2664	141023					
						1			011		3	-	2176	141017					
						2	大小各 1	大 (R)SH:60.0 ±	014		3	-	2268	141020					
						1			086		3	-	2687	141023					
						1	小形		087	1	3	-	-	141020					
						1			182		3	-	2108	141016					
						1			222		-	-	2393	141020					
						1			225		-	-	2303	141020					
						1			234		3	-	2688	141023					
						1			235		3	-	2696	141023					
						10			247	6	3	-	-	-					
						+			077	2	3	-	2689	141023					
						+			088		3	-	2690	141023					
						+			162	2	3	-	-	一括	141017				
						3			202	4	3	-	-	141021					
						ハマグリ?		破片	?	1			048	3	3	-	2374	141020	
						二枚貝類		破片	?	1			181		3	-	2107	141016	
						貝類		破片	?	2			229	1	3	-	-	141020	
										+			202	5	3	-	-	141021	
										+			087	2	3	-	-	141020	
										+			247	7	3	-	-	-	
						アジ科	腹椎		-	1	大型	229	4	3	-	-	141020		
						アジ科?	尾椎		-	1		421	5	3	-	-	-		
		マダイ	上後頭骨		-	1			199	5	3	-	-	141024					
			前頭骨		R	2	切断。大1、小1		199	4	3	-	-	141024					
			前上顎骨	破片	?	1			229	3	3	-	-	141020					
				遠位端	L	1			199	3	3	-	-	141024					
			口蓋骨		L	1			199	1	3	-	-	141024					
		マダイ?	鰭棘		-	1			385		3	-	-	一括	141024				
			鰭棘		-	1			198	3	3	-	-	141021					
		タイ科	尾椎			?	2		119	2	3	-	-	2164	141017				
						1			078		3	-	-	2710	141021				
						1			119	1	3	-	2164	141017					
						1			213		-	-	2452	141021					
						1	切断		217		-	-	2373	141020					
		タイ科?	主鰓蓋骨	破片	L	1		229	8	3	-	-	141020						
		マグロ属	尾椎			-	1		198	1	3	-	-	141021					
						1			113	1	3	-	-	一括	141017				
						1			198	2	3	-	-	141021					
						1			200		-	-	2450	141021					
						1			214		-	-	2453	141021					
						1			219		-	-	2304	141020					
						1			229	5	3	-	-	141020					
		カレイ科	角骨		R	1			205	2	3	-	-	一括	141021				
			尾椎		-	1			421	4	3	-	-	-					
		ヒラメ科	前上顎骨		R	1			229	2	3	-	-	141020					
			尾椎		-	1			205	1	3	-	-	一括	141021				
		魚類未同定	方骨		R	1	アイナメ類似。小型		421	2	3	-	-	-	-				
			椎骨		-	4	腹椎2、尾椎2		421	6	3	-	-	-	-				
			尾椎		-	1			229	6	3	-	-	-	141020				
		魚類	不可	破片	?	1	大型		232		-	-	-	2734	-				
						1	マダイ前頭骨?		386		3	-	-	2163	141017				
						1			199	2	3	-	-	141024					
						+			199	6	3	-	-	141024					
						+			229	9	3	-	-	141020					
						+			113	2	3	-	-	一括	141017				
						1			072		-	-	一括	141021					
						+			205	3	3	-	-	一括	141021				
						+			002	3	3	-	-	2664	141023				
						1			229	7	3	-	-	141020					
						2			073		3	-	-	141020					
						+			087	3	3	-	-	141020					
		+			229	10	3	-	-	141020									
		鳥類	不可	破片	?	1			113	3	3	-	-	一括	141017				
						1			205	4	3	-	-	一括	141021				
		ノウサギ	大腿骨	完存	L	1			228		3	-	-	141024					
			脛骨	近位端	L	1			228		3	-	-	141024					
					R	1		057		-	-	一括	141021						
			近位端-遠位部	R	1				071		-	-	2451	141021					
		不可							421	3	3	-	-	-					
		18 号土坑 (水洗)	カワニナ			-	9		419	1	3	-	-	水洗 5 mm	-				
			シジミ属			L	1		419	2	3	-	-	水洗 5 mm	-				
						R	1		419	2	3	-	-	水洗 5 mm	-				
			二枚貝類未同定			L	1		421	1	3	-	-	水洗 2.5 mm	-				
			ハマグリ				L	3		419	3	3	-	-	水洗 5 mm	-			
							R	3		419	3	3	-	-	水洗 5 mm	-			
			貝類		破片	?	+			419	4	3	-	-	水洗 5 mm	-			

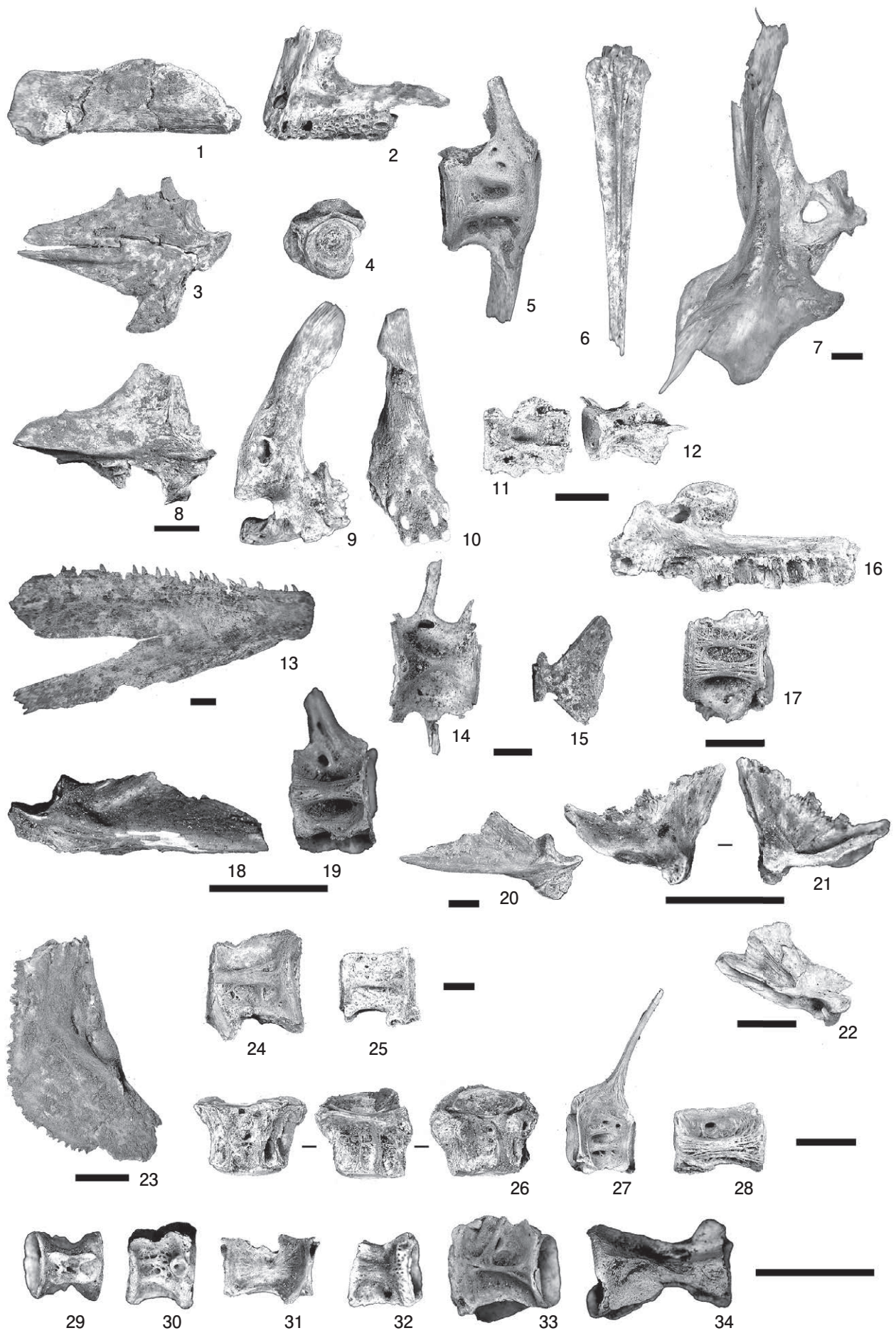
時期	遺構	種	部位	位置	左右	数	備考	計測(mm)	通番	枝番	面	上下	No.	日付	遺構外注記	
第 10 期	124号土坑	ブリ属類似	尾椎		-	1			023	3	4	-	3536	141114		
		ソウダガツオ属	尾椎		-	2			023	4	4	-	3536	141114		
		魚類	不可		?	+	棘など		023	5	4	-	3536	141114		
	154号土坑	サザエ	フタ		-	1			277		3	-	一括	150608		
	155号土坑	不可			-	1			389		3	下	一括	150612		
	156号土坑	ハマグリ			L	1	大形		364	1	3	-	一括	140612		
		貝類?		破片	?	+			364	2	3	-	一括	140612		
	1号石組	アワビ属		破片	-	+			329		3	-	一括	150608		
		サザエ				-	1		272		3	-	一括	150528		
		サザエ				-	5		273		3	-	一括	150609		
		貝類		破片	?	+			330		3	-	一括	150603		
	2号石組	角骨			L	1	アイナメ類似		383	1	3	-	一括	150612		
		魚類未同定	腹椎		-	1	銅鏡内土壤。 カレイ科類似		382	1	3	-	一括	150612		
		魚類	鱗棘		-	1			381		3	-	一括	150528		
		魚類	不可	破片	?	+			383	2	3	-	一括	150612		
	9号磔集中	アワビ属		破片	-	+			332		3	-	一括	150616		
		サザエ			-	+			333		3	-	一括	150601		
		サザエ			-	4			274		3	-	一括	150601		
	10号磔集中	サザエ	フタ		-	1			275		3	-	一括	150608		
		サザエ			-	1			276		3	-	一括	150610		
	3号溝	カワニナ			-	1			063	2	-	-	一括	141107		
		カワニナ			-	3			135		3	-	-	141001		
		サザエ	フタ		-	1			063	1	-	-	一括	141107		
		サザエ			-	1			108		3	-	-	141106		
		巻貝類	殻軸		-	1			065	2	3	-	一括	141027		
		アカガイ属		破片	?	3	大形。サトウガイ?		063	4	-	-	一括	141107		
		シジミ属		破片	?	1			063	3	-	-	一括	141107		
		貝類		破片	?	+	アワビ?		065	1	3	-	-	一括	141027	
		イノシシ	寛骨		R	1			191		3	-	-	2666	141023	
	6号溝	シカ	中足骨	骨幹部	?	1			192		3	-	-	1535	141001	
		マダイ	上後頭骨		-	1			212	1	-	-	一括	141021		
		魚類	不可	破片	?	+			212	2	-	-	一括	141021		
	12号溝	アワビ属		破片	-	+			346		4	-	一括	141107		
		貝類		破片	?	+			055		4	-	一括	141114		
	26号溝	アワビ属		破片	-	+			336	1	3	-	一括	150522		
アワビ属			破片	-	1			337		3	-	一括	150525			
アワビ属			破片	-	1			413		3	-	-	150626			
貝類			破片	-	+			310		2	-	一括	150521			
貝類			破片	?	+			335		3	-	一括	150528			
鳥類?		脛骨?	骨幹	L	1			398		3	-	-	4324	150525		
27号溝	ガラス?			-	1			336	2	3	-	一括	150522			
	サザエ			-	5			278		3	-	一括	150608			
	サザエ?			-	2			279		3	-	一括	150605			
31号溝	サザエ?			-	1			412		3	下層	-	150624			
	キセルガイ類			-	1	現生?		375		3	-	一括	150608			
	サザエ	フタ		-	1			281	1	3	-	一括	150604			
32号溝	サザエ			-	+			280		3	-	一括	150605			
	サザエ	フタ		-	1			281	2	3	-	一括	150604			
	サザエ			-	1			282		3	-	一括	150610			
	サザエ	フタ		-	1			283		3	-	一括	150611			
38号溝	カワニナ			-	1			284		3	-	一括	150612			
	ハマグリ		破片	?	+			405	1	3	下	-	150616			
	二枚貝類		破片	?	+			361		3	下	一括	150612			
	鳥類?	上腕骨?	骨幹	?	1			405	3	3	下	-	150616			
第 11 期	9号土坑	キジ科	中手骨	近位端- 遠位部	R	1		120		2	-	一括	141001			
	7号磔集中	アワビ属		破片	-	+		307		2	-	一括	150601			
		ヒト	上腕骨	骨幹-遠位部	R	1			249		2	-	4407	150528		
	22号溝	サザエ	フタ		-	1			256		2	-	一括	150520		
		アワビ属		破片	-	1			308	1	2	-	一括	150521		
			アワビ属		破片	-	1			311		2	-	一括	150528	
		サザエ			-	1			309		2	-	一括	150601		
		サザエ			-	1			257		2	-	4099	150520		
35号溝	サザエ			-	1			258		2	-	一括	150519			
	哺乳類	不可	肋骨	?	+			308	2	2	-	一括	150521			
	哺乳類	不可		?	1			392		2	-	一括	150601			
第 12 期	9号土坑	ガラス?		-	1			387	2	3	-	一括	150605			
		不可			-	1			387	3	3	-	一括	150605		
	122号土坑	アワビ属		破片	-	1			387	1	3	-	一括	150605		
		アワビ属		破片	-	2			157		4	-	一括	141113		
		サザエ	フタ		-	+			169	1	4	-	一括	141118		
		サザエ			-	1			201	1	4	-	一括	141119		
		ハマグリ			R	1			007		4	-	一括	141110		
		貝類		破片	-	1			169	2	4	-	一括	141118		
		マダイ	前頭骨		-	1			378		4	-	一括	141118		
		魚類	不可	破片	?	+			201	2	4	-	一括	141119		
哺乳類		不可		?	2			103		-	-	一括	141119			
212号土坑	シジミ属			R	1	立会横断 1		079		4	-	一括	141111			
	ハマグリ		破片	?	+	立会横断 1		417	1	1	-	一括	160808			
6号瓦溜	鳥類?	脛骨?	骨幹部	L	1			417	2	1	-	一括	160808			
	シカ	中手/中足骨	遠位端	?	1	すり切り		110		-	-	1671	141007			
	シカ			?	1			106		2	-	1628	141003			

時期	遺構	種	部位	位置	左右	数	備考	計測(mm)	通番	枝番	面	上下	No.	日付	遺構外注記		
不明	遺構外	アワビ属				1			349		-	-	一括	151019	立会い 管路1		
						1			350		-	-	一括	150603	調査区		
						1			351		-	-	一括	140925	調査区		
						1			352	1	1	-	一括	150427	調査区		
						1			359	2	1	-	一括	141104	A1		
						+			016		4	下	3592	141125	遺構外		
						+			017	1	3	下	3378	141110	遺構外		
						2			054	1	3	下	一括	141107	-		
						2			145		2	-	一括	140905	-		
						1			149	1	3	-	一括	141009	-		
						+			150	1	3	-	一括	141014	-		
						1			153	1	2	-	-	141001	遺構外		
						+			167	1	2	-	-	140909	遺構外		
						+			170		3	-	1772	141009	遺構外		
						+			184		2	-	2123	141016	遺構外		
						1			208		-	-	一括	141021	-		
						1			015	1	3	-	1943	141014	遺構外		
						1			039		3	-	1711	141008	遺構外		
						1			052		3	-	1630	141003	遺構外		
						1			056		-	-	一括	141118	調査区		
						1	フタ破片あり		139		3	-	一括	141015	遺構外		
		1			148	2	3	-	一括	140929	-						
		1			151		-	-	一括	140924	調査区						
		1			178		-	-	881	-	遺構外						
		1			179		-	-	827	-	遺構外						
		1			195		3	-	一括	141023	遺構外						
		1			211		-	-	1981	-	遺構外						
		1			253		1	-	一括	150428	遺構外駐輪場地点						
		1			254		1	-	一括	150428	遺構外調査区東側						
		5			260		2	-	一括	150513	遺構外調査区西側						
		1			261		2	-	一括	150514	遺構外調査区北側						
		1			263		2	-	一括	150514	遺構外調査区東北側						
		1			267		2	-	一括	150526	遺構外調査区西南側						
		1			269		2	-	4076	150519	遺構外						
		1			271	1	2	-	4048	150515	遺構外						
		1			288		3	-	4570	150608	遺構外調査区北側						
		1			289		3	-	一括	150605	遺構外調査区北側						
		2			291		3	-	一括	150604	遺構外調査区北側						
		1			295		3	下	一括	150618	遺構外						
		3			296		3	下	一括	150619	遺構外						
		1			298		-	-	一括	150528	調査区						
		1			299		-	-	一括	150511	調査区						
		1			414		-	-	-	160721	RC						
		1			415		-	-	-	160728	浸透トレンチ2 管路5						
		1		サザエ				1			255		1	-	一括	150916	
		+						264	2	2	-	一括	150519	遺構外調査区西南側			
		+						266	2	2	-	一括	150527	遺構外調査区西南側			
		+	フタあり					270		2	-	一括	150526	遺構外調査区北東側			
		1						286		3	-	一括	150522	遺構外調査区南東側			
		1						300		-	-	一括	150508	表土			
		1						320	2	2	-	一括	150527	遺構外調査区北側			
		1						061		-	-	一括	141026	調査区			
		+						083		3	-	2067	141016	遺構外			
		1						180		-	-	2025	-	遺構外			
		1		034		2	-	2133	141017	遺構外							
		1		037		-	-	2024	-	遺構外							
1		038		-	-	2024	-	遺構外									
1		050		-	-	1978	-	遺構外									
1		060	1	3	-	一括	141028	遺構外									
1	殻の破片あり	137	1	2	-	一括	141001	遺構外 石敷きの下									
1		147		-	-	一括	141015	調査区									
3		150	2	3	-	一括	141014	-									
1		164		3	下	-	141030	遺構外									
1		165		2	-	-	141016	遺構外									
1		166		3	下	-	141104	遺構外									
1		197	2	4	-	一括	141105	遺構外									
1		204	1	3	-	一括	141021	遺構外									
1		215		-	-	2009	-	遺構外									
1		262		2	-	一括	150514	遺構外調査区西南側									
1		264	1	2	-	一括	150519	遺構外調査区西南側									
1		265		2	-	一括	150601	遺構外調査区南西側									
1	他の破片あり	266	1	2	-	一括	150527	遺構外調査区西南側									
1		268		2	-	4376	150527	遺構外									
1		271	2	2	-	4048	150515	遺構外									

時期	遺構	種	部位	位置	左右	数	備考	計測(mm)	通番	枝番	面	上下	No.	日付	遺構外注記				
不明	遺構外	サザエ	フタ			2			287		3	-	一括	150625	遺構外調査区南西側				
						2			290	2	3	-	一括	150603	遺構外調査区北側				
						1			294		3	下	一括	150616	遺構外調査区北側				
						1			301		-	-	一括	151021	立会い 管路3				
		サザエ?	破片	-	破片	2		292		3	-	一括	141001	遺構外					
						1		142	1	3	-	一括	141007	遺構外					
						1		143	1	2	-	一括	141017	遺構外					
						2		144	1	新2	-	一括	141007	遺構外					
						3		149	2	3	-	一括	141009	-					
						2		154	1	3	-	一括	141002	-					
						2		374		3	-	一括	150601	遺構外調査区東北側					
						1		033	2	-	-	一括	782	-					
		カワニナ		-		1		141		3	-	一括	141010	遺構外					
						2		142	2	3	-	一括	141007	遺構外					
						1		174		3	-	一括	2127	遺構外					
						3		344	2	3	-	一括	4573	遺構外					
						2		175		3	-	一括	1830	遺構外					
		カワニナ?	破片	-	破片	1		204	2	3	-	一括	141021	遺構外					
						1		343	1	3	-	一括	150610	遺構外調査区北側					
						1		076		-	-	一括	890	遺構外					
		アカガイ属	破片	R	破片	1		033	4	-	-	一括	782	-					
						2		142	3	3	-	一括	141007	遺構外					
						2		148	3	3	-	一括	140929	-					
						1		149	3	3	-	一括	141009	-					
						1		167	2	2	-	一括	140909	遺構外					
						1		171		3	-	一括	141009	遺構外					
						1		367		2	-	一括	150526	遺構外調査区西南側					
						1		368		3	下	一括	150617	遺構外調査区西北側					
		イタヤガイ科		L	1		026	1	3	-	一括	2066	141016	遺構外					
		マガキ		L	1	240と合弁?		242		-	-	一括	1598	-					
						R	1		240		-	-	一括	1597	-				
		シジミ属		R	破片	1		SL:18.5	146	1	新2	-	一括	141003	遺構外				
						1		314	2	2	-	一括	150515	遺構外調査区西北側					
						1		060	2	3	-	一括	141028	遺構外					
						1		317	2	2	-	一括	150515	遺構外調査区西南側					
						3		372		1	-	一括	-	遺構外調査区北側					
						2		410	2	-	-	一括	150428	石敷遺構					
		シジミ属?		?	+		143	2	2	-	一括	141017	遺構外						
		アサリ		?	1		167	3	2	-	一括	-	140909	遺構外					
		ハマグリ						1		大	032		-	-	一括	1802	-		
								2		小(SL:30mm程度)	033	3	-	-	一括	782	-		
								1			146	2	新2	-	一括	141003	遺構外		
								1			150	3	3	-	一括	141014	-		
								1			153	2	2	-	一括	141001	遺構外		
								1			410	1	1	-	一括	150428	石敷遺構		
								1			032		-	-	一括	1802	-		
								1			074		3	-	一括	1631	141003		
								1			109		1	-	一括	141104	遺構外		
								2			146	2	新2	-	一括	141003	遺構外		
								1			204	3	3	-	一括	141021	遺構外		
								1			216		-	-	一括	1983	-		
								1			356	1	1	-	一括	150501	外構西側?		
								1			359	1	1	-	一括	141104	A1		
								1			416		-	-	一括	160801	駐輪場		
								1			144	2	新2	-	一括	141017	遺構外		
								5			149	4	3	-	一括	141009	-		
								1			152	1	-	-	一括	140929	調査区		
								1			154	2	3	-	一括	141002	-		
								+			155		3	-	一括	141003	-		
								+			167	4	2	-	一括	140909	遺構外		
								1			352	2	1	-	一括	150427	調査区		
								1			353		-	-	一括	150625	調査区		
								1			355		3	下	一括	150617	遺構外		
								1			357		-	-	一括	150608	調査区		
								+			358		1	-	一括	150514	遺構外 東壁整形時		
								1			360		-	-	一括	140924	調査区		
								1			362		2	-	一括	141001	遺構外		
								+			015	2	3	-	一括	1943	141014		
								+			024		3	下	一括	3041	141104		
								+			049		-	-	一括	1980	-		
								+			051		-	-	一括	1979	-		
								1			054	2	3	下	一括	141107	-		
								1			127		3	-	一括	-	141015		
								2			363		3	-	一括	141002	調査区		
								貝類	破片	?	+		259		2	-	一括	150520	遺構外調査区南東側
											1		324		2	-	一括	140912	-
											1		325		2	-	一括	141002	遺構外



図版1 貝類・魚類(1)



図版2 魚類(2)



図版3 鳥類・哺乳類

図版1 貝類・魚類(1)

1. アワビ属(481) 2. サザエ(246-2) 3. サザエ蓋(246-3) 4. カワニナ(63-2) 5. サトウガイL(243) 6. サルボウR(366) 7. イタヤガイ科R(26-1) 8. マガキL(242) 9. マガキR(240) 10. シジミ属L(48-2) 11. アサリL(168-2) 12. ハマグリR(19) コイ科[13. 主鰓蓋骨L(190-1) 14. 第2椎骨(345-2)] 15. サケ科尾椎(424-2) 16. サヨリ属尾椎(420-5) 17. ホウボウ科擬鎖骨R(423-2) ブリ属[18. 主上顎骨R(23-1) 19. 前上顎骨R(23-2) 20. 尾椎(23-3)] 21. アジ科腹椎(229-4) マダイ[22. 前頭骨(201-2) 23・24. 前頭骨・切断(199-4) 25. 上後頭骨・切痕(391) 26. 上後頭骨・切痕(20)]

*スケール 貝類：5 cm、魚類：5 mm () 内は通番

図版2 魚類(2)

- マダイ[1. 主上顎骨L(190-2) 2. 前上顎骨R(388) 3. 角骨L(96-1)] タイ科[4. 第1椎骨(420-2) 5. 尾椎(217) 6. 血管間棘(96-2) 7. 擬鎖骨+肩甲骨(379)] ベラ科[8. 角骨L(231-6) 9・10. 咽頭骨(231-6)] 11・12. ソウダガツオ属尾椎(23-4) マグロ属[13. 齒骨R(81) 14. 尾椎(219) 15. 尾部棒状骨(190-3)] ヒラメ科[16. 前上顎骨R(229-2) 17. 尾椎(205-1)] カレイ科[18. 角骨R(205-2) 19. 尾椎(421-4)] 未同定[20. 角骨L(383-1) 21. 方骨R(421-1) 22. 方骨L(423-1) 23. 前鰓蓋骨L(117-1) 24. 尾椎(232) 25. 尾椎(229-6) 26. 腹椎(382-1) 27. 尾椎(420-8) 28. 尾椎(420-7) 29. 腹椎(421-6) 30. 腹椎(421-7) 31. 尾椎(421-5) 32. 尾椎(421-9) 33. 尾椎(421-8) 34. 尾椎(424-1)]

*スケール：5 mm () 内は通番

図版3 鳥類・哺乳類

- キジ科[1. 肩甲骨L(102-3) 2. 上腕骨L(102-1) 3. 尺骨R(102-2) 4. 中手骨R(120)] ノウサギ[5. 大腿骨L(228) 6. 脛骨R(71)] ヒト[7. 上腕骨R(249) 8. 橈骨R(134)] 9. ウマ上顎M1/2L(133) 10. イノシシ寛骨R(191) シカ[11. 下顎M 2L(124) 12. 肩甲骨L(404) 13. 大腿骨R(250) 14. 脛骨R(230)] 15. ウシ脛骨R(193) 16. シカ中手/中足骨・擦切(29) 17. シカ中手/中足骨・擦切(106) 18. ウシ腰椎・切断(112)

*スケール キジ科・ノウサギ：3 cm その他：5 cm () 内は通番

第2節 谷村城出土金属製品及び溶融資料の科学分析

西願 麻以

はじめに

谷村城より中世～近代の金属製品と、ふいごの羽口や鋳型など金属の溶融や加工に関する資料が出土した。本稿ではこれら資料の科学分析結果を示し、谷村城で行われていた金属製品の製造について考察をおこなう。

1. 分析資料

金属製品は鉄砲玉5点、金属塊9点、キセル3点、装飾品（部分）4点、一分判金1点、青銅鏡1点の計23点であった（図版1、2）。金属の溶融や加工に関する資料は埴塙の破片2点、羽口（部分）1点、石製鋳型1点の計4点であった（図版3）。

2. 分析方法

分析は金属付着の有無の確認のためのX線透過撮影にX線撮影装置（装置：エクスロン・インターナショナル（株）製デジタルX線リアルタイム透過装置、管電圧：160kV、管電流：4mA）、資料表面の観察に光学顕微鏡（顕微鏡：ZEISS製Axio Imager MAT、撮影：OLYMPUS製DP70）、元素組成分析にエネルギー分散型蛍光X線分析装置（エスアイアイ・ナノテクノロジー（株）製SEA5230HTW、管電圧：50kV、管電流：32～88 μ A、測定環境：真空、測定時間：60sec、照射径：1.8mm ϕ ）を用いた。

全資料の定性分析を行い、その内、鉛と金資料に関してはおおまかな組成をつかむために半定量分析を行った。ファンダメンタルパラメーター法による定量で、資料表面における3ヶ所の平均値を求めた。分析部位は、なるべく資料が露出している部分を選択したが、非破壊・無洗浄の表面分析であり、分析結果には資料表面の土や錆などの影響があると考えられる。

3. 結果と考察

金属の溶融や加工に関する資料のX線透過撮影写真を図版3に、定性と半定量分析結果を第1表に示す。

3-1 鉛資料について

主成分が鉛の金属資料が16点確認された。半定量分析結果より、①鉛が98%以上のもの、②鉛が90%以上で鉄が含まれるもの、③鉛と錫が含まれるものの3つに分類ができる。①は鉄砲玉、装飾品、②は金属塊（不定形・コイン型）、③は金属塊、鉄砲玉、装飾品となり、形態と組成の関係性がみられた。一方で、時代と組成の関係はみられなかった。②の鉄成分は、何らかの理由で材料として加えたか、製造過程で鉄鍋などの道具から混入した、もしくは資料表面の土の成分である可能性が考えられる。

銅合金や鉄、鉛が金工材料として流通していたなか、出土した資料の多くが鉛製であることは大きな特徴である。鉛は柔らかい、重い、融点が低いといった性質を持ち、この性質を利用した製品がつくられることが多く、鉄砲玉もそのひとつである。鉄砲玉や装飾品の一部と思われるものとともに、円形コイン型、不定形の鉛塊が出土している。分析番号No.1のみ鉛濃度が低く（鉛45.2%、錫53.8%）、その他の資料は鉛の濃度が高い（鉛80%以上）。鉛-錫合金は古くは奈良の大仏の補修に用いられたことが知られており¹⁾、近世においては貝原益軒の『万宝鄙事記』（1705年）に、錫鉛棒を炭火で溶かして銅容器の漏れを塞ぐとの記述が残されている²⁾。近世では鉛-錫合金のインゴットが流通していたと考えられ、No.1も形態から丸型のインゴットである可能性は高く、鉛-錫合金から鉛を精錬し製品を製造していた可能性が示唆される。原料となるインゴットと鉄砲玉などの製品が一緒に出土していることは、この地で金属の加工が行われていた可能性を暗示する。陣屋という性質を考えると、鉄砲玉を製造していた可能性は高い。

3-2 金資料について

金属資料は3点であった。今回出土した元文一分判金（分析番号 No.22）の半定量分析結果は、すでに報告されている元文一分判金の組成と類似するものであった（第2表）。さらに刀のしとどめに似た装飾品（分析番号 No.20）の組成も元文一分判金の組成と類似していた。

近世の金属資料では、金貨以外に金無垢資料の存在が報告される例は稀である。金の採掘や金貨製造は幕府や貨幣鑄造機関である金座などで独占されており、一般に金材料や金無垢製品が出回っていたことは考えにくい。そのような状況を考えると、元文一分判金を原料として金無垢の装飾品を制作していた可能性は高い。加工された製品が持ち込まれたのか、谷村城近くで製造されたかは今回の分析からは判断はできない。金貨は誰でも手にできるものではないことを考えると、陣屋に出入りをしてきた人々の豊かさが窺える。

3-3 金属の溶融や加工に関する資料について

X線透過撮影の結果、分析番号 No.24 と 25 のみ金属付着の可能性が確認され（図版 3）、顕微鏡で表面観察を行った結果、金属部位が確認された（図版 4）。定性分析結果は、No.24 は鉛と銅、No.25 は鉛、銅、錫であった。それぞれの金属や合金を坩堝で溶融していたことが窺える。また、金や銀が検出されなかったことから、金や銀の精錬のために鉛が溶融されたのではなく、鉛合金や銅合金の製品を製造するために鉛が溶融されていたと考えられる。分析番号 No.26 ～ 28 は金属が付着していると考えられる部位の定性分析を行ったが、No.27、28 で銅とスズが微量に検出されたのみで決定的な金属元素の検出にはいたらなかった。しかし、これらの羽口や鑄型は金属の溶融が行われていたことを裏付ける資料である。

山梨県下ではこれまでに甲府城下町や武田城下町で金属溶融に関する資料が確認されている。甲府城下町遺跡の中央2丁目地点から、金、銀、銅、錫、鉛が検出されたかわらけが³⁾、旧相生小学校地点から、銅、亜鉛、錫、鉛が検出された坩堝が⁴⁾、武田城下町の鍛冶小路の一角からは、金、銀、銅、錫、鉛が検出された土器片が確認されている⁵⁾。今回の谷村城からは鉛、錫、銅が検出された坩堝片とかわらけや、鉛製品が多く見られた。場所によって扱う金属種に特徴があることがわかる。今後、出土例、分析例が増えることで、甲府や地方での金属製品の生産や流通が見えてくることが期待できる。

おわりに

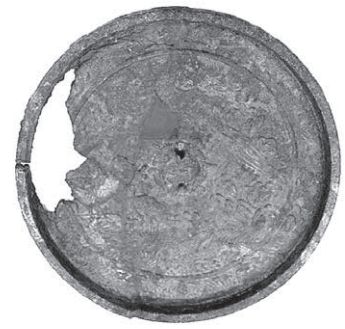
谷村城から出土した金属製品及び金属の溶融や加工に関する資料を科学分析した結果、鉛製品が多く確認され、また、金属溶融物が付着した坩堝や、羽口、金属塊が確認され、谷村城では金属の溶融や加工が行われていたことが示唆された。陣屋で鉛製の鉄砲玉などを製造していた可能性は高い。

参考・引用文献

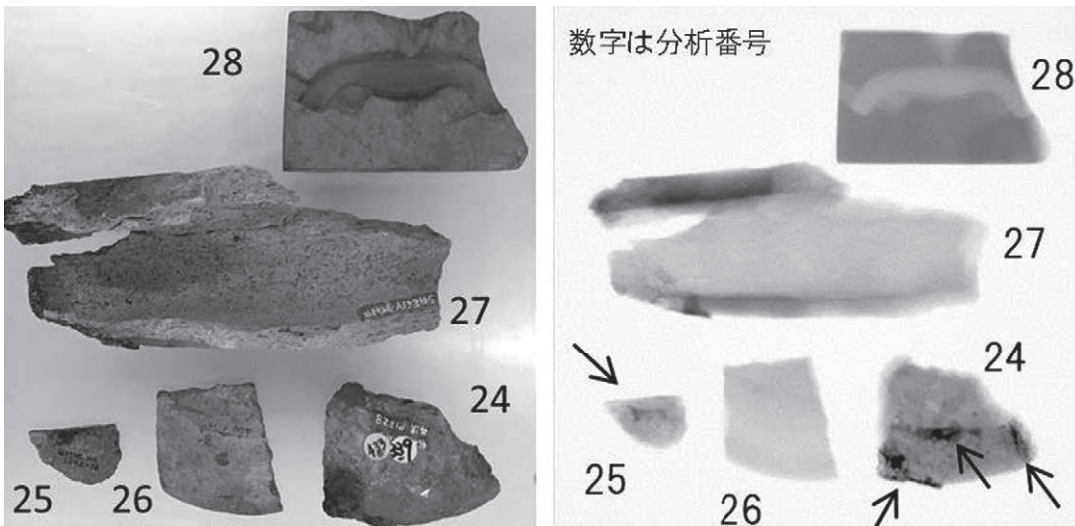
- 1) 小林行雄 1962『古代の技術』塙書房
- 2) 貝原益軒 1705『万宝鄙事記』
- 3) 竹原弘展 2015「甲府城下町遺跡出土かわらけの元素マッピング」『甲府市文化財調査報告 72 甲府城下町遺跡 X II』 p38-51 山梨県中北建設事務所・甲府市教育委員会・株式会社パスコ
- 4) 竹原弘展 2015「甲府城下町遺跡（旧相生小学校地点）出土坩堝の元素マッピング」『甲府市文化財調査報告 75 甲府城下町遺跡 X IV』 p172-174 甲府市・甲府市教育委員会・昭和測量株式会社
- 5) 沓名貴彦 2010「武田城下町遺跡出土遺物の科学分析について」『甲府市文化財調査報告 48 武田城下町遺跡 VI』 p33-35 国立大学法人山梨大学・甲府市教育委員会
- 6) 甲賀宜政 1930『古金銀調査明細録』
- 7) 上田道男 1993「江戸期小判の品位をめぐる問題と非破壊分析結果について」『金融研究』第 12 巻第 2 号 p103-125 日本銀行金融研究所



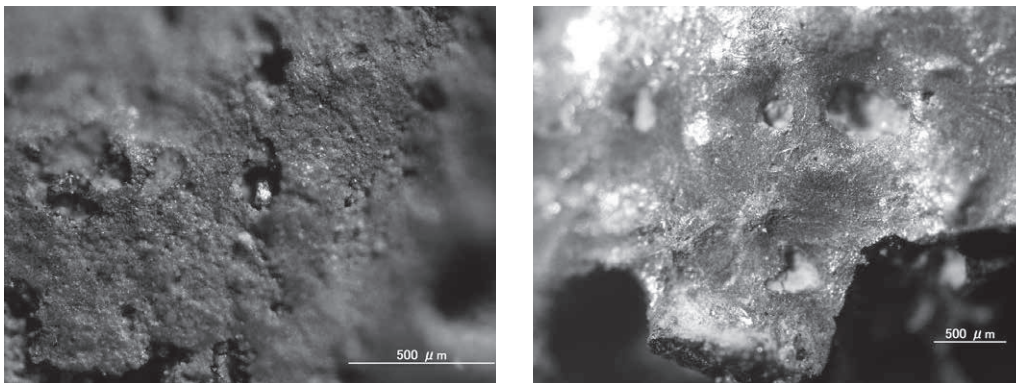
図版1 資料画像(分析番号 No. 1 ~ 22)



図版2 資料画像(分析番号 No. 23)



図版3 資料画像(分析番号 No. 24 ~ 28(右)とX線透過撮影画像(左))



図版4 資料画像(分析番号No. 24(左)と25(右)の表面観察結果)

第1表 定性・定量分析結果

分析番号	図版番号	実測番号	時期	分類・形態	元素分析結果	半定量分析結果	備考
1	776	503	谷村陣屋期 18世紀段階	円形コイン型	鉛、錫	鉛 45.2%、錫 53.8%	
2	704	504	谷村区裁判所期	銃弾	鉛	鉛 98%以上	
3	805	505	-	鉄砲玉	鉛、錫	鉛 81.1%、錫 18.1%	
4	852	506	-	鉄砲玉	鉛	鉛 98%以上	
5	853	507	-	鉄砲玉	鉛	鉛 98%以上	
6	703	508	谷村区裁判所期	鉄砲玉	鉛	鉛 98%以上	
7	806	510	-	不定形	鉛	鉛 98%以上	
8	734	511	谷村陣屋期 19世紀段階	装飾品	鉛、錫、(鉄)	鉛 97%、錫 1.5%以下 微量鉄	鉄は砂の成分の可能性あり
9	830	512	-	装飾品	鉛	鉛 98%以上	
10	831	513	-	不定形	鉛	鉛 98%以上	
11	755	514	谷村陣屋期 18世紀段階	不定形	鉛、鉄	鉛 98%以上	鉄は砂の成分の可能性あり
12	787	515	谷村陣屋期 19世紀段階	不定形	鉛、鉄	鉛 90%以上	鉄は砂の成分の可能性あり
13	772	516	谷村陣屋期 18世紀段階	不定形	鉛、鉄	鉛 90%以上	鉄は砂の成分の可能性あり
14	722	517	谷村陣屋期 19世紀段階	円形コイン型 (真ん中に穴)	鉛、鉄	鉛 90%以上	鉄は砂の成分の可能性あり
15	795	518	谷村区裁判所期	円形コイン型	鉛、鉄	鉛 90%以上	鉄は砂の成分の可能性あり
16	855	519	-	円形コイン型 (真ん中に穴)	鉛、鉄	鉛 90%以上	鉄は砂の成分の可能性あり
17	819	859	-	キセル	銅、亜鉛	-	
18	817	865	-	キセル	銅、亜鉛	-	
19	719	874	谷村陣屋期 19世紀段階	キセル	銅、亜鉛	-	
20	748	913	-	装飾品	金、銀、(銅)、 (鉄)、(亜鉛)	金：銀：銅= 66.0： 30.9：0.8 (3点平均値)	元文一分判金と類似の組成
21	682	914	-	黒色石に金装飾	金	-	金色部と黒色部を比較
22	1081	1017	-	元文一分判金	金、銀、(銅)、 (亜鉛)	金：銀：銅= 66.4： 32.0：1.6 (3点平均値)	元文一分判金と類似の組成
23	804	1016	-	青銅鏡	鉛、銅、錫	-	
24	339	433	谷村区城下町期	溶融物付着 埴塼破片	鉛、銅	-	金属部と胎土部を比較銅は胎土・砂の成分の可能性あり
25	-	-	谷村陣屋期 19世紀段階	溶融物付着 埴塼破片	鉛、銅、錫	-	金属部と胎土部を比較
26	476	452	-	茶変色 土師質土器破片	金属元素検出されず	-	
27	553	65	-	羽口	(銅)、(錫)	-	黒変部と胎土部を比較銅は胎土・砂の成分の可能性あり
28	692	615	-	鋳型	(鉛)、(錫)	-	

※元素分析結果の()は微量元素を示す。

第2表 元文一分判金と金製品の組成 (wt%)

	金	銀	その他
明治造幣局 元文一分判金 ⁶⁾	65.31	34.41	0.28 (銅・鉛・イリジウム)
日本銀行研究 (上田) 元文一分判金 ⁷⁾	65.2 ~ 66.0	34.4	-
分析番号 No.22 元文 一分判金	66.4	32.0	1.6 (銅)
分析番号 No.20 装飾品	66.0	30.9	2.9 (銅・鉄・亜鉛)

第3節 谷村城出土ガラス製ボトルの科学分析

西願 麻以

はじめに

谷村城よりガラス製ボトル破片の一部と考えられる出土した。本稿ではこれら資料の科学分析結果を示す。

1. 分析資料

資料は谷村城出土のガラス製ボトルの破片6点(図1～6)であった。各資料の割れ口より数ミリメートル角の資料片をピンセットを用いてサンプリングし分析に用いた。

2. 分析方法

X線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡(SEM:Quanta600 FEI(株)製、EDX:GENESIS-CDU アメテック(株)製、加速電圧:30kV、測定環境:30Pa、測定時間:100秒)を用いて19元素を測定対象元素とした半定量分析を行った。ノンスタンダードレスのファンダメンタルパラメーター法による定量で、資料片の3ヶ所の平均値を求めた。結果は参考値であり、またNaやSiは、腐食の影響を受けやすい元素であることも考慮する必要がある。

3. 結果と考察

結果を第1表に示す。全てソーダ石灰ガラス($\text{Na}_2\text{O}-\text{CaO}-\text{SiO}_2$)であった。ガラスの骨格成分を含む珪砂(SiO_2)、や長石(SiO_2 60～70%、 Al_2O_3 12～18%、 K_2O 5～10%、 Na_2O 2～3%、Fe微量)、溶融剤のソーダ灰(Na_2CO_3)、ガラスを強化する炭酸カルシウム(CaCO_3)が原料に用いられていると考えられる。着色関連元素としてはFe(鉄)が検出され、色が薄い分析番号No.1で Fe_2O_3 の濃度が低く、緑色が濃いNo.2で一番濃度が高くなった。発色には Na_2O 、 K_2O 、 CaO などの組成の影響もあるが、 Fe_2O_3 の濃度が大きく影響していると考えられる。分析番号No.3～6は組成が極めて類似しており、同一瓶の破片であるか、同じ生産地で作られたものであると考えられる。なお、No.3・4はどちらも瓶の底部であり、この2点に関しては別の瓶であることがわかる。

近世の日本ではカリ鉛ガラス($\text{PbO}-\text{K}_2\text{O}-\text{SiO}_2$)が生産されていたが、明治以降に西洋の技法が伝えられ、ソーダ石灰ガラスが生産されるようになる。近代の国内のガラス製造については明らかにされていない事が多く、ガラス製ボトルの明確な製造開始時期や場所も明らかにされていない。今までに近代のガラス製ボトルの分析事例は甲府城跡出土の47点、山梨県内出土29点、播州葡萄園遺跡出土5点、五稜郭出土6点の計86点であり^{1,2)}、その全てが今回の分析結果と同じソーダ石灰ガラスであった。近代のボトル瓶は外国産または国内産のソーダ石灰ガラスである傾向がみられる。前途の分析事例は、分析手法や対象元素が異なっており今回の結果との組成の比較は難しいが、甲府城跡出土ボトル瓶の組成の各元素の比率が今回の結果と類似しており(特に CaO や Fe_2O_3 の割合など)、本資料と同一の場所で生産された可能性が考えられる。今後、より精密な定量分析法での分析事例が増えることで、色や形態、地域や時代によって組成の違いや特徴を掴み、近代の国内でのガラス製造についての見聞を広めていくことが期待できる。

引用文献

- 1) 小林克次 2005「舞鶴城出土ワインボトルの蛍光エックス線分析による成分分析と他遺跡出土製品との比較」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書222集『県指定史跡甲府城(上巻)』p232-192 山梨県
- 2) 沓名貴彦 2012「甲府城から出土したワインボトルのガラス成分に関する調査について」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書284集『甲府城跡-楽屋曲輪地点-』p191-192 山梨県教育委員会・山梨県総務部

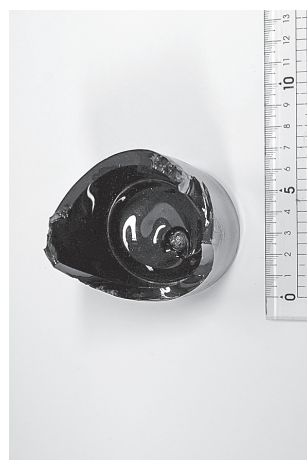
第 1 表 ガラス製ボトルの定量分析結果

分析 番号	図版 番号	実測 番号	色	組成タイプ	化学組成 (wt%)																	
					Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	ClO	K ₂ O	CaO	TiO	Cr ₂ O ₃	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	As ₂ O ₅	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	BaO
1	1088	497	薄黄緑	Na ₂ O-CaO-SiO ₂	3.65	3.93	4.04	62.97	0.96	2.64	18.48	0.16	0.03	0.69	1.02	0.00	0.01	0.04	0.24	0.39	0.64	0.05
2	1086	498	濃黄緑	Na ₂ O-CaO-SiO ₂	0.68	3.22	4.36	53.77	1.16	1.00	27.42	0.47	0.16	0.14	3.36	0.15	0.18	0.14	0.66	0.99	1.52	0.55
3	1087	499	濃灰緑	Na ₂ O-CaO-SiO ₂	1.36	4.10	7.15	58.72	0.93	1.15	21.58	0.32	0.13	0.08	2.16	0.05	0.06	0.11	0.33	0.45	0.91	0.21
4	1092	500	濃灰緑	Na ₂ O-CaO-SiO ₂	1.06	4.20	7.52	59.17	0.75	1.17	21.52	0.30	0.09	0.05	2.07	0.05	0.02	0.04	0.33	0.51	0.81	0.14
5	1094	501	濃灰緑	Na ₂ O-CaO-SiO ₂	1.30	4.08	7.39	59.82	1.03	0.98	20.33	0.37	0.15	0.14	2.07	0.06	0.06	0.04	0.30	0.41	0.50	0.73
6	1085	502	濃灰緑	Na ₂ O-CaO-SiO ₂	0.98	4.18	7.48	60.58	0.83	1.14	20.43	0.28	0.11	0.07	2.15	0.04	0.07	0.09	0.25	0.29	0.63	0.09

図版 1 谷村城出土ガラス製ボトル



分析 No. 1



分析 No. 2



分析 No. 3



分析 No. 4



分析 No. 5



分析 No. 6

第Ⅵ章 調査の成果と課題

第1節 土地利用の変遷

第Ⅳ章で取り上げた様に今回の調査によって時期が異なる遺構群が検出されたが、遺構は機能が廃絶した後の土地造成など、様々な形で2次的に変形をうけているため、考古学的な手法のみで検討するのは限界がある。幸いにも都留市には文献史料や絵図などが残されているため、歴史資料の視点から遺構・遺物を再解釈することが可能である。本稿では、遺構・遺物と文献史料や絵図を対比させることによって、土地利用の変遷を検討したい。なお、検討にあたり、考古・歴史資料から画期を定め、12時期に分割して記述した。時代区分については、発掘調査の結果と文献史料の記録から検討可能な時間軸とした。この際に文献史料により細分し得る時代でも考古学的に限定するのが困難な事例は、大枠で捉えている。

1. 第1期 [縄文時代]

縄文時代の遺物としては、縄文土器片4点と石鏃4点が出土した。縄文土器は胎土・色調・器壁の厚さなどが全て共通しており、同じ時期の資料と判断される。地文には縄文を有し、最も大きい破片(第102図482)には縦位に3条の隆帯が施される。これらの特徴から曾利式期の土器と判断される。

調査区においては、4面(地表面から約1.45mの位置)で猿橋溶岩が検出される。猿橋溶岩は南北方向に主軸を持ち、調査区の北東側に広がっている。溶岩には粘性を有するにぶい黄色土層が伴っているが、細粒でシルトに近似しており、猿橋溶岩が流下した後に、堆積した土層と考えられる。調査区の北東側では遺構も検出されているが、富士山起源の火山灰の堆積が薄い。これに対し、調査区の東側にトレンチを設けて掘り下げを行ったところ、4面の遺構検出面より1.43mの深さでにぶい黄色土層が確認され、遺構確認面からにぶい黄色土層の間は富士山起源の火山灰層が複数の単位で堆積していた。ただし、土層からは縄文時代の遺物包含層は検出されず、遺物は単体で出土した。122号土坑から出土した資料(第93図325～327)もあるが、近代の遺構である122号土坑が埋め戻される際に混入したものである。

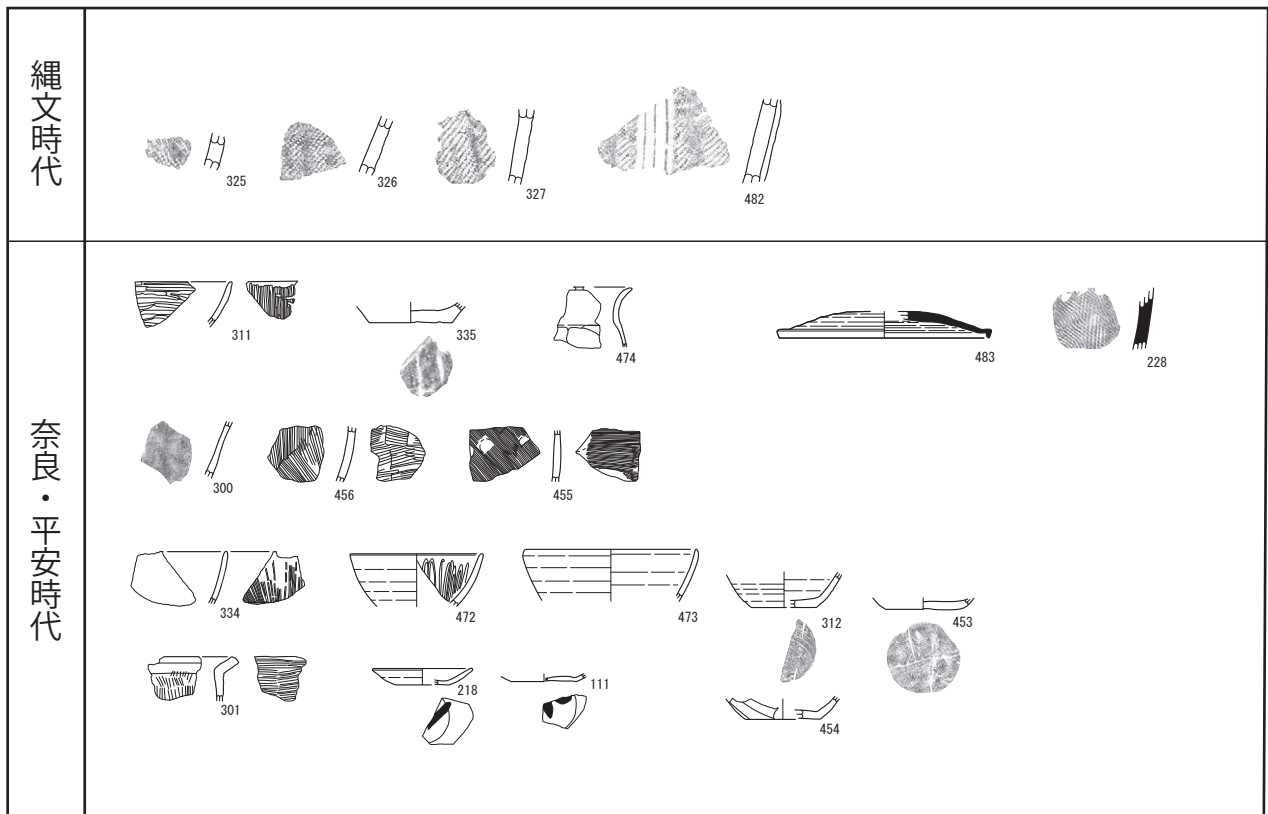
これらの状況から縄文時代における様相をまとめると、縄文時代早期において猿橋溶岩流が流下した後、数度の火山灰の堆積を受けて安定した縄文時代中期において土地の利用が図られたのであろう。ただし、明確な遺構が検出されなかったことや遺物の数が少なく遺物包含層が確認されないことから、集落の形成を伴う本格的な土地の開発ではなく、一時的な土地利用にとどまったと考えられる。

2. 第2期 [奈良・平安時代]

奈良・平安時代の遺物は72の遺構から出土しているが、奈良・平安時代の遺物だけを包含する遺構は、3面から4面に所属する土坑20基である。この内、中近世の遺構確認面である3面の遺構を除くと、土坑19基が奈良・平安時代に所属する可能性のある遺構と捉えられる。ただし、4面で検出された遺物が包含されない土坑は、該期の遺構となる可能性を有する。

遺物としては、完形の個体資料はなく、全て破片資料であった。遺物の点数は、甲斐型を含む土師器坏皿258点、甲斐型甕27点、駿東型甕99点、堀之内原型甕28点、武蔵型甕1点、須恵器坏5点、須恵器蓋5点、須恵器甕5点、灰釉陶器8点である。土師器坏皿の内、底部に墨書が施されている資料(第79図111、第85図218)が2点確認されている。時期決定可能な遺物を見ると、外面に横位のヘラミガキを施した8世紀後半の資料から体部外面下半にヘラ削り、見込み部に暗文を有す9世紀、口縁端部が玉縁形を呈する10世紀前半代の資料などが観察され、時期的な偏りはない。

奈良・平安時代において、富士山起源の火山灰の降灰が進んだものの、猿橋溶岩は完全に埋没しなかったと考えられる。このため、猿橋溶岩を避けて遺構を構築したことから、調査区の南東側に集中的に遺構が構築されることとなった。4面の土坑の中には底面に平坦な礫を伴うものがある(88・113・115・125・130・208号土坑)が、この内115・125号土坑に奈良・平安時代の遺物が包含される。これらの土坑について礎石を伴った柱穴と認定すると、一連の土坑群は掘立柱建物跡を構成する遺構と考えられる。ただし、土坑は規則性に乏しく、掘立柱建物跡の可能性があると認定し得るものは第124図の通りである。



第123図 縄文時代、奈良・平安時代遺物集成図

第2章第2節の歴史的環境の項でも取り上げた通り、調査地点周辺の字名である谷村は多良郷の推定地である都留市田原に隣接しており、北側には平安時代の集落・生産域である鷹の巣遺跡が所在する。調査によって、奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されたことにより、桂川流域の平坦地において広域に遺構が展開する可能性が出てきた。谷村における奈良・平安時代の遺構の性格については今後の調査の進展を待ちたい。

3. 第3期 [中世前期～中期]

鎌倉時代に比定される遺物の量は少なく、遺物も小片が多い。該期の遺物のみを包含する遺構としては、4面103号土坑が確認された。このため、考古学的資料から中世前期の様相に迫るのは困難である。一方で文献史料からは、古郡経忠、保忠が和田義盛の乱に加担して自害するまでは古郡氏の所領であった可能性が高く、その後も谷村は田原と近接していたため、一体の領地として志村次郎等に治められたと考えられる。

南北朝から室町時代における遺物としては、2面から出土した和鏡（第116図804）が挙げられる。同手のもので延文四年（1359）年の紀年銘を有す資料があるため、概ね14世紀代に位置づけられる。鏡面の文様が類似する東京大学総合文化研究科・教養学部美術博物館所蔵の洲浜松樹双鶴鏡と比べると器壁が薄く、重量も大幅に軽い。出土した遺構面の年代は谷村陣屋から谷村出張所に移行する段階の生活面と推定でき、伝世された資料を埋納したものと考えられる。遺構面と遺物の年代が大きく異なるため、慎重に検討する必要があるが、谷村に伝承された和鏡が埋納された可能性もある。

文安二年（1445）の「武田信重向嶽庵領目録」に「都留郡田原郷深田」との記述がある。「都留郡田原郷深田」は谷村の北東側にある下谷地区に比定され、鷹の巣遺跡も含む範囲と考えられる。多良郷は中世段階において下谷地区も含む田原郷に発展したと捉えられる。武田信重の母は小山田弥三郎の娘であり、14世紀から15世紀代になると武田氏との婚姻関係のもと、小山田氏が勢力を伸ばす時期と考えられるが、考古学的な裏付けに乏しい。



第124図 奈良・平安時代掘立柱建物跡配置図

4. 第4期 [谷村館期]

小山田越中守信有は、享禄三年（1530）に中津森館が焼失した後、天文元年（1532）に谷村館を築いた。天正十年（1582）に織田信忠が小山田信茂を滅ぼすまでの間を谷村館期とする。谷村館期の遺物を包含する遺構は38の遺構から出土しているが、谷村館期の遺物だけを包含する遺構は、3面下201号土坑、4面15号溝状遺構、42号溝状遺構である。42号溝状遺構からは大窯製の灰釉皿の他に、土師質香炉が出土している。

谷村館の位置については、谷村城と同じ位置に構築されたとする説、長安寺近辺とする説、円通院近辺とする説などがある。長安寺近辺とする説と円通院近辺とする説については、谷村の烽火台を小山田氏の詰城とし、地形的な広がりから円通院近辺、『甲斐国志』に「(中略)土人相伝長安寺ノ境内ハ小山田氏ノ別荘ナリシト云(下略)」と記されていることから、長安寺近辺に谷村館を想定している。一方で、勝山城を小山田氏の詰城と考え、谷村館が谷村城に引き継がれ、城下町も連続的に発展したとする説や、勝山城南側の川棚に谷村館及び城下を想定する説もある。小山田氏の詰城を勝山城か谷村の烽火台のどちらとするかで研究者の態度も分かれるようであるが、いずれも考古学的に検証はされておらず、平成17年から平成20年にかけて行われた勝山城跡学術調査において、小山田氏の段階で勝山城を構築したとする確定的な遺構は検出されなかった。このため、現状では谷村館の推定地について確度が高い議論を行うことは難しい。ただし、事態の困難さを前提にした上で、今回の調査成果から谷村館の研究について今後の見通しを述べたい。

中世の一括遺物を伴う遺構は少ないが、遺構外から中世に比定される遺物が出土している。その組成を見ると、土師質の播鉢などの生活什器以外にも、青花・青磁・白磁等の輸入陶磁片が複数出土しており、全体の12%を占める。これら以外にも、遺構外であるため使用した時期については慎重な検討を必要とするが、15世紀代の龍泉窯盤片や青磁片も出土した。また、15号溝状遺構は北西から南東方向、42号溝状遺構の長軸は北東から南西方向に走向しており、近世以降の地割と共通している。断片的な資料ではあるが、輸入陶磁が一定量の組成を示すことや遺構の軸線が近世以降と合致することが明らかになった。このため、一定の階層に属する人物が調査地点に居住し、城下の軸線も定められていたと考えられる。なお、『勝山記』永正七年（1511）に「(中略)此春、国中都留郡ト御和ホク落付(下略)」とあり、武田信虎に小山田氏を始めとする都留郡の勢力が従うこととなった。

この後、『勝山記』永正十六年（1520）に「(中略)甲州府中ニ一国大人様ヲ集リ居給候(下略)」と記され、武田信虎は、武田氏館を完成させると帰属した国内諸氏に対し城下への集住を求めた。谷村館を構築した小山田越中守信有も武田氏館及び武田城下を目にしており、そこで得た知見を基に谷村館を構築した可能性があるのではないだろうか。谷村館は周囲に城下を伴っており、城下の一角を調査したと考えたい。

5. 第5期 [初期城下期]

天正十年（1582）に小山田左兵衛尉信茂が織田信忠により誅殺されてから、慶長六年（1601）に鳥居成次が封じられ、谷村藩が成立するまでの間を初期城下期とする。なお、この時期の遺物は次の第6期と時期的に分割するのが困難であるため、考古学的な資料の検討は次の第6期で述べたい。

谷村館が終焉を迎えてから、天正十年（1582）三月から六月、織田信長の家臣である河尻秀隆が甲斐国を支配することとなった。ただし、支配の期間が短期であり、山梨県東部地域に代官を設けなかったことから、ほとんど影響を及ぼさなかったと考えられる。

天正十年（1582）六月、後北条氏は都留郡を制圧し、若神子城に本陣を置いた北条氏直と呼応して新府城に入った徳川家康を挟撃しようとした。しかし、本栖城や黒駒の合戦などにおいて徳川方が優位に戦闘を進め、天正十年（1582）十月に徳川と後北条氏は和睦を結んだ。後北条氏は都留郡を押さえた上で御坂城を拠点としていることから、旧谷村館に北条軍が駐留したと考えられるが、館などの修築を行ったかどうかは明らかでない。後北条氏が谷村を治めたのも数ヶ月であり、その間も合戦に明け暮れていたことを考えると軍事施設の築造を行ったことはあり得ても、本格的な城下を造成したとは考えにくい。

天正壬午の乱で結ばれた徳川と後北条氏の和睦によって、山梨県東部地域は徳川方に引き渡され、戦功のあった鳥居元忠が支配することとなった。鳥居元忠は当初谷村に入らず、岩殿城に入城したとの記録もあり、繰り返し信州征討に従軍していることから、支配の実態は明らかではない。ただし、徳川家康と羽

柴秀吉で小牧・長久手の合戦が行われた際には、北条氏に対する警戒のため、鳥居元忠は従軍していない。また、谷村に西涼寺・長安寺・西願寺が建立されたことや天正十三年（1585）、徳川家康が駿河に向かう途上で谷村に立ち寄ったことなどは、鳥居元忠が支配した段階で谷村の整備が進められた可能性を示している。

天正十八年（1590）に豊臣秀吉により徳川家康が関東に移封されたことにより、隣接している甲斐は徳川家康への備えのため、豊臣方が統治することとなった。天正十八年（1590）から天正十九年（1591）まで豊臣秀吉の甥で養子の羽柴秀勝が甲斐国の領主となり、郡内領の統治は家老三輪近家が担当し、福田三郎右衛門尉、伊藤賀右衛門尉実吉が代官として支配にあたった。羽柴秀勝は天正十八年（1590）八月下旬より都留郡で検地を実施した。背景としては、豊臣秀吉が全国統一の達成を誇示するため、全国の大名家から国ごとの石高を集計した「御前帳」の作成を目指したことにある。羽柴秀勝は天正十九年（1591）に美濃国へ国替えとなった。

天正十九年（1591）から文禄三年（1594）まで加藤光泰が甲斐国の領主となり、郡内領の統治は加藤光泰の娘婿である加藤作内光吉が担当し、西田幸丞、森村源内が代官として支配にあたった。加藤光泰が統治した時代の史料は寺社領と富士御師への安堵関連で占められる。加藤光泰は文禄の役に従軍し病没することとなった。

文禄三年（1594）から慶長五年（1600）まで浅野長政・幸長が甲斐国の領主となり、郡内領の統治は浅野右衛門佐氏重が担当し、氏重家臣川口長重、伊藤又兵衛と大橋吉景、沖吉勝、不破高利が代官として支配にあたった。

浅野氏重は浅野家中にあって家格が高く、浅野忠吉と並ぶ重鎮である。浅野長政・幸長は徳川家康に対して備えるために甲府城の築城を開始したが、徳川領と接していた山梨県東部地域も戦略的に重要な場所であり、そのため、浅野氏重が配されたと考えられる。『甲斐国志』に浅野の代に勝山城が築城されたと記述されており、勝山城跡に残る本丸西面高石垣は浅野が統治した時代に構築された可能性が高いとされている。ところで、本丸西面高石垣が西面に築かれていることから、城下ないしは家臣屋敷が勝山城の西側に広がっていたとする説がある。この説から谷村館の城下も勝山城の西側だったのではないとも考えられているが、第4期〔谷村館期〕の項でも触れた通り、今回の調査で輸入陶磁を伴う中世段階の資料が出土したため、中世後葉において近世城下町の家臣屋敷の区画に一定の階層が居住していた可能性が指摘される。このため、谷村館の城下が勝山城西側に構築されたとする説は考古学的調査により検証される必要がある。浅野支配の段階における城下の位置については、次の項の中で考古資料と対比しながら検討したい。

6. 第6期〔谷村城下町期（鳥居氏段階）〕

慶長六年（1601）に鳥居成次が郡内領に封じられ、谷村藩が成立してから、寛永九年（1632）に徳川忠長の改易に伴い鳥居成行が処分され、本堂茂親が城番として派遣されるまでの時期とする。鳥居成次は甲府藩駿河大納言徳川忠長の家老として甲府城代の任にありながら谷村に居住し、山梨県東部地域を治めた。鳥居成次によって谷村城の築城と城下の整備が進められたとも考えられるが、具体的な史料はない。元和六年（1620）、田野倉村に発する五ヶ堰が着工された。寛永八年（1631）六月、徳川忠長の甲府蟄居から一ヶ月後に鳥居成次は死去し、鳥居成行が領地と徳川忠長の家老職を継いだ。鳥居成行は徳川秀忠への取り成しへ奔走するが、寛永九年（1632）に徳川秀忠が亡くなると、鳥居成行は出羽国山形藩主鳥居忠恒のもとへお預け処分となった。鳥居成行と本堂茂親が支配した時代に大規模な城郭整備が行われたとは考えにくい。近世城下町の基礎が築かれたのは、鳥居成次の代であったと考えられる。

前述した様に第5期〔初期城下期〕と第6期〔谷村城下町期（鳥居氏段階）〕は年代的にいずれかの時期を決めるのが困難である。このため、両方の可能性を含みつつ検討を進めたい。第5・6期の遺物を包含する遺構は44の遺構から出土しているが、第5・6期の遺物だけを包含する遺構は、3面9号溝状遺構、4面114・170・194・195号土坑である。ただし、第IV章で述べた通り、19世紀代に土地の造成が行われたため、17世紀から18世紀の遺構にも該期の遺物が混入している。3面10号溝状遺構は、16世紀後葉から17世紀前葉の遺物が組成の中心であり、第5・6期の遺構と捉えられる。なお、第5・6期における特殊な資料として、表・裏面に金泥文字「二」が付された金泥付基石が挙げられる。

この時期は、志野や唐津の鉢（向付）・沓茶碗などの茶陶、漳州窯皿などが組成されるため、茶の湯などの文化的な素養を持つ人物が居住したと考えられ、16世紀後葉から17世紀前葉の段階で初期城下期の領主または鳥居氏の家臣が住んでいた可能性が指摘される。前項において、浅野氏重が治めた段階の城下ないしは家臣屋敷が勝山城の西側にあったとする説を紹介したが、これらの遺物の所属を浅野が支配した段階とすると、勝山城西側に城下を求める説とは整合しない。第4期の輸入陶磁や第5・6期の茶陶を領主の家臣によるものと仮定すると、中世後期から近世にかけて谷村城下は連続的に発展したと考えることができる。ただし、今回の調査も都留市中心市街地を1ヶ所調査しただけなので、継続的な考古学的調査により、谷村城下の形成史が構築されることが望まれる。

7. 第7期〔谷村城下町期（秋元氏段階）〕

寛永十年（1633）に上野藩総社藩主秋元泰朝が谷村藩に封じられてから、宝永元年（1704）に秋元喬知が武蔵国川越に転封されるまでの間とする。谷村城下町期（秋元氏段階）に比定される遺構は3面32・34号溝状遺構であり、谷村城下町に整備された水路の跡と考えられる。水路は谷村城の堀に入る手前で家中川から分流し、中川に注ぐように配されている。遺物の中では有田内山で生産された皿や御深井焼の手鉢片などが優品として挙げられる。谷村城下町期（秋元氏段階）において、谷村城や家臣屋敷を流れる「家中川」や町屋を流下する「中川」などの水路が本格的に整備された。『谷村城下絵図（横山家蔵）』に描かれた城下町は秋元喬知が支配した時期のものである。第7期においては、絵図や文書から調査地点に居住した秋元氏家臣を辿ることができる。調査地点は甲府地方裁判所都留支部が置かれているが、近世段階においては谷村陣屋であったとされている。これは、享保十年（1725）に作成された『城跡地地割図（小俣家蔵）』からも確かめることができる。『城跡地地割図』と宝永元年（1704）の『谷村城下絵図』を比較すると谷村陣屋の区画が高山源五郎の区画に該当する。また、『甲斐国志草稿』（森島家文書）には、谷村城を破却した後に「（中略）唯高山甚五兵衛ガ旧宅、追手ノ東北ノ側ニアリ。此宅ヲ残シテ陣屋也。一郡ノ政務を行フ。（下略）」と記載されている。絵図と文書から調査地点は、高山甚五兵衛（源五郎）の屋敷であったことが分かる。高山甚五兵衛朝繁（源五郎）は秋元長朝・泰朝・富朝の三代に仕えた高山伝右衛門繁政の子であり、秋元喬知の元で御年寄などを勤めた五百五十石取りの家臣である。では、高山甚五兵衛屋敷にはどのような建物があったのだろうか。正徳四年（1714）、谷村町民の九左衛門等から提出された『差上申願証文之事』は、秋元氏による谷村城下町の時代に高山甚五兵衛が薪小屋を建てるために囲い入れた町人の土地二三坪の返還を求めた訴訟の請書である。この文書により、高山甚五兵衛屋敷の東南側（町民地に近い場所）に薪小屋があったことが分かる。『甲州屋村城（国立国会図書館蔵）』は作成された年が不詳であるが、谷村城に御向屋敷と考えられる区画が認められるため、秋元氏が支配した谷村城下町を描いている可能性が高い。『甲州屋村城』の中で高山甚五兵衛屋敷に比定される区画に目を向けると、西側に門が設けられ、桧皮葺か柿葺の建物が2棟表現されている。『甲州屋村城』と『谷村城下絵図』を比較すると、家臣屋敷の区画が対応しておらず、城下町の北側を大胆に省略している様に見受けられる。このため、『甲州屋村城』に描かれた家臣屋敷をそのまま高山甚五兵衛屋敷と解釈するのは危険であるが、町屋は板葺屋根、家臣屋敷は桧皮葺・柿葺で、谷村城内の櫓が瓦葺になるなど、視覚的な情報に富んでいる。調査地点から近世の瓦がほとんど出土していないことも『甲州屋村城』と整合的であり、秋元氏が支配した段階の谷村城下町の姿を伝える史料と評価できる。なお、『谷村城下絵図』も後代の絵図と比較すると絵図が全体的に縦長にデフォルメされており、谷村城が大きく描かれるのに対し、家臣屋敷の屋敷割に正確さがないなどの資料的な問題点を有する。

8. 第8期〔谷村陣屋期（柳沢氏預地段階）〕

宝永元年（1704）12月から宝永二年（1705）2月の松平下総守、宝永二年（1705）2月から6月までの代官による支配を含む、柳沢吉保による宝永三年（1706）7月から正徳三年（1713）までの預地支配の間を対象とする。なお、『甲斐国志草稿』（森島家文書）に、「（中略）御料御代官清野与右衛門、町埜惣右衛門。宝永二年三月廿三日ヨリ御代官兩人ニテ支配ス。第宅ヲ毀テ田畠ヲ開キ城築ヲ崩シテ溝池ヲ埋ム。六月ヨリ平岡次郎右衛門・同彦兵衛支配トナル（下略）」と記載されているように、柳沢氏の預地支配が始まる前に谷村城は破却された。柳沢氏の預地支配においては、「（中略）郡奉行三吉与左衛門、代官新発田



第125図 谷村陣屋（18世紀段階）水路配置図

丈左衛門、大谷宅右衛門、山下五郎左衛門、関沢徳左衛門、以上五人、下役四人、正徳三癸巳年九月二至ルマテ凡八年（下略）」など柳沢氏の家臣が多数配されており、谷村陣屋期と比較して手厚い人員で支配にあたった様子が伺われる。宝永二年（1705）2月から6月までの代官支配において高山甚五兵衛屋敷を谷村陣屋としており、柳沢氏預地支配の後も山梨県東部地域支配の拠点として谷村陣屋が使用されたことから、柳沢氏預地支配の間も谷村陣屋を使用した可能性が高い。ただし、柳沢氏の家臣が谷村陣屋に居住できたか考えると、人数が多いため収容しきれたとは考えにくい。秋元家の家臣屋敷の多くは朽ちるに任せられたようであるが、家臣屋敷を仮住まいとしたのであろうか。

第8期の遺物として、泉州産の焼塩壺蓋が複数出土していることが注目される。焼塩壺は第8期に初出する資料であり、甲府城下町遺跡でも柳沢家が支配した時期のものが出土している。柳沢家の家臣が焼塩壺を持ち込んだ可能性も指摘される。

9. 第9期〔谷村陣屋期（18世紀段階）〕

正徳三年（1713）、柳沢氏による預地支配が終了してから始まる代官による山梨県東部地域の支配のうち、18世紀段階を第9期とする。第9期における谷村陣屋の様子は絵図から窺うことができる。享保十年（1725）に作成された『城跡地地割図（小俣家蔵）』には、谷村城や谷村城下町の家臣屋敷範囲が畑として表記されている中、谷村陣屋の区画に建物1棟と西南門、2段に屈曲した水路が描かれている。『甲州屋村城』に描かれた家臣屋敷と比較すると、建物が1棟少なくなっている点や門が北西側から西南側に変わる点が異なるが、さほど大きく改変している様子は見受けられない。第7期に記載した、正徳四年（1714）の『差上申願証文之事』の通り、九左衛門等の訴えが認められ、高山甚五兵衛が囲い入れた薪小屋のための土地は町民に返却されることとなった。『城跡地地割図』に記された谷村陣屋の敷地は返却後の様子を描いており、次項で取り上げる『下谷村屋敷割絵図（ミュージアム都留蔵）』の屋敷区画と形状が同一である。『城跡地地割図』は代官河原清兵衛が上谷村と下谷村の境界を確定するために描かれたとされており、谷村陣屋の区画についても一定の精度で測られたと考えられる。正徳三年（1713）から享保五年（1720）までは谷村陣屋に専任の代官が置かれていたが、享保五年に三島代官の河原清兵衛が代官となり、享保九年（1724）に甲府長禅寺前陣屋、上飯田陣屋、石和陣屋が設けられると、谷村陣屋は出張陣屋として位置づけられるようになった。『城跡地地割図』には出張陣屋として用いられ始めた時期の様子が描かれている。享保十年（1725）は三島陣屋の河原清兵衛が代官であったが、谷村陣屋詰の手代の人数は明らかではない。寛政四年（1792）は葦山代官江川太郎左衛門英毅による支配のもと、中嶋貞蔵、多久米助、三嶋逸作の3人が手代として支配にあたった。陣屋1棟では手代の人数に比して狭かったことが想定され、18世紀の中期から後期の段階で谷村陣屋内の建物が拡充された可能性はある。なお、天明五年（1785）の『御門札預ヶ所控』には、谷村陣屋へ入る際に必要な門札を預かる人名が記録されており、谷村陣屋への出入りが規制されていた様子が窺える。

第4章で取り上げたように、17・18世紀代の遺物を含む遺構に19世紀代の陶磁器片が組成されており、19世紀代に土地造成を行ったことが想定される。繰り返し掘削と削平を受けたため、形状が変更したと考えられる遺構が、3面7・8号溝状遺構である。7・8号溝状遺構の覆土は砂礫層であり、水路としての機能が想定された。7号溝状遺構と8号溝状遺構の間には、近現代に造成された池跡が位置しており、C-7・C-8グリッドを中心として江戸時代に遺構面を掘削した状況が確認された。このため、7・8号溝状遺構は連続した水路と考えられ、平面形状が屈曲した水路は、『城跡地地割図』に描かれた水路と同じ形であることから、18世紀段階の谷村陣屋内を走向した水路だったと結論づけられる。さらに『城跡地地割図』から18世紀段階の谷村陣屋の位置を推定すると、旧裁判所庁舎範囲から北東側に広がっていたと考えられる。G-9グリッドから東南側に礫集中が確認されるが、17世紀段階の高山甚五兵衛屋敷や18世紀段階の谷村陣屋に用いられた石材を屋敷東南側に投棄して土地造成をした跡である可能性を有する。E-8グリッドの2号石列遺構から5m東南側に離れた位置に同じ軸線上で石の並びが確認された。近現代の池跡の掘削によって、2号石列遺構も分断されたと考えられる。2号石列遺構の長軸は北西から南東方向であり、谷村城下町の軸線とは異なっており、7号溝状遺構の上に構築されている。7号溝状遺構は遺構確認面から遺構底面まで浅いため、7号溝状遺構が機能した段階の生活面を削平して2号石列遺構を構築した可能性が指摘される。16・18号土坑は19世紀段階の谷村陣屋の遺構と判断され、2号

石列遺構より高い地盤において遺構が検出された。このため、屈曲した水路が廃絶した後に2号石列遺構を構築し、2号石列遺構に埋土した生活面で16・18号土坑が構築されたと考えられる。なお、3号溝状遺構が19世紀段階の水路に比定され、2号石列遺構も19世紀段階の遺構と解釈される。

F-9・10、G-9グリッドにおいては、不規則な礫が集中する遺構（3面4～6・10～12号礫集中）が検出され、礫を除いて遺構確認をした段階で覆土に砂礫を有する水路と考えられる遺構群（3面36号溝状遺構、3面下11・17・37号溝状遺構）が検出された。ただし、砂礫の層厚は薄く、水路に伴う生活面が削平されていると考えられるが、37号溝状遺構に平坦面を内側に向けた礫が並んで検出された。水路として使用されていた段階では両側に礫が配されていたのかもしれない。遺構形成過程をまとめると、18世紀代の水路が廃絶した後に礫が攪乱され、盛土を行った後に19世紀代の生活面が構築されたと考えられる。

上記した以外に18世紀代の遺構として、3面4・5号石組遺構・28・38・39・41・46・47・51・57・152・204号土坑・17号溝状遺構・3号焼土集中、3面下197号土坑、4面91・92・135・174・175・191号土坑・14号溝状遺構・2号炭化物集中がある。3面下197号土坑は底面に礎石を伴っているが、東南側にも底面に礎石を有す198号土坑が検出されており、D-5グリッドに建物が存在した可能性が考えられる。

第9期は肥前産の磁器碗・皿、瀬戸美濃産の陶器が組成され、出土点数は少ないものの灯明受皿や土瓶が出現する。小形の土師質土器は該期を特徴づける資料と評価される。

10. 第10期〔谷村陣屋期（19世紀段階）〕

19世紀段階の谷村陣屋から慶応四年（1868）までを第10期とする。第10期における谷村陣屋は文書や絵図など複数の史料から窺うことができる。天保九年（1838）の『御陣中先前仕来書上帳』は、谷村陣屋に係る労役や費用負担を記した文書である。文書には、「(中略) 御本陣壺軒、御長屋四軒、御囲糶蔵四戸、前同所番小屋壺ヶ所、板橋壺ヶ所、御陣屋内稻荷社之儀（下略）」、「(中略) 御牢内之儀（下略）」など陣屋の施設が具体的に記されている。『城跡地割図』と比較すると長屋四棟、囲糶蔵四棟、番小屋、稻荷社などが増築されている。天保十五年（1844）の『下谷村屋敷割絵図』には、谷村陣屋の敷地に陣屋1軒・長屋3軒・祠2基・水路・西南門・北西門などが描かれており、『城跡地割図』より大きく拡充された谷村陣屋の様子が見てとれる。『城跡地割図』においては、家中川の支流と考えられる水路が屈曲しながら南西から北東方向に走っているのに対し、『下谷村屋敷割絵図』では、西南門の手前で分流し、西側の流路は陣屋にあわせて直角に折れ曲がり、東側の流路に合流するのに対し、東側の流路は直線的に流下する。『御陣中先前仕来書上帳』と比較すると、長屋が1棟少なくなっており、囲糶蔵四棟、番小屋、御牢が表現されておらず、敷地の奥に表現されている2基の祠が稻荷社と考えられる。陣屋の中に祠が設けられるのは特殊な事例ではない。年不詳であるが市川陣屋の屋敷割図にも敷地の隅に鳥居と祠が表記されている。福島県郡山市に所在した守山陣屋や長野県坂城町に所在した中之条陣屋を描いた絵図には、敷地の隅に稻荷社が描かれており、『御陣中先前仕来書上帳』における谷村陣屋の記述と共通する。文久三年（1863）の絵図（平井家蔵）には、陣屋1軒・長屋2軒・鳥居・水路・西南門・北西門などが表現されている。『下谷村屋敷割絵図』と比較すると、水路の形状は同じであるが、長屋が1棟少なくなり、敷地の奥に鳥居が表現される。また、『下谷村屋敷割絵図』に描かれた陣屋は妻入りで西南門から伸びる直線的な道の先に建物の入り口があるのに対し、文久三年絵図の陣屋は平入りで西南門からの道は表現されていない。

天保九年（1838）の『谷村御陣屋附郡中懸諸道具取調書上目録』は谷村陣屋に付属した道具を列記した史料であるが、「御本陣御台所諸道具」として竈などが記されており、陣屋に炊事場が設けられていたことが分かる。また、「壺」から「四」長屋の他に、「御陣中長屋」の備品も表記されている。天保九年（1838）の『御陣中先前仕来書上帳』にある「(中略) 御本陣壺軒、御長屋四軒（下略）」という記載と合致している。さらに、天保九年（1838）は葦山代官江川太郎左衛門英龍による支配のもと、根本又市、長沢与四郎、根本定助、関仁太夫の4人が手代として業務にあたっているが、4人の手代はそれぞれの長屋で居住したと考えられる。天保十四年（1844）は石和代官佐々木道太郎による支配のもと、大越孝一郎、木村森助、木下進五郎、今井穂七郎の4人が手代として支配にあたった。天保十五年（1844）の『下谷村屋敷割絵図』には長屋3棟しか描かれていないので、陣屋でも居住したのかもしれない。嘉永七年（1854）は石和代官森田岡太郎による支配のもと、服部泰作、高橋正橋、三浦光之助、柴田桂次

郎、柴田礼助、服部金之助の6人、文久元年（1861）は石和代官内海多次郎による支配のもと、杉浦武助、垂井鉄五郎、林又太郎、高梨丹次、増田勝八郎の5人が手代として支配にあっているが、文久三年（1863）の絵図には長屋が2軒しか描かれていない。ただし、長屋は板葺で簡素な建物と想定され、手代の人数に応じて増改築が行われたと想定される。慶応二年（1866）は石和代官増田安兵衛による支配のもと、岩淵黙太郎、柴田礼助、中沢幸作、岡田栄八、林又太郎の5人が手代として支配にあつた。柴田礼助は嘉永七年（1854）石和代官森田岡太郎支配、林又太郎は文久元年（1861）石和代官内海多次郎支配の元でも名前が見られることから、石和代官増田安兵衛に再任用されたものと考えられる。

手代は代官の下で実務を担い、百姓を含めた様々な階層から登用された。代官が支配地を円滑に管理するためには優秀な手代を雇用する必要がある、谷村陣屋の代官にもなった佐々木道太郎の手代吉田善四郎は文人画家でもあった。谷村陣屋から出土した陶磁器は手代が生活する際に使用したものと考えられるが、18・59号土坑から出土した良質で文人趣味が伺える陶磁器は手代の教養の高さを示すものと考えられる。また、江川太郎左衛門英龍の手代根本又市の様に清廉さで庶民から称えられた者ばかりではなく、西村貞太郎時憲の手代山下左内の様に手代の業務によって私腹を肥やした者もいたようである。

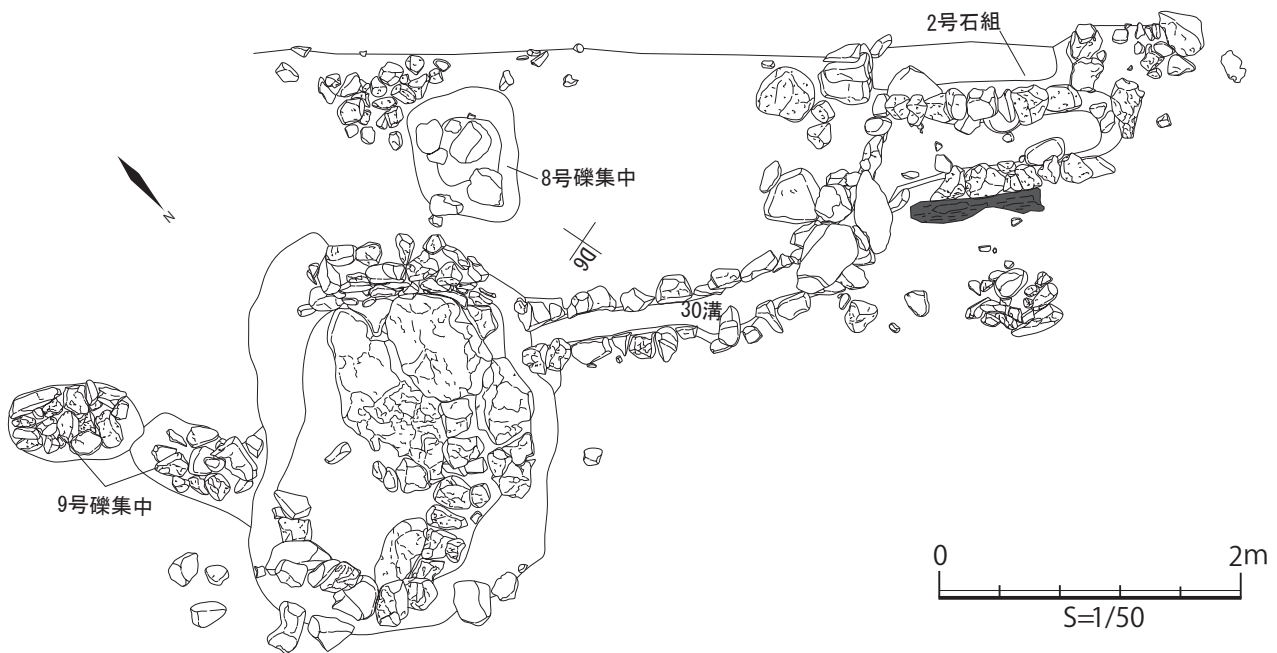
慶応四年（1868）3月、谷村を始め山梨県東部地域の各村からの願いとして谷村陣屋の統治機能は失われたため、石和陣屋附にして欲しいとの願書が提出された。嘉永元年（1848）、『諸入用勘定仕上目録』によると、谷村陣屋への支給金額は100両、支出総額は94両3分と永153文六分で、残額5両永96文4分は翌年に繰り越された。2面から出土した元文一分判金や文政南鐐二朱判銀などの金銀貨は近世の遺跡からの出土は珍しく、金銭が集積する陣屋の性格を裏付けている。ところで、人件費と役所諸入用の標準を予算化し、代官所経費を幕府が支給する方法に代わったのは享保十年（1725）であるが、5万石高代官所で支給経費が550両の事例と比較すると、郡内領を2万6千石とすると谷村陣屋の支給額は多くはない。寛政四年（1792）に谷村陣屋の代官となった江川太郎左衛門英毅が寛政十一年（1799）幕府の諮問に答えた『借金之儀ニ付書上控』によると、「（中略）殊更甲州支配中者郡内領谷村ニ出張陣屋有之手代、書役四・五人程ツ、差遣、旁失墮のみ多嶋々支配之外ニも諸入用年々引足不申候（下略）」と谷村陣屋の支配について経費が嵩むと述べている。

『目録』の中で、「用水路整備出役」や「御用始め料理代」という支出項目が立てられている点に注目される。調査により、近世に使用された水路が砂礫層で埋没した状況が確認された。家中川の源流から流下する過程で粗粒の礫が堆積するため、水路整備が不可欠であったと考えられる。また、御用始めにおいて、特別な料理が用意されたことも史料から想定される。

天保十五年（1844）の『下谷村屋敷割絵図』に描かれている土地の区画は、18世紀代の『城跡地割図』と共通し、谷村陣屋と町民地の境界が現在の甲府地方裁判所都留支部敷地より東南側に広がっていたことが分かる。ところが、文久三年絵図における谷村陣屋の区画は裁判所敷地と共通する。文久三年絵図は『都留市史』通史編に図が掲載されているだけであり、史料的な検討を行う必要性はあるが、文久三年絵図の土地区画を前提にすると天保十五年（1844）から文久三年（1863）までのいずれかの段階で谷村陣屋と町民地の境界に変化が生じたことになる。絵図から陣屋の位置を推定すると、裁判所の旧庁舎南端から北東側に所在していたと推定できる。つまり、裁判所旧庁舎と重複しており、建設工事の際に削平されたと考えられる。ただし、谷村陣屋に係る可能性がある遺構として2面下3号石組が挙げられる。陣屋内の場の機能は、公的な業務と私的な業務を行う空間に分けられる。現在でも建物が保存されている岐阜県高山市高山陣屋の事例を参照すると、陣屋入口から手前側に白洲など公的業務を行う空間があり、中央に居住空間、さらに奥に竈などが置かれ炊事を行う居住空間が広がっている。この空間配置を谷村陣屋にあてはめると、2面下3号石組は陣屋の最も奥にあたり、居住空間に該当する。2面下3号石組の東南側には北東から南西方向の軸線で不連続な石の並びが確認されており、竈を伴う土間の境界を示している可能性を有する。3面3号溝状遺構は19世紀段階の谷村陣屋で用いられた水路と考えられるが、19世紀後葉の遺物も包含しており、谷村出張所・谷村区裁判所期においても機能していた可能性を有する。『下谷村屋敷割絵図』にある東側の水路が3号溝状遺構に該当する。3面26号溝状遺構に対応する水路は『下谷村屋敷割絵図』には見当たらない。3号溝状遺構とは異なり、包含する遺物の年代は19世紀中葉までであり、19世紀後葉の資料は含まないため、短期間に構築され埋没した遺構と考えられる。3面16号土坑は四方の壁面に礫が貼られた地下室である。遺構の底面に塊状の焼成炭化米が複数検出された。炭化米は黒色に炭



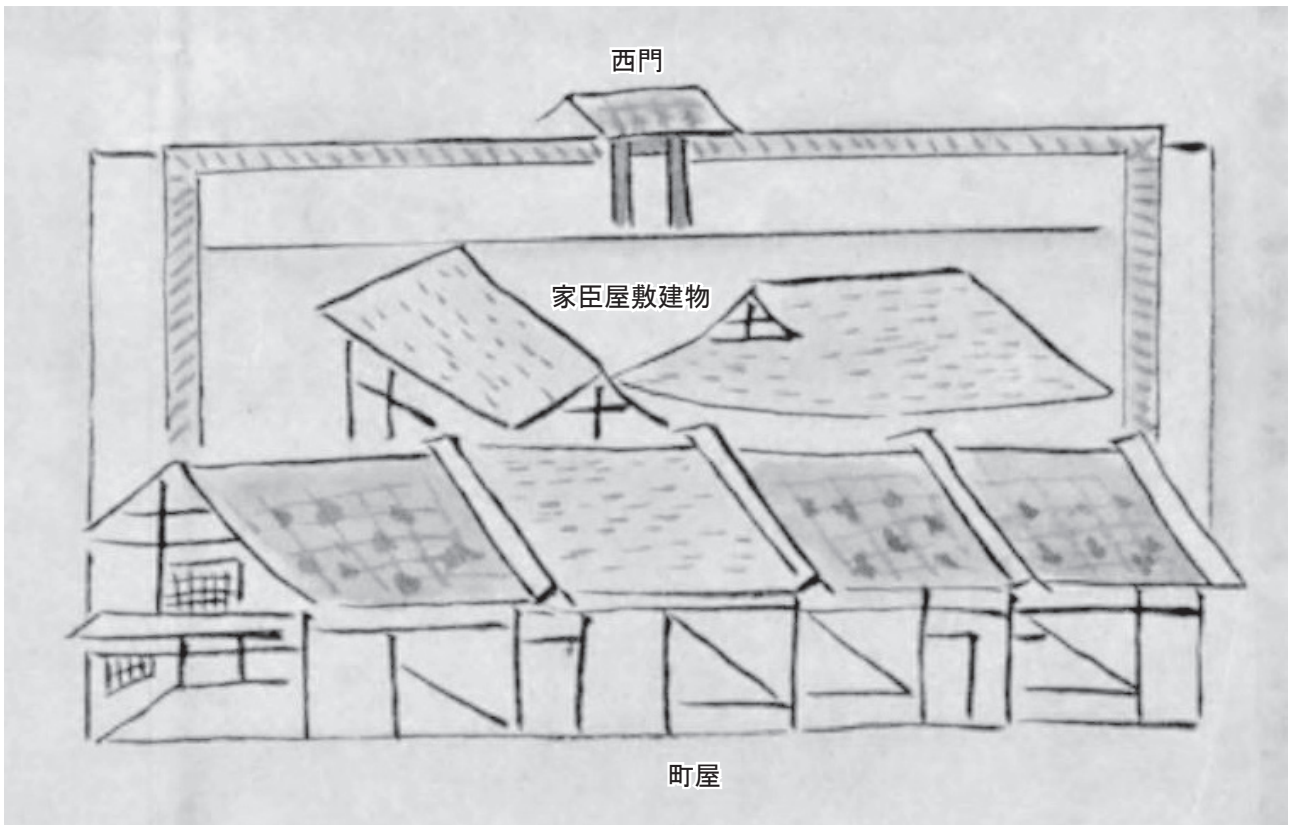
第126図 谷村陣屋（19世紀段階）建物配置図



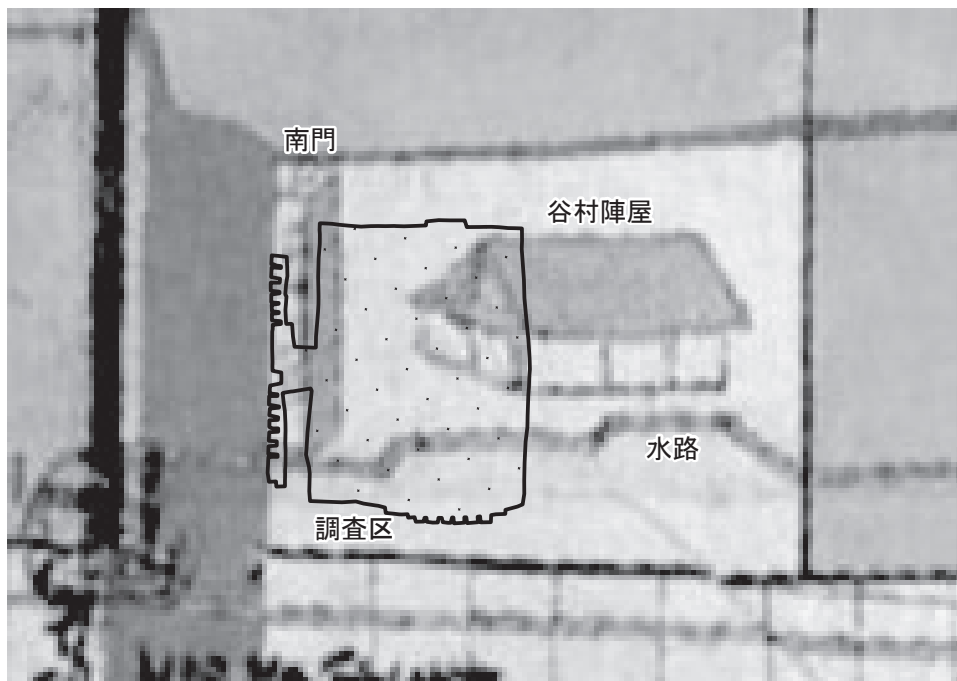
第127図 1・2号石組等配置図

化しており、粒が独立しているものと塊状のものに分けられる。塊状の中には籾殻が観察される。独立した粒は発泡しており、指で軽く押しつぶすことができる。一方で、塊状を呈するものは完全に接合し発泡しており、ほとんど米の原形態を留めておらず、指で軽く押しつぶすことができる。中山誠二による米の燃焼実験を参照すると、上述した炭化米の特徴により 250 から 300℃ で焼成された未炊飯の米であると推定される。16号土坑は19世紀代の谷村陣屋において食物貯蔵庫として使用されたと想定される。ただし、機能が失われてからは食物残渣などの投棄坑に転用されたと考えられる。18・25号土坑の遺物と接合関係にあるが、東京都真砂遺跡の事例の様に投棄穴に捨てられる前にごみ溜めにストックされた後に廃棄されたため、遺構間接合が生じた可能性がある。『下谷村屋敷割絵図』と対比させると16号土坑は長屋に位置することが分かる。ただし、地下室は調査範囲で1基しか検出されておらず、文献史料で長屋が4棟ある内の1棟にだけ地下室が造成された理由が不明である。絵図に表現されていない囲碁蔵である可能性も有するが、長屋と同じく四棟と表記される囲碁蔵と地下室の数量が対応していない。もう一つの可能性として、上屋を持たない食物貯蔵庫としての地下室が長屋脇に構築されたことが指摘される。16号土坑には19世紀後葉の遺物も包含しており、谷村出張所・谷村区裁判所期にも投棄坑として機能した。3面18号土坑・3面下59号土坑は陶磁器と共に動物遺体が出土した遺構である。18号土坑からは酒器としての機能が想定される小碗（第80図126・127）や爛徳利（第80図135）と共に切削痕を有すタイの頭骨が出土しており、供献料理の残渣や破損品を捨てた可能性がある。59号土坑は清代景德鎮窯鉢（第82図157）や質の高い土瓶（第83図169・170）を伴っており、動物遺体も検出された。3面25号土坑には水路の堆積土層である砂礫層が確認面から1m近く埋められていた。25号土坑は水路整備を行った際に生じた砂礫層を埋めるための遺構と考えられる。4面74・76・77・79・114・119号土坑は長楕円形を呈し、土坑の間隔が東西軸4.0m、南北軸1.4mで南端の南北軸は0.6mを測る。このため、掘立柱建物跡が想定されるが、南端のみ短くなるため、南側に庇が付いた建物である可能性を有する。3面1・2号石組、30号溝状遺構は絵図に描かれていない遺構であり、西南門と陣屋の間に位置している。1号石組と2号石組の間を30号溝状遺構が通っていないため一連の遺構と判断され、遺構底面に粘土が貼られていることから、水を用いた遺構であることは間違いないが詳細な機能は不明である。1号石組に周囲に位置する8・9号礫集中も関連した遺構と考えられる。上記した以外に第10期の遺構として、3面2号石列遺構・6号石組遺構・17・19・22・23・26・27・29～32・42・55・153～155号土坑・17号溝状遺構、3号焼土集中、3面下59～61号土坑、4面78号土坑・12・13・39号溝状遺構がある。

19世紀前葉の磁器碗の器形と大きさは端反形・腰折形中碗が組成の中心を占めるが、19世紀中葉になると丸形小碗・筒丸形小碗・端反形小碗、丸形中碗、浅半球形大碗など多様性が増す。一方で見込み松竹

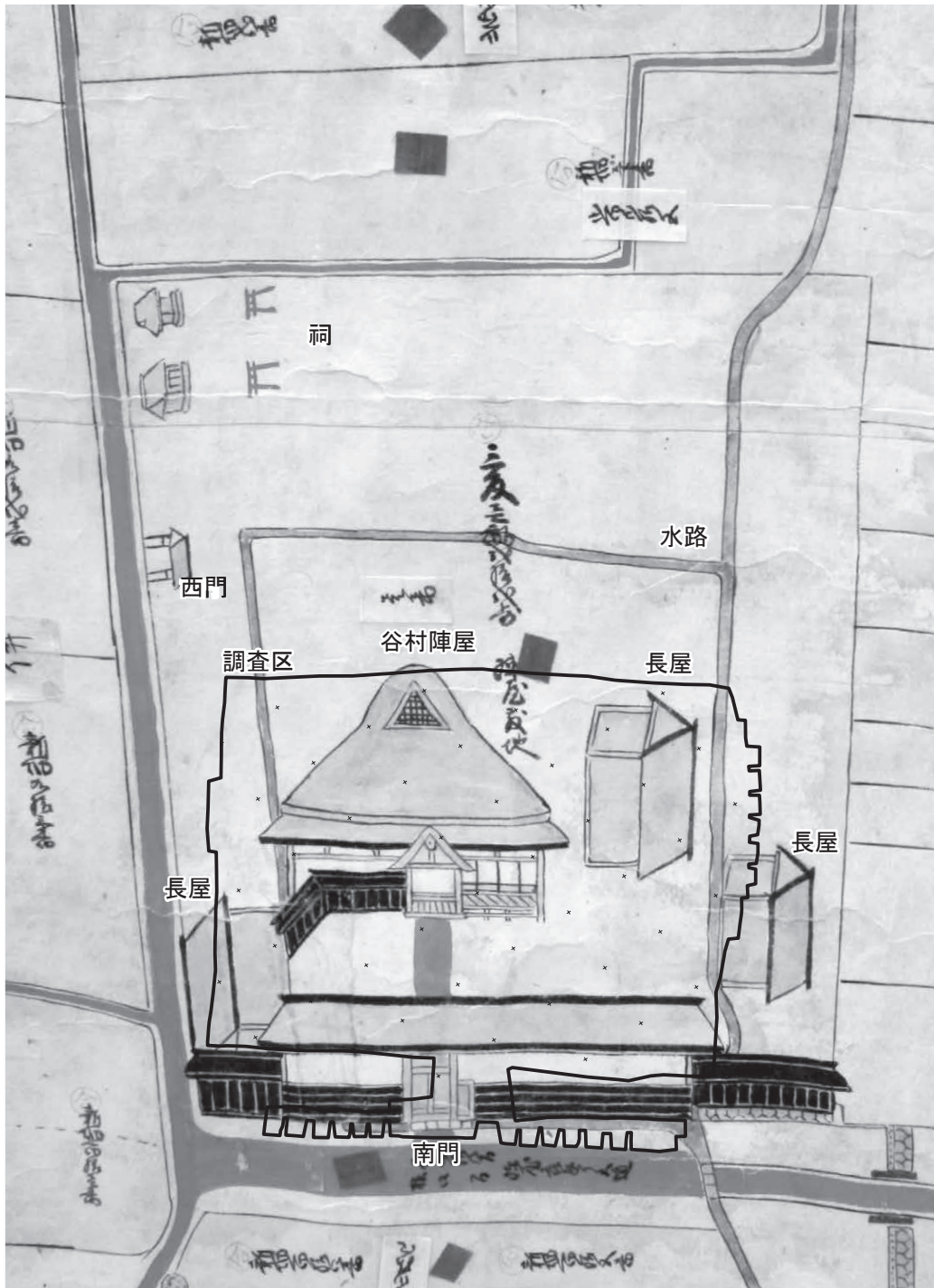


『甲州屋村城』部分（国立国会図書館蔵）



『城跡地地割図』部分（小俣家蔵）

第128図 絵図から見る調査区の位置比定（1）



『下谷村屋敷割絵図』部分（ミュージアム都留蔵）

第129図 絵図から見る調査区の位置比定（2）

梅文の中皿が量的にも多くなり、陣屋に備えられた磁器の規格性も看取される。灯明皿・灯明受皿も破片を含めると多量に出土しており、谷村陣屋に必要な物品として購入された可能性を有す。薄手酒坏・小坏・爛徳利・金属製酒爛器など酒器や煎茶碗と見られる小碗と共に、良質の土瓶が組成され、居住した手代が文化的な素養を持っていたことが類推できる。手代が使用した道具として、携帯用の小形硯が挙げられる(第108図614・第110図648・第111図679)。年貢徴収事務など廻村した際に使用したものであろう。調査地点からは近世瓦として、左三つ巴文を有す軒棧瓦や10弁菊花文が施された小菊瓦が出土した。『城跡地割図』や『下谷村屋敷割絵図』に描かれた陣屋は、桧皮葺や柿葺の様に描かれており、瓦が葺かれている可能性があるものは西南門のみである。谷村城下町を描いた『甲州屋村城』には谷村城の総門・大手門・隅櫓のみ瓦が表記されている。このため、谷村城下町及び谷村陣屋において瓦葺の建物は例外的な構造物と位置づけられる。土製品として、箱庭道具である石垣やままごと道具であるミニチュア土製品が出土しており、手代の趣味や手代の子供が居住したことを示唆している。福島県守山陣屋の文書からは、手代の家族が陣屋内に居住したと記載されているが、調査地点から出土した紅皿や簪は手代の妻が住んだことを裏付けている。羽口・埴塙・鋳型・鉄砲弾・インゴットと考えられる金属塊について、所属時期を検討する必要があるが、19世紀の陣屋には金属鑄造施設が伴っており、武具生産の可能性が高いと言える。なお、図示してはいないが、主に第9・10期の生活面から出土した資料として、火打石49点が出土した。

11. 第11期〔谷村出張所・裁判所期〕

明治時代、谷村出張所・谷村区裁判所が設置されていた時期を対象とする。慶応四年(1868)三月四日から五日にかけ、官軍は甲府に到着し、総督府参謀海江田武次が甲府城代に城内詰め勤番士の城内からの立ち退きを命じたが、城代は勤番士に居住区域である城下町からの立ち退きを申し渡したため、城下町は大混乱となった。同時期に甲州市勝沼町柏尾で官軍と甲陽鎮撫隊による戦闘が行われ、甲陽鎮撫隊は敗走することとなった。谷村陣屋においても新撰組の近藤勇に好意的な陣屋役人が甲陽鎮撫隊の敗退と共に失踪するなど、時局に応じて混乱し、陣屋としての機能が失われた。慶応四年(1868)四月には山梨県東部地域の各村連名で石和陣屋附けにして欲しいとの要望書が出された。『山梨県史』には、各地の藩兵が谷村に赴いたことが記録されている。次に列記したい。

明治元年(1868)7月2日、谷村の警護を命じられた松代藩に代わり延岡藩兵(谷村半隊と記載)に出兵の達書

同年7月2日、谷村の警護を命じられた松代藩に交代の達書

同年7月17日、江戸に赴く延岡藩兵の中に銃兵2人が谷村より行くとの記載あり

同年8月4日、彦根藩兵10人に対し谷村陣屋に駐在し、近隣への取り締まりを厳重に行うよう命じた達書

同年10月28日、谷村に出張した彦根藩の兵隊に引き揚げの達書

明治元年(1868)10月28日の達書は、『都留市史 通史編』に掲載された、彦根藩の役人4人、歩兵2人、郷夫1人が28日間、谷村に逗留したという記載に対応した事例であろう。明治元年(1868)においては、総督府参謀の命令により西国の藩兵が谷村を守ったと解される。文中には谷村としか表記されていないが、江戸時代における山梨県東部地域の統治機関である谷村陣屋に駐在したのであろう。

明治元年(1868)8月、明治政府は甲斐府を置き代官を知県事と変えて、甲府・石和・市川の三部代官の制度をもって支配にあたった。次いで、明治二年(1869)には甲府県として三知県事を廃し、谷村出張所を置いて、決済を甲府県の本庁に仰ぐこととした。『山梨県史』には、「(中略)谷村出張所ヲ存シテ支庁トシ属官数員ヲ置キ都留一郡ニ関スル事務ヲ理シ決ヲ本庁ニ取ラシム(下略)」 「(中略)谷村従前ノ陣屋其儘出張所ニ差置(下略)」と記載されている。谷村出張所は旧谷村陣屋の建物をを用いたようである。『山梨県史』における明治二年(1869)10月の記録に、「(中略)谷村支庁繫獄ノ盜富五郎病死ス(下略)」 「(中略)谷村出衙入牢(下略)」と記されていることから、谷村支庁内に牢が設けられていたことが分かる。明治三年(1870)石和出張所が廃されると、谷村出張所を支庁として、「(中略)属官数員ヲ置キ都留一郡ニ関スル事務ヲ理シ決ヲ本庁ニ取ラシム(下略)」こととなった。谷村支庁での業務は聴訟断獄以外にも、治水や租税徴収など多忙を極め、「休庁ヲモ不立夜以テ日ニ繼勉勵為致候へ共」業務をこなすことができないため、大属権1名・大属1名・小属権2名・小属2名・史正2名

の増員が申し出されている。このため、谷村出張所や支庁で業務にあたった官員は極少数であったと考えられる。谷村支庁からの断獄に係る具申を見ると、明治三年（1870）11月に1人を死罪、12月に13人を斬刑、明治四年（1871）5月に1人を流罪に処したとされている。死罪や斬刑について、執行された場所や執行人と谷村出張所・谷村支庁の官員との関係は不明である。

明治四年（1871）、府県官制が制定され、同年11月27日に県治条例が公布され、県令は地方統治の権限を一手に掌握し、県内の裁判は聴訟課にて扱うこととなり、司法と行政が未分化の状態であった。明治五年10月、谷村区裁判所が谷村陣屋の敷地に設置される。明治六年5月（1873）に谷村支庁（谷村出張所）が廃されるまで同じ敷地内にあったと考えられるが、詳細は不明である。明治十四年（1881）6月に完成されたとされる木造瓦葺平家建の新庁舎については資料が残されていないが、調査地点において初めて本格的に瓦を葺いた建物だと推定される。明治二四年（1891）2月に出来上がった木造瓦葺2階建本館および附属建物については、『地圖第壱号原本』という平面図が残されている。図には、建物及び施設が描かれ9番までの番号が付されているほか、敷地に植栽された木の樹種が分かる様に表現されている。『地圖第壱号原本』には、谷村尋常小学校（現谷村第一小学校）から県道高畑谷村停車場線沿いに水路が描かれており、江戸時代後期から明治時代初期に新たな水路整備が行われた可能性を示唆している。明治二四年以降、昭和三三年（1959）に至るまで大規模な新築工事は行われなかったようであり、大正から昭和の古写真に写されているのは明治二四年（1891）に完成した庁舎と考えられる。

明治五年（1872）11月の『山梨裁判所被置候ニ付従前官員転任其外申立書』には山梨県で聴訟断獄を担当していた官員の内、大属2名・小属1名・史生2名・等外出仕8名の13名が司法省に転任したと記されており、山梨裁判所に転属したとも解釈できるが、明治九（1876）年に出された山梨裁判所の布達に見える判事名は、山梨県庁から転任した人名と一致しないことから、司法省内での人事異動が行われたと考えられる。いずれにせよ、府県裁判所には判事長1人、判事、判事補を配するとされており、谷村区裁判所にも山梨裁判所の官員が就いたと判断される。裁判所の機能は審判業務にとどまらず、施設の維持・管理の人員を要する。明治十年（1877）「谷村警察署刑事取扱仮規則」には、「但裁判所於テ日々糾問ノ囚人ハ獄丁及雇繩取ヲシテ護送セシムヘシ」と書かれているが、谷村警察署が整備されるまでは裁判所で取り調べる囚人を収監するための獄舎が置かれたものと解される。このため、谷村出張所・谷村支庁の段階から継続的に牢屋の運営に必要な番人が居住していたと考えられる。したがって、赴任した判事や牢番が居住する空間が敷地内にあったと考えるのが妥当であろう。『地圖第壱号原本』には、中央入口に「第壱号」、東側に「第貳号」、西側に番号が付されていない建物が凹字の形状で描かれているが、これらは執務を行った空間である可能性が強い。これに対し、「第壱号」や西側建物の北東側には、小規模な部屋が連続していたようであり、居住空間であったと考えられる。

1面1号石列遺構は、裁判所の建物と共に大正から昭和の古写真に写されており、裁判所の門扉から建物入口までに配された石畳状の遺構である。『地圖第壱号原本』にも門扉から建物入口までに表記がなされており、1号石列遺構に比定される。1面2号敷石遺構は庁舎の建物基礎であり、溝状に掘り込んだ内部に礫を充填している。甲府城下町遺跡の甲府市役所地点においても、明治九年（1877）から十年（1878）に建設された山梨県庁の遺構が検出されており、建物の形状に応じて溝状の掘り込みの内部に礫を入れる工法は共通する。ただし、山梨県庁と異なり、礫の下部に杭を打設したり、胴木をわたす状況を見られなかった。2面1号道路状遺構は1号石列遺構の下部に検出された遺構であり、軸線が共通することから、明治十四年（1881）の庁舎に対応した裁判所の門扉から建物入口までに設けられた道路状の遺構である可能性を有する。1号石列遺構と1号道路状遺構の北側と南側は、昭和三三年の庁舎建設時に掘削されており、1面1号礫集中はこの時に取り外された1号石列遺構の礫を埋設したものと考えられる。2面22号溝状遺構は、江戸時代後期から明治時代の遺物が包含されており、幕末から使用され、明治時代に埋没した遺構と考えられる。珍しい資料としてはミニエー銃の銃弾があるが、延岡藩の銃兵が使用した可能性がある。また、ワインボトルも複数点出土しており、西洋の文物に触れた様子が看取される。なお、主に第11期の生活面から出土した資料として、図示したものを含めて石筆161点が出土した。

12. 第12期 [裁判所期]

大正時代から昭和三三年の庁舎建設までを対象とする。この時期は裁判所として継続的に用いられて

いるが、災害や時局の影響を色濃く受けている様子が調査によって明らかになった。1面1～3号瓦溜、2面4～8号瓦溜に含まれていた磁器はスタンプが施された大正時代のものが下限である。大正十二年(1923)に関東大震災が発生し、庁舎も被災したため、大正十三年(1924)に復旧工事が行われたとの記録が確認されるが、瓦溜はおそらく関東大震災で破損した瓦を捨てた投棄坑と判断される。1面1号敷石遺構は建物の基礎であり、1面1号通路状遺構は建物入口に至るまでの通路状の遺構と判断されるが、1面1号通路状遺構が2面4号瓦溜の上に構築されていることから、昭和に入って建てられたものと判断される。ただし、1面2号敷石遺構と比べると掘り込みを有さず、概ね平面的に礫が並べられていることから、庁舎に付属した建物と考えられる。『地圖第壱号原本』には、庁舎東南側に屈曲した水路が描かれており、1面1・2号水路との対応が想定されたが、1面平面図と『地圖第壱号原本』を重ね合わせたところ、1号水路は図の水路より北側、2号水路は図の水路より東側に位置することが分かった。2号水路の西側において北東から西南方向に不連続な礫の並びが見つかっており、第11期の水路である可能性を有する。1・2号水路は昭和の磁器も含んでいることから、昭和三三年の庁舎建設まで使用された水路と考えられる。第2次世界大戦に係る資料として、統制陶器が複数出土した。第2次世界大戦後の連合軍による占領期に係る資料としては破片資料であるが、磁器皿が出土している。また、大正時代以降に生産されたと考えられる骨製歯ブラシも検出され、裁判所の官吏が新しい習慣を受容している様子が伺える。第11・12期の裁判所の屋根に葺かれた瓦には、「□狩石川製瓦□□」「□に初狩、○にカ」「△に□、初□」「○に石」などの刻印が施されている。欠字を補って類推すると、初狩に所在する瓦窯で「石川」ないしは「カ」字が付いた会社と考えられえ。裁判所の敷地を囲む石垣の内部からは裁判所に葺かれていた瓦が確認されているため、石垣は近代に入って構築されたものと判断される。

第2節 出土陶磁器・土器の編年

1. 目的

今回の埋蔵文化財調査によって、中世から江戸時代にかけて、まとまった数量の遺物が出土した。山梨県東部地域において、考古資料による中近世を中心とした時間軸の検討は行われていないため、出土資料を基にした編年の構築は極めて重要と考えられる。このため、編年図をまとめるのと同時に、設定した各段階における内容と特徴を記述することとしたい。

2. 対象

編年図の作成にあたっては、図化資料を対象とした。図化資料の選別は残存部位が全体の1/2以上のものを中心としているが、19世紀中葉以降の資料は出土量も多かったため、さらに時代を特徴づける遺物を選別して図化を行った。また、本来的には破片資料も含めて器種組成や産地組成を検討すべきであるが、出土量が多かったため、実施することはできなかった。ただし、段階1から段階4の資料は数量的に限定的だったので、破片資料も含めて検討している。なお、縄文時代と奈良・平安時代は全て破片資料だったため、第1節で検討を加えた。

3. 方法と段階設定

陶磁器の時期区分にあたっては、東京大学埋蔵文化財調査室の堀内秀樹氏に年代の比定を依頼した。年代の表記は、1世紀を三分割して、前葉・中葉・後葉と記述した。土器の時期区分にあたっては、生産地から搬入した焼塩壺などについては、堀内氏に教示いただき、生産地が在地と考えられる土師質土器については時期が限定づけられる一括資料をもとに成形技法や焼成の度合いをもって時期区分を行った。

段階の設定においては、土地利用の変遷から画期を設けて、細分された年代を大きくまとめつつ、陶磁器・土器の内容に独自性を有する年代については、独立した段階を与えた。陶磁器の年代につき、複数の時期にまたがる特徴を有するものについては、組成内容からどちらかの段階に所属させた。

段階1)「中世前葉」に区分された年代を対象とする。概ね1190年代から1330年代を充てる。

段階2)「16世紀中葉」、「16世紀中葉～後葉」、「16世紀後葉」に区分された年代を対象とする。概ね1530年代から1580年代を充てる。小山田越中守信有が谷村館を築造してから、小山田氏

が山梨県東部地域を治めた時代に比定される。

段階3) 「16世紀後葉～17世紀前葉」、「17世紀前葉」に区分された年代を対象とする。概ね1580年代から1630年代を充てる。小山田信茂が織田信忠に滅ぼされ、山梨県東部地域の領有が変転した時代に比定される。

段階4) 「17世紀後葉」に区分された年代を対象とする。概ね1630年代から1700年代を充てる。秋元泰朝・富朝・喬知による谷村藩が治めた時代に比定される。

段階5) 「17世紀後～18世紀前葉」、「18世紀前葉」、「18世紀前～中葉」、「18世紀中葉」、「18世紀中～後葉」、「18世紀後葉」、「18世紀」、「18世紀後～19世紀前葉」、「18世紀後～19世紀中葉」に区分された年代を対象とする。概ね1700年代から1800年代を充てる。宝永元年(1704)から幕府直轄領として、谷村陣屋を設けた時代に比定される。なお、宝永三年(1706)から正徳三年(1713)は、柳沢吉保による大名預地である。

段階6) 「19世紀前葉」、「19世紀前～中葉」に区分された年代を対象とする。概ね1800年代から1830年代を充てる。谷村陣屋が設けられた時代に比定される。

段階7) 「19世紀中葉」に区分された年代を対象とする。概ね1830年代から1860年代を充てる。谷村陣屋が設けられた時代に比定される。

段階8) 「19世紀中～後葉」、「19世紀後葉」、「19世紀」、「19世紀後～20世紀前葉」、「19世紀後～20世紀中葉」に区分された年代を対象とする。概ね1860年代から1900年代を充てる。谷村陣屋から谷村出張所、谷村区裁判所と変遷した時代に比定される。

段階9) 「20世紀前葉」、「20世紀中葉」に区分された年代を対象とする。概ね1900年代から1960年代を充てる。谷村区裁判所が設けられた時代に比定される。

段階5以降からは、陶磁器の器種を大きくまとめた種別の分類項目を設け、組成比より段階ごとの特殊性の抽出を試みた。なお、種別とは器種における大きさの概念を取り払い、碗類・皿類・蓋類・鉢類・鍋類・甕類・水注類・灯火具類に分けたもので、これらの項目に入らない資料はその他として数えた。

4. 段階ごとの内容

段階1) 1190～1330年代

i 陶器 全て小片であり、鉢3点、甕1点を組成する。甕は常滑産である。

ii 土器 土師質土器が3点確認された。土師質土器の特徴としては、胎土が灰白色を呈し、焼成は良好であり、底面を回転糸切りによって成形されている点が挙げられる。

段階2) 1530～1580年代

i 磁器 全て中国産であり、青花11点・青磁5点・白磁5点を組成する。小片であるため断定は難しいが、皿の方が多い。青磁菊皿3点・白磁菊皿3点が確認される。

ii 陶器 4面42号溝から大窯産の灰釉皿2点が出土している。大窯産の陶器としては、灰釉皿の方が鉄釉皿より多い。初山産の鉄釉皿も確認されている。常滑産の甕は、全て破片であるが、口縁部形態が16世紀代を示す資料が確認されたため、この段階に帰属させた。

iii 土器 4面42号溝から脚付きの香炉が出土した。42号溝は近世の遺物は伴出せず、中世後期の遺物だけで構成される。このため、中世後期の土師質土器を認定する際には、香炉が持つ属性をもとに判断した。香炉の胎土は黄褐色を呈し、焼成は良好であり、底面を回転糸切りによって成形されている。土師質土器の内、香炉と同じ胎土・焼成・底面切り離し技法を持つ資料を「16世紀後葉」に帰属させた。なお、焼成がより軟質な土師質土器のグループについては、「16世紀中葉」と捉えた。

段階3) 1580～1630年

i 磁器 図示した資料は全て漳州窯の皿であり、形態から第85図212、第88図271、第99図431は同一個体である可能性も有すが、破片資料として他の個体と判断される皿も複数出土している。磁器の産地は、景德鎮8点に対して漳州窯28点であり、漳州窯が8割近くを占めている。

ii 陶器 第98図412は美濃産の志野鉢(向付)、第98図411、第100図451、第102図492は唐津産

の鉢皿であり、他にも唐津産の沓茶碗の破片が出土している。瀬戸・美濃産の陶器としては、天目茶碗（第97図392）、播鉢（第86図224～227、第98図409・410）や織部皿（第101図470）が出土しており、産地別に見ると最も高い比率を占める。

iii 土器 第101図460は胎土が褐色を呈し、焼成は良好であり、底面に回転糸切りが施されている。図示した資料以外に、破片が38点出土している。

段階4）1630～1700年代

i 磁器 中碗が4点あるが、全て肥前産である。破片資料が中心であり、量的にも多く確認できないが、有田内山で生産されたと推定できる良質の磁器皿が出土している。

ii 陶器 御深井の手鉢を含む碗皿などの破片資料が確認された。また、前段階から引き続き、志野碗皿の破片資料もある。第90図284は丹波産の可能性のある中甕である。

iii 土器 第85図217、第101図461は明褐色を呈し、焼成は良好であり、底面に回転糸切りが施されている。法量としては、中形のサイズ（第85図217、第94図338、第101図461・477・478、第102図485）が中心だが、やや小形のサイズ（第90図289）も確認される。

段階5）1700～1800年代

i 磁器 種別組成は、碗類4割、皿類2割、蓋類2割、その他2割である。産地組成は、肥前産9割、瀬戸・美濃産と景德鎮窯産1割である。第78図93（碗）、第82図157（鉢）はいずれも清代景德鎮窯産である。

ii 陶器 種別組成は、碗類3割、蓋類3割、鉢類2割、その他2割である。産地組成は、瀬戸・美濃産7割、肥前産1割、京・信楽産1割、益子産と萩産1割である。第101図468は瀬戸・美濃産の灯明受皿、第79図108は京・信楽産の土瓶であるが、本遺跡で出土した灯明受皿や土瓶の中で、最も古い資料と位置づけられる。

iii 土器 「18世紀前葉」及び「18世紀前～中葉」の資料として、焼塩壺・焼塩壺蓋が確認された。全て泉州産である。宝永三年（1706）から正徳三年（1713）は、柳沢吉保による大名預地支配であり、柳沢氏の家臣によって山梨県東部地域の支配が行われた。焼塩壺・焼塩壺蓋は、柳沢氏の家臣がもたらしたものかもしれない。土師質土器は、小形（第84図209、第85図220～222、第86図235、第90図285～288、第101図462、第102図494・495）、中形（第72図11、第85図214・223、第88図258・260、第89図278、第90図290～292、第98図416、第101図463）、大形（第88図259）に明確に分化する。時期決定の基準としては、明褐色から灰褐色まで色調は多様であるが、前段階より硬質に焼成されており、底面に静止糸切りが施されるという点が挙げられる。

段階6）1800～1830年代

i 磁器 種別組成は、碗類3割、皿類2割、瓶類2割、蓋類1割、鉢類1割、その他1割である。産地組成は、肥前産8割、瀬戸・美濃産2割である。碗類では端反形の形態が多く、皿類は小形・中形・大形が組成される。

ii 陶器 種別組成は、灯火具5割、瓶類2割、碗・皿・蓋・鉢・鍋類3割である。産地組成は、瀬戸・美濃産6割、京・信楽産4割、わずかに肥前産を組成する。灯火具としては、灯明受皿以外にも、台付灯明受皿（第76図76・77、第97図402）やカンテラ（第101図467）がある。碗類には、餌猪口（第83図174）も確認される。

段階7）1830～1860年代

i 磁器 種別組成は、碗類6割、皿類2割、蓋類1割、鉢類・瓶類・その他1割である。産地組成は、瀬戸・美濃産4割、瀬戸・美濃系1割、肥前産5割である。段階4から段階6まで肥前産磁器が多数を占めていたが、本段階で瀬戸・美濃産が拮抗する比率を示している。碗類としては、小碗を中心に中碗・大碗も確認され、形態・文様に類似するものが確認される。この傾向は皿類も同じであり、見込みに松竹梅文を有する小皿（第77図87、第81図153）や中皿（第73図22、第75図54、第81図146、第84図194、第90図293）が認められる。薄手酒坏（第91図297）や爛徳利（第80図135、第

82 図 158) が含まれるのも本段階が始めである。また散蓮華 (第 97 図 389) も本段階に含まれる。

ii 陶器 種別組成は、碗類 2 割、甕類 2 割、蓋類 6 割である。産地組成は、瀬戸・美濃産 2 割、京焼 2 割、京・信楽産 2 割、松岡産 2 割で、残りは京・信楽産の可能性を有するもの 2 割である。資料数が少ないため、前後の段階を含めて再考する必要がある。

段階 8) 1860 ~ 1900 年代

i 磁器 種別組成は、碗類 6 割、皿類 1 割、瓶類 1 割、水注類 1 割、蓋類・鉢類・その他 1 割である。産地組成は、瀬戸・美濃産 8 割、肥前産 1 割、京焼、九谷、京・信楽、オランダまたはイギリス産 1 割である。碗類では小碗を中心にしながら、薄手酒坏・爛徳利などの酒器が一定量組成する。

ii 陶器 種別組成は、蓋類 4 割、灯火具類 3 割、水注類 1 割、鉢類 1 割、碗類・皿類・鍋類・甕類・その他 1 割である。産地組成は、瀬戸・美濃産 3 割、京・信楽産 2 割、益子産 1 割、京焼産 1 割、常滑産・相馬産・万古産・江戸産・その他 3 割である。本段階において、土瓶が一定量組成されており、緻密な胎土を用いて成形された第 83 図 169 や細密に竜文を施した第 83 図 170 など京焼産の質が高い資料が組成している。

iii 土器 年代を限定づけるのが困難であったため、「19 世紀」として分類された焼塩壺蓋や焼塩壺などが分類される。焼塩壺蓋や焼塩壺は江戸産のものであるが、前段階に比定される資料を含んでいる可能性を有す。

段階 9) 1900 ~ 1960 年代

i 磁器 本段階に位置づけられる資料は、調査によってより多くの資料が出土しているが、年代的に新しい資料であるため、地域の歴史を物語る資料や時代を特徴づける遺物を選別して図化を行った。第 95 図 346 の外面には「□ (谷) 村町 酒類新津商店 雑貨」と記されている。第 73 図 21 と第 102 図 487 は第二次世界大戦中の統制陶器であり、第 73 図 17 は磁器製の卸皿であるが金属が枯渇した戦時中のものであると考えられる。第 73 図 24 は底面に「MADE IN OCCUPIED JAPAN」と書かれており、占領期において輸出品として昭和二二年 (1947) から昭和二七年 (1952) に生産された皿と考えられ、他にも小片が 1 点確認されている。

ii 陶器 第 73 図 16 は底面に「谷村町 つちや醤油店」と書かれている蓋である。中央に菱形の印が施されているが、同様のマークが施された碗も確認されている。店舗の記念品として生産されたものと考えられる。

まとめ

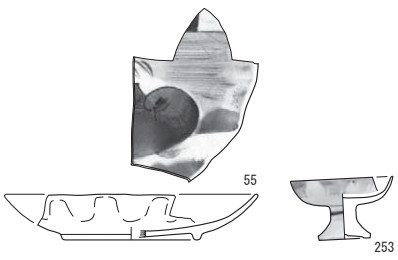
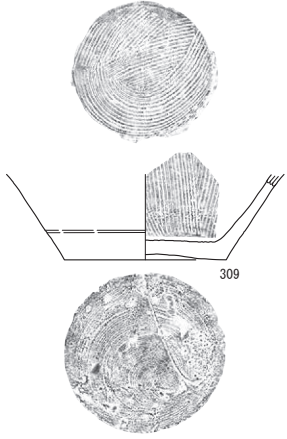

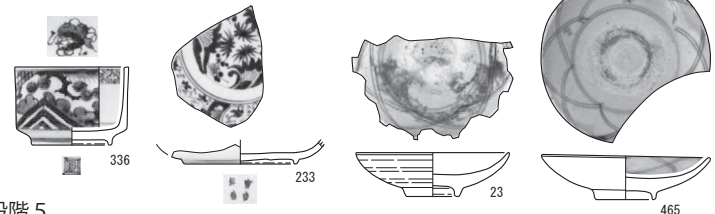
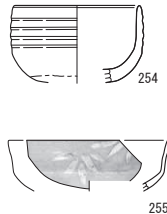

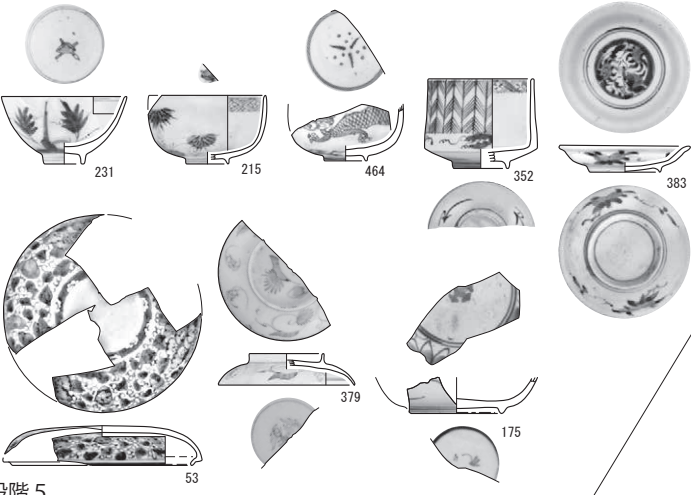
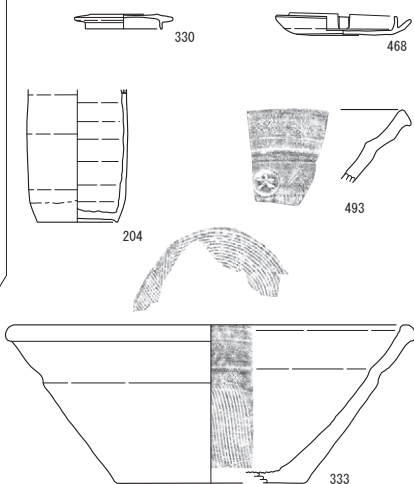

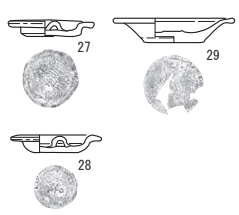
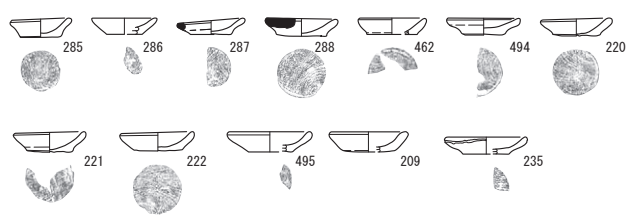
今回の検討における問題点は、遺跡から出土した陶磁器・土器を網羅しておらず、選別して図化した資料を基にしていることや、移行期にあたる年代の取り扱いが的確にできたかという点が挙げられる。これらの点については、今後の課題としながら、調査の増加による新たな資料の検出によって、より精度の高い編年の構築を目指していきたい。

	磁器	陶器	土器
中世前葉 段階1			
16世紀中葉 段階2			
16世紀中葉 後葉 段階2			
16世紀後葉 段階2			
16世紀後葉 ～ 17世紀前葉 段階3			

第130図 出土陶磁器・土器の編年（1）

	磁器	陶器	土器
17世紀前葉	<p>392, 411, 492, 451, 399, 224, 470, 409</p>	<p>460</p>	
17世紀後葉	<p>279, 280, 281, 282, 274, 284</p>	<p>289, 338, 485, 217, 461, 477, 478</p>	
17世紀後葉 18世紀前葉	<p>93, 275, 276</p>		
18世紀前葉	<p>423, 36, 479, 176, 154, 481, 466</p>	<p>110, 236, 414</p>	


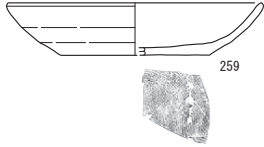
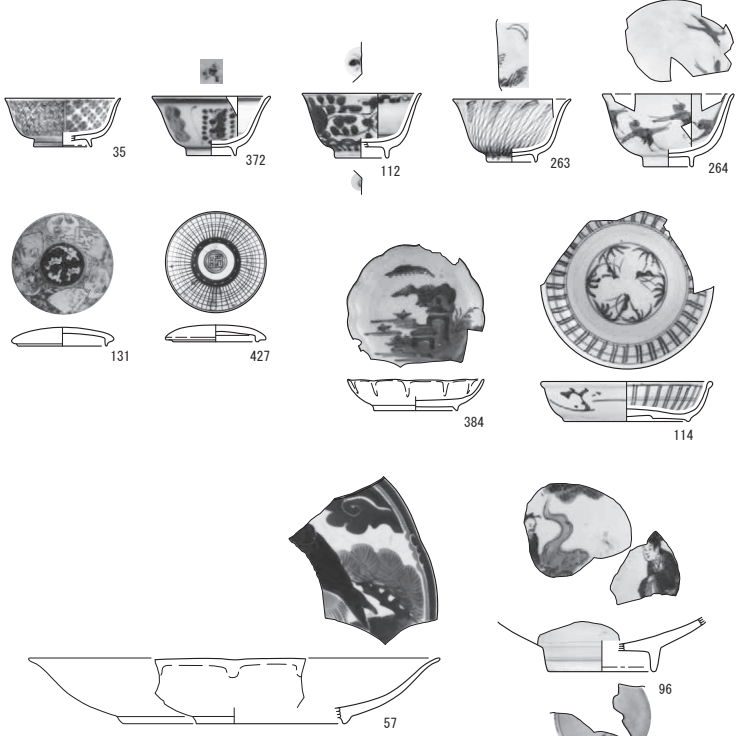
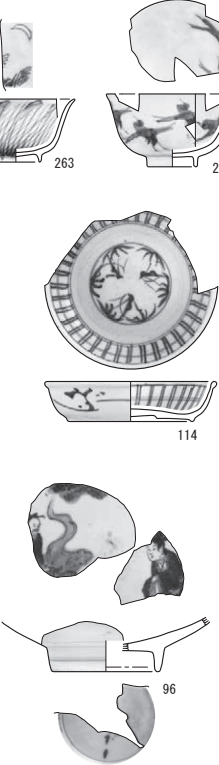
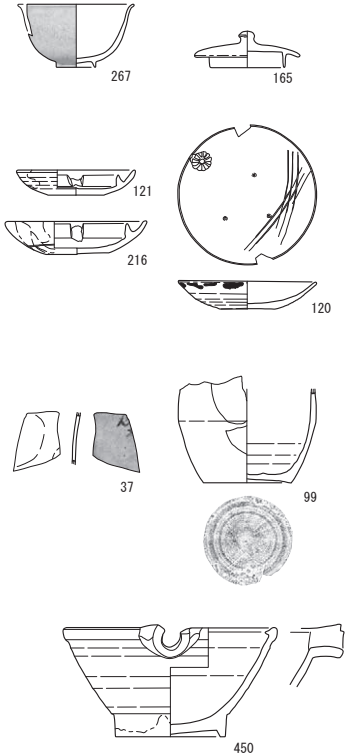
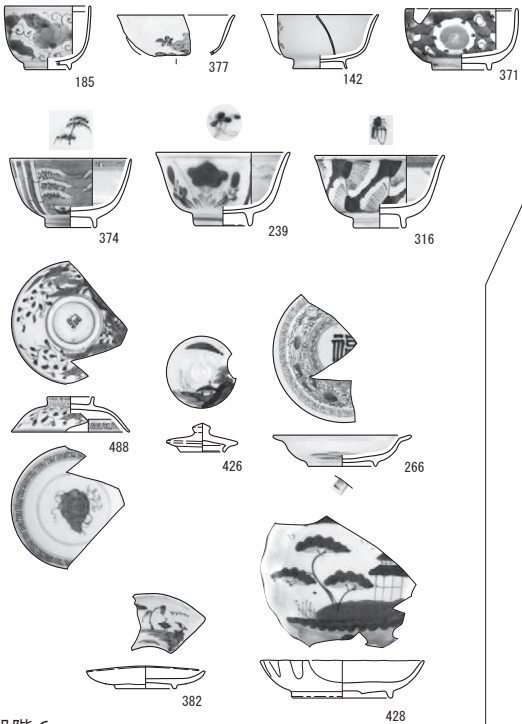
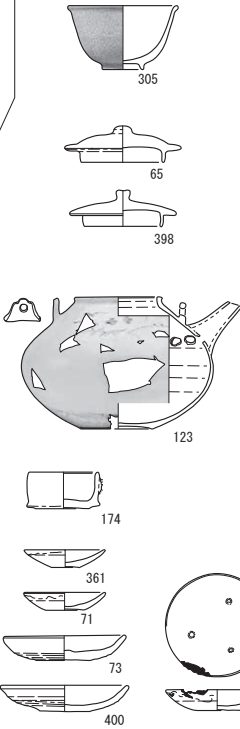
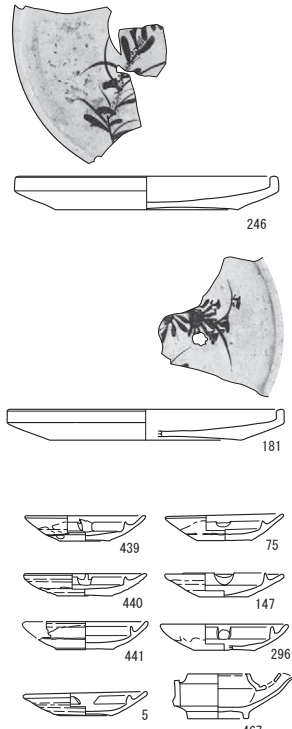
第131図 出土陶磁器・土器の編年（2）

	磁器	陶器	土器
18世紀前葉～中葉	 <p>段階 5</p>	 <p>309</p>	 <p>39</p>
18世紀中葉	 <p>段階 5</p>	 <p>254 255</p>	
18世紀中葉～後葉	 <p>段階 5</p>		
18世紀後葉	 <p>段階 5</p>	 <p>330 468 204 493 333</p>	
18世紀	 <p>段階 5</p>	 <p>27 29 28 28</p>	 <p>285 286 287 288 462 494 220 221 222 495 209 235</p>

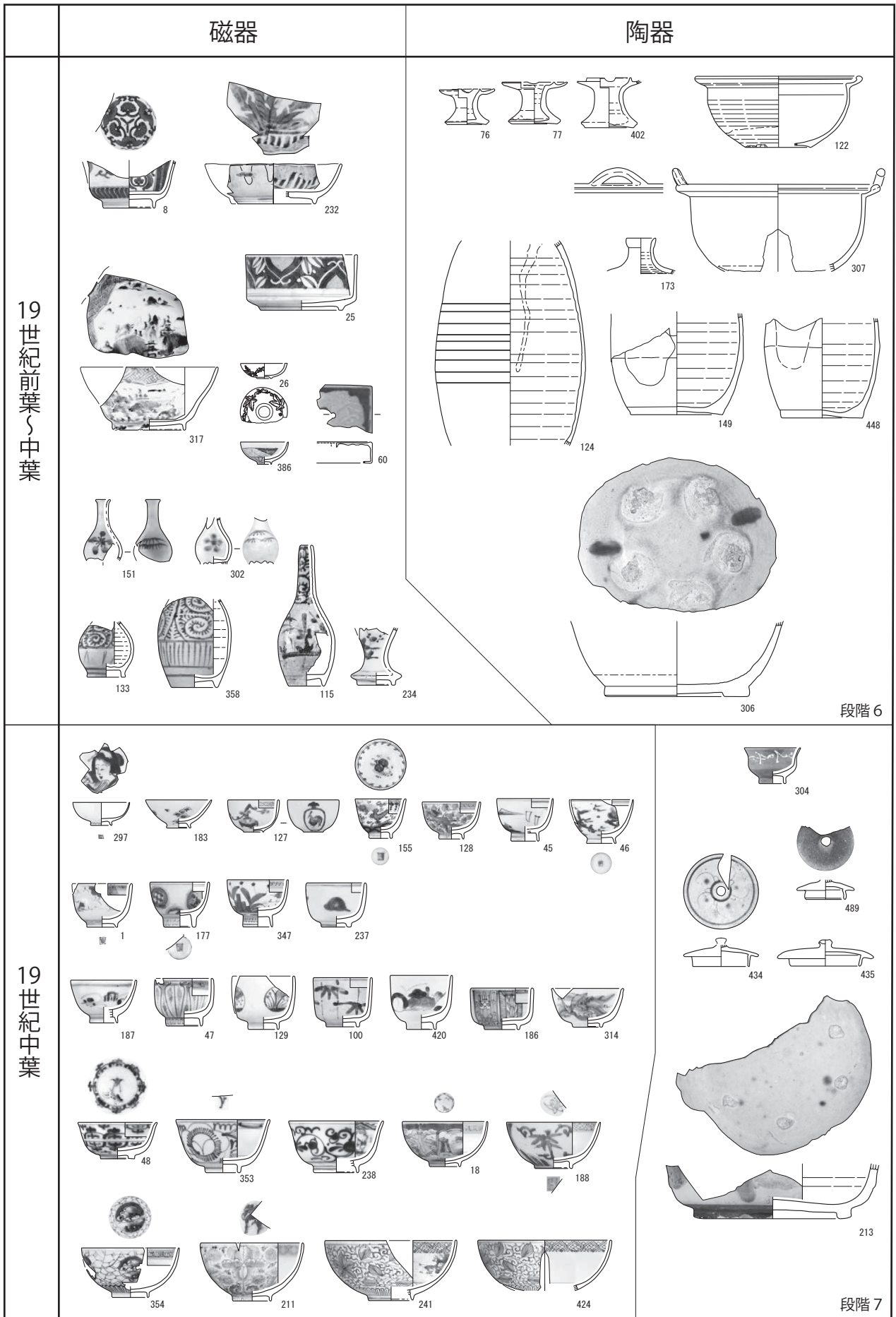
第132図 出土陶磁器・土器の編年（3）

	磁器	陶器	土器
18世紀			
			段階5
18世紀後葉～19世紀前葉			
			段階5

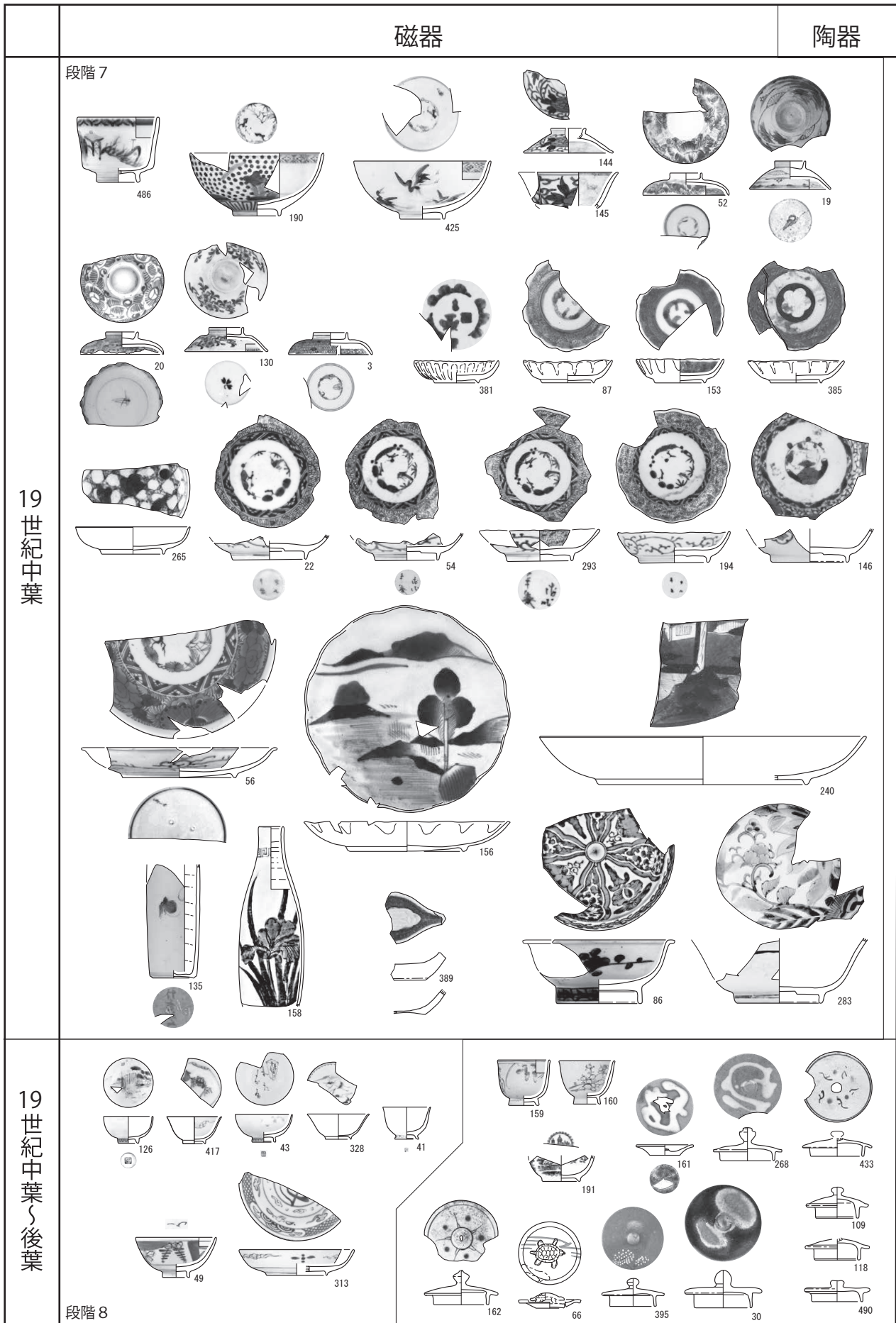
第133図 出土陶磁器・土器の編年（4）

	磁器	陶器	土器
18世紀後葉 19世紀中葉		 397	 259
19世紀前葉	 35 372 112 263 264 131 427 384 57	 96 114	 267 165 121 216 120 37 99 450
19世紀前葉～中葉	 185 377 142 371 374 239 316 488 426 266 382 428	 305 65 398 123 174 361 71 73 400 72	 246 181 439 75 440 147 441 296 5 467
段階 5	段階 6	段階 6	段階 6

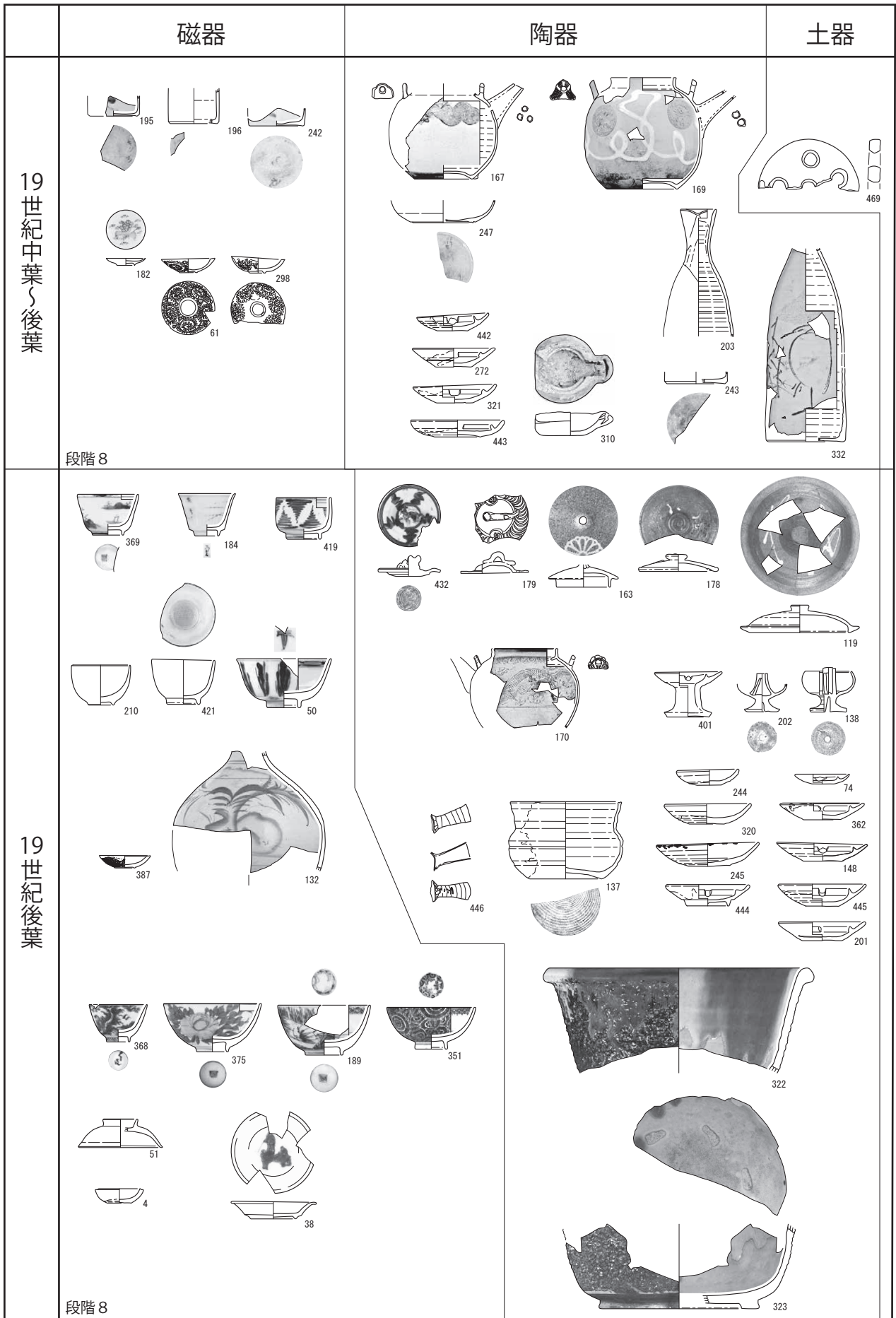
第134図 出土陶磁器・土器の編年（5）



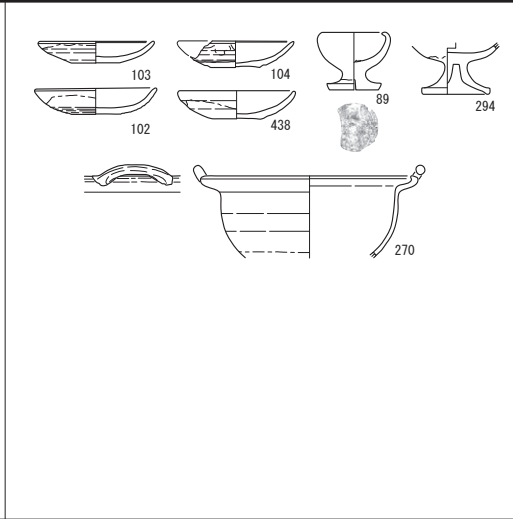
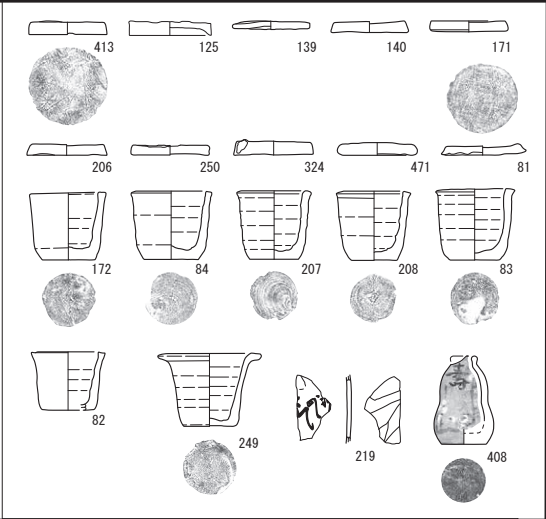
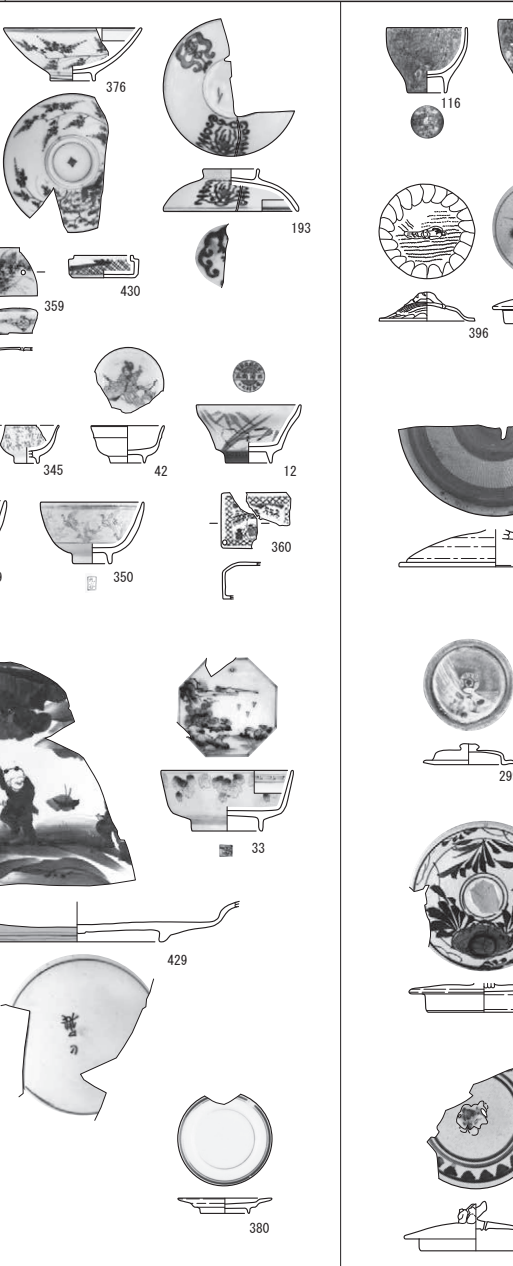
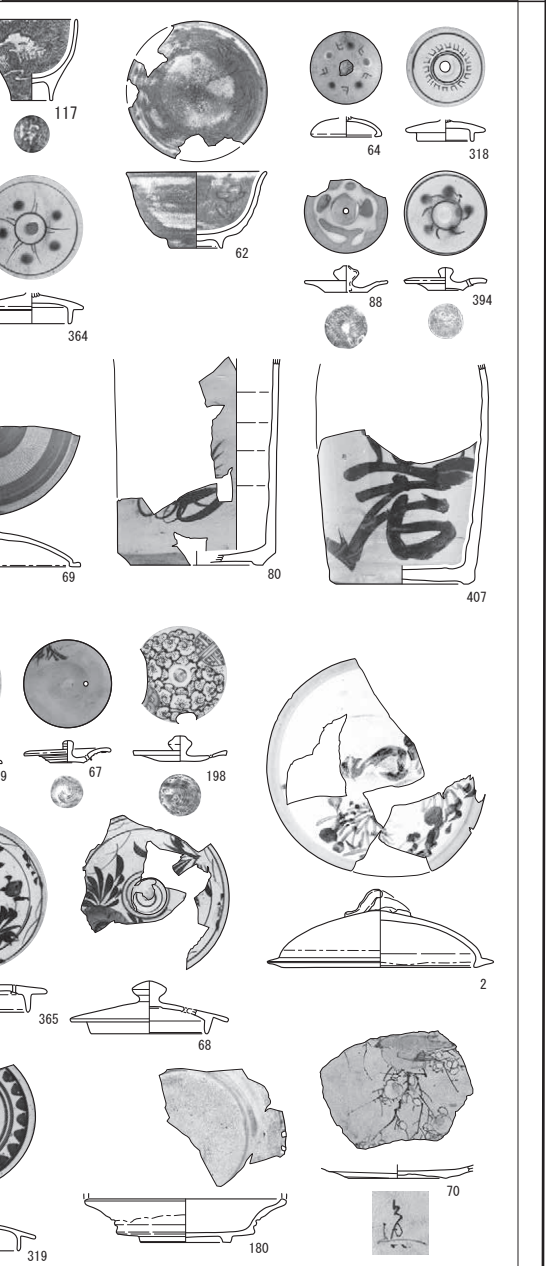
第135図 出土陶磁器・土器の編年（6）



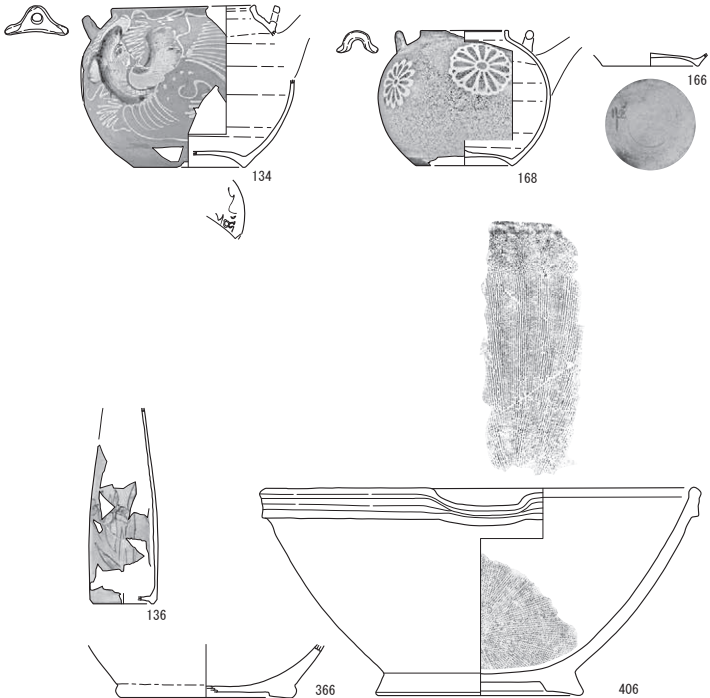



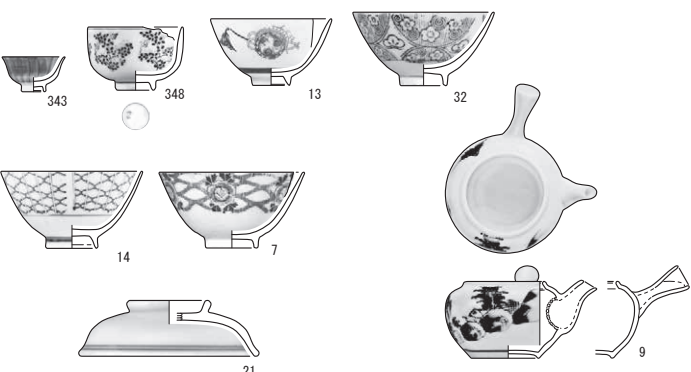
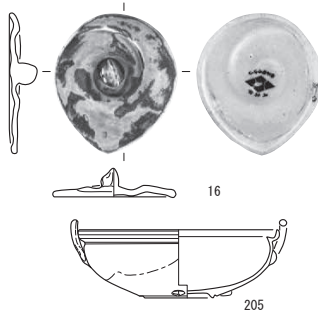
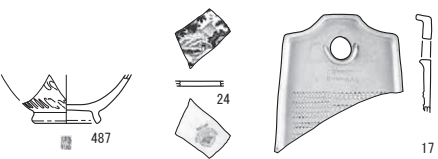
第136図 出土陶磁器・土器の編年（7）



第137図 出土陶磁器・土器の編年（8）

	磁器	陶器	土器
19世紀			
段階 8			
19世紀後葉～20世紀前葉			
段階 8			

第138図 出土陶磁器・土器の編年（9）

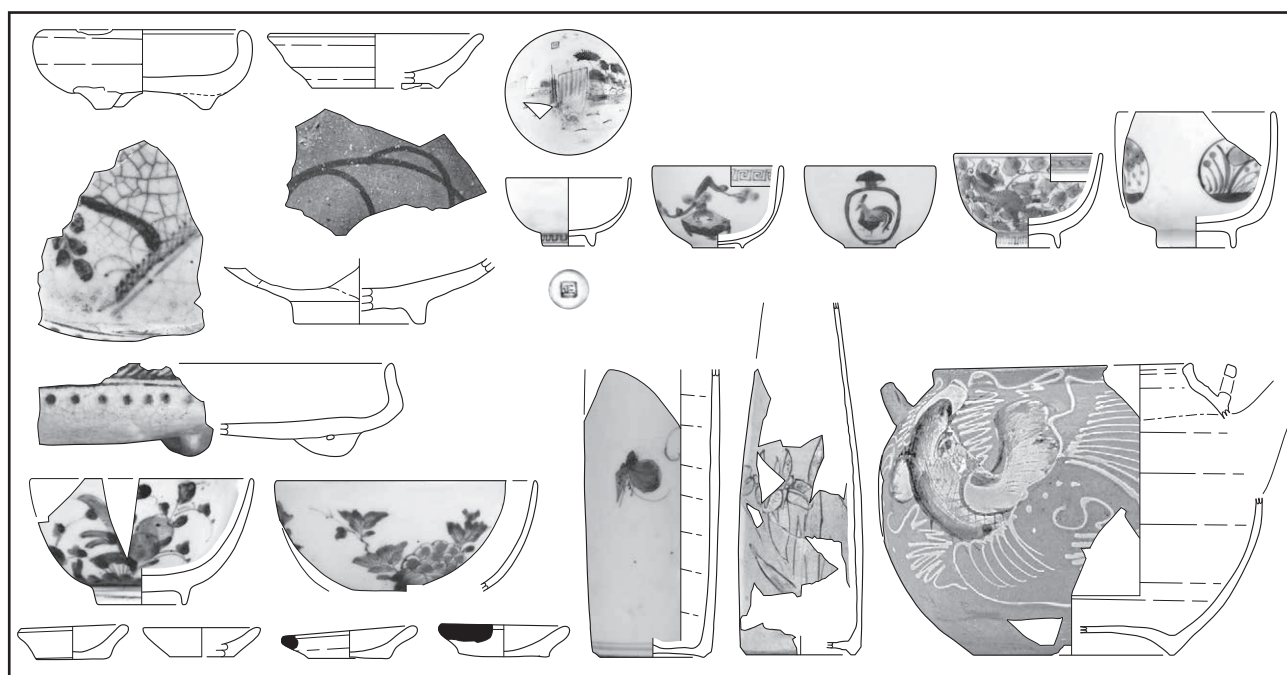
	磁器	陶器	土器
19世紀後葉～20世紀前葉	段階8		
19世紀後葉～20世紀中葉	段階8		
20世紀前葉			段階9
20世紀前葉～中葉			段階9
20世紀中葉			段階9

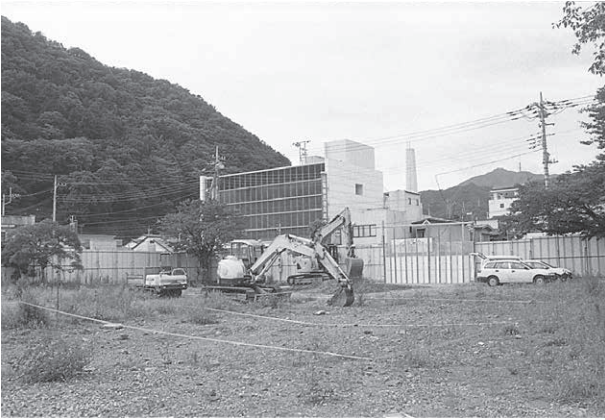
第139図 出土陶磁器・土器の編年 (10)

引用参考文献

- 秋山 敬 2003『甲斐の荘園』 甲斐新書刊行会
- 秋山 敬 2007「甲斐における中世郡内交通路と小山田氏館」『武田氏研究』37号
- 新井勉、燕山巖、小野春一郎 2011『近代日本司法制度史』 信山社
- 内川隆志 2003「和鏡の型式と変遷」『考古学ジャーナル』No.507
- 江戸遺跡研究会編 1992『江戸の食文化』 吉川弘文館
- 江戸遺跡研究会編 2001『江戸考古学研究辞典』 柏書房
- 角川出版社 1984『角川日本地名大辞典』 角川書店
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 甲府市 2013『甲府市文化財調査報告 64 甲府城下町遺跡 I X』
- 近藤 進 2011「“Made in Occupied Japan” (MIOJ) とその時代」『日本陶磁器産業振興協会ニュースレター』6月号
- 佐々木満 2002「城下町甲府の諸相－考古学からみた城下町考－」『武田氏研究』25号
- 瀬戸市史編纂委員会 1993『瀬戸市史 陶磁史篇四』
- 瀬戸氏文化振興財団埋蔵文化財センター 2006『江戸時代のやきもの－生産と流通－』
- 高橋敏 2011『葦山代官江川家と地方支配』 岩田書院
- たましん地域文化財団 2016「特集 江川代官と多摩」『多摩のあゆみ』
- 東京大学総合文化研究科・教養学部 美術博物館 2010『東京大学総合文化研究科・教養学部 美術博物館資料集3－銅鏡－』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006『東京大学埋蔵文化財調査報告書7 工学部第14号館地点』
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』
- 都留市 『都留市史』 通史編
- 都留市 1992『都留市史』 資料編 古代・中世・近世 I
- 都留市 1993『都留市史』 資料編 近現代
- 都留市 1994『都留市史』 資料編 近世 II
- 都留市 1994『都留市史』 資料編 村絵図
- 都留市教育委員会、勝山城跡学術調査会 2010『山梨県史跡 勝山城跡』
- 都留市教育委員会 2011『都留市埋蔵文化財調査報告第14集 鷹の巣遺跡』
- 都留の今昔編集委員会 1978『都留の今昔』
- 東京都埋蔵文化財センター 2008『東京都埋蔵文化財センター調査報告第219集 尾張徳川家下屋敷跡 V』
- 中山誠二 2006「焼成炭化米に関するノート」『2003 山梨考古学ノート』
- 成松佐恵子 2006『陣屋日記を読む』 雄山閣
- 西沢淳男 1998『幕領陣屋と代官支配』 岩田書院
- 西沢淳男 2004『代官の日常生活』 講談社
- 萩原三雄編 1991『定本 山梨県の城』 郷土出版社
- 兵庫埋蔵銭調査会 1998『近世の出土銭 II』
- 堀内秀樹 1996「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年の考察」『シンポジウム資料集 江戸出土陶磁器・土器の諸問題 II』
- 山梨県 1959『山梨県史』 第一巻
- 山梨県 1960『山梨県史』 第二巻
- 山梨県 1961『山梨県史』 第三巻
- 山梨県 1962『山梨県史』 第四巻
- 山梨県 1963『山梨県史』 第五巻
- 山梨県 1964『山梨県史』 第六巻
- 山梨県 1965『山梨県史』 第七巻
- 山梨県 1966『山梨県史』 第八巻
- 山梨県 1998『山梨県史』 資料編 1 原始・古代 1 考古 (遺跡)
- 山梨県 1999『山梨県史』 資料編 2 原始・古代 2 考古 (遺構・遺物)
- 山梨県 1998『山梨県史』 資料編 8 近世 1 領主
- 山梨県 2000『山梨県史』 資料編 11 近世 4 在方 II
- 山梨県 2004『山梨県史』 資料編 13 近世 6 下 全県
- 山梨県 2005『山梨県史』 通史編 5 近現代 1
- 山梨県 2006『山梨県史』 通史編 3 近世 1
- 山梨県 2007『山梨県史』 通史編 4 近世 2
- 山梨県考古学協会 2015『山梨考古』「2015年度地域大会特集号 谷村代官とその時代」
- 山梨県埋蔵文化財センター 2004『山梨県埋蔵文化財センター第215集 甲府城下町遺跡』
- 山梨県埋蔵文化財センター 2012『山梨県埋蔵文化財センター第283集 美通遺跡D区』
- 山梨県埋蔵文化財センター 2013『山梨県埋蔵文化財センター第288集 甲府城下町遺跡』
- 山梨県埋蔵文化財センター 2016『第11回山梨県埋蔵文化財センターシンポジウム資料集 甲斐の城下町を探る～谷村城、甲府城下町遺跡発掘調査を中心として～』

写真図版





調査着手前状況 (H26)



調査着手前状況 (H27)



1号通路状遺構・1号敷石遺構検出状況



1号通路状遺構検出状況



1号敷石遺構検出状況



1号石列遺構検出状況



1号石列遺構検出状況



1号礫集中検出状況

図版2 1面調査(2)



2号石列遺構検出状況



2号石列遺構検出状況



1号水路上面土管検出状況



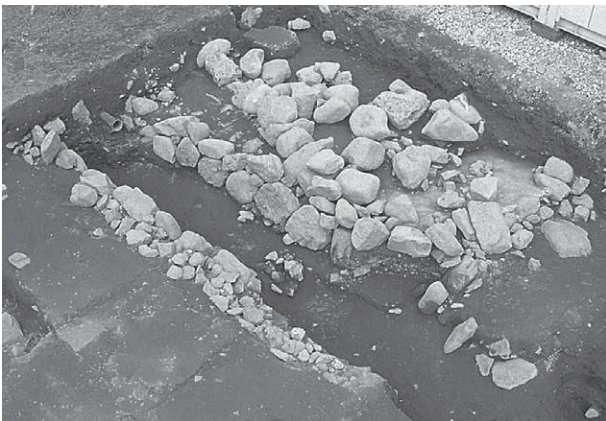
1号水路完掘状況 (H26)



1号水路完掘状況 (H27)



2号水路完掘状況



1号水路・2号礫集中検出状況



2号礫集中検出状況 (H27)



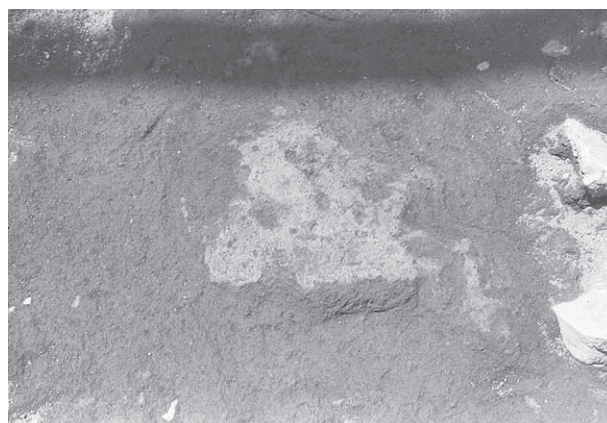
2号礫集中下完掘状況



1号土坑、1・2号溝状遺構完掘状況



7号焼土集中半截状況



8号焼土集中検出状況



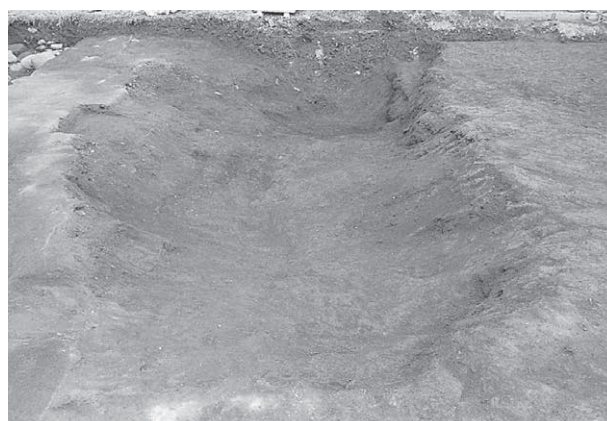
1号瓦溜検出状況



2号瓦溜検出状況



3号瓦溜検出状況



池跡完掘状況

図版4 2面調査(1)



1号道路状遺構検出状況 (H26)



1号道路状遺構検出状況 (H27)



1号道路状遺構半截状況



7号礫集中検出状況



3号石組半截状況



3号石組完掘状況



4～15号土坑完掘状況



矢穴礫 (第110図653) 検出状況



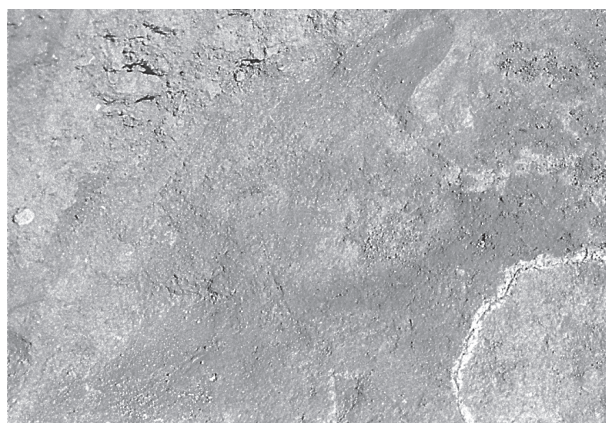
4号土坑半截状况



13号土坑半截状况



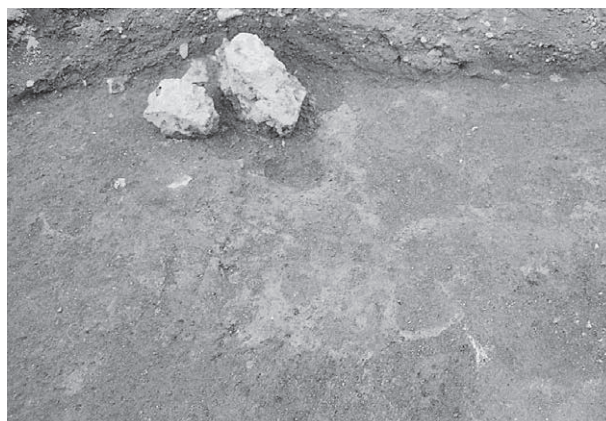
22号溝状遺検完掘状况



1号焼土集中検出状况



3号焼土集中検出状况



11号焼土集中検出状况

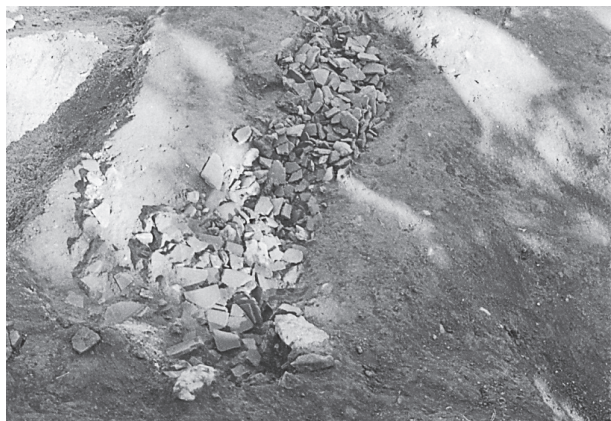


4号瓦溜検出状况



5号瓦溜検出状况

図版6 2面調査(3)



6号瓦溜検出状況



8号瓦溜検出状況



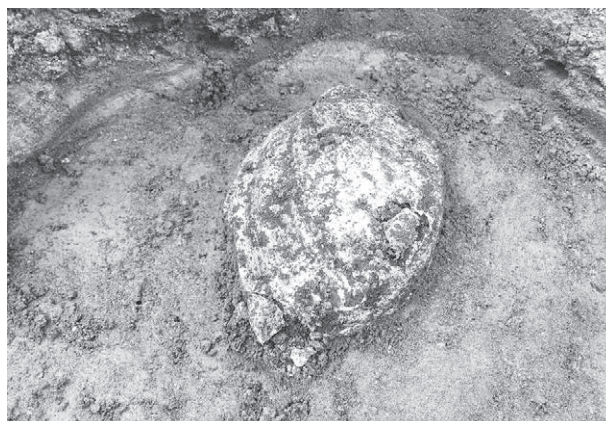
遺物出土状況



22号溝状遺構遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



2号石列検出状況



2号石列検出状況



3号敷石検出状況



4号敷石検出状況



1号石組検出状況



1号石組検出状況



1号石組検出状況



1号石組検出状況

図版8 3面調査(2)



1号石組完掘状況



1号石組完掘状況



1号石組 南西石組検出状況



1号石組 北東石組検出状況



1号石組遺物出土状況



1号石組遺物出土状況



2号石組検出状況



2号石組完掘状況



2号石組完掘状況



2号石組半截状況



4号石組完掘状況



4号石組半截状況



5号石組検出状況



5号石組半截状況



5号石組完掘状況



6号石組検出状況

図版10 3面調査(4)



6号石組半截状況



6号石組完掘状況



3号礫集中検出状況



4号礫集中検出状況



5号礫集中検出状況



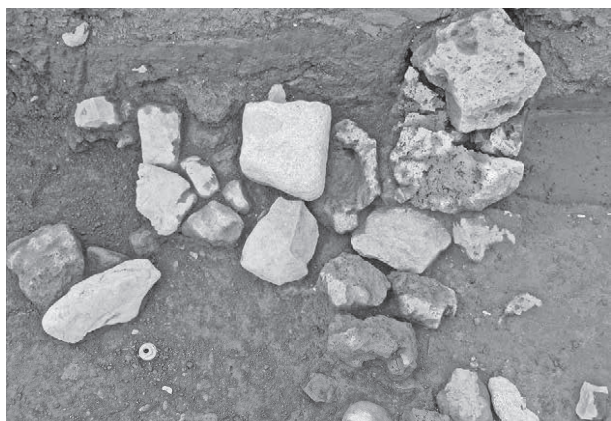
6号礫集中検出状況



9号礫集中検出状況



10号礫集中検出状況



11号礫集中検出状況



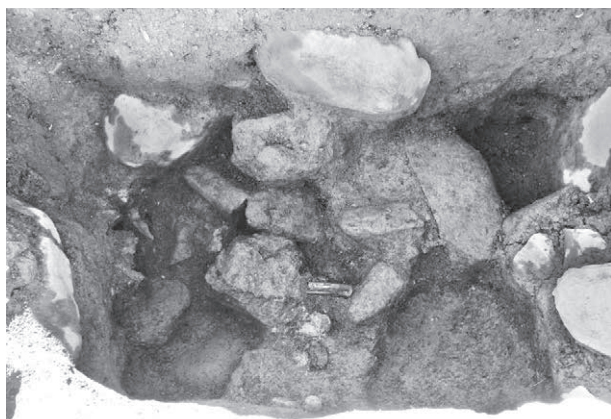
10・11号礫集中検出状況



16号土坑検出状況



16号土坑遺物出土状況



16号土坑焼土検出状況



16号土坑礫出土状況



16号土坑半截状況



16号土坑礫出土状況

図版12 3面調査(6)



16号土坑完掘状況(北東から)



16号土坑完掘状況(北西から)



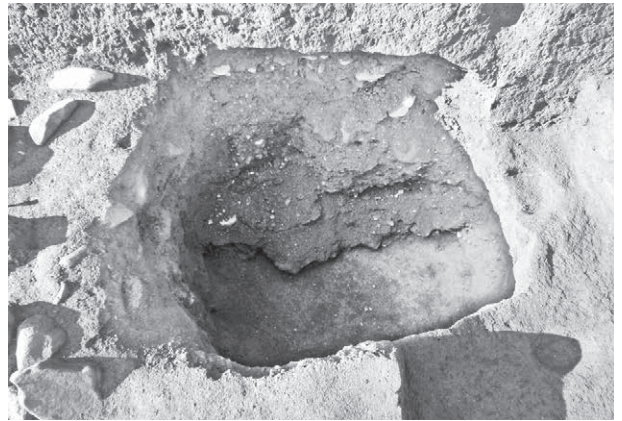
16号土坑完掘状況(南東から)



16号土坑完掘状況(南西から)



18号土坑半截状況



25号土坑半截状況



26号土坑半截状況



27号土坑半截状況



59号土坑半截状况



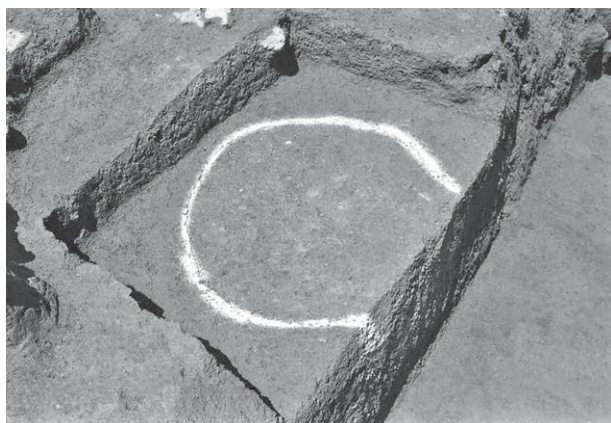
59号土坑完掘状况



197号土坑検出状况



197号土坑完掘状况



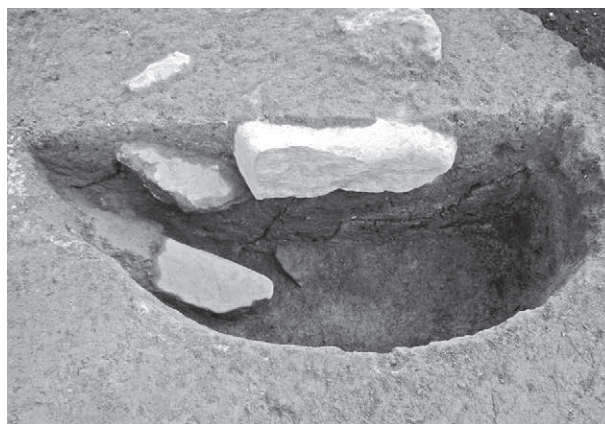
198号土坑検出状况



198号土坑完掘状况



59・62号土坑検出状况



62号土坑半截状况

図版14 3面調査(8)



3号溝状遺構半截状況



3号溝状遺構完掘状況



5号溝状遺構半截状況



5号溝状遺構完掘状況



7号溝状遺構検出状況



7号溝状遺構半截状況



7号溝状遺構完掘状況



8号溝状遺構検出状況



8号溝状遺構完掘状況



9・10号溝状遺構完掘状況



6号溝状遺構半截状況



6号溝状遺構完掘状況



23号溝状遺構完掘状況



26号溝状遺構完掘状況



26号溝状遺構半截状況



26号溝状遺構遺物出土状況



26号溝状遺構遺物出土状況



26号溝状遺構遺物出土状況



28号溝状遺構遺物出土状況



28号溝状遺構完掘状況



28号溝状遺構遺物出土状況



28号溝状遺構遺物出土状況



29号溝状遺構完掘状況



29号溝状遺構遺物出土状況



30号溝状遺構半截状況



30号溝状遺構完掘状況



32・34号溝状遺構完掘状況



34号溝状遺構完掘状況



32号溝状遺構半截状況



32号溝状遺構完掘状況



34号溝状遺構半截状況



34号溝状遺構完掘状況



11号溝状遺構検出状況



11号溝状遺構半截状況



11号溝状遺構検出状況（南西から）



11号溝状遺構検出状況（北東から）



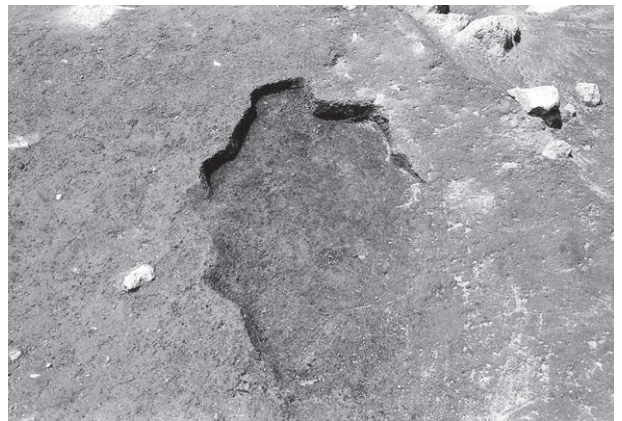
17号溝状遺構検出状況



38号溝状遺構検出状況



13号焼土集中半截状況



13号焼土集中完掘状況



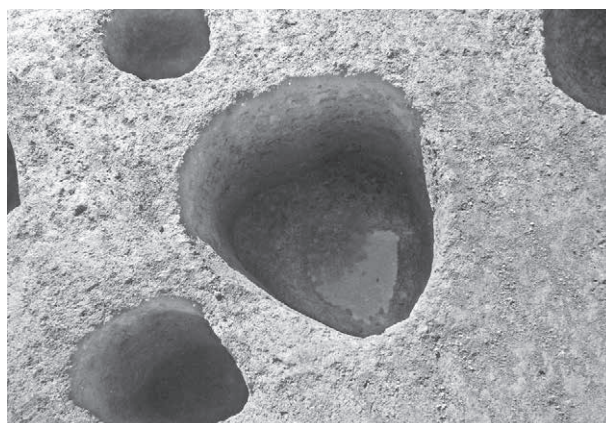
78号土坑半截状况



78号土坑完掘状况



113号土坑半截状况



113号土坑完掘状况



115号土坑半截状况



115号土坑完掘状况

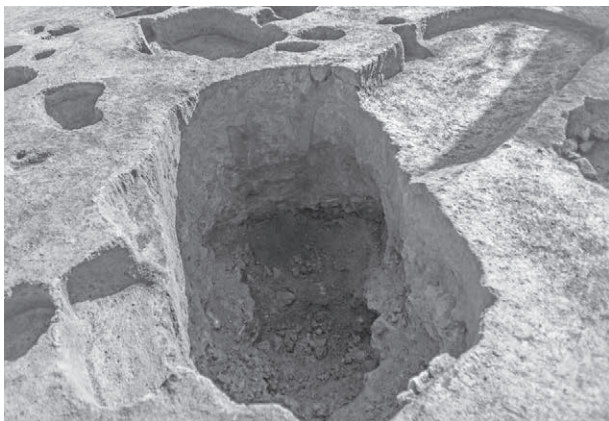


124号土坑半截状况

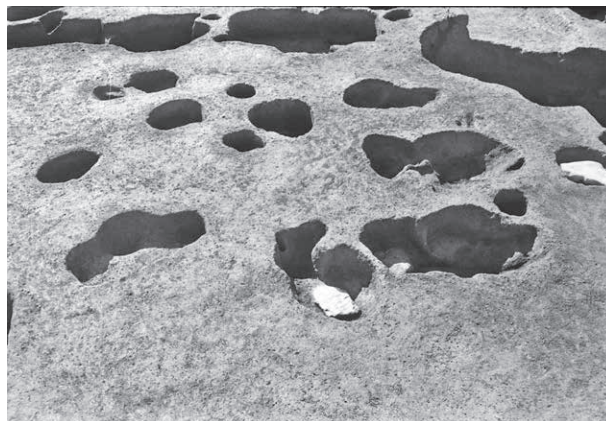


124号土坑完掘状况

図版20 4面調査(2)



122号土坑完掘状況



遺構完掘状況 (D・E-7・8グリッド)



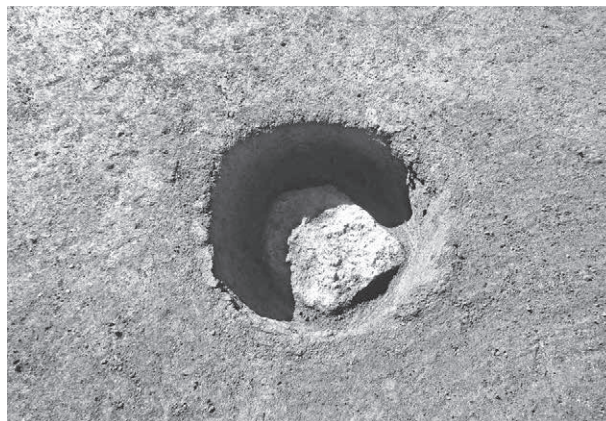
125号土坑半截状況



125号土坑完掘状況



130号土坑半截状況



130号土坑完掘状況



88号土坑半截状況



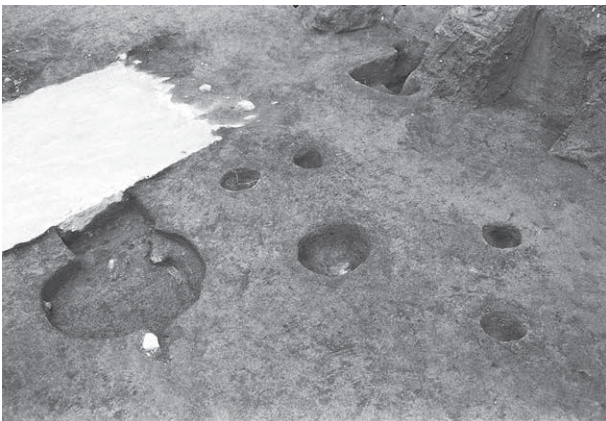
119号土坑完掘状況



遺構完掘状況 (G-9・10 グリッド)



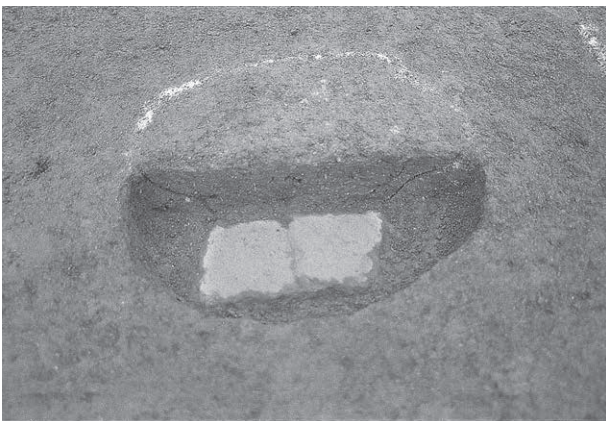
遺構完掘状況 (E-11 グリッド)



遺構完掘状況 (D-9・10 グリッド)



遺構完掘状況 (C-9 グリッド)



160号土坑半截状況



158・161号土坑完掘状況



遺構完掘状況 (C-6・7 グリッド)

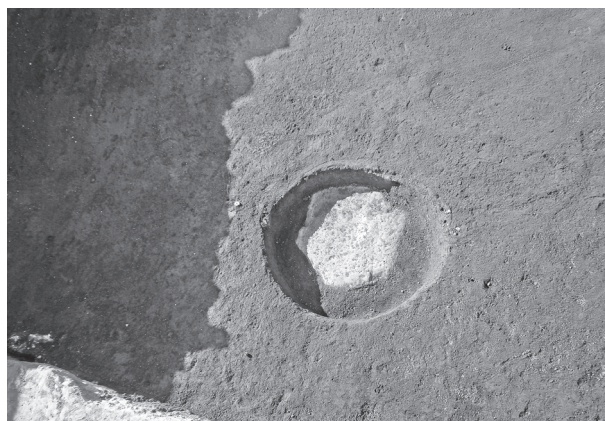


遺構完掘状況 (F・G-3 グリッド)

図版22 4面調査(4)



205号土坑完掘状況



208号土坑完掘状況



42号溝状遺構完掘状況



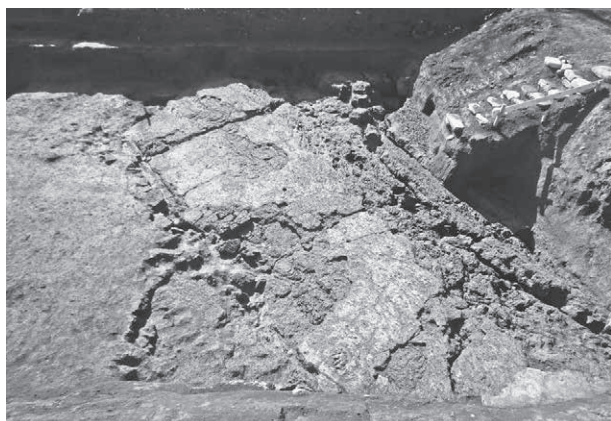
42号溝状遺構遺物出土状況



2号炭化物集中検出状況



2号炭化物集中半截状況



溶岩検出状況



溶岩検出状況



2 1面遺構出土陶磁器·土器



4 2面遺構出土陶磁器·土器



1 1面遺構出土陶磁器·土器



3 1・2面遺構出土陶磁器·土器



2 2面遺構出土陶磁器·土器



4 3面遺構出土陶磁器·土器



1 2面遺構出土陶磁器·土器



3 3面遺構出土陶磁器·土器



2 3面遺構出土陶磁器·土器



4 3面遺構出土陶磁器·土器



1 3面遺構出土陶磁器·土器



3 3面遺構出土陶磁器·土器



2 3面遺構出土陶磁器·土器



4 3面遺構出土陶磁器·土器



1 3面遺構出土陶磁器·土器



3 3面遺構出土陶磁器·土器



2 3面遺構出土陶磁器・土器



4 3・4面遺構出土陶磁器・土器



1 3面遺構出土陶磁器・土器



3 3面遺構出土陶磁器・土器



2 4面遺構出土陶磁器·土器



4 2面遺構外出土陶磁器·土器



1 4面遺構出土陶磁器·土器



3 1面遺構外出土陶磁器·土器



2 2面遺構外出土陶磁器・土器



4 3面遺構外出土陶磁器・土器



1 2面遺構外出土陶磁器・土器



3 3面遺構外出土陶磁器・土器



2 3面下遺構外出土陶磁器・土器



4 1・2面出土ガラス製品



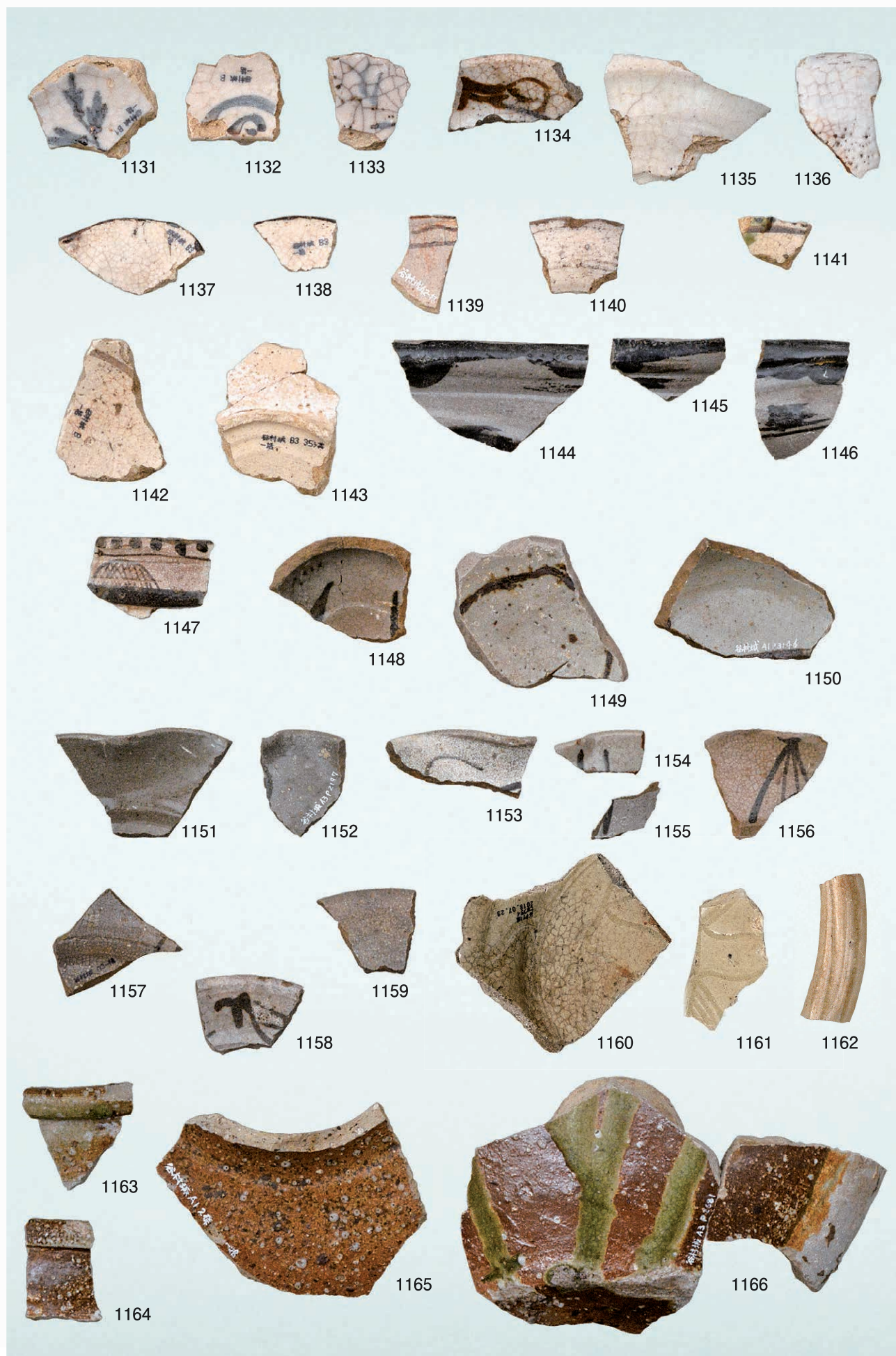
1 3面遺構外出土陶磁器・土器



3 4面遺構外出土・調査区一括陶磁器・土器



S=1/2

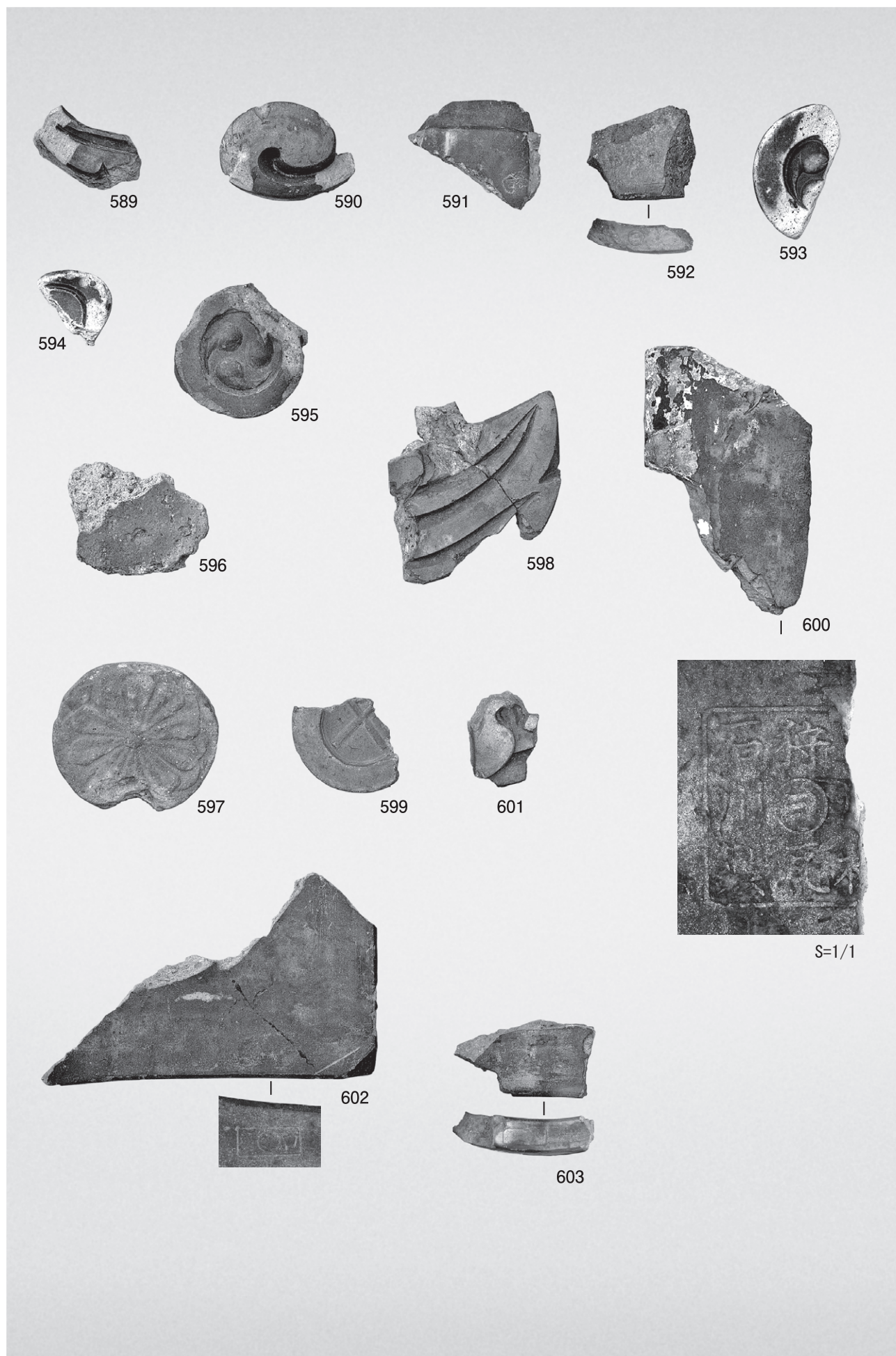




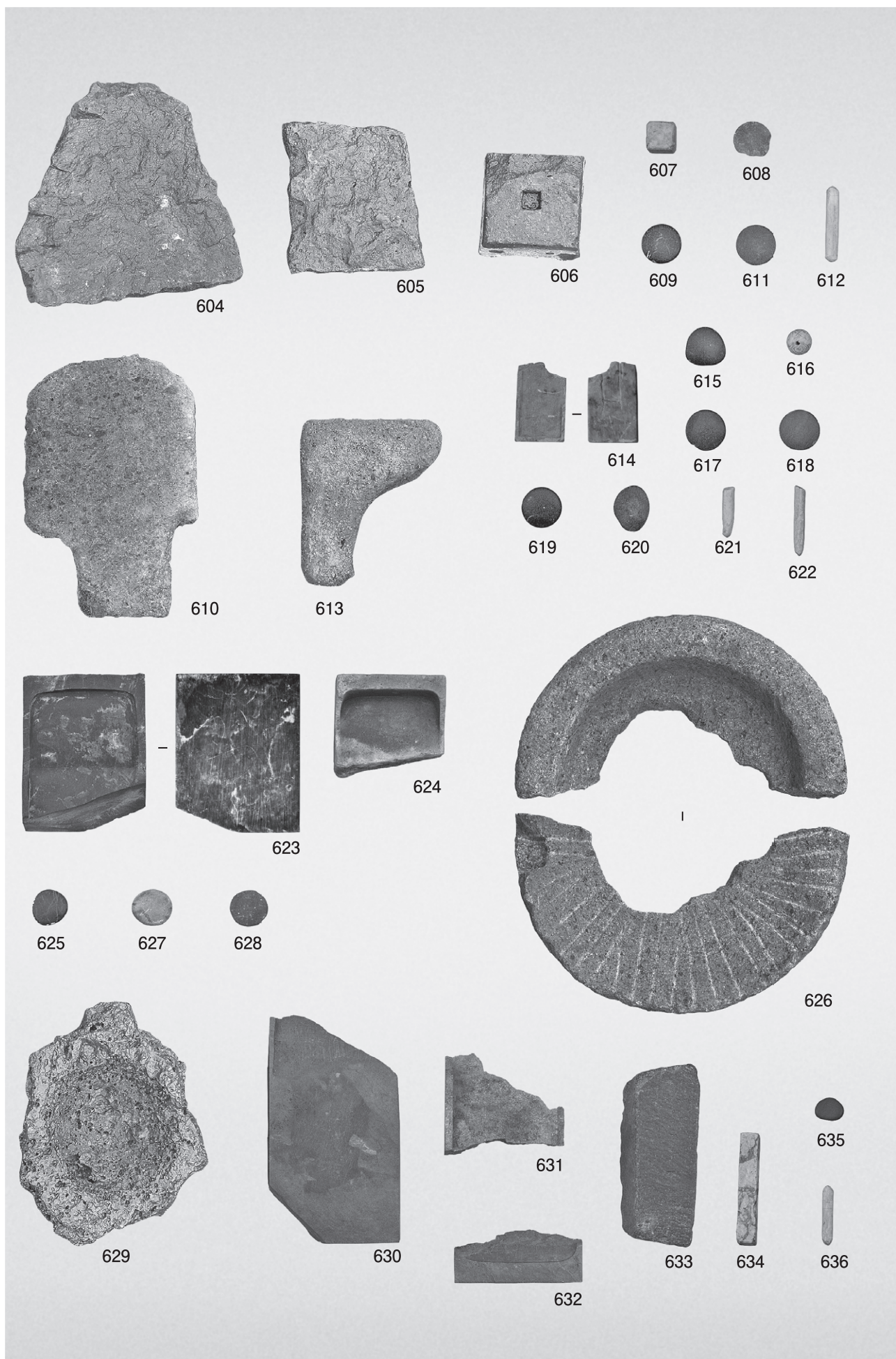
S=1/2





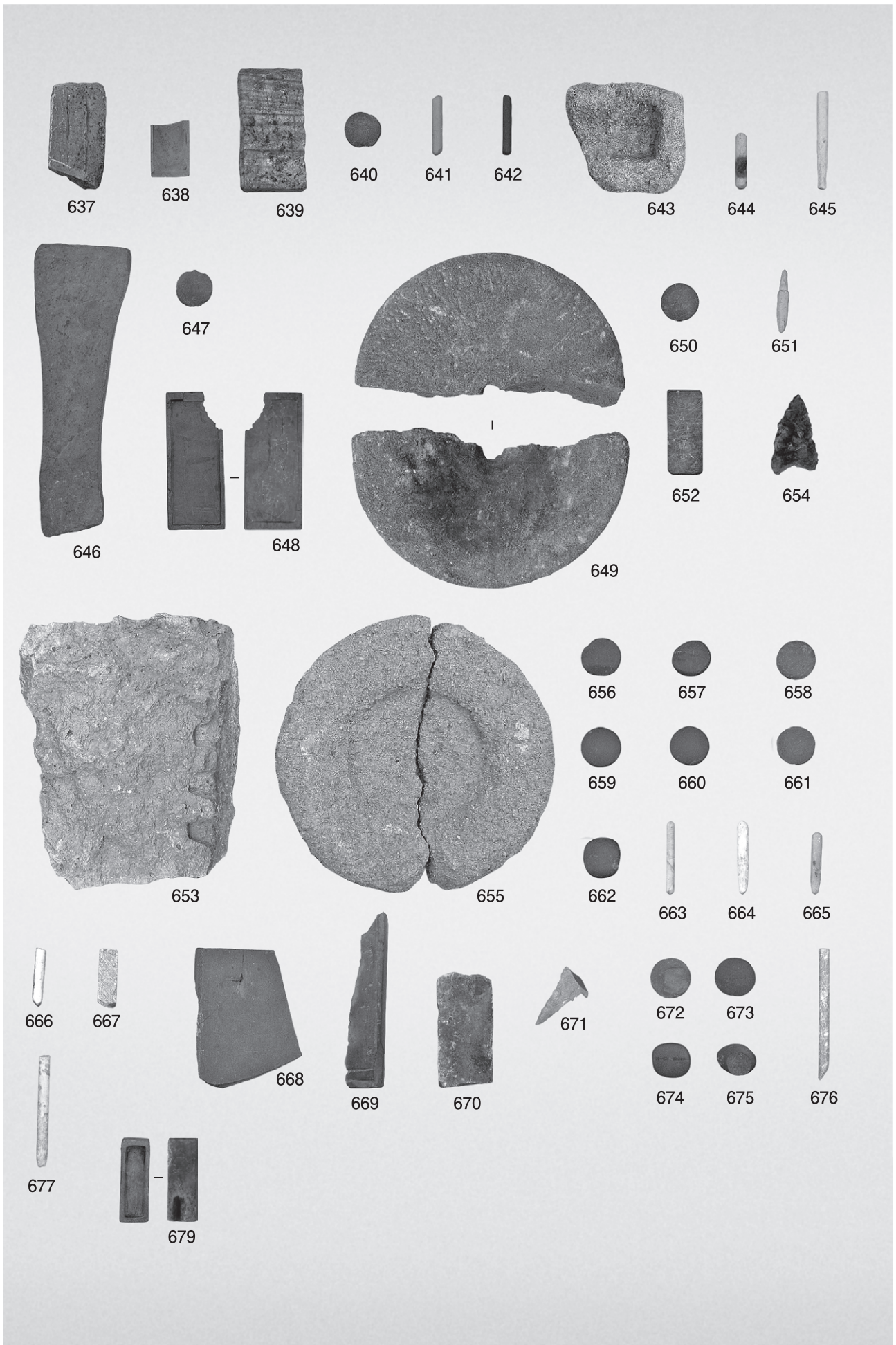


S=1/3

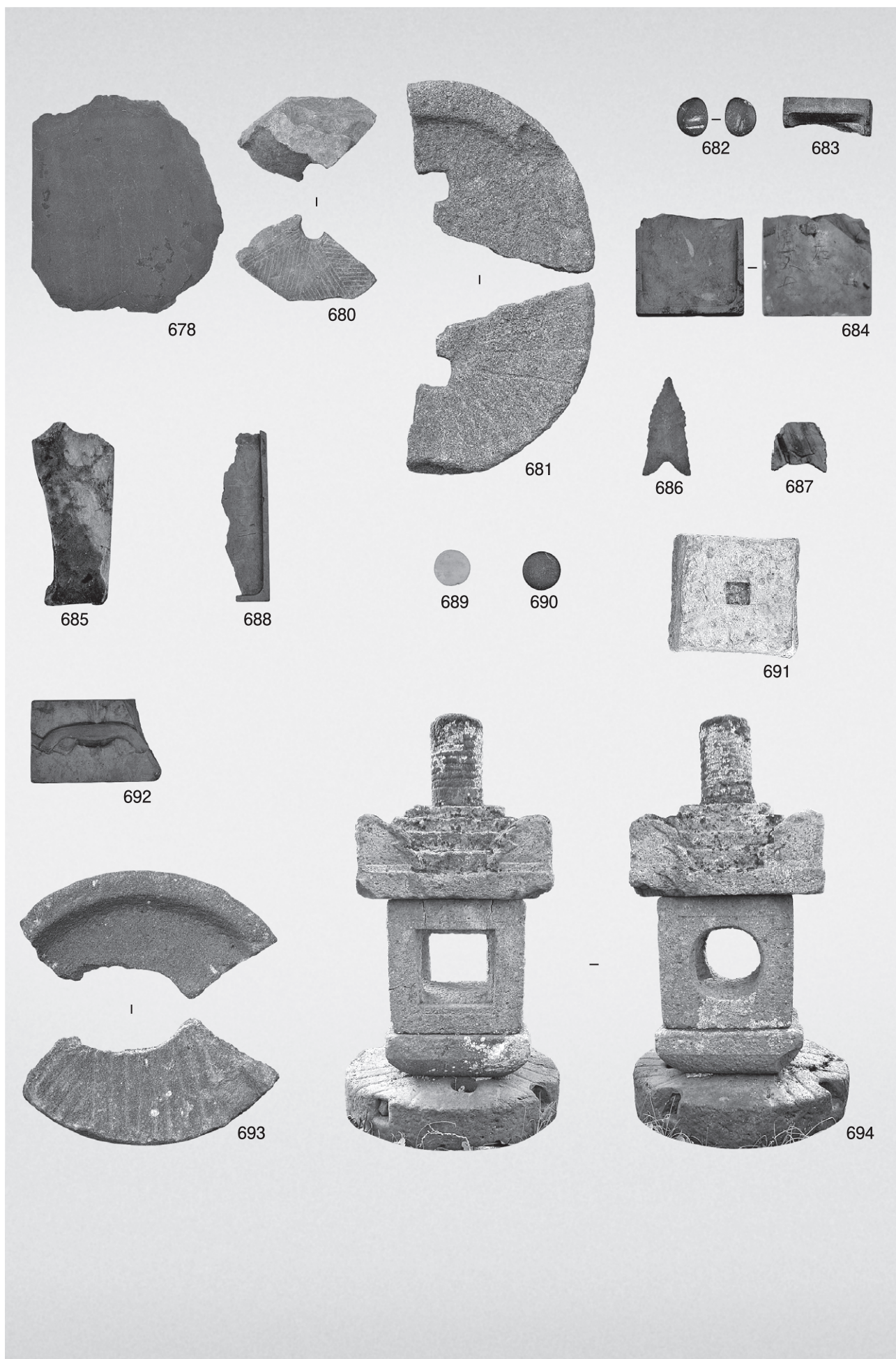


縮尺は遺物図版と同じ

図版38 出土石製品(2)

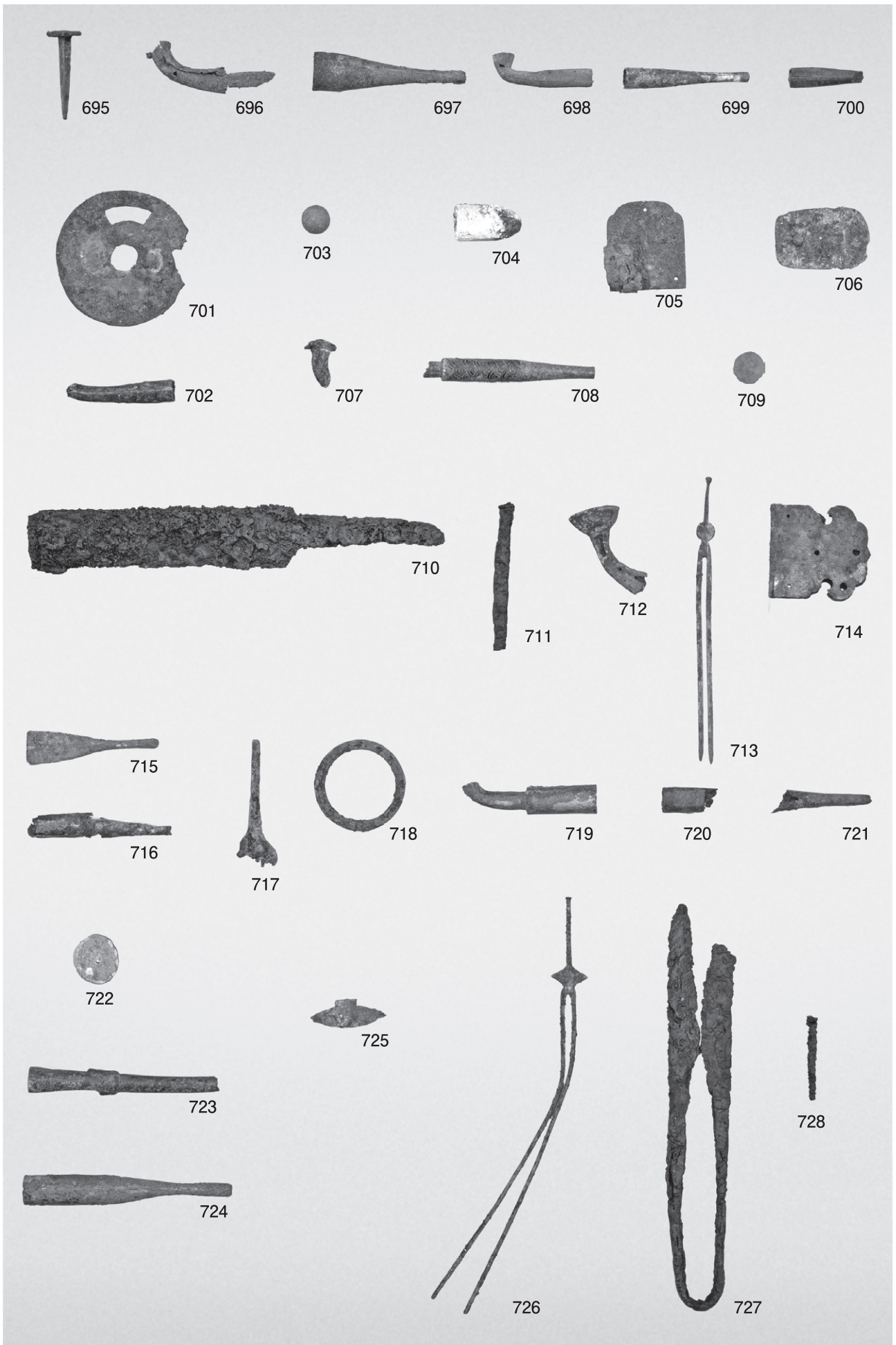


縮尺は遺物図版と同じ

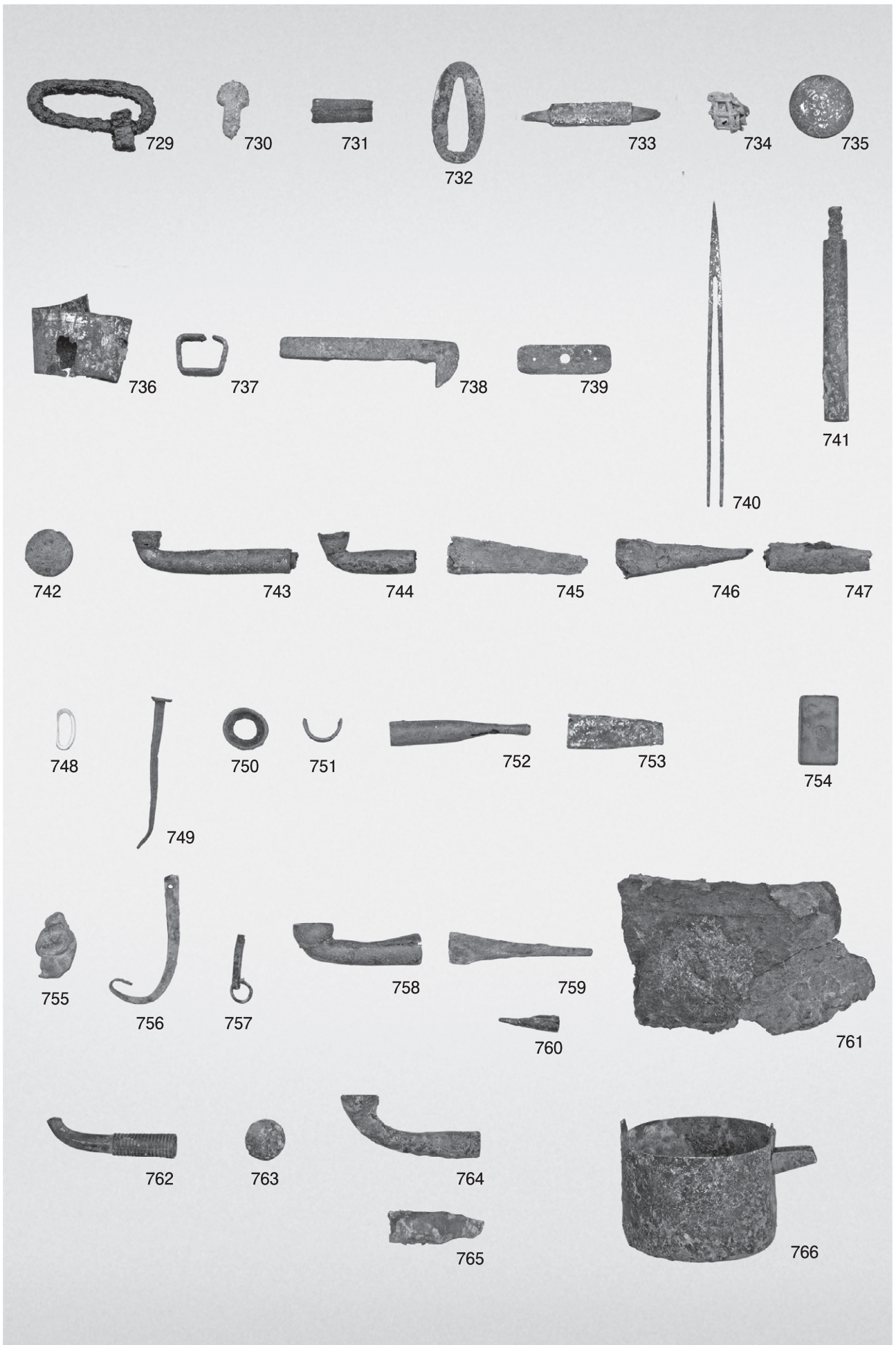


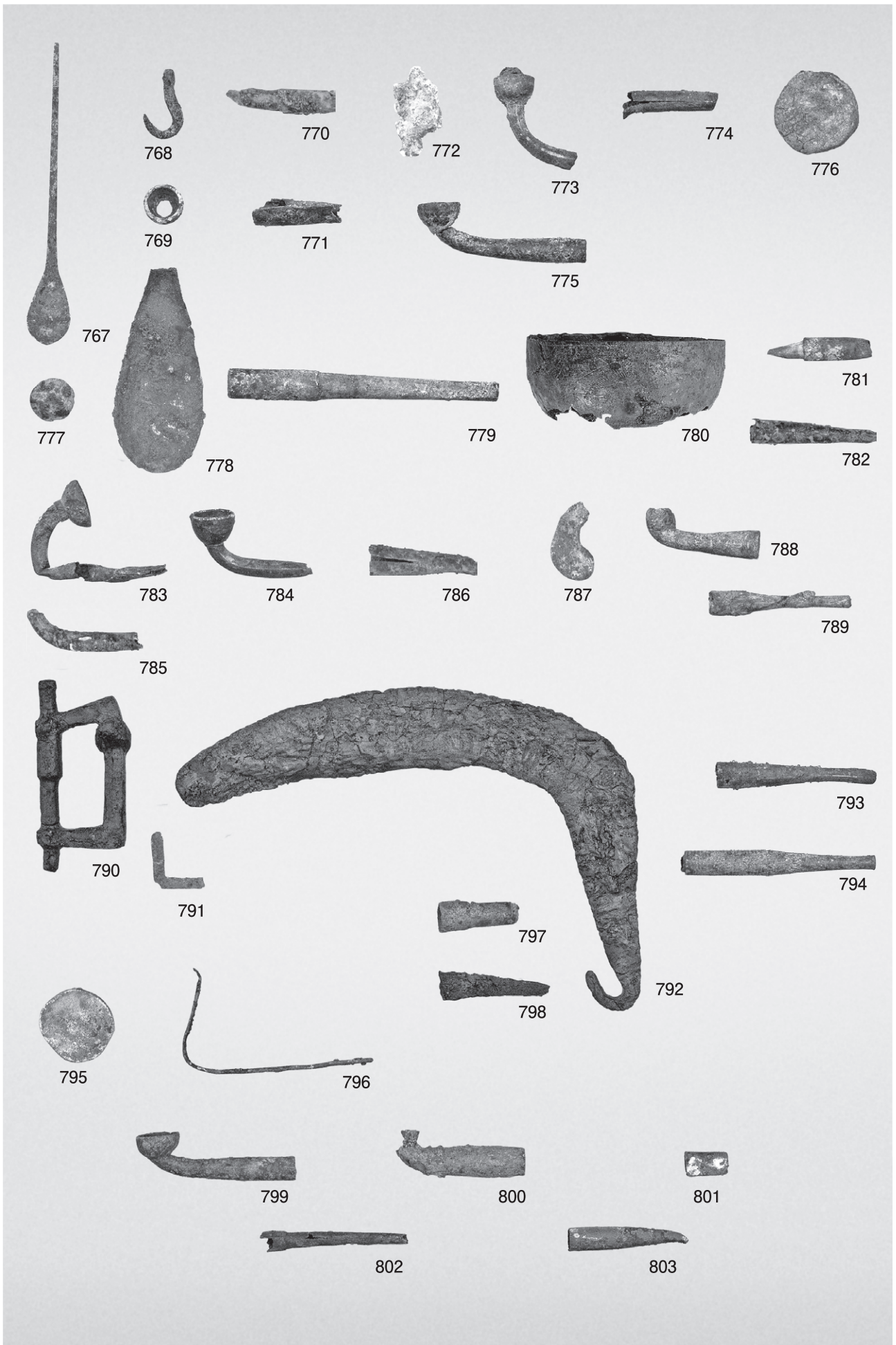
縮尺は遺物図版と同じ

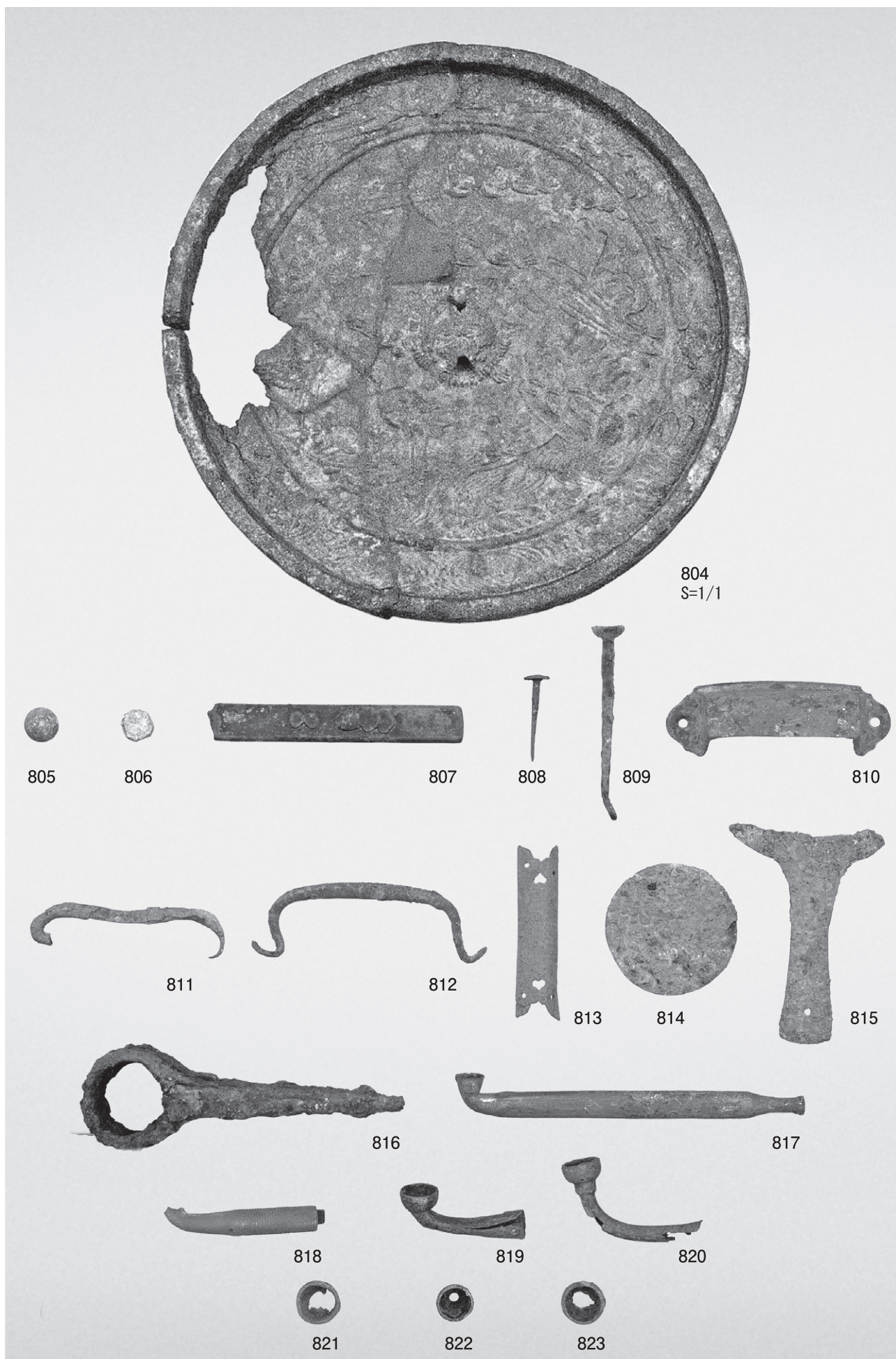
图版40 出土金属制品(1)



S=1/2







804
S=1/1

805

806

807

808

809

810

811

812

813

814

815

816

817

818

819

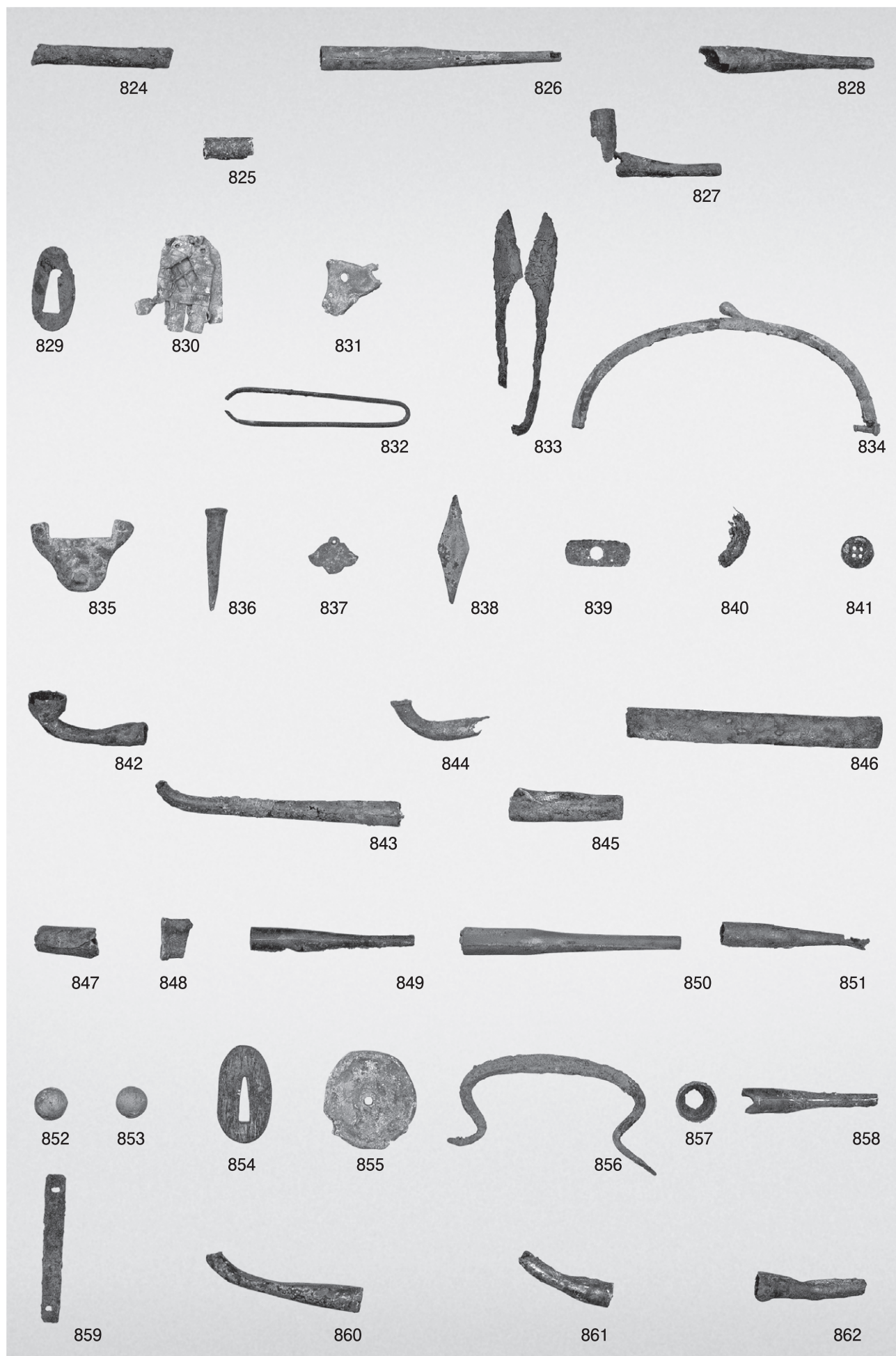
820

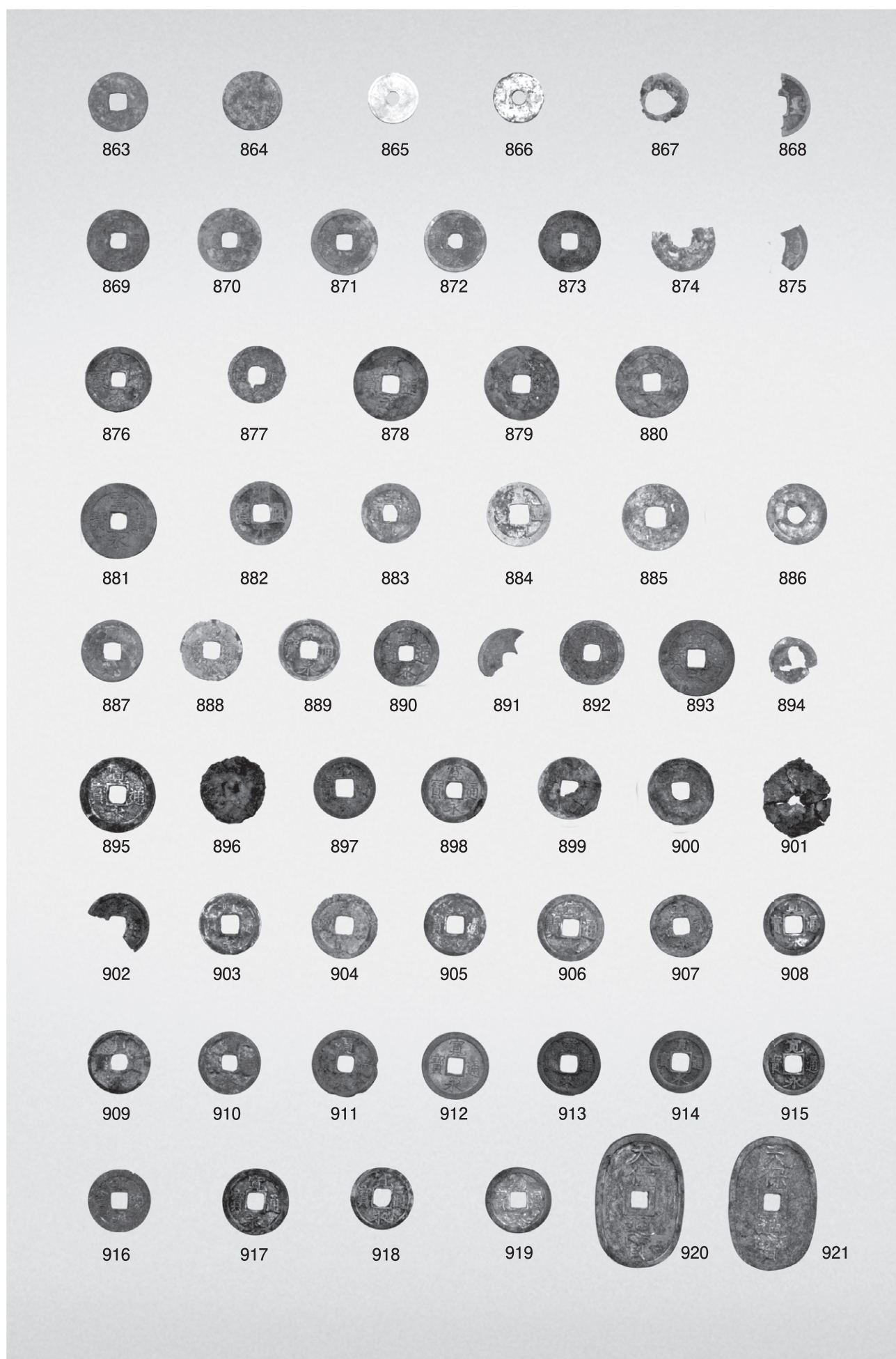
821

822

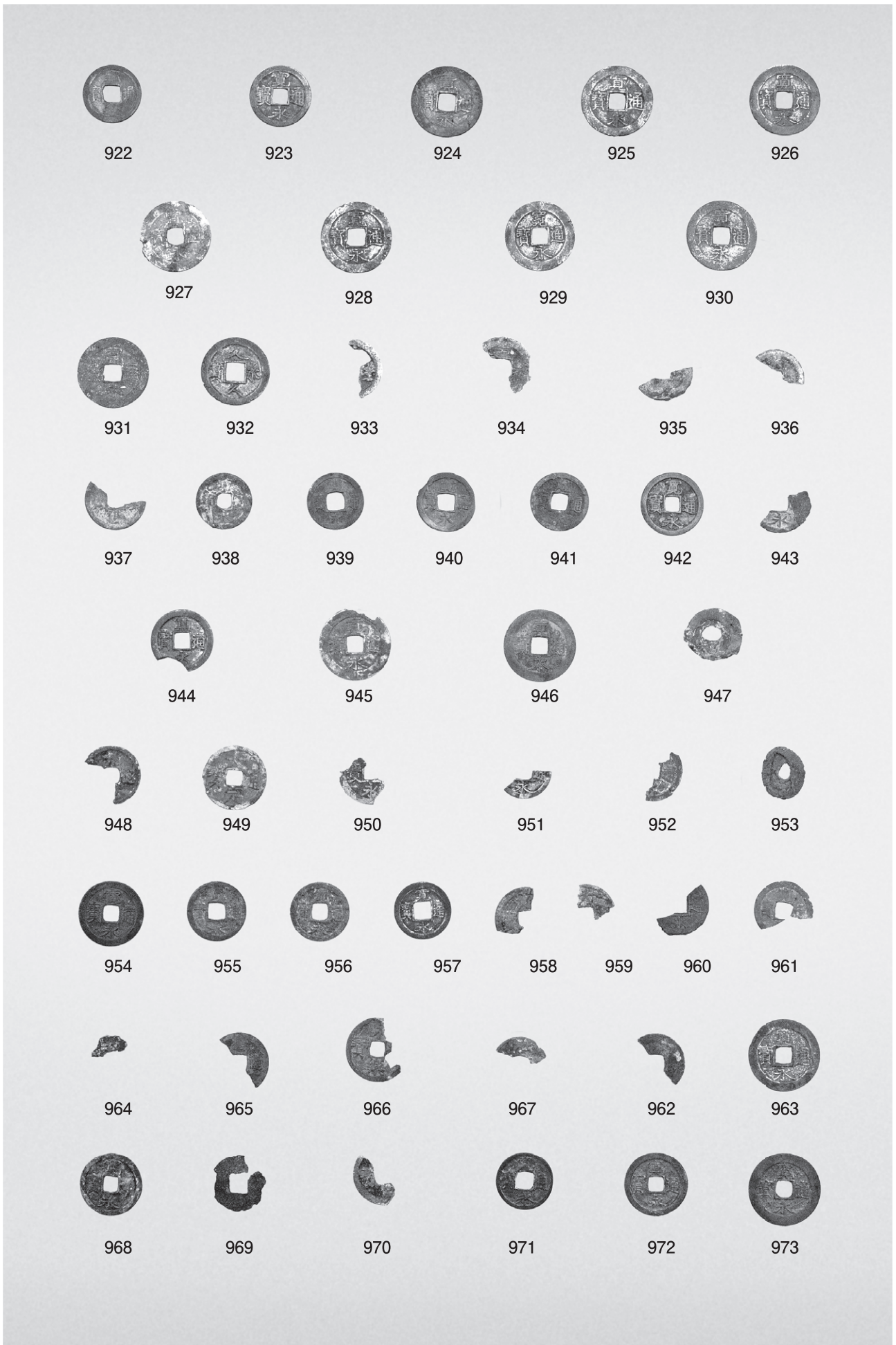
823

S=1/2

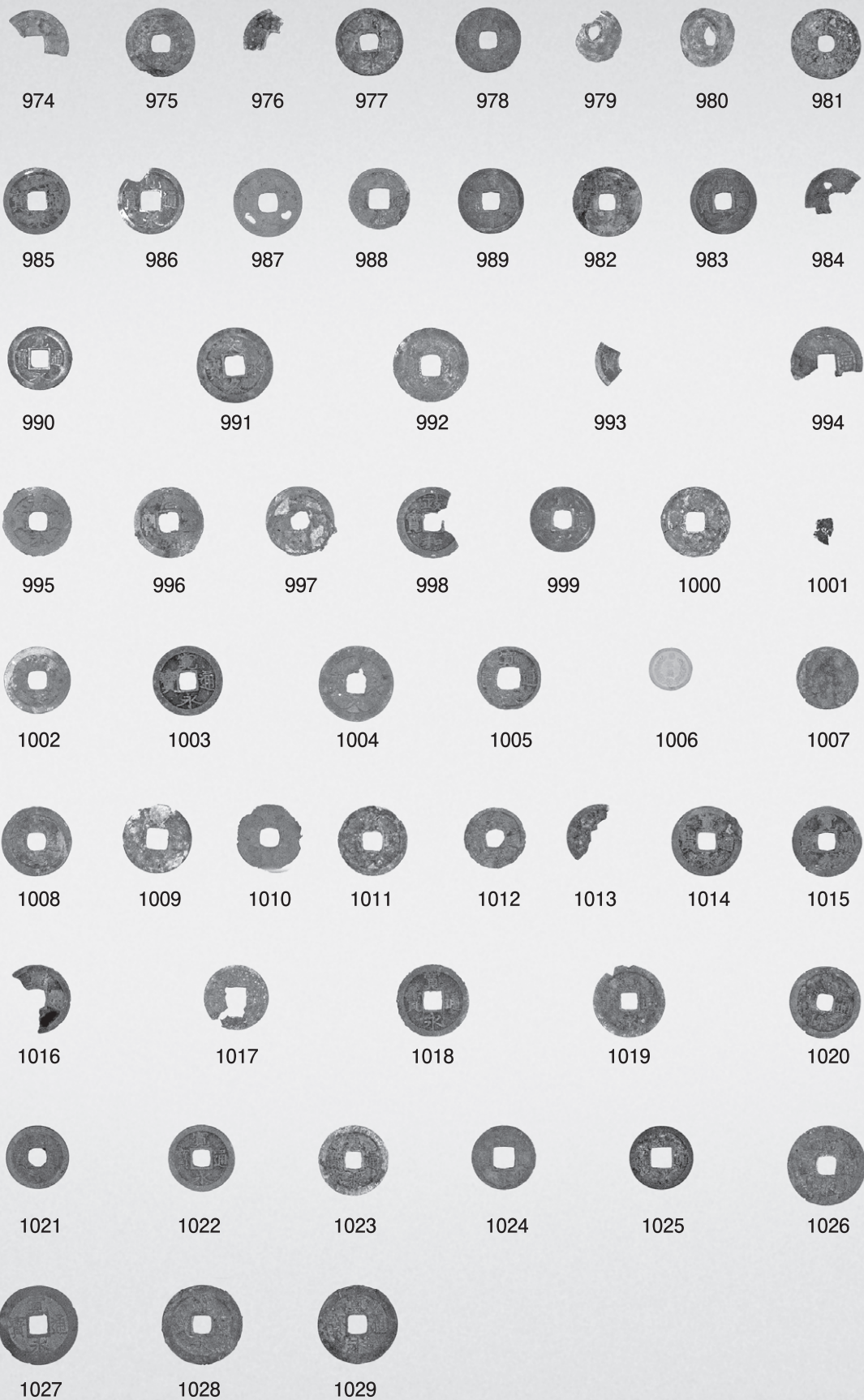


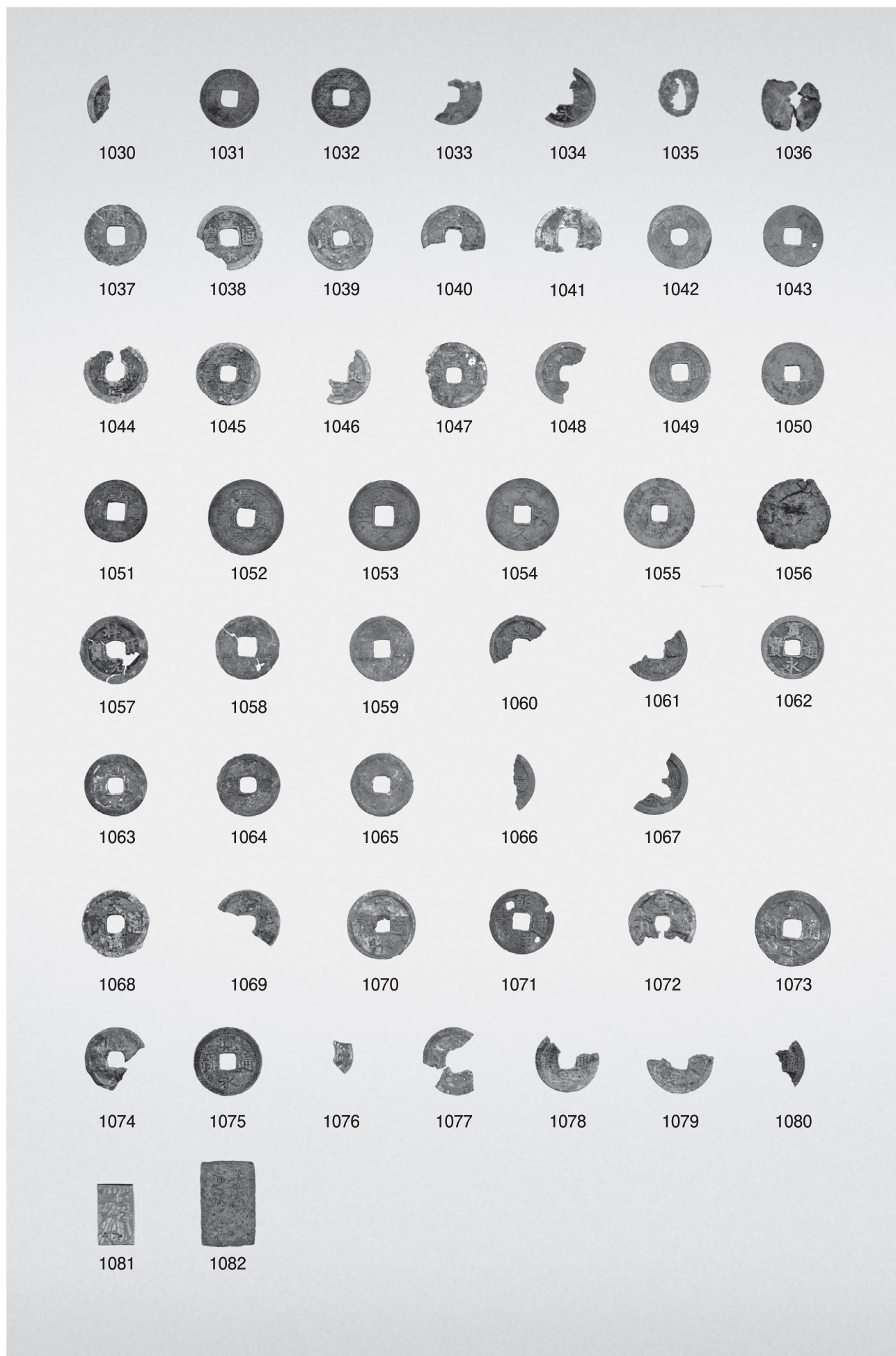


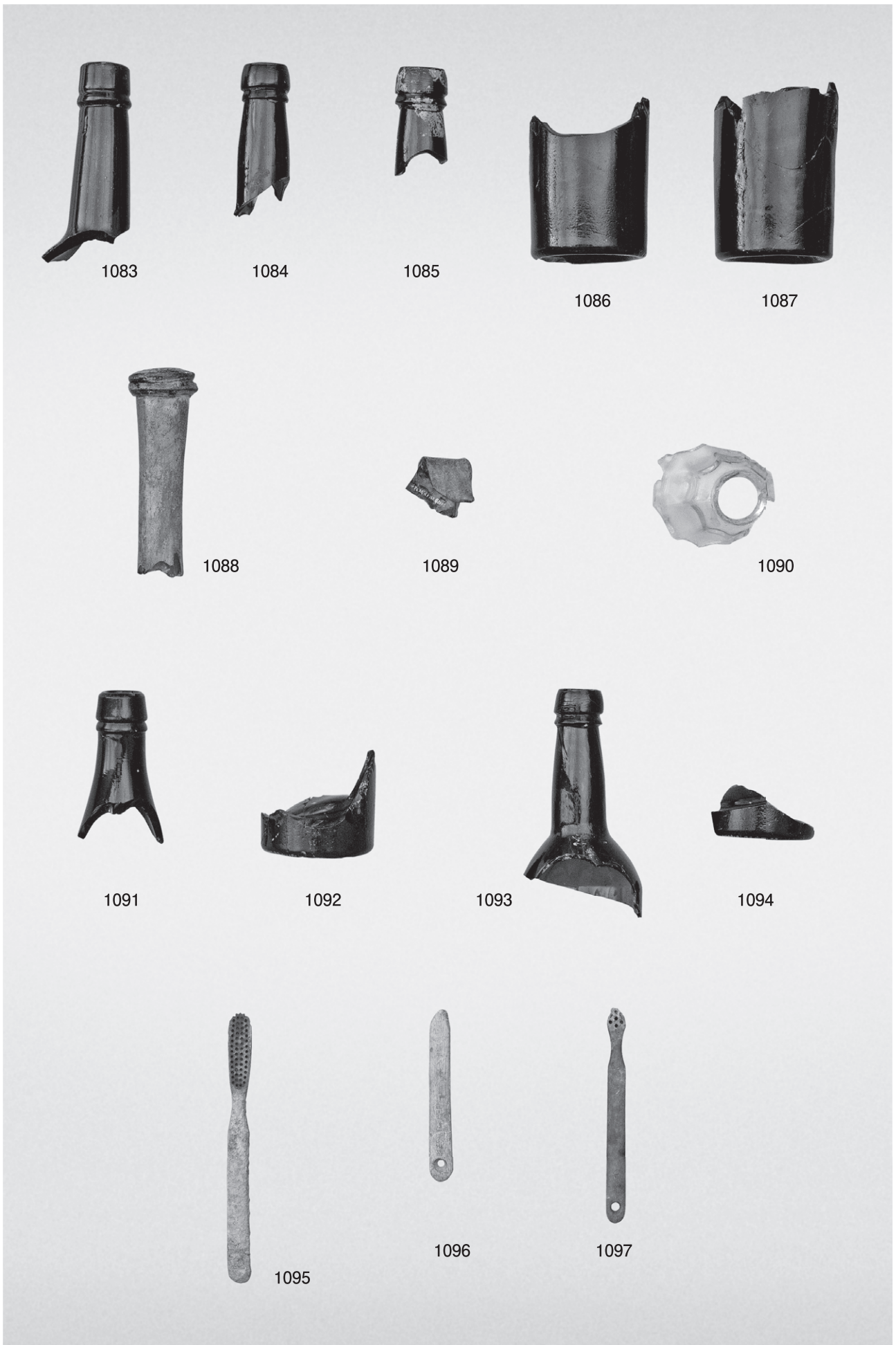
图版46 出土金銀錢貨(2)



S=1/2







報告書抄録

ふりがな	やむらじょう							
書名	谷村城							
副書名	甲府地方家庭裁判所都留支部庁舎建設に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第311集							
著者	網倉邦生 植月 学 西願麻以							
発行者	山梨県教育委員会 東京高等裁判所							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地・電話	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL055-266-3016							
発行年月日	2017年3月17日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やむらじょう 谷村城	山梨県都留市中央 二丁目1番1号	19204	98	35° 33' 06"	138° 54' 28"	(平成26年度) 平成26年8月4日 ～ 平成26年12月3日 (平成27年度) 平成27年4月24日 ～ 平成27年7月2日	3,517㎡	庁舎建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
谷村城	官庁	近代	石列遺構1基、敷石遺構2基、 道路状遺構1基、通路状遺構1 基、水路2基、礫集中2基、土 坑2基、溝状遺構2条、焼土集 中2基、瓦溜8基	陶磁器、ワインボトル、銃弾、骨 製歯刷子	
	城下町	近世	石列遺構1基、石組4基、礫集 中11基、土坑46基、溝状遺構 10基、瓦溜1基	陶磁器、土製品、瓦製品、石製品、錘、 飾金具、元文一分判金、文政南鐐 二朱銀、金泥付基石、羽口、埴塼、 鋳型、金属塊、銭貨	
	城下町	中世	土坑2基、溝状遺構2条	土師質土器・陶器・青花・白磁・青磁、 和鏡	
	集落跡	奈良・ 平安時代	土坑20基	土師器・須恵器	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第311集

谷 村 城

甲府地方家庭裁判所都留支部庁舎建設に伴う発掘調査報告書

印刷日 平成29年3月10日印刷

発行日 平成29年3月17日発行

編 集 山梨県埋蔵文化財センター

〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923

Tel 055-266-3016 Fax 055-266-3882

<http://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/>

発 行 山梨県教育委員会

東京高等裁判所

印 刷 青柳印刷株式会社